新潟県埋蔵文化財調査報告書　第221集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅥ

古 渡 路 遺 跡

本　文　編

２０１１

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅥ

古渡路（ふるとろ）遺跡

本　文　編

２０１１

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は新潟市を起点に、日本海側を北上し青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では平成 21 年に村上市の荒川胎内インターチェンジまでが開通しました。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがあります。平成 15 年末の国土開発幹線自動車道建設会議において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日間は日本道路公団が有料道路として建設することとなりました。その後、公団の民営化により、平成 17 年 10 月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成 18 年 2 月の国土開発幹線自動車道建設会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。

日本海沿岸東北自動車道は地域内外の経済的な交流・連携を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送等「命の高速道」としての役割を期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「古渡路遺跡」の調査報告書です。調査によって中世と縄文時代の遺構・遺物が見つかりました。中世では、13 世紀後半～ 15 世紀中葉の計画的に造営された集落を確認しました。集落は地形の起伏を活かして、高い所に居住域が設けられていました。居住域は道路や溝で規則的に区画されています。

縄文時代では中期以降の陥穴を検出しました。陥穴は狩猟のための施設で、通例は丘陵上に列をなして構築されますが、本遺跡のように低湿地で見つかった例は希少で、当時の狩猟の様子を考える上で貴重な事例となります。

今回の発掘調査の記録が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っています。

最後に、地元の方々や区長並びに村上市教育委員会には、多大なご協力とご援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、三面川沿岸土地改良区には調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成 23 年 3 月

新潟県教育委員会

教　育　長　武藤　克己

例　　言

1　本書は新潟県村上市古渡路字海老屋敷 337-2 ほかに所在する古渡路（ふるとろ）遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」とする）建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）が国土交通省から受託したものである。調査は県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）に委託して、平成 20･21 年度に実施した。発掘調査面積は延べ 33,554m^2 である。

3　整理及び報告書作成に係る作業は、県教委が埋文事業団に委託し、平成 20 ～ 22 年度に行なった。

4　出土遺物及び調査・整理・自然科学分析に係る各種資料は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

5　遺物の註記は平成 20 年度分を「08 フルト」、平成 21 年度分を「09 フルト」とし、出土位置や層位を続けて記した。
　古渡路Ⅰ・Ⅲは遺物登録台帳を作成し、登録（R）番号を遺跡名の直後に記した。現地の取り上げ番号は「No.」を付して記した。取り上げ番号は、遺構は遺構ごとに、遺構外はすべて通し番号とした。

6　本書で示す方位はすべて真北である。また本文で述べる軸方位は真北に対する東西方向の傾きである。

7　遺物番号は種別にかかわらず通し番号とし、本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

8　本文中の註は脚註とし、引用文献は著者及び発行年を文中に［　］で示し、第Ⅵ章自然科学分析を除いて巻末に一括して掲載した。

9　自然科学分析及び掘立柱建物の復元は、下記機関に委託し、了解を得て編集した。
　第Ⅵ章 1 植物珪酸体・2 花粉化石・3 プラント・オパール……株式会社パレオ・ラボ（鈴木　茂）
　第Ⅵ章 4 樹種同定・5 放射性炭素年代測定……中尾七重（木質部材研究所）
　第Ⅵ章 6 曲物底板の年輪年代測定……光谷拓実（総合地球環境学研究所／奈良文化財研究所）
　第Ⅵ章 7 古渡路遺跡出土漆器の科学分析……四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）
　第Ⅶ章 2A 古渡路遺跡の掘立柱建物……中尾七重（木質部材研究所）

10　各種図版作成・編集は株式会社セビアスに委託してデジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真はデジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。
　本文・挿表・挿図：Word・Excel 形式のデータ・版下
　遺構図面図版：原図（測量データ）・レイアウト図・文字データ
　遺物図面図版：トレース原図（個別）・拓影・レイアウト図
　遺物写真図版：デジタルデータ・レイアウト図

11　本書の執筆は、土橋由理子（埋文事業団調査課班長）、尾崎高宏（同班長）、園村維敏（国際文化財株式会社主任研究員）、東園千輝男（同主任研究員）、山﨑良二（同主任研究員）、蝦名　純（同研究員）、青木利文（同研究員）、長内礼二（同研究員）、稲垣森太（同研究員）、丹下昌之（同北陸支店長）、真田　敦（同調査補助員）、野水晃子（株式会社吉田建設主任調査員）、矢部英生（同調査員）がこれに当たり、編集は土橋・園村・野水が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
　第Ⅰ章　土橋。第Ⅱ章　真田・野水。第Ⅲ章 1・2　土橋、3A　尾崎・蝦名、3B　山崎、3C　土橋、3D　稲垣、3F　稲垣・土橋、3E　蝦名。第Ⅳ章 1　土橋、2A1）山﨑、2A2）稲垣、2B1）a ～ c・e・f　山﨑、d　蝦名、g　山﨑・真田、2B2）蝦名、3A・3B1）2）b・c・3C　土橋、3B2）a　稲垣・土橋。第Ⅴ章 1・2A　土橋、2B1）尾崎・野水・矢部・園村・蝦名、2B2）園村・蝦名・山﨑・尾崎・野水・矢部、2B3）山﨑・青木・蝦名・園村、2B4）青木・蝦名・山﨑・園村、2B5）青木・長内・真田・園村・東園、2B6）東園・青木、2B7）東園・稲垣・蝦名、2B8）蝦名、2B9）蝦名・東園、2B10）園村・稲垣、2B11）園村・土橋、3A・3C・3D1）2）c・3E　土橋、3B　青木・土橋、3D2）a・b　青木、3F　青木・丹下・野水。第Ⅶ章 1A　土橋・稲垣、1B　土橋、2B　土橋。

12　本遺跡については『埋文にいがた』68・70・71 号［土橋 2009、2010a・b］、『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成 20 ・21 年度』［尾崎・土橋 2009、土橋 2010c］等に記載されているが、本書の記載をもって正式な報告とする。

13　遺跡の地質・石器石材については、高濱信行氏（新潟大学災害復興科学センター）にご教示いただいた。

14　縄文土器については、寺﨑裕助氏（新潟県立歴史博物館）、佐藤雅一氏（津南町教育委員会）、田中耕作氏・渡邊美穂子氏（新発田市教育委員会）、中世陶磁器･硯･砥石については、水澤幸一氏（胎内市教育委員会）から観察方法･年代観のご指導を得、報告書に反映させた。ただし、当方の聞き違え等による間違いも考えられ、文責は土橋にある。

15　中世の人物像等が描かれた円礫については、前島敏氏・浅井勝利氏（新潟県立歴史博物館）をはじめ、矢田俊文氏（新潟大学人文学部）、高橋一樹氏（国立歴史民俗博物館）、田中聡氏（長岡工業高等専門学校）、福原圭一氏（上越市公文書館準備室）、片桐昭彦氏（練馬区教育委員会）から解釈について助言を頂いた。

16　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示とご協力をいただいた。ここに記し、厚く御礼を申し上げる（敬称略、五十音順）。
　金子拓男　坂井秀弥　関　雅之　立木宏明　中島栄一　鳴海忠夫　横山勝栄
　仙台市教育委員会　三面川沿岸土地改良区　村上市教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査にいたる経緯……1

2　調査・整理作業の経過……2

A　試掘調査……2

B　本　調　査……2

C　整理作業……9

3　調査・整理体制……9

第Ⅱ章　周辺の環境

1　地理的環境……10

2　歴史的環境……10

A　縄文時代の遺跡……10

B　中世の歴史的環境……11

C　中世の遺跡……14

第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の概要……15

2　グリッドの設定……15

3　基本層序……19

A　A区・B区の層序……21

B　C区の層序……22

C　D区の層序……23

D　E区の層序……23

E　F区の層序……24

F　G区の層序……24

第Ⅳ章　縄文時代の調査

1　概　　要……26

2　遺　　構……27

A　縄文下層……27

B　縄文上層……30

3　遺　　物……35

A　概　　要……35

B　縄文土器……35

C　石　　器……38

第Ⅴ章　中世以降の調査

1　概　　要……41

2　遺　　構…… 41
A　掘立柱建物の分類…… 41
B　各　　説…… 42

3　中世以降の遺物…… 150
A　概　　要…… 150
B　土　　器…… 150
C　土 製 品…… 160
D　金属製品…… 160
E　石　　器…… 161
F　木 製 品…… 166

第Ⅵ章　自然科学分析

1　植物珪酸体…… 170
A　はじめに…… 170
B　試料と分析方法…… 170
C　分析結果…… 170
D　古渡路遺跡周辺のイネ科植物…… 171

2　花粉化石…… 172
A　はじめに…… 172
B　試料と分析方法…… 172
C　分析結果…… 173
D　考　　察…… 174

3　プラント・オパール…… 175
A　はじめに…… 175
B　試料と分析方法…… 175
C　分析結果…… 176
D　稲作について…… 176

4　樹種同定…… 177
A　はじめに…… 177
B　調査方法…… 177
C　同定の根拠…… 178
D　調査結果の概要…… 179

5　放射性炭素年代測定…… 182
A　はじめに…… 182
B　調査方法…… 182
C　年代解析結果…… 183

6　曲物底板の年輪年代測定…… 185
A　試料と方法…… 185
B　結　　果…… 185

7　古渡路遺跡出土漆器の科学分析…… 186
A　はじめに…… 186
B　分析の方法…… 186
C　分析結果…… 187
D　終わりに…… 192

第Ⅶ章　ま　と　め

1　縄文時代 …… 197
　A　下　　層 …… 197
　B　上　　層 …… 197

2　中　　世 …… 198
　A　古渡路遺跡の掘立柱建物 …… 198
　B　中世集落の変遷 …… 211

≪要　　約≫ …… 225

≪引用・参考文献≫ …… 226

≪観　察　表≫ …… 230

遺構観察表 …… 230
　縄文時代　下層 …… 230　　縄文時代　上層 …… 230
　中　　世 …… 233
縄文土器観察表 …… 271
縄文時代　石器観察表 …… 273
中世　金属製品・銭貨観察表 …… 273
中世土器観察表 …… 274
中世　鉄滓観察表 …… 279
中世　土製品・石器観察表 …… 280
中世　木製品観察表 …… 281

挿図目次

第 1 図　試掘調査結果 …… 3
第 2 図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 12
第 3 図　本発掘調査の位置 …… 16
第 4 図　現地形と中世遺構配置の関係図 …… 17
第 5 図　グリッド設定図 …… 18
第 6 図　基本層序 …… 20
第 7 図　遺構の平面・断面形態の分類 …… 26
第 8 図　縄文土器分布図 …… 36
第 9 図　中世居住域の区割り図 …… 41
第 10 図　掘立柱建物の分類 …… 42
第 11 図　胴張型掘立柱建物 …… 42
第 12 図　掘立柱建物部位名称 …… 42
第 13 図　H 区水田変遷図 …… 146
第 14 図　H 区遺物平面分布図 …… 146
第 15 図　畦畔・擬似畦畔模式図 …… 147
第 16 図　珠洲焼分布図 …… 152
第 17 図　鉄滓分布図 …… 164
第 18 図　中世砥石分布図 …… 164
第 19 図　機動細胞珪酸体分布図 …… 171
第 20 図　古渡路遺跡の機動細胞珪酸体 …… 172
第 21 図　古渡路遺跡の花粉化石 …… 174
第 22 図　古渡路遺跡のプラント・オパール分布図 …… 175
第 23 図　古渡路遺跡のプラント・オパール …… 177
第 24 図　古渡路遺跡の木材（1） …… 180
第 25 図　古渡路遺跡の木材（2） …… 181
第 26 図　古渡路遺跡の木材（3） …… 182
第 27 図　放射性炭素年代測定の暦年較正結果 …… 184
第 28 図　漆器塗膜断面の顕微鏡写真（1） …… 189
第 29 図　漆器塗膜断面の顕微鏡写真（2） …… 190
第 30 図　赤外線吸収スペクトル（1） …… 191
第 31 図　赤外線吸収スペクトル（2） …… 191
第 32 図　蛍光 X 線スペクトル（No.426） …… 193
第 33 図　蛍光 X 線スペクトル（No.412） …… 193
第 34 図　蛍光 X 線スペクトル（No.346） …… 193
第 35 図　蛍光 X 線スペクトル（No.344） …… 193
第 36 図　分析漆器実測図 …… 194
第 37 図　富山県辻遺跡出土の中世漆器 …… 195
第 38 図　新潟県水久保遺跡出土の中世漆器 …… 195
第 39 図　古民家の上屋柱と下屋柱 …… 199
第 40 図　SB7815 推定復元図 …… 200
第 41 図　二棟が平行に接合した屋根 …… 203
第 42 図　SB5316 入口の復元 …… 204
第 43 図　SB7826 推定復元図 …… 207

第 44 図　屋根の形と切妻茅葺の例……207
第 45 図　ころばし根太の例……208
第 46 図　床の構造……208
第 47 図　四面廂付梁間一間型推定復元モデル図‥210
第 48 図　掘立柱建物方位図……212
第 49 図　瀬波郡絵図（白描）……222
第 50 図　遺構変遷図（1）……223
第 51 図　遺構変遷図（2）……224

表　目　次

第 1 表　周辺の主要遺跡一覧表……13
第 2 表　縄文時代下層　遺構数集計表……26
第 3 表　縄文時代上層　遺構数集計表……26
第 4 表　縄文時代石器石材―器種組成……39
第 5 表　縄文時代石器　地区別組成表……40
第 6 表　中世　遺構数集計表……43
第 7 表　中世ピット数集計表……43
第 8 表　中世土器組成表（1）……153
第 9 表　中世土器組成表（2）……154
第 10 表　中世土器組成表（3）……155
第 11 表　鉄滓関係遺物点数表……161
第 12 表　中世石器組成……162
第 13 表　各井戸の木製品組成……167
第 14 表　試料 1g 当たりの機動細胞珪酸体個数‥171
第 15 表　産出花粉化石一覧表……173
第 16 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数……175
第 17 表　樹種調査試料一覧……180
第 18 表　古渡路遺跡出土木製品の炭素 14 年代測定結果……183
第 19 表　底板 2 点の年輪年代……185

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」）」は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」）を起点に北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。また、新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」）～秋田県河辺 JCT 間は、東日本高速道路株式会社の営業路線名では「日本海東北自動車道」とも呼称される。新潟県側は新潟空港 IC ～神林岩船港 IC 間が平成 22 年に完成している。

中条 IC 以北は平成元年及び平成 3 年に基本計画が決定され、本遺跡が存在する荒川 IC ～朝日 IC 間（第 13 次区間）は、平成 10 年 12 月に施工命令が出された。これを契機に、日本道路公団（以下、「道路公団」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条 IC ～朝日 IC 間の埋蔵文化財の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成 11 年度に実施した。調査によって、道路法線内には周知の遺跡 8 か所と遺跡推定地 27 か所が存在することが判明し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。その後、試掘確認調査を平成 9 ～ 19 年度にかけて実施したところ、本発掘調査必要面積は計約 600,000m^2 と膨大なものとなった。本書に係る古渡路遺跡の試掘調査は平成 19 年度に「推定地 11」として実施した。

平成 14 年 12 月 18 日の道路公団、県教委及び埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査を限定することを決定した（以下、「限定協議」）。また、平成 15 年 10 月 1 日の道路公団・県教委及び埋文事業団との協議で、道路公団が示した平成 16 年度の調査要望は膨大で、工事工程から 17 年度以降もこの調査量が維持されると想定された。県教委と埋文事業団はこの要望に対応できるだけの調査体制を持っていないことから、平成 16 年度以降の日沿道事業に限って、埋文事業団職員の直轄指導･監督の下、民間調査機関に発掘調査を全部あるいは部分委託し、これに対応する方針を定めた。

その後、日沿道の建設は、道路公団の分割民営化に伴い、平成 17 年 10 月 1 日に設立された東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」）に引き継がれた。また平成 8 年 2 月 7 日の国土開発幹線自動車会議により、荒川 IC 以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川 IC 以北は国土交通省（以下、「国交省」）が「新直轄方式」で整備することになり、平成 14 年 12 月の限定協議内容も、国交省に引き継がれることが確認された。

平成 20 年度の本発掘調査か所は、平成 19 年 10 月の国交省・県教委・埋文事業団との協議で最終的な決定をみた。村上 IC ～朝日 IC 間の調査対象は長割遺跡、古渡路遺跡、桂木田遺跡、堂の前遺跡、下新保高田遺跡の合計 5 か所で、面積は 32,963m^2（一期線分）である。

平成 21 年度は古渡路遺跡が唯一の発掘調査か所となり、この調査をもって朝日 IC までの遺跡調査は終了することとなった。

2　調査・整理作業の経過

A　試 掘 調 査（第 1 図）

試掘調査は、平成 19 年 9 月 3 日～ 10 月 3 日の実質 18 日間に、岩船郡朝日村大字古渡路字海老屋敷、大字大場沢字アケほか（平成 20 年に村上市に合併）の 49,580m^2 を対象に行った。これは高速道路法線中心杭（以下、「STA」）No.221 ～ 261 に相当する。実質調査面積は 1,431m^2（トレンチ（試掘坑・溝）55 か所　試掘率 2.9%）である。

調査の結果、No.13 ～ 51 トレンチの 590m の間において、ほぼ連続的に遺構を検出した。遺構には、ピット・土坑・井戸・溝がある。遺構分布と重複して中世後期の陶磁器が出土したことから、中世の集落跡が存在すると推定した。No.28 トレンチでは 1 辺約 150 ～ 200cm、深さ約 20cm の長方形の土坑を約 10 基検出した。地山ブロックを基調とする土によって短期間のうちに埋め戻された可能性が高い。このうちの 1 基では北東隅の底面から六道銭が出土したことから、これらは墓穴であると推定した。

試掘対象地のうち STA223 ～ 253 の間で中世の遺構・遺物が検出されたため、「古渡路遺跡」として県の遺跡台帳に登録し、周知化した。そして、日本海沿岸東北自動車道建設工事に伴い、第 1 図に示した 35,900m^2（二期線分含む）について本発掘調査が必要と判断した。これ以外の範囲においては遺構・遺物は検出されなかったことから、本発掘調査の必要はないと判断した。ただし、工事中に遺構・遺物と思われるものを発見した場合は、その現状を変更することなく、速やかに県教委に連絡して別途協議するものとした。

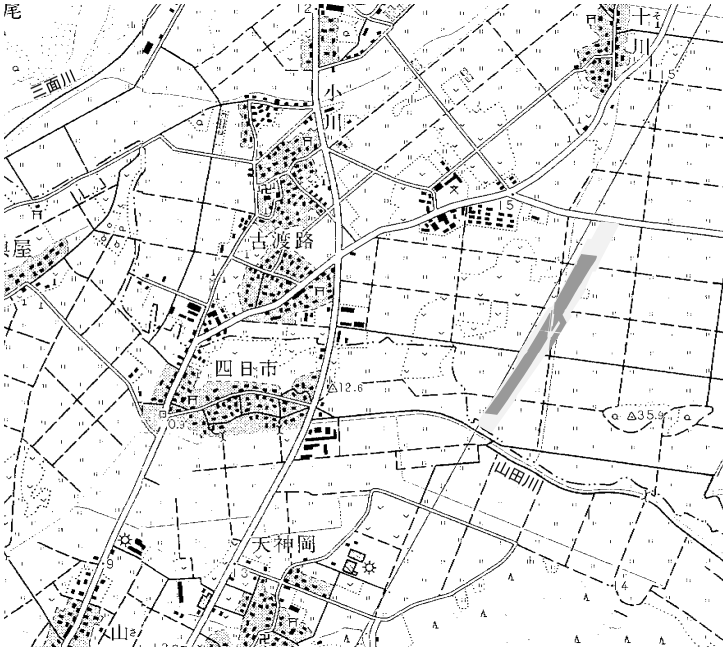
B　本　調　査

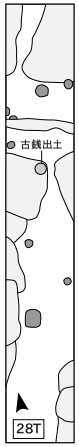
1）20　年　度

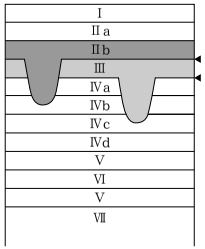
調査対象地　日本海沿岸東北自動車道一期線（暫定二車線分）法線のうち、古渡路遺跡に係る範囲は STA223 ～ 253 の 22,830m^2 である。この区間は 3 本の市道（市道 1223・1225・1226 号線）及び 1 本の農道とこれらに沿って流れる用排水路、3 本の排水路によって約 80 m間隔に 8 か所に分断されていた。このほか調査区中央を斜めに横切るかたちで、市道 1232 号線とこれに並行する用水と幅 3 mの基幹排水路が走り、調査区を大きく東西に分断していた。このような状況を踏まえて、国交省から県教委に対して出された 20 年度当初の調査依頼は「STA228 ～ 253 の道路・水路部分を除く 17,863m^2 について調査する（面積には STA246 ～ 252 西側の用地境付近の未買収地を含む）」というものであった。ところが、4 月 24 日の協議で、調査範囲を市道 1225 号線から北側の 14,500m^2 に縮小し、代わりに道路・水路下部分の調査も実施するよう、国交省から県教委に対して要望が出された。これを受けて、当初の調査計画を変更し、現況が道路・水路等ですぐに調査ができない部分は後回しにし、まずは現況が水田・畑の部分の調査に着手することにした。そして、調査が終了した場所に水路・道路を切り回し、その跡地を順次調査していくことにした。

6 月下旬には道路特定財源の使途を巡る問題の影響で調査を休止していた別の調査班が、9 月から古渡路遺跡の調査に合流することに決まった。そのため、21 年度の調査対象地南端の STA223 ＋ 50 ～ 228（約 3,000m^2）の範囲を 20 年度調査対象地に追加し、新たな調査班が着手した（第 5 図）。

結局、20 年度の調査対象範囲は市道 1225 号線から北側の未買収地を除く部分と、南端の STA223 ＋







基本層序模式図

凡例
- Ⅱb層を基調とする覆土
- Ⅲ層を基調とする覆土
- 地山ブロックを基調とする覆土（28トレンチ）

（1：200）
0　2m

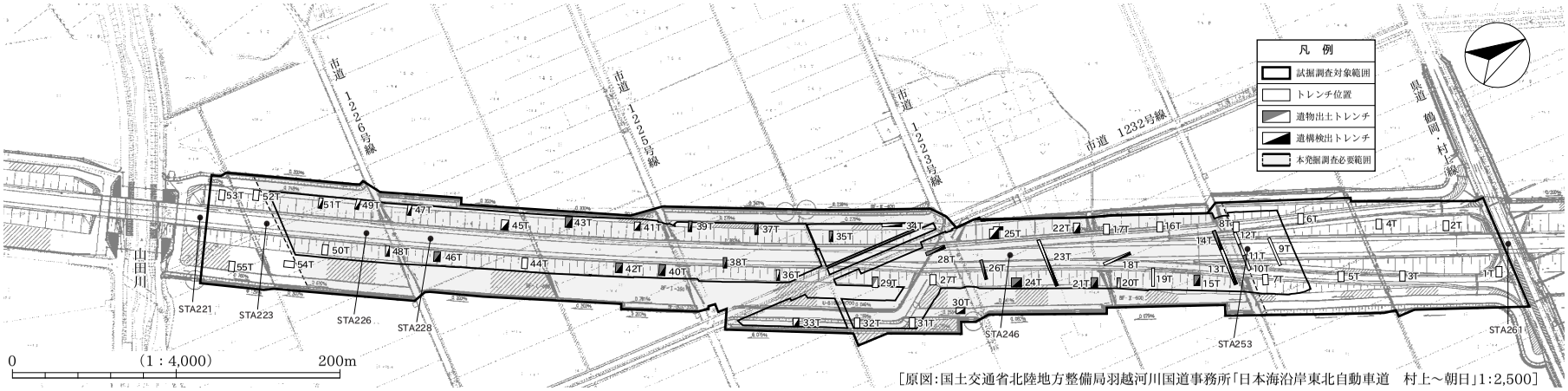
［原図:国土地理院1:25,000地形図「村上」2000、「越後門前」2002年］

試掘調査基本層序

Ⅰ　層：表土。
Ⅰ'　層：旧表土。
Ⅱa 層：褐灰色砂質シルト。
Ⅱb 層：灰褐色砂質シルト～シルト。中世の遺物包含層。Ⅱa層と似た土質だが、より明るい色で、炭化物を多く含む。
Ⅲ　層：灰白色細砂。21～23トレンチのみで検出された均質な細砂層。洪水により短期間に堆積したと考えられ、Ⅱb層を基調とする遺構の確認面となる。また、Ⅲ層を覆土とする遺構も、Ⅳ層面において検出されている。従って、部分的に遺構確認面が2枚存在することとなる。
Ⅳ　層：褐色シルト。遺物の出土は認められなかった。なお、Ⅳ層の落ち込みが確認されたが、平面形・断面形ともに歪な形状であり、人為的な掘り込みと積極的に評価できるものはなかった。Ⅳ層は、色調によってⅣ、a層：褐灰色シルト　Ⅳb層：暗褐色シルト　Ⅳc層：褐色シルト　Ⅳd層：褐灰色シルトの4層に細分される。
Ⅴ　層：黄灰色砂質シルト～黄灰色シルト。Ⅲ層が存在しない範囲においては、遺構の確認面となる。
Ⅵ　層：灰色細砂。Ⅴ層中に介在する場合がある。
Ⅶ　層：砂礫。

試掘調査出土遺物一覧

トレンチ	層位	出土遺物
10T	Ⅰ層	珠洲焼1点
11T	Ⅱb層	珠洲焼4点
14T	Ⅱb層	瀬戸・美濃焼1点、珠洲焼2点
15T	Ⅰ層	珠洲焼2点
20T	Ⅱb層	珠洲焼1点、砥石1点
21T	溝覆土	瓦質土器1点
24T	溝覆土	青磁1点、珠洲焼1点
26T	Ⅱb層	珠洲焼1点、鉄滓1点
28T	土坑覆土	銭貨5点（元祐通寶・熙寧元寶ほか）、板材1点
28T	Ⅰ層	土師器1点
29T	Ⅰ層	珠洲焼1点
35T	溝覆土	土師器1点
37T	Ⅱb層	鉄滓1点
38T	Ⅱb層	土師器1点
39T	溝覆土	鉄滓1点、羽口1点、砥石1点
39T	Ⅱb層	土師器1点、鉄滓12点、羽口2点
40T	Ⅱb層	羽口1点
42T	Ⅰ層	青磁１点
43T	Ⅰ'層	土師器2点
46T	Ⅰ層	中世陶器1点
	表面採集	珠洲焼1点、土師器1点
合計　53点		青磁2点、白磁1点、瀬戸・美濃焼1点、珠洲焼14点、瓦質土器1点、中世陶器1点、土師器7点、銭貨5点、板材1点、鉄滓14点、羽口4点、砥石2点



［原図:国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所「日本海沿岸東北自動車道　村上～朝日」1:2,500］

第１図　試掘調査結果

50 ～ 228 の 2 地点に大別され、その後の記録・書類の作成では、前者を「古渡路遺跡Ⅰ」、後者を「古渡路遺跡Ⅱ」として便宜的に区別した。ただし、遺跡としてはあくまで 1 遺跡という認識なので、国交省から県教委への依頼文、埋文事業団から県教委への着手届及び終了届、関係協議は「古渡路遺跡」で統一した。

最後に留意点として、今回調査対象としたのは道路法線のうち 1 期線分であるため、2 期線分については、将来的に発掘調査が必要になることが想定される。したがって、調査に当たっては 2 期線用地に接する部分について 1 期線用地の 1 m外側まで調査を実施し、2 期線用地を調査する際に高速道路と調査区が接しないようにした。この件に関しては国交省と協議・合意済みである。このほか、10 月 9 日の県教委との協議で決定したことに、道路法尻位置に平成 18 年度に施工された機能補償水路並びに、1 期線法尻に敷設される排水路部分の調査は不要、という点がある。その理由は、機能補償水路については新たに掘削が及ぶことはないこと、排水路については法尻から 1 m以内に収まれば既に調査が終了しており、そうでなくとも 2 期線に関わる調査の時に調査する予定であること、である。

調査区の呼称　調査区が南北 650 m以上の広い範囲に亘るため、市道や水路で分断された単位を基に南から順に A ～ H 区と呼称した（第 3 図）。D・E 区東側には市道 1232 号線と水路切り回し予定地が付随する。

市道・農道・水路下の調査　市道・農道・水路は、周辺の遺構分布等を考慮しながら調査の要否や切り回し場所を決定した。特に切り回し場所や施工時期については近隣の農作業に支障が出ないようにするため、協議は国交省、三面川沿岸土地改良区、県教委、埋文事業団が連絡・調整をとりながら行った。

以下、各物件に対する県教委の指導（「　」内）及び実際の工事内容を列記する。

G・H 区間農道及び水路：農道は高速道路完成後に締め切る予定であったので切り回さず、水路のみ切り回すこととした。「未調査部分を切り回し水路が横断する際に掘削を伴う。掘削深度は包含層・遺構検出面に達しないが、遺構・遺物が検出された場合には施工業者は速やかに文化財側に連絡すること。」10 月 16・17 日に埋文事業団職員立ち会いの下に施工したが、遺構・遺物は出土しなかった。

F・G 区間水路切り回し：「未調査部分を切り回し水路が横断する際に掘削を伴う。掘削深度が包含層・遺構確認面に達するため文化財側が立ち会うこと。」10 月 8 ～ 16 日にかけて事業団職員立ち会いの下に施工したが、遺構・遺物は出土しなかった。

E・F 区間市道 1223 号線及び水路：市道は迂回路で対応し、水路は F 区に切り回す。水路のU字溝は文化財側が市道の調査をするときに取り外し、廃材（U字溝）は国交省が処理する。

D・E 区間水路：水路脇の土手を撤去して調査する。U 字溝の撤去は国交省が行う。ただし、「E 区の市道切り回し予定地内の土手は撤去･調査の必要なし。理由は隣接地の遺構･遺物密度が極めて低いため。」

D・E 区間市道 1232 号線及び水路：市道は切り回さず、迂回路で対応する。「排水路は既に遺構面よりも下まで掘削が及んでいるので調査不要。水路に付随する土手範囲の調査は遺構・遺物が希薄な場所に隣接する部分では不要かもしれないので、図面・写真で県教委が判断する。

C・D 区間市道 1225 号線及び水路：21 年 4 月までに国交省が調査終了部分（D 区）に切り回しておく。

A・B 区間市道 1226 号線及び水路：市道は切り回さず、既に設置されている迂回路で対応する。水路は締め切り、もし水が流れてくるようであれば、現場内のトレンチに排水する。

調査経過（中世）　4 月 15 日から表土掘削に着手したが、4 月 21 日、道路特定財源の使途を巡る問題の影響を受けて、現場作業を一時停止するように県教委から指示があった。このため、解除指示が出る 5

月２日までの間、表土掘削を休止した。解除後は表土掘削を再開し、調査対象地の北から順に進めていった。５月中旬からＧ区の遺構調査に着手し、８月６日にはＧ～Ｆ区半分までの調査をほぼ終了し、１回目の空中写真撮影（以下、「空撮」。）を実施した。この段階で居住域・低地（湿地）・道路という大まかな集落の構成が見えてきた。Ｈ区には比較的早い段階から調査に着手していたが、なかなか調査が進展しなかった。理由は地形的に低く、水はけが悪いことに加えて、春の田植え作業で満水になった水路の水が流れ込んだため、排水ができなかったことによる。それでも６月 11 日ごろには水田が検出され始めた。水田は調査対象範囲の北限を超えて広がる可能性があり、調査対象範囲内では規模や構造を把握するには不十分であった。６月 16 日には県教委から「水田遺構のような同種・同様の遺構が連続するような場合はすべて調査しなくともよい、という取り扱い基準に基づき、既に検出した畦畔を延長するようなトレンチを設定・調査し、規模・構造をとらえるように」との指導を受けた。これによりトレンチを北へ約 10m 拡張して畦畔の検出に努めたが、明瞭な輪郭を捉えることができなかった。７月 16 日には県教委から「取り扱い基準の“連続する”というのはどこまでも見渡す限り、というイメージなので今の拡張範囲では不十分。さらに面的に 20m 拡張して連続性を検証し、遺構の検出が困難になるようであれば、「検出困難」を理由にそれ以上の調査は断念すればよい。今回は調査工程の兼ね合いからも上記範囲で区切り、国交省に用排水路の切り回し工事を進めてもらうのが良いのではないか」との指導を受けた。そこで、さらに拡張して調査を続けた。９月９日には県教委から、「水田は平面的に検出できなくなっているので、これ以上北へ拡張する必要はない。記録はセクション・エレベーション・等高線・平面図を作成し、セクションベルト下の調査は畦畔部分だけでよい。」との指導を受けた。その後も調査を進めたが、降雨のたびに水没してしまうため、調査は足踏み状態を続けた。最終的に畦畔を検出して調査を終了したのは 11 月に入ってからだった。

８月はＦ区南側とＥ区及びＤ・Ｅ区市道そして水路切り回し予定地を主に調査した。９月はさらにＤ区の調査に着手した。ここでもＧ区の調査結果と同様に居住域・道路・低地（川）という配置が見えてきた。この段階で居住域が約 100 ｍおきに築かれている様子が見えてきた。10 月１日にＤ・Ｅ区市道と水路切り回し予定地のうちＥ区とＦ区南半分について、同 21 日にＥ区とＤ・Ｅ区の市道と水路切り回し予定地のうちＤ区について空撮を実施した。11 月 12 日にはＤ区と市道 1223 号線の空撮を実施し、中世面の空撮を終了した。その後は中世の遺構の記録作業を 12 月 17 日まで続けた。

Ａ・Ｂ区の調査は９月に入り新たな班が着手したが、遺構検出面の色調がＤ区以北とは異なり黒色に近い色調を呈し、遺構覆土との区別が難しかったため遺構検出に手間取った。さらに連日の悪天候も遺構検出を阻む一因となった。このため、遺構を確定し、空撮を実施できたのは 12 月４日であった。

調査経過（縄文）　当初、試掘調査結果から中世の遺跡ということで調査を開始した。ところが、Ｆ区の調査を進めていた６月、Ⅳ層下部から磨製石斧１点が出土した。７月にはＤ・Ｅ区の市道と水路切り回し予定地の攪乱土中から、10 月にはＦ区でも縄文土器が出土した。Ｆ区のものは中期末葉の縄文土器で性格不明遺構から出土した。この間、少数ながら石鏃も出土していたので、縄文時代の遺跡が存在することも徐々に分かり始めていたが、明確な遺構は未検出であった。10 月 30 日にはＥ区西側の 39C グリッドで、縄文時代前期の土器片１点がⅤ層よりも下の層から出土した。そこで、遺構が存在する可能性も考慮しながら周辺のトレンチ調査を実施した。すると、中世の遺構検出面の下約 70cm からほぼ１個体の土器が潰れた状態で出土した。土層を観察しても遺構は認識できなかったので、縄文時代の遺物包含層が存在する可能性が出てきた。そこで遺物が出土したＤ～Ｆ区を対象として、縄文時代を対象とした試掘

調査を開始した（第６図）。Ｆ区の 47 ～ 52 列では、すでに中世と同じ面で遺物を検出していたことから、始めに深さ 20cm、幅 20cm のトレンチを 2m おきに 28 本設定して人力で掘削したが、遺構・遺物は検出されなかった。

Ｅ区は市道 1232 号線にもトレンチを９か所設定して調査した。道幅が狭く掘削重機が進入できないため、人力でⅧ層まで掘削した。トレンチ出土遺物はなかったが、SD2050 壁面から縄文土器片１点が出土した。

合わせて重機による深掘りトレンチを 15 か所設定し、基盤礫層までの掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、遺物が出土したのは 43C グリッドに設定した５トレンチだった。５トレンチではⅥ層に覆われるかたちで、Ⅶａ層から落ち込む浅い自然流路をトレンチ壁面で検出した。土器はその流路覆土から出土した。５トレンチ以外では遺物出土層相当の堆積土は確認できるものの、遺構・遺物の検出には至らなかった。トレンチ調査の結果を総合すると、縄文時代の遺物は２時期に大別され、一つはⅤ層よりも上で検出できる中期以降の時期、もう一つはⅤ層を間層としてⅥ・Ⅶａ層で確認できる前期末葉の時期である。前期末葉の遺物は旧地形の若干小高い所に集中しており、それ以外の場所は包含層相当層を追うことができても非常に粘性が高かったり、軟弱だったりして、人が住めるような状況ではなかったと判断した。そこで微高地である 38・39B・C グリッド周辺で、前期を対象とした調査を継続することにした。遺物集中地点周辺で遺構検出を試みたところ、小ピットを数基検出し、12 月 16 日まで記録作業を行った。

Ａ区においても調査開始早々に中世の遺構に交じって縄文時代の陥穴が３基検出されていた。また、中世遺構の壁（Ⅳｃ・Ⅳｄ層）に縄文土器がのぞいていることもあり、ここでも下層に縄文時代の遺構・遺物が存在することが予想された。この時点で出土していた土器の時期は後期にほぼ限定されており、前期の土器は見当たらなかった。だが、念のためＤ・Ｅ区のトレンチ調査結果を基に、縄文時代前期包含層相当層の有無を中世の遺構断面や排水溝を利用して観察した。この段階では前期の包含層に相当する層を認識することはなかった。そこで中世の調査終了後、重機でトレンチを掘削し、縄文時代の様相の把握に努めた（図版８）。17 か所のトレンチを調査した結果を基に県教委と協議し、10 ～ 13B ～ Ｄグリッドについて、縄文時代を対象とした調査が必要であるという結論に達した。

３月には次年度の速やかな調査開始のためにＢ区の表土掘削を開始した。

調査終了確認　調査区が広かったことと、地区によっては中世面を除去して縄文面を調査する必要があったため、調査が終了したところから順次県教委が終了確認を実施した。

10 月 11 日：Ｅ区中世面、Ｄ・Ｅ区水路切り回し予定地のうち、Ｄ区中世面。

12 月 16 日：Ａ・Ｂ・Ｄ ～ Ｈ区中世面残り部分、Ｄ・Ｅ区縄文面

実質調査面積は縄文 400m^2、中世 20,386m^2 となった。なお、Ａ・Ｂ区の縄文時代調査は 21 年度に行うこととし、国交省も 21 年度調査を了解した。調査期間等は２月に国交省を交え協議することになった。

現地引き渡し　12 月 18 日にＡ・Ｂ・Ｄ ～ Ｈ区の調査終了部分を国交省へ引き渡した。ただし、Ｂ区のうち縄文時代調査が残る STA226+50 付近から北と、Ｇ区西側の未買収地については引き渡しを保留した。

現地説明会　現地説明会は調査の進捗に併せて２回実施した。１回目は８月 30 日にＦ ～ Ｈ区を対象として実施し、202 名の参加があった。２回目は 11 月 15 日にＡ ～ Ｅ区を対象として実施し、103 名の参加があった。

2）21　年　度

調査対象地　21 年度は 20 年度の調査成果に基づき、中世と縄文の 2 面調査を実施する計画を立てた。調査対象地はＢ区の STA228 から北側とＣ区、Ｂ・Ｃ区間水路下、それに市道 1225 号線と付随する水路の跡地のほか、20 年度の試掘調査によって、縄文時代の調査が必要ということになったＡ・Ｂ区の一部である。20 年度未買収だったために調査できなかったＧ区西側の用地境沿いの 180m^2 も調査対象とした。中世の調査はＣ区とＧ区未買収地､縄文時代についてはＣ区とＡ区の一部（10 ～ 13B ～ Ｄグリッド）を合わせた範囲を対象とした。対象面積は中世が 5,485m^2、縄文が 6,405m^2 である。21 年度調査に関係する記録や書類は便宜的に「古渡路遺跡Ⅲ」とした。

なお、5 月 20 日、国交省からＧ区西側の用地境沿いの未買収地は買収しないので調査不要との連絡を受けたので、中世の調査は 5,305m^2 を対象として進めることとなった。

市道・水路下の調査　市道 1225 号線と付随する水路は、調査着手前にＤ区への切り回しが終了していたので、Ｃ区の調査に連続して実施した。Ｂ・Ｃ区境の水路は稲刈り終了後の 9 月 14 日からＵ字溝や土手を撤去し、調査に着手した。

調査経過（中世）　4 月からＢ区の遺構検出を開始した。20 年度に引き続いて居住域や道路などを検出し、5 月 15 日には空撮を実施した。Ｃ区は 5 月から遺構検出をはじめ、予想どおり、Ｂ区の居住域と道路で隔てられた居住域を検出した。6 月 10 日に空撮を実施した。

調査経過（縄文）　21 年度のＢ区では 5 月 15 日の中世空撮終了後、縄文時代の内容把握のためのトレンチ調査に移行した。2m 幅のトレンチ 3 本を調査区の長軸に並行するかたちで中央、西、東に設定した。中世の調査段階で、縄文土器がⅣｃ層、Ⅳｄ層、Ⅳｄ' 層から出土することが分かっていたので、トレンチの掘削はこの層ごとに進めた。6 月に入り、中央トレンチをⅤ層上面まで掘り下げたところ、陥穴 1 基を検出した。これを断面で観察すると、掘り込み面はⅣｄ層若しくはⅣｃ層であるが、平面で明瞭に確認できるのはⅤ層へ至ってから、ということが明らかとなった。この時点で縄文時代の遺構検出はⅤ層で行うのが適当であると判断した。そこで、Ｂ区全体をⅤ層上面まで掘削し、遺構検出を行うことにした。15 列よりも北側の掘削には重機を用いたが、Ⅳｄ～Ⅳｄ' 層で遺構や遺物が検出される可能性があったので､各面で人力調査を挟みながら進めた。その結果､Ｂ区西側は風倒木痕ばかり目立ったが､東側ではピットが数基検出され、Ⅳｄ層から縄文土器も出土した。

Ａ区はＢ区の縄文調査開始と同時に、20 年度のⅡ－１～５トレンチを再度調査し直した。昨年度は悪天候の中の調査だったので、よく断面観察できなかったが、季節も変わり、半年近くトレンチ壁を開けておいたことで水はけが良くなり、より好条件で観察できた。土器が出土したトレンチに遺構があると推定していたが、改めて観察すると、土器が出土した地点は風倒木痕であることが明らかとなった。遺構ではなかったものの、ほかの区よりは遺物密度が高いことが予想された。そのため、15 列よりも南側は人力でⅣ層を掘削し、Ⅴ層上面の遺構検出へ進むこととした。6 月 17 日以降、埋設土器 3 基、陥穴 2 基を検出した。

Ｃ区はＢ区のようにトレンチを掘削しなくても、既に中世の遺構検出面と同じⅣｃ層で一部の陥穴が検出されていた。しかし、Ｂ区と同様にⅤ層まで掘削しなければ、見逃してしまう遺構があることは十分予想された。そこで、既に検出された遺構を避けながらⅤ層まで重機で掘削した。ただし、25 ～ 28B・Ｃグリッド周辺は中世の遺構検出面がⅤ層だったので改めて掘削はしなかった。6 月上旬には 25 ～

27B・Cグリッド周辺で灰色の覆土が入ったピットが複数検出され始めた。また、22C・Dグリッドでは Ⅳd層から中期初頭の土器がまとまって出土し始めた。7月末にはC区全面がⅤ層で揃い、陥穴も検出数を増していった。8月6日にⅤ層上面までを検出面とする遺構の空撮を実施した。

8月18日以降は、Ⅴ層から下の調査を開始した。まず、陥穴の形状把握も兼ねて、陥穴を長軸方向で截ち割るトレンチをⅧ層の河床礫層まで掘り下げた。併せて重機を用いた深掘りトレンチを等間隔で掘削していった。8月25日に市道1225号線跡地に深掘りトレンチを掘削し、20年度の基本層Ⅴ～Ⅷ層を確認した。隣接するC区の調査が終了していなかったため、初めのうちはこのトレンチから連続して分層線をつないでいくことができなかった。そこで、掘削したトレンチごとに分層を進めた。当初、E区で遺物が出土した層がA区まで連続すると想定していた。E区で縄文時代前期土器の包含層を認識する鍵層としたのが黒色帯（BL）のⅥ層である。Ⅵ層以下を包含層と認識していたため、深掘りでⅤ層直下に堆積する暗色の砂層をⅥ層、その下のシルト層をⅦa層、砂混じりシルト層をⅦb層と捉えていた。Ⅶb層から下は砂層やシルト層などの河川や湿地に由来する堆積物だったので、一括してⅧ層としていた。掘削限界は礫層であるが、これも同様の由来が考えられるのでⅧ層に含めた。このような認識で層序を捉えていたため、上から順に「シルト→暗色の砂層→シルト→砂混じりシルト→シルト・河床礫」という堆積が見られれば「Ⅴ層→Ⅵ層（黒色帯；BL）→Ⅶa層→Ⅶb層→Ⅷ層」に対比していた。しかし、調査の進展に伴い、Ⅵ層と認識している層までⅧ層から噴砂が噴き上がった痕がたどれる例が増加してきた。A区へ行くほどその状況は顕著であり、Ⅵ層相当部分が非常に乱れた堆積状況を示していた。この段階で、Ⅵ層と認識している層が実は噴砂の堆積層なのではないかという疑問が生じてきた。8月26日に富山大学大学院生が古地磁気の変化を基に、噴砂の噴出年代を測定するということで、Ⅵ層も検討した。そして、Ⅵ層は噴砂が当時の地表面に再堆積したものであると認識し、測定試料の採取を実施した。

9月2日には新潟大学の高濱信行教授に現地にて遺跡の地形や地質についてご教示いただいた。Ⅵ層としている暗色の砂層はやはり噴砂層で、複数回噴出しているため、複雑な堆積状況を示しているとのことであった。これに基づいて改めて各トレンチの分層を見直すとともに、市道1225号線に設定したトレンチをC区中央ベルト沿いに人力で南へ拡張し、連続的に層の堆積状況を確認していった。すると、25・26列辺りで昨年度調査区のD～F区に存在したⅥ層が消滅して、ほぼ同質のⅤ層とⅦa層が接することになり、南へ行くにつれて両者の境が不明瞭になっていくことが明らかとなった。これによって、シルト（Ⅴ層）の下に堆積する暗色の砂層はⅥ層ではなく噴砂層であり、Ⅶa層としていたシルト層以下がⅧ層であると再認識した。そして、Ⅴ層とⅦa層が分離できない範囲においては噴砂と噴砂の再堆積層も発達していることから、軟弱な地盤だったことがうかがわれた。このことからB区とC区の南半分については、人の住めるような安定した地盤はなく、包含層や遺構面も存在しないと結論付けた。この見解をもとに県教委と協議し、9月24日には、トレンチ調査を終了したB・C区間水路以南を国交省へ引き渡した。

トレンチ調査の結果、縄文時代前期の包含層が分布する範囲が限定されたので、その範囲を対象にⅦa層まで面的に掘削することにした。20年度はⅦa層からも遺物が出土したが、面的な掘削と並行して実施したトレンチ調査で遺物が出土しなかったので、面的な掘削限界をⅦa層上面とした。9月25日までに掘削を終了したが、この間にⅥ層上面で大木8b式土器の集中区、Ⅴ層中で陥穴を検出した。セクション観察から、これらはⅤ層よりも高い面から掘り込まれていたと判断した。このほか、Ⅵ層に覆われ、Ⅶa層上面で検出されたピット群があったので、これらはより古い時期の遺構として記録した。遺物はほとんどなかったが、中世井戸のトレンチのⅦb層から縄文土器細片が出土した。胎土に微量の繊維を含む

ので、前期土器の可能性がある。

10 月は記録作業や遺物整理を行った。17 日には大葉沢会館にて、地元の方を対象とした発掘調査報告会を実施し、同日、現地から撤収した。20 日、C 区と現地事務所及び駐車場用地を国交省に引き渡した。

調査終了確認　中世面終了範囲から縄文面の調査に移行するため、随時県教委の部分終了確認を受けた。

5 月 20 日：B 区中世面。　　6 月 12 日：C 区中世面。

8 月 20 日：A 区・B 区の縄文上層及び縄文下層の一部。　9 月 20 日：A 区・B 区の縄文下層。

10 月 13 日：C 区縄文上・下層。以上をもって、最終終了確認。

実質調査面積は縄文･中世とも 6,384m^2 で、20 年度との合計は縄文 6,784m^2、中世 26,770m^2 である。

現地引き渡し　9 月 24 日に B・C 区間水路以南、10 月 20 日に C 区と現地事務所及び駐車場用地を国交省に引き渡した。

C　整 理 作 業

【平成 20 年度】 調査期間中の降雨で作業を休止した時に遺構図面の整理を進め、冬期に遺構関係の図版作成・原稿執筆等を行った。20 年度の整理体制は本発掘調査と同様である。

【平成 21 年度】 遺構図版は発掘調査と並行して作成した。遺物整理は 20 年度分も含めて、本発掘調査期間中に洗浄・注記・分類・接合・実測を行った。原稿執筆・編集作業は冬期に実施した。21 年度の整理体制は以下のとおりである。

【平成 22 年度】 21 年度までに作成した図版・原稿を基に、全体の編集作業と収納作業を実施した。

3　調査・整理体制

試掘調査　平成 19 年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長）　斉藤　　栄（総務課長）
庶務	長谷川　靖（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
調査指導	田海　義正（調査課試掘・確認担当課長代理）
担当	加藤　　学（調査課班長）
職員	齊藤　　準（調査課嘱託員）

本発掘調査　平成 21 年度

調査主体		新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査		財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理		木村　正昭（事務局長）　斉藤　　栄（総務課長）
庶務		松原　健二（総務課班長）
調査総括		藤巻　正信（調査課長）
調査指導		鈴木　俊成（本発掘調査担当課長代理）
古渡路Ⅲ	担当	土橋由理子（調査課班長）
	支援業者	国際文化財株式会社
	現場代理人	川口洋次郎（企画管理部主任技師）
	調査員	園村　維敏（主任研究員） 山崎　良二（主任研究員） 蝦名　　純（研究員） 青木　利文（研究員）
	調査補助員	真田　　敦

整理体制　平成 20 年度

調査体制と同様である

整理体制　平成 22 年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理	木村　正昭（事務局長）　今井　亘（総務課長）
庶務	伊藤　忍（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
調査指導	高橋　保（整理・資料担当課長代理）
担当	土橋由理子（調査課班長）
支援業者	株式会社吉田建設
調査員	野水　晃子（主任調査員）
整理作業員	今井　昭俊、佐々木美紀

本発掘調査　平成 20 年度

調査主体		新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査		財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理		木村　正昭（事務局長）　斉藤　　栄（総務課長）
庶務		長谷川　靖（総務課班長）
調査総括		藤巻　正信（調査課長）
調査指導		鈴木　俊成（本発掘調査担当課長代理）
古渡路Ⅰ	担当	土橋由理子（調査課班長）
	調査員	桐原雅史（主任調査員）：10 ～ 12 月
	支援業者	国際文化財株式会社
	現場代理人	植田　誠一（企画管理部主任技師）：4 ～ 8 月 川口洋次郎（企画管理部主任技師）：9 ～ 12 月
	調査員	園村　維敏（主任研究員） 東園千輝男（主任研究員） 田村　典雄（研究員）：4 ～ 8 月 蝦名　　純（研究員） 長内　礼二（研究員） 青木　利文（研究員）：9 ～ 3 月 稲垣　森太（研究員）
	整理作業員	上田奈保美
古渡路Ⅱ	担当	尾崎　高宏（調査課班長）
	支援業者	株式会社吉田建設
	現場代理人	保坂　修央（土木部工務係）
	調査員	野水　晃子（主任調査員）　矢部　英生（調査員）

整理体制　平成 21 年度

調査主体		新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査		財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
管理		木村　正昭（事務局長）　斉藤　　栄（総務課長）
庶務		松原　健二（総務課班長）
調査総括		藤巻　正信（調査課長）
調査指導		鈴木　俊成（本発掘調査担当課長代理）
古渡路Ⅲ	担当	土橋由理子（調査課班長）
	支援業者	国際文化財株式会社
	調査員	園村　維敏（主任研究員） 山崎　良二（主任研究員） 青木　利文（研究員）　蝦名　　純（研究員） 丹下　昌之（北陸支店長）
	調査補助員	真田　　敦
	整理作業員	遠藤　　昌、小野　藤枝、佐久間沙織、 富樫佐登子、中野　佳子、西野　　勲

第Ⅱ章　周辺の環境

1　地理的環境

古渡路遺跡は平成 20 年 4 月の合併によって再編された村上市に所在する。新「村上市」は、村上市、山北町、荒川町、朝日村、神林村の旧 5 市町村からなり、合併後の面積は 1,174.24km^2 と県下最大規模で、人口は約 7 万人を擁する。県内最北端の自治体であり、北と東は山形県鶴岡市・西村山郡西川町・西置賜郡小国町と、南は岩船郡関川村、胎内市と境を接し、西は日本海に面している。

広大な市域では北部から南東部にかけて険しい壮年期の山容を呈する朝日山地や、そこから断層運動によって分断されたとされる葡萄山地の山々が連なる。山地の縁辺部には丘陵が広がり、特に村上市街地の南部を東西に伸び、日本海に張り出す丘陵を浦田山丘陵、荒川から北部に伸びる丘陵を岩船丘陵という。平野部では東部の山岳地帯を源流とする荒川・三面川が大小の河川を集めながら西流し、新潟平野の北部にあたる肥沃な沖積地を形成している。海岸部では砂丘が発達し、岩船港付近が新潟市西蒲区の角田山北麓から海岸線に沿って伸びる長大な砂丘列（新潟砂丘）の北限にあたる。

新潟平野は勾配が極めて少ない平野の上、成長した砂丘群によって河水の海への流入が阻害された結果、平野を流れる河川はしばしば流路を変え、低湿な平野の各地には多くの河跡湖・潟湖が形成された。そして、まるで網の目のように各地の湖沼を結ぶ河川網は、船運による内水面交通の発達を促すこととなる。

慶長 2（1597）年に描かれたとされる『越後国瀬波郡絵図』（米沢市上杉博物館所蔵）には、かつて浦田山丘陵の南に存在した琵琶潟（岩船潟）や、「やち」「野地」と表記される葦の茂る湿地帯、荒川や三面川をはじめとする大小の河川が数条に別れて乱流する様子が描かれており、当時の村上の景観をよく伝えてくれる。また、そこに描かれる景観は古来から幾度となく繰り返されてきた治水事業や干拓事業によって失われた新潟平野の原風景でもある。

古渡路遺跡は旧朝日村地域にあたり、三面川とその支流の門前川に挟まれた沖積地上に立地する［小林・吉村ほか 2000］。遺跡の標高は中世面で 12.7 ～ 14.6m、縄文上層面で 13.0 ～ 13.8m、縄文下層面で 13.7m である。本遺跡付近の沖積地で発見された谷地遺跡・桂木田遺跡・堂の前遺跡・下新保高田遺跡などの諸遺跡と同様、三面川左岸に形成された自然堤防等の微高地上に営まれた遺跡であると推定される。

本遺跡は古渡路集落の東方約 700m に位置し、調査以前は水田であった。南には村上城跡のある臥牛山、大館跡、東には大葉沢城跡を間近に臨むことができる。

2　歴史的環境（第 2 図・第 1 表）

A　縄文時代の遺跡

古渡路遺跡は三面川左岸の沖積地に立地しており、遺跡の南西約 500m の地点には縄文時代前期の谷地遺跡（41）が所在する。谷地遺跡は縄文時代前期初頭～中葉の集落跡であり、屋外炉や土坑などが検出された［大島ほか 2010］。

村上市北部を南流する三面川支流の高根川流域では、後期後葉から晩期前葉の古四王林遺跡（9）［高橋ほか1998･1999］や晩期の駒山遺跡（3）［横山 1978］がある。この他、一貫地遺跡（2）･谷地尻遺跡（11）･古寺跡遺跡（20）・黒田中道（14）・田中（7）・川向Ａ（5）などの縄文前～後期の遺跡が分布調査で周知されている。

三面川支流の長津川流域では後期中葉から晩期前葉の熊登遺跡（27）［横山・田中 1976］が存在する。

上海府地区の海岸段丘上には縄文時代の遺跡が数多く分布しており、玄場平遺跡（32）･向平遺跡（34）･柏尾遺跡（33）などからは後期の遺物が採集されている。

三面川河口部左岸の河岸段丘上に発達した村上市街地からも縄文時代の遺跡が発見されており、下渡門遺跡（50）では中期、観音寺裏遺跡（47）では後期、二之町遺跡（48）では晩期の土器が採集されている。

三面川支流の門前川流域では河岸段丘の発達した右岸に縄文遺跡が多く分布する。大関上野遺跡（57）･山崎遺跡（58）はともに中期前葉である。大関上野遺跡と同じ段丘面に位置する高平遺跡（55）は中期前葉～中葉の集落跡であり、土器捨て場から大量の土器が出土した［塩原・竹内 2001］。

門前川右岸の自然堤防上には後期前葉の大規模集落跡である長割遺跡（45）［滝沢 2009］がある。

浦田山丘陵上には上ノ山遺跡（61）が所在する。大木６式並行の土器が主に出土し、前期末の集落跡とされる。また長楕円形を呈する陥穴が１基検出されている［田辺 2008］。

岩船丘陵では縄文遺跡の分布が多く、東興屋遺跡（53）・高山東遺跡（54）・八幡山遺跡（66）・水口沢遺跡（68）・大聖寺遺跡（80）・稲葉下遺跡（86）などが所在する。東興屋遺跡は中期前葉～中葉の小集落跡であり［石川 2009］、古渡路遺跡と類似する形態の陥穴が１基検出された。八幡山遺跡では大型のフラスコ状土坑や前期末の大木６式並行の土器が出土している［田辺 1994］。

岩船丘陵付近の沖積地から発見された縄文遺跡としては、樋渡遺跡（76）･堀下遺跡（77）･城田遺跡（79）がある。これらの遺跡は旧神林村で初めて発見された沖積地の縄文遺跡であり、低湿な沖積地の水田下にも縄文時代の遺跡が存在することが確認された。

樋渡遺跡・堀下遺跡では中期前葉・後期後半～晩期の土器が出土し［田辺・大賀 2003］、城田遺跡では後期後半の集落跡が検出された［田辺ほか2001］。

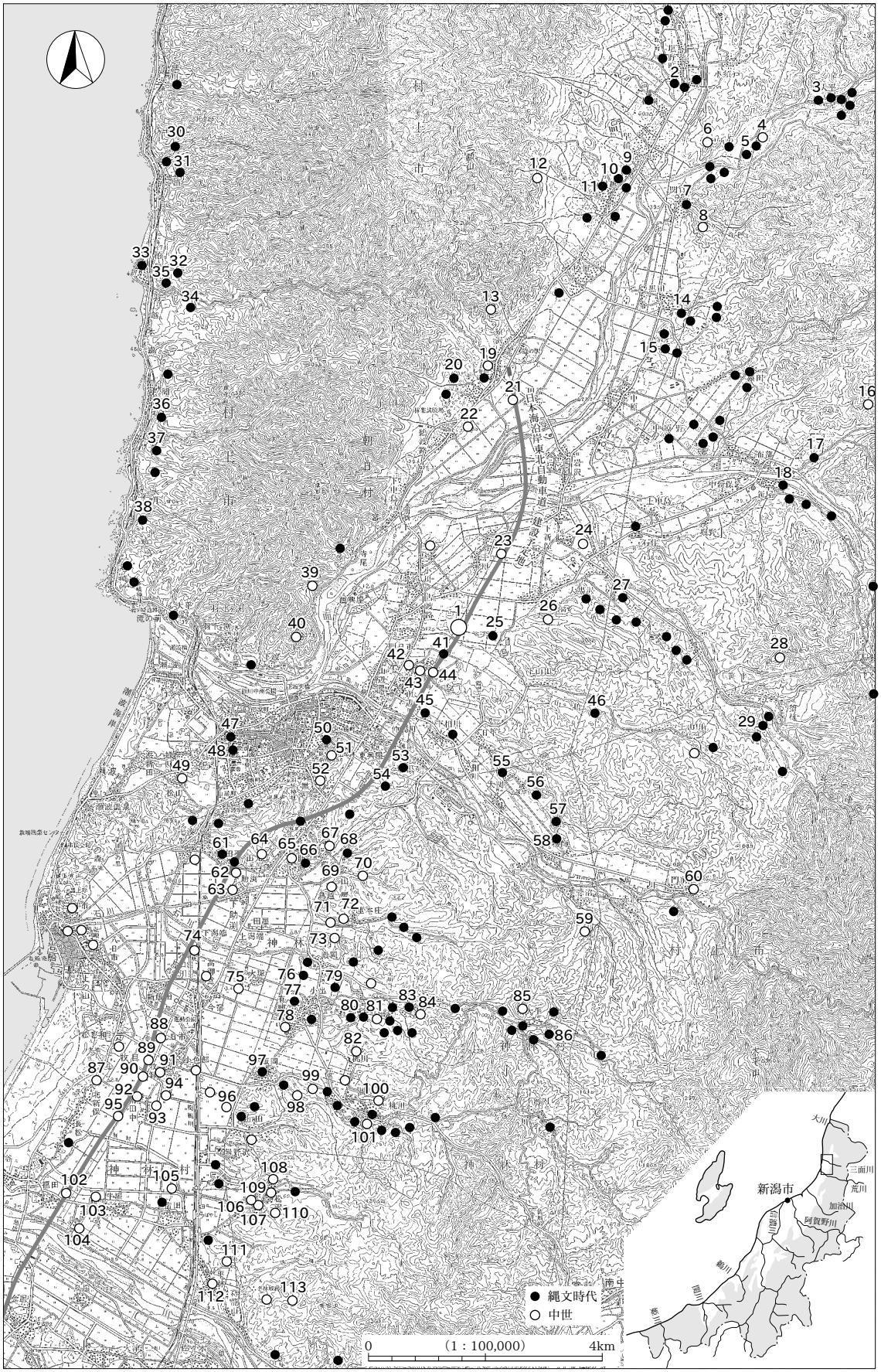
以上、村上市域の縄文時代の遺跡を概観してきたが、その分布は丘陵上や河岸段丘を主としながら、自然堤防等の沖積地にも確認されており、当該期における縄文人の生活の舞台は多岐にわたっている。

Ｂ　中世の歴史的環境

藤原北家の流れを汲む中御門家の家領「小泉荘」は仁平３（1153）年に金剛心院領「小泉荘」として中世荘園へと変貌を遂げた。当時、京都の中央政界は鳥羽院政期に当たり、各地で広大な荘域を持つ中世荘園（寄進地系荘園）が続々と形成された時期に当たる。小泉荘もそのひとつで、鳥羽院の御願寺である金剛心院造営の経費を負担するために立荘されたものである。中御門家は、家領「小泉荘」を寄進することでその造営に当たった院近臣の庇護を得るとともに、自らは領家として権益を保持した。

この新たに成立した小泉荘は周囲の国衙領を囲い込んだ非常に広大な荘域を有する。その範囲は旧岩船郡のほぼ全域にわたり、旧岩船潟の東岸に位置する有明付近を境に北を「本庄」、南を「加納」という。古渡路遺跡はこの小泉荘本庄に位置している。本庄はおよそ旧村上市や旧朝日村に当たり、加納は旧神林村にあたる。また、加納の南には国衙領の「荒川保」が位置していた。

鎌倉時代初めに小泉荘の地頭職に補任された有力御家人の秩父季長は、嫡子行長に本庄を、庶子為長に



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡　［原図：国土地理院 1:50,000 地形図「村上」1998、「中城」「塩野町」「小国」2005］

第１表　周辺の主要遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	古渡路	縄文・中世	39	菅谷城跡	中世	77	堀下	縄文中～晩期・古代・中世・近世
2	一貫地	縄文中期	40	下渡山城跡	中世	78	有明的場	古代・中世・近世
3	駒山	縄文晩期	41	谷地	縄文前期・中世	79	城田	縄文後期・弥生・古代・中世・近世
4	馬立場	中世	42	御所館跡	中世	80	大聖寺	縄文・弥生
5	川向Ａ	縄文中期	43	天神岡前田	中世	81	十二前	中世
6	早稲田城跡	中世	44	大館跡	中世	82	元千眼寺跡	中世
7	田中	縄文後期	45	長割	縄文後期	83	中村	縄文晩期
8	関口城跡	中世	46	浦白	縄文中期	84	木原木Ａ	縄文・中世
9	古四王林	縄文後・晩期	47	観音寺裏	縄文後期	85	南大平城跡	中世
10	行塚	縄文前・中期	48	二之町	縄文晩期	86	稲葉下	縄文中期
11	谷地尻	縄文前・中期	49	松山上野	中世	87	在ヶ付Ⅱ	古代・中世
12	板屋越城跡	中世	50	下渡門	縄文中期	88	堂田	中世
13	猿沢城跡	中世	51	村上城跡	中世・近世	89	田屋道	古代・中世
14	黒田中道	縄文前・中期	52	牛沢城跡	中世	90	松蔭東	古代・中世
15	向野	縄文後・晩期	53	東興屋	縄文中期	91	牧目館跡	中世
16	布部城跡	中世	54	高山東	縄文前・中期	92	水下４	中世
17	寺尾	縄文後期	55	高平	縄文中期	93	水下１	中世
18	新屋宮ノ下	縄文前・中期	56	お丸山	縄文中期	94	水下２	中世
19	上野地	中世	57	大関上野	縄文中期	95	窪田	古代・中世・近世
20	古寺跡	縄文中・後期	58	山崎	縄文中期・中世	96	奉行松	古代・中世・近世
21	上野太田	中世	59	菅沼かなくそ沢製鉄跡	古代・中世	97	飯岡山崎	縄文
22	朴木田	中世	60	小堰	中世	98	飯岡城跡	中世
23	下新保高田	古墳・中世	61	上ノ山	縄文前期	99	草田	中世
24	鳥井田	中世	62	家ノ前	縄文・古代・中世	100	堤下	中世
25	坊山	縄文	63	明斉田	古代・中世	101	桃川館跡	中世
26	大葉沢城跡	中世	64	八太郎	古代・中世	102	西部	古代・中世
27	熊登	縄文後期	65	上助淵前田	中世	103	中部	中世
28	笹平城跡	中世	66	八幡山	縄文前期	104	牛屋館跡	中世
29	中平南	縄文中期	67	天王前	中世・近世	105	道上東	中世
30	新保山	縄文中期	68	水口沢	縄文前期・近世	106	下谷地東	縄文・古代・中世
31	太田	縄文中期	69	フケ田	中世	107	松沢寺田	縄文・古代・中世
32	玄場平	縄文後期	70	大場沢	中世・近世	108	松沢屋敷添	縄文・古代・中世
33	柏尾	縄文後期	71	内御堂	古代・中世	109	鯉池	縄文・古代・中世
34	向平	縄文後期	72	内御堂Ｃ	中世	110	松沢館跡	中世
35	小坂	縄文中期	73	大木戸	古代・中世	111	千眼寺跡	中世・近世
36	腰元	縄文中期	74	宮ノ下	中世	112	平林町屋	中世・近世
37	野潟上山	縄文中・晩期	75	千作り	弥生・古墳・古代・中世・近世	113	平林城跡	中世
38	道ヶ崎	縄文中期	76	樋渡	縄文中～晩期・古代・中世・近世			

加納を分割譲渡した。本庄を受け継いだ行長は小泉姓を名乗り、加納を受け継いだ為長は色部姓を名乗る。小泉氏はやがて本庄氏と改姓した。

中世荘園の領有体系は中央に住む荘園領主にたいして現地の荘官が年貢の納入を請け負うというもので、それぞれの職に付随した権益が担保されていた。そこに割り込んできた地頭は下地中分（土地の折半）、地頭請所（年貢徴収・納入の請負）などの契約、時には非合法な手段を用いて、荘園領主の権益を次第に蚕食していく。

しかし、小泉荘本庄は鎌倉時代末に幕府の直轄地である関東御領に編入され、後醍醐天皇の建武政権では没収地として他国の武家に分配されるなど、他勢力からの干渉の多い地域だった。したがって、本庄氏の地頭としての領主支配は後退と進展を繰り返すが、南北朝の動乱期を通じて、本庄氏は次第に荘園領主の権限をも排除する有力な在地領主、すなわち国人領主としての地歩を固めていった。

阿賀野川以北にはこの本庄氏のような国人領主が割拠しており、彼らは阿賀北衆（揚北衆）と総称される。白河荘の安田氏・水原氏・下条氏、加治荘の加治氏・新発田氏、奥山荘の中条氏・黒川氏、築地氏、羽黒氏などがそれである。小泉荘では本庄氏をはじめ、色部氏、鮎川氏、小川氏などの国人衆が分立し、抗争を繰り広げた。

C　中世の遺跡

古渡路遺跡の周囲には小泉荘本庄を根拠とした国人領主層やその家臣が居住した中世城館や、館伝承地が数多く分布する。遺跡の東方約 1.5km の丘陵上には大葉沢城跡（26）、南西約 1km の独立丘陵には大館跡（44）、南西約 3km の臥牛山上には村上城跡（51）が、北方約 5km には猿沢城跡（13）が所在する。

大葉沢城は鮎川氏の居城とされ、50 数条の畝形阻塞などが今も現存し、戦国期の山城の形式をよく残していることから、新潟県指定史跡となっている［田中 1999］。

大館跡は東西約 110m、南北約 100m の大規模な方形居館で、日沿道建設に伴い東堀部分を中心に平成 19・20 年度に発掘調査が行われた。15 世紀を中心に 13 ～ 15 世紀の遺物が出土している。館の規模や皆朱漆器・京都産土師質土器、大型の鉄鍋といった希少品が出土し、本庄氏に関係する館と推定されている［青木ほか 2008・2009］。

村上城は近世初頭に次々と入封した堀氏・本多氏・松平氏の改修によって近世城郭に姿を変えたが、以前は典型的な戦国期の山城であり本庄氏の居城であった。『越後国瀬波郡絵図』（前掲）では「むらかみようがい」と記されている。

猿沢城跡は山麓居館部と山城からなる根小屋式城郭で、構造から中心時期は16世紀後半とされる［横山・田中 2005］。

これらの城館跡に囲まれた低地部の中世集落遺跡として上野太田遺跡（21）・古渡路遺跡（1）・谷地遺跡（41）・下新保高田遺跡（23）が存在する。上野太田遺跡は日沿道の試掘調査で発見された。三面川右岸の微高地上に局所的に存在する集落で、時期は 14 ～ 15 世紀とされる［加藤 2008］。谷地遺跡では主に 15 世紀の所産とされる珠洲焼や、越前焼、白磁、瓦質土器が出土している［大島ほか 2010］。下新保高田遺跡は 14 世紀を中心とする集落で、遺構や出土遺物から富裕農民層の集落と推定されている［青木ほか 2010］。また、本遺跡では 13 世紀後半～ 15 世紀中頃の遺物が出土している。

本庄氏の居館と推定されている大館跡と、本遺跡を含めたこれらの中世集落は活動時期をほぼ同じくしており、既に指摘されているように［大島ほか 2010］、大館跡の北に広がる沖積地の集落の形成には本庄氏が強く影響していることが推定される。

第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の概要（第３・４図）

古渡路遺跡は村上市（旧朝日村）古渡路字海老屋敷・大場沢字アケ・山の神ほかに位置する。調査区の地形は北から南へ緩やかに傾斜しているが、中央部はやや高くなっており、そこから南に向かい標高を下げ、三面川の支流山田川へと至る。標高は12.5 ～ 14.5m である。近隣には中世城館が点在し、南西 1.2km には大館跡、東 1.2km には大葉沢城跡がある。

調査の結果、遺跡は縄文時代の狩場と 13 世紀後半～ 15 世紀前半の中世集落であったことが判明した。

縄文時代は前期～晩期の時期幅があるが、いずれの時期においても遺構・遺物量は非常に少なく、長期的な定住地とはみなせない。その中で注目されるのが、前期末葉の大木６式土器が１か所からまとまって出土した点と、中期以降の陥穴列が検出された点である。陥穴列は通常丘陵の斜面などで検出されるので、古渡路遺跡のような低湿地で検出された例は希少である。

中世集落については、地形の起伏を活かして微高地に居住域を設け、居住域間の低地あるいは小河川との境に道が作られている様子が明らかとなった。調査区北端では水田も検出した。整理作業の結果、これらの居住域は３ないしは４段階の変遷を経ており、それに伴って建物の構造にも変化が見られることが明らかとなった。

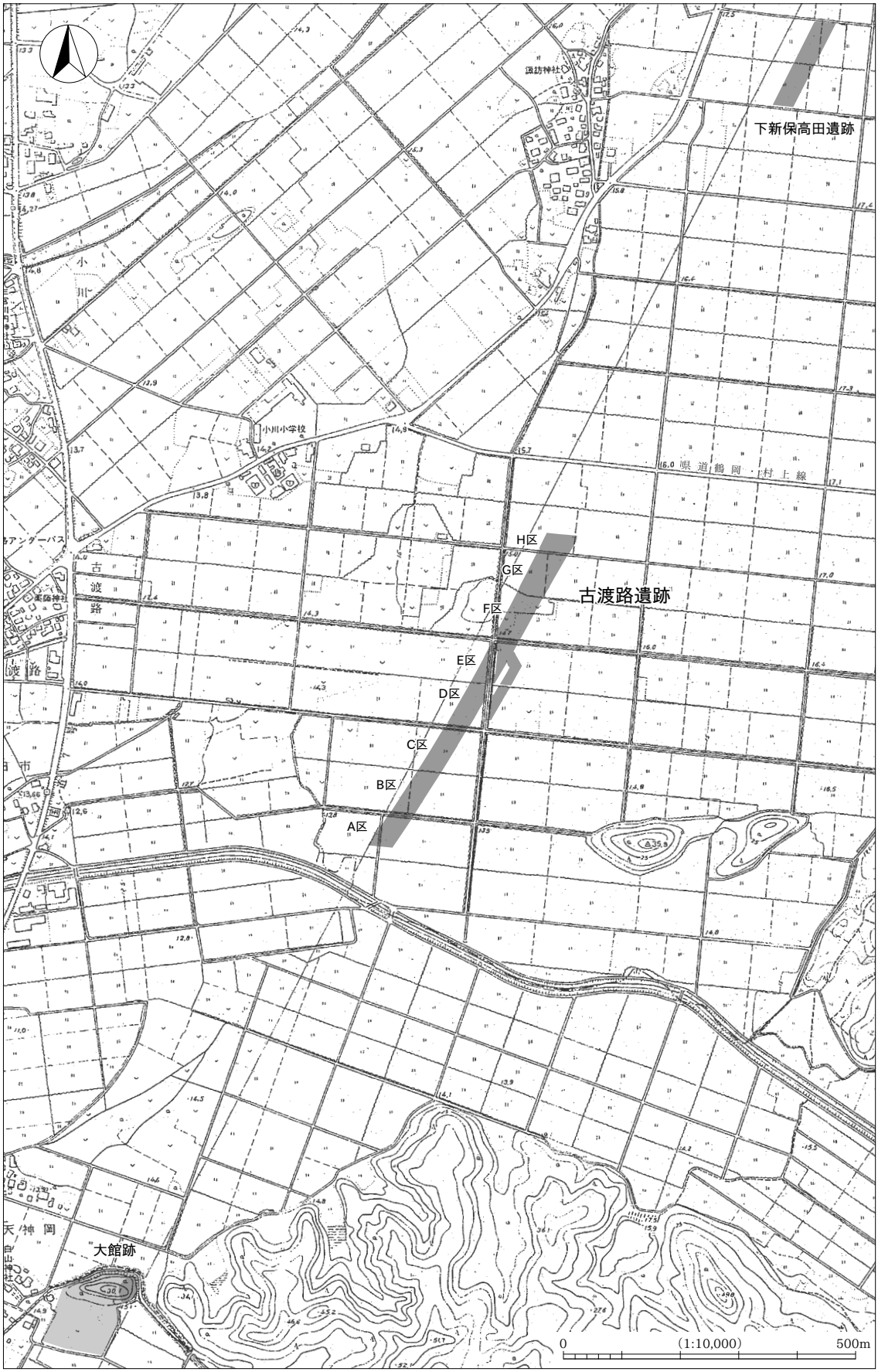
調査対象地は南北約 650m、幅約 40m の広範囲に及ぶため、現代の水路や農道を境にＡ～Ｈ区に区分した（第３図）。20 年度は「古渡路Ⅰ」としてＤ～Ｈ区、「古渡路Ⅱ」としてＡ区とＢ区の一部を調査した。21 年度は「古渡路Ⅲ」としてＡ区の一部とＢ･Ｃ区を調査した。Ａ区とＢ区の一部については、20 年度に中世の調査を終了しており、21 年度は縄文時代について調査を実施した。

縄文時代と中世の遺構検出面が異なることから、縄文面と中世面に分けて調査した。調査面積は縄文（20 年度 400m^2、21 年度 6,384m^2）、中世（20 年度 20,386m^2、21 年度 6,384m^2）であり、延べ面積は 33,554m^2（20 年度 20,786m^2、21 年度 12,768m^2）である。

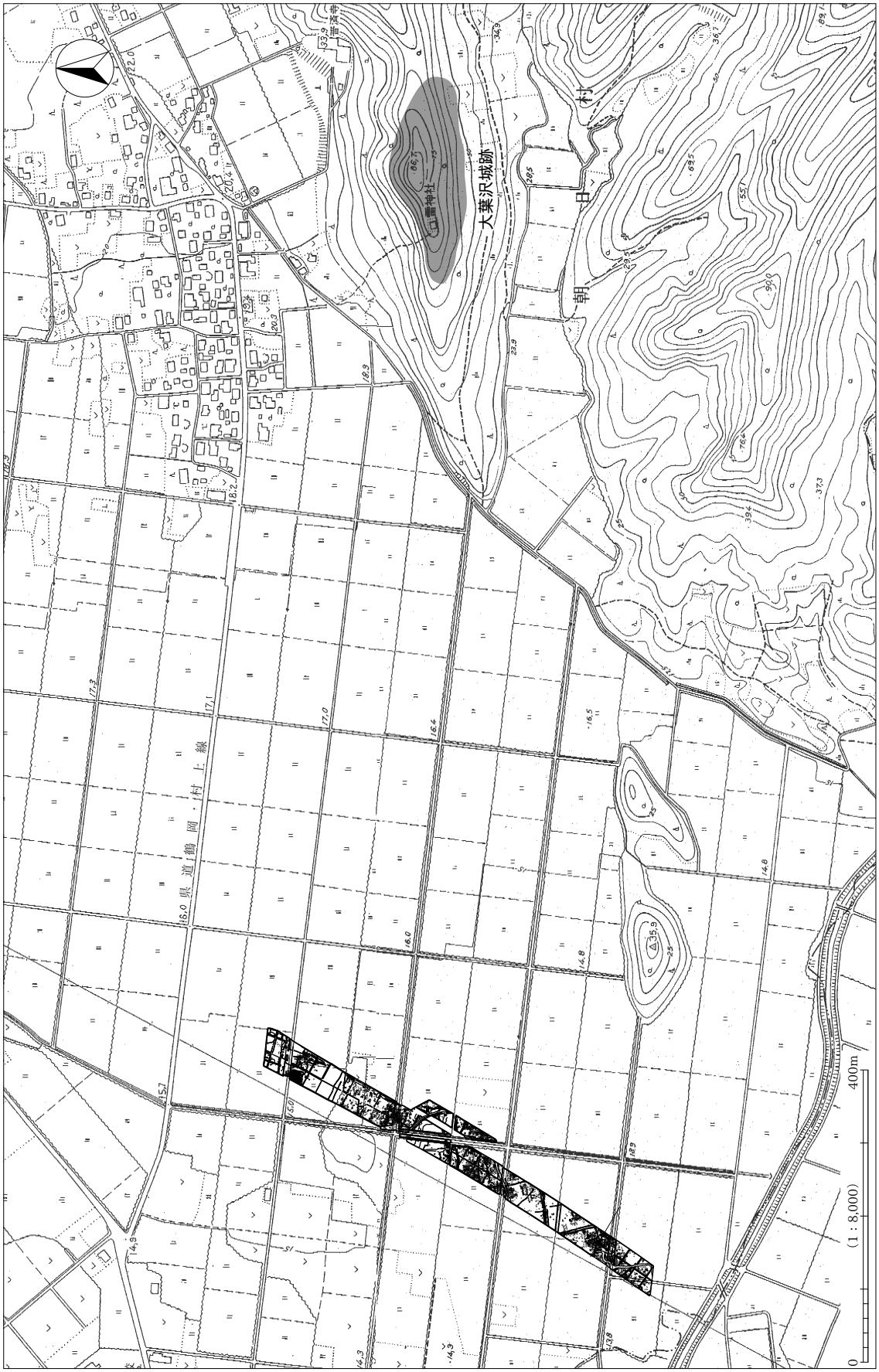
2　グリッドの設定（第５図）

調査区の南西隅に任意の基点を作り、グリッドの南北のラインが高速道路法線に沿うように設定した。グリッドの設定は高速道路法線杭 STA227 と STA253 を結ぶ線を南北軸とした。グリッドの南北方向は真北方向から 30°58′15″東編している。大グリッドは10m 四方であり、名称は南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットの大文字として、両者の組み合わせで「1A グリッド」などと表した。また小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 等分して１～ 25 のアラビア数字で表し、南西隅を 1、北東隅を 25 とした。表記は大グリッドに続けて小グリッドを表示し、「1A10 グリッド」のように呼称した。

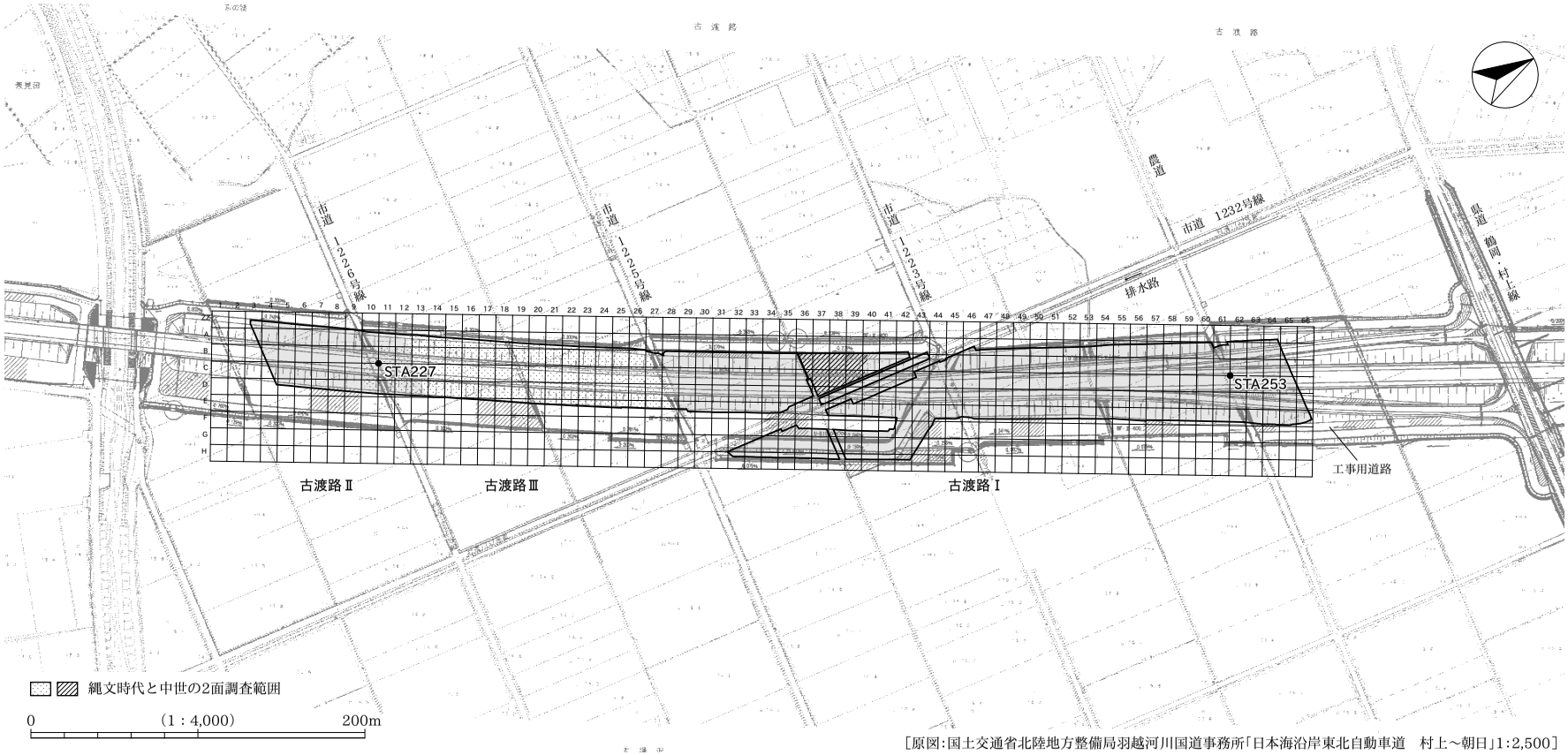
2　グリッドの設定



第３図　本発掘調査の位置　　［原図：1：10,000 朝日村現況図８・９］



第４図　現地形と中世遺構配置の関係図［原図：1:50,000 朝日村現況図 19、26　新潟県遺跡台帳・遺跡分布図 2010 年３月］



［原図:国土交通省北陸地方整備局羽越河川国道事務所「日本海沿岸東北自動車道　村上～朝日」1:2,500］

古渡路遺跡グリッド設定座標

測点	日本測地系第Ⅷ系		世界測地系	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標
STA227	248680.753	88732.875	249029.7541	88449.5147
STA253	249126.294	89000.276	249475.2988	88716.9091
30Cグリッド杭	248843.664	88830.649	249192.6660	88547.2864
			北緯　38°14′28″	
			東経　139°30′41″	

小グリッドの呼称

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

第５図　グリッド設定図

3　基本層序（第６図・図版 220）

基本層序は試掘調査時に設定したⅠ～Ⅴ層を基本とした。しかし、調査の進捗に伴い試掘調査で確認していなかった縄文時代の遺構・遺物が検出されたため、縄文時代に関わるⅥ層以下の基本層序については改めて設定した。

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：にぶい黄褐色～灰褐色砂質シルト。しまり・粘性弱い。中世の遺物包含層。

Ⅲ層：灰白色砂。粘性・しまり弱い。中世の遺物包含層。一部中世の遺構確認面。Ｄ～Ｆ区に分布する。

Ⅳ層：褐色シルト。Ｄ～Ｆ区では堆積が均一のため一括した。厚く堆積するＡ～Ｃ区では５細分した。

Ⅳａ層：黒褐色～暗褐色土。粘性、しまり強い。縄文時代の遺物包含層。Ｄ～Ｆ区に分布する。

Ⅳｂ層：オリーブ黒色シルト。粘性、しまりあり。縄文時代～中世の遺物包含層。Ａ～Ｃ区に分布する。

Ⅳｃ層：暗灰黄色砂質シルト。粘性、しまりあり。縄文時代の遺物包含層。Ａ～Ｃ区に分布する。

Ⅳｄ層：オリーブ黒色粘質シルト。粘性あり、しまりやや弱い。縄文時代の遺物包含層。Ａ～Ｃ区に分布する。

Ⅳｄ' 層：オリーブ黒色粘質シルト。粘性、しまりやや弱い。Ⅴ層との漸移層。縄文時代の遺物包含層。Ａ～Ｃ区に分布する。

Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト。粘性、しまりあり。遺構検出面。

Ⅴｂ層：暗オリーブ色土。一部に灰オリーブ色土混合、しまりがあり、やや粘性を帯びる。Ｇ区に分布する。中世遺構検出面。

Ⅵ層：オリーブ褐色土。黒色帯。しまりがあり、やや粘性を帯びる。縄文土器がわずかに出土。Ｃ区から北に分布する。

Ⅵｂ層：暗オリーブ色砂。しまりがあり、粘性はない。一部中世遺構検出面。Ｇ区に分布する。

Ⅶａ層：オリーブ色砂質シルト。粘性、しまりあり。鉄分が多い。縄文時代の遺物包含層。

Ⅶｂ層：Ⅶａ層と同質のシルトにⅧ層の砂が多量に混じる。粘性弱く、しまりあり。

Ⅷａ層：灰オリーブ色砂。粘性弱く、しまりやや弱い。Ⅷａ層は混入する砂の粒度により３細分した。

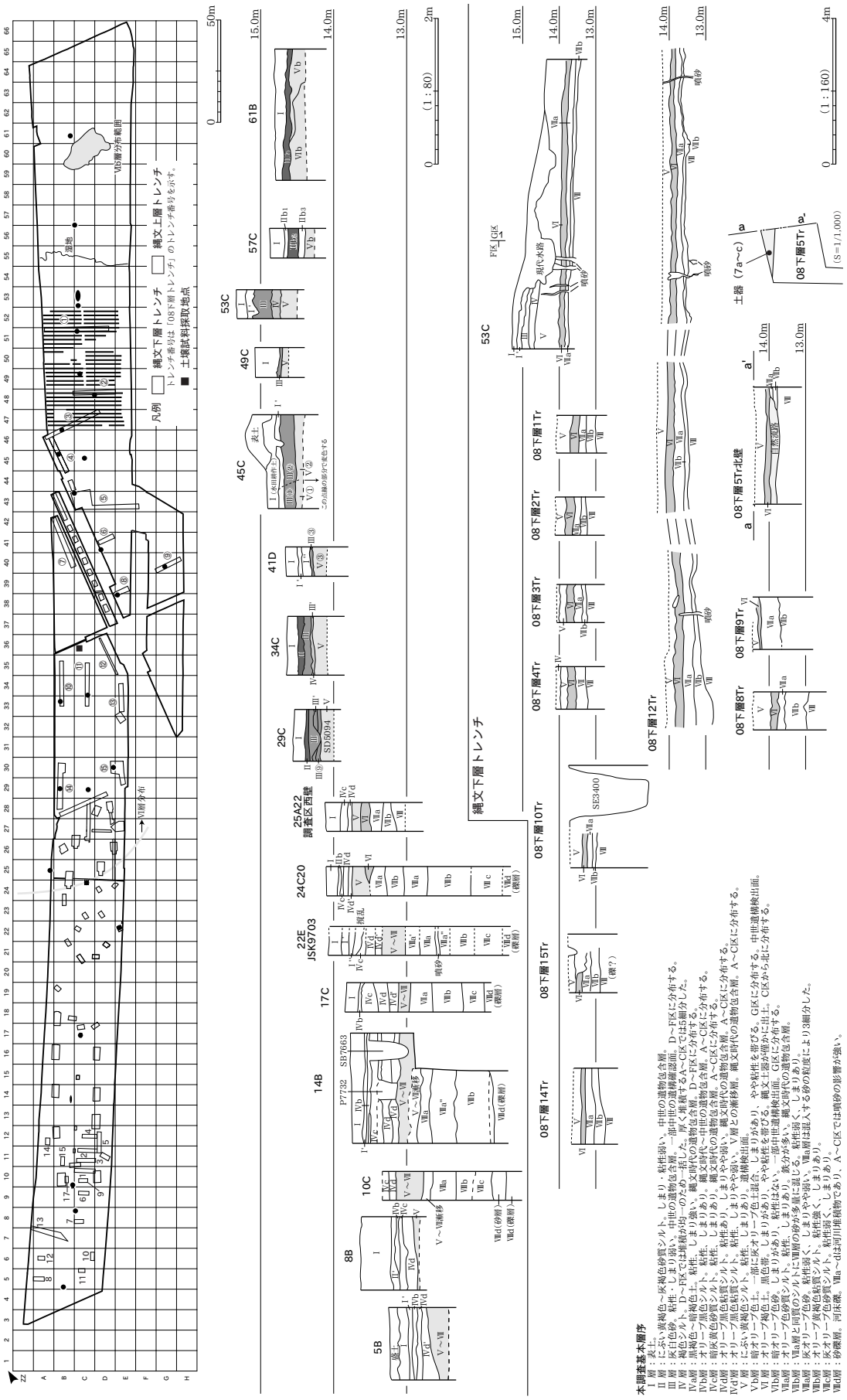
Ⅷｂ層：オリーブ黄褐色粘質シルト。粘性強く、しまりあり。

Ⅷｃ層：灰オリーブ色砂質シルト。粘性弱く、しまりあり。

Ⅷｄ層：砂礫層。河床礫。Ⅷａ～ｄは河川堆積物であり、Ａ～Ｃ区では噴砂の影響が強い。

以上が基本層序であるが、調査範囲が広範囲に及ぶため、各調査区での層相は異なる。北端のＧ区は変化が顕著で、遺構確認面であるⅤ層が湛水の影響のためか暗オリーブ色を呈し、ほかの調査区のⅤ層とは異なる印象を受けた。それでも遺構確認面としての連続性を認めたため、Ｇ区のⅤ層はⅤｂ層として区別した。また、Ｇ区の遺構確認面は基本的にはⅤｂ層であるが、60C グリッドを中心とする東西約 25m、南北約 10m の範囲には砂層が分布し、その面で遺構を検出した。そのためⅤ層と区別するためにⅥ層と呼称した。ところが、その後Ｅ区においてⅤ層の下に縄文土器が出土する層が見つかり、これもⅥ層とした。そのため両者を区別するため、縄文時代の遺物包含層をⅥ層、Ｇ区の遺構確認面をⅥｂ層と呼称した。

以下に各調査区の層序の詳細を記載する。


凡例
縄文下層トレンチ
トレンチ番号は「08下層トレンチ」のトレンチ番号を示す。
縄文上層トレンチ
土壌試料採取地点
Ⅶb層分布範囲
Ⅶa層分布
湿地
縄文下層トレンチ
08下層5Tr北壁
08下層5Tr
現代水路
噴砂
土器（7a～c）
(S=1/1,000)
(1：80)
(1：160)
本調査基本層序
Ⅰ層：表土。
Ⅱ層：にぶい褐色～灰褐色砂質シルト。しまり・粘性弱い。中世の遺物包含層。
Ⅲ層：灰白色砂。粘性・しまり弱い。中世の遺物包含層。
Ⅳ層：褐色～にぶい褐色シルト。粘性・しまりやや強い。Ⅶ層を覆うA～C区に分布する。
Ⅳa層：黒褐色～暗褐色シルト。粘性・しまりあり。縄文時代の遺物包含層。A～C区に分布する。
Ⅳb層：暗灰黄色砂質シルト。粘性・しまりあり。縄文時代の遺物包含層。A～C区に分布する。
Ⅳc層：暗灰黄色粘質シルト。粘性あり。しまりやや弱い。縄文時代の遺物包含層。A～C区に分布する。
Ⅳd層：オリーブ黒色粘質シルト。粘性・しまりやや弱い。Ⅴ層との漸移層。縄文時代の遺物包含層。A～C区に分布する。
Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト。粘性・しまりあり。遺構検出面。
Ⅴb層：暗オリーブ色土。一部に灰オリーブ色土混合。しまりがあり、やや粘性を帯びる。G区に分布する。中世遺構検出面。
Ⅵ層：オリーブ褐色土。黒色帯。しまりがあり、やや粘性を帯びる。縄文土器が僅かに出土。C区から北に分布する。
Ⅶb層：暗オリーブ色砂。しまりがあり、粘性はない。一部中世遺構検出面。G区に分布する。
Ⅶa層：オリーブ色砂質シルト。粘性・しまりあり。鉄分が多い。縄文時代の遺物包含層。
Ⅶb層：Ⅶa層と同質のシルトにⅦ層の砂が多量に混じる。粘性弱く、しまりあり。
Ⅶc層：灰オリーブ色砂。粘性弱く、しまりやや弱い。Ⅶa層は混入する砂の粒度により3細分した。
Ⅶb層：オリーブ灰褐色粘質シルト。粘性強く、しまりあり。
Ⅶc層：灰オリーブ色砂質シルト。粘性弱く、しまりあり。
Ⅶd層：砂礫層。Ⅶa～dは河川堆積物であり、A～C区ではⅦ層の影響が強い。

第６図　基本層序

A　A区・B区の層序

A区・B区の基本土層はⅠ層以下Ⅷ層まで大別した。調査の方法はA区と同様で、調査範囲内に設定したベルト断面を観察し分層した。中央ベルトはすべて、また調査区壁面は特徴的なか所を選定し、これらを記録・図化した。地点により土色・土質の違いから細分した層もある。Ⅰ層の以下のⅡ・Ⅲ層についてはC区と同様に削平を受け、当地区には分布しない。

Ⅳ層は縄文遺物包含層で4層に細分した。Ⅳc層は中世の遺構検出面である。Ⅳb層では中世の遺構を一部確認したが遺構覆土と色調が類似することから遺構の確認が困難と判断し、Ⅳc層上面まで掘り下げ遺構を検出した。また、この層で縄文時代と考えられる陥穴、縄文時代後期を主体とする土器を検出した。Ⅳd'層はⅤ層との漸移層で土色・土色の違いが見られる。Ⅳd～Ⅳd'層は縄文時代中期を主体とする遺物包含層で埋設土器を検出した。Ⅴ層は縄文時代上層の遺構検出面で、Ⅳc･Ⅳd層で確認できなかった遺構を含め、最終的にこの面で確認している。

Ⅴ層下位は当地区北方向のC～D地区に分布するⅥ層が存在しない。このためⅧ層とした礫層までの中間層が不明瞭となりⅤ～Ⅶ層と一括している。Ⅷ層はシルト層と砂層が交互に堆積し礫層に至る。Ⅷ層は河川堆積物と地震に伴う噴砂由来の砂層を基本とし、粗砂・シルト層・砂質シルトで細分している。Ⅴ層から下位では遺構・遺物を検出していない。

Ⅰ層：表土。

Ⅰ'層：灰色土（7.5Y5/1）下面に褐鉄鉱が帯状に沈着する。硬質。耕作による攪拌によりⅣb層がまだらに混じる場所もある。水田床土。

Ⅱ層：当地区には分布しない。

Ⅲ層：当地区には分布しない。

Ⅳb'層：Ⅳb層と同様の土質だが硬化している（中世の道路の影響を受けた可能性あり）。

Ⅳb層：オリーブ黒色シルト（5YR3/2）　粘性、しまり有り。

Ⅳc層：暗灰黄色砂質シルト（2.5YR5/2）　粘性、しまり有り。縄文時代遺物包含層。

Ⅳd層：オリーブ黒色粘質シルト（2.5Y3/2）　粘性有、しまりやや弱い。縄文時代遺物包含層。

Ⅳd'層：オリーブ黒色粘質シルト（2.5Y3/2）　粘性、しまりやや弱い。Ⅴ層との漸移層。

Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト（10YR5/5）　粘性、しまり有り。

Ⅵ層：当地区には分布しない。

Ⅷa層：灰オリーブ色砂（5Y5/3）　粘性弱く、しまりやや弱い。噴砂によりⅧd層の砂礫が堆積した可能性が高い。Ⅷa層は混入する砂の粒度により二つに細分した。

Ⅷa'層:灰オリーブ色砂(5Y5/3)　Ⅷa層より砂質。細砂。噴砂の上部に軽い砂が堆積した層と推定する。

Ⅷa''層：Ⅷa'層より砂の粒度が粗い。噴砂本体と推定する。

Ⅷb層：オリーブ黄褐色粘質シルト（5Y6/3）　粘性強く、しまり有り。河川堆積物。

Ⅷc層：灰オリーブ色砂質シルト（5Y5/2）　粘性弱く、しまり有り。河川堆積物。

Ⅷd層：砂礫層。河床礫。

B　C区の層序

C区の基本土層は確認トレンチなどでⅠ層以下Ⅷ層まで大別し、土色・土質の違いから細別した層位もある。セクション図化は24列以北の微高地形を通る地点で土層遺存状況の良好なか所でおこなった。Ⅰ層以下Ⅱ～Ⅲ層（中世遺物包含層）は局所的に見られるが、ほとんど削平を受けたと見られあまり残存していない。Ⅳ層は縄文遺物包含層で4層に細別した。中世遺構はⅣc層上面で検出を行なった。またこの面で縄文時代と考えられる陥穴を複数検出した。Ⅴ層は縄文上層遺構の検出面で、Ⅳc層で確認できなかった遺構を含め最終的にこの面で確認した。

Ⅴ層上面の旧地形を見ると25～28列にかけて微高地形をなし24列付近から低くなる。縄文上層遺構はこの微高地縁辺とさらに南側へ20mの地点でピット等を検出している。また陥穴はおおむね同一等高線に沿った配列も認められる。24列付近は南側に向かって標高が低くなる地形の変換点に当たり、北側から継続的に見られたⅤ層直下のⅥ層が不明瞭になり確認できなくなる地点と重なっており、Ⅶ層上面で確認した縄文下層遺構はⅥ層が存在している範囲でのみ確認されている。Ⅵ層は前述のように24列付近から不明瞭となりA区にかけては分布しない。このため南側A区にかけてはⅧ層とした砂層までの中間層は分層が困難なためⅤ層～Ⅶ層と一括している。Ⅷ層以下はシルト層と砂層の互層堆積で礫層に至る。Ⅷ層は噴砂による生成と考えられている砂層を基本として粗砂、シルト質、砂質シルト等で細別している。なおⅧ層以下では遺構・出土遺物はない。このほか、24列以南ではⅣ層の厚みや粘性が増す。Ⅴ層以下の不安定な堆積状況を考え合わせると、中世集落成立以前は湿地だったと推定できる。

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：褐灰色シルト（10YR4/1）　粘性、しまり有り。

Ⅲ層：灰白色細砂（10YR7/1）

Ⅳb' 層：Ⅳb層と同様の土質だが硬化している（中世の道路の影響を受けた可能性あり）。

Ⅳb層：灰オリーブ色粘質シルト（5Y5/2）　粘性、しまり有り。

Ⅳc層：暗灰黄色砂質シルト（2.5Y5/2）　粘性弱い、しまり有り。

Ⅳd層：オリーブ黒色粘質シルト（2.5Y3/2）　粘性、しまり有り。

Ⅳd' 層：オリーブ黒色粘質シルト（2.5Y3/2）　粘性、しまり有り。下部はⅤ層との漸移層。

Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）　粘性、しまり有り。

Ⅵ層：灰黄褐色シルト（10YR6/2）　粘性、しまり有り（縄文前期遺物包含層・黒色帯）。

Ⅶa層：灰黄色粘質シルト（2.5Y6/2）　粘性、しまり有り。鉄分が多い。

Ⅶb層：Ⅶa層と同質のシルトにⅧ層の砂粒が混じる。粘性なし。しまり有り。

Ⅷa' 層：灰オリーブ色砂（5Y6/2）　粘性、しまり有り。噴砂由来と推定する。

Ⅷa層：灰オリーブ色砂（5Y6/2）　粘性、しまりなし。（Ⅷ層は砂層を基本層としてシルト質をⅧa'' 層、粗砂をⅧa''' と細別）。噴砂由来と推定する。

Ⅷb層：オリーブ黄色粘質シルト（5Y6/3）　粘性強い、しまり有り。河川堆積物。

Ⅷc層：灰オリーブ色砂質シルト（5Y5/2）　粘性弱い、しまり有り（褐鉄鉱を多く含む層をⅧc' 層と細別）。河川堆積物。

Ⅷd層：砂礫層（径1～10cm大の円礫）。河床礫。

C　D 区の層序

D 区の基本土層は確認トレンチなどでⅠ層以下Ⅶ層まで大別した。Ⅵ層以下はＥ区に準じる。F 区から当調査区までⅢ・Ⅳ層が分布する。そのため遺構確認はⅢ層から実施したが、遺構覆土と検出面の土質が近似しているためすべての遺構を検出することはできず、最終的にはⅤ層上面で遺構確認を実施した。土層断面でⅢ層上面から掘り込まれた遺構を見ると、Ⅴ層まで 20cm 余りの深さがある。したがって、当調査区のⅤ層において検出した遺構の本来の深さは、検出面から 20cm 程深いものだったと考える。

Ⅰ層：表土。

Ⅱ層：暗オリーブ褐色シルト（2.5Y3/3）。水田床土。

Ⅲ層：黒褐色シルト（2.5Y3/2）。粘性、しまり有り。

Ⅳ層：オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3）。粘性、しまり有り。

Ⅴ層：にぶい黄褐色シルト（10YR5/4）。粘性、しまり有り。

D　E 区の層序

E 区排水路西側の総延長は南北約 65m に及び、局所的に水田土壌化作用による土色・土質の変化が認められ、特に圃場用水路（U 字溝）埋設か所において顕著である。また、E 区排水路西側と北方隣接の F 区は南北に横断する排水路に、南方隣接の D 区との境界は既設の U 字溝によって分断されている。したがって、前者は排水路に分断されるため、確実な連続性を把握し得ない。一方、後者は地区境界において土層の連続性があるものと想定されたが、実際に確認トレンチでの断面精査の結果、D 区との境界付近はU 字溝や灌漑水による水田土壌化作用により広範囲に変色し、不明瞭な部分があり、土層がやや連続性を欠く結果となっている。それでも大局的にはほぼ連続した土壌堆積であることを確認している。E 区では中世面の下に縄文時代前期の面が存在したため、中世面調査終了後に大規模な確認トレンチ掘削と、全面掘削を行っている。中央東西ベルトは縄文面調査時にも継続して観察し、最重要な判断資料となった。

Ⅰ層：オリーブ黒色土（5Y3/2）　表土、現水田耕作土・現代の攪乱を含む。円礫が多量に混じる。

Ⅰ'層：オリーブ黒色土（5Y3/2）　一部に暗オリーブ色土（5Y4/3）混合、近世以降の旧耕作土、現水田床土のため酸化鉄の析出あり。Ⅰ層に比べ黒色味が薄く、径 5mm 程度の炭化物を少量含み、しまりが強い。

Ⅲ層：オリーブ褐色土（2.5Y4/3 ～ 2.5Y4/4）　一部の中世遺構検出面。砂質でしまりが強い。

Ⅲ'層：オリーブ褐色土（2.5Y4/3 ～ 2.5Y4/4）　後世の耕作により攪拌されたⅢ層で、Ⅳ層土が混入する。中世遺構検出面。シルト質でしまりが強い。

Ⅳ層：暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）　後世の耕作により攪拌されたⅢ層土が混入する。しまりがあり、粘性はない。途中で途切れる。

Ⅴａ層：黄褐色土～オリーブ褐色土（2.5Y5/4）　Ⅲ層よりも粘性を帯びる。

Ⅴｃ層：暗灰黄色土　水田土壌化作用による変色したⅤｂ層。酸化鉄が見られる。

Ⅴｄ層：暗オリーブ色土　シルト質でしまり、粘性ともに弱く、酸化鉄が見られる。

Ⅴｅ層：オリーブ褐色土　シルト質でしまり、粘性ともに弱く、大量の酸化鉄が集積する。

Ⅵ層：オリーブ褐色土（2.5Y4/3）　黒色帯。しまりがあり、やや粘性を帯びる。縄文土器がわずかに出土。

Ⅵ'層：水性により変色したⅥ層。しまりがあり、やや粘性を帯びる。

Ⅶa 層：オリーブ褐色シルト（2.5Y4/3） しまりがあり、やや粘性を帯びる。暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）が多く混じる。縄文時代前期土器包含層。

Ⅶb 層：暗灰黄色シルト（2.5Y4/2） しまりがあり、粘性なし。オリーブ褐色土（2.5Y4/3）が部分的に含まれる。Ⅶa 層より砂質味が強い。無遺物の砂質シルト層で、縄文時代前期の遺構掘り込み層。部分的に褐鉄鉱が集積する。

Ⅷ層：灰色砂礫（5Y5/1） 中世の井戸最下部掘り込み層、一部にシルト質土が混じる。湧水しない。上面に褐鉄鉱が厚く集積する。

E F区の層序

F区の土層堆積状況は、北西部から東側ではⅢ・Ⅳ層が厚く堆積し、南側では水田耕作でⅡ層が欠如している。また、中央部から南へ向かってⅣ層の堆積が局所的になり、隣接するE区基本層序と連続する。北側で隣接するG区とは堆積状況の様相が異なり、F区Ⅱ～Ⅳ層と連続する土層はG区では確認できない。中世遺構の確認面はⅤ層上面だが、一部Ⅲ層上面での確認例もある。Ⅱ・Ⅲ層は中世の遺物を、Ⅳ・Ⅴ層は縄文時代の遺物を包含するが散発的な出土である。G区境界とE区境界部周辺でⅢ層以下の土層に水田耕作、洪水等の水性化による土層の変色が観察される。

Ⅰ層：オリーブ褐色土 現代の耕作土。

Ⅰ'層：にぶい黄褐色土 近・現代の耕作土。

Ⅱ層：にぶい黄褐色～灰褐色砂質シルト しまり、粘性弱い。中世の遺物包含層。

Ⅲ層：灰白色砂 しまり・粘性弱い。中世の遺物包含層。一部中世の遺構確認面。

Ⅲ'層：暗灰黄色砂質シルト しまり、粘性弱い。F区北東部で確認。自然礫を含み洪水等の水性化が見るられる。

Ⅲ"層：明灰黄色砂質シルト しまり、粘性弱い。F区南側で確認。水田、流路等の水性化が見られる。

Ⅳ層：黒褐色～暗褐色土 しまり、粘性強い。縄文時代の遺物包含層。

Ⅳ'層：黒褐色土 Ⅳ層に比べ粘性に乏しい。F区北東部で確認。

Ⅴ層：にぶい黄褐色粘質土 しまり、粘性に富む。縄文時代の遺物包含層。

Ⅴ'層：暗灰黄色粘質土 しまり、粘性に富む。F区北東部で確認。

F G区の層序

G区の総延長は南北88mに及び、全体的に層位の乱れはないものの、局所的には主に水田土壌化作用による土色・土質の変化が認められる。また、G区とF区の境界は既設の圃場用水路（U字溝）によって機械的に設定したため、土層の連続性があるものと想定された。しかし、実際に確認トレンチでの断面精査の結果、同地はU字溝により大規模に攪乱され、土層の連続性を明確にできなかった。そのため、G区とF区以南では、同位もしくは同系統とおぼしい土層に枝番号を付けることで一応の統一を図っているが、基本層序が完全には共通しないか所が生じている。

G区は遺構の密集する北端（居住域）が最高位の標高14.7mを測り、この微高地を過ぎると北方のH区水田域へは50cm程一気に降下する。一方南方は遺構が希薄になる中央部を過ぎると徐々に標高を下げ、南端部の道路遺構との間で谷間状の低地（湿地）となる。

Ⅰ層：オリーブ黒色シルト（5Y3/1） 表土、現水田耕作土・現代の攪乱を含む。

Ⅱb1 層：オリーブ黒色シルト（5Y3/2）　近世以降の旧耕作土、現水田床土のため酸化鉄の析出あり。Ⅰ層に比べ黒色味が薄く、径 3mm 程度の炭化物を少量含み、しまりが強い。

Ⅱb2 層：オリーブ黒色シルト（5Y3/2）　中世遺物包含層、一部の遺構検出面。径 5mm 程度の炭化物を多く含み、しまりが強い。

Ⅱb3 層：灰オリーブ色粘質シルト（5Y4/2）　Ⅴb2 層に近似するが、色調がやや暗い。しまりあり、粘性なし。

Ⅴb' 層：暗オリーブ色粘質シルト（5Y4/3）　一部後世の耕作により灰オリーブ土（5Y4/2）が混合し、グライ化のため灰オリーブ色土に変色しているか所がある。径 10mm 程度の炭化物をわずかに含み、しまりがあり、やや粘性を帯びる。

Ⅴb 層:暗オリーブ色粘質シルト　一部に灰オリーブ色土混合、大多数の中世遺構検出面。しまりがあり、やや粘性を帯びる。中央ベルト付近のⅥ層に近づくほど砂質味が強くなる。

Ⅵb 層：暗オリーブ色砂　一部中世遺構検出面、しまりがあり、粘性はない。

Ⅶ層：砂礫層　井戸最下部掘り込み層、一部にシルト質土が混じる。湧水しない。

Ⅷ層：砂礫層　完全なる砂礫層で井戸最下部掘り込み層、湧水しない。

Ⅵb 層はＧ区にのみ分布し、Ⅴ層とは同一平面上に遺構が形成されている。したがって、中世の段階に地表もしくは地表近くにあったことが分かる。Ⅵb 層の成因については、当初旧河道に伴う自然堤防なのではないかと考えていた。しかし調査の進展に伴い、調査区各所で地震に伴う噴砂の痕跡が多数検出され始めた。そしてＡ区やＢ区の縄文トレンチ調査において、Ⅷ層からⅤ層を貫いてかなり大規模な噴砂が上がっていることを確認した。そのような状況を踏まえればⅥb 層は噴砂により形成された可能性が高いと考える。なお、発掘調査中に震度４程度の地震に見舞われたが、この時Ｈ区の遺構面に小規模の噴砂が生じた。もしⅥb 層が噴砂であるとすれば、遺構形成以前に大規模な噴砂を生じるような地震があったと推定できる。

第Ⅳ章　縄文時代の調査

1　概　　要

古渡路遺跡の調査は中世の遺跡ということで着手した。20 年度の着手直後から散発的に縄文時代の土器や石器が出土したが、どの層が本来の包含層なのか把握しかねていた。20 年度調査も終盤に近付いたところで中世の遺構壁面や中世遺構と同一遺構面で縄文土器が出土し始めた。さらにＥ区では層序確認のトレンチにおいて、中世の遺構面から 70cm 余り下から縄文時代前期の土器が出土した。そこで、縄文時代の包含層の枚数と分布を把握するためにトレンチ調査を実施した。（第６図。調査経過は第Ⅰ章を参照。）その結果、縄文時代については前期の遺物包含層であるⅥ～Ⅶ層を対象とする「縄文下層」と、中期以降の遺構・遺物が検出されるⅤ層以上を対象とする「縄文上層」の調査が必要ということが判明した。

縄文下層ではＥ区で前期の土器が集中して出土したほか、Ｃ区のⅦ層でピット 16 基を検出した。

縄文上層ではＡ区で中期後半の埋設土器、Ｃ区で中期初頭の土器集中部、Ａ～Ｃ区で陥穴を検出した。陥穴はいわゆる「Ｔピット」と呼ばれる細長い平面形を呈するもので、中期以降の構築であると考える。遺物は中期初頭～晩期の土器が出土したが、いずれも数個体に満たない程度である。

いずれの時期の遺構・遺物とも少量であるので、長期間滞在したような集落跡ではない。陥穴が検出されていることから狩場であったと推定される。

以下の記載は遺構・遺物ともに下層、上層それぞれについてＡ～Ｃ区、Ｄ～Ｆ区の順に進める。

遺構番号は中世と通して付けた。そこで、中世の遺構と区別するため、縄文時代の遺構には遺構名の頭に「J」を付し、「JSK」などと表記した。

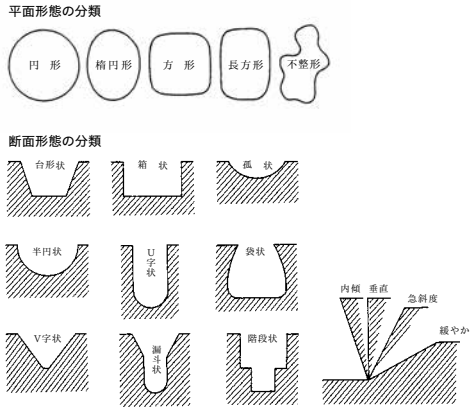
遺物の属性及び遺構の位置や法量、形状については観察表に記した。形状の分類は第７図に示す。

第２表　縄文時代下層　遺構数集計表

	JSD	JP	JSX
Ｃ区		16	
Ｅ区	1	15	8
合計	1	31	8

第３表　縄文時代上層　遺構数集計表

	JSK 陥穴	JSK	JSS	JSH	JSF JSX9747 内	JP JSX9747 内	JP	JSX
Ａ区	3			3				
Ｂ区	4						7	3
Ｃ区	15	2	1		1	23	63	2
Ｆ区								5
合計	22	2	1	3	1	23	70	10



円形	長径が短径の 1.2 倍未満のもの。
楕円形	長径が短径の 1.2 倍以上のもの。
方形	長軸が短径の 1.2 倍未満のもの。
長方形	長軸が短径の 1.2 倍以上のもの。
不整形	凸凹で一定の平面形を持たないもの。

台形状	底部に平坦面を持ち、緩やか～急斜度に立ち上がるもの。
楕円状	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
弧状	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立ち上がるもの。
半円状	底部に平坦面を持たない椀状で、急斜度に立ち上がるもの。
Ｕ字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの。
袋状	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾した後に垂直ないし外傾して立ち上がるもの。
Ｖ字状	点的な底部を持ち、急斜度に立ち上がるもの。
漏斗状	下部がＵ字状、上部がＶ字状の二段構造からなるもの。
階段状	階段状の立ち上がりを持つもの。

第７図　遺構の平面・断面形態の分類［荒川・加藤ほか 1999］

2 遺　　構

A 縄文下層（図版 1 ～ 6・221 ～ 225）

1）C　　区

C 区では縄文下層の遺構として、Ⅶ層において 16 基のピットを検出した。いずれも 25 列以北の微高地で検出した。柱根や柱痕は確認していない。ピットの配置を見ると複数が近接する範囲もあるが全体的に散在している。ピットはⅥ層上面とⅦ層上面で検出したが、覆土の様相から一部のピットについては上層の見落としの可能性もある。遺物は 26B13 グリッドのⅥ層から 1 点、27D24 グリッドのⅦb 層から縄文土器が 2 点出土したが、いずれも小破片で時期は明確ではない。また円礫が散在して出土した。なお遺構個別図は南側から順に掲載している。

JP9814（図版 4）　25B3 グリッドのⅦ層に位置する。長径 28cm、深さ 14cm を測る。覆土は単層で、地山に比べて若干暗色を呈する。

JP9827（図版 4）　東西確認トレンチ南壁、25B16 グリッドのⅥ層上面で検出した。短径 32cm、深さ 32cm を測る。覆土は単層で炭化物を含み若干暗色を呈する。

JP9818・JP9822・JP9823（図版 4・221・222）　25C2・7・12 グリッドのⅦ層で検出した。長径 14 ～ 21cm、深さ 16 ～ 26cm を測り、覆土は JP9818 と JP9822 が単層で類似する。JP9823 は 3 層に分層し、炭化物を含む。

JP9824（図版 4・221・222）　中央トレンチの東壁、25C17 グリッドのⅥ層上面で検出した。長径 27cm、深さ 72cm と深い。覆土は 3 層に分層し、炭化物を含む。

JP9832（図版 4）　中央トレンチの東壁、25C16 グリッドのⅦ層上面で検出した。短径 20cm、深さ 14cm を測る。覆土は 2 層に分層し、Ⅴ層土ブロックを含み暗色を呈す。覆土の様相から上層遺構の可能性もある。

JP9825（図版 4）　25D17 グリッドのⅦ層上面で検出した。長径 62cm、深さ 14cm を測る。覆土は 2 層に分層し、粒子粗い。

JP9815（図版 4・221）　26C11 グリッドのⅦ層上面で検出した。長径 24cm、深さ 24cm を測る。覆土は単層で炭化物を多量含み暗色を呈する。

JP9813（図版 4）　26C21 グリッドのⅦ層上面で検出した。長径 21cm、深さ 7cm を測る。覆土は単層で粒子粗くしまり弱い。覆土の様相から上層遺構の可能性もある。

JP9828（図版 4・221）　中央トレンチの西壁、26C20 グリッドのⅥ層上面で検出した。短径 26cm、深さ 32cm を測る。覆土は 2 層に分層し、炭化物を含み暗色を呈する。

JP9808・JP9809・JP9810（図版 4・221）　26B8 グリッド付近のⅦ層上面で検出した。中世井戸を調査中にトレンチ西壁で JP9810 を確認し、調査範囲を広げ、掘り下げを行なったところ縄文土器 1 点、ピットを新たに 2 基検出した。長径 26 ～ 32cm、深さ 24 ～ 34cm を測る。覆土は地山に比べ若干暗色を呈しいずれも類似する。

JP9817・JP9821（図版 4）　28E3・4 グリッドのⅦ層上面で近接して検出した。径 20 ～ 26cm で深さ 16 ～ 23cm を測る。JP9817 の覆土は単層である。JP9821 は 2 層に分層し、2 層は JP9817 に類似する。

2）E　　区

E 区縄文時代面の調査経過を述べる。発端は、38B15 グリッド内の土層観察ベルトにおいて、縄文土器片 1 点が出土したことによる。検出層位は中世遺構確認面直下のⅤa 層であったため、さらなる低位に縄文時代生活面が存在することが予想された。先の観察ベルト沿いに深掘りトレンチを設定したところ、1 個体分の縄文土器が倒立した状態で出土した。周囲にも縄文時代の遺構・遺物が存在することが想定されたため、出土地周辺の 37B ～ 39B グリッドにわたって約 5cm の深さで順次掘り下げることとした。その結果、5 か所の縄文土器集中地点を検出、ほかにもピット状の遺構が散在することを確認した。各遺構は総じて明確な掘り込みがないため、土器集中遺構と性格不明遺構を JSX、ピット状遺構を JP として扱っている。当初、Ⅷ層上面に分布している褐鉄鉱の範囲と高さを遺構底面と誤認して掘削したため、JSX2753 の一部において遺構検出が不完全なままに掘り下げてしまったか所がある。広範囲に広がる褐鉄鉱は後世のグライ化の影響によるもので、当該期には直接関係しない。しかし、周囲の土色に多大な影響を与え、土層断面を斜状に走る様子は、あたかも遺構掘り込みラインのような印象を受ける。

a　溝（図版 5・224）

JSD2738（図版 5・224）　39B21、39C1 グリッドに位置する。規模は、延長 1.64m、最大幅 0.40m、深さ 0.14m を測る。覆土は単層で、一部に砂が混じる暗灰黄色土とオリーブ褐色土の混合土である。覆土と地山との境は不明瞭であるが、Ⅶa 層よりもややシルト質で砂の混入する範囲を覆土として掘削した。同遺構は、おおむね U 字状の断面形で、底面はおおむね平坦である。重複遺構の新旧関係は JSX2751 を切り、JP2735 に切られる。出土遺物はない。

b　ピ　ッ　ト（図版 4・222・223）

E 区縄文時代面（Ⅶa 層）に位置するピットは全 15 基ある。規模は、長径 16 ～ 52cm、短径 16 ～ 42cm、深さ 15cm 前後である。これらは縄文土器が集中して出土した JSX 付近、もしくは JSX に介在する形で検出されている。いずれも明確な掘り込みがなく、覆土と地山の境界は不明瞭であった。それでも、わずかに炭化物の粒を含む範囲を遺構覆土と認定し、掘削している。この覆土はⅥa 層直上層の黒色帯（Ⅵ層）に由来するもので、炭化物の混入は JSX2753 南側のピットにて顕著である。ピットの配置は不規則に散在する形だが、JSX2753 付近のピット群（JP2742 ～ JP2746、JP2757、JP2758）はやや弧状を描く配置にも見てとれる。仮に、これらピット群が柱穴であるならば、その利用方法として簡易的なテントの類を建てた可能性を指摘できる。短期間の滞在に耐え得るだけの略式住居であったか。

c　性格不明遺構（図版 5・6・223 ～ 225）

JSX2734（図版 5・223）　39B16 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈する。長径 0.58m、短径 0.38m、深さ 0.14m を測る。覆土はしまりが弱く粘質の強い灰オリーブ色シルトで、炭化物の混入はない。当初は遺構と認識していなかったため、上端を若干掘り飛ばしている。出土遺物はない。

JSX2736（図版 5・223）　39C8 グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状を呈する。長径 0.62m、深さ 0.12m を測る。遺構プランや立ち上がりは不明瞭ながらも、Ⅶa 層よりもやや砂質味があ

る範囲を遺構覆土とみなした。覆土は暗灰黄色土とオリーブ褐色土の混合による単層で、Ⅶb 層に類似する。出土遺物はない。

JSX2737（図版 5･224）　39C7･8･12･13 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状を呈する。長径 0.48m、深さ 0.18m を測る。遺構プランや立ち上がりは不明瞭ながらも、Ⅶa 層に近似するが、やや砂質味がある範囲を遺構覆土とみなした。覆土は暗灰黄色シルトとオリーブ褐色シルトの 2 層に分層した。出土遺物はない。

JSX2739（図版 5・224）　39C13 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は台形状を呈する。長径 0.42m、深さ 0.12m を測る。遺構プランや立ち上がりは不明瞭ながらも、Ⅶa 層に類似するが、やや砂質味がある範囲を遺構覆土とみなした。覆土は一部に砂が混入するオリーブ褐色シルトの単層である。断面形は台形状、平面形は円形だが、深さはない。出土遺物はない。

JSX2747（図版 5・223）　39B16 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は弧状でピット状の掘り込みである。長径 0.40m、短径 0.32m、深さ 0.15m を測る。底面はⅦb 層をわずかに掘り込み、褐鉄鉱の凝結面である。遺物はない。

JSX2748（図版 5・6・220・224・225）　38B20・25、39B16・17・21・22 グリッドに位置する。明確な掘り込みは確認できなかったが、土器（1・2）の出土状況から単なる包含層出土遺物扱いとせず、JSX を付番した。長径 3.44m、短径 1.52m、深さ 0.34m を測る。土器は 2 か所のまとまりを持って出土した。先述の深掘りトレンチ内に位置するものを土器集中①、1m 北方に位置するものを同②とした。同遺構は、旧河川由来（Ⅷ層形成）及び後世溝跡（SD2353）の水性の影響による土色の変化により、色調では明確な掘り込みラインを特定できなかった。そこでわずかな土質の違いを判断基準に定め、遺物包含層であるⅦa 層中から掘り込まれたとし、無遺物層のⅦb 層上面を底面とみなした。覆土は単層、全体に強い粘性を帯びたオリーブ～暗オリーブ色シルトであるが、周囲（Ⅶa 層）に比べ若干砂質味が強い部分を遺構覆土として掘削した。ただし、覆土とⅥb 層の違いが不明瞭だったため、平面形の認識は困難を極めた。同遺構は、中央部にくびれを持った南北に広がる不整な平面形と、断面形を呈する。遺構北側は底面が凸凹し、南側は擂鉢状でやや深い。

縄文遺構・遺物出土地周辺は北東から南西へ向かってなだらかに下降していくが、これは遺跡全体の立地と一致する。土器集中①はⅧ層が落ち込み始めた緩斜面に、倒立した状態で出土した。口縁付近は、Ⅷ層上面に厚く現出する褐鉄鉱と一体化し、土もろとも硬化していた。土器は、出土位置上の南方から倒壊したと思われ、内部に転落した底部は天を向いている。しかし、ピット状に掘り込んで埋設したようには見受けられず、また同地に投棄・放置されたものなのかどうかも判断に窮する。ただし、1 個体分が散逸せずに一括して出土したことから、付近の河川氾濫などにより運ばれてきた可能性は低い。一方の土器集中②は、1 個体分ながらも小片に砕け、やや散在する状況で出土した。胴部破片はやや大破片で出土したが、①同様に褐鉄鉱で覆われて硬化していたため、取り上げ時に難儀した。こちらも埋設の痕跡は見受けられなかった。両者の出土標高はほぼ同一の 13.6 ～ 13.7m 前後を測るが、①の方がより斜面であるために 10cm ほど低位である。

JSX2751（図版 5・6・224）　38C5、38B25、39B21・22、39C1・2・6・7・11・12 グリッドに位置する。長径 5.60m、短径 4.64m、深さ 0.10m を測る。明確な遺構プランは確認できなかったが、周辺の覆土直上層（Ⅶa 層）から縄文土器（5・6）が多数出土した状況を考慮し、明確な掘り込みのない遺構として JSX を付番した。当初、付番に至るまでに数度の精査を行ったが、遺構を検出できず、眼前

の褐鉄鉱層が走る土層断面と向き合う日々が続いた。とにかく平面形での遺構プランが不明瞭で線引きができず、触診しながらのまさに手探り状態であった。それでも、掘り下がるにつれて堆積土に土質の変化が表れてきたのを確認した。覆土は周囲のⅦａ層と同色で大差ないものの、若干粘質を帯びたブロック状のシルト質堆積土の広がる範囲を覆土として掘削した。シルト質土のみを掘削し、Ⅷ層表面の砂質が強くなった地点を底面としたために、遺構の底面は凹凸が著しく、不整な平面形を呈する。遺構南西寄りに最深部があり、周囲から土器が数点と石製品（65）が出土した。同遺構からは、JSX2748 や JSX2753 のようなまとまった形での土器の出土はなく、破片が散発的に出土する状況であった。南東に隣接する JSX2753 を、言わば土器の供給源とするならば、なだらかに傾斜し、わずかなくぼみを持つ JSX2751 へ破片が流れ込んだとする見方も可能である。これは、JSX2753 付近が基盤層（Ⅷ層）において最高度であり、近接の JSX2751 覆土直上層（Ⅶ層 a）から縄文土器が多数出土した状況とも矛盾しない。

JSX2753（図版 5・6・225）　38C9・10・14・15・20、39C11 グリッドに位置する。長径現存長 5.20m、短径 3.20m、深さ 0.16m を測る。明確な遺構プランは確認できなかったが、遺構上位のⅥ層（黒色帯）及び覆土直上層（Ⅶａ層）から縄文土器（3・4）が出土した状況を考慮し、明確な掘り込みのない遺構として JSX を付番した。同遺構は、縄文生活面調査の発端となった土器を発見した場所であり、当初は土坑・竪穴などの遺構が単独で存在しているものと見ていた。しかし、数度の精査の後も明確な遺構プランは確認できず、同地を単に包含層とするか、遺構とするかで今後の調査体制にも影響を与えるため、慎重な姿勢で臨んだ。やがて周囲の調査が進むにつれ、覆土やその堆積状況が近接の SX でも同様の不明瞭な様相を呈すること、各地縄文トレンチの調査結果からは地下基盤層（Ⅷ層）において、同地が最高度に立地することなどが判明してきた。これらを考慮し、同遺構を周囲に散在するピット状遺構と絡めることで、一種のキャンプサイト的な性格を持つ場として位置付けた。

覆土は単層で、周囲のⅦａ層と同色の、しまりのあるオリーブ褐色シルトがブロック状に堆積している。一部に砂質土がわずかに混入するために、粘性が若干弱く感じられた。このシルト質土の範囲を遺構覆土として掘削し、Ⅷ層（無遺物層）表層の砂が出た面を底面とした。このため、断面形、平面形ともに不整形を呈する。遺構中央北寄りにやや深いくぼみがあり、土器が出土した。

土器は、遺構全体で 3 か所のまとまりを持って出土した。遺構中央くぼ地出土の一群を土器集中①、これより東方 0.5m 地点出土の一群を土器集中②、深掘りトレンチ断面内出土の一群を土器集中③とした。①は、すべて内側を天に向けて出土し、おおよそ半個体分を量る。②は、口を北に向け横位に潰れた格好で出土し、ほぼ 1 個体分を量る。覆土直上層のⅥａ層（黒色帯）からは、遺構外扱いとした縄文土器が数点出土した。③は、底部及周辺の破片で、やや散在しながらも底を天に向けた格好で出土した。ただし、正位に埋設した痕跡はない。3 か所とも、ほぼ遺構底面からの出土であるが、その標高は①、③、②の順に低くなる。

B　縄文上層（図版 7 ～ 24・226 ～ 241）

1）A ～ C 区

a　土器集中部（図版 12・13・226 ～ 228）

JSX9747（図版 12・13・226 ～ 228）　25 列付近の微高地から南側へ約 20m、50cm ほど標高の低い 22C・D グリッドに位置する。Ⅳｃ層で遺構の截ち割り調査を行なっていたところ、トレンチ内で縄文土器片を複数検出した。出土状況を捉えるため、掘削を進めると土器が集中していることが判明した。遺

構に伴う可能性があり、新たに土層観察用のベルトを設定し、層位ごとに遺構検出作業を繰り返しⅤ層上面まで下げたが掘り込みは検出できなかった。堆積土はⅣｃ～Ⅳｄ層とⅤ層の間に５～10cm ほどの灰黄褐色土層があり、Ⅳｄ層とⅤ層の漸移層か遺構覆土かどうか判断できなかった。土器集中部の西側は東西ベルトセクションでは倒木痕があるため攪乱を受けている様子がうかがえるが、平面的には認識しづらい状況であった。

遺物はすべて土器でⅣｄ層中からⅤ層上面にかけて５～7m の範囲に分布しており、ベルトの交点付近に最も集中している。図示した土器（8a～c）は同一個体と思われ、底部から胴部にかけて潰れた状況で検出されたか所があり、土器底部の直下で土壌試料を採取している（第Ⅵ章 1）。またトレンチの断面でピットを検出したことから遺物の出土範囲を超えて広く検出を行い、ピット 23 基と焼土を伴う掘り込みを検出した。ピットの長径は 18 ～ 45cm、深さ 12 ～ 58cm で 30cm 前後が多くこのうち JP9748・JP9762 は傾斜している。JSF9786 は長径 0.80m 弱の楕円形で底面は起伏がある。覆土内には焼土ブロックが有り、周囲にも散らばっていた。検出したピットの配置はすべて規則的ではないが楕円形を呈するように位置する。硬化面や炉跡と考えられる掘り込みの壁面が強く被熱した様子はうかがえないが、ピットの配列と焼土の存在を含めて考えると住居跡の可能性が高い。出土遺物から縄文中期初頭頃と考えられる。

b　ピット群（図版 14・15・226・229・230）

縄文上層のピットはＡ～Ｃ区にかけてⅤ層上面で 70 基検出した。Ａ～Ｂ区には７基が散在し、Ｃ区 25・26B ～ D グリッドの微高地縁辺には 58 基が集中する。25B・C グリッド以北は中央ベルト基本層序の観察からⅤ層上面まで攪乱・削平をうけていたことが分かる。中世の遺構を検出する際、地山より若干暗色を呈し、炭化物を含むピット状プランを複数か所で検出していた。ピットの規模は長径 16 ～ 64cm とばらつきがあるが、27cm 前後が多い。深さは 14 ～ 56cm の幅があるが、平均すると 25cm 前後である。平面形は円形が多く、断面形はＵ字状を呈するものがほとんどである。覆土は暗灰黄色からオリーブ褐色を呈する砂質シルトで炭化物を含むものが多い。またⅣｃ層、Ⅳｄ相当層のブロックを含むピットがあることから、少なくともⅤ層よりも上位から掘り込まれていたと推測する。

遺物は 25C23・24 グリッドに位置する JP9787 の底面から縄文中期中葉の土器片１点が出土した。北側へ 10m ほど離れた JSX9829 で出土した土器に近い時期と考えられる。

25・26C・D グリッドに位置するピット群は、その分布状況から４個の楕円形の配列を抽出することができた。それぞれの直径は約 5m を測る。25C4・5 グリッドに位置する JP9949・9724 と円形の配置が見られるピット群、25C18 グリッドに位置する JP9796・9943 の列、26C7 グリッドに位置する JP9729・9805 の列、また 26D5 グリッドに位置する JP9798・9799 の列の４か所である。ピットの周辺で焼土や遺物は検出していないが、22C・D グリッドに位置する住居跡の可能性を指摘した JSX9749 のピット配列と類似することから、ピットの集中する範囲には住居跡の可能性として推定破線を入れて図示した（図版 14）。

c　集　　石（図版 16・231）

JSS9769（図版 16・231）　40cm 幅の東西トレンチ掘削の際、礫 10 数点を一定の高さで検出した。24D10・15、25D6・11 グリッドに位置し、ピット集中範囲から約 10m 南の斜面に当たる。Ⅳｄ層～Ⅴ層上面にかけて礫 33 点、石錘（38）が出土した。出土状況は密に重なるのではなくやや散在している。

礫は5～7cmと拳大より小さい円礫や扁平な礫が多い。掘り込みや焼土、炭化物は検出していない。

d　埋設土器（図版16・231・232）

A区の10・11Cグリッドで3基の埋設土器を検出した。標高13.0mの等高線沿いの、北から南～東方向へごく微かに傾斜する地点に位置する。3基とも現農道水路による攪乱を受けており、埋設された土器は欠損している。明確な掘形は確認できないが、3基の土器の残存部が原形を保っていること、土器内部の土質が基本層と異なることから埋設土器とした。JSH8587とJSH8625は近接して、JSH8588はほかの2基から東方向約9.5mに位置する。縄文時代中期中葉後半に帰属する土器が埋設されている。

JSH8587（図版16・232）　10C10グリッドに位置する。Ⅳd'層で確認しⅤ層で検出した。明確な掘形は確認できなかった。埋設された土器（12a・b）はⅣd'層を掘り込みⅤ層上面に達している。土器上端から下端まで10cmを測る。覆土は土器内部を2層に分層した。1層はⅣd'層主体で土器細片が多く含まれる。土器は縄文時代中期中葉後半の大木8b式期に相当し、口縁部を欠いた胴部を逆位に埋設している。

JSH8588（図版16・232）　11C19・24グリッドに位置する。Ⅴ層で確認し検出した。明確な掘形は確認できなかったが、部分的に土器外側で基本層と異なる土層を確認している。埋設された土器（11）はⅤ層上面を掘り込んでいる。土器上端から下端まで12cmを測る。土器内部を3層に、土器外側の部分を1層に分層した。土器内・外部はオリーブ褐色シルトが堆積する。土器は縄文時代中期中葉後半の大木8b式期に相当し、胴部を欠いた口縁部を逆位に埋設している。

JSH8625（図版16・232）　10C5グリッドに位置する。Ⅳd'層で確認しⅤ層で検出した。明確な掘形は確認できなかったが、部分的に土器外側で基本層と異なる土層を確認している。埋設された土器（10）はⅣd'層を掘り込み、Ⅴ層上面に達している。土器上端から下端まで9cmを測る。覆土は土器内・外側を2層に分層した。1層中に土器片が少量含まれる。2層はⅤ層主体である。土器は縄文時代中期中葉後半の大木8b式期に相当し、口縁部を欠いた胴部を逆位に埋設している。

e　陥　　穴（図版17～22・226・233～239）

本遺跡は付近の丘陵裾部から1km以上離れており、標高は12.0～13.0mを測る沖積地上に位置する。同様の遺跡はこれまで台地上あるいは丘陵部、谷部での検出例が多く報告されているが、本遺跡では沖積地で検出された。陥穴は細長い平面形状で、A区～C区にかけて22基検出された。Ⅳc層上面で中世遺構を検出中に23・24C・Dグリッドで2基が確認された。この層で検出を進めたが覆土と地山の見極めが困難なため、最終的にはⅤ層上面まで下げて検出している。陥穴の規模は長径1.78～3.90m、幅0.24～0.62m、深さは検出層位により差があり0.49～1.11mを測る。個々の規模を見ると長径2m前後が13基と多く、3m前後が6基、4m弱を測る長いものが3基ある。底面はほぼ平坦で底面施設は確認していない。また開口部より底径が長いオーバーハング傾向のものが多く見られる。底面付近は砂層であるため一部については壁の崩落の可能性もある。覆土はレンズ状堆積が多く、上半部はⅣc層由来の落ち込み、下部は黒色土層と砂混じりのシルトが多い。なお、陥穴の形状は模式図（第7図）には該当しないが観察表では平面形を溝状、断面形には楔形状も使用している。

陥穴はほかの遺構との切り合いはないが、Ⅳc層を掘り込むものが複数基確認されている。22Cグリッドで検出したⅣd層が堆積するJSX9747が縄文中期初頭頃の所産と考えられること、またⅣc層中から中期中葉～後葉の土器片が出土したことから少なくとも縄文中期後葉以降に構築された可能性が高い。

陥穴の配置は、微地形ではあるが等高線上に並ぶのが多い。明確に列をなすものと、列として同一かどうか判断がつかないものもあるが、南側のＡ列からＧ列に分けた。図版は南側から順に掲載している。

Ａ列（JSK6083・6084・6075）は調査区外にも広がっている可能性があるため、配列の規則性を見出すことは困難であるが、近接しているためグループと考えた。JSK6083 と JSK6075 は約 3m の間隔で近接し、JSK6084 は 10m ほど東に位置し、配置は弧状を描く。遺構はⅣｄ層で検出され、3 基とも長軸は等高線におおむね直交している。Ｂ列からは 60m ほど離れている。

Ｂ列（JSK8602・8626）は長軸方向に違いがあるが、近接し規模が似ていることから同列と考えた。Ｃ列とは 65m ほど離れている。

Ｃ列（JSK8655・8656）は 2m と近接し、開口部の長さに約 1m の規模差があり、同列ではない可能性もある。

Ｄ列（JSK9701・9702・9703）は規模が類似し等高線を横切るようにやや弧状を描く。

Ｅ列（JSK9744・9740・9706）は 20m ほどの間隔がある。JSK9740 は 2 基との規模差があり、同列ではない可能性がある。

Ｆ列（JSK9700・9741・9704・9705・9708・9739・9709）はほぼ等高線上に並んでややＳ字状を描き、6 ～ 8m 間隔の配置である。

Ｇ列（JSK9738･9820）は間隔が 30m あり、同列かどうか不明である。JSK9820 は縄文下層調査の際、Ⅶ層で検出されたが、規模・形状から判断して同様の時期に構築されたと考えられる。

調査では想定していなかった陥穴が多数検出された。3 基の陥穴覆土と周辺の基本土層の土壌分析の結果、遺跡の周辺環境は湿地や水域の存在が推定され、周辺には樹木のハンノキ属やクルミ属、トチノキ属、草本類のササ類、イネ科、ヨモギ属、水生植物のガマ属、オモダカ属などが生育していた可能性が報告されている（第Ⅵ章 1・2）。

ｆ　土　　坑（図版 23・240）

JSK9707（図版 23・240）　23C24 グリッド付近に位置しⅣｃ層で検出された。陥穴と想定しトレンチを設定したが、浅い掘り込みであった。平面形はやや楕円形で断面形は弧状を呈する。長径 2.20m、短径 0.96m、深さ 0.22m。覆土は 2 層に分けられ、1 層は陥穴の覆土と類似していた。2 層は粒子の緻密な浅黄色土で、どの層からの由来か不明。遺物は出土していない。

JSK9731（図版 23･240）　22C13 グリッド付近に位置し、JSX9747 を掘り下げる際Ⅳｄ層中で検出した。規模と形状から陥穴と想定し、トレンチを設定したが、浅く、底面も一定ではない。平面形は長楕円形で長径は 2.46m、短径 0.56m、深いところで 0.45m を測る。覆土は 2 層に分層した。1 層は黄褐色を呈し、2 層は暗褐色土である。縄文土器が 2 点出土したが、いずれも小片で図示していない。JP9764 を切っており JSX9747（土器集中部）の混入の可能性がある。

ｇ　性格不明遺構（図版 16・22・23・231・239）

JSX9829（図版 16・231）　25C グリッド付近のピット群から西へ 3m、25B16 グリッドに位置する。Ⅴ層を面的に掘り下げる際、縄文土器小片が出土した。当初、包含層中からの出土遺物と捉えていたが、この付近のみ出土していた。遺構に伴う可能性があり、最終的に残りのよいか所で土層観察用ベルトを設定し、遺構・遺物の検出作業を行ったが、平面的なプランは確認できず基本層Ⅶ層上面に達した。遺構の規

模・形状はセクションベルト A–A' で立ち上がりを確認したのみで、平面形は不明であるが、土器の出土範囲から推定で長径 2.4m、短径 2m 前後、深さ約 26cm の浅いくぼみだが、本来はⅤ層よりも上位から掘り込まれていたと推定する。覆土は単層で地山に似たにぶい黄褐色を呈し、Ⅴ層土ブロックが混入する。遺物は縄文土器小片が 40 点出土し（9a ～ d）を図示した。東側へ 10m ほど離れた JP9787 から出土した土器と時期が近いことからピット群との関連が考えられる。

JSX8447（図版 23・239）　17A13・14・18・19 に位置する。Ⅳc 層掘削中に土器片がまとまって出土したことから遺構の可能性を考え、再精査した。このため、形状復元は調査壁面の土層堆積状況と平面的な遺物分布に頼らざるを得ず、図示した平面形はおそらく本来の形状とは異なる。

遺構の一部が調査区域外に張り出すが、検出部の大きさは長径 2.80m、短径 1.50m、深さ 0.24m である。断面形は弧状を呈す。Ⅳb' 層から掘り込まれ、なだらかな落ち込みの一部がⅠ' 層によって壊されている。覆土は、Ⅳb 層土とⅣc 層土が攪拌を受けたような濁った土で、炭化物が若干散っていることと、灰白色土を少量含んでいることが特徴だが、Ⅳc 層との顕著な差異は認められず、落ち込みの可能性もある。したがって、遺構の範囲も不明確である。遺物は摩滅した微細な土器片が多数出土し、その内残りのよい土器片（13a ～ f）の特徴から加曽利 B2 式と推定され、遺構の年代は後期中葉と考える。P8603・P8604 に切られる。

JSX8549（図版 22・239）　16C5、17C1・2・6・7 グリッドに位置する。長径 3.38m、短径 2.28m、深さ 0.40m である。Ⅳc 層において、やや灰色の色調の範囲を検出し、精査した。同範囲においては径 1cm 未満の炭化木片が多数散っていた。このため竪穴住居の可能性を念頭に調査を進めたが、掘形が不整形であり、炉などの痕跡も検出できなかったことから竪穴住居の可能性は否定された。出土遺物はない。結果として風倒木痕と考える。

JSX8561（図版 22・239）　14C3・4 グリッドに位置する。長径 0.52m、短径 0.40m、深さ 0.32m である。Ⅳd 層中で検出した。覆度は 4 層に分層し、2 層に火山灰のようなにぶい橙色土が混じる。

2）Ｄ ～ Ｆ 区

a　性格不明遺構（図版 23・24・240・241）

JSX1020（図版 24・241）　50C2 ～ 4・7 ～ 9 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。Ⅲ～Ⅴ層が逆位に堆積する倒木痕である。底面から石鏃（66）が 1 点出土したので記載した。石鏃は底面直上層の 4 層から出土した。4 層はⅣ層土である。

JSX1894（図版 24・241）　49D10・15・20、50D6・7・11・16 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で土器を確認した。Ⅴ層に比べやや暗色を呈する範囲に縄文土器片が含まれていた。重複はない。範囲内・外に木根が多数見られる。全体的に明確な掘り込みは確認できなかったが、土器片が含まれる範囲を主体に調査した。平面形は不整形で、長軸 4.10m、短軸 2.85m を測る。断面形は弧状で、底面全体に長軸 5 ～ 40cm、深さが 10 ～ 28cm のくぼみが点在する。くぼみに堆積するにぶい黄褐色土を 1 層とした。1 層はⅤ層に類似し、やや暗色を呈する。Ⅳ・Ⅴ層粒が多量含まれる。土器は胴部小片（33）が散在して 26 点出土した。縄文時代後期前葉の時期と考えられる。

JSX1929（図版 23・240・241）　46B17・18 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で土器片を確認した。Ⅴ層に比べやや暗色を呈する範囲に縄文土器片が含まれていた。中世の時期のピットや溝と混在する。重複はない。範囲内・外に木根が多数見られる。全体的に明確な掘り込みは確認できなかったが、土器片が含ま

れる範囲を主体に調査した。平面形は不整形で、長軸 1.48m、短軸 0.84m を測る。断面形は不整形で、長軸 10 ～ 25cm、深さ 2 ～ 8cm のくぼみが連続する。くぼみに堆積する黄褐色シルトを 1 層とした。1 層はⅤ層に類似するが、Ⅴ層に比べやや暗色を呈し、Ⅳ層が若干混合する。土器（34）は胴部・底部片が散在して 8 点出土した。

JSX1930（図版 23・240）　47C4・9 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で縄文土器（35）を確認した。Ⅴ層に比べやや暗色を呈する範囲に縄文土器片が含まれていた。中世の時期のピットや土坑と混在する。重複はない。明確な掘り込みは確認できなかったが、土器片が含まれる範囲を主体に調査した。平面形は不整形で、長軸 1.72m、短軸 0.86m を測る。断面形は不整形で、長軸 40cm 前後、深さが 2 ～ 8cm 前後のくぼみが連続する。範囲内・外に木根が多数見られる。くぼみに堆積するオリーブ褐色土を 1 層とした。1 層はⅤ層に類似するが、Ⅴ層に比べやや暗色を呈し、Ⅲ・Ⅳ層が混合する。土器は胴部片が散在して 9 点出土した。

JSX1931（図版 24・241）　48B4・9 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で粒状の土器細片で確認した。土器はⅤ層に比べやや暗色を呈する範囲に含まれていた。周辺を一段掘り下げたところ、縄文土器片が集中して出土した。土器が含まれる範囲は、平面形が不整形を呈し、長軸 2.20m、短軸 1.24m を測る。断面形は弧状で、底面は全体に凹凸がある。覆土は単層で、Ⅴ層を主体としⅣ層が少量混合する。土器（32a ～ i）は、口縁部、胴部、底部の小片が径 80cm 程の範囲に集中して出土した。現地調査では、埋設土器等の可能性も考慮し精査したが、土器に伴う掘り込みは検出できなかった。土器は縄文時代中期末葉の時期と考える。

3　遺　　物

A　概　　要

縄文時代の遺物は、調査区全体に散漫に分布していたが、その中でも A ～ C 区の密度が高い。土器の時期幅は前期末葉～晩期である。前期末葉の土器は E 区のⅥ層以下から集中して出土した。これ以外は中期以降で、Ⅴ層以上から出土した。分布状況から A ～ C 区は中期初頭～後期中葉、D ～ G 区は中期末葉～晩期の遺物分布域である可能性が高い。石器も少数出土したが、出土地点が所属時期を反映しているものと推定している。石鏃の比率が高いのは当遺跡が狩場だったことを反映しているかもしれない。

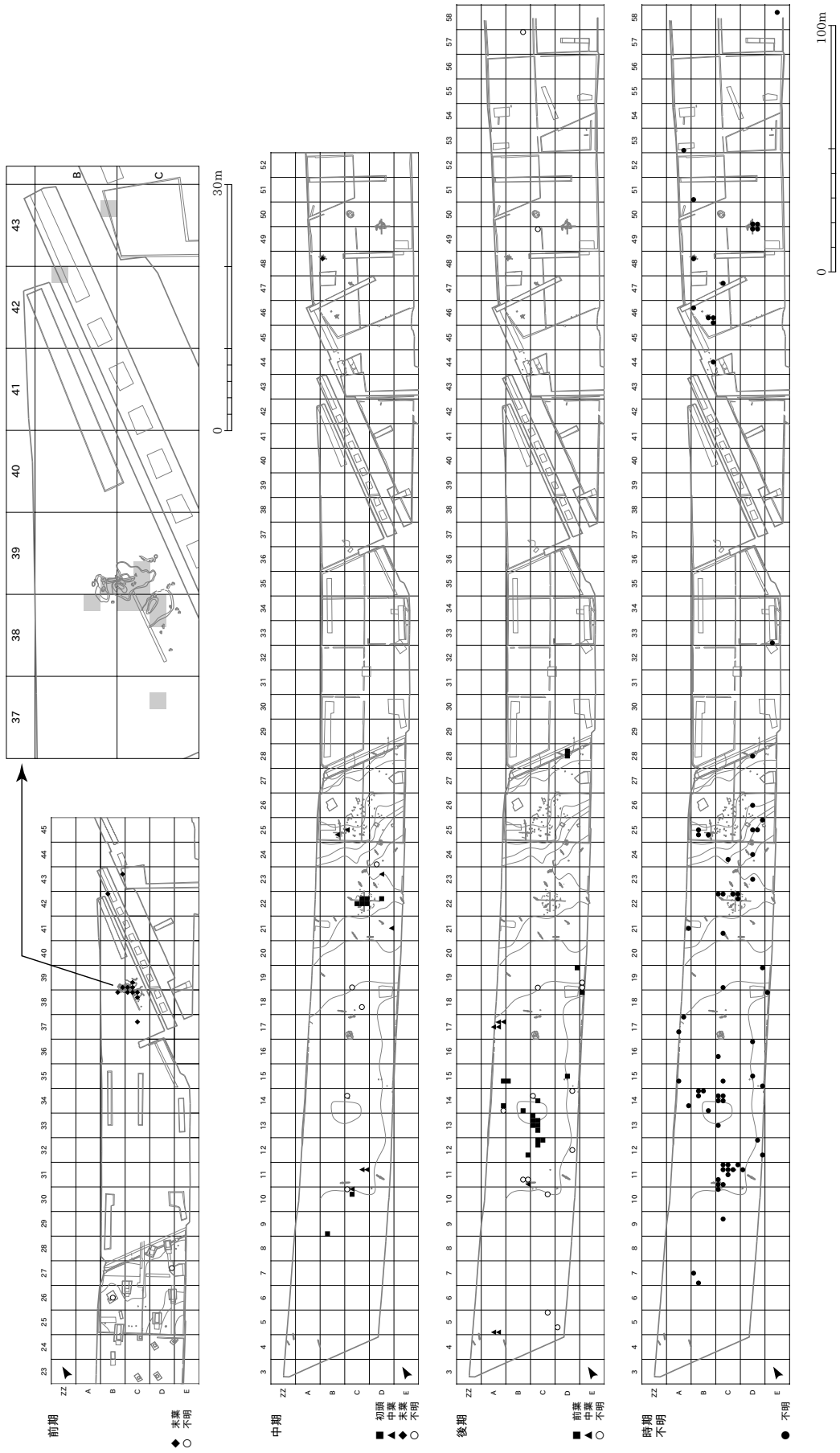
記載は、土器、石器の順に進める。番号は種別を超えて通し番号とした。

B　縄 文 土 器（図版 191 ～ 194・347 ～ 350）

1）概　　要

古渡路遺跡では縄文時代前期～晩期の土器が出土した（第 8 図）。点数は少なく、図示したもの以外は細片である。前期土器は E 区から集中して出土した。前期末葉の大木 6 式の一括資料である。中期土器は A ～ F 区で出土した。初頭～末葉の幅があるが、各期とも 1 ～数個体しか認められない。中期初頭の土器は住居跡と推定される JSX9747 から出土した。中期中葉土器には A 区で検出された埋設土器 3 基がある。後期土器は A・B 区で出土した。晩期土器は G 区から 1 点が出土したに過ぎない。

以下の各説は、出土層位がⅥ層以下の「縄文下層」と、同じくⅤ層以上の「縄文上層」の順に記載する。ここでは特記事項を記し、出土層位等の詳細は観察表に記す。



第８図　縄文土器分布図

2）各　　説

a　下　　層（図版 191・347）

JSX2748　1・2 は細長い体部の上半がわずかに膨らみ、短い口縁部が外側に開く。1 は JSX2748 を中心に出土した土器で、約 4m 離れた JSX2751 内出土の小片とも接合する。2 は口縁端部に指頭圧痕が連続する。指頭圧痕が施された後、丁寧なナデによって仕上げられている。

JSX2751　5 は口縁部に強いナデによって逆三角形のくぼみが作り出されている。くぼみは正面のほか、左へ 90 度振った位置に認められる。右側にも弱いくぼみがあるが、正面や左のもののように逆三角形を作り出している意図は感じられない。正面の対面に当たる口縁部は破損しているため、くぼみの有無は不明である。体部には LR 縄文が施される。器面が柔らかいうちに施文されたのか、縄が深く器面に食い込み、条と条の間の間隔が広い。口縁端部から 4cm 下がったところに 1 対の補修孔がある。6 の口縁は 5 に比べると粗雑なナデで仕上げられている。

JSX2753　3 は口縁端部がごくわずかに残存する。胎土に微量の繊維が混入する。4 は 38C15 グリッドの JSX2753 の 1 層及び直上層から出土した。金魚鉢形の深鉢で口縁部が小波状を呈する。波状は、口縁を 13 等分する三角形の小突起の連続からなる。体部に RL 縄文が施された後、口縁部に丁寧なナデが施されている。大きさは一見すると 5 などとさほど変わりはないが、手にとってみるとほかよりも重量感のある土器である。

遺構外　7a ～ c は縄文下層 5 トレンチの自然流路内から出土した。胎土に角礫や繊維を多く含む。

b　上層　A ～ C 区（図版 192・193・348・349）

JSX9747　8a ～ c は口縁部に軌軸文風の文様や半截竹管の横線が施文される北陸系の深鉢である。口縁部から垂下する半截竹管文の直線は、体部上半まで伸びる。新保式の新段階、新崎式の古段階に相当し、中期初頭最新段階に位置付けられる。

JSX9829　9a ～ d は王冠型土器で、中期中葉に位置付けられる。9a の口縁部波頂部左には王冠型土器の特徴であるえぐりがある。

JSH8625　10 は体部に縄文 LR と RL が回転方向を変えながら施文されている。

JSH8588　11 は口径約 30cm で寸胴の深鉢である。このような器形は新潟県の馬高式には組成しない。したがって、東北地方の大木 8b 式に相当する。

JSH8587　12 は太鼓状の体部に縄文 LR、丸棒状工具による沈線が施文される。中期中葉に位置付けられるが、馬高式には 12 のような器壁が約 9mm という薄手の土器はないことから、大木 8b 式に相当する。

JSX8447　13a ～ f は粗製深鉢で、器面の荒れが著しいが体部には縄文 LR の施文を認めることができる。13a と 13b の口縁形態は内湾気味と外反気味で不一致であるが、胎土や器面の様子から同一個体とした。器壁が約 7mm と薄いこと、内面がミガキに近いナデで仕上げられていること、比較的細かい縄文が施文されること、色調が暗いことなどから後期中葉以降に位置付けられよう。

遺構外　14・15 は中期の土器である。14a・b は胎土に 3mm 程度の円・角礫を多く含む。器面の荒れが著しい。15 は中期中葉の馬高式土器。

16 ～ 26 は後期前葉の土器である。16 ～ 20 は三十稲場式、21 ～ 26 は後続する南三十稲場式の土器及びそれらに並行する土器である。胎土に多量の砂礫を含むのが特徴である。金雲母や角閃石を含む土器

も散見される。16・17 は体部に細かな爪形文が施文されるので、草創期に属する可能性も考えた。しかし、出土層位がⅤ層であることや本遺跡ではほかにも三十稲場式土器が出土していることから、16・17 は三十稲場式に位置付けておく。16 の隆帯上の刺突は押し引きによる。隆帯下面にも押し付けるような刺突が連続する。隆帯より上の無文帯の幅が一定ではないので、波状口縁の波状部あるいは突起付近の破片なのかもしれない。なお、口縁部無文帯の幅が通常の三十稲場式と比べて狭い点は異質である。体部の刺突が横方向に進められている点は、三十稲場式の中でも新しい段階に見られる手法である。17 の刺突は 16 の工具よりも太い物が用いられている。18 は丸棒状工具による刺突が密に加えられている。工具先端は鋭利ではなく、丸みを帯びている。施文手法から三十稲場式に並行すると考える。19・20 は三十稲場式新段階の深鉢である。19 は口縁部内外面に炭化物が付着する。

21a ～ d は注口土器である。口縁部・体部は縄文施文後、沈線で文様が描かれている。21c は注口先端部を欠く。粘土の剥落痕から推定すると、注口部から Y 字状を呈するように口縁部に接続していたようである。23・24 は橋状把手が退化し、隆帯に刺突を伴わない。南三十稲場式に伴う、最新段階の三十稲場式である。25 は南三十稲場式併行の土器である。口縁端部には連続して丸棒状工具が斜めに押し付けられている。体部上半は縄文を地文として沈線で垂下線が施文され、下半はミガキが施されている。底部は一部網代痕が残る。底面は荒れており、胎土に含まれていた礫の脱落が多い。

29・31 は後期中葉の加曾利 B2 式の土器である。29 は口縁に突起を持つ深鉢である。29b の拓本右上には、突起基部と見られるわずかな盛り上がりがある。

c　上層　D ～ G 区（図版 194・350）

JSX1931　32 は磨消縄文で文様を構成するが、32a では磨消部分の器面の方が縄文部より高い部分もある。このことから、あらかじめ文様を割り付けておき、縄文を施文していたことが分かる。縄文が横走するのが特徴である。沈線は幅広で非常に浅い。

JSX1894　33 は胎土に金雲母を多く含む。金雲母は本遺跡の三十稲場式土器の胎土に含まれるので、後期前葉の可能性がある。

JSX1929　34 は体部と底部の接合部分に指頭圧痕が連続する。

JSX1930　35 は底部と体部の接合部分で破損している。

遺構外　36 は体～底部で器面の荒れが顕著である。37 は晩期の甕である。

C　石　　器（図版 195・196・350・351）

1）概　　要

縄文時代の石器は 44 点出土した。出土層位はⅡ～Ⅶa 層である。土器の出土層位から見ると、Ⅵ～Ⅶa 層が前期末葉、Ⅳ層が中期以降を基本とするので、石器のおよその所属時期を出土層位から推定することができる。ただ、最も多く遺物が出土したⅣ層は中期～後期の幅があり、なおかつ中世の遺構覆土から出土したために、本来の所属層位が不明の石器もある。したがって、個々の石器について詳細な時期決定をすることは困難である。ただし、土器の分布状況から A ～ C 区は中期初頭～後期中葉、D ～ G 区は中期末葉～晩期の遺物分布域である可能性が高いことから、出土地点がおよその時期を反映していると推定できる。なお、E 区のⅥ層以下については前期末葉に相当する。

第４表　縄文時代石器石材―器種組成（全層位・遺構内外合計点数）

	石鏃	箆状石器	擦切具	二次加工ある剥片	微細剥離痕ある剥片	両極石器	剥片	石錘	磨製石斧	打製石斧未製品？	磨石類	石製品	合計
黒曜石	1												1
鉄石英	2				1		1						4
玉　髄	3						2						5
玉髄化した珪質頁岩	3												3
珪質頁岩	2			1		1							4
頁　岩					1								1
珪質凝灰岩					1		1						2
凝灰岩		1					1		1			1	4
砂　岩			1					1			3		5
粘板岩										1			1
流紋岩	2			1	2		3						8
ホルンフェルス	1												1
蛇紋岩									4				4
花崗斑岩？											1		1
合　計	14	1	1	2	5	1	8	1	5	1	4	1	44

2）分　　類

石器の分類を以下に記す。点数等は第４表を参照のこと。

石鏃　「矢の先端につける石製のやじり」[鈴木 1991]。14 点出土し、平面形で３大別できる。凸基有茎(39･40･67)、平基有茎(68)、凹基無茎。凹基無茎は両側縁の形状の違いから３細分できる。弧状を呈するもの(41 ～ 43・70)、直線的に開くもの（44・46）、半ばで屈曲して開く、いわゆる五角形鏃（45・66・69）。石材は玉髄・玉髄化した珪質頁岩・珪質頁岩が主に用いられるが、１点だけ黒曜石製がある（45）。

箆状石器　両面調整によって作り出された石器。平面形は上方が狭く、下方が広がるほぼ左右対象をしており、刃部は両刃である。１点出土した（76）。

擦切具　縁辺に顕著な摩滅が見られる石器を擦切具とした。１点出土した（48）。

両極石器　両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。１点出土した（51）。

二次加工のある剥片・微細剥離ある剥片　剥片の一部に不規則な二次加工が加えられた石器を二次加工ある剥片（49・47）あるいは微細剥離ある剥片（52・54・73 ～ 75）とする。両者の区別は剥離侵度 2mm 以上を二次加工、未満を微細剥離として便宜的に区別した。

剥片　石核からの剥片生産あるいは石器製作の過程などで生じた石のかけら。７点出土した（53・55 ～ 58・72）。

磨製石斧　全面が研磨され、斧状に仕上げられた石器。５点出土した。４点は蛇紋岩製、１点は凝灰岩製である。完形品は小型で蛇紋岩製の 77・59 のみである。残る３点は基部（60・61）あるいは刃部（62）のみの残存であるので全容は不明であるが、厚みからみて 10cm 以下の中型品であると推定される。

打製石斧未製品？　大型剥片の腹面側に剥離を加えている。素材の厚みや比較的粗い剥離で明確な刃部が見られないことから石器未製品、中でも打製石斧未製品の可能性が高い。１点出土した（50）。

磨石類　「素材となる礫（転石）の正面及び側縁に磨痕・敲打痕・くぼみ痕を有するもの」[北村 1990]。４点出土した（63・64・78・79）。

石錘　扁平な円礫の向かい合う縁辺にくぼみを有する石器。１点出土した（38）。

石製品　定型石器に分類できないが、加工痕を有する石器１点がある（65）。

3）各　　説

ここでは特記事項を記す。各地区の出土点数は第５表、掲載石器の属性等は観察表を参照のこと。

a　A～C区（図版 195・196・350・351）

JSS9769　石錘（38）は集石の礫に交じって出土した。

遺構外　石鏃８点、擦切具１点、二次加工のある剥片２点、微細剥離ある剥片２点、両極石器１点、剥片６点、磨製石斧４点、打製石斧未製品 ?1 点、磨石類２点が出土した。

石鏃は 46 がＡ区、41・42 がＢ区、ほか５点はＣ区出土である。Ａ～Ｃ区にかけては陥穴が検出されているので、これと関連する遺物であろう。

第５表　縄文時代石器　地区別組成表

	地　区							合計
	A	B	C	D	E	F	G	
石　鏃	1	2	5	2	1	2	1	14
箆状石器					1			1
擦切具			1					1
二次加工のある剥片			2					2
微細剥離ある剥片			2	1			2	5
両極石器		1						1
剥　片	1	1	4		1	1		8
石　錘			1					1
磨製石斧		2	2			1		5
打製石斧未製品？			1					1
磨石類		1	1	1			1	4
石製品					1			1
合　計	2	7	19	4	4	4	4	44

擦切具（48）は下端部に刃部が作出されているが、磨滅によって剥離の稜線が不鮮明になっている。

二次加工ある剥片（47）は右側面に両刃の刃部が作出されている。微細剥離ある剥片（52）は打面無調整の石刃様の縦長剥片である。旧石器の可能性も疑ったが、腹面・背面の剥離軸が一定ではないこと、出土層位がⅣｄ層であることから、縄文時代の所産とした。

両極石器（51）は上端が剥離面、下端が礫面を打面としている。

磨石類のうち 63 は大型の磨製石斧破損品の転用品である。下部を欠損するが、上端に敲打に起因する剥離が見られる。

b　D～G区（図版 196・351）

JSX2751　石製品（65）は細長い扁平礫を素材とするが、左側縁の内湾する形状は素材礫のものである。右側縁は左側縁の内湾形状と対象になるように剥離が加えられ、最終的に鼓型を呈する。上下の端部に剥離痕や擦痕・摩耗痕は見られない。前期の土器集中区において出土したので、当該期の所産である。

JSX1020　石鏃（66）が出土した。

遺構外　石鏃５点、箆状石器１点、微細剥離ある剥片３点、剥片１点、磨製石斧１点、磨石類２点が出土した。石鏃は有茎で細長いもの（68）や茎が長いもの（67）、いわゆる五角形鏃（69）など、後期以降に見られる形態がある。

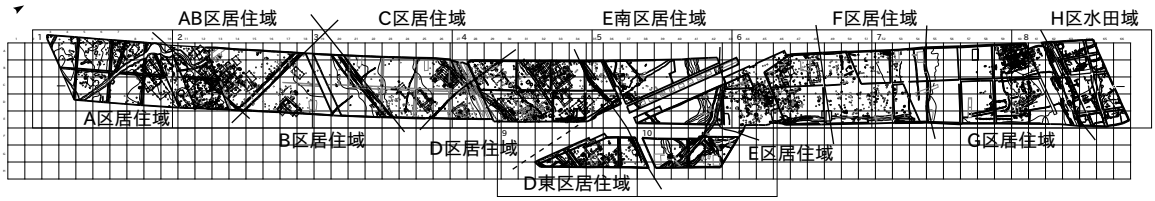
箆状石器（76）は全面に鉄分が付着しており、詳細な観察が困難であるが、裏面には主要剥離面が残存しているのが分かる。Ⅱ層出土であるが、同様の石器の出土例が早期～前期の遺跡に見られること、本遺跡に前期土器が出土していることから、前期の所産と考える。

第Ⅴ章　中世以降の調査

1　概　　要

中世については、調査終了時点で道路遺構に区切られた集落構成がおよそ明らかとなった。このため、整理作業ではこの区画をもとに記録をまとめることにした。区画は調査段階の区割りをもとに、A、AB、B、C、D、D 東、E 南、E、F、G の各居住域と H 区水田域の計 11 区画を設定した。本文・観察表・図版はすべてこの区割りに従って作成した。遺物観察表などではこれらを略して「A 居」などと記すこともある。

整理作業によって、古渡路遺跡では 13 世紀後半～ 15 世紀半ばまで集落が営まれていたことが判明した。主体は 14 世紀代である。南北延長 650m に及ぶ広い範囲に 10 区画の居住域を設定したが、これらは 13 世紀後半の集落造営当初から出揃っており、計画的な地割りが行われていた様子がうかがえる。地割は緩やかな起伏のある地形を活かしながら、微高地に居住域を設定しつつ、各居住域間の距離もほぼ等間隔になるよう調整されている（図版 25）。各居住域は掘立柱建物・井戸・土坑から構成されており、これらが適宜杭列（柵か）や区画溝で区切られていた。各居住域内では建物の建て替えが行われていたが、軸方向の変化には居住域を超えた斉一性が見られる。ここから、古渡路遺跡に営まれた集落がかなり強固な支配体制に組み込まれていたことが推定される。



第 9 図　中世居住域の区割り図

2　遺　　構

A　掘立柱建物の分類

遺跡全体で 92 棟の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物については第Ⅶ章 2A の建築構造を考慮した分類を用いた[1)]（第 10 図）。詳細は第Ⅶ章 2A を参照のこと。分類に当たっては高橋與右衛門［高橋 2001］、宮本長二郎［宮本 1999］、春日真実［春日 2009］各氏の論考などを参考にした。

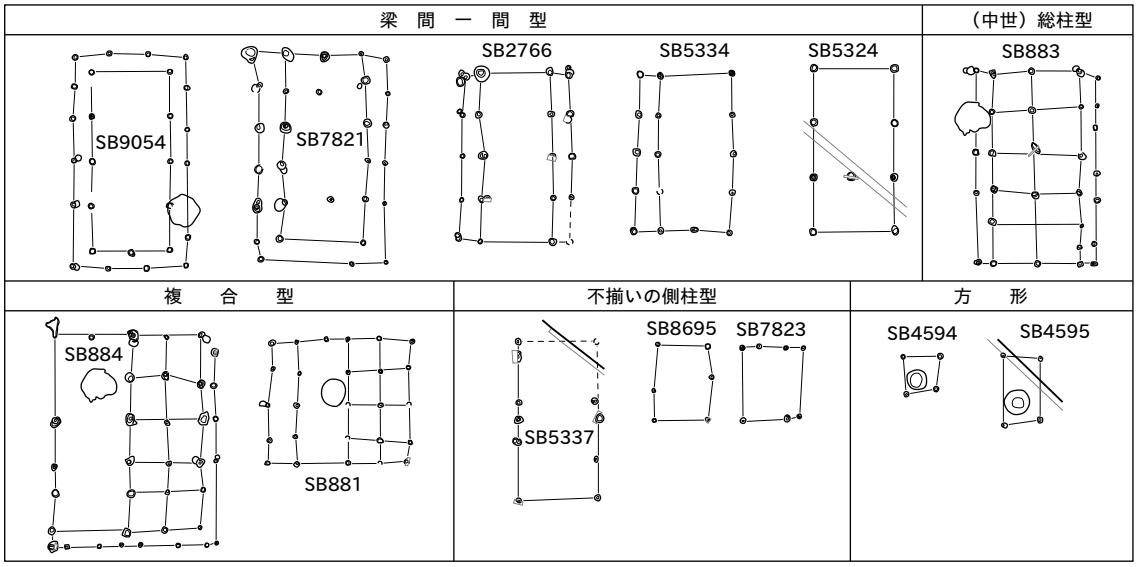
梁間一間型：平行した 2 本の柱列（側柱）が建物を形作る側柱建物のうち、平行した 2 本の柱列の向かい合った柱どうしが相対し、柱筋が通っているもの。

（中世）総柱型：碁盤の目の交点全てに柱の立つ建物で、内部の柱と側の柱の大きさが同じである。規模の大きさや梁行・桁行に関係なく柱間は一定。

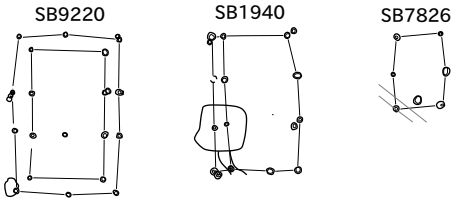
複合型：梁間一間型建物 2 棟、あるいは梁間一間型と総柱型が棟を平行にして平側を接して合体した建物。

不揃いの側柱型：平行した 2 本の柱列（側柱）が建物を作る側柱建物のうち、側柱の柱間が不揃いで向か

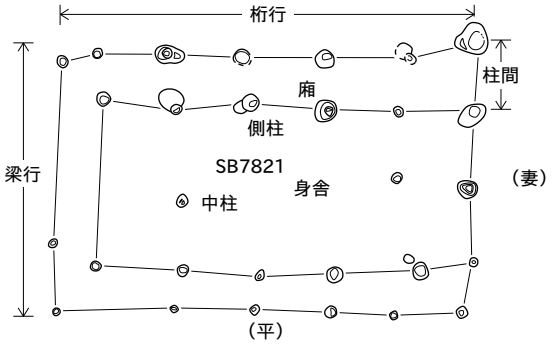
1）　本書の掘立柱建物の分類は建築構造の検討に重点を置いたため、従来の県教委刊行報告書で用いられている分類と若干異なる。掘立柱建物の柱穴配置の検討・復元・記載については、中尾七重氏（木質部材研究所）のご指導の下、調査員が協議しながら実施した。



第 10 図　掘立柱建物の分類



第 11 図　胴張型掘立柱建物



第 12 図　掘立柱建物部位名称

い合う柱筋が通らないもの。本報告書で単に「側柱型」と用いるときにはこの型を指す。

方形型：矩形をなす 4 本の柱及びそれに連なる柱が建物を形作ると思われるもの。

上記の分類のほか、当遺跡の掘立柱建物の柱の並びの特徴として、桁行や梁行の中央が外側へ張り出す形状が見られる。これについては「胴張型」あるいは「胴張状」などと表現する（第 11 図）。例えば SB9220 は「胴張型の四面廂付梁間一間型建物」のように呼称する。

掘立柱建物の部位名称は第 12 図に従う。なお、建築学で「側柱」という時には、壁の有無に関わらず建物外周の柱を指す。そして、建物を構成する柱の呼称は身舎に関わるものであれば「身舎柱」、廂に関わるものであれば「廂柱」を用いる（第 47 図）。本来であればこれに従うべきであるが、以下の記載では建物の内部の柱を「中柱」、これ以外を「側柱」として区別するに止める。

B 各　　説

検出した遺構には掘立柱建物（略号：SB）、井戸（SE）、土坑（SK）、ピット（P）、杭列あるいは柵（SA）、道路（SF）、溝（SD）、性格不明遺構（SX）がある。土坑にはほぼ正方形のものがある。類似の遺構に「方形土坑」「竪穴遺構」「方形竪穴建物」などの名称で呼ばれる遺構があり、これらは底面に床面や柱穴があることから、「竪穴建物跡」として扱われている［大野 2001］。当遺跡の類似の土坑は平面形や掘形に共通する特徴を見出せるが、床面や柱穴はないので建物跡とするには躊躇する。そこで、形状を表す語として「方形土坑」を用いる。ピットのうち、掘立柱建物の構成柱穴は「SB No.–P No.」として、調査段階

第６表　中世　遺構数集計表

	SB	SA	SE	SK	SD	SF	SX
A 区	14		16	36	16		18
AB 区	15		14	12	10		2
B 区	4	2	1	16	9		3
C 区	11		8	5	10		7
D 区	26	2	15	66	13	1	9
D 東区	8		4	7	5	1	2
E 南区			2	6	22		
E 区	8		11	29	14		13
F 区			1	13	4	1	10
G 区	6	4	11	56	33	1	18
合　計	92	8	83	246	136	4	82

第７表　中世ピット集計表

	ピット数	うち、掘立に関わるもの	比率
A 区	625	134	21.44%
AB 区	512	187	36.52%
B 区	154	45	29.22%
C 区	369	141	38.21%
D 区	857	350	40.84%
D 東区	308	78	25.32%
E 南区	140	0	0.00%
E 区	776	105	13.53%
F 区	259	0	0.00%
G 区	544	135	24.82%
合　計	4544	1175	25.86%

で付けた番号に掘立柱建物の番号を冠した。遺構番号は時代・種別に関わらず通し番号とした。調査時には調査区単位で１～9000 番台を割り振って使用したので欠番がある。また、遺構として調査したものの、最終的に地山の染みなどだった場合も欠番とした。これは縄文時代の調査でも同様である。

図面は全体図（1,000 分の 1）、調査区を南から順に機械的に分割した分割図（200 分の 1）、居住域単位の分割図（300 分の 1）、個別図（40 分の 1 あるいは 80 分の 1）を作成した。掘立柱建物・井戸以外の個別図は必要に応じて適宜作成した。

検出遺構数は第 6･7 表に示す。今回掘立柱建物 92 棟を復元したが、第 7 表に示すとおり、検出したピット 4,544 基のうち建物に関わるのは約 26%に過ぎない。すべてが建物の柱穴になるとは言えないだろうが、ピットの数からすれば、もっと多くの掘立柱建物が存在した可能性がある。

各説は居住域ごとにすすめる。遺構の位置や法量などは観察表に記載する。観察表の平面・断面形状は第 7 図の分類を用いた。

1）A 区居住域（図版 26・27・37 ～ 53、242 ～ 253）

A 区居住域は、区画溝あるいは道路 SD2760–SD7029・SD7084 から南側の居住域である。掘立柱建物 14 棟を確認した。建物構成の中心となる SB7811・7821 など大型の廂付建物を検出したほか、それらに付属する側柱建物を検出した。建物を構成する柱穴以外にも規模・深さともに、建物を構成するものと遜色のないピットが多数存在し、今回認識した以外にも建物群が存在することをうかがわせるが、ピット群の広がりが調査範囲外の東西へ延伸することもあり、全体像を明らかにすることができなかった。

a　掘立柱建物（図版 38 ～ 45・243 ～ 246）

SB7811（図版 38・39・243）　8・9B・C グリッドに位置する。検出面はⅣ d 層である。二面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–85°–E の東西棟である。2 間（4.58m）× 7 間（14.66m）で梁行（南北）方向の両面に廂を持つ建物である。建物の 4 面に廂がつく可能性も考慮して精査を行ったが、桁（東西）方向の柱列の伸びは確認できなかった。身舎部分の床面積は 67.1m^2、廂部分を含めた面積は 107.0m^2 である。柱穴の形状は平面形が円もしくは楕円形であり、断面形は半円状、箱状、U 字状など共通性があまり認められなかった。柱根は残存していないものの、土層断面の観察により推定径 8 ～ 15cm の柱痕を確認した。柱の間隔は桁行で平均約 2m であるが、東側の P6406 と P6404 では 2.39m、P6405 と P6422 では 2.74m と広い。身舎の柱 P6405 と P6406 とのほぼ中間付近には P6297 があり、P6405・P6297・P6406 を境に東西の間仕切り（壁）が存在した可能性も推定される。

P6291 と P6292 は底部付近の標高 12.7m 付近にこぶし大の円礫が敷きつめられたように分布してお

り、P6292 では、扁平な円礫を囲むように細長い礫が直径 12cm に配置される。柱基底の接地部分の痕跡であると推定される。出土遺物は少ないが、P6406 から青磁椀（80）、P6287 から礫が出土した。

SB7812（図版 40・244）　5ZZ25・6ZZ21 グリッド杭の周囲に位置し、調査区外西側に広がるものと考える。桁行方向は不明であるが、P6185 から P6174 にかけての柱穴列は N–14°–W である。南北 3 間、東西 3 間以上の側柱型建物であり、床面積は 36.3m^2 以上となる。柱穴の形状は、平面形が円もしくは楕円、U 字状の断面形を呈するものが多い。平面形が不整な P6180 はこの建物に伴うものではない可能性もある。土層断面で柱の痕跡を確認できるものがあり、柱の推定径は P6174 で 8cm、P6175 で 16cm である。東西方向の柱間は 1.97 ～ 2.22m と比較的一定しているが、南北方向では 1.60 ～ 2.39m とばらつきが大きい。

SB7813（図版 40・244）　12・13D グリッドに位置する。検出面はⅣ c 層である。桁行方向 N–11°–E の南北棟である。南東側が調査区外へ続くため全容は不明であるが、梁行 1 間（3.55m）×桁行 4 間以上の側柱型建物である。柱間は桁行が 1.71 ～ 2.84m と不規則である。柱穴は規模にばらつきがあるが、梁行の P7082・P7201 は径約 65cm、深さ 56cm とほかの柱穴よりもやや大型である。SB7815・SB7827 と重複するが、新旧関係は不明である。P7201 から砥石（276）が出土した。

SB7814（図版 41・244）　11・12B・C グリッドに位置する。検出面はⅣ c 層である。梁行 3 間（3.76m）×桁行 4 間（4.06m）の側柱型建物である。北西隅の柱穴は検出することができなかった。桁行方向 N–73°–E の東西棟である。面積は 15.3m^2 である。柱間は桁行・梁行とも不規則である。

SB7815（図版 41・244・245）　12・13D グリッドに位置する。検出面はⅣ c 層である。梁行 1 間（2.84m）×桁行 2 間（3.37m）の胴張型の梁間一間型建物である。主軸方位 N–66°–E の東西棟である。梁行の西辺は柱穴が 1 基少ない。柱間は梁行が 1.15 ～ 1.64m、桁行が 1.45 ～ 2m と不規則である。柱穴の並びは、桁行南側が直線的であるのに対して、北側は中間の P7376 が外側に張り出しており、建物全体としては整った長方形を呈さない。この理由については、第Ⅶ章 2A で考察する。SB7813 と重複するが、切り合いがないため新旧関係は不明である。

SB7817（図版 41・245）　8A グリッドに位置する。4 基のピットが N–6°–W とおおむね南北方向に並んで検出された。ピット列ともみなせそうだが、柱穴の規模・深さが周辺のピット群よりも大きいため、建物の一部として取り扱うこととした。SD6001 が東側に近接する。軸と直交する方向（特に西側）において柱の組み合わせを検討したが、規模・深さともに対応する柱穴がなく、西方向へは延伸しないと判断した。東方向へ約 6.5m 直交した方向に SB7821 があり、軸方向も類似することから SB7821 と関連する（SB7821 が延伸もしくは付属する建物）である可能性もある。

SB7818（図版 42・245）　7・8A グリッドに位置する。検出面はⅣ d 層である。西辺は 3 間（P6219・P6226・P6227・P6256）、東・南・北辺は 2 間の変則的な胴張型の梁間一間型建物である。柱穴の規模及び配置から P6219・6227・6256・6228・6231・6232 の 6 基で構成される 1 × 2 間の建物の可能性もある。主軸方位 N–17°–W の南北棟である。北西の隅（P6227 と P6256）が歪み、平行四辺形に近い平面形を持つ。柱穴の形状は平面形が楕円形もしくは円形で、断面形は U 字状である。P6228 のみ柱底部の痕跡により、断面階段状となる。多くのピットの断面で柱痕が確認でき、柱の推定径は 13 ～ 18cm である。床面積は 9.5m^2 である。

SB7819（図版 42・245）　7ZZ・A グリッドに位置する。梁行 1 間以上（2.00m 以上）×桁行 4 間以上（5.14m 以上）の側柱型建物である。桁行方向 N–3°–W の南北棟である。西側が調査範囲外に伸びるため、

規模は不明である。東側桁行は柱間が 1.2 ～ 1.36m で、おおむね等間隔となる。柱穴の形状は平面形が円形のものが多く、P6192 のみ楕円形である。断面形はＵ字状で、底面標高が 12.90 ～ 12.96m とおおむね類似した深さとなる。P6194 では柱痕を断面で確認し、推定径は約 10cm である。SB7820 とおおむね軸を同じくし、重複するが、新旧関係は不明である。

SB7820（図版 42）　7ZZ・A グリッドに位置する。確認面はⅣ d 層である。SB7819 と同様に建物西側が調査範囲外に伸びるため、規模は不明であるが、梁行 1 間以上（3.51m 以上）、桁行 3 間以上（4.23m 以上）である。桁行方向 N-1°-E の南北棟の側柱型建物である。柱穴の形状は円形で、断面Ｕ字状となる。底面標高は 12.71 ～ 12.88m とおおむね近似する。規模・深さが類似する P6120 と P6140 は近接する。これら 2 基の同時併存の可能性もあり得るが、小規模な建て替え等により拡張もしくは縮小に伴う隅柱の移動の可能性もある。ちなみに P6120 と P6260、P6260 と P6205 は柱間が 1.94m と等間隔となる。P6260 は SE6209（珠洲焼Ⅳ期後半～Ⅴ期）に切られるため、遺構の年代はⅣ期頃と推定する。

SB7821（図版 43・44・245・246）　9B グリッドを中心にして位置する。三面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N-84°-E の東西棟である。南側の側柱と廂の柱穴は残存状況が悪いが、梁行 1 間（4.43m）×桁行 5 間（10.02m）で、梁行（南北）と桁行（東）の 3 面に廂が付く。身舎部分の床面積は 44.4m^2、廂を含めた面積は 80.0m^2 である。柱穴の形状は、平面形が円もしくは楕円であり、断面形Ｕ字・Ｖ字・弧状のものが大半を占め、階段状（P6345）や台形状（P6337・P6341）のものも見られる。身舎の柱間は 1.9 ～ 2.1m 前後のものが多い。P6337 と P6341、P6343 と P6350 の間隔は 2.3m 前後と大きい。身舎の内部で検出された P6344 や P6346 は中柱の可能性がある。側柱の外側には、おおむね 1.0 ～ 1.4m の間隔をおいて廂の柱穴が 3 面に並ぶ。いずれの柱穴も、柱根や柱の痕跡は残っていなかった。覆土は黄灰色土・灰色土・オリーブ黒色土のものが多い。P6343 や P6347 は黄灰色土と炭を交互に薄く重ねている。また、P6350 の底面には径約 18cm、厚さ 4.5cm で円盤状の根石が据えられ、それに重なって砥石（277）が出土した。なお、SB7821 は SB7811 と一部が重複するが、P6423 が P6424 を、P6411 が P6412 を、P6289 が P6429 を、それぞれ掘り込むことから SB7821 の方が新しいと判断される。

SB7825（図版 44・246）　8A グリッドに位置する。梁行 1 間（4.24m）×桁行 3 間（4.40m）の方形型建物である。桁行方向 N-19°-W の南北棟である。柱の配置は不規則で、平面形も歪んでおり台形状となる。西辺では 2 本の間柱（P6234・P6233）が見られるが、東辺では対応する柱の痕跡が確認できなかった。東辺での柱の欠落は、冬場の季節風を避けて、風向きとは逆方向に開口部を設けた可能性もある。柱穴の平面形は、楕円形もしくは円形で、径は 20 ～ 40cm 前後、深さも 10 ～ 60cm 前後とばらつきがある。P6233・6234 の 2 基の断面で柱痕があり、推定径は約 10cm である。

SB7826（図版 44・246）　11B グリッド杭の周囲に位置する。胴張型の梁間一間型建物である。桁行方向 N-32°-W の南北棟である。梁行 1 間（2.46m）×桁行 2 間（3.84m）で床面積は 9.4m^2 である。建物の平面形状は長軸方向の中間の柱が、柱半本分外側に張り出し、胴張型を呈する。この理由については第Ⅶ章 2A で考察する。柱穴の形状は、平面形が円もしくは楕円、断面形は箱状・Ｕ字状・弧状のものが見られる。土層断面で柱の痕跡を確認できるものがあり、柱の推定径は P7269 で 13cm、P7266 で 11cm である。長軸方向の柱間は 1.73 ～ 2.10m、短軸方向は 2.36m と 2.46m である。西側の柱穴は深さ 11 ～ 19cm であるのに対して東側では 37 ～ 50cm と大きな差が見られるのは、立地条件などの制約を受けたためと推定される。

SB7827（図版 45・246）　13D グリッドに位置する。確認面はⅣ c 層である。梁行 2 間（3.23m）×桁行

2 間（3.76m）の胴張型の方形型建物である。北東隅の柱穴は試掘調査 46 トレンチ跡内に位置すると推定するが、検出することができなかった。桁行方向 N−68°−E の東西棟である。SB7813 と重複するが、切り合いがないため新旧関係は不明である。

SB7830（図版 45・246）　9・10C・D グリッドに位置する。桁行方向は N−82°−E である。調査時には南側柱穴列と西側柱穴列が L 字型に組み合う建物としていたが、整理時に北側と東側柱穴列を加えて、建物を確定した。建物の形は歪んだ方形で、東西 3 間（7.36m）×南北 3 間（4.6m）の東西棟の建物である。南側桁行は約 2.4m の等間であるが、北側桁行は東から 2.4m、0.8m、2.1m、2.1m となっている。梁行は東西とも 2 間目が狭く、0.8m、1.2m、両側は 2.8 ～ 3.2m と幅広くなっている。床面積は 60.7m^2 である。

柱穴は平面形が楕円、または円形のものが多く、深さは 35 ～ 58cm で全体的に深い。覆土はⅣ b 層土が主で、Ⅴ層土が混入する。P6439 を除き 10 本の柱穴に柱痕があり、径は 7 ～ 16cm であった。出土遺物はない。

b　井　　戸（図版 46 ～ 48・247 ～ 250）

SE6189（図版 46・247）　6ZZ23・6A3 グリッドに位置する素掘りの井戸である。長径 1.46m、短径 1.05m、深さ 1.22m を測る。北東方向に大きな張り出しを持つ不整な平面形を呈し、これに対応して壁面中央部に 15 × 10cm 程度のテラス状平坦面が見られる。下部は円筒状に掘り込まれ、井戸底は平坦面となる。覆土は 6 層が砂質土であるほかは粘性の強い黄灰色土や灰色土を主体とする。また上部から下部にかけて花崗岩・安山岩などの円～亜円礫が 30 個以上出土した。礫はこぶし大で球状のものが多いが、20cm を超えるものも見られた。大半は無加工であったが、被熱や破砕したものも含まれていた。6 ～ 7 層からは、大きさ 5cm 程度の木片が少量出土した。なお、北東壁に見られる平坦面は昇降のための造作と推定される。

SE6209（図版 46・247）　7ZZ23 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は U 字状である。長径 1.18m、短径 1.14m、深さ 1.89m を測る。深さ約 50cm から上部は外側に直線的に開き、開口部が若干広がる形態を持つ。また、底部西側面が横方向に掘り込まれ、袋状となる。覆土は 4 層に分層され、1 層は自然堆積、2 ～ 4 層は埋め戻し土である。2・3 層は黒色系土で、炭化物や約 5cm 大の礫が多く混入していた。また、3 層では 10cm 大の被熱した礫も数点出土した。4 層では、2 枚の井戸側板（337・338）が東方向から西方向に倒伏した状態で出土した。また、底部西側面の袋状部分からは、この側板に覆われるように珠洲焼の壺（84）や曲物の破片が出土した。覆土から珠洲焼片口鉢（82）、甕（83）が出土した。

SE6237（図版 46・247）　7A9 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は U 字状である。長径 1.13m、短径 1.09m を測る。深さは 1.62m で底部付近の遺構壁面では細砂層が認められた。遺構の壁面中半に井戸掘削時の足場痕と見られる凹部が認められる。覆土は 6 層に分層でき、1 ～ 4 は人為的な埋め戻し土、5・6 は自然堆積土である。1・2 層はブロック状のⅤ層土を含み、4 層はⅤ層土に由来する灰色土で、水平堆積を示すことからも、人為的に入れられたものと考える。5 層は腐植を多く含み、しまりがない軟質な土である。珠洲焼（Ⅳ～Ⅴ期）の片口鉢（81）が出土した。

SE6278（図版 46・248）　8C14・15・19・20 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は U 字状である。長径 1.90m、短径 1.35m、深さ 2.32m を測る。遺構北壁は漏斗状に緩やかに立ち上がる。一方、東西方向断面は急斜度で立ち上がる。西壁中位にある凹部は井戸掘削時の足場と推定される。底面付近の壁には砂層があり、湧水が顕著で、掘削後は、1m ほどの高さまで水没した。覆土は 4 層に分層した。水

平堆積であることから、人為的に埋め戻された土であろう。1 層では、こぶし大の円礫が数点出土した。4 層の底面付近では、自然木の木片や 2 ～ 3cm 程度の小礫が見られた。2 層中から珠洲焼の甕（85）、3 層から下駄の歯（341）が出土した。

SE6288（図版 47・248）　8B15・20 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はＵ字状である。長径 1.21m、短径 0.92m、深さ 1.76m を測る。6 層に分層した。5･6 層は、しまりがなく軟質で、腐植･炭化物を多く含むレンズ状の堆積である。1 ～ 4 層は水平堆積で人為的な埋め戻し土と考える。6 層から 10 点以上のこぶし大の礫や、約 15cm 大の焼けた礫が出土した。また、箸状木製品（339）が出土した。

SE6419（図版 47・248）　9C5 グリッドに位置する。平面は円形、断面はＵ字状である。長径 1.01m、短径 0.94m、深さ 1.10m を測る。単層である。軟質で、Ⅴ層土ブロックや炭化物を多く含む。人為的な埋め戻し土と考える。出土遺物はない。

SE6431（図版 47・248）　10D18 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状である。短径 0.74m、深さ 0.66m である。周辺のピット群よりも規模が大きく、深さも深いこと、底面（底側面）が砂層まで掘削されていることなどから、井戸と判断した。1 層は人為的埋め戻し土、2 層は自然堆積土である。1 層から砥石？（274）が出土した。

SE6441（図版 47）　10B16 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形は円形、断面形はＵ字状である。長径 0.68m、深さ 1.36m と、本遺跡で検出された井戸としては平面的な規模が小さく、壁面は 80 度以上の急斜度をなし円筒状に掘り込まれるのが特徴である。覆土は粘性の強い黄灰色土またはオリーブ黒色土が斜位ないしレンズ状に堆積し、Ⅴ層土ブロックが含まれる。含まれるブロックは、層位ごとにその大きさや量が異なる傾向を示し、1cm 以下のものや最大で 10cm に及ぶものも見られた。なお、覆土には礫や木片などは混入していなかった。

SE7133（図版 47・248）　12C23、12D2・3 グリッドに位置し、検出面はⅣｃ層である。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈し、長径 1.09m、短径 0.96m、深さ 1.56m を測る。覆土は 7 層に分層した。7 層から珠洲焼の甕（88）・砥石（275）・径 15cm 程の礫が出土した。

SE7180（図版 47・249）　12D16・17 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈し、深さは 1.70m である。覆土は 5 層に分かれ、2 層から珠洲焼の片口鉢（86）が出土した。また底部付近の 4 ～ 5 層からは径 10 ～ 20cm 程の礫がまとまって出土した。

SE7242（図版 47・249）　10B13・14 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈し、底部は平坦である。長径 1.15m、短径 0.96m、深さ 1.67m を測る。覆土の中位から上位にかけてはⅤ層土ブロックや炭化物粒を含む黄灰色土やオリーブ黒色土を主体とするが、3 層は細砂混じり黒色炭層と黄灰色土の細互層からなり特異な堆積状況を示す。壁面には 10 ～ 20cm 程度のくぼみが見られ、井戸掘削時の足場と見られる。また北西壁中央部はオーバーハングする。1 ～ 8cm 大のⅤ層土ブロックを含む 5 層は、この崩落土と考える。7 層も壁面の崩落によるものであろう。さらに、下部の 9 ～ 10 層は明緑灰色細砂からなる。この明緑灰色細砂は、しまりが弱く基盤層と同質であり、また井底は袋状を呈することから、脆弱な地盤が崩れだしたことによって堆積したものと推定される。

SE7256（図版 48・249）　10B22 グリッドに位置する素掘りの井戸である。長径は 0.73m であり、SE6441 と同様に平面的な規模は小さい。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さ 1.08m のＵ字状の断面形を呈する。西壁中央部は大きくオーバーハングするが、これは砂質の地山層が崩落したことによるものと推定する。覆土は黄灰色土や明褐灰色土を主体とし、中部から下部にかけては砂質土が目立ち、淡黄色の

Ⅴ層土ブロックが混在もしくは極めて多く含まれる。また、5 層の砂質土底面には炭の薄層が挟在する。こぶし大の円礫が数個出土した。

SE7311（図版 48・249）　11D11・16 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は箱状を呈し、長径 1.07m、短径 1.05m、深さ 1.15m を測る。覆土は 4 層に分層し、1 ～ 3 層にはⅤ層土がブロック状に混入する。

SE7320（図版 48・250）　10D15・11D11 グリッドに位置し、検出面はⅣ c 層である。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈し、長径 0.97m、短径 0.88m、深さ 1.69m を測る。覆土は 4 層に分層し、1・2 層にはⅤ層土がブロック状に混入する。3 層から不明木製品・箸状木製品（340）が出土した。

SE7323（図版 48・250）　11C13・18 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は円形を呈し、長径 1.28m、短径 1.14m、深さ 1.85m を測る。調査途中で崩落したため、土層断面の記録ができなかったが、下層部には炭化物を多量に含む黒色粘土層が堆積していた。覆土からは珠洲焼の片口鉢（87）が、底部付近からは小型の曲物と曲物底板（343）・漆器皿（344）が出土した。

SE8529（図版 48・250）　11D3 グリッドに位置する素掘りの井戸である。A 区・B 区境界の農道下縄文面上層面精査時にⅤ層上面で検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形は底面からやや急斜度に立ち上り中位から上位にかけて北西方向へ大きく広がる漏斗状を呈する。長径 1.42m、短径 1.12m、確認面からの深さ 1.66m、底面標高 11.20m を測る。底面は礫層を掘り込み平坦で、長径 66cm、上端からの深さ 38cm の曲物を検出した。覆土は 15 層に分層し、1 ～ 3 層は黄灰色シルトで 1 層はグライ化によりやや暗色を呈する。4 層はⅤ層ブロックを斑紋状に含む暗オリーブ褐色土、8 層はⅤ層土由来のにぶい黄褐色土で壁崩落土、5 ～ 7、9･10 層は壁崩落に伴う黒褐色土、11 ～ 13 層は砂･灰色ブロックを含む黒色土、14 層は黄灰色を呈する砂、15 層は砂礫層を主体とする灰色土が堆積する。11 ～ 14 層は曲物内堆積層で 14 層は井戸使用時に堆積した砂と推定する。4・11 ～ 13 層は人為的埋土と推定される。

出土遺物は、4 層から板材のほか、北側から漆器椀の塗膜 3 点（346）が近接して出土した。8 層から須恵器甕片（90）、曲物内 11 ～ 13 層から漆椀片、珠洲焼壺片（89）、加工材（345）、竹薄割り、曲物外側の 15 層から白木椀の破片（347）が出土した。このほか、石鏃（46）が出土したが、Ⅴ層由来の壁崩落土の 9 層からの出土で、本井戸に伴う遺物ではない。

c　土　　坑（図版 49 ～ 51・251・253）

SK6063（図版 49）　6C6 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.71m、短径 0.44m、深さ 0.13m を測る。覆土はレンズ状に堆積し、上部には 5mm 程度の炭化物粒を多く含む。

SK6101（図版 49）　6B23・6C3 に位置する。平面形は中央部がややえぐれた楕円形を呈し、壁は全体に緩やかに立ち上がる。長径 1.56m、短径 0.76m、深さ 0.16m を測る。覆土は 2 層に分層した。全体に赤味を帯び、自然堆積と考える。

SK6130・SK6131（図版 49）　7B2 グリッドに位置する。いずれも平面は楕円形、断面形は弧状である。形状･規模ともに類似する。それぞれ長径約 0.65m､短径約 0.43m､深さ約 0.10m を測る。覆土は単層で、褐鉄鉱・微細なⅤ層土ブロックを多く含み、固くしまる。埋め戻し土と考える。出土遺物はない。

SK6247・SX6245・SX6246（図版 49・253）　7A19・20・24・25 グリッドに位置する。3 基の遺構が重複する。SK6247 が最も新しく SX6245 と SX6246 の新旧関係は不明であるが、覆土の状況等から同一遺構の可能性もある。

SX6245　遺構北側はSK6247と重複し、壊されている。遺構南側はSD6270と重複する。覆土は自然堆積で2層に分層した。覆土の類似性からSX6246と同一遺構と推定され、その場合、直角に交わると考える。

SK6247　直径1.1mの円形で、断面形は台形状である。覆土は単層で、10cm大の礫2点出土した。SX6245・SX6246と重複し、両者よりも新しい。

SK6274（図版49）　7C1・2・6・7グリッドに位置し、遺構の東半分が近世以降のSD6001と重複し壊される。対称形とした場合、一辺約2.46mの方形となる。また、軸もおおむね東西南北方向に一致する。深さ0.39m、断面は台形状であり、比較的急斜度で立ち上がる。覆土は自然堆積土で、2層に分層した。1層では黒色土のブロック、2層ではⅤ層土のブロックを多く含む。底面はほぼ平坦である。2層中から珠洲焼壺？（91）が出土した。

SK7028（図版49）　12C25グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径0.50m、短径0.32m、深さ0.12mを測る。覆土は2層に分層した。

SK7040（図版49）　12C9グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。深さは0.14mであり、覆土は単層である。SD7029･P7041と重複し、SD7029よりも古いが、P7041との新旧関係は確認することができなかった。

SK7050（図版49）　12C7グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径0.64m、短径0.37m、深さ0.05mを測る。覆土は単層である。

SK7055（図版49）　12C19グリッドに位置する。確認面はⅣc層である。平面形は円形、断面形は半円状を呈す。長径0.69m、短径0.61m、深さ0.27mを測る。覆土は単層である。

SK7058（図版49）　12D15・13D11グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径0.81m、短径0.49m、深さ0.14mを測る。覆土は2層に分層した。

SK7066（図版49）　12C15・20グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長径1.57m、短径0.83m、深さ約0.40mを測る。覆土は3層に分層した。SD7036と重複し、これよりも新しい。

SK7067（図版50）　13D7・8・12・13グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径0.69m、短径0.47m、深さ0.15mを測る。覆土は単層である。

SK7068（図版50）　12D15グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。短径0.70m、深さ0.11mを測る。覆土は単層である。P7069と重複し、これよりも古い。

SK7075（図版50）　13D18グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は南側が若干くぼむ円形、断面形は弧状を呈す。長径0.71m、短径0.67m、深さ0.07mを測る。覆土は単層である。

SK7095（図版50）　12C11・12グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。長径0.77m、短径0.54m、深さ0.16mを測る。覆土は単層である。

SK7128（図版50）　12C17グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈す。長径0.61m、短径0.42m、深さ0.24mを測る。覆土は2層に分層した。

SK7134（図版50）　12C21グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径0.60m、短径0.46m、深さ0.13mを測る。覆土は単層である。

SK7138（図版50）　11C25・12C21・12D1グリッドに位置し、確認面はⅣc層である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。長径1.92m、短径1.15m、深さ0.23mを測る。

覆土は単層である。P7137 と重複し、これよりも古い。

SK7184（図版 50）　12D14 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。短径 0.80m、深さ 0.16m を測る。覆土は 2 層に分かれる。P7177 と重複し、これよりも古い。

SK7192（図版 50）　12D20・25 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長径 1.20m、短径 0.60m、深さ 0.23m を測る。覆土は単層である。

SK7193（図版 50）　13D16 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径 0.63m、短径 0.51m、深さ 0.19m を測る。覆土は 2 層に分層した。

SK7195（図版 50・251）　12D8 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。長径 0.83m、短径 0.51m、深さ 0.28m を測る。覆土は 2 層に分層した。

SK7198（図版 50）　12D24・25 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。東側は開渠に切られる。平面形は円形で、短径 0.67m、深さ 0.21m を測る。覆土は単層である。

SK7206（図版 50）　13D22 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。東側は調査区外へ続く。平面形は円形で、深さ 0.37m を測る。覆土は 2 層に分層した。

SK7210（図版 50）　13D20・25 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.72m、短径 0.62m、深さ 0.10m を測る。覆土は単層である。

SK7211（図版 50）　13D25 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。東側が開渠で破壊されてしまったため全容は不明であるが、平面形は円形を呈していたと推定する。深さは 0.24m であり、覆土は 2 層に分層した。

SK7213（図版 50）　13D18・19 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径 0.62m、短径 0.42m、深さ 0.16m を測る。覆土は単層である。

SK7217（図版 50・251）　11D18 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。東端が開渠に切られるが、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 1.20m、短径 0.92m、深さ 0.08m を測る。覆土は単層であり、珠洲焼甕（92）が出土した。P7325・P7326 と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

SK7304（図版 51）　11D20・12D16 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。東側は調査区外へ続く。深さは 0.70m である。覆土は 10 層に分かれるが、各層にⅤ層土がブロック状に混入することから、本遺構は倒木痕であると推定する。

SK7309（図版 51）　11D2・7 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.89m、短径 0.43m、深さ 0.14m を測る。覆土は単層である。

SK7314（図版 51）　12D6 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は不整形、掘形は東半分に中段を持つ。長径 1.10m、短径 0.77m、深さ 0.37m を測る。覆土は 3 層に分層した。

SK7327（図版 51・251）　11D1・2 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 1.03m、短径 0.73m、深さ 0.08m を測る。覆土は単層であり、珠洲焼片口鉢（93）が出土した。P7324 と重複し、これよりも古い。

SK7340（図版 51・251）　10B24 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.59m、短径 0.32m、深さ 0.11m を測る。覆土は単層である。

d　溝・道路（図版 26・27・51・52・252・253）

SD6001（図版 26・27・51・252）　調査区を南北に縦断する河川跡である。13A グリッドから 11B グリッ

ドにかけて北から南へ流下し、11B グリッドで西へ 90 度方向転換する。11B ～ 9A グリッドにかけては北東 – 南西へ蛇行しながら流下する。9A グリッドで南へ強く屈曲する。そして、9A から 5D にかけては直線的に流下し調査区外へ伸びる。検出長は 91.13m、最大幅は 3.14m である。河床から法面にかけて径 5 ～ 8cm ほどの杭が多数検出された。河川の屈曲が強い 9A グリッドの右岸には乱杭状に打ち込まれ、また打ち並べた杭に横木を渡したものも見られ、これらの杭は護岸の機能を果たしていたものと考える。また、6C9・10・14・15 グリッドには杭が密集し、さらにその下流である南側には一定の間隔を持って両法面に杭が配列されていることから、何らかの施設が設けられていた可能性がある。覆土はしまりの弱い細砂・粗砂や砂礫を主体として、黄褐色土や黒褐色土を挟在する。砂質土や砂礫からは近世・近代の肥前系を主体とする陶磁器、下駄・漆器椀・円形板・杓子・棒状・板状木製品、砥石、電柱の磁器製碍子、鉄製ボルト、ガラス製品、プラスチック製品、ゴム製品などとともにおびただしい数の流木が含まれていた。また、周囲の包含層から混入したと思われる珠洲焼や土師質土器も出土した。9A グリッドよりも北の河川蛇行部からは近世・近代の遺物がごくわずかに出土したものの、その出土傾向は 9A 以南とは異なる。さらに、9A を境にして北側と南側では河川形状や深さが大きく異なることから、それぞれ別の河川がこの地点で合流または重複していた可能性もある。

SD6002（図版 26・51・252）　調査区南東端の 4C ～ 5D グリッドにかけて位置する。河川北側法面の一部のみが検出され調査区外へ伸びることから、全体の形状や規模は不明である。4・5D グリッドで SD6001 と重複するが、土層観察用ベルトにかかる層序断面で、SD6001 に切られる様子を確認した。覆土の中部から上部にかけては黄灰色土を主体として黒褐色の腐植物土が挟在することから、湿地や池沼のような堆積環境へと変化していったものと推定される。

SD6004･SD6003（図版 26･51･252）　SD6003 は 3ZZ ～ 3A グリッドにかけて位置する。検出長 6.42m の河川跡で、調査区外へ向かって北西 – 南東方向に伸びる。遺構の底部が検出されたが、調査区南壁及び西壁での土層観察によって、推定幅は 3m を超え、表土直下から削り込んでいることを確認した。河床には径 5cm ほどの杭が数本打ち込まれていた。一方、SD6004 は SD6003 に隣接する不整な平面形を呈する遺構として検出された。壁面での土層観察によって、表土直下から削り込む推定幅 1.9m 以上の河川跡で、SD6003 と並走していたことを確認した。調査区西壁には河床に打ち込まれた径 8cm の杭が検出された。両河川とも覆土はレンズ状に堆積するしまりの弱い細砂や粗砂を主体とする。SD6003 の覆土下部の細砂には流木や枝を切り払った丸材が多数含まれていた。また、3 層から硯（279）、4 層から杭（342）が出土した。

SD6109（図版 26・51）　6D グリッドに位置し、おおむね北西 – 南東方向へ直線状に伸びる。北西側は試掘トレンチで途切れ、南東側は調査区壁面にかかる。覆土は 2 層に分層し、その境界は凹凸が顕著である。1 層には、2 層土であるにぶい黄橙色ブロックや炭化物粒が多く含まれる。

SD6132（図版 26・52・253）　7A・B グリッドに位置する。主軸方位は N–67°–W である。断面は弧状である。SD6470 と平行するが底面の標高で比較すると、本遺構の方が約 40cm 高い。

SD6306（図版 26・52・252）　9A から 10B グリッドにかけて、おおむね東西方向へ直線状に伸びる。西側は SD6001 によって切られ、また東側は 10B21 グリッドで掘り込みが不明瞭となり、その検出長は 13m を超える。断面形は弧状を呈し、深さは 4 ～ 10cm 程度である。

SD6470（図版 26・52・253）　7ZZ・A・B に位置する。主軸方位は N–68°–W である。断面は半円状もしくは台形状である。遺構検出面は表土直下のⅣd 層であるが、Ⅳd 層上面では、覆土 1 層との識別が

困難であるため平面形が検出できず、Ⅴ層上面で遺構検出を行った。覆土は5層に分層でき、レンズ状に堆積する。東側はSD6001に切られており、西側は調査範囲外に連続すると思われる。SD6132と平行する。他遺構との重複が多く、SB7818のP6226・6261、SX6245、SK6247等に切られる。出土遺物はない。

SD7038（図版27・52）　13C16グリッドから南西方向に12C24グリッドまで続く。検出面はⅣc層である。幅はおおむね一定しており、最大で0.29mである。断面形は弧状を呈し、深さは0.05mである。覆土は単層である。P7020と重複し、これよりも古い。

SD7132（図版27・52）　11B23グリッドから南東方向に11C18グリッドまで続く。検出面はⅣc層である。最大幅は1.88m、最小幅は1.02mと一定していない。断面形は弧状を呈し、深さは0.12mである。覆土は単層であり、珠洲焼片口鉢（94）が出土した。

SD7260（図版27・52・253）　11B2・7・8グリッドに位置する。北側はSD6001によって切られ、検出長は2.58mである。覆土は砂質な黒褐色土で、炭化物粒が散在する。底面でP7272が検出された。

SD7305（図版27・52）　11D13グリッドから北東方向に11D19まで続く。確認面はⅣc層であり、最大幅は0.26mである。断面形は弧状を呈し、深さは6cmである。覆土は単層である。

SD7514（図版27・52）　10B20グリッドから北東方向に伸び、11B13グリッドでSD6001と重複する。幅はほぼ一定しており、最大で0.72mである。覆土は黄灰色砂層の単層であり、ほかの中世遺構とは異なる土質であることから、近世の所産と考える。SD6001よりは古い。溝の底面から珠洲焼の片口鉢（119）が出土した。

e　性格不明遺構（図版52・53・253）

SX6009（図版52）　4ZZ19・24グリッドに位置し、調査区西壁で途切れる。北西－南東方向に長軸を持つ平面不整形の遺構である。弧状の断面形を呈する深さ6～8cmの落ち込みである。

SX6035・SX6045（図版52）　5C9・14グリッドに位置する。SX6035は長径0.63m、SX6045は0.49mで平面は楕円形を呈する。断面弧状で深さ10～12cmの落ち込みである。覆土には炭化物粒やⅣd層土ブロックを含む。

SX6047（図版52）　5B16に位置する。平面形は長径0.58m、短径0.46mの楕円形を呈する。本遺構中央部に長径0.24m、深さ0.14mの楕円形の落ち込みがあり、断面形は階段状となる。完掘した状況で確認したため堆積状況は不明である。断面形状から柱穴とも推定できるが、周囲に建物等の遺構がなく、性格・所属時期等は不明である。

SX6097（図版52・253）　5Aと5Bグリッドの境界部に位置し、遺構の北側は不整な平面形を呈する。深さ0.10～0.15mで断面形は弧状である。覆土は粘性・しまりともに強い青灰色土であり、灰白色ブロック粒や炭化物粒が散在する。5B4グリッド周辺でこぶし大の花崗岩の円礫が3個出土した。

SX6190（図版46）　6A3グリッドに位置する。SE6189の調査中に、覆土が灰色の楕円形の落ち込みを確認した。規模は現存部で、長径0.48m、短径0.42m、深さ0.04mを測る。掘り上がった状態で調査したため、堆積状況は不明である。SE6189と重複し、古い。

SX7166（図版53・253）　11D5・12D1に位置し、検出面はⅣc層である。平面形は長径1.96m、短径1.59mの長方形を呈する。断面形は台形状を呈し、深さは0.21mである。覆土は3層に分かれ、1層中には特に多量の炭化物を含む。P7164・P7165と重複し、これらよりも古い。

SX7235（図版 53）　10A21 グリッドに位置する。東西方向に長軸を持つ不整な平面形を呈する。深さ 6 ～ 8cm で弧状の断面形を示す落ち込みである。底面には弱い凹凸がある。

SX7241（図版 53）　10B7・12 グリッドに位置する。平面は長径 1.1m の円形、断面は弧状を呈する。その底面に 2 か所の凹部が見られる。北側の径 0.15m の凹部は深さ 2cm 程度に浅くくぼみ、南側の径 0.24m のものは断面 U 字状に 0.16m 掘り込まれる。覆土は粘性の強い黄灰色土や明褐灰色土を主体とし、長径 0.24m の凹部には砂質黒褐色土が見られ径 0.15m の亜円礫が据えられたような状態で出土した。

SX7265（図版 53）　11B2 グリッドに位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。深さは 0.08m であり、覆土は単層である。

SX7346（図版 53・253）　11C21・22 グリッド及びその周辺に位置し、確認面はⅣ c 層である。平面形は長径 3.99m、短径 3.15m の不整形を呈する。深さは 0.11m と浅く、底面は凹凸があり平坦ではない。覆土は単層である。

2）AB 区居住域（図版 27・37・54 ～ 71、254 ～ 263）

AB 区居住域は SD7084・SD7260–SD7029 から構成される道路と、SD7787 と SD7788・SD8421 から構成される道路に区画された居住域である。15 棟の掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は居住域内に散漫に分布するのではなく、約半数は南側道路寄りの 20m 四方において建て替えが行われている。このうち SB7604 は複合型建物である。

a　掘立柱建物・杭列（図版 54 ～ 64・254 ～ 257）

SB7604（図版 54・55・254・255）　12 ～ 14B・C に位置する。二面廂付複合型建物である。西廂付梁間一間型の東側に東廂付総柱型が身舎を共有して合体した建物である。平面形は桁行 5 間（11.00m）× 梁行 3 間（7.84m）に東西に 1 間（1.2m）の廂が付く正方形に近い南北棟の建物と考える。桁行方向は N –12° –W である。床面積は身舎で 86.2m^2、廂を入れると 112.2m^2 になる。また、建物西半分の梁間一間型に当たる部分の南北には梁行に並行に目隠しか廂のような柱穴列がある。特に北側の柱穴列は北東隅の P7662 から南に居室内に 2 間折れ曲がって配置されていることから、北側の 3 本は柵や廂ではなくいわゆる下屋のような施設かもしれない。また、南東隅の柱穴が廂、身舎ともに検出されていない。この付近にも何らかの施設があったのかもしれない。各柱穴の柱通りは非常によく整っている。柱穴の形は平面では円形ないし楕円形で、柱穴の大きさは P7398 を除いて径が 30 ～ 56cm の大きさがあり、深さも 24 ～ 65cm のものがあるが、多くは 50cm の深さである。もう少し詳細に見ると、身舎のうち西側の P8660 ～ 7381、東側の P8676 ～ 7694、北側の P8660 ～ 8676、南側の P7381 ～ 7694 の列はいずれも深さ 55cm を超える比較的深い柱穴で構成されている。これは、これらの列からなる正方形の部分が建物の構造を主に支えていたことに由来するのだろう。半分以上の柱穴において柱痕を確認した。柱痕の太さは 8 ～ 20cm で太さにばらつきが見られる。柱穴覆土は柱痕のほかに 2 ～ 3 層に分層でき、多くがⅣ b 層土にⅣ c 層土、Ⅴ層土が混入する。P8660・P8668 など、柱痕部分が一段深くなっているものがあり、柱重量による沈み込みと考える。P8659 から珠洲焼片口鉢（113）が出土し、SE7602 出土破片と接合する。P8674 からは珠洲焼壺（114）が出土した。

先に記したように柱穴の配置から付属の施設が推定され、本遺跡の掘立柱建物としては、やや複雑な作りである。建物は西半分の側柱部分と東半分の総柱部分とに分かれる。そして東西に廂もしくは縁がつ

く。おそらく側柱部分は土間であり、総柱部分は高床の空間であったのだろう。側柱部分の北寄り中央にはSE7602がある。付帯施設だとすれば、位置的に土間空間に井戸が掘られていたものと考える。

SB7681（図版56）　13B・C、14Bに位置する。Ⅳc層上面で確認し検出した。梁間一間型建物である。桁行4間（8.56m）×梁行1間（3.66m）の長方形を呈する。桁行方向N−7°−Wの南北棟である。面積は31.3m^{2}を測る。

14基の柱穴から構成され、建物中央部に間仕切りの柱穴P7709が位置する。柱穴の形状は平面形・断面形に類似するものが多く見られ、柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し、断面形は階段状を呈する3基（P7702・7678・7758）以外はU字状を呈する。柱穴覆土はオリーブ褐色・黒褐色土が堆積し少量の炭化物を含むものが多い。残存する柱根はなく、土層断面の観察から10基の柱穴で推定径8～18cmの柱痕を確認した。柱穴間距離は桁行方向で2.11～2.14mでほぼ等間隔である。身舎の柱穴P8663とP7711の中間付近にP7709があり、柱穴間距離は1.80m・1.93mで東西方向の間仕切りと考える。出土遺物はない。

重複関係は本建物敷地内北側にSK7700が位置し、本建物南側でSB7604と重複する。SB7604とは柱穴同士の切り合いがなく、新旧関係は不明である。SK7700は建物敷地内に位置し、覆土から多量の炭化物が検出されていることから本建物と関連する可能性が推定される。

SB7682（図版57・255）　13C、14B・Cに位置する。Ⅳc層上面で確認し検出した。梁間一間型建物である。桁行3間（7.64m）×梁行1間（4.42m）の長方形を呈する。桁行方向N−9°−Wの南北棟である。建物の面積は33.8m^{2}を測る。

11基の柱穴から構成され、建物梁行に間柱穴P8567が1基、建物南側に間仕切りの柱穴が2基（P7750・7734）位置する。柱穴の形状は平面形・断面形に類似するものが多く見られる。平面形はP7734が方形を呈するほかは円形又は楕円形を呈し、柱穴の断面形はP8241が階段状、P7720が弧状を呈するほかはU字状を呈する。柱穴覆土はオリーブ褐色・黒褐色土が堆積する。残存する柱根はなく、土層断面の観察から3基の柱穴で推定径12～14cmの柱痕を確認した。柱穴間距離は桁行方向で2.51～2.67mでほぼ等間隔だが、建物南側のP8503とP7661間は2.35mと若干狭くなる。身舎梁行北側にP8567があり、北東隅柱P7784との距離は0.97mで狭くなることから間柱穴と考える。身舎の柱穴P8503～P8235間にP7750とP7734があり、柱穴間距離は西方向から1.54m、1.51m、1.08mを測り、本建物内の間仕切り（壁）と考える。

重複関係はSB7683・SB7745、SE8506、SK8240と重複する。SE8506、SK8240との関係は、本建物構成柱穴がSE8506、SK8240を切っている。本建物とSB7745とは建物範囲の大部分が重複し、SB7683は敷地内のやや南側に位置する。本建物とSB7683・SB7745は、建物南側に間仕切り（壁）を持つ側柱建物で、桁行方向・規模・形状が類似している。建て替えの可能性もあるが柱穴同士の切り合いや抜取痕等が確認できず、新旧関係・関連性は不明である。出土遺物はない。

SB7683（図版58）　13・14Cに位置する。Ⅳc層上面で確認し検出した。胴張型の梁間一間型建物である。桁行3間（6.44m）×梁行1間（3.24m）で、桁行中央が柱半本分外側に張り出す。桁行方向N−11°−Wの南北棟である。建物の面積は20.9m^{2}を測る。

10基の柱穴から構成され、建物南側に間仕切りの柱穴が2基位置する。柱穴の形状は平面形・断面形に類似するものが多く見られる。平面形は円形又は楕円形を呈し、断面形はP7775・P7759が台形状、P7723が階段状を呈するほかはU字状を呈する。柱穴覆土はオリーブ褐色・黒褐色土が堆積する。遺存

する柱根はなく、土層断面の観察から 2 基の柱穴で推定径 6 ～ 12cm の柱痕を確認した。柱穴間距離は桁行方向で北から 2.09m、2.32m、2.06m で中央部が 30cm 程広くなる。身舎の柱穴 P7685 ～ P7775 間に P7717 と P7774 があり、柱穴間距離は西方向から 1.33m、1.68m、0.45m を測り、本建物内の間仕切り（壁）と考える。重複関係は SB7682 と同様である。出土遺物はない。

SB7686（図版 58）　15C8 グリッドに位置する。Ⅳ c 層で検出した。桁行 2 間（1.97m）×梁行 1 間（1.80m）の東西棟の方形型建物である。梁行の東側、桁行の南側には間に柱が入る。桁行方向 N-84°-E の東西棟で南側の SB8540 と同軸で柱筋が合致している。柱根は遺存していないが、P8154 は柱痕が認められ径 10cm と推定される。重複関係は P8149･8498 が SK7791 に切られ､P8485 は SE7790 に切られる。本遺構は SE7789 に伴う建物と考える。

SB7690（図版 59・256）　14A・B に位置する。Ⅳ c 層上面で確認し検出した。本建物南方向で中世後半の建物・井戸・土坑・ピットが多数検出され、北方向では建物、井戸等の遺構が見られなくなる。桁行 3 間（4.75m）×梁行 1 間（3.00m）の梁間一間型建物で、桁行方向 N-82°-E の東西棟である。建物の面積は 14.3m^2 を測る。

8 基の柱穴から構成される。柱穴の形状は平面形・断面形に類似するものが多く見られる。平面形は P8687 が方形を呈するほかは円形又は楕円形を呈する。柱穴の断面形は P8690 が階段状のほかは U 字状を呈する。柱穴覆土は黒褐色土が堆積する。遺存する柱根はなく、土層断面の観察から 3 基の柱穴で推定径 12 ～ 20cm の柱痕を確認した。P8685 では建物内側へ傾く柱痕が見られる。柱穴間距離は桁行方向で 1.55 ～ 1.69m でほぼ等間隔である。出土遺物はない。

SB7745（図版 59・60・255）　13C、14B・C グリッドに位置する。Ⅳ c 層上面で確認し検出した。桁行 3 間（7.68m）×梁行 1 間（3.68m）の梁間一間型建物で、桁行方向 N-7°-W の南北棟である。建物の面積は 28.3m^2 を測る。

10 基の柱穴から構成され、建物南側に間仕切りの柱穴が 1 基位置する。柱穴の形状は、平面形は円形又は楕円形を呈し、断面形は階段状を呈するものが 4 基、U 字状を呈するものが 5 基、漏斗状を呈するものが 1 基である。柱穴覆土は暗オリーブ褐色・黒褐色土が堆積する。残存する柱根はなく、土層断面の観察と底面形状から 6 基の柱穴で推定径 10 ～ 15cm の柱痕を確認した。柱穴間距離は桁行方向で 2.50 ～ 2.62m とほぼ等間隔である。身舎の柱穴 P7679 ～ P7693 間に P8505 があり、柱穴間距離は西方向から 1.59m、2.14m を測り、本建物内の間仕切り（壁）と考える。

重複関係は SB7682 と同様で、ほかに SB7604 と重複するが柱穴同士の切り合いがなく新旧関係は不明である。出土遺物はない。

SB7816（図版 60・61・256）　12・13B・C グリッドに位置する。いくつかの柱穴はⅣ b 層で検出できたが、大部分の柱穴はⅣ c 層で確認した。三面廂付梁間一間型建物である。西側梁行は胴張状を呈する。桁行方向 N-75°-E の東西棟である。梁行 1 間（4.73m）×桁行 4 間（9.82m）であり、西面以外の 3 面に廂を持つ。SE7608 に壊されたのか、あるいは SE7608 を軒下に配したのか、梁行の東辺は柱穴が 1 基少ない。身舎部分の床面積は 46.4m^2 である。廂の北東隅の柱穴は検出できなかった。廂部分を含めた敷地全体の面積は 74.1m^2 である。柱間は桁行が身舎・廂とも 2.4m 前後である。身舎の柱穴は長径 30 ～ 50cm 程、深さ 38 ～ 72cm と大型で深いものが多いが、廂の柱穴は長径 30cm 前後、深さ 21 ～ 48cm と小型で浅い。SB7828・SB7829・SB7604 と重複するが、切り合いがないため新旧関係は不明である。

SB7822（図版 61・256）　12A グリッドに位置する。確認面はⅣc 層である。梁行 3 間（2.13m）×桁行 2 間（3.18m）の胴張型の側柱型建物で、桁行方向 N−70°−E の東西棟である。北西隅の柱穴が調査区外のために全容は不明であるが、隣接する SB7823 とおおむね同規模の建物と推定する。発掘調査時には検出できなかったが、桁行の P7419 と P7403 の間には柱穴がもう 1 基存在した可能性があり、この場合は桁行 3 間の建物となる。柱間は梁間が 0.4 ～ 0.87m と狭い。P7418 から珠洲焼の片口鉢（119）が出土した。

SB7823（図版 62・257）　11・12A グリッドに位置し、確認面はⅣc 層である。梁行 3 間（3.22m）×桁行 1 間（3.90m）の胴張型の側柱型建物で、桁行方向 N−78°−E の東西棟である。面積は 12.56m^2 である。梁行の東辺は柱穴が 1 基少ない。柱間は、梁行の中央は 1.41m であるが、両端は 0.86 ～ 0.96m と狭い。SB7824 と重複するが、切り合いがないため新旧関係は不明である。P7420 から砥石（289）が出土した。

SB7824（図版 62・257）　12A グリッドに位置し、確認面はⅣc 層である。梁行 1 間（2.32m）×桁行 1 間（3.10m）の胴張型の側柱型建物で、桁行方向 N−89°−E の東西棟である。面積は 7.19m^2 である。SB7823 と重複するが新旧関係は不明である。

SB7829（図版 63）　12B・13B グリッドに位置し、確認面はⅣc 層である。柱穴 3 基を確認したに過ぎないが、周囲のピット群と比較し規模・深さが大きくまた、SB7816 と桁行方向がほぼ同一であることから側柱型建物と判断した。桁行方向 N−89°−E の東西棟である。発掘調査時には検出できなかったが、桁行の P7369 と P7360 の間にはもう 1 基柱穴が存在した可能性があり、この場合の柱間は約 3.2m である。SB7816・SB7604 と重複するが、新旧関係は不明である。

SB8499（図版 63・257）　SD7787 から西へ約 4.7m 離れた 14B、15B・C グリッドに位置し、Ⅳc 層で検出した。東側の SD7787 と桁行方向が直行する配置である。桁行 3 間（6.00m）×梁行 1 間（3.08m）の梁間一間型建物で、桁行方向 N−79°−E の東西棟である。平均桁間寸法は 2.02m で東西桁行・北面が西から 1.81m、2.52m、1.73m を測り、南面も同様に中間の柱間が広い。柱根は遺存していないが P8004・8012 ほか複数のピットで柱痕が認められ、柱材の径は 10cm 前後と推定される。ピットは検出面から 38 ～ 60cm と深い。ピットの重複や遺物の出土はない。本建物の南に位置する SB8540 は規模・構造が類似する。

SB8540（図版 64・257）　SD7787 から西へ約 2.5m 離れた 14・15C グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。桁行 3 間（6.26m）×梁行 1 間（3.28m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N−84°−E の東西棟で、西へ 10m 離れた SB7690 と同軸である。平均桁間寸法は 2.08m で東西桁行・北面が西から 1.96m、2.48m、1.80m を測り、南面も同様で中間の柱間が広い。桁行と梁行の柱間に 4 基のピットがあり、いずれも浅い。柱根は遺存していないが、P8483・8156 ほか複数のピットで柱痕が認められ、柱材の径は 10cm 前後と推定される。遺物は出土していない。重複関係は P7727 が SK7687 に切られる。井戸上屋 SB7686 が付帯する。

SB8695（図版 64・257）　14C・D に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。本建物西方向で中世後半の建物・井戸・土坑・ピットが多数検出され、9m 程東方向に SD7787、SD7788 が位置する。桁行 2 間（3.98m）×梁行 1 間（2.84m）の胴張型の側柱型建物で、桁行方向 N−10°−W の南北棟である。建物の面積は 11.3m^2 を測る。

6 基の柱穴から構成される。柱穴の形状は、平面形は P7726 が楕円形を呈するほかは円形を呈し、断面形は P8493 が台形状を呈する以外はU字状を呈し、類似性が認められる。柱穴覆土は単層のものが多く、

オリーブ褐色、黒褐色土が堆積する。残存する柱根はなく、土層断面の観察から P8493 で推定径 8cm の柱痕を確認した。柱痕は建物内側へ若干傾いている。柱穴間距離はばらつきが見られ、西側桁行方向で北から 2.96m・1.56m、東側桁行方向で 1.65m・2.26m を測る。出土遺物はない。

b　井　　戸（図版 65 ～ 68・258 ～ 261）

SE7409（図版 65・258）　12A13・14 グリッドに位置する素掘りの井戸である。検出面はⅣ c 層である。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈し、長径 1.09m、短径 1.03m、深さ 2.06m を測る。覆土は 4 層に分かれ､1 層から珠洲焼の片口鉢（117）が出土した。底面付近からはこぶし大の礫がまとまって出土した。

SE7534（図版 65・258）　12A24・12B4 グリッドに位置する素掘りの井戸である。SD6001 の底面で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径 1.22m、短径 1.02m、深さ 1.55m を測る。壁面は 70 度以上の角度で立ち上がる V 字状の断面形を呈し、底部は掘りくぼめられる。覆土は粘性の強いオリーブ黒色土を主体とし、炭化物粒が散在する。最下部には、基盤層と類似するしまりがやや弱い灰色砂質土が堆積する。覆土からは、こぶし大の亜円～亜角礫が数個、5 層からは砥石（283）が出土した。周囲におけるⅣ c 層の地盤高を勘案すると、SD6001 の影響で遺構上部が 35 ～ 40cm 程度削られている。1.9 ～ 2.0m 程度の深さの井戸であったものと推定する。

SE7602（図版 65・258）　13B18 グリッドに位置する素掘りの井戸である。Ⅳ c 層上面で検出した。長径 1.57m、短径 1.40m、確認面からの深さ 1.73m、底面標高 11.74m を測る。平面形は円形を呈する。断面形は底面から急斜度で立ち上がり、中位から上位で外側へ若干広がり漏斗状を呈する。底面は礫層を掘り込み平坦で、曲物等の水溜施設は検出されなかった。覆土は 11 層に分層した。1 層はグライ化し、やや明るい色調となる。2 ～ 8 層はⅤ層土と炭化物をブロック状に含む人為的埋土、9 ～ 11 層は 10 層に厚さ 2cm 程の炭化物層を挟む自然堆積と推定される。出土遺物は 1 層から珠洲焼片（113）、9 層上部からガラス質滓（鉄滓）（271）、炭化物層下層の 11 層から木片が出土した。1 層出土珠洲焼片口鉢（113）は SB7604–P8659 出土破片と接合する。

本井戸は AB 区建物構成の中心とみなせる SB7604 敷地内に位置し、建物と関連する施設の可能性がある。

SE7606（図版 65・258）　14B13・14 グリッドに位置する素掘りの井戸である。Ⅳ c 層上面で検出した。長径 1.76m、短径 1.56m、確認面からの深さ 1.88m、底面標高 11.58m を測る。平面形は円形を呈し、断面形は底面からやや急斜度に立ち上り中位で一旦外側へ屈曲し上面までほぼ垂直に立ち上がる。底面は礫層を掘り込み平坦で曲物等の水溜施設は検出されなかった。覆土は 16 層に分層した。1 層は I 層由来の黒色土、2 ～ 10 層は粘性が強い黒色土、11 ～ 15 層は粘性が強いオリーブ黒色土、16 層は灰色粘土が堆積する。1 ～ 10 層はレンズ状の堆積状況だがⅤ層土と炭化物をブロック状に含み人為的埋土、11 ～ 16 層は壁崩落土も含め自然堆積と推定される。出土遺物は 4 層からこぶし大の礫が多量、14 ～ 16 層から木片が少量出土した。

本井戸は内建物 SB7681、SB7690 と近接するが関連性は不明である。

SE7608（図版 66・259）　13C3 グリッドに位置する素掘りの井戸である。Ⅳ c 層上面で検出した。調査区中央に設定した南北ベルト断面の観察から、Ⅳ b 層からの掘り込みを確認した。長径 1.40m、短径 1.28m、確認面からの深さ 2.09m、底面標高 11.50m を測る。平面形は円形を呈し、断面形は底面からやや急斜度に立ち上り、中位から上位はベルト断面では漏斗状となる。底面は礫層を掘り込み平坦で、曲

物等の水溜施設は検出されなかった。覆土は11層に分層した。1・2層はⅠ'層由来の黄灰色シルト、3・4層はオリーブ黒色シルト、5～11層は粘性が強い黒色シルト・土が堆積する。1・2層は自然堆積、2～11層は炭化物、Ⅴ層ブロックを多く含み人為的埋土と推定される。

出土遺物は5・6・9・10層から縄文時代後期の土器片（25a）が出土した。周辺のⅣc層から同時期の縄文時代の土器片が出土したこと、本井戸が埋め戻されていることから、土器片は埋め戻しの際に混入したものと考える。また、3層から珠洲焼片、11層から板材が出土した。

本井戸はAB区建物SB7604敷地内に位置するが、本井戸が建物構成柱穴間を掘り込んでいることから、SB7604とは異なる時期の構築と推定される。

SE7629（図版66・259）　13B11に位置する。Ⅳc層上面で検出した。長径0.70m、短径0.68m、確認面からの深さ0.96m、底面標高12.46mを測る素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、断面形は底面からほぼ垂直に立ち上がりU字状を呈する。底面は砂質シルトを掘り込み弧状の断面形を呈する。曲物等の水溜施設は検出されなかった。覆土は5層に分層し、1層はⅠ層由来の黄灰色シルト、2～5層は粘性が強い黒褐色シルトが堆積する。2～5層は炭化物、Ⅴ層ブロックを多く含む。斜位・水平堆積であることから人為的埋土と推定される。出土遺物は5層から自然礫が2点出土した。

本井戸はAB区で検出されているほかの井戸に比べ規模がかなり小さく底面標高も1m程高くなっている。底面の掘り込みが礫層まで届かず湧水しない可能性も推定される。AB区建物SB7604と隣接して位置することから建物に付帯する井戸以外の用途、（例えばトイレ等）で使用された可能性も推定される。

SE7641（図版66・259）　13C20・25グリッドに位置する。長径1.26m、短径1.15m、確認面からの深さ1.80m、底面標高11.64mを測る。平面は円形、壁面は中位まで緩く中央に向かって傾きながら掘られている。中位では壁面が土中にえぐられて、井戸覆土と同じ土が充填されている。覆土は最上層にⅠ'層の自然陥没に伴うレンズ状の堆積が比較的厚く堆積するが、以下はⅣb層土である。下層は有機物を含む腐植土に変わる。上層はレンズ状に水平堆積していることから、上部は自然に埋まっていったものと見られる。また、側壁と覆土の間には空隙が見られるしまりのない部分があることから、井戸側壁に沿って側板が存在していたものと見られる。井戸底は礫層上面で止まっており、底面から約30cm上部では井戸壁面が層状にえぐられており、ある時期、井戸底部には水が満たされていたことがうかがわれる。9層から用途不明部材（353）、10・12層から自然木が出土した。P8245を切る。

SE7642（図版67・259・260）　13D5・14D1グリッドに位置する素掘りの井戸である。長径1.22m、短径1.14m、確認面からの深さ1.87m、底面高11.58mを測る。確認時の平面形は円形で、側壁面はあまり凹凸がなく丁寧にほぼ円筒型に掘られている。中位下部では壁面が砂質土に変わるため、壁面の一部崩落による深いえぐりが見られる。覆土は最上層にⅠ'層の自然陥没に伴うレンズ状の堆積が見られる。覆土はⅣb層土である。覆土の堆積状況は弓なりに平行して土層がレンズ状堆積していることから自然に埋まっていったものと見られる。

遺物は覆土上層から白磁腰折皿（115）、5層から炭化木、7層から漆器椀（350）、8層から下駄（349）、櫂（348）、用途不明部材（351・352）、曲物破片、板材、枝、砥石（282）、礫などが出土した。

SE7692（図版67・260）　14C9・14グリッドに位置する。長径1.19m、短径1.03m、確認面からの深さ2.03m、底面標高11.44mを測る素掘りの井戸である。平面形は円形で、掘形は上部が広がる円筒形である。覆土は15層に分層した。1層はⅡ層の自然陥没に伴うレンズ状の堆積である。上層覆土はⅣb層由来土であるが、側壁際には空隙があるしまりのない部分があり、掘形と見られるⅤ層土が混じり、垂

直な立ち上がりと接している。反対壁面ではオーバーハングする同様な土層が見られることから、側板があった可能性がある。中層ではⅣb層にⅤ層ブロックがマーブル状に混入する。下層は多くの草本類が混じる腐植土層になっていた。P7676 に切られる。遺物は白磁椀（116）・木片が出土した。

SE7777（図版 67・260）　14B24・14C4 グリッドに位置する素掘りの井戸である。長径 1.77m、短径 1.60m、確認面からの深さ 2.07m、底面標高 11.36m を測る。平面形は円形で、ほかの井戸より一回り大きい。断面形は緩く中央に傾斜する漏斗型であるが、壁面は凹凸が著しく、掘削が荒く行われたものと見られる。1 層はⅠ' 層の自然陥没に伴うレンズ状の堆積を示す。上層覆土はほかの井戸同様にⅣb 層由来土で構成されているが、上層から中層までⅤ層ブロックが多く混入し、堆積状況は東に高く西側に低く偏った堆積状況であった。短期間に埋まっていったものと見られる。下層は腐植土のほかに礫も多く出土した。遺物は、6 層から板状人形（354）、漆器小皿（358）、曲物底板（359）、箸状木製品（355 ～ 357）、板材、用途不明木製品、木片、7 層から木片が出土した。

SE7789（図版 68・261）　SB7686 内の 15C13 グリッドに位置しⅣc 層で検出した。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈する。長径 1.00m、短径 0.96m、確認面からの深さ 1.33m、底面標高 12.10m を測る。深さは浅く、砂礫層には達していない。覆土は 6 層に分層した。2 ～ 4 層は黒色土とにぶい黄褐色土が混じるしまりの弱い混合土。6 層は互層堆積でその上部に厚さ約 3cm の炭化物層が覆う。遺物は出土していない。本遺構は比較的浅く、砂礫層に達していないことから井戸以外に機能した可能性もある。SB7686 は本遺構に伴う建物と考える。

SE7790・8381（図版 68・261）　SB8540 に接する 15C12 グリッドに位置する。Ⅳc 層で重複する 2 基を検出した。平面形はいずれも円形を呈するものと思われ、断面形はＵ字状を呈する。規模は SE7790 が若干大きく、長径 0.92m、確認面からの深さ 2.17m、底面標高 11.20m を測る。深さは検出面から 2.17m で砂層に達するが SE8381 は 1.62m とやや浅く底面は粘土層である。覆土の 1 層～ 12 層までは明瞭な切り合い関係は認められないが、縦に入るひび割れと平面プランの形状から SE7790 が新しいと思われる。SE7790 の 13 層から漆器椀片（364）、曲物部材（362）、14 層から曲物部材（363）、15 層から曲物（361）が潰れた状態で、曲物内から砥石（285）が出土した。このほか炭化米の塊が出土した。SE8381 の 8 層から枡片（360）、10 層から珠洲焼甕（118）、12 層から砥石（284）が出土した。また SE8381 は SK7791 に切られていた。

SE8506（図版 68・261）　14C8・9 グリッドに位置する素掘りの井戸である。長径 1.78m、短径 1.60m、確認面からの深さ 1.86m、底面標高 11.64m を測る。平面形は円形で、断面形は側壁面が緩く中央に傾斜する漏斗型で、井戸底面は尖底となっている。覆土は最上層にⅠ層の自然陥没に伴うレンズ状の堆積が見られる。覆土はⅣb 層由来土で充填され、中層以下では多量の腐植物が出土した。覆土の堆積状況は緩くレンズ状堆積をしていることから、自然に埋まっていったものと見られる。SB7682–P7784・7735・8249 に切られる。遺物は砥石（286・287）が出土した。

c　土　　坑（図版 69・70・262）

SK7511（図版 69）　12B8・9・13・14 グリッドに位置し、検出面はⅣc 層である。平面形は方形、断面形は弧状を呈す。長径 1.26m、短径 1.15m、深さ 0.11m を測る。覆土は単層である。

SK7526（図版 69）　12C10・13C6 グリッドに位置し、検出面はⅣc 層である。西側一部が開渠で壊されているが、平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。短径 0.70m、深さ 0.20m を測る。覆土は単層で

ある。

SK7601（図版 69・262）　13B5・10、14B1・6 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。平面形は方形を呈し、壁は底面から急斜度で立ち上がり台形状の断面形を呈する。底面は中央部に向かって緩やかに傾斜する。長径 2.60m、短径 2.42m、深さ 0.46m を測る。覆土は 6 層に分層した。4 ～ 6 層が斜位に堆積すること、3 ～ 6 層にⅤ層土ブロックが斑紋状に含まれることから人為的埋土と推定される。SK7696 と重複し本土坑が切られる。また、底面で P7644 を検出したが、堆積土の違いから本土坑に付帯する遺構ではなく、古い時期の遺構と推定される。出土遺物はない。

SK7622（図版 69・262）　13A18・23 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。長径 1.04m、確認面からの深さは 0.17m を測る。平面形は楕円形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がり弧状の断面形を呈する。底面は若干の凹凸が見られる。覆土は 2 層に分層した。レンズ状の堆積状況で自然埋没と推定される。出土遺物はない。

SK7635（図版 69・262）　13B7・8 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。長径 1.54m、確認面からの深さは 0.16m を測る。平面形は長方形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がり弧状の断面形を呈する。底面は平坦である。覆土は 2 層に分層した。2 層中にⅤ層由来黄灰色ブロックが斑紋状に含まれることから人為的埋土と推定される。出土遺物はない。

SK7687（図版 69・262）　14C15 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。長径 1.18m、確認面からの深さは 0.12m を測る。平面形は楕円形を呈し、壁は底面から緩やかに立ち上がり弧状の断面形を呈する。底面は平坦である。覆土は単層で、自然堆積と推定される。SB8540–P7727 を切る。出土遺物はない。

SK7696（図版 69・262）　13B10 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。長径 1.30m、確認面からの深さは 0.34m を測る。平面形は楕円形を呈し、壁は底面から緩やかな角度で立ち上がり弧状の断面形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は 3 層に分層した。レンズ状の堆積ではあるが、Ⅴ層ブロックの堆積状況、遺物の出土状況から人為的埋土と推定される。

出土遺物は 1・3 層から珠洲焼Ⅳ期前半よりも古い時期の珠洲焼壺片 9 点（120）と自然礫 2 点が一括廃棄された状況で出土した。珠洲焼片はすべて接合している。重複関係は SK7601 と重複し本土坑が新しい。

SK7700（図版 70）　14B7・12 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。長径 1.80m、検出面からの深さは 0.58m を測る。平面形は円形を呈し、壁は底面からやや急斜度に立ち上がり台形状の断面形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は 7 層に分層し、1 ～ 3 層は黒褐色シルト、4 ～ 6 層は暗オリーブ褐色シルト、7 層は黒褐色シルトが堆積する。5 層がブロック状、3・6・7 層が斜位に堆積すること、2 ～ 7 層中にⅤ層土ブロックを斑紋状に含むことから人為的埋土と推定される。出土遺物はないが、6・7 層上面で厚さ 2cm 程の炭化物層を検出している。

本土坑は SB7681 敷地内に位置する。直接的な関係は認められないが、本土坑中から炭化物が検出されたことから建物に関連する施設の可能性も推定される。

SK7764（図版 70）　14B20 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い弧状の土坑である。底面は楕円形で中央部が深く、工具痕のような凹凸がある。長径 1.03m、短径 0.80m、深さ 0.11m を測る。覆土はⅣb 層土の単層であるが、炭化物とⅤ層土粒子が混入している。出土遺物はない。

SK7780（図版 70）　14C3 グリッドに位置する。平面は楕円形、断面は台形状で、底面は平坦である。

長径 0.82m、短径 0.63m、深さ 0.17m を測る。覆土はⅣb 層土で 2 層に分かれる。上層には多量の炭化物が含まれている。2 層と 1 層の境界は凹凸があり、人為堆積の可能性がある。出土遺物はない。

SK7791（図版 70）　15C13・18 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.96m、深さは 0.22m と浅い。覆土は単層で遺物は出土していない。SE8381、SB7686–P8149・8498 を切っている。

SK8240（図版 70）　14C8・13 グリッドに位置する。平面が楕円形の非常に浅い土坑である。底面は平坦である。長径 1.75m、短径 1.15m、深さ 0.04m を測る。覆土はⅣb 層土で、少量の炭化物が混入する。

d　溝・道路（図版 27・70・71・263）

SD7023（図版 27・70）　13C11 グリッドから北西方向に、13C7 グリッドまで直線的に続く。主軸方位は N–16°–W である。検出面はⅣc 層である。幅はほぼ一定しており、最大で 0.32m である。断面形は半円状を呈し、深さは 0.20m である。覆土は 2 層に分かれる。重複関係は SB7604–P7022 に切られる。東方向約 19m に位置する SD7787・SD7788 と主軸方位が近似する。

SD7036（図版 71）　13C16 グリッドで SD7029 から枝分かれし、12C20 グリッドまで続く。確認面はⅣc 層である。最大幅は 0.30m であり、断面形は弧状を呈する。深さは 0.07m であり、覆土は単層である。SK7066 と重複し、これよりも古い。

SD7029（図版 71・263）　12B21 グリッドから北東方向に 14D23 グリッドまで続く。13C23 ～ 14D23 では北側に SD7084 が並行する。検出面はⅣc 層である。幅はおおよそ 0.35m 程で一定しているが、最大幅は 0.57m である。断面形は弧状を呈し、深さは 0.16m である。覆土は単層である。底面は比較的平坦部分が多いが、一部で深く V 字型になっているところがある。高さは東端と西端では差がない。SD7084 と同じように区画のための溝と考える。覆土はⅣb 層土の単層である。遺物は出土していないが、こぶし大の礫が出土した。SK7040・P7033 と重複し、これらよりも新しい。13C16 グリッドで SD7036 が枝分かれするが、覆土が同質であるため新旧関係は判別できなかった。

SD7084（図版 71・263）　13C23 グリッドから北東方向に 14D グリッドへ 14.4m にわたって走る。検出面はⅣc 層である。深さは 0.12m、断面の形は弧状を呈し、溝幅はあまり変化しない。東端は北に湾曲し、SD7787 西側の溝に切られる。西端は底面が漸高し消滅する。底面は平坦で底面の高さは東と西ではそれほどなく、排水先もないことから、区画としての溝と考える。覆土はⅣb 層土の単層で埋まっている。出土遺物はない。

SD7672（図版 27・70・263）　12A20 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。南北方向へ走行する溝で、SD7680 と併走する。主軸方位は N–2°–E で近世以降の河川である SD6001 に切られている。検出長 1.34m、幅 0.18 ～ 0.27m、検出面からの深さ 0.06 ～ 0.13m を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は単層でⅤ層ブロックを含む暗オリーブ色土が堆積する。出土遺物はない。

SD7680（図版 27・70・263）　12A14・15 グリッドに位置する。Ⅳc 層上面で検出した。東西方向へ走行する溝で、SD7672 と併走する。主軸方位は N–5°–E で、検出長 1.80m、幅 0.36m、確認面からの深さ 0.16m を測る。断面形は弧状を呈す。覆土は 2 層に分かれ、1 層にはⅤ層土粒を含む黒褐色土が堆積する。出土遺物はない。

SD7787（図版 71・263）　14D ～ 17A グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。南北に走行する溝で主軸方位は N–14°–W。東西に位置する建物群とは柱筋がほぼ直交する配置にある。北側は調査区外へ伸

びており、方向性から 20A グリッド付近の溝と接続する可能性がある。本溝は 2 条の重複と考える。検出長 46.2m、幅 0.84m、深さは検出面から 0.20m を測り部分的に起伏がある。断面形は弧状を呈す。セクションベルトで切り合い関係は確認していないが、深い方と浅くテラス状を呈する範囲が認められ、南側では 2 条に分かれ、途切れている。浅いほうの溝は北側では西寄り、溝の中央付近で交差して南側では東寄りの位置で SD7084 に接続していた可能性がある。またこの溝は東側の SD8421 と並行している。両溝の間隔は 2m あり、硬化面は確認していないが道路の側溝であった可能性が高い。さらに深いほうの溝は東側に並行する SD7788 と時期を同じくする道路の側溝であろう。

遺物は覆土 1 層から砥石（290）、礫が少数出土したのみである。17A グリッド付近では、本溝の構築によるものかどうか分からないが、覆土中から縄文土器片が、17B グリッドでは磨石類（63）が出土した。

SD7788（図版 71・263）　14D ～ 18A グリッドに位置する。Ⅳ c 層で検出した。南から北に走行し主軸方位は N–13°–W で西側の SD7787 と並行する。検出長は 47m、幅 0.60m、深さ検出面から 0.30m を測る。断面形は台形状を呈す。覆土は単層あるいは 2 層でレンズ状堆積。遺物は礫や木片が出土したのみで土器片等は出土していない。本溝は SD8421 を切る。調査区中央ベルトと東西ベルトには、本溝を含めた上層に硬化した範囲が認められる。時期は明らかではないが本溝の埋没後も道路として利用されていたと推定する。

SD8243（図版 71）　14D24 グリッドで検出された。調査区東端で検出され、調査区外東側に伸びている。検出長は 1.80m と短い。SD7084 の延長線上にあり、北西方向から並行する SD7787･7788 に直交する。この並行する 2 つの溝間が道路とすると、その道路上に位置する。SD7084 の延長する溝であるとすると、さらに東に別の居住域が存在する可能性が示唆される。

断面形は弧状を呈するが、底面は凹凸がある。深さは 0.12m で底面の高低差が認められる。覆土はⅣ b 層土であるが、上層には多量の炭化物が混入している。

SD8421（図版 71）　17A・B、18A グリッドに位置し、Ⅳ c 層で検出した。南から北へ走行する溝で主軸方位は N–12°–W で SD7788 に切られる。検出長 17.5m、幅 0.40m、深さは検出面から 0.15m を測る。

断面形は弧状を呈する。覆土はⅣ c 層土ブロックを含む黒褐色土の単層。出土遺物はない。

3）B 区居住域（図版 27・28・72 ～ 81・264 ～ 268）

B 区居住域は SD7787 と SD7788・SD8421 から構成される道路と SD9008・SD9025、SD9024・SD9027 から構成される道路に区画された居住域である。掘立柱建物は 4 棟あるが、このうち 3 棟は厩と考えられる。厩は同じ場所で建て替えられている。遺構確認面に至るまで、焼土や炭化物を含む層に厚く覆われていたことから、厩は焼失した可能性が高い。B 区居住域は厩と倉庫のための場所とみなせる。

a　掘立柱建物・杭列（図版 73 ～ 77・264・265）

SB8024（図版 74・264・265）　16・17D・E グリッドに位置する。遺構の南東部が調査区外となるが、桁行 3 間（5.20m）×梁行 1 間（3.03m）の梁間一間型の建物と想定される。桁行方向は N–75°–E である。桁行は調査区外に伸びる可能性もあるが、3 間の内中央部では 2.12m であるのに対して、東西部は 1.45m であることから中央部の柱間の広い桁行 3 間の建物と考える。床面積は一部が調査区外であるが、推定で 15.8m^2 程度となる。

構成ピットは 8 基と推定するが、検出したのは 6 基である。規模と形状は径 24 ～ 31cm の円形及び

方形で、深さは 32 ～ 58cm である。柱痕は 2 か所で確認し、推定される柱径は 8 ～ 12cm 程度である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SK8265 が存在する。SK8265 は建物範囲内の西寄りにあり、P8324 と P8340 のほぼ中間に位置する。土坑規模は 2.10 × 1.67m の長方形で、底面は北に微傾斜し、深さは 15cm 程度で、長軸方向は SB8024 の梁行方向と同一である。このことから SK8265 は SB8024 に伴う遺構と考える。この構造は南に隣接する SB8025 も同様の構造である。なお、SB8024 ～ 8026 は検出面の上位に焼土粒や炭化物を含む黒色土に厚く覆われていた。建物が焼失したことに由来するのだろう。

SB8025（図版 75・264・265）　17・18D・E グリッドに位置する。この付近一帯は遺構検出へ至る段階で炭化物を含んだ層が比較的厚く堆積していた。検出作業の段階ではⅣb 層と認識して掘削していたが、改めて振り返れば火災等の痕跡だったのかもしれない。

SB8025 は南東部が調査区外となるが、桁行 5 間（11.53m）×梁行 1 間（3.80m）の梁間一間型の建物と想定される。桁行方向 N–74°–E の東西棟である。床面積は一部が調査区外であるが、梁間 5 間とした場合で 43.8m^2 程度と推定される。身舎部桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.30m（7.6 尺）で、調査区外に伸びる。

構成ピットは 15 基と推定するが、検出したのは 13 基である。各ピット規模は径 30 ～ 52cm の円形及び楕円形で、深さは 49 ～ 70cm である。柱痕は 6 か所で確認し、推定される径は 8 ～ 14cm 程度である。各ピットからの出土遺物は P8408 から硯片（293）が出土した。

遺構範囲には SB8026、SK8331・SK8309 が存在する。当遺構は SB8026 と位置及び桁行方向がほぼ同一であり、特に北側の桁行は同一のライン上にある。掘削当初は同一の建物遺構と捉えたが、わずかに角度差のある柱穴列を抽出できたため、2 棟の建物遺構と確認できた。このことはこの 2 棟の建物に建て替えがあった可能性を示唆する。SB8026 との新旧は、当遺構の P8310 が SB8026–P8311 を切っていることから、当遺構は SB8026 よりも新しい。なお、2 棟の身舎部の南北には柱穴列が存在し、廂部と考えるが、桁行の間隔が SB8026 と同一であることから、SB8026 に属する廂部と考える。

SK8309 は P8327 に切られており、当遺構よりも古い。SK8331 は建物範囲内の西隅にあり、P8337・P8285・P8334・P8280 のピットの内にほぼ収まる土坑である。土坑規模は 2.85 × 2.00m の長方形で、底面はほぼ平らで、深さは 17cm 程度で、長軸方向は SB8025 の梁行方向とおおよそ同一である。この構造は先に触れた SB8024 と SK8265 の構造と同一であり、やはり建物に伴う遺構と考える。これらの建物内に配置された浅い方形土坑は、神奈川県上浜田遺跡や群馬県福島大島遺跡などの厩遺構に類似しており、SB8024 及び SB8025 は厩であると考える。

一方、範囲外ではあるが建物の西には 3 基のピットからなる SA8412 があり、当遺構の梁間方向とおおよそ平行であり、建物に付属する構造物であったと推定する。

SB8026（図版 73･74･264･265）　17D･E、18D グリッドに位置する。遺構の南東部が調査区外となるが、胴張型の四面廂付梁間一間型建物と想定される。桁行 3 間（8.00m、廂含め 10.02m）×梁行 1 間（4.09m、廂含め 5.92m）である。桁行方向 N–74°–E の東西棟である。床面積は一部が調査区であるが、推定で約 32.7m^2 程度となる。身舎部桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.61m（8.6 尺）である。南北の廂は北の P8322 と P8306、南の P8277 と P8544 のそれぞれの間尺が当遺構の桁行の柱間と同一であることから、当遺構に属する廂と考える。なお、廂部の平面形は四隅の柱穴がやや内側に入り込み、胴張型を呈する。

構成ピットは 20 基と推定するが、検出したのは 18 基である。規模と形状は径 23 ～ 48cm の円形、

方形及び楕円形で、深さは20～67cmである。柱痕は6か所で確認した。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲にはSB8025とSK8314・8331が存在する。SB8025でも述べたが、当遺構とSB8025は建て替えの可能性がある。SB8025との新旧は、当遺構のP8311がSB8025に属するピットに切られていることから、当遺構はSB8025よりも古い。

SK8314はP8278を切っていることから、当遺構よりも新しい。SK8331はSB8025において厩施設の可能性があるが、当遺構においても建物範囲内に収まった配置であり、当遺構でも建物に伴う施設であった可能性がある。ただし、当建物身舎部西側のP8288とP8333の間に壁を構築していたとすれば、SK8331は当建物に伴わないものと考える。SB8026の建築構造を改めて検討する必要があろう。

SB8539（図版76・265）　SD7788から東へ約2.4m離れた17・18B・Cグリッドに位置する。Ⅳc層で検出した。SD7788と直交する配置である。梁間一間型建物で、桁行方向N-74°-Eの東西棟である。桁行4間（6.77m）×梁行1間（4.03m）である。建物内に位置するP8439・8468の掘り込みは検出面から60cm以上とほかのピットに比べて深く、棟を支持する構造であろうか。また西側隅には2基のピットがありP8537・8436に位置する柱の補強と思われる。東西桁行の平均桁間寸法は1.69mで柱間寸法にばらつきがある。柱根は遺存していないが、P8437・8439・8468・8534・8537は柱痕が認められ柱材の径は10cm前後と推定される。ピットの重複や遺物の出土はない。本建物は南東側の建物群から約13m離れており、近接して井戸や土坑も検出されていない。

SA8411（図版77）　SB8026・SE8353の西側、16D、17Cグリッドに位置する。Ⅳc層で検出した杭列（柵か）である。2列が認められ、主軸方位はN-12°-Wである。西側のSD7788より若干東に向く。2列の重複関係はなく、同時期なのか時期差があるのかは不明。全長7.44m、西側列のピットの間隔は、南から1.46m、2.16m、1.36m。東側の列は南から1.12m、2.70m、1.24mと等間隔ではない。ピットはいずれも単層で、検出面から深さ9～33cmで、ばらつきがある。

SA8412（図版77）　17Dグリッドに位置する。主軸方位はN-11°-Wで南北に伸びる杭列（柵か）である。P8335、P8396、P8387の3基からなり、長さは4.36mで、柱間は1.94mと2.10mである。ピットの規模は径26～34cmで、深さは9～54cmである。当初、SB8025の一部として考えたが、P8335とP8387がSB8025の桁行のラインの延長上には収まらず、やや北に位置するため、杭列と推定した。しかしながら主軸方位はSB8025の梁行方向とおおむね平行であり、SB8025と同時期に存在した関連施設と考える。

b　井　　戸（図版77・266）

SE8353（図版77・266）　SB8024～8026の重複する建物から北へ5m離れた17C25グリッドに位置する。Ⅳc層で検出した。当初は規模の大きい楕円形あるいは方形の土坑と見られたが、ベルトを残し底面まで掘り進めた段階で円形のプランを検出した。土層観察から遺構の重複と判断した。平面形は円形、掘形は漏斗状で底面付近はオーバーハングする。長径1.6m、短径1.47m、深さは検出面から2.03mで砂礫層に達する。覆土は暗褐色から黒褐色を呈する粘質土でレンズ状堆積。遺物は9～10層中で曲物側板（365）、15層から漆器椀（366～368）が壁際でそれぞれ離れて出土した。

c　土　　坑（図版78・79・266・267）

SK7793（図版78・266）　15D9グリッドに位置する。Ⅳc層で検出した。平面形は楕円形、断面形は台

形状を呈する。長径 0.77m、深さは検出面から 0.2m を測る。覆土は 4 層に分層され、底面直上の 3 層は炭化物層で 10cm 程の厚さがある。この層では径 1cm 前後の骨片と見られる白色塊が散在していた。厚い炭化物層はあるが、底面に被熱した痕跡は認められないことから、持ち込まれ廃棄されたものと思われる。本遺構は SD7788 を切っている。

SK8209（図版 78）　15D13・18 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。長径 1.24m、深さは検出面から 0.12m と浅い。覆土は黒色シルトの単層で遺物は出土していない。SD7788 を切っている。

SK8265（図版 78・266）　16D20・25、17D16・21 グリッドに位置する。平面形は隅円長方形で、長径 2.10m、短径 1.67m を測る。断面は台形状で深さは 0.15m を測る。底面はおおよそ平坦であるが、北に微傾斜する。覆土は単層で、黒褐色土を主体とし、5 ～ 20mm の炭化物が見られる。出土遺物はない。土坑は SB8024 の範囲内に配置され、長軸方向は SB8024 の梁行方向とおおむね同一である。このことから、この土坑は SB8024 に伴う遺構と考えられ、厩施設の可能性がある。この構造は南に位置する SK8331 も同様の構造が確認できる。

SK8290（図版 78･267）　17D18 グリッドに位置する。平面形は長径 0.60m、短径 0.42m の楕円形である。断面の深さは 0.06m、形状は弧状である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とし、地山ブロック、炭化物が少量見られる。出土遺物はない。

SK8309（図版 78・267）　17D20、18D16 グリッドに位置する。平面形は長径 1.32m、短径 0.82m の楕円形を呈する。断面の深さは 0.35m、形状は弧状である。覆土は 4 層に分層でき、黒褐色土を主体とし、にぶい黄色の地山ブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK8314（図版 78）　重複する建物の北側、18D21 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。長径 0.86m、深さは検出面から 0.22m を測る。覆土は単層で遺物は出土していない。本遺構は P8313、SB8026–P8278 を切っている。

SK8315（図版 78・267）　重複する建物の北東隅、18D21・22 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。長径 0.85m、深さは検出面から 0.24m を測る。覆土は単層で遺物は出土していない。

SK8329（図版 78・267）　17D13 グリッドに位置する。平面形は長径 0.62m、短径 0.53m の、おおよそ円形を呈する。断面の深さは 0.12m、形状は弧状である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とし、炭化物、焼土粒が少量見られる。出土遺物はない。

SK8331（図版 78･267）　17D7･8･11 ～ 13･17 グリッドに位置する。平面形は長径 2.85m、短径 2.00m の隅円長方形である。断面の深さは 0.17m、形状は台形状で底面はおおよそ平坦である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とし、地山ブロックが多く見られるほか、少量の炭化物、焼土が見られる。遺物は珠洲焼片口鉢片（126）と砥石（292）が出土した。

SK8331 は SB8025 の範囲内に配置され、長径方向は SB8025 の梁行方向とおおむね同一である。このことから、この土坑は SB8025 に伴う遺構と考えられ、厩施設の可能性がある。同様の施設として SB8026 にも伴う可能性が高い。この構造は北に位置する SK8265 も同様の構造が確認できる。

SK8366（図版 79）　17C25 グリッド付近に位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する。長径 2.62m、深さは検出面から 0.32m。覆土は 5 層に分層されレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。SE8353 に切られる。

SK8390（図版 79）　18C19・24 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。長径 0.76m、深さは検出面から 0.26m。覆土は 2 層に分層されレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK8552（図版 79・267）　18C14・15 グリッドに位置する。開渠及びトレンチにより破壊されているが、平面形はおおよそ楕円形を呈する。長径 0.76m、短径は不明である。断面形は漏斗状を呈する、覆土は 3 層に分層した。黒褐色系の土を主体とし、暗褐色などの地山土粒が含まれる。出土遺物はない。

SK9016（図版 79）　20B19 に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。周囲では東西方向へ並走する溝群（道路）が検出されている。長径 1.13m、検出面からの深さは 0.28m を測る。平面形は楕円形を呈し、壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、台形状の断面形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は 4 層に分層した。1 層は上位の SD9008 によりグライ化し灰色を呈する。2 ～ 4 層はⅣc 層土ブロックを斑紋状に含むオリーブ黒色シルトが堆積する。人為的埋土と推定される。出土遺物はない。SD9008 に切られる。

SK9065（図版 79）　20C12 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。底面はやや凹凸がある。覆土はⅣb 層土でⅣc 層ブロックが混入する。出土遺物はない。

SK9092（図版 79）　22D13・14・18・19 に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。周囲では東西方向へ並走する溝群（道路）が検出されている。長径 2.20m、検出面からの深さは 0.32m を測る。SD9024・9085 に切られ、南側が残存していない。平面形は円形を呈すると推定され、壁は底面から緩やかに立ち上がり弧状の断面形を呈する。覆土は 5 層に分層した。1 ～ 3 層はⅣc 層土ブロックを斑紋状に含む暗オリーブ褐色シルトが堆積する。2'・3' 層はグライ化により暗色に変色した 2・3 層で、変色境界部に筋状に褐鉄鋼が沈着している。人為的埋土と推定される。出土遺物はない。

SK9131（図版 79）　21C2・3・7・8 に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。周囲では東西方向へ並走する溝群（道路）が検出されている。長径 1.32m、検出面からの深さは 0.22m を測る。SD9024 と重複し南側がほとんど残存していない。平面形は円形を呈すると推定され、壁は底面から緩やかに立ち上がり弧状の断面形を呈する。底面の形状は不明である。覆土は 3 層に分層し、1 層黒褐色シルト、2・3 層はⅣc 層ブロックを含む褐灰色シルトが斜位に堆積し人為的埋土と推定される。重複関係は SD9024 に切られる。出土遺物はない。

d　溝・道路（図版 80・81・268）

SD9000（図版 80）　21B・C に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。東西方向へ伸びる溝である。この地区では本溝も含め 5 条の溝が並走する。主軸方位は N-86°-W で、東西に位置する建物群と主軸方位をほぼ同じくする。SD9027 と類似する覆土で、SD9027 から分岐した溝と推定する。検出長 8.20m、幅 0.40m、確認面からの深さ 0.18m を測る。断面形は台形状を呈し、覆土は 2 層に分かれ、1 層にはⅣc 層土ブロックを少量含む暗オリーブ褐色シルトが堆積する。

SD9008（図版 80・81・268）　20A ～ C、21C、22D・E に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。調査区内に設定した東西・南北ベルト断面の観察により、表土直下のⅣb 層からの掘り込みを確認している。東西方向へ走行する溝である。この地区では本溝も含め 5 条の溝が並走する。調査区中央では深さが浅くなり検出できなかった部分もあるが、西から東側まで連続すると推定される。東端では枝分かれし、溝の範囲は曖昧となる。主軸方位は N-88°-E で、東西に位置する建物群と主軸方位をほぼ同じくする。検出長 45.80m、幅 0.80m、確認面からの深さ 0.10m を測る。断面形は弧状を呈する。覆土は地点ごと

に様相が変化するがおおむね単層で、黒褐色土、暗オリーブ褐色シルトが堆積する。

本溝は北側の SD9025–SD9085 と並行する。両溝間の距離は西側では 3.90 ～ 4.12m とほぼ均一で、東側では 2.68 ～ 2.44m と狭くなり SD9008 の平面形が曖昧となる。硬化面の確認はないが、両溝は道路の側溝であると推定する。重複関係は SK9016 を切る。

調査区内に設定した東西・南北ベルト断面で、本溝も含め側溝（道路）と推定する溝の上層に硬化面がある。時期は不明だが、溝埋没後も範囲を同じくして道路として使用した可能性がうかがえる。

SD9024（図版 80・81・268）　20A・B、21B・C、22C ～ E、23E に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。調査区内に設定した東西・南北ベルト断面の観察からⅣb 層からの掘り込みを確認している。東西方向へ走行する溝である。この地区では本溝も含め 5 条の溝が並走する。主軸方位は N–86°–E で、東西に位置する建物群と主軸方位をほぼ同じくする。検出長 44.80m、幅 0.72m、確認面からの深さ 0.31m を測る。断面形は弧状～台形状を呈する。覆土は地点ごとに様相が変化するがおおむね 2 層に分層した。黒褐色・灰オリーブ色・オリーブ黒色シルトが堆積し、レンズ状を呈する。重複関係は SD9085、SK9131 を切る。

本溝は南側の SD9027 と並行し、両溝間の距離は 2.68 ～ 2.80m とほぼ均一である。両溝は硬化面の確認はないが道路の側溝であると推定する。

SD9025・SD9085（図版 80・81・268）　20A ～ 23E に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。調査区内に設定した東西・南北ベルト断面の観察からⅣb 層からの掘り込みを確認している。両溝とも東西方向へ走行する溝である。この地区では両溝も含め 5 条の溝が並走する。SD9085 は規模・配置状況から SD9025 と連続する溝と考える。主軸方位は SD9025 が N–85°–E、SD9085 が N–90°–E で東西に位置する建物群と主軸方位をほぼ同じくする。両溝合わせての検出長 34.20m、幅 0.35m、確認面からの深さ 0.06m を測る。断面形は弧状～台形状を呈する。覆土は地点ごとに様相が変化するがおおむね単層で、黒褐色・オリーブ黒色シルトが堆積する。重複関係は、本溝と並走する SD9024 に切られ、SK9092 を切る。

両溝は南側の SD9008 と西から東方向へほぼ均一な間隔で並行し、SD9008 と対になる側溝（道路）であると推定する。

SD9027（図版 80・81・268）　20A・B、21B・C、22C・D、23D・E に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。調査区内に設定した東西・南北ベルト断面の観察からⅣb 層からの掘り込みを確認している。東西方向へ走行する溝である。この地区では本溝も含め 5 条の溝が並走する。主軸方位は N–88°–E で東西に位置する建物群と主軸方位をほぼ同じくする。検出長 44.90m、幅 0.58m、確認面からの深さ 0.20m を測る。断面形は弧状～台形状を呈する。覆土は地点ごとに様相が変化するがおおむね 2 層に分層し、暗灰黄褐色土～暗オリーブ褐色土がレンズ状に堆積する。重複関係は、本溝と並走する SD9025 を切る。

本溝は南側の SD9024 と並行し、道路の側溝であると推定する。

SD9055（図版 80・81・268）　19E、20D・E、21D に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。調査区内に設定した東西ベルト断面の観察によりⅣb 層からの掘り込みを確認している。南北方向へ直線的に走行する溝である。本溝北端から北方向約 4m に東西方向に並走する溝群（道路）が位置する。主軸方位は N–10°–W で、溝群（道路）とほぼ直交する。検出長 17.13m、幅 0.50m、確認面からの深さ 0.20m を測る。断面形は台形状を呈し、覆土は 2 層に分層し、Ⅳc・Ⅴ層土ブロックを含む黒褐色・暗オリーブ褐色シルトが水平に堆積する。

南側は調査区外へ伸び全体形は不明だが、規模・形状、主軸方位から溝群（道路）と関連を持つ可能性

があると推定する。

SD9067（図版 80・81）　22C11 に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。主軸方位は N–60°–E で、検出長 1.30m、幅 0.47m、確認面からの深さ 0.24m の短い溝である。断面形は弧状を呈する。覆土は 3 層に分層し、暗オリーブ褐色シルトがブロック状に堆積する。重複関係は SD9027 に切られる。

SD9134（図版 80・268）　21・22B、21C に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。南北方向へ直線的に走行する溝である。主軸方位は N–10°–W で、本地区で東西方向に並走する溝群（道路）とほぼ直交する。検出長 10.80m、幅 0.36m、確認面からの深さ 0.08m を測る。断面形は弧状を呈し、覆土は単層で、Ⅳc 層ブロック含む灰オリーブ色シルトが堆積する。SD9000 と重複し本溝が切られる。

規模・形状、主軸方位から溝群（道路）と関連を持つ可能性があると推定する。

e　性格不明遺構（図版 81）

SX8341（図版 81）　17D4・5・9・10 に位置する。平面形は不整形だが、20cm 下がった面で一旦平坦になり、底面は隅円方形状になる。さらに北東部に長径 0.8m の楕円形の掘り込みがあり、別遺構の可能性がある。断面形はやや凹凸がある弧状、北東部の掘り込みは台形である。覆土は下層で西半分が青みを帯びてグライ化しているが理由は分からない。

SX8343（図版 81）　SE8353 の南側、17C24・25 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は不整形で、断面形はおおむね U 字状だが起伏が多い。長径 1.98m、深さは検出面から 0.61m。覆土は 4 層に分層した。レンズ状に堆積するが 2 層は上下に乱れた堆積状況で起伏がある。遺物は出土していない。周囲には倒木痕が存在しており、本遺構もこれらに類する可能性もある。

SX9013（図版 81）　20B22・23 グリッドに位置する。確認時の平面形は不整形な方形であった。倒木痕によくある三日月状の下層土層がないことから、遺構の可能性があるとして調査した。断面形は弧状である。底面は凹凸がある。覆土はⅣb 層土とⅤ層土の混合土で充填される。付近には溝以外には特に居住に関連する遺構がない。また、人為的に埋められた痕跡も見当たらないことから倒木痕の可能性が強い。

4）C 区居住域（図版 28・29・72・82 ～ 96・269 ～ 276・294・295）

C 区居住域は、SD9008・SD9025、SD9024・SD9027 から構成される道路と SD9538–SD5119、SD9542–SD5003 に区画された居住域である。掘立柱建物は 11 棟ある。掘立柱建物は南側の集中域と北側の集中域に分けられ、両者は約 9m 離れている。それぞれの集中域で建て替えが行われているが、いずれも建物の位置が大きく移動することはない。上屋付の井戸が主屋に伴うのも特徴である。

a　掘立柱建物（図版 82 ～ 92・269 ～ 271）

SB9370（図版 82・271）　23C、24C・D に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。本建物北～北西方向で中世後半の建物・井戸・土坑・ピットが検出され、西～南西方向では遺構の検出はほとんど見られない。桁行 3 間（6.07m）×梁行 1 間（3.92m）の二面廂付梁間一間型建物で、身舎の面積は 23.8m^2、廂を含めた面積は 36.5m^2 を測る。桁行方向 N–83°–E の東西棟である。

身舎は 8 基の柱穴から構成され、ほかに桁行方向に 3 基の柱穴、梁行方向に 3 基の柱穴が位置し廂と推定した。柱穴の形状は平面形・断面形に類似するものが多く見られる。平面形は P9052・P9372 が楕円形を呈するほかは円形を呈する。断面形は P9045・9394、P9390 が階段状を呈するほかは U 字状を

呈する。身舎 SK9387 は断面形が階段状を呈し、底面に柱穴状の落ち込みがある。形状・位置から底面の落ち込みは建物構成柱穴の可能性が高い。柱穴覆土はオリーブ褐色・黒褐色土が堆積する。残存する柱根はなく、土層断面の観察から 10 基の柱穴で推定径 6 ～ 18cm の柱痕を確認した。柱穴間距離は身舎で桁行方向北から 1.96 ～ 2.07m でほぼ等間隔である。身舎西側の P9052・P9168・P9166 は建物に付属する廂と推定するが、身舎からの柱間距離が 1.37m とかなり広くなることから、目隠し塀等の可能性も推定される。SK9387 に切られ、SD9171 を切る。

SB9054（図版 83・84・269・270）　24・25C・D グリッドに位置する。桁行 4 間（9.44m、廂含め 11.00m）×梁行 1 間（4.16m、廂含め 6.06m）の四面廂付梁間一間型建物である。身舎は長方形であるが、梁行側の廂が胴張型を呈する。桁行方向 N–82°–E の東西棟である。なお、身舎部東端の梁間の中間に位置する P9576 は深さが 9cm と浅く、建物の主要な構造柱ではなかったと考える。床面積は約 39.3m^2 である。身舎部桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.36m（7.8 尺）である。

構成ピットは全 27 基、このうち 10 基が身舎に関わる。規模と形状は径 24 ～ 39cm で、円形または楕円形で、深さは 9 ～ 72cm である。柱痕は 8 か所で確認し、推定される径は 6cm ～ 12cm である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9063 と SE9523 が存在する。SB9063 との新旧は、当遺構の P9498 と P9588 が SB9063 に属するピットを切っていることから、当遺構は SB9063 より新しい。SE9523 との新旧は、当遺構の P9593 が切られていることから、当遺構は SE9523 よりも古い。

SB9058（図版 84・269）　25D・E グリッドに位置する。桁行 2 間（2.56m）×梁行 1 間（1.92m）の小規模な側柱型建物である。桁行方向 N–11°–W の南北棟である。構成ピットは全 5 基である。規模と形状は、径 19 ～ 29cm の円形または楕円形で、深さは 4 ～ 35cm である。柱の平面配置は不整形で、ピットの深さも SB9058・SB9063 に比べて浅いことから、簡便な建物と考える。

遺構範囲内には SE9566 が存在し、井戸を覆う建物である可能性がある。また、この建物の桁行方向は SB9054 及び SB9063 の梁行におおよそ同一であることから、どちらかの建物もしくは双方の建物に伴った遺構であると考える。

SB9063（図版 85・86・269・270）　24・25C・D グリッドに位置する。桁行 3 間（7.88m、廂含め 9.50m）×梁行 1 間（4.44m、廂含め 6.30m）の四面廂付梁間一間型建物と想定される。桁行方向 N–86°–E の東西棟である。梁行は 3 間の内中央部では 3.03m であるのに対して、東西部は 2.45m である。平面形は、身舎が長方形であるのに対して、廂では四隅の柱穴がやや内側に入り込み、胴張型を呈する。

構成ピットは全 21 基で、このうち 8 基が身舎に関わる。規模と形状は、径 21 ～ 46cm の円形または楕円形で、深さは 20cm ～ 62cm である。柱痕は 12 か所で確認し、推定される径は 7 ～ 16cm である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9054 と SE9523 が存在する。SB9054 との新旧は当遺構の P9499 と P9587 が SB9054 に属するピットに切られていることから、当遺構は SB9054 よりも古い。SE9523 との新旧は、当遺構の P9594 が切られていることから、当遺構は SE9523 よりも古い。

SB9220（図版 87・88・270）　26・27B・C グリッドに位置する。桁行 3 間（6.73m、廂含め 8.28m）×梁行 1 間（3.92m、廂含め 5.28m）の四面廂付梁間一間型建物と想定される。桁行方向 N–77°–E の東西棟である。身舎部桁行の柱間はおおよそ 2.09m(6.8 尺)である。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂では四隅の柱穴がやや内側に入り込み、胴張型を呈する。

構成ピットは全 20 基、このうち 8 基が身舎に関わる。規模と形状は、径 22 ～ 41cm の円形または楕円形で、深さは 4 ～ 59cm である。柱痕は 10 か所で確認し、推定される径は 6 ～ 16cm 程度である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9221・9222・9223・9961 と SK9434・9604 が存在する。掘立柱建物 4 棟と重複し、このうち SB9961–P9354 が本遺構の P9447 を切る。SK9434、SK9604 はそれぞれ P9586、P9090 に切られており、2 基の土坑は当遺構よりも古い。

SB9221（図版 88・271）　26・27B・C グリッドに位置する。桁行 3 間（8.38m）×梁行 1 間（3.70m、廂含め 4.83m）の一面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–74°–E の東西棟である。梁行は中央部では 3.18m であるのに対して、東西部は 2.58m である。廂は北側につき、幅は 1.21m である。身舎の平面形は長方形であるが、北西隅が若干南側に入り込むために北辺のみ胴張状を呈する。

構成ピットは全 11 基、このうち 8 基が身舎に関わる。規模と形状は P9471 が径 52cm と大型であったが、それ以外は径 22 ～ 28cm であった。形状は円形または楕円形を呈し、深さは 8 ～ 34cm で、身舎に比べ廂部または下屋部のほうが 10cm 程度深い構造であった。柱痕は 3 か所で確認し、推定される径は 6 ～ 12cm 程度である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9220・9222・9223・9961 と SE9469 が存在するが、4 棟の重複している建物との新旧は切り合い関係がない事から不明である。SE9469 は P9471 を切っていることから当建物より新しい。

SB9222（図版 89・90・271）　26・27B・C グリッドに位置する。桁行 3 間（9.32m、廂含め 11.32m）×梁行 1 間（4.10m、廂含め 5.87m）の胴張型の四面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–74°–E の東西棟である。身舎西側の梁間に P9467 があるが、ピット規模から考えるならば主要な構造柱ではなく、この建物も梁間一間型であった可能性が高い。身舎部の梁行は 3 間の内で、西の 2 間が 3.18m であるのに対して、東の 1 間は 2.88m である。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂は胴張型を呈する。

構成ピットは全 24 基である。径 24 ～ 50cm、形状は円形、方形、楕円形で、深さは 17 ～ 46cm である。柱痕は 8 か所で確認し、推定される径は 10 ～ 16cm 程度である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9220・9221・9223・9961 と SE9469 が存在する。掘立柱建物 4 棟と重複しているが、新旧は切り合い関係がない事から不明である。SE9603 は P9072 を切っていることから、当建物よりも新しい。なお、北西部は SD3007 に切られ、北西隅のピットは確認できなかった。

SB9223（図版 91・271）　26・27B・C グリッドに位置する。桁行 3 間（6.80m）×梁行 1 間（4.10m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N–79°–E の東西棟である。南東隅の P9614 の東、2.20m には P9662 が確認できたが、北東隅の P9638 の東にはピットは確認できなかった。

構成ピットは 8 基と推定し、うち 7 基を検出した。形状は円形や楕円形で、規模は径 23 ～ 30cm、深さは 8 ～ 33cm である。柱痕は 1 か所で確認し、推定される径は約 10cm である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9220・9221・9222・9961 があるが、それぞれの建物との切り合い関係がないため、新旧は不明である。当遺構の北側には SD3007 があり、北側の桁行はすべてこの溝内で確認し、この溝に切られている。

SB9961（図版 91）　26・27B・C グリッドに位置する。桁行 3 間（6.24m）×梁行 1 間（3.24m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N–80°–E の東西棟である。南西隅の P9430 の西、2.0m には P9425 が

確認できたが北西隅の P9354 の西ではピットは確認できなかった。

構成ピットは 8 基と推定し、うち 7 基を検出した。形状は円形や楕円形で、規模は径 24 ～ 38cm、深さは 10 ～ 50cm である。柱痕は 2 か所で確認し、推定径は約 9 ～ 12cm である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SB9220・9221・9222・9223 があり、このうち SB9220–P9447 が本遺構の P9354 に切られる。

SB9962（図版 92）　26C グリッドに位置する。桁行 2 間（3.60m）×梁行 1 間（1.74m）の胴張型の側柱型建物である。平面形は桁行南辺がやや張り出す。桁行方向 N–73°–E の東西棟である。構成ピットは 7 基である。形状は円形や楕円形で、規模は径 20 ～ 28cm、深さは 18 ～ 31cm である。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SE9440 があり、本遺構が井戸の上屋施設などの可能性がある。

SB9963（図版 92）　25・26B・C グリッドに位置する。桁行 2 間（3.70m）×梁行 2 間（3.32m）の胴張型の側柱型建物である。平面形は梁行西辺がやや張り出す。桁行方向 N–79°–E の東西棟である。構成ピットは 7 基である。形状は円形や楕円形で、規模は径 17 ～ 31cm、深さは 12 ～ 34cm であるが、P9452 だけが突出して深く、ほかは 13 ～ 16cm にまとまる。各ピットからの出土遺物はない。

遺構範囲には SE9453 があり、本遺構が井戸の上屋施設などの可能性がある。

b　井　　戸（図版 93 ～ 95・272 ～ 274）

SE5001（図版 93・272）　29B2・3・7・8 グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。長径 1.44m、短径 1.40m を測る。深さ 2.56m まで掘り進んだところで上部が崩落し、危険だったため、後日半截して下層の調査を継続する予定として調査を中断した。その後、地下水が湧出して再び崩落を始め、調査区外に被害が及ぶ恐れが生じたため、調査継続を断念した。調査できたところまでの覆土は、上層ではⅡ層が深く落ち込んでいた。これは下層部に多量の有機物の堆積等があり、腐敗により空隙が生じ、そこへⅡ層が落ち込んだことを示している。中層は多量のⅤ層土の大きなブロックが混入しており、短時間に意図的に埋められた可能性がある。この層の下部にはグライ化した粘質土層があり、Ⅱ層の落ち込みの原因と見られる藁状の有機質を含んだ層が堆積していた。側板等の施設の痕跡はなく、出土遺物もない。

SE9357（図版 93・272）　SB9370 の南側、23C25 グリッドに位置する。Ⅳc 層で検出した。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈する。長径 0.82m、短径 0.75m を測る。深さは検出面から 1.9m で砂礫層に達する。覆土は 6 層に分層した。2 層から 5 層は暗オリーブ色から灰色を呈する粘質土でⅣc 層土ブロック、径 3 ～ 5cm の小礫を多く含んでいた。最下層は灰色粘土と黒褐色粘質土が互層に水平堆積する。出土遺物はない。

SE9440（図版 93・272）　重複する建物群の南側、26C14 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈する。長径 1.01m、短径 0.87m を測る。深さは検出面から 1.52m と浅く砂層には達していない。覆土は 8 層に分層した。炭化物を多く含む暗褐色から黒褐色の互層堆積で 7 層は人為的に埋め戻した様相。遺物は 5 層から珠洲焼片口鉢（134）、7 層から須恵器甕片（135）、6 層から小型椀形鍛冶滓が出土しており、最下層では煤の付着した大きさの異なる礫が多数出土した。底面に敷き詰めたような状況もうかがえるが、大きな礫自体も割れていることから投げ込まれたものか。本遺構は比較的浅く、砂礫層に達していないことから井戸以外に機能した可能性もある。また、井戸を囲むよ

うな７基のピットからなる SB9962 は本井戸の上屋と推定する。

SE9453（図版 94・272・273）　重複する建物群の南側、26C1・6 グリッドに位置する。この付近は削平を受けており遺構はⅤ層上面で検出した。平面形は円形、掘形は漏斗状を呈する。長径 2.13m、深さは検出面から 2.06m で砂層に達する。覆土は 17 層に分層した。上半部はレンズ状堆積、下半部は腐植物を多く含み黒褐色から灰色を呈する粘質土が堆積する。遺物は２層から砥石(297)、13 層から土師質土器、13・14 層の中央付近に砥石（295・296・298）や礫が出土、底面付近の 16 層からはガラス質滓、壁際に下駄（375）や柄杓と思われる曲物（374）、鎌の柄（373）や箸状木製品（376）、木片、17 層から箸状木製品、木片が出土した。周囲には SB9963 が井戸を囲むような配置で存在するので、本井戸の上屋と推定する。

SE9469（図版 94・273）　重複する建物群の東側、26B13・18 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈する。長径 0.96m、深さは検出面から 1.94m で砂層に達する。覆土は９層に分層した。１層から６層はやや入り組んでいるが７層以下はしまりのない黒褐色から褐灰色の粘質土がレンズ状堆積する。堆積土は有機質を多く含み、比較的大きな礫やこぶし大の礫が７層から底面にかけて多くある。遺物は７・８層から砥石各１点（299・300）が出土した。本井戸は SB9221 の P9471 を切っている。建物の配置から、東へ 4m 弱離れる SB9220 と関連すると思われる。

SE9523（図版 94・273・274）　２棟の建物が重複する 25D10 グリッドに位置する。Ⅳｃ層で検出した。平面形は円形、掘形は漏斗状を呈する。長径 1.73m、深さは検出から 2.05m で砂層に達する。覆土は 17 層に分層した。上層はレンズ状堆積だが、幅約 3cm の縦に入る筋状の９層を境に外側はブロック土の混入が多くしまりが強い。14 層以下は黒褐色から灰オリーブ色土で最下層はⅧｃ層に似た黄灰色土で粗砂を多く含み壁の崩落土と考える。遺物は少なく、16 層で用途不明部材（377）と少量の木片が出土した。本井戸は SB9054–P9593、SB9063–P9594 を切る。

SE9566（図版 95）　重複する２棟の建物の東側、25D24 グリッドに位置する。Ⅳｃ層で検出された。平面形は円形、断面形はＵ字状を呈する。長径 0.94m、深さは検出面から 2.24m で砂層に達する。覆土はレンズ状堆積で、1m 掘り下げると湧水があり腐植物を多く含む粘性の強い黒褐色土である。遺物は７層から砥石（303）が１点、枝状の木片が少量出土した。本井戸には上屋と思われる SB9058 が伴うと考える。

SE9603（図版 95・274）　重複する建物群の東側、26C15・27C11 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。平面形は円形、掘形はほぼ漏斗状を呈する。長径 1.42m、深さは検出面から 2.22m で砂層に達する。覆土は 12 層に分層した。１～８層はやや入り組んでいるが、９層以下は腐植物や炭化物を含む黒褐色土が水平堆積する。遺物は井戸下部から多く出土した。10 層から瀬戸・美濃焼平椀片（136）、越前焼甕片（137）、珠洲焼甕片（138）、砥石（301・302）や礫、11 層から杭（370）、12 層から曲物（369）、椀（371）、挽物皿（372）や木片が出土した。曲物（369）は底面の砂層直上で出土し、椀（371）は曲物上部と底面直上に位置し接合した。本井戸は SB9222–P9072 を切っている。

ｃ　土　　坑（図版 95・275）

SK9165（図版 95･275）　23C10、24C6 に位置する。Ⅳｃ層上面で確認し検出した。平面形は不整形で、長径 0.92m、確認面からの深さは 0.34m を測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位から上位にかけて外側へ屈曲しテラス状の平坦面を持つ。底面は円形を呈し、ほぼ平坦である。覆土は２層に分層し、

1 層はオリーブ褐色シルト、2 層は黄灰色砂質シルトが堆積する。レンズ状の堆積状況で自然埋没と推定される。出土遺物はない。断面形状から柱穴の可能性も推定される。

SK9225（図版 95・275）　24E2・3 に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。平面形は円形で長径 0.84m、確認面からの深さは 0.57m を測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり台形状の断面形を呈する。底面は不整な楕円形を呈し中央に向かって緩やかに傾斜する。覆土は 4 層に分層し、1･2 層はⅣc 層土ブロックを含む暗オリーブ褐色シルト、3・4 層はⅣc 層土ブロックを斑紋状に含む黒褐色シルトが堆積する。斜位・水平堆積でブロックを斑紋状に含むことから、人為的埋土と推定される。出土遺物はない。

SK9434（図版 95・275）　建物が重複する 26C10・15、27C6・11 グリッドに位置しⅤ層上面で検出した。円形を呈する土坑で長径 1.21m、深さは検出面から 0.26m を測る。覆土は 3 層に分層し、暗褐色から黒褐色を呈する粘質土で炭化物、Ⅴ層土ブロックを含む。出土遺物はない。本遺構は P9591、SB9220–P9586 に切られる。

SK9387（図版 82・275）　24C21 に位置する。Ⅳc 層上面で検出した。平面形は不整形で中端にテラス状の平坦面が見られる。長径 0.82m、確認面からの深さは 0.50m を測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり中位で外側へ張り出す階段状の断面形を呈する。底面は円形を呈し柱穴状となる。覆土は 2 層に分層し、1 層はⅣc 層土ブロックを斑紋状に含む暗オリーブ褐色粘土、2 層はⅣc 層土ブロックを含む暗灰黄色土が堆積する。斜位堆積でブロックを斑紋状に含むことから人為的埋土と推定される。出土遺物はない。本土坑は SB9370 廂部分に位置する。本土坑底面の柱穴状の落ち込みは、配置状況から建物に伴う柱穴の可能性が高く、本土坑が建物よりも新しいと推定される。

SK9551（図版 95）　25E9･10 グリッドに位置する。平面は方形を呈し、長径 0.96m、短径 0.92m を測る。断面は弧状を呈し、深さは 0.15m である。覆土は 3 層に分層でき、1 層は黒褐色土を主体とし、最下部には細砂粒が堆積する。2 層は暗灰黄色シルト、3 層は黒褐色土を主体としている。出土遺物はない。

SK9604（図版 95・275）　27C16 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。平面形は不整形で断面形は弧状を呈する。長径 0.94m、深さは検出面から 0.19m。覆土は暗褐色粘質土で炭化物・Ⅴ層土ブロックの量で 2 層に分層した。1 層から珠洲焼壺か甕片が 1 点出土した。本遺構は SB9220–P9090 に切られることから、西側の建物群に伴う遺構であろう。

d　溝・道路（図版 28・29・95・96・276・294・295）

SD9171・SD9253・SD9336・SD9412（図版 28・95・276）　25A・B、24B ～ D に位置する。Ⅳc 層上面で確認し検出した。SD9171・SD9253・SD9336・SD9412 は、連続する配置状況で覆土も類似することから、同一遺構として記載することとした。東西方向へ走行する溝で、東側が若干北方向へ屈曲する。主軸方位は N–33 ～ 39°–W である。検出長 31.7m、幅 0.30 ～ 0.42m、確認面からの深さ 0.05 ～ 0.10m を測る。西端で幅が広くなるほかはほぼ均一である。断面形は弧状を呈し、覆土は単層で褐灰色土、黒褐色土が堆積する。SB9370–P9045 に切られる。出土遺物はない。

25B1、24C23、24D18 で途切れるが、それぞれ掘立柱建物群のある場所と一致する。そこから、各建物群への出入口の可能性を考えておきたい。

SD5003・SD5119（図版 96・294・295）　SD5003・SD5119 は 28B・C、29B に位置する。南北方向に直線的に並走する。28C グリッドで近現代の溝 SD3007 に大きく掘り込まれた後、南方向の SD9542・SD9538 に連続する。両溝の主軸方位は N–5°–W で、SD9542・SD9538 とほぼ同じくする。断面

形は全体に弧状を呈し、規模はSD5003が幅0.62m、深さ0.22m、SD5119が幅0.54m、深さ0.11mを測り、SD5119が若干小規模である。底面は多少の起伏を持つがほぼ平坦である。覆土は両溝とも2層に分層した。上層は黒褐色・褐灰色土が堆積し、下層は灰色土の堆積が見られる。両溝は並行しつつ部分的に重複するが、覆土が類似し新旧の判断はし難い。連続するSD9542・SD9538も同様である。他遺構との関係は、SD5002、SD5036・P5163、SX9635を切り、SD3007、SD5004、SD9639（図版296）、SX5005、P5127に切られる。P5164と新旧不明である。出土遺物はない。

両溝はSD9542･9538と連続する配置状況で、南方の側溝（道路）としたC区溝群と軸方向が直交する。硬化面は確認しなかったが、集落内での道路または区割り溝等の用途が推定される。

SD9538（図版96・276）　25E～27Dグリッドに位置する。Ⅳc層からⅤ層にかけて検出した。南から北に走行する溝で主軸方位はN-15°-W。西側にはSD9542が接している。検出長20.50m、幅0.28m、深さは検出面から0.09m、断面形は台形状を呈する。覆土はⅤ層土ブロックを含む黒色土で単層である。遺物は出土していない。本溝はSD9542・3007等に切られている。27Dグリッドで一旦途切れるが北側のSD5119に接続すると考える。溝の走行方向から居住域を区画する溝と考える。

SD9542（図版96・276）　25E～27Cグリッドに位置する。Ⅳc層からⅤ層にかけて検出した。南北に伸びる溝でSD9538に接するような配置である。検出長28.68m、幅0.42m、深さは検出面から0.20mを測る。断面形は台形状、覆土はⅤ層土ブロックを含む黒色から褐灰色土で単層あるいは3層に分層した。遺物は近世陶器小破片が1点出土した。本溝はSD3007に切られるが、北側のSD5003に接続すると考える。SD9538と同様、居住域を区画する溝と考える。SX9602を切る。

SD9628（図版29・95・276）　27Bグリッドに位置し、東西方向に伸びる溝である。軸方向はN-87°-Wである。長さは9.25mで、最大幅は0.35mで、西端部が一旦途切れ、やや南に屈曲しているが、おおむね直線的に伸びる。断面の深さは0.10mで、形状は弧状である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。出土遺物はない。当溝はD区居住域とC区居住域にまたがって確認している、SD5002・SD5004・SD5036・SD5037・SD5112・SD5100の東西に走行する溝群の一部であると考える。

e　性格不明遺構（図版96・276）

SX9179（図版96・276）　26D22グリッドに位置する。形状は不整形で、長径0.50m、短径0.30mを測る。断面の深さは0.12m、台形状である。覆土は単層で、褐灰色土を主体とする。出土遺物はない。

SX9517（図版96）　25C23･24、25D3グリッドに位置する。平面は不整形で、長径0.75m、短径0.71mを測る。断面は不整形で、深さは0.27mである。覆土は単層で、黒褐色シルトを主体としている。出土遺物はない。なお、当遺構の東に位置するSX9526・SX9529・SX9533・SX9179・SX9602は当遺構を含めおおむね東西に並んで分布している。

SX9526（図版96）　25D10グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径0.78m、短径0.48mを測る。断面の深さは0.12m、形状は弧状である。覆土は単層で、褐灰色土を主体とする。出土遺物はない。

SX9529（図版96）　25D10・15、26D6・11グリッドに位置する。形状は楕円形で、長径0.65m、短径0.33mを測る。断面の深さは0.14m、形状は弧状である。覆土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトを主体とする。出土遺物はない。

SX9533（図版96）　26D11グリッドに位置する。形状は長径が0.94m、短径が0.45mで、不整形である。断面の深さは0.19m、形状は弧状である。覆土は2層に分層した。1層は地山ブロックを多く含む黒褐

色土を主体し、2 層は暗灰黄土を主体とする。出土遺物はない。

SX9602（図版 96）　26D22・23 グリッドに位置する。形状は不整形で、長径 0.64m、短径 0.50m を測る。断面の深さは 0.18m、形状は不整形である。覆土は SD9542 掘削時に大部分を掘削してしまったため不明である。しかしながら遺構覆土残部の状況から、SD9542 に切られている可能性が高い。出土遺物はない。

SX9635（図版 96）　28C1･6･7 グリッドに位置する。形状は楕円形で、現存部で長径 1.70m、短径 0.62 を測る。断面の深さは 0.08m、形状は弧状である。覆土は単層で、黒褐色土を主体とする。西へ 2.5m の所にある SD9628 の覆土と共通するので、一連の遺構の可能性がある。遺構の切り合いは SD3007、SD9639、SD5003、SD5119 に切られている。出土遺物はない。

5）D 区居住域（図版 29・30・35・97 ～ 132・277 ～ 296）

D 区居住域は、SD9538–SD5119、SD9542–SD5003 と道路 SF3201 に区画された居住域である。複数の区画溝があるが、時期を経るに従って区画が変更されていたようである。掘立柱建物を 26 棟検出した。SD5112 と SD3501 を挟む南北に集中域が形成され、建て替えが行われている。しかし、C 区のようにほぼ同じ場所に建て替えるのではなく、若干場所を変えながら建て替えが行われている。集中域から独立した場所に複合型建物 SB5301 がある。内部に土坑を伴う作業小屋のような建物 SB5302 もある。

D 区居住域の建物は作りが非常に整っていることから、建築技術者が普請に関わった可能性がある。

a　掘立柱建物・杭列（図版 98 ～ 121・278 ～ 286）

SB9904（図版 98・286）　27D・E に位置する。周囲にほかの掘立柱建物はなく、独立している。桁行 3 間（6.78m）×梁行 1 間（3.56m）の、二面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–10°–W の南北棟である。身舎桁行の柱間平均は 2.23m、梁行の柱間平均は、3.60m を測る。廂を含めた面積は 33.1m^2 を測る。廂の柱穴 P9686 がやや内側に入り込み、廂の梁行・桁行は身舎と並行しない。柱穴は身舎部分で断面 U 字形、平面円形を呈するものが多く、廂部分と比べ深さが深くなっている。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂は桁行・梁行ともやや胴張状を呈する。

SB9904 の範囲内に SE9666 があるが、切り合い関係がないため新旧は不明である。東側には SE9660・SE9654 があるが、本遺構のほかに掘立柱建物がないので関連があるかもしれない。北側には P9068・P9239・P9070・P9903・P9687・P9071・P9237 があるが、杭列あるいは小規模な建物があった可能性がある。

SB5295（図版 99・100・278・279）　31C ～ E、32D・E に位置する。桁行 5 間（10.76m）×梁行 1 間（4.10m）の、四面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–85°–E の東西棟である。

桁行の柱間平均は 2.14m、梁行の柱間平均は 4.04m を測る。廂の桁行は 13.32m、梁行は 6.56m で廂を含めた面積は 87.4m^2 である。柱穴は平面形が楕円形・円形を呈するものが大半である。柱穴の深さは 24 ～ 96cm で、北面の廂部分で 10cm 程深さが深くなる。5 基の柱穴から推定径 10 ～ 12cm の柱痕を検出した。

建物内には SB5297、SD5112 ほか土坑・ピットが位置するが、新旧関係不明なものが多い。新旧関係を把握できたものは、建物構成柱穴との切り合いから、本建物が SK3519 より新しく、SD5112 よりも古い。また、SD5112 は、平面形からすれば SB5297 を避けて回り込む様に屈曲しており、SB5297

が存在した時期に溝が掘削された可能性がある。本建物と SB5297 との関係は、溝との関係から本建物の構築時期が古い可能性がある。

SB5296（図版 100・279）　32D・E に位置する。桁行 2 間（6.26m）×梁行 1 間（3.44m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N–90°–E の東西棟である。桁行の柱間平均は 2.77m、梁行の柱間平均は、3.38m を測る。柱穴は径 26 ～ 50cm の円形を呈するものが大半で、ほかに楕円形がある。深さは 18 ～ 39cm である。P3970 で柱痕を検出した。SK3971・3976 とも重複するが新旧関係は不明である。

SB5297（図版 101・279）　31D・E、32E に位置する。桁行 3 間（6.36m）×梁行 1 間（4.36m）の南側に廂が付く一面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–89°–W の東西棟である。桁行の柱間平均は 2.13m、梁行の柱間平均は、4.34m を測る。廂の梁行は 0.80m で廂を含めた面積は 33.1m^2 を測る。柱穴は身舎部分で断面 U 字状、平面円形を呈するものが多く、廂部分と比べ深くなっている。P5266・P5273 で柱痕を検出した。本建物内に SB5295・SB5298・SB5299、SK3786・SK3840・SK3983、SX3884 が位置する。新旧関係は本建物が SK3786 を切る。また、SB5295・SB5298・SB5299、SK3840・SK3983、SX3884 とは新旧不明である。

SB5298（図版 101・102・279）　30E、31D・E に位置する。桁行 4 間（8.88m）×梁行 1 間（3.83m）の西側に廂が付く一面廂付梁間一間型建物である。桁行方向 N–1°–W の南北棟である。桁行の柱間平均は 2.20m で、梁行の柱間平均は、3.82m を測る。柱穴は径 23 ～ 72cm の円形・楕円形・不整形で、深さは 25 ～ 74cm である。P3759・P3892 で柱痕を検出した。SB5297、SK3786、SK5252 と重複するが柱穴の切り合いがないため新旧不明である。

SB5299（図版 102・103・279）　31・32E に位置する。桁行、梁行はともに調査区外に伸びているため不明であるが、付近のほかの SB を考慮すると二面以上廂付梁間一間型建物と推定できる。検出した長軸方向を桁行方向とすれば、桁行 3 間（6.26m）以上、梁行 1 間（3.96m）以上の南北棟が想定される。桁行方向は N–2°–W である。桁行の柱間平均は 2.17m、梁行の柱間平均は 2.08m、廂部分を含めた現存床面積は 39.8m^2 を測る。廂の桁行は 2.08m、北側端は 1.18m、梁行は 1.0 ～ 1.18m へと南側に向かって徐々に広がる。柱穴は径 34 ～ 84cm の円形・楕円形・不整形で、深さは 30 ～ 78cm である。P3788・3660・5221・3842 で柱痕を検出した。SK3624・3983 とは新旧不明である。

SB5300（図版 103・279）　29・30B・C に位置する。桁行 3 間（7.20m）×梁行 1 間（3.70m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N–9°–W の南北棟である。桁行の柱間平均は 2.41m、梁行の柱間平均は、3.64m を測る。柱穴は径 26 ～ 32cm の円形・楕円形・方形で、深さは 21 ～ 56cm である。P5124・5074・5067・5064 で柱痕を検出した。SD5037・5112 と重複するが新旧関係は不明である。

SB5301（図版 104・280）　29・30D・E に位置する。梁間一間型建物を 2 棟平行に接続した複合型建物である。桁行方向 N–85°–E の東西棟である。08 年度調査では北側の南北の両方に廂を持つ建物と南側に並行する別の 2 棟の建物を想定していたが、09 年度に南側を調査した結果、組み合う柱穴が検出されず、柱通り、柱穴配置から両者を合わせて一棟の建物とした。建物中央を東西の近現代の溝 SD3007 に大きく切られているが、中世溝 SD5002 を切っている。規模は桁行 5 間×梁行 3 間で、北側に 1 間（1.6m）の廂が付く。梁行 3 間のうち、2 間目の間尺は廂よりも少し狭い 1.4m になっている。構造はいわゆる南北棟の梁間 1 間型に南北両面に廂を付け、さらに南側に同規模の梁間 1 間の掘立建物を付け足した形になっている。中央の廂に当たる並行した 2 列の柱列部分がどのような役割を果たしているのかはよく分からないが、先に記したように柱通りは非常によく、桁行柱間は 2.1m 前後の等間、梁行は

北から 1.6m、4.2m、1.4m、4.5m となっている。床面積は 91.5m^2 である。北側の廂部分を含めると 106.0m^2 になる。

柱穴の規模は身舎のものは、平面形は楕円形や円形が多く、径は 26 ～ 58cm の幅があるが、多くが 30 ～ 40cm の間に収まり、規格性がうかがわれる。深さは北側廂の柱穴はほかに比べて浅いが、ほかの柱穴は 23 ～ 62cm で、ばらつきがある。また、柱痕を残すものは 11 基あり、柱痕径は 8 ～ 18cm であった。覆土はⅣ層土でシルト質の土で構成されるが、一部Ⅲ層土が混じる。遺物は出土していない。

SB5302・SK3925・SX5345（図版 105・128・280）　SB5302 は 32E7・8・12・13 に位置する。SD5112 と重複するが新旧関係は不明である。また、建物内に SK3925 と SX5345 が位置する。桁行 1 間(2.22m)×梁行 1 間(2.20m)の方形型建物である。平面形は南側が少し広い方形を呈する。桁行方向は N-84°-E、梁行の柱間平均は 2.11m、桁行の柱間平均は 2.00m、床面積は 4.9m^2 を測る。柱穴は径 30 ～ 54cm の楕円形の平面形を呈し、深さは 24 ～ 60cm を測る。

SK3925・SX5345 は 32E7・8・12・13 で検出した。共に SB5302 内に位置し、重複する。SK3925 は平面形が楕円形、断面形が台形を呈し、長径 1.45m、短径 1.16m、深さ 15cm を測る。覆土を 3 層に分層し、2・3 層はオリーブ褐色シルトが堆積する。1 層は炭層、2・3 層は炭ブロックが斑紋状に多量に混入する。

SX5345 は完掘した状況で検出したため、SK3925 との重複関係、堆積状況等は不明である。平面形が円形、断面形が弧状を呈し、長径 1.02m、短径推定長 1.0m、検出面からの深さ 8cm を測る。底面は若干の凹凸が見られるがほぼ平坦で小ブロック状の炭化物が残存している。SK3925 に関連する作業場的場所だった可能性がある。

SB5324（図版 106・281）　34D・E、35D グリッドに位置する。桁行方向 N-9°-W の南北棟である。桁行 3 間(8.64m)×梁行 1 間(4.28m)の梁間一間型建物で、床面積は約 37.0m^2 である。桁行の柱間は 2.87m（9.5 尺）である。

構成ピットは 9 基、うち中柱に想定したピットが 1 基である。身舎部ピットの規模は径 34 ～ 50cm の円形及び楕円形で、深さは 43 ～ 70cm である。柱痕は 5 基で検出し、径 10 ～ 12cm でおおよそ円形である。また、P4162 及び P4062 では底面が階段状であり、柱痕と想定される。P4162 と P4062 の中間には中柱（P4034）が想定され、規模は径 47cm で、深さ 15cm である。SB5325 と SB5326 と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5325（図版 107・281）　34・35D・E グリッドに位置する。南東隅に想定されるピットは確認できなかったが、桁行 4 間（4.24m）×梁行 1 間（3.15m）の梁間一間型建物で、床面積は約 13.4m^2 である。桁行の柱間は 1.06m（3.5 尺）と短く特殊な建物と考える。桁行方向 N-80°-E の東西棟である。

構成ピットは 9 基で、各ピットの規模は径 20 ～ 36cm の円形及び楕円形で、深さは 38 ～ 68cm である。柱痕は 6 基で検出し、径 6 ～ 12cm でおおよそ円形である。SB5324 と SK4045 と重複し、P4165 は SK4045 に切られているが、SB5324 との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5326（図版 107・108・281）　34D・E グリッドに位置する。桁行 3 間（7.04m）×梁行 1 間（3.36m）の梁間一間型建物で、床面積は約 23.7m^2 である。桁行の柱間は 3 間のうち南北部が 2.12m（7 尺）で、中央部は 2.87m（9.5 尺）である。桁行方向 N-8°-W の南北棟である。

構成ピットは 9 基、うち中柱としたピットが 1 基である。身舎ピットの規模は径 30 ～ 41cm の円形及び楕円形で、深さは 34 ～ 69cm である。柱痕は 2 基で検出し、径 10 ～ 13cm でおおよそ円形である。

また、P4105 と P4108 の中間には中柱（P4107）が推定され、規模は径 30cm で、深さ 11cm である。SB5324 と SK4109、SK4045 と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5327（図版 108・281・282）　33D・E、34E グリッドに位置する。遺構の南東部が調査区外となるが、桁行 3 間（6.34m）×梁行 2 間（3.92m、廂含め 5.76m）の一面廂付梁間一間型建物と想定される。桁行方向 N–83°–E の東西棟である。廂を含めた面積は一部が調査区外であるため、推定で 36.9m^2 程度となる。桁行の柱間は 3 間のうち西から 2 間分は 1.97m（6.5 尺）で、東の 1 間分は 2.42m（8 尺）である。ほかの掘立柱建物では身舎と廂の柱穴間隔が身舎桁行きの柱穴間隔の約半分である例がほとんどであるが、SB5327 ではこれらがほぼ等しいのが特徴である。

構成ピットは 13 基、うち中柱としたピットが 1 基である。中柱を除くピットの規模は径 36 ～ 88cm で、楕円形のものが多く、深さは 16 ～ 68cm である。柱痕は 8 基で検出し、径 14 ～ 16cm で円形及び楕円形である。P4127 と P4134 の中間には中柱（P4129）が想定され、規模は径 27cm で、深さ 6cm である。SK4102 と SK4128 と重複するが、新旧関係は不明である。P4100 の柱痕から鉄滓が出土した。

SB5328（図版 109・282）　33C・D、34D グリッドに位置する。桁行 3 間（7.18m、廂含め 9.06m）×梁行 1 間（4.28m、廂含め 6.08m）の四面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約 55.1m^2 である。桁行の柱間は 3 間のうち南北部が 2.27m（7.5 尺）で、中央部は 2.87m（8.5 尺）である。桁行方向 N–82°–E の東西棟である。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂では西側梁行と南側桁行の P4118・P4119 が胴張状になっている。

構成ピットは 22 基で、各ピットの規模は径 25 ～ 40cm のおおよそ円形で、深さは 22 ～ 65cm である。柱痕は 5 基で検出し、径 9 ～ 16cm でおおよそ円形である。P3289 の遺構底面から礎盤と見られる扁平な石が出土した。SB5329 と SK4081･SK4086･SK4087 と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5329（図版 110・282）　33C・D、34C グリッドに位置する。桁行 3 間（7.48m、廂含め 8.40m）×梁行 1 間（4.28m、廂含め 5.00m）の二面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約 42.0m^2 である。桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.50m（8.25 尺）である。桁行方向 N–6°–W の南北棟である。

構成ピットは 16 基で、うち中柱としたピットが 1 基である。中柱を除くピットの規模は径 26 ～ 37cm で、おおよそ円形で、深さは 31 ～ 64cm である。柱痕は 3 基で検出し、径 10 ～ 15cm でおおよそ円形である。P3279 と P3346 との間には中柱（P3311）が想定され、規模は径 27cm で、深さ 20cm である。SB5328・SB5330、SK4081・SK3312・SK3314 と重複する。P4080 は SK4081 を切っているが、そのほか遺構との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5330（図版 111 ～ 113・282・283）　32C、33・34B・C グリッドに位置する。桁行 5 間（10.61m、廂含め 12.52m）×梁行 3 間（4.24m、廂含め 6.24m）の胴張型の四面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約 78.1m^2 である。桁行方向 N–6°–W の南北棟である。桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.12m（7 尺）であり、さらに梁間の合計は 4.24m（14 尺）で、廂部が 1.06m（3.5 尺）であることから、基準の尺度を 2.12m（7 尺）を用いた可能性が高い。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂では 4 隅が内側に入り込み、細長い胴張型を呈する。

構成ピットは 41 基で、うち中柱としたピットが 2 基である。各ピットの規模は径 25 ～ 45cm で、円形及び楕円形で、深さは 11 ～ 77cm である。柱痕は 27 基で検出し、径 8 ～ 18cm でおおよそ円形である。なお、身舎に該当する柱痕径の平均が 17cm 程度であるのに対し、廂に該当する柱径では、13cm 程度と、

身舎の柱が廂部に対し太くなる傾向であった。中柱としたP3336とP3338は規模的にはほかのピットと大きな差はなく、建物構造の一部であった可能性もある。SB5329とSB5331、SA5323、SE3384・SE3412と重複する。P3356はSB5331–P3355を切っていることから、当遺構はSB5331より新しい建物遺構である。またP3385はSE3384に切られていた。そのほかの遺構との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5331（図版113・114・282・283）　33B・Cグリッドに位置する。桁行3間(6.78m)×梁行1間(4.00m、廂含め4.84m）の一面廂付梁間一間型建物と推定される。桁行方向N–6°–Wの南北棟である。廂を含めた面積は一部がSE3384に切られているが、推定で32.8m^{2}程度となる。桁行の柱間はほぼ等間隔で2.27m(7.5尺）である。

構成ピットは11基で、うち中柱としたピットが1基である。中柱を除くピットの規模は径27～38cmの円形及び方形で、深さは33～73cmである。柱痕は1基で検出し、径8cmで隅円方形気味である。P3340とP3425との間には中柱が推定され、規模は径28cmで、深さ19cmである。SB5330、SE3384、SE3412と重複する。P3355はSB5330により切られており、当遺構はSB5330–P3356より古い建物遺構である。また遺構の北東部はSE3384によって切られている。そのほかの遺構との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5332（図版114・115・283）　32・33Bグリッドに位置する。遺構の西半部が調査区外となるが、現状では桁行4間（9.06m）以上、梁行1間（3.98m、廂含め6.14m）の二面以上廂付梁間一間型建物と推定される。桁行方向N–86°–Eの東西棟である。廂を含めた面積は一部が調査区外であるが、桁行を4間と想定すれば、推定で55.8m^{2}程度となる。桁行の柱間は4間のうち西の2間は1.97m（6.5尺）と227m（7.5尺）であり、東の2間分は2.42m（8尺）である。

構成ピットは13基で、うち中柱としたピットが1基である。中柱を除くピットの規模は径29～49cmの円形及び楕円形で、深さは16～54cmである。P3435とP3605との間には中柱P3439が想定され、規模は径36cmで、深さ47cmである。柱痕は中柱を含め3基で検出し、径10～15cmで円形及び隅円方形である。SB5333と重複するが、新旧関係は不明である。P4074から砥石（309）が出土した。

SB5333（図版115・283・284）　32・33Bグリッドに位置する。遺構の大半部が調査区外となるが、ピットが規則的に配列することから廂付の建物遺構と推定した。廂部を桁行とすると桁行方向N–85°–Eの東西棟である。規模などは不明であるが、現状では一面以上廂付梁間一間型建物と推定される。

構成ピットは6基で、規模は径30～40cmのおおよそ円形である。深さは39～68cmである。柱痕は1基で検出し、径10cmの円形である。SB5332と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5334（図版116・284）　32B・Cグリッドに位置する。桁行4間（8.36m）×梁行2間（3.79m、廂含め5.02m）の一面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約41.4m^{2}である。桁行方向N–87°–Eの東西棟である。桁行の柱間はほぼ等間隔で2.06m（6.8尺）である。平面形は身舎が胴張型を呈するが、廂桁行は直線的である。

構成ピットは15基で、規模は径28～45cmの円形及び楕円形で、深さは19～53cmである。柱痕は3基で検出し、径10～12cmでおおよそ円形である。SB5335・SB5336、SA5322・SA5323、SE3508・SE3513と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5335（図版116～118・284・285）　31B、32B・Cグリッドに位置する。桁行4間（8.04m、廂含め9.22m）×梁行2間（4.16m、廂含め6.28m）の三面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約57.9m^{2}である。桁行方向N-84°-Eの東西棟である。桁行の柱間は4間のうち西の2間分は2.06m（6.8尺）であり、東の2間分は1.97m（6.5尺）である。また梁行の柱間は2.06m（6.8尺）であることから、基準の寸法として、2.06m（6.8尺）と1.97m（6.5尺）が用いられた可能性が高い。平面形は身舎・廂ともに長方形を呈するが、廂の南東隅P3681は若干内側に入り込む。

構成ピットは28基で、うち中柱としたピットが2基である。各ピットの規模は径24～72cmの円形及び楕円形で、深さは22～70cmである。柱痕は8基で検出し、径12～23cmでおおよそ円形である。身舎部と廂部のピットの平均は、身舎部ではピット径が53cm、柱痕径が21cmであるのに対し、廂部ではピット径が21cm、柱痕径が17cmとなり、身舎部が廂部に対しそれぞれ大きくなる傾向であった。中柱と推定したP3623とP3639は規模的にはほかのピットと大きな差はなく、柱径は、12cmであった。建物構造の一部であった可能性もある。SB5334、SB5336、SB5337・SB5340とSE3508・SE3513と重複する。P3621はSB5340を切っていることから、当遺構はSB5340よりも新しい建物遺構である。また北側の廂部のピットをSE3513が切る可能性がある。そのほか遺構との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5336（図版119・284・285）　31B、32B・Cグリッドに位置する。未確認のピットも存在するが、桁行3間（6.36m）、×梁行1間（3.60m）の梁間一間型建物で、床面積は約22.9m^{2}である。桁行方向N-87°-Eの東西棟である。桁行の柱間はほぼ等間隔で2.12m（7尺）である。

構成ピットは6基で、規模は径30～45cmの円形または楕円形で、深さは32～60cmである。柱痕は1基で検出し、径10cmでおおよそ円形である。SB5334・SB5335・SB5340と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5337（図版119・120・285）　31Bグリッドに位置する。遺構の西北部が調査区外となる。現状では桁行2間（8.36m）×梁行1間（4.22m）の側柱型建物と推定される。床面積は一部が調査区外であるが、桁行を2間とすれば推定で35.3m^{2}程度となる。桁行方向N-84°-Eの東西棟である。桁行の柱間と梁間は4.24m（14尺）であり、桁行の柱間が広く、特殊な建物と考える。なお、桁行の柱間には不定の間隔でピットが確認できる。

構成ピットは10基で、規模は径29～48cmの円形または楕円形で、深さは21～54cmである。柱痕は2基で検出し、径は共に12cmでおおよそ円形である。SB5335・SB5338、SE3504、SD3501と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5338（図版120・285・286）　31Bグリッドに位置する。遺構の大半部が調査区外となるが、ピットが1.81m間隔で規則的に配列することから掘立柱建物と推定した。桁行方向N-84°-Eの東西棟である。規模は確認状況では桁行2間×梁行2間であるが、双方共に調査区外に伸びる可能性があり不明である。東側梁行が胴張状を呈する。

構成ピットは5基で、規模は径32～37cmのおおよそ円形で、深さは13～54cmである。柱痕は2基で検出し、径は共に14cmの円形である。SB5337とSD3501と重複するが、新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5339（図版120・121・286）　32C・Dグリッドに位置する。桁行3間（6.56m）×梁行2間（4.60m、廂含め6.76m）の胴張型の二面廂付梁間一間型建物で、廂を含めた面積は約45.4m^{2}である。桁行方向N-

7°–W の南北棟である。桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.18m（7.2 尺）である。平面形は長方形だが、身舎西側桁行は若干胴張状を呈する。

構成ピットは 18 基で、規模は径 24 ～ 83cm の円形及び楕円形で、深さは 8 ～ 74cm である。柱痕は 9 基で検出し、径 10 ～ 15cm でおおよそ円形及び楕円形である。SD3501、SE3511、SK3512 と重複し、P3530･P3531 は SD3501 を切っている。P5341･P5342 は調査面の状況が悪く新旧の確認を行っていない。SE3511、SK3512 については新旧関係が不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SB5340（図版 121・286）　31・32B グリッドに位置する。遺構の北西部が調査区外となる。現状で桁行 3 間（7.09m）以上、梁行 1 間（4.48m）の梁間一間型建物と想定される。床面積は一部が調査区外であるが、桁行を 3 間とすれば、推定で 31.8m^2 程度となる。桁行方向 N–80°–E の東西棟である。桁行の柱間はほぼ等間隔で 2.36m（7.8 尺）である。

構成ピットは 6 基で、規模は径 30 ～ 42cm のおおよそ円形で、深さは 29 ～ 46cm である。柱痕は 4 基で検出し、径 12 ～ 16cm でおおよそ円形である。SB5334･SB5335･SB5336 と SK3612 と重複する。P3619 は SB5335–P3621 に切られているので、当遺構は SB5335 より古い建物遺構である。そのほかの遺構との新旧関係は不明である。各ピットからの出土遺物はない。

SA5322（図版 105・280）　32B・C グリッド内に位置する。東西に伸びる杭列（柵か）で、主軸方位は N–84°–E である。約 1m 北にある SA5323 と並行する。長さは 9.8m で東は 32C5 グリッド、西は 32B7 グリッドまでとなっている。柱間はおおよそ 2.42m（8 尺）である。

構成ピットは 4 基でピットの規模は径 24 ～ 61cm の円形または楕円形で、深さは 21 ～ 54cm である。P3582 と P3595 の規模が大きく、P3578 と P3824 は小さく 2 極化している。

杭列（柵か）は SB5334 の建物範囲内に存在するが、新旧関係は不明である。また並行する SA5323 との関係も明らかでない。P3582 から硯（308）が出土した。

SA5323（図版 105・106・280）　32B・C、33C グリッド内に位置する。主軸方位 N–83°–E で東西に伸びる杭列(柵か)である。長さは 16.9m で東は 33C7 グリッドまでで、西は調査区外となる。柱間は 2.42m（8 尺）である。

構成ピットは 8 基でピットの規模は径 49 ～ 63cm のおおよそ楕円形で、深さは 48 ～ 75cm である。柱痕は 4 基で検出し、径 10 ～ 20cm でおおよそ円形である。柱痕は各ピット内の北寄りに位置している。また、柱痕を確認していないピットにおいても、切り合いが確認できることから、建て替えがあったものと推定する。P3547 から瀬戸・美濃焼椀型鉢片（139）が出土した。

杭列は SB5330 と SB5334 の建物範囲内に存在するが、新旧関係は不明である。また並行する SA5322 との関係も明らかでない。

b　井　　戸（図版 122 ～ 125・287 ～ 291）

SE9654(図版 122･291)　27E8･13 に位置する。Ⅴ層中で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径 1.81m、短径 1.49m、深さ 2.43m である。断面形は漏斗状で、下半部には側壁が横方向に大きく突出した部位を持つが、これは底部で貯留された井戸水の作用で側壁が浸食を受けたものと考える。隣接する SE9660 と同じく、砂礫層を貫いて粘土層を掘り込み、さらに下層の砂礫層まで達している。調査時、底面からの湧水は確認できず、むしろ上位の砂礫層から染み出した水が粘土の側壁を伝って底部に貯留される構造となっていた。覆土は 10 層に分けた。一部にブロック状の堆積が見られるが、全体的に自然堆積の様相を

呈する。その内、2 層は垂直的に立ち上がり、かつて井戸側が存在した可能性を示唆している。重複関係では、P9734 よりも新しい。SB9904 と隣接するが関連性は不明である。遺物は用途不明部材（378）、箸状木製品（380）、加工材（379）が出土した。

SE9660（図版 122・291）　27E4・9 に位置する。Ⅴ層中で検出した。平面形は長径 1.42m、短径 1.08m の楕円形を呈し、深さは 2.54m である。断面形は上部が箱状でほぼ垂直に立ち上がり、検出面下 1m 付近で径がやや狭まり、U 字状となる。下半部の側壁には横方向に突出した部位が認められるが、これは底部で貯留された井戸水の作用で側壁が浸食を受けたものと考える。井戸側等の施設はなく、素掘りの井戸である。透水層の砂礫層を貫いて、粘土層を掘り込み、さらに下層の砂礫層まで達している。調査時、底面からの湧水は確認できず、むしろ上位の砂礫層から染み出した水が粘土の側壁を伝って底部に貯留される構造となっていた。覆土は 9 層に分けた。上半部は粘性の強いシルトが主体で、礫層以下は粘土が主体である。上半部は 1 層・3 層が 2 層・4 層を切って、ブロック状に堆積しており、埋没した井戸を新たに掘削して、一度に埋め戻したと考える。埋め戻しに使用された土はⅧ層と土色が似ているが、質が異なり由来不明である。P9659 と重複するが新旧関係は不明である。また、SB9904 と隣接するが関連性は不明である。出土遺物はない。

SE9666（図版 122・291）　27D23・24、27E3・4 に位置する。Ⅴ層中で検出した。平面形は長径 2.37m、短径 1.50m の不整形な楕円形を呈し、深さは 1.80m で透水層の砂礫層まで掘り込まれている。掘形は漏斗状で、検出面下約 50cm から開口部にかけて外反して立ち上がる。底面から 40cm 程の高さには側壁が横方向に大きく突出した部位を持つが、これは底部で貯留された井戸水の作用で側壁が浸食を受けたものと考える。覆土は 12 層に分けた。粘性の強いシルトが主体で、一部にブロック状の堆積が認められるが、全体的に自然堆積の様相を呈する。このうち 4 層は垂直的に立ち上がり、かつて井戸側が存在した可能性が高い。また、底部に当たる 10 層では大小の自然礫が出土した。これら自然礫は径の大きなもので約 40cm もあり、自然に埋没したとは考えられず、何らかの祭祀的儀礼が行われた痕跡かもしれない。重複関係は P9099・P9732 より古い。SB9904 の区画内に所在し、建物に関連する施設の可能性が高い。尚、井戸に関わる SX9098 は炭化物を多く含む覆土を持つが、平面プランが不明確な上に明確な掘り込みが見られなかったことから、遺構周辺でしばしば検出された倒木痕である可能性が高く、ここに言及するに止める。

出土遺物は底面から珠洲焼Ⅳ期の片口鉢片（144）が 1 点出土した。

SE3384（図版 123・287）　33B25、33C5、34B21、34C1 グリッドに位置する。素掘り井戸で、平面形はやや不整形で長径 2.16m・短径 2.11m である。底面は西側に偏った水溜があり、東部は階段状となる。水溜は楕円形で、長径 1.10m、短径 0.76m を測る。深さは確認面から 1.79m で、底面標高が 12.47m となり、シルト層まで掘り込まれる。水溜の壁面は西側がほぼ垂直であるのに対し、東側は階段状となり、上段部壁面は内傾する。このため、上段部壁面の掘削を継続することは危険と判断し、断面のみ記録した。

覆土は 12 層に分層した。7 層から上層はおおむねにぶい黄色土ブロックが多く含まれる暗灰黄色土。9 層は炭化物を主体としており、この層の前後で使用を停止し、人為的に埋め戻した可能性がある。10・11 層は黄褐色の粘質土で地山との区別は難しい。12 層は壁面の地山に類することから壁崩落土と考える。12 層は再掘削が試みられているが、結局掘削できずに井戸の使用が停止されたようである。

遺構の新旧関係は SB5330・SB5331、SK3382、P3264 を切る。遺物は 1・2 層から珠洲焼（142・143）が出土した。

SE3400（図版 123・287）　33B9・14・15 グリッドに位置する。素掘り井戸で、平面形は円形で長径 1.61m、短径 1.58m、深さ 2.34m で、底面標高は 11.87m となり、砂礫層まで掘り込まれている。底面の形状は 0.76 × 0.66m でやや楕円形である。壁面は緩やかに外傾するが、下部の東壁面はオーバーハングする。

断面は 1.5m 程度まで截ち割りを行ったが調査区を水没させる豪雨に見舞われ、土層の観察面が崩落した。このため人力掘削を断念し、重機により截ち割りを行い底面の確認をした。土層ははっきり検討できなかったが、暗灰黄色のシルトを主体とし、径 50mm 以下のにぶい黄色の地山ブロックが見られた。また、底面付近でもシルトと砂を主体としており、底面に向かって砂の割合が多く含まれる。なお層中に炭化物層や遺物などは見られなかった。

SE3412（図版 123・287）　33B19・24 グリッドに位置する。素掘り井戸で、平面形は楕円形を呈する。長径 1.32m、短径 1.03m、深さ 2.18m で、底面標高は 12.02m となり、砂礫層まで掘り込まれている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、上位ではやや外傾する。底面の形状は 0.62 × 0.52m のおおよそ円形で、やや北に偏っている。また底面付近の壁面にあるえぐれは、当時の水位面を示すと考える。

覆土は 8 層に分層した。6 層と 7 層の境に炭化物層があり、6 層以上は水平堆積や斜方堆積などを示す。このことから 6 層以上は人為的な埋め戻しによる層と考える。

遺構の新旧関係は P3350 を切っている。出土遺物はおおむね 3 か所に集中している。1 か所目は 3 層と 4 層の境付近で珠洲焼小型片口鉢片（142）、漆塗膜、ガラス質滓（鉄滓）が出土した、2 か所目は炭層の上層付近で天目茶椀片（140）及び、被熱礫などが出土した。最後は炭層以下の 7 層のやや高い位置で漆器椀（390）、底面付近から曲物（391a・b）としゃもじ状製品（389）などが出土した。なお曲物の出土位地と壁面で確認できたえぐれ部はほぼ同じ高さであり、当時の水位面と考える。

SE3504（図版 123・288）　31B13・14 に位置する。平面形は円形で、長径 1.27m、短径 1.24m、底面標高 11.28m で、確認面からの深さ 2.74m を測る。断面形は U 字状である。砂層のⅧ層まで掘り込まれている。底面はほぼ弧状である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近で少し広がる。重複関係は、SD3501 を掘り込んでいる。SB5337 とは、新旧関係は不明である。覆土は 9 層に分層した。1 層は黄灰色シルト、2 層は暗オリーブ褐色シルト、3・5 ～ 8 層は黒褐色シルト、4 層は暗灰黄色シルトである。9 層はしまりが弱い黄灰色粘土である。1 層は焼土がわずかに混入する。炭化物は 2 層以下全体にわずかに混入する。2 層以下には小粒の灰オリーブ色土が混入するが、4･8 層に多い。2 層以下は斜方向の堆積で、8 層からは被熱した砥石（305）と礫が数点、8 層下部からは、むしろと思われる繊維質の遺物と曲物底板（385）が出土した。これらの遺物は埋め戻し時の祭祀に関係する遺物である可能性がある。そのため、この井戸は人為的に埋め戻された可能性が高い。

SE3508（図版 124・288）　32B23、32C3 に位置する。平面形は円形で、長径 1.05m、短径 0.93m、底面標高 11.62m、確認面からの深さ 2.54m を測る。断面形は U 字状である。砂層のⅧ層まで掘り込まれている。底面はほぼ弧状である。壁は少し外傾しながら、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 1 ～ 7 層がシルトで 8 層が粘土である。色調は 1・6 層が黄灰色、2・7 層が黒褐色、3 層が黄褐色、4・5 層が暗灰黄色、8 層が灰色である。炭化物は全体にわずかに混入するが、5 層は大粒が多く混入する。2 層は焼土がわずかに混入する。4 ～ 7 層は黄褐色土が混入するが 5 層は多い。2 層以下には小粒の灰オリーブ色土が混入するが、4・8 層に多い。2 層以下は斜方向の堆積で、全層水平か、レンズ状堆積であり人為的堆積には見えないが、4 層から漆器椀と多量の炭化物、8 層から、折敷底板（381･382･384）、曲物底板（383）

が出土していて、これらの遺物は埋め戻し時の祭祀に関係する遺物である可能性がある。そのため、この井戸は人為的に埋め戻された可能性が高い。

SE3511（図版 124・289）　32C8・13 に位置する。平面形は円形で、長径 0.93m、短径 0.90m、底面標高 12.17m、確認面からの深さ 1.89m を測る。断面形はＵ字状である。砂層のⅦ層まで掘り込まれている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 13 層に分層した。最下層の 13 層が灰色の粘質シルト層で、それより上位は黒褐色シルトと灰黄色シルトが交互に堆積する。炭化物は１～ 12 層の全体にわずかに混入し、5 層には大粒が多く混入する。上層の 9 層までが不規則な堆積になっている。また、13 層から数点の礫に混じって墨で人物像等が描かれた円礫（307）が 1 点出土した。この 9 層までの堆積状況と 10 層の炭化物、13 層の遺物を考慮すると、人為的な埋め戻しを示すと考える。

SE3513（図版 124・289）　32B19・24 で検出した。平面形は円形で、長径 1.00m、短径 0.95m、底面標高 11.44m で、確認面からの深さ 2.56m を測る。断面形はＵ字状である。砂層のⅧ層まで掘り込まれている。底面はほぼ弧状である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 5 層に分層した。1 層は暗オリーブ褐色シルト、2・3 層は黄褐色粘土、4 層は暗灰黄色シルト、5 層は黄灰色シルトである。1 ～ 4 層は小粒の黄褐色土が少し混入するが 1 層は大粒が混入する。5 層は暗灰黄色土がわずかに混入する。1 ～ 3 層まで斜位の堆積で、2・3 層は黄褐色土のＶ層土であり、ほかの深い遺構の掘削土で埋め戻したと考える。

SE3913（図版 125・289）　31C24・25 に位置する。平面形は楕円形で、長径 1.62m、短径 1.26m、底面標高 12.30m、確認面からの深さ 1.99m を測る。断面形は箱状である。砂層のⅧ層まで掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 7 層に分層した。1・4 層は黄褐色粘土、2・5 層は暗灰黄色粘土、3 層は黒褐色シルト、6 層は黄灰色シルト、7 層は灰色シルトである。2・3 層は小粒の炭化物が少し、3 層は小粒の焼土が少し混入する。5 層下部には炭が帯状に混入する。1・4 ～ 7 層は粘土質で粘性が強い。SB5295–P5239 と新旧不明である。遺物は 5 層下部から莚、7 層から漆器椀（386）と曲物底板（387）が 2 点、折敷？ 1 点、杭（388）、搬入礫が 1 点出土した。

SE3979（図版 124・289・290）　32E5・9・10 に位置する。平面形は本遺跡で唯一正方形を呈する。1 辺は約 1.6m を測る。掘形は上部から底面まで壁が垂直に切り立ち、底面は平坦で、四角柱状を呈する。覆土は 7 層に分層した。黒色系のシルトあるいは土が水平堆積を示す。下部の 4 層を中心として木製品が大量に出土した。P4159 を切る。

遺物は砥石（306）、曲物蓋？（392）、折敷底板（393）、漆塗膜、箸状木製品（396 ～ 406）、人形（407）、用途不明部材（394）、加工材（395）、薄板が出土した。

SE5177A（図版 125・290）　30D23・24、30E3・4 グリッドに位置する。最上面において長さ 70cm ほどの傾斜面となるか所がある。SE5177 は 2 つの井戸が重複しており、西側の井戸を A、東側の井戸を B とした。新旧関係は土層断面の観察から本井戸 A が B よりも新しいことが判明した。また、本井戸の南西部において SB5301 及び P5195 と重複しているが、SB5301 との新旧関係は不明である。P5195 との新旧関係では本井戸が新しい時期の構築である。

規模は長径 2.55m、短径 1.72m、深さ 2.10m を測る。平面形はほぼ楕円形を呈している。断面形は漏斗状を呈しており、壁面は西側の下位部分が袋状に膨らみながら立ち上がっている。東壁はやや開き気味に立ち上がっている。ちなみに底面の幅は 60cm ほどである。底面はやや丸みを持つがほぼ平坦であるといえよう。また、底面部分の地山は小礫を少量伴う砂層である。

覆土は 16 層に分層した。全体的にしまりは弱い。上層部分は暗オリーブ褐色の粘質シルトで、粘性を

有するしまりの弱い土質である。上層から中層にかけては、西側壁面に沿うように大きく崩落したにぶい黄褐色のシルトが多量に堆積していた。10 層と 13 層は黒色の泥炭層であり、植物遺体主体の層で粘性・しまりは共に弱い。14 層と 15 層は粘質土であり、粒子は細かく粘性はやや強くしまりは弱い土質である。最下層の 16 層は灰色の砂層であり、粘性のまったくない層である。出土遺物はない。

SE5177B（図版 125・290）　30E4 グリッドに位置する。前述しているが SE5177A とは重複しており、新旧関係では土層断面の観察により、本井戸 B の方が古い時期の構築であることが判明した。

規模は長径 1.53m、短径は不明、深さ 2.48m を測る。SE5177A に比べて 40cm ほど深い。平面形は、SE5177A に切られている関係上不明である。断面形はU字状を呈している。壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はほぼ平坦であり、幅 55cm ほどを測る。底面部分の地山は細粒砂の砂層である。しまりは強い土質であり、酸化鉄を多量に帯びている。

覆土は 14 層に分層した。全体的に粘性は有しているが、しまりは弱い土質である。暗オリーブ褐色粘質シルト・灰黄褐色粘質土・オリーブ黒色粘質土・黒褐色粘質土・黒色粘質土・オリーブ灰色粘質土などが覆土を構成している。上層は暗オリーブ褐色粘質シルトを、中層はオリーブ黒色粘質土を主体とし、中層から下層にかけては黒褐色粘質土・黒色粘質土を主体としている。最下層は黒色シルトであり、粘性は弱い土質である。遺物は信楽焼甕片（141）1 点と小さな加工材が下層から出土したのみである。

SE5230（図版 125･290）　31C6･7･11･12 に位置する。平面形は円形で、長径は 0.77m、短径は 0.70m を測る。深さと底面の形態は不明である。断面形は 50cm 程しか掘削していないが、U 字状であると推定される。壁ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は掘削した所までで 3 層に分層した。1 層は黄灰色シルト、2･3 層は黒褐色シルトである。1･2 層は小粒の炭化物がわずかに混入する。全体に暗灰黄色土が少し混入し、2 層は斑紋状に混入する。出土遺物はない。開口部が狭いため、危険防止を考え、安全な深さまでの調査で終了することにした。

c　土　　坑（図版 126 ～ 131・290・292 ～ 294）

28 ～ 32B ～ E グリッドに位置するこの地区では、土坑は掘立柱建物群やピット群の周辺に分布する。検出層位は北～中央部ではⅢ層・Ⅳ層、南端部ではⅤ層である。東側の農道側、31・32E グリッドには炭や焼土を多量に混入する楕円形をした土坑が分布する。炭が主体に混入するもの、焼土が主体に混入するものがある。少し西や南側の土坑を見てみると、焼土や炭化物は多量には混入せず、31・32E の範囲で炭や焼土を排出するような何らかの施設が集合した場所であると推定する。遺構覆土には黄色土の混入が見られるが、これはⅤ層土と考える。

SK9900（図版 126・294）　28D2・3・7・8 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、長径 2.72m、短径 1.3m を測る。断面形は深さ 0.81m の箱状を呈する。覆土は 11 層に分層した。褐色系のシルトが不規則に堆積することから、埋没と掘り返しを繰り返していた可能性がある。

SK3211（図版 126）　35B13 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 0.54m、短径 0.34m を測る。深さ 0.14m で、断面形は台形状。壁面傾斜はやや緩やかである。覆土は 2 層に分層した。暗灰黄土を主体とし、2cm 程度のにぶい黄色の地山ブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK3222（図版 126）　35B25 グリッドに位置する。平面形はやや不整形な楕円形を呈し、長径 0.71m、短径 0.52m を測る。深さ 0.18m で、断面形は台形状。壁面傾斜はやや急斜度である。覆土は 2 層に分層した。それぞれに 5 ～ 10mm 程度のにぶい黄色の地山ブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK3252（図版 126）　35C2 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、長径 1.06m、短径 0.76m を測る。底面形状も不整形で段差があり、最深部は 0.22m である。覆土は単層で、5mm 程度のにぶい黄色の地山ブロックが含まれる。遺構の切り合いは SF3201 の畝状の溝に切られている。遺構確認の段階で遺構の切り合いは認識できず断面によって新旧を確認した。出土遺物はない。

SK3258（図版 126）　35C18･23 グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長径 0.76m、短径 0.71m を測る。深さ 0.24m で、断面形は半円状。壁面傾斜はやや緩やかである。覆土は 3 層に分層した。暗黄灰色土を主体とし、2 層にはにぶい黄色の地山ブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK3260（図版 126・292）　35C13・14・18・19 グリッドに位置する。平面形はやや楕円形を呈し、長径 0.90m、短径が 0.69m を測る。深さ 0.41m で、断面形は底面に段差を持つ半円状。覆土は 3 層に分層した。暗灰黄色土を主体とし、1 層にはにぶい黄色の地山ブロックが多く含まれる。SF3201 を切っている。出土遺物はない。

SK3261（図版 126・292）　35C13 グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、長径 0.86m、短径 0.86 m を測る。深さ 0.38m で、断面形は台形状。壁面傾斜は急斜度である。覆土は 4 層に分層でき、暗灰黄色土を主体とする。特に 4 層はにぶい黄色の地山ブロックの割合が多く層の大半を占める。SF3201 を切っている。出土遺物はない。

SK3312（図版 126）　33C20 グリッドに位置する。確認状況では 2 つのピットが切り合っているものと考えたが、平面の確認では明瞭な切り合いは確認できず 1 つの遺構とした。平面形はやや楕円形を呈し、長径 0.46m、短径 0.24m を測る。深さ 0.13m で、断面形はおおよそ弧状。覆土は単層で、暗灰黄色土を主体とし、にぶい黄色の地山ブロックが含まれる。出土遺物はない。

SK3314（図版 126）　33C19 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 0.57m、短径 0.37m を測る。深さ 0.12m で、断面形はおおよそ弧状。覆土は単層で、暗灰黄色土を主体とし、にぶい黄色の地山ブロックが含まれる。切り合いは SB5329 の遺構範囲内に当たるが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK3382（図版 126）　33B25 グリッドに位置する。遺構の大半を SE3384 に切られているため全体の形状は不明だが、平面形はやや円形または楕円形を呈し、残存部は長径 0.68m を測る。深さ 4cm で、断面形は弧状。覆土は単層で、暗黄灰色土を主体とし、にぶい黄色の地山ブロックが含まれる。SB5330 の遺構範囲内に当たるが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK3502（図版 127）　31C9・10・14・15 グリッドに位置する。平面形は円形である。深さ 0.24m で、断面形は台形状。壁面は急斜度で立ち上がる。覆土は 3 層に分層でき、1 層は灰色シルトで、やや砂質である。大粒の暗オリーブ褐色土が少し混入する。同様の土はこの遺構の西側のピットの柱痕の部分の上層に混入している場合が数例ある。2 層は暗オリーブ褐色で、大粒の炭化物･黄褐色土がわずかに混入する。3 層は大粒の黄褐色土が多く混入する。

SK3503（図版 127・292）　31C3・4・8・9 グリッドに位置する方形土坑である。平面形は隅円長方形を呈し、長径 2.12m、短径 1.71m を測る。長軸はほぼ南北方向である。深さ 0.42m で、断面形は台形状を呈し、壁面は急斜度で立ち上がる。底面は南側に向かって若干ではあるが、緩やかに上がる。付近には同じく方形土坑の SK5194、5281 があるが、それに比べると、小さく、半分程度の規模である。覆土は 5 層に分層した。1 ～ 3 層はレンズ状、4･5 層は斜位の堆積である。1 ～ 3 層は暗オリーブ褐色シルト、4 層は黄褐色シルト、5 層は灰オリーブ色シルトである。1・2・3 層には大小の灰オリーブ色土が少し混

入し、3 層には斑紋状に混入する。3 層には炭が帯状に混入する。4・5 層には暗オリーブ褐色土が斑紋状に混入する。用途は不明である。同様の遺構については溝の近くに多く見られることから、水に関係した施設ではないか、という説もあるが、確定するに至っていない。SK3503 の場合、近くに SD3501 がある。出土遺物はない。

SK3512（図版 127）　32C13 グリッドに位置する。平面形はおおよそ円形を呈し、長径 0.81m、短径 0.78m を測る。深さ 0.22m で、断面形は台形状を呈し、壁面傾斜は急斜度である。覆土は 2 層に分層でき、暗オリーブ褐色シルトを主体とする。灰オリーブ土が含まれる。P3692 を切る。出土遺物はない。

SK3515（図版 127）　31D7・12 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.45m、短径 0.80m である。長軸はほぼ東西方向である。深さ 0.23m で、断面形は台形状。底面は中央から東側はほぼ平坦で、中央から西側が弧状に少し下がっている。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 5 層に分層した。1・3・4 層は黒褐色シルト、2 層は暗灰黄色土で、1 ～ 4 層は暗灰黄色土が混入し、2・4 層は多い。1・2・4 層は小粒の炭化物が少し混入する。5 層は黄褐色土壁の崩落土である。東側にある炭や焼土が多量に混入する楕円形の土坑とは混入物に違いがある。この土坑には炭化物が少し混入するにとどまる。全層斜方向の堆積であるため、人為堆積である可能性がある。SB5295–P3890 と切り合い、新旧不明である。出土遺物はない。

SK3517（図版 127）　31D16・17 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 0.78m、短径 0.63m である。深さ 0.20m で、断面形は弧状。覆土は 4 層に分層した。1 層は黒褐色シルト、2 層は黄灰色シルト、3 層は暗灰黄色シルト、4 層は黄褐色粘土である。1・2 層は大・小粒の黄褐色土が少し、小粒の炭化物がわずかに混入する。3 層は大粒の黄褐色土が多く混入する。東側にある炭や焼土が多量に混入する楕円形の土坑とは混入物に違いがある。この土坑には炭化物が少し混入するにとどまる。出土遺物はない。

SK3518（図版 127）　31D19 グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径 1.89m、短径 1.13m、深さ 0.30m で、断面形は台形状。底面は南側に凹凸があるが、ほぼ平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。覆土は 3 層に分層した。1 ～ 3 層は南側から斜方向に堆積する。堆積状況から人為堆積である可能性が考える。全層黒褐色シルトで、炭化物が全体に混入するが、1 層は斑紋状に多く混入する。SD5112 に切られる。出土遺物はない。

SK3519（図版 127）　31D19・20・24・25 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.23m、短径 0.91m である。長軸はほぼ南北方向である。深さ 0.23m で、断面形は台形状。底面は中央から南東側一角がテラス状に平坦で、北から南西にかけては 5cm ほど下がって平坦になっている。覆土は 5 層に分層した。1 層はレンズ状、2 ～ 5 層は斜方向の堆積である。堆積状況から人為的堆積である可能性が考える。1・2・4 層は黒褐色シルト、3・5 層は暗オリーブ褐色シルトである。1・2 層は小粒の炭化物と暗灰黄色土が少し混入する。3 層は炭化物が帯状に多く混入する。SB5295–P5238 に切られる。出土遺物はない。

SK3529（図版 127）　30E4･5 グリッドに位置する。平面形は楕円形で長径 0.98m、短径 0.75m である。深さ 0.14m で、断面形は弧状。覆土は 2 層に分層した。全体に酸化鉄が混入している。1 層は暗オリーブ褐色土、2 層は灰オリーブ色粘土で、1 層は大粒の黄褐色土が多く混入する。2 層は大･小粒の暗オリーブ褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SK3532（図版 127）　31C15、32C11 グリッドに位置する。平面形は隅円長方形で、長径 1.38m、短径 0.75m である。長軸はほぼ東西方向である。深さ 0.41m で、断面形は台形状。底面は東・西側から中央

に向かって緩やかに下がっている。壁は急斜度で立ち上がる。覆土は5層に分層した。1層は黒褐色シルト、2～5層は暗灰黄色シルト・粘土で、1層は大粒の暗灰黄色土が斑紋状に少し混入し、小粒の炭化物が少量混入する。東側の炭や焼土が多量に混入する楕円形の土坑とは混入物に違いがある。出土遺物はない。

SK3612（図版127）　31B10グリッドに位置する。平面形はやや方形気味で、長径0.80m、短径0.77mを測る。深さ0.57mで、断面形は台形状。壁面傾斜は急斜度である。覆土は3層に分層でき、暗灰黄色シルトを主体とし、黄灰色土及び暗オリーブ褐色土が含まれる。出土遺物はない。

SK3624（図版127）　31E13で検出した。平面形は楕円形、断面は弧状を呈す。長径0.88m、短径0.44m、深さ0.09mを測る。長軸はほぼ南北方向である。底面は南から北に向かって、緩やかに下がっている。壁は、北は緩やかに、南はやや急斜度で立ち上がる。覆土は2層に分層した。1層は暗オリーブ褐色シルト、2層は暗灰黄色シルトで、2層は大粒の暗灰黄色土が多く混入する。出土遺物はない。

SK3752（図版128）　31D5･10グリッドに位置する。平面形は円形である。長軸はほぼ東西方向である。深さ0.25mで、断面形は弧状。底面は東・西側から中央に向かって緩やかに下がる。壁は急斜度で立ち上がる。覆土は2層に分層した。1層は黄灰色シルト、2層は黒褐色シルトで、1・2層は小粒の炭化物・焼土・黄褐色土を少し混入し、1層は砂を斑紋状に少し混入する。出土遺物はない。

SK3768（図版128）　31D20グリッドに位置する。平面形は円形で、長径0.71m、短径0.68m、深さ0.10mを測る。断面形は台形状。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層した。1・2層は暗灰黄色シルト・粘土で、1層は小粒の炭化物が少量混入する。SD5112に切られる。出土遺物はない。

SK3786（図版128）　31E3グリッドに位置する。長軸はほぼ南北方向である。長径1.01m、短径0.75m、深さ0.17mを測る。断面形は台形状。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層した。1層は暗オリーブ褐色シルト、2層は黒褐色シルト、3層は暗灰黄色シルトで、1～3層は小粒の暗灰黄色土が少し混入し、1層は小粒の炭化物が少し、焼土がわずかに混入する。SB5297–P5247に切られる。出土遺物はない。

SK3840（図版128）　31D25・31E5・32E1グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.00m、短径0.57mである。長軸は南西－北東方向である。深さ0.24mで、断面形は弧状。壁は、西側はやや急斜度で、東側は緩やかに立ち上がる。覆土はシルトで、6層に分層した。1・2・5層は黒褐色、3層は暗オリーブ褐色、6層は暗灰黄色で、1～5層は全体に暗灰黄色土が少し混入する。2層には炭化物が少し混入する。6層は大小粒の暗灰黄色土が多く混入する。炭や焼土が多量に混入する楕円形の土坑とは混入物に違いがある。この土坑には炭化物が少し混入するにとどまる。2・4～6層は斜方向の堆積で、4層はブロック状である。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。出土遺物はない。

SK3915（図版128）　31D5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長軸はほぼ東西方向である。底面はほぼ平坦である。長径0.79m、短径0.65m、深さ0.08mを測る。断面形は弧状。壁は、西側は弧状に緩やかに、東側はやや急斜度で立ち上がる。覆土は単層である。暗灰黄色シルトで、大粒の灰黄褐色土が少し混入し、小粒の炭化物・焼土がわずかに混入する。出土遺物はない。

SK3923（図版128）　32E3・8グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径1.32m、短径0.75mである。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は弧状で深さ0.26mである。底面はほぼ平坦である。覆土は7層に分層した。2・4～7層は斜方向、3層はブロック状に堆積する。1・4・6層は黒色シルト、2・3・5・7層はオリーブ褐色シルトである。1・4・6層は炭の層であり、オリーブ褐色シルトの層と交互に堆積する。1・4・6層には小粒の焼土が少し、2層は炭化物が斑紋状と細い帯状に、3層には炭化物

が斑紋状に少し混入し、4・6 層にはオリーブ褐色土が斑紋状に少し混入する。北側の 3 層はブロック状に混入する。また、平面を見ると断面の分層ライン以上に乱雑に堆積している。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。出土遺物はない。

SK3924（図版 128・290）　32E2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.48m、短径 0.64m である。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は台形状である。底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 5 層に分層した。1・4 層は起伏のあるレンズ状、2・3・5 層は斜方向の堆積である。1 層は黒褐色シルト、2・5 層は黄褐色シルト、3 層は暗オリーブ褐色シルト、4 層は暗灰黄色シルトである。1・3 層は全体に大小粒の焼土が混入し、3 層は多い。焼土は 1 層に明褐色土、3 層に黒褐色土が多く混入する。1・3・4 層は暗灰黄色土が少し混入する。1・3 層には多量の焼土が混入し、全体的に見て起伏があるなど、この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。出土遺物はない。

SK3925（図版 128）　32E7・8・12・13 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は浅い台形状である。長径 1.45m、短径 1.16m、深さ 0.15m を測る。覆土は 3 層に分けられるが、各層ともⅣ層が混入する薄層の灰層になっている。この灰の起源は不明である。隣接する SK3924・SK3923 にも多量に焼土・灰が混入しており、近くに何らかの施設があった可能性は高い。SB5302 が上屋の可能性がある。SX5345 と新旧不明である。

SK3926（図版 128）　32E8･9 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.26m、短径 0.78m である。長軸はほぼ東西方向である。深さ 0.32m で、長軸の断面形は弧状である。底面は中央に向かって若干下がる。覆土は 4 層に分層した。1・3・4 層はレンズ状に、2 層は斜方向に堆積する。1・3 層は黒色シルト、2 層はオリーブ褐色シルトで、4 層は黄褐色シルトである。1・3 層は炭主体の層で、帯状・斑紋状・ブロック状の黄褐色土が多く混入する。2 層は炭化物が斑紋状に混入する。1・3 層は炭主体の層であり、また全体的に黄灰色土の入り方を見ると、人為的堆積である可能性がある。出土遺物はない。

SK3945（図版 128）　32D1・2 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形である。底面は中央に向かって若干下がる。壁はやや急斜度で立ち上がる。長径 0.88m、短径 0.87m、深さ 0.17m を測る。覆土は 3 層に分層した。1 ～ 3 層は黒褐色シルトで、1・3 層は小粒の炭化物・黄褐色土をわずかに混入する。2 層は下部に帯状に炭化物が混入する。出土遺物はない。

SK3955（図版 128）　32D6・7・11・12 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.52m、短径 0.69m である。長軸はほぼ東西方向である。長軸の断面形は台形状で、深さ 9cm である。底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 3 層に分層した。1・2 層は黒褐色シルト、3 層は黄褐色粘土である。1・2 層は小粒の炭化物・黄褐色土が少し混入する。SK3956・P3953 を切る。P5285 と新旧不明である。出土遺物はない。

SK3956（図版 128）　32D6・11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.06m である。長軸はほぼ東西方向である。長軸の断面形は半円状で、深さ 0.52m である。底面は中央に向かって弧状に下がる。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 10 層に分層した。1 ～ 7 層がシルト、8 ～ 10 層が粘土である。1・2 層は水平、3・7 ～ 10 層は斜方向、4・5 層はブロック状に堆積している。1 ～ 3・6・7 層は黒褐色、4 層は暗オリーブ褐色、5・8・9・10 層は暗灰黄色である。1・2・5 層は小粒の炭化物がわずかに混入する。1 ～ 7 層は暗灰黄色土がわずかに混入する。3 層以下は斜方向とブロック状に堆積している。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。SK3955 に切られる。P5287 を切る。出土遺物はない。

SK3958（図版 128）　32D13 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状である。底面はほぼ平坦で、

東側に凹凸がある。壁は、東側はやや急斜度、西側は弧状に緩やかに立ち上がる。長径 0.70m、短径 0.68m、深さ 0.13m を測る。覆土は単層で、暗灰黄色土がわずかに混入する。出土遺物はない。

SK3971（図版 128・294） 32D13・14・19 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.98m、短径 0.80m である。長軸はほぼ東西方向である。底面は西から東に緩やかに若干下がる。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 7 層に分層した。1 ～ 5 層は黒褐色シルト、6 層は暗灰黄色シルト、7 層は黄褐色粘土である。1 ～ 4 層は炭化物が少量混入するが、4 層は帯状に混入する。6 層は黄褐色土がブロック状に多く混入する。遺物は 3 層から瀬戸・美濃焼皿が 1 点（145）出土した。

SK3976（図版 129・292） 32D19・20・24・25 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状である。底面は中央に向かって緩やかに若干下がる。南側は起伏を伴う。底面ほぼ中央にピット状の掘り込みを伴う。壁は急斜度で立ち上がる。長径 1.94m、短径 1.82m、深さ 0.48m を測る。覆土は 6 層に分層した。1 層は水平、2・3 層はブロック状、4 ～ 6 層は斜方向の堆積である。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。1 層は黒褐色シルト、2 ～ 5 層は暗オリーブ褐色シルト、6 層は暗灰黄色シルトである。1 ～ 5 層は焼土が混入し、2・3 層はブロック状に多い。1・4・6 層は小粒の炭化物がわずかに混入する。1・2・6 層は大小粒の黄褐色土が少し混入する。底面中央（4 層）に径約 15cm の円礫が出土した。人為的に入れたと考える。

SK3983（図版 129） 31E10・15、32E6・11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 2.10m、短径 1.54m である。長軸はほぼ南北方向である。断面形は台形状である。壁は、南側はやや急斜度、北側は緩やかに立ち上がる。覆土は 10 層に分層した。1 層はブロック状、2･3 層は水平、4･7 層はブロック状、5･6･8 ～ 10 層は斜方向の堆積である。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。1･2･4・9 層は黒褐色シルト、3・5・7 層は暗灰黄色シルト、6 層は黒色炭、8 層は暗灰黄色粘土、10 層は黄褐色粘土である。炭化物は 1 ～ 7・9 層に混入するが 3 層には帯状に、1・2・4・5・7・9 層には小粒で少し混入し、6 層は炭の層である。焼土は 1 ～ 7・9 層に混入するが、4 層は多い。4・6・7 層は暗灰黄色土が少し混入し、6 層は大粒が混じる。重複関係は、本土坑中央に P5294 が位置し本土坑を切っている。

SK4040（図版 129） 34E5 グリッドに位置する。遺構は開渠掘削により中央部を欠損したが、北端部及び南端部が残存している。平面形は楕円形で、長径 0.56m、短径 0.42m である。深さ 0.15m で、断面形は半円状。壁面傾斜は緩やかである。覆土は 2 層に分層でき、暗灰黄色土を主体し、にぶい黄色の地山土が含まれるほか、炭化物、焼土などが含まれる。なお、この遺構以外に周辺には焼土を含む遺構は見られなかった。本遺構は SB5325 の遺構範囲内に位置するが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK4045（図版 129・293） 34D23・24 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 1.59m、短径 0.95m であり、底面はさらにはっきりした長方形となる。深さ 0.68m で、断面形は箱状。壁面傾斜は垂直である。覆土は 8 層に分層した。レンズ状の部分も複雑に堆積する部分がある。また、堆積層全体に割合の増減はあるもののにぶい黄色の地山ブロックが含まれ、人為的に埋め戻した可能性が高い。6 層の直上には部分的に炭層が存在し、当面において火の使用かまとまった炭の投げ込みがあったものと考える。重複関係は東端部で SB5325–P4165 を切っている。また、SB5326 の遺構範囲内に位置するが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK4081（図版 129） 33D3・4・8・9 グリッドに位置する。平面形は東西に長い楕円形で、長径 3.02m、短径 0.72m である。深さ 0.09m で、断面形は弧状。覆土は 2 層に分層した。黒褐色土を主体とし、にぶい黄色の地山土が多く含まれる。重複関係は西端部が SB5329–P4080 に切られる。また、SB5328

の遺構の範囲内に位置するが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK4086（図版 129）　33D2・7 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 1.30m、短径 0.69m である。深さ 0.60m で、断面形は箱状。壁面傾斜はやや垂直気味である。覆土は 5 層に分層した。黒褐色土を主体とし、にぶい黄色の地山土が含まれる。堆積状況は斜位堆積が確認でき人為的に埋め戻した可能性がある。出土遺物はない。

SK4087（図版 129・293）　33D1・2 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.27m、短径 0.65m である。深さ 0.42m で、断面形は台形状で、壁面傾斜はやや急斜度である。覆土は 5 層に分層した。黒褐色土を主体とする。2 層の直上には炭層が堆積するが、遺構壁面に被熱の痕跡はない。したがって、遺構内で火を焚いたのではなく、まとまった炭の投げ込みがあったものと考える。出土遺物はない。

SK4102（図版 129）　34E6・11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.49m、短径 1.14m である。北に向かってやや緩やかに傾斜し、南部が最深部となる。底面は段差があり最深部が 0.59m、断面形は台形状となり、壁面傾斜は急斜度である。覆土は 2 層に分層したが、遺構覆土はそのほとんどが 2 層で占められており、暗灰黄色土を主体とするが、にぶい黄色の地山土が多量に含まれる。重複関係は SB5327 の遺構範囲内に位置するが、新旧は不明である。ただし、SB5327 の P4127、P4104、P4100、P4094 の柱間の中央やや南に位置することから、建物の施設の可能性も否定できない。出土遺物はない。

SK4109（図版 129）　34D21、34E1 グリッドに位置する。平面形は方形で、長径 0.92m、短径 0.80m である。深さ 0.19m で、断面形は箱状。壁面傾斜はやや急斜度である。覆土は単層で、暗灰黄色土を主体とし、にぶい黄色の地山土が含まれる。底面付近には炭層が存在したが、遺構壁面に被熱の痕跡はない。したがって、遺構内で火を焚いたのではなく、まとまった炭の投げ込みがあったものと考える。重複関係は SB5326 の遺構範囲内に位置するが、新旧は不明である。出土遺物はない。

SK4123（図版 130）　33D22・23、33E2・3 にグリッドに位置する。平面形は南北に長い楕円形で、長径 2.48m、短径 1.18m である。深さ 0.26m で、断面形は弧状。覆土は 2 層に分層した、遺構覆土はほとんどを 2 層が占めており、黒褐色土及びにぶい黄色土を主体とする。遺物は 15cm 程度の角礫が南北の端部付近に 2 点確認できた。双方の礫は接合したために、礫の配置や埋め戻しは人為的と考える。

SK4128（図版 130）　33E10・15 グリッドに位置する。平面形はやや不整形で、長径 0.85m、短径 0.70m である。深さ 0.36m で、断面形はＶ字状。覆土は 2 層に分層でき、黒褐色土を主体とし、にぶい黄色の地山土が含まれる。出土遺物はない。

SK5041（図版 130）　28C9 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 0.65m、短径 0.36m、深さ 0.10m である。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は台形状で、底面はほぼ平坦であるが、少しの起伏がある。壁はやや急斜度で立ち上がる。隣接して SK5042 があるが、ほぼ同一の形態である。覆土は単層である。暗オリーブ褐色シルトで、大・小の黄褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SK5042（図版 130）　28C14・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 0.78m、短径 0.38m、深さ 0.12m である。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は台形状で、底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。隣接して SK5041 があるが、ほぼ同一の形態である。覆土は 2 層に分層した。1 層は暗オリーブ褐色シルト、2 層はオリーブ褐色シルトである。出土遺物はない。

SK5062（図版 130・293）　29B14・19 グリッドに位置する。平面形は長方形で、長径 1.44m、短径 0.83m、深さ 0.46m である。長軸はほぼ南北方向である。断面形は台形状。底面はほぼ平坦であるが、

東と西から中央に向かって若干ではあるが下がる。壁は急斜度で立ち上がる。覆土はシルトで、9 層に分層した。1・2 層は水平、3・4・6・8 層はレンズ状、5・7・9 層は斜方向の堆積である。1 層は暗オリーブ褐色、2・4・9 層は黒褐色、3・7 層は暗褐色、5 層は灰黄褐色、6 層は褐色、8 層は暗灰黄色で、1 ～ 7 層は、大・小粒の黄褐色土が少し混入し、6 層には筋状に混入する。1・2・4・5 層にはわずかに、3 層には少し、炭化物が混入する。P5063 に切られる。遺物は 5 層から椀形鍛冶滓破片、6 層から大型椀形鍛冶滓（268）が出土した。

SK5113（図版 130）　30C13・14・18・19 グリッドに位置する。形態から方形土坑と考える。平面形は長方形で、長径 1.97m、短径 1.54m、深さ 0.11m である。長軸は南東から北西方向である。断面形は弧状である。底面はほぼ平坦であるが、中央から南側と北側に若干ではあるが緩やかに上がる。壁は、南は緩やかに、北はやや急斜度で立ち上がる。覆土は単層である。暗オリーブ褐色シルトで、大・小粒の黄褐色土が中央を中心に多く混入する。SD5112 を切る。出土遺物はない。

SK5114（図版 130）　30C7・12 グリッドに位置する。平面形は円形で、長径 0.74m、短径 0.65m、深さ 0.13m である。断面形は台形状で、底面南西側から北東側に向かって緩やかに下がる。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 2 層に分層した。1 層は黒褐色シルト、2 層は暗オリーブ褐色シルトで、1・2 層は大・小粒の黄褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SK5194（図版 130・293）　30C19・20・24・25、31C16・21、30D5 グリッドに位置する。形態から方形土坑と考える。平面形は不整な長方形で北側が少し狭い。長径 3.54m、短径 2.72m、深さ 0.39m である。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は台形状で、底面はほぼ平坦であるが、北から北東にかけて少し下がる。壁は急斜度で立ち上がる。覆土は 5 層に分層した。1 ～ 3 層は小粒の黄褐色土が混入するが 3 層は多い。4 層はオリーブ褐色シルト、5 層は黄褐色粘土である。1・4 層はわずかに、2 層は多く小粒の炭化物が混入する。3 層には帯状に、1・2 層には小粒の黄褐色土が混入し、2 層に多い。全体的に酸化鉄が少し混入する。SK5281、SD5112 を切る。P5284 と新旧不明。出土遺物はない。

SK5201（図版 130）　31C21・22 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.41m、短径 0.56m、深さ 0.18m である。長軸はほぼ南北方向である。断面形は台形状で、底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は単層である。黒褐色シルトで、少量の暗灰黄色土が混じる。出土遺物はない。

SK5202（図版 131）　31C23 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.13m、短径 0.60m、深さ 0.29m である。長軸はほぼ南北方向である。断面形は弧状で、底面は北側がテラス状で南側は台形状に落ち込んでいる。覆土は 2 層に分層した。1 層は黒褐色シルト、2 層は暗灰黄色粘土で、1 層は小粒の暗灰黄色土が少し混入する。出土遺物はない。

SK5203（図版 131）　31C17・22 グリッドに位置する。開渠によって北西側が削平されているが、平面形は残存部から楕円形と推定する。長軸は残存部から推定して、ほぼ南北方向である。断面形は台形状で、底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。長径 1.05m、深さ 0.23m である。覆土は単層である。暗オリーブ褐色シルトで、小粒の暗灰黄色土が少し混入する。出土遺物はない。

SK5228（図版 131）　31D2・7 グリッドに位置する。平面形は残存部から円形と推定する。底面は中央に向かって弧状に下がる。壁は、東は緩やかに、西はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 7 層に分層した。1・2 層はレンズ状、4 層はブロック状、3 ～ 7 層は斜方向の堆積である。この堆積状況から人為的堆積である可能性がある。1・2 層は暗オリーブ褐色シルト、3 層は黒褐色シルト、4 層は灰黄褐色シルト、5 層は暗灰黄色シルト、6 層は黄灰色シルト、7 層は暗灰黄色粘土である。1 ～ 6 層は小粒の炭化物がわず

かに混入する。2・6 層は灰黄褐色土が少し混入する。SD5112 に切られる。出土遺物はない。

SK5242（図版 131）　32D15 グリッドに位置する。長径 0.76m、短径 0.70m で、平面はほぼ円形となる。断面は調査区東西ベルトで確認し、深さは 0.86m である。断面形は U 字状で、壁面傾斜は強い急斜度で、やや外傾気味である。覆土は 2 層に分層した。遺構覆土はそのほとんどが 2 層で占められており、暗オリーブ褐色土を主体とし、にぶい黄色の地山土が含まれる。SD3501 に切られている。出土遺物はない。

SK5252（図版 131・290）　30E15 グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径 2.04m、短径 1.05m である。長軸はほぼ南北方向である。断面形は半円状だが、底面は段状になっている。覆土は 9 層に分層した。1・5・6 層はブロック状、2 ～ 4・7 層は斜方向、8 層は不整なレンズ状、9 層は水平な堆積である。全体的に斜方向とブロック状の堆積が多い。この堆積状況から人為的堆積である可能性を考える。1・7 層は暗灰黄色シルト、2 層は暗褐色シルト・黒褐色土の混合土、3 層は暗褐色シルト、4・6・8 層は黄灰色シルト、5 層は暗オリーブ褐色シルト、9 層は黄褐色粘土である。2・3・4・6 層は小粒の焼土が混入し、2 層は多い。2・3・4・7 層は小粒の炭化物が少し混入し、5 層は筋状に混入する。1・7・8 層は小粒の暗灰色土がわずかに混入する。2 層は現代の水田の影響で変色している。下部に鉄分が多く混入する。近・現代の溝に切られる。出土遺物はない。

SK5281（図版 131）　30C15・19・20、31C11・16 グリッドに位置する。形態から方形土坑と考える。残存部から平面形はほぼ長方形で、長径 3.46m、短径 3.22m である。大半を SK5194 に切られているため、残存するのは北側から西側の壁際である。長軸はほぼ南北方向である。長軸の断面形は北側断面を見ると、台形状である。底面はほぼ平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。覆土は 4 層に分層した。1 層は暗灰黄色シルト、2・4 層は暗灰黄色粘土、3 層は黒褐色シルトである。1・3 層は暗灰黄色土が斑紋状に少し混入し、1・2 層は小粒の炭化物がわずかに混入する。全体的に酸化鉄が少し混入する。SD5112 を切り、SK5194 に切られる。P5283・P5284 と新旧不明。位置的に規則性がないため、付帯遺構ではないと考える。出土遺物はない。

d　溝・道路（図版 29・35・131・132・294 ～ 296）

SD3007（図版 29・35・131）　C・D 区にわたる 26A・B、27B・C、28C・D、29C・D、30D・E グリッド及び D 東区の 33G・H、34H グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行する溝で、東西両端は調査区外へ伸びる。主軸方位は N–72°–E を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は凹凸が顕著である。26B、28C グリッドで底面から木杭を多数検出した。杭は乱雑に打ち込まれ、土留め等の用途が推定される。本溝の規模は現存長で 97.8m を測る。覆土は長大な溝のため、各所で堆積状況が異なる。ベルトセクションの観察では、表土直下から掘り込まれ上層から下層まで砂・砂礫を含む。出土遺物は、ごく少量の磁器、漆器のほか近現代の遺物が出土した。帰属時期は、確認層位、堆積状況、出土遺物から近現代までの溝と考えられ、用途は用水路等が挙げられる。本溝周辺には多数の遺構が位置する。SB5301・SB9222、SK5252、SD5002・SD5003・SD5119 等多数の遺構と重複し、すべてに対し本溝が新しい。

SD3200（図版 141）　34B、35B、35C グリッドにわたって位置し、東西方向にほぼ直線的に伸びる溝である。主軸方位は N–88°–E である。西端部は 35C3 グリッドで終結する。長さは 12.70m でさらに調査区外に伸びるものと考えられ、最大幅は 1.68m である。断面の深さは 0.36m で、形は底面がやや高くなる W 字状気味で、壁面傾斜は急斜度である。覆土は暗灰黄色シルトを基本とするが、土層堆積は斜方となっていること、また、それぞれの地点で層位が異なっていることなどから、人為的に埋め戻され

た可能性がある。一方、広く目を転じると、30m 南に軸方向と終結地点がほぼ一致する SD3501 があり、双方が同時期に存在し、区画をなした可能性が指摘できる。SF3201 を切る。出土遺物はない。

SD3501（図版 29・131・132・294） 31B・C、32C・D、33D グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行する溝である。東側は 33D21 グリッドで終結し、西側は調査区外へと伸びている。検出長は 34.0m、幅 1.10m、深さ 0.33m、主軸方位は N-89°-E である。断面形は台形～弧状を呈し、底面は全体的に平坦で、壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 6 層に分層し、2 層は黒褐色シルト、1・3 ～ 5 層は暗灰黄色シルトが堆積する。全体に小粒の炭化物と暗灰黄色土が混入し、1 層は部分的に炭化物が多く見られる。3・5 層は砂質があり 3 層ではブロック状の焼土が見られる。全体として人為的な埋土と考える。出土遺物は 3 層から石鏃（70）、珠洲焼片口鉢片（146）、7 層から砥石（310）が出土した。重複関係は、SK5242 を切り、SE3504、P5258、SB5339-P3530・3531 に切られる。P5343・P3682 とは新旧不明である。

本溝から約 30m 北方向に SD3200 が並走する。規模・主軸方位・終結位置等が類似し、対となる溝と考える。周辺には、建物・井戸・土坑・小規模の溝が密集し、中世後半期に複数期の居住域を形成していたと推定する。したがって、本溝は SD3200 と対になり、集落内での区割り溝や道路等の機能を果たしたと考える。

SD5002（図版 29・132・296） 28B・C、29C・D、30E グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行する溝である。西側は調査区外へと伸びている。3 か所で切れるが、方向、幅、規模共にほぼ同一であるため、同一遺構扱いとした。主軸方位は N-87°-E である。断面形は弧状で、幅は 0.55m、深さは 0.16m を測る。底面は少し起伏があるが、ほぼ平坦である。覆土は 2 層に分層した。1 層は暗褐色粘土、2 層は灰黄褐色粘土である。1・2 層は小粒の黄褐色土が少し、1 層は小粒の炭化物が少し混入する。SB5301-P5310・5314、SD5003・SD5119・SD3007 に切られる。出土遺物はない。

SD5004（図版 29・132・295） 28・29B グリッドで検出した。東西方向に直線的に走行し、西側端で北西側に湾曲する溝である。西側は調査区外へと伸びている。主軸方位は N-87°-E である。断面形は弧状の部分と台形状の部分がある。幅は 0.31m、深さは 0.14m を測る。底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 2 層に分層した。1 層は暗灰黄色粘土である。2 層はオリーブ褐色粘土である。1・2 層は大・小粒の黄褐色粘土が混入するが、2 層はやや多い。SD5003・5119 を切る。遺物は 1 層からフイゴ羽口（247）とガラス質滓（鉄滓）が 1 点ずつ出土した。

SD5036（図版 29・132・295） 28B5、29B1・6・11・12 グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行し、西側は調査区外へと伸びている。途切れているが方向、幅がほぼ同一のため、同一遺構扱いとした。主軸方位は N-87°-E である。断面形は弧状の部分と台形状の部分がある。幅は 0.22m、深さは 0.04m を測る。底面は弧状である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は暗オリーブ褐色シルトの単層である。黄褐色土が混入する。SD5003 に切られる。出土遺物はない。

SD5037（図版 29・132・295） 29B、30B・C グリッドに位置する。南西から北東に S 字状に走行する溝である。断面形は台形状である。幅は 0.34m、深さは 0.08m を測る。底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は暗オリーブ褐色粘土の単層である。黒褐色土で、大・小粒の黄褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SD5094（図版 29・132・295） 29C20 グリッドで検出した。南東から北西に走行する溝である。南東側は開渠に切られており、開渠から南東側では確認できなかった。主軸方位は N-48°-W である。断面形

は台形である。幅は 0.32m、深さは 0.06m である。底面はほぼ平坦である。覆土はオリーブ褐色シルトの単層である。出土遺物はない。

SD5100（図版 29・132・295）　30B9 ～ 31B16 グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行する溝である。主軸方位は N-83°-E である。断面形は台形状である。31B16 から東側は確認面が低いため、確認できなかった。幅は 0.32m、深さは 0.10m を測る。底面はほぼ平坦である。壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は単層である。暗褐色シルトで、大・小粒の黄褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SD5104（図版 29・132・295）　30B17・22 グリッドに位置する。南から北西方向に弧状に湾曲して走行する溝である。主軸方位は N-38°-W である。断面形は弧状である。幅は 0.20m、深さは 0.08m を測る。底面はほぼ平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。覆土はオリーブ褐色粘土の単層である。大・小粒の黄褐色土が少し混入する。出土遺物はない。

SD5112（図版 29・132・296）　30B・C、31C・D、32D・E グリッドに位置する。東西方向に直線的に走行し、31D グリッドで SB5297 を避けるように北側に膨らむ溝である。主軸方位は N-83°-E である。断面形は弧状の部分と台形状の部分がある。幅は 0.45m、深さは 0.08m を測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや急斜度で立ち上がる。覆土は 2 層に分層した。1 層は暗オリーブ褐色シルトで、2 層は暗灰黄色シルトである。1・2 層は大・小粒の黄褐色土が混入する。SK5228・SK3518・SK3768・SK3924、P3936、SB5295-P5231・5229・3988 を切り、SK5113・SK5194・SK5281 に切られる。SK3925、P5116、SB 5302-P5223 とは新旧不明である。

e　ピ　ッ　ト（図版 29・132・296）

P3646（図版 29・132・296）　31E3・8 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 64cm、深さ 180cm を測る。ほかのピットに比べてかなり深い。断面形は上部が少し広がる U 字状である。底面は中央に向かって弧状に下がる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。下部東壁際に縦約 60cm の柱根が残存する。覆土は 4 層に分層した。1・2 層は黒褐色土、3 層は灰色、4 層は灰オリーブ色土である。1 層は小粒の炭化物・焼土・灰オリーブ色土がわずかに混入する。2 層は灰オリーブ色土が斑紋状に少し混入する。底部は砂質のⅧ層まで掘り込まれている。深さが 180cm と深く、同規模のピットは今回の調査ではほかにない。旗を付けたなど、目印的な役割をした柱、あるいは柱松（たいまつ）などではないかと推定する。出土遺物はない。

6）D 東区居住域（図版 35・97・133 ～ 141・277・296 ～ 301・304）

東に張り出した調査区のため全体像がつかみにくいが、道路 SF3499 の南側を D 東区とした。D 区居住域と一連のものとも考えたが、35E ～ 37D グリッドにかけて伸びる SD2238 を区画溝として居住域を分離した。

8 棟の掘立柱建物を検出した。D 区とは異なり、柱の並びが不揃いである。SB5316 では柱間寸法が不揃いな点に着目した結果、出入り口の施設として内開きの扉が作られていたと推定復元した（第Ⅶ章 2A）。このほか井戸に上屋が付くのも特徴である。

a　掘立柱建物（図版 133 ～ 138・297・298）

SB5316（図版 133･134･297･298）　36G･H グリッドに位置する。建物の東側部分は調査区外へと広がっ

ていて不明だが、現状では三面以上廂付梁間一間型建物と推定する。桁行方向 N-87°-E の東西棟である。検出部分における規模は、身舎が桁行 4 間（7.00m）×梁行 2 間（4.35m）で、廂部が桁行 5 間（8.60m）×梁行 4 間（5.94m）である。廂部分を含めた面積は 51.1m^2 である。

構成柱穴は総数 29 基を数える。身舎部分が 12 基であり、廂部分が 17 基を数える。また、柱間寸法は非常に不揃いである。住居部分の柱間寸法であるが、北側柱列は 7 基を数える。1.45 ～ 2.35m であり、その中間に 0.3m と 0.35m ほどの短い柱間寸法を持つ柱穴が存在する。南側柱列は 3 基を数える。2.2m と 2.5m を測る。西側柱列は 4 基を数える。1.8m と 2.05m を測るが、中間に 0.5m ほどの柱間寸法を持つ柱穴が存在する。廂部分の柱間寸法であるが、北側柱列は 7 基を数える。1.40 ～ 2.40m であるが、多くは 1.40 ～ 1.55m を測る柱穴が主体である。また、その中間には 0.45m ほどの柱間寸法を持つ柱穴が存在する。南側柱列は 6 基であり、2.0m と 2.3m を測るが、中間には 0.3m ほどの柱間寸法を持つ柱穴が存在する。西側柱列は 6 基を数える。1.45m、1.6m、1.85m を測るが、0.65m と 0.9m ほどの柱間寸法を持つ柱穴が存在する。柱間の短い部分は何らかの施設が設けられていたものと考える。

柱穴の平面形態は多くが円形・楕円形を呈し、そのほかは方形が 4 基である。柱穴の規模は直径 18 ～ 50cm で、全体では 25 ～ 37cm のものが主体である。深さは 18 ～ 76cm で、その中でも 30 ～ 50cm のものが主体的である。断面形は U 字状を呈しているものが半数以上を占め、そのほかは半円状、V 字状、箱状などがある。柱の直径は P3129 で 13cm、P3096 では 16cm、P3064 では 14cm、P3182 では 14cm、P3107 では 7cm、P4558 では 8cm を測る。平面形は P3107 のみ楕円形を呈するが、そのほかはすべて円形を呈する。

覆土は 4 層に分層した。暗オリーブ褐色シルト・粘質シルトを主体として、暗灰黄色粘質シルト、灰黄褐色粘質シルト、黒褐色シルトなどと共に覆土を構成している。また、P3082 は 1 層目に焼土粒と炭化物粒を少量含んでいる。柱痕に相当する部分は黄灰色粘質土や暗灰黄色シルトであり、しまりは全体に弱い。遺物は P3479 の底面付近から珠洲焼片口鉢片（149）が出土した。

SB5317（図版 134・135）　35G・H グリッドに位置する。桁行 3 間（5.92m）×梁行 2 間（3.36m）の胴張型の側柱型建物である。桁行方向 N-84°-E の東西棟である。面積は 19.9m^2 を測る。平面形は、梁行中央が若干張り出す長方形を呈する。

構成柱穴は 13 基であり、柱間寸法が不揃いである。北側柱列は 6 基で 1.0m、1.45m、1.25m、0.9m、1.35m を測るが、すべて柱間寸法は短い。東側柱列は 3 基で 1.90m、1.45m を測る。南側柱列は 4 基で 2.0m、1.85m、1.80m を測り、ほぼそろっている。西側柱列は 4 基で 1.55m、0.5m、1.25m を測るが、すべて柱間寸法は短い。特に北側柱列と西側柱列には 0.5m、0.9m、1.0m と柱間寸法の短い部分があるのが特徴的であり、出入り口などの施設も考えられよう。

柱穴の平面形態は多くが円形を呈し、2 基が楕円形である。柱穴の規模は直径 18 ～ 47cm を測るが、全体では 23 ～ 30cm のものが主体をなしている。深さは 15 ～ 54cm を測り、その中でも 40 ～ 50cm のものが主体的である。断面形は U 字状を呈しているものが大半である。柱の直径は P3060 で 16cm であるのを確認した。覆土は 1 ～ 3 層に分層した。暗オリーブ褐色シルトを主体として、暗灰黄色シルトなどと共に覆土を構成している。柱痕に相当する部分は褐色土であり、しまりは弱い。出土遺物はない。

SB5318（図版 135・298）　35H3・4・7 ～ 10 グリッドに位置する。建物の半域かそれ以上が東壁の調査区外へと広がっている。調査した部分では、桁行 2 間（3.48m）×梁行 2 間（2.12m）で、面積は 7.4m^2 を測るが、全体的な建物の桁行方向や平面形態などは不明である。SB5317･SB5319 と重複しているが、

新旧関係を明らかに出来る資料に乏しくこれも不明である。

構成柱穴は５基であり、柱間寸法は不揃いである。北側柱列の柱間は1.0m、1.2mであり、西側柱列は1.95m、1.55mを測る。北側柱列は1.0mほどの短い柱間があり、何らかの施設、例えば出入り口などの施設が考えられよう。柱穴の平面形態は円形・楕円形か方形状を呈す。柱穴の規模は直径23～37cmで、深さは23～61cmを測る。断面形はＵ字状を呈しているものが大半であるが、P3122のみ漏斗状を呈している。柱の直径はP3122が10cm、P3049が8cmであり、両柱穴共に平面形態は円形を呈している。

覆土は１層～３層に分層した。暗オリーブ褐色シルトで、上層は粘性・しまり共にやや強い土質を主体として、にぶい黄褐色土などと共に覆土を構成している。柱痕に相当する部分は暗灰黄色土であり、粘性・しまりはやや弱い土質である。出土遺物はない。

SB5319（図版135）　35・36Hグリッドに位置する。建物の半域かそれ以上が東壁の調査区外へと広がっている。調査した部分では、桁行２間（2.76m）×梁行１間（2.36m）で、面積は6.5m^{2}を測るが、全体的な建物の桁行や平面形態などは不明である。SB5318・SB5319と重複しているが、新旧関係を明らかに出来る資料に乏しく、これも不明である。

構成柱穴は４基であり、柱間寸法は1.1～1.5mを測る。北側柱列は1.30m、1.50mであり、西側柱列は1.25m、1.10mを測る。現存している建物の柱間寸法は短いものであるが、概してこの地区の掘立柱建物の柱間寸法は不揃いであり、本建物の全容も不明なため、現存している柱間寸法のみではこの建物の寸法は不明であるといえよう。柱穴の平面形態は円形・楕円形を呈している。柱穴の規模は直径24～32cmであるが、そのほかの柱穴と重複するものや、柱穴上端の全容が不明な柱穴などがある。深さは14cm、15cm、21cm、65cmを測り様々であるが、全体的にやや浅めではある。断面形はP3054が階段状のほかは、半円状・Ｖ字状などを呈している。

覆土は１層～２層に分けた。暗オリーブ褐色シルトを主体として、にぶい黄褐色土などと共に覆土を構成している。出土遺物はない。

SB5320（図版136・137・298）　34G、35F・Ｇグリッドに位置する。桁行３間（6.65m）×梁行１間（4.76m）の胴張型の四面廂付梁間一間型建物である。桁行方向N−7°−Wの南北棟である。廂部は桁行４間（8.00m）×梁行３間（6.44m）で身舎の柱と対応しない。面積は身舎31.7m^2、廂部（身舎を含めて）で51.5m^{2}を測る。平面形は身舎が長方形であるのに対して、廂は桁行・梁行とも胴張状となっている。

構成柱穴は総数23基を数える。身舎が９基であり、廂が14基を数える。また、柱間寸法は本地区において検出されたほかの掘立柱建物に比べてみれば、割合にそろっている。住居部分の柱間寸法であるが、北側柱列は３基で3.10mと1.50mである。東部分が3.10mと長いが、その部分には柱穴は検出されなかった。東側柱列は４基で2.25m、2.15m、2.25mを測り、ほぼ平均した値である。南側柱列は中間に柱穴は検出されておらず4.75mである。西側柱列は４基で2.15m、2.25m、2.25mを測り、ほぼ平均した値である。廂の柱間寸法は、北側柱列は４基で1.75m、2.25m、2.05m、1.95mを測り、やや不揃いの感があるが、2.0mを基準にすればほぼ平均的である。東側柱列は５基で1.5m、2.25m、2.05m、1.95mを測り、1.5mを除けばそのほかはほぼそろった値である。南側柱列は４基で2.00m、2.15m、2.35mを測り、この列もほぼそろっている。西側柱列は５基で1.85m、2.20m、2.40m、1.65mを測り、やや不揃いの寸法である。

柱穴の平面形態は多くが円形（６基）・楕円形（６基）を呈し、そのほかには方形１基が存在する。柱

穴の規模は直径が最小で P3171 の 26cm であり、最大で P3140 の 44cm であるが、全体では 30 ～ 35cm のものが主体であり、割合にそろっている印象である。深さは最浅で P3140 の 22cm であり、最深で P3162 の 85cm であるが、全体ではその中でも 30 ～ 50cm ほどのものが主体であり、直径と共に割合にそろっている。断面形はＵ字状を呈しているものが大半であり、そのほかは半円状、Ｖ字状などが観察された。柱の直径は最小で P4568 の 8cm であり、最大で P3171 の 27cm を測るが、全体的には 10cm から 15cm ほどのものが主体をなしている。平面形態はすべて円形を呈している。

覆土は１層～３層に分けた。暗オリーブ褐色シルトを主体として、暗灰黄色シルトなどと共に覆土を構成している。柱痕に相当する部分は暗オリーブ褐色シルトのほか暗灰黄色土であり、しまりは全体に弱い。遺物は珠洲焼壺（150）の破片が P3160、P4564、P4575、P4584 から出土した。体部破片は P3160 から多量に出土し、P4564 から数点、P4575 から口縁部破片、P4584 から体部や底部付近の破片が出土した。P3171 からは砥石（313）が底面から出土した。

SB5321（図版 137・298）　34G・H、35G グリッドに位置する。桁行２間（4.48m）×梁行２間（4.20m）の方形型建物である。桁行方向 N-6°-W の南北棟である。面積は 18.8m^2 を測る。

構成柱穴は 10 基であり、柱間寸法はやや不揃いである。北側柱列は 2.0m、2.2m、南側柱列は 1.90m、2.35m とほぼそろっているが、東側柱列は 2.0m、1.8m、0.4m、西側柱列は 1.75m、1.80m、0.9m を測る。このように東側柱列と西側柱列に柱間の極端に短いか所があるのが特徴的であり、何らかの施設であると推定する。

柱穴の平面形態は円形を主体として、楕円形と方形が１基ずつある。柱穴の規模は直径 21 ～ 34cm を測るが、全体では 25 ～ 29cm ほどのものが主体をなしている。深さは 15 ～ 61cm を測り様々だが、その中でも 24 ～ 34cm が主体である。断面形はＵ字状を呈しているものが多いが、半円状やＶ字状なども観察された。

柱穴の覆土は１層～２層に分けた。暗オリーブ褐色シルトで粘性･しまりのやや強い土質を主体として、暗灰黄色シルト・土などと共に覆土を構成している。柱痕は P3023 にわずかに認められるが、不明瞭である。建物内に井戸 SE3008 が位置することから、本建物は井戸の上屋であったと考える。出土遺物はない。

SB4594（図版 138）　35G グリッドに位置する。桁行１間（2.0m）×梁行１間（1.97m）の方形型建物である。桁行方向 N-83°-E の東西棟である。面積は 3.9m^2 を測る。平面形はほぼ台形である。

構成柱穴は４基である。柱穴の平面形態は円形を呈する。柱穴の規模は直径 24 ～ 30cm を測る。深さは 17 ～ 40cm を測る。断面形はＵ字状・弧状を呈する。

柱穴の覆土は１層～２層に分層した。柱痕は P3166 で検出し、径 9cm を測る。建物内に井戸 SE3009 が位置することから、本建物は井戸の上屋であったと考える。出土遺物はない。

SB4595（図版 138）　36G グリッドに位置する。桁行１間（3.63m）×梁行１間（1.96m）の方形型建物である。桁行方向 N-16°-W の南北棟である。面積は 7.1m^2 を測る。平面形はほぼ台形である。

構成柱穴は４基である。柱穴の平面形態は円形・方形・楕円形を呈する。柱穴の規模は直径 24 ～ 31cm を測る。深さは南東隅の P3485 が 15cm で、残る３基が 36 ～ 50cm である。断面形はＵ字状・台形状を呈する。柱穴の覆土は１層～３層に分層した。柱痕は認められなかった。建物内に井戸 SE3476 が位置することから、本建物は井戸の上屋であったと考える。出土遺物はない。

b　井　　戸（図版 139・299・300）

SE3005（図版 139・299）　32G24・25、32H4・5 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形を呈し、長径 1.00m、短径 0.87m である。深さ 2.10m で、断面形は階段状を呈する。壁面は垂直に立ち上がっているが、下位部分は一段狭くなって掘りくぼめられている。底面は平坦であり、幅は 50cm ほどである。底面中央部分において上部に平坦面を持つ 20cm ほどの礫が存在している。また、底面部分の地山は小礫を少量伴う砂層である。

覆土は調査時に上位層・中位層部分は崩落し、下位の 3 層分を確認したのみであり、全体の覆土は不明である。1 層は粘質のシルトで粘性を有するしまりの強い土質である。最下層の 2 層目・3 層目は粘質土であり、粒子は細かく、粘性・しまりは非常に弱い土質である。出土遺物はない。

SE3008（図版 139・299）　34G24・25 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形は不整の楕円形で、長径 2.16m、短径 1.20m である。断面形は深さ 2.16m の階段状を呈する。検出面付近の南側部分において長さ 65cm ほどで高さ 30cm ほどの傾斜面を持っているか所がある。壁面は垂直に立ち上がっているが、下位において一部平坦面をなす部分が存在し、その下層からは一段狭くなる様相を呈している。底面はほぼ平坦であり、幅は 86cm ほどを測る。施設等は確認しなかった。底面部分の地山は細粒砂の砂層である。しまりは強い土質であり、酸化鉄を多量に帯びている。

覆土は調査時に上位･中位部分は崩落し、下位の 2 層分のみを調査した。1 層は植物遺体が主体であり、黒色土層でしまりは非常に弱く粘性も弱い。また、2 層は粘土質であり、粘性は非常に強くしまりは弱い土質である。SB5321 が本井戸を囲むように位置しており、上屋であった可能性が高い。

遺物は 2 層から青磁椀片（151）、最下層から、砥石（314）、木地椀（411）、漆器椀（412）、用途不明部材（413）、折敷底板（414 ～ 418）、部材、樹皮が出土した。

SE3009（図版 139・300）　35G5・9・10 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形で、長径 1.05m、短径 1.01m である。深さ 2.22m で、断面形はＵ字状を呈し、壁面は垂直に立ち上がっている。底面の幅は 60cm ほどであり、ほぼ平坦面を呈する。施設等は確認しなかった。また、底面部分の地山土は細粒砂の砂層であり、しまりはやや強い土質であり、酸化鉄を多量に帯びている。

覆土は 8 層に分けた。上位層はシルト質で、中位層から下層は粘質のシルト質であり、最下層は粘質土である。最下層は植物遺体を多量に含む黒色土層で、しまりは非常に弱い。SB4594 が本井戸を囲むように位置しており、上屋であった可能性が高い。遺物は木製の漆器椀片が出土した。構築時期は明確な資料がないため判然としないが、確認面からみれば中世後半期から近世初頭が推定される。

SE3476（図版 139・300）　36G9・10・14 グリッドに位置する素掘りの井戸である。上面は攪乱により壊されているか所がある。平面形は円形で、長径 1.35m、短径 1.30m である。深さ 2.30m で、断面形はＵ字状を呈し、壁面は垂直に立ち上がっている。底面は幅 95cm ほどであり、中央部分がやや擂鉢状を呈したくぼみを持っている。底面部分の地山は細粒砂主体の砂層であり、しまりはやや強い土質である。小礫を少量含んでいる。

覆土は 11 層に分けた。上位層から中位層にかけてはシルト質であるが、下層から最下層は黒泥層である。特に 9・10 層は植物遺体を大量に堆積している黒色土層であり、粘性・しまりは非常に弱い。SB4595 が本井戸を囲むように位置しており、上屋であった可能性が高い。遺物は 10・11 層から出土した。珠洲焼片、用途不明品（410）、小型の曲物（408・409）が出土しており、底面中央部のくぼみに収まっていた

施設と思われる。

c 土　　坑（図版 140・301）

SK3077（図版 140）　36G22 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 0.82m、短径 0.60m である。主軸方位は N–71°–W を示す。深さ 0.30m で、断面形は半円状を呈し、南側・東側・西側壁面はやや垂直気味に、北壁面は段を有しながらやや垂直気味に立ち上がっている。底面は一様に平坦ではなく、西側部分に平坦面を持ち、東側が一段掘りくぼまれている。全体に壁面底面共にやや起伏に富んでいる。

覆土は 2 層で構成されている。シルト質であり、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含み、1 層には炭化物を少量含む。SK3078 と重複している。新旧関係は本土坑が新しい時期の構築である。また、本土坑は SB5316 内に位置するが、SB5316 との関連性及び新旧関係は不明である。出土遺物はない。

SK3078（図版 140）　36G22 グリッドに位置する。平面形は残存する形状では、長径 0.95m、短径 0.74m の楕円形を呈する。主軸方位は N–81°–E を示す。深さ 0.12m で、断面形は弧状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。覆土は地山土のにぶい黄褐色土を多量、炭化物を微量含む単層である。SK3077 と重複しており、新旧関係は本土坑が古い時期の構築である。また、本土坑は SB5316 内に位置するが、SB5316 との関連性及び新旧関係は不明である。出土遺物はない。

SK3179（図版 140・301）　35G15 グリッドに位置する。平面形は南北がやや変形の楕円形で、長径 0.72m、短径 0.55m である。長軸方向は N–9°–W を示す。深さ 0.15m で、断面形は弧状を呈し、壁面はやや緩やかに立ち上がっている。底面は一様に平坦ではなく、やや起伏に富んでいる。覆土は地山土のにぶい黄褐色土を少量、炭化物を微量含む単層である。SK3180 を切る。出土遺物はない。

SK3180（図版 140・301）　35G15 グリッドに位置する。SK3179 が東側を掘り込んでいるため、全容は不明であるが、現存部分は短径 0.48m の楕円形を呈する。深さ 0.37m で、断面形は台形状を呈し、壁面はやや緩やかに立ち上がっている。底面は一様に平坦ではなく、中央部分が盛り上がった起伏に富んだ様相を呈す。覆土は 3 層に分層した。1 層はわずかに炭化物を含み、3 層は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。出土遺物はない。

SK3183（図版 140）　34G14・15・19・20 グリッドに位置する。平面形は不整形で、長径 2.25m、短径 1.57m である。主軸方位は N–0°–S を示す。断面形は深さ 0.10m の弧状を呈し、壁面はごく緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が激しくて平坦ではなく、全体に壁面底面共に起伏に富んでいる。

覆土は単層であるが、東側部下層には炭化物が広く分布しているか所があり、厚い部分で 5cm ほど堆積している。焼土は特に見られない。また、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。P4581、P4590、SB5321–P4591・4592 と重複しているが、新旧関係はいずれも不明である。周辺には南東方向に 1.5m ほど離れて SE3008 が位置する。

SK4542（図版 140・301）　37G15・20、38G11・16 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径 1.65m、短径 1.12m である。主軸方位は N–9°–E を示す。深さ 0.50m で、断面形は変形のやや V 字状を呈し、東側・南側壁面は緩やかに、西壁面・北壁面はやや垂直気味に立ち上がっているが、底面は平坦ではなく、全体に壁面底面共に起伏に富んでいる。覆土は 3 層に分けた。基本的にシルト質であり、3 層は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。周辺には北方向に 20cm ほど近接して、道路状遺構の側溝が東西に走っている。出土遺物はない。

SK4559（図版 140）　36G15、37G11 グリッドに位置する。開渠により一部が壊れているものの、平面

形は楕円形が想定される。規模は長径 0.70m である。深さ 0.14m で、断面形は弧状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。覆土は 2 層に分層した。特筆すべきは 8cm ほどの厚さを持つ 1 層の炭化物層だが、焼土も多くはないが含んでいる。また、土坑の中央部分は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。出土遺物はない。

d　溝 ・ 道 路（図版 35・140・141・277・296・301・304）

SD3001（図版 35・140・301）　33G、34G・H に位置する。溝は直線的であるが、東部南側壁では上位において小さな平坦面を持つ部分が一部あり、その部分で P3013、P3014 と重複しているが、新旧関係は不明である。主軸方位は N–83°–E を示す。周辺には SD3002 が本溝から北方向に 1.1 ～ 1.2m ほど離れて位置するが、SD3002 は本溝とほぼ同規模であり同方向に併走している。

規模は現存長で 12.10m、幅 1.04m、深さ 0.42m を測る。溝の両側は東西両方向の調査区外に伸びており、全容は不明である。しかし調査区西側は用水路や工事用道路が南北に走っており、さらにその西側において今回調査を行っているが、その調査区からは本溝に類似する溝は確認しなかったので、途中の用水路や工事用道路において収束しているものと推定する。壁面は弧状に立ち上がっている。底面は小さな起伏が見られる程度であり、ほぼ平坦の様相を呈している。覆土は 3 層に分層した。シルト質で粘性を有し、2 層目は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいた。出土遺物はない。

SD3002（図版 35・140・301）　33G・34G・H グリッドに位置する。溝は直線的である。主軸方位は N–83°–E を示す。周辺には SD3001 が本溝から約 1.1 ～ 1.2m ほど離れて南方向に位置するが、SD3001 は本溝と同規模であり、同方向に併走している。規模は現存長で全長 13.15m、幅 1.04m、深さ 0.32m を測る。溝の両側は東西両方向の調査区外に伸びており、全容は不明である。断面形は台形状を呈する。底面は全体に起伏が著しく溝中央部分は山脈のような状態を呈しており、溝に併走している。また、溝の西部南側は一段深く掘り込まれており、西部北側は最も起伏が激しい。覆土はシルト質で粘性を有し、地山土のにぶい黄褐色土を少量含んでいる。出土遺物はない。

SD3003（図版 35・140・301）　33G・32・33H グリッドに位置する。両端部が東壁の調査区外へと伸びており、平面形状はく字状に蛇行しているが、全容は不明である。溝の北部では SD3006 と重複しているが、新旧関係では本溝が新しい時期の構築である。主軸方位は不明である。周辺には SD3001 が本溝から北方向に 4.8m ほど離れて位置し、西側方向には SE3005 が 2.3m ほど離れて位置する。

規模は現存長で全長 9.20m、幅 1.04m、深さ 0.17m を測るやや浅い溝である。断面形は弧状を呈し、壁面は起伏が少なく滑らかに立ち上がっている。底面は起伏がほとんど見られない。

覆土はシルト質で粘性を有し、酸化鉄を多量に帯びたしまりの強い単層であった。出土遺物はない。

SD3004（図版 35･140･301）　32G･H グリッドに位置する。直線的であり、主軸方位は N–68°–E を示す。周辺には SE3005 が本溝から北方向に 2.9m ほど離れて位置する。

規模は現存長で全長 4.80m、幅 0.82m、深さ 0.20m を測る。溝の両側は東西両方向の調査区外に伸びており、全容は不明であるが、東壁の調査区外において SD3003 と合流することも考えられ、同じ溝の可能性もある。断面形は弧状を呈し、壁面は起伏が少なく立ち上がっている。底面は起伏がほとんどない。

覆土はシルト質で粘性を有し、酸化鉄を多量に帯びたしまりの強い単層であった。出土遺物はない。

SD3006（図版 35・140・301）　33G・H グリッドに位置する。ほぼ直線的であり、溝の中央部やや南において SD3003 と重複しているが、新旧関係では本溝が古い時期の構築である。主軸方位は N–3°–E を

示す。周辺にはSD3001が北方向に1.55mほど離れて位置する。

規模は現存長で全長6.00m、幅0.72m、深さ0.48mを測る。溝の北側は収束しており、南側は東壁の調査区外に伸びており、全容は不明である。断面形は台形状を呈するが、底面からの立ち上がりは丸みを持って立ち上がっている。底面は小さな起伏が見られる程度であり、ほぼ平坦の様相を呈している。覆土は2層に分層した。1層はシルト質で粘性を有し、しまりの弱い土質であり、炭化物粒を少量含んでいる。2層は1層同様の土質であり、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。出土遺物はない。

SF3201（図版141・277・296・304）　34B、35B～D、36Dグリッドにわたって位置し、東西方向に伸びる道路で、現代の農道・工事用道路・排水路で隔てられたD区のSF3499と接続するものと考える。

遺構は波板状凹凸面と片側の側溝とから構成される。規模は長さ33.80m、波板状凹凸面は幅が1.54mで、側溝は幅が0.7mで、深さが0.22mとなる。なお両者を含めた最大幅は2.4mとなる。主軸方位は35C1グリッド付近で屈曲しており、屈曲部の西はN-82°-Wで、東はN-78°-Eで、約20°南に屈曲する。波板状凹凸面は部分的に北と南の2列が平行しており、時期やルートの違いによるものと考えるが、今回の調査では両列の新旧は確認できなかった。

覆土は全体的にまとまりを持っており、類似した堆積状況が見られる。波板状凹凸面では黄灰色シルトでにぶい黄色地山の混じりは少ない。一方、側溝覆土は暗灰黄色からオリーブ褐色シルトににぶい黄色地山の混入が多い傾向で、特に側溝最下層ではにぶい黄色地山の混入は4～5割程度であった。

波板状凹凸面と側溝の新旧関係は、平面や、断面からは側溝が波板状凹凸面を切っており、側溝が新しいものと考える。ただし、側溝の土浚いや、拡幅などの可能性もあり、十分な検討を要する。また、波板状凹凸面と側溝の覆土をさらに覆う層（A-A'、D-D'、E-E'の1層）が確認でき、側溝の埋没以後も道として使用された可能性が高い。

SK3252、SD2238を切り、SK3260・SK3261、SD2353・SD3200に切られる。なお、P3249、P3250、P3251、P3253との新旧関係は不明である。

SF3499（図版141・277・301）　37F、37G、38Gグリッドにわたって位置し、東西方向に伸びる道路遺構で西端部は38G22グリッドで自然に消滅する。農道、工事用道路、用水路で隔てられた調査区のSF3201に接続するものと考える。

遺構はSF3201と同様に波板状凹凸面と片側の側溝から構成される。規模は長さ16.34m、波板状凹凸面は幅が1.3mで、側溝は幅が0.66mで、深さが0.24mとなる。なお両者を含めた最大幅は2.0mとなる。主軸方位はやや蛇行も見られるがおおよそN-89°-Eである。

覆土もSF3201と同様に波板状凹凸面では黄灰色シルトが主体で、側溝覆土は暗灰黄色からオリーブ褐色シルトににぶい黄色地山を含み、側溝最下層ではにぶい黄色地山の混入が多く見られる。

波板状凹凸面と側溝の新旧関係は、平面や断面からは側溝が波板状凹凸面を切っていることから、側溝が新しいものと考える。

平面形状や土層堆積状況から同一の遺構と考えるが、調査区が約20m離れていることから調査時は連続性が把握できず、別遺構として捉えていた。

e　性格不明遺構（図版140）

SX3474（図版140）　36F22・23グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長径0.97m、短径0.32mである。主軸方位はN-63°-Wを示す。深さ0.20mで、断面形は台形状を呈し、壁面は垂直に近い立ち

上がりを見せ、底面は平坦な様相を呈している。

覆土は２層に分層した。粘質のシルトで、しまりの強い土質であり、２層目は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。出土遺物はない。南側には近接して SX3475 が並ぶようにして位置する。

SX3475（図版 140）　36F22 グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長径 0.80m、短径 0.24m である。主軸方位は N−65°−W を示す。深さ 0.11m で、断面形は台形状を呈し、壁面は垂直に近い立ち上がりを見せ、底面は平坦な様相を呈している。

覆土は粘質のシルトで粘性・しまりを有する土質であり、地山土のにぶい黄褐色土を少量含む単層である。北側には近接して SX3474 が並ぶようにして位置する。出土遺物はない。

7）E 南区居住域（図版 30・31・36・142 ～ 145・302 ～ 308）

道路 SF3201 と自然流路 SD2050 に挟まれた区画である。居住域と呼称するものの、掘立柱建物は検出していない。D 区居住域寄りに井戸２基がある。

a　井　　戸（図版 143・303）

SE2243（図版 143・303）　37B21・22 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形は円形で長径 1.28m、短径 1.12m である。深さ 1.96m で、断面形は U 字状。覆土は９層に分層した。１層に I ' 層（現水田床土）の落ち込みがあり、２層は粘性のない暗オリーブ褐色シルト、３層はⅢ層土が多く混入する強い粘性を帯びた黒褐色シルト、４層はⅤa 層崩落土とおぼしい脆弱土、５層はⅢ層・Ⅴa 層由来土が小ブロック状に混入する暗オリーブ褐色シルト、６層は灰色土と炭化物が混入する黒褐色粘土、7、８層はグライ化によって変色した粘土、最下層９層は褐鉄鉱を含んだ砂礫である。９層は砂礫層のⅧ層に相当するが、現在は湧水しない。当時よりも湧水位が低下したのであろう。３層～５層は人為的な堆積土だと思われる。ただし、４層に地山（Ⅴa 層）土が一定幅堆積するものの、15cm 程と少なく、隣接の SE2244 を掘削した排土ではないようだ。また、井戸側や水溜施設として曲物等を埋設していた痕跡はなかった。遺物は、６層から瀬戸・美濃焼平椀片（154）が出土したのみである。後世の攪乱によって上端の一部が壊されている。

SE2244（図版 143･303）　37B21 グリッドに位置する素掘りの井戸である。平面形は円形で、長径 1.04m、短径 0.94m である。深さ 2.00m で、断面形は U 字状を呈する。覆土は 10 層に分層した。１層にⅢ層の崩落があり、２層はⅢ層土が 20cm 大で大量に混入した暗オリーブ褐色シルト、３層はⅢ層土が少量混入する強い粘性を帯びた暗オリーブ褐色シルト、４層はⅢ層崩落土とおぼしい脆弱土、５層は粘性の強い暗灰黄色シルト、６層はⅢ層・Ⅴa 層土が小ブロック状に混入する暗オリーブ褐色シルト、６層は暗オリーブ褐色系の粘質土、７層は炭化物が混入する暗灰黄色シルト、８層はしまりのない黒褐色シルト、９層はグライ化によって変色した粘土、最下層 10 層は９層にオリーブ褐色土が混入した粘質土である。10 層から下は、褐鉄鉱を含んだ砂礫層のⅧ層に相当するが、現在は湧水しない。当時よりも水位が低下したのであろう。２層～４層は人為的な堆積土だと思われる。４層においてⅢ層土が 10cm 程堆積するものの、隣接の SE2243 を掘削した排土としては少なく思える。また、井戸側や水溜施設として曲物等を設置していた痕跡はなく、遺物も出土しなかった。

b 土　　坑（図版 143・303・308）

SK2242（図版 143・303）　37B3・4・8 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。断面形は弧状で、底面に凹凸は見られない。長径 1.20m、短径 0.54m、深さ 0.24m を測る。覆土は 2 層に分層し、しまりが弱く粘性の強い暗オリーブ褐色土層である 1 層が大半を占める。出土遺物はない。SD2353 の支流に近接するが、覆土は本遺構の方が黒色味が薄く、時期的に古いと判断する。

SK2250（図版 143・303）　38B8 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。断面形は弧状で、底面にはわずかな凹凸がある。長径 1.38m、短径 0.42m、深さ 0.22m を測る。覆土は 3 層に分層したが、総じてやや粘性を帯びたオリーブ褐色系土である。最下層 3 層ではしまりが弱く粘性が強くなる。出土遺物はない。周囲に遺構はなく、孤立した感がある。

SK2366（図版 143・308）　40G13・14・18・19 グリッドに位置する。平面形は不整形で、推定長径 2.30m、短径 1.48m である。深さ 0.16m で、断面形は弧状を呈し、壁面はごく緩やかに立ち上がり、底面は起伏がやや見られるものの、全体的には平坦な様相を呈している。

覆土は砂を主体にして粘性･しまりは共に非常に弱い土質であり、小礫を多量に含む単層である。また、覆土のみならず底面にも小礫が多量に存在している。SD2050、SD2051 と重複している。SD2051 との新旧関係は不明であるが、SD2050 とは本土坑が古い時期の構築である。出土遺物はない。

SK2371（図版 143・308）　42D4・5 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。北東側で SD2050 に切られ、現存部の平面形は不整形である。断面形は台形状である。短径 1.28m、深さ 0.23m を測る。覆土は 2 層に分層し、1 層は暗灰黄色砂質土である。2 層下位にⅤ層ブロックを多量含む。出土遺物はない。

c 溝（図版 30・31・36・144・145・304 ～ 308）

SD2050（図版 36・144・305・306）　39H、40G・H、41F・G、42B ～ F、43C グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っているが、中央部分において緩やかなくの字状を呈している。規模は現存長で全長 70.50m、幅 1.92m、深さ 0.54m を測る。溝の両側は調査区外に伸びており、全容は不明である。南部において SD2151・SD2165・SD2167、SK2366、SD2079、北部において SK2371 を切っている。また、本遺構の南方向へ 1.5 ～ 2.1m ほど離れて SD2170 が位置するが、本溝と同方向に併走している。主軸方位は N-16 ～ 46°-W を示す。

断面形については一概に言えない。場所により様相が変化していて、V 字状・半円状・弧状などを呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は北部中央部でやや丸みを持ち、南部ではやや平坦な面を見せる部分もある。起伏はやや著しい。

覆土は場所により変化が見られる。セクションＢでは８層に分層した。層上位は主に粘質シルトで粘性･しまり共に強く、層下位はシルト質で、粘性・しまりは共に弱くなる。最下層は砂粒・地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。

遺物は、数量は多くはないが縄文時代～近世のものがある。石鏃（67）・土器・珠洲焼甕片（157）・片口鉢片（158）、唐津焼徳利片（160）、青磁盤片（159）、土師質土器皿片（161）、磁器、杭（419）などが出土した。構築時期は出土遺物からすれば近世初頭が想定される。

SD2051（図版 36・144・306）　38・39E、40F・G に位置する。溝は西から東西方向へ走行し、途中で

90 度ほど南方向へ進路を変えている。SD2170 に合流するような格好になっており、その先の南側では本溝の上端範囲は明確でなくなっている。西側では未調査区域を挟み 38・39E グリッドにおいても検出されていて、SD2236 と連続すると思われる。主軸方位はN–72°–E である。SD2170、SK2366 と切り合っており、SK2366 とは新旧不明であるが、SD2170 よりも本溝が新しい時期の構築である。

規模は現存長で全長 31.00m、幅 0.75m、深さ 0.21m を測る。断面形は台形状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや丸みを持つが、ほぼ平坦である。覆土は、場所により異なるが、セクションＢでは３層に分層した。シルト質で粘性のあるしまりの強い土質であり、最下層は細粒砂を多量に含み、また、全層において酸化鉄を帯びている。出土遺物はない。構築時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば中世後半か近世初頭と推定する。

SD2079（図版 30・31・36・144・304・308）　39F・G、40A・B・E・G、41A ～ E、42D・E グリッドに位置する。本遺構は 41B ～ 41D グリッドにかけては東西方向に走っているが、41E・42E グリッド付近から大きく蛇行して、S 字を描くように南方向へ向かい、39F 付近からは東へ方向を変えている。重複関係では南部において SD2050・SD2170・SD2367 の溝と切り合っており、新旧関係は SD2050 とは本遺構が古く、SD2170、SD2367 とは本遺構が新しい。北部では SX2279・SX2280 と切り合って本遺構が壊されているが、両方とも後に風倒木痕であるのが判明した。主軸方位は不明である。

規模は現存長で 76.0m、幅 4.25m、深さ 0.20m を測る。両側は調査区外に伸びており、全容は不明である。断面形については弧状などを呈している。壁面はごく緩やかに立ち上がっており、底面は南部では平坦な部分があるが、SD2051・SD2170・SD2367 と重複している部分は、攪乱を受けたような著しい凹凸を見せる。北部はほぼ平坦である。覆土は２～４層に分けられた。粘質のシルトで粘性・しまり共にやや強い土質であり、最下層は砂粒が見られ、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含み、全層において酸化鉄を多量に帯びている。自然流路である。遺物は近世以降の陶器擂鉢が出土したことから、中世後半から近世初頭まで存在したと考える。

SD2151（図版 36・144・306）　40H・41G・H、42G グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っているが、南部分において緩やかなくの字状を呈し、２方向へ分岐している。他遺構との関係では SD2050・SD2164・SD2166 と重複しており、新旧関係では SD2050 とは本溝が古い構築であり、SD2166 とは本溝が新しい時期の構築である。また、本溝北端においては SD2164 と連なっており、SD2164 に比べ溝幅は狭く深さも浅くなるが同じ溝の可能性が大きいが一応ここでは別遺構として取り上げている。主軸方位はN–4°–W を示す。また、本溝の西南方向に 60 ～ 80cm ほど離れて SD2165 が位置するが、本溝と同方向に併走している。南部では合流するような状況になるが、掘り込みが浅く、両溝の範囲は明確ではない。

規模は現存長で全長 17.30m、幅 1.18m、深さ 0.18m を測る。溝の南端は前述しているように２方向に分岐していて、東側は調査区外に伸びており、一方の西側は SD2050 に切られている。断面形は弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は北部の SD2166 と重複している付近では起伏は激しいが、その他は平坦な面を見せている。

覆土は２層に分層した。１層はシルト質で粘性は弱く、しまりは強い土質であり、２層は地山土のにぶい黄褐色土を含む。１・２層共に酸化鉄を帯びている。遺物は１点のみだが珠洲焼が出土した。存続時期は出土遺物からすれば中世後半から近世初頭が想定される。

SD2164（図版 36・144・306）　42・43F・G グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っているが、

本溝南部分においては溝幅が大きく広がり、その先のSD2151、SD2168、SD2169の3本の溝に枝分かれしている。本流としてはSD2151に引き継がれていくと考える。重複関係ではSD2166･SD2167(同じ溝の可能性がある）を切っており、本溝が新しい。SD2187・SD2188については不明である。主軸方位はN-11°-Eを示す。

規模は現存長で全長13.50m、幅4.40m、深さ0.26mを測る。溝の北部分は調査区外に伸びているが、溝の位置や出土した遺物から推定して、F区のSD1141につながる可能性が大きい。断面形は弧状を呈する。壁面は緩やかに立ち上がっており。底面は起伏が見られるものの全体的には平坦である。

覆土は大きく4層に分層した。全体的にシルト質であり、粘性はやや弱く、しまりのある土質であり、全層において酸化鉄を多量に帯びている。遺物は珠洲焼・青磁椀片（155）・信楽焼？甕片（156）・大型椀形鍛冶滓、椀形鍛冶滓破片・砥石（321）・寛永通宝などが出土した。出土遺物からすれば、中世～近世初頭まで存続したと考える。

SD2165（図版36・144・307）　40G・H、41・42F・Gグリッドに位置する。溝の北部分は東西方向に走っていて、広く、やや深めである。その後、途中で約90度向きを変え、南北方向に屈曲して溝は走るが、この部分は狭く全体に浅い。他遺構との重複関係ではSD2050と切り合っている。新旧関係ではSD2050とは本溝が古い時期の構築である。また、本溝の東方向へ60～80cmほど離れてSD2151が位置するが、本溝と同方向に併走している。主軸方位は西側がN-82°-E、東側がN-8°-Wを示す。

規模は全長21.00m、幅2.82m、深さ0.37mを測る。断面形は弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は北部では起伏が著しいが、南北に走っている部分ではやや平坦な面を見せる。覆土は4層に分層した。シルト質であり1・2層では粘性が弱くしまりは強く、最下層のみしまりの弱い土質である。最下層では地山土のにぶい黄褐色土を多量に、全層において炭化物粒を少量含んでいる。遺物は珠洲焼片口鉢と壺か甕が出土した。存続時期は出土遺物からすれば中世後半から近世初頭と考える。

SD2166（図版36・144・307）　42・43G・Hグリッドに位置する。溝はほぼ東西方向に走っているが、SD2151と直行するように切り合っており、本溝が古い。また、SD2167がSD2151に分断されるように本溝の西側の延長線上に位置しており、別遺構名を付けたが同じ遺構の可能性がある。主軸方位はN-86°-Eを示す。

規模は現存長で全長7.55m、幅1.50m、深さ0.30mを測る。溝の東端は調査区外に伸びている。また、溝の南側は中端を持ち、一段平坦な部分がある。断面形は場所により様相が変化しており、台形状・弧状などを呈している。壁面の立ち上がりは、北側はやや急に、南側と北側の西部では底面からやや急に立ち上がり、一旦平坦面を見せ、その後緩やかな立ち上がりを見せる。底面は凹凸がやや見られるが、全体的には平坦である。

覆土は4層に分層した。シルト質で、粘性のあるしまりの強い土質であり、最下層は地山土のにぶい黄褐色土を多量に含む。また、全層において酸化鉄を帯びている。出土遺物はない。検出面からすれば中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2167（図版36・144・307）　41F、42F・Gグリッドに位置する。溝はほぼ東西方向に走っているが、溝の両側は他溝と切り合っている。重複関係ではSD2050・SD2151・SD2168・SD2169と切り合っており、SD2050、SD2151とは本溝が古い時期の構築であるが、SD2168、SD2169とは不明である。また、本溝の東側はSD2151に切られているが、本溝の延長線上にSD2166が位置しており、別遺構名を付けたが同じ溝の可能性がある。主軸方位はN-88°-Eを示す。

規模は現存長で全長 7.30m、幅 1.10m、深さ 0.15m を測る。断面形は場所により様相が変わり、台形状・弧状などを呈している。壁面はやや緩やかに立ち上がっており、底面は全体的に起伏が著しい。覆土は 2 層に分層した。粘性が弱くしまりの強い砂粒を主体にした土質であり、にぶい黄褐色土を多量に含む。遺物は珠洲焼が出土した。構築時期は出土遺物からすれば中世後半期から近世初頭と考える。

SD2168（図版 36・144・307・308）　42F17・22・23 グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っている。溝の東端部で SD2164 と、西端部で SD2167 と重複しているが、新旧関係は不明である。また、SD2164 とは切り合っているというよりは合流している感じである。さらに本溝の北側には近接して SD2169 が併走している。主軸方位は N-62°-E を示す。

規模は現存長で全長 3.20m、幅 0.60m、深さ 0.09m を測る浅くて短い溝である。断面形については弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は平坦である。

覆土はシルト質で粘性が弱くしまりの強い土質であり、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。また、最下層は砂粒を多量に含み、しまり弱い。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば、中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2169（図版 36・144・307）　42F17・18 グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っている。溝の東端部で SD2164 と、西端部で SD2167 と重複しているが、新旧関係は不明である。その他、本溝の一部は調査区外へと伸びている。また、SD2164 とは切り合っているというよりは合流している感じである。さらに本溝の南側には近接して SD2168 が併走している。主軸方位は N-65°-E を示す。

規模は現存長で全長 3.50m、幅 0.90m、深さ 0.12m を測る浅くて小さな溝である。断面形は弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面は東側においてやや起伏が見られるが、そのほかは平坦である。

覆土はシルト質で粘性が弱くしまりの強い土質であり、地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。また、最下層には砂粒を多量に含んでいる。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば、中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2170（図版 36・145・306 ～ 308）　39G・H、40・41F・G、42B ～ E グリッドに位置する。溝はほぼ南北に走っているが、中央部において緩やかなくの字状を呈している。また、本溝の北方向へ 1.5 ～ 2.1m ほど離れて SD2050 が位置するが、本溝と同方向に併走している。重複関係では南部においてほかの遺構と多く重複しており、SD2051・SD2079・SD2177 と、北部では SX2279 と重複している。SX2279 はその後風倒木と判明した。SD2177 は同時期と思われ、41G1 グリッド付近で分岐している。SD2051・SD2079 においてはすべて本溝が古い時期の構築である。主軸方位は N-13°-W を示す。

覆土はシルト質で粘性・しまりは共にやや強い土質であり、最下層には地山土のにぶい黄褐色土を多量に含む。また、全層において酸化鉄を多量に帯びている。出土遺物はない。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば、中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2177（図版 36・145・308）　41F・G グリッドに位置する。溝はほぼ南北に走っている。主軸方位は N-9°-W を示す。周辺には東方向に 1m ほど離れて SD2050 が本溝と同方向に併走している。

規模は現存長で全長 5.95m、幅 0.54m、深さ 0.26m を測る浅い溝である。溝の北側は調査区外に伸びており、東側は SD2170 と重複（合流）している。断面形は弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。覆土はシルト質でしまりの強い酸化鉄を帯び、炭化物粒を少量含む単層である。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としない

が、検出面からすれば、中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2187（図版 36・145・308）　43G2・3 グリッドに位置する。溝はほぼ東西方向に走っているが、東側は調査区外へ伸びている。西側では SD2164・SD2188 と重複（合流）しているが、新旧関係は不明である。主軸方位は N–54°–E を示す。

規模は現存長で全長 4.30m、幅 0.45m、深さ 0.24m を測る小型の溝である。断面形は不整の半円状を呈している。壁面はやや緩やかに立ち上がっており、底面はやや丸みを持ち起伏のない様相を見せるが、本溝西側の SD2164 に近い場所では大きく起伏に富んでいる。

覆土は 3 層に分層した。全体に粘性は弱くしまりが強く、酸化鉄を多量に帯びた層で構成されている。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば、中世後半期から近世初頭と推定する。

SD2188（図版 36・145・308）　42G10・43G1 グリッドに位置する。溝はほぼ南北方向に走っているが平面形は出入りの著しい不整形を呈している。本溝北側は SD2164･SD2187 と重複（合流）しているが、新旧関係は不明である。また、南側においては収束している。主軸方位は N–17°–W を示す。

規模は現存長で全長 3.30m、幅 0.35m、深さ 0.06m を測る浅くて小型の溝である。断面形は弧状を呈している。壁面はやや緩やかに立ち上がっており、底面はやや丸みを持ち起伏のない様相を見せるが、本溝北側部の SD2164 に近い場所では大きく起伏に富んでいる。

覆土はシルト質であり、全体に粘性は弱くしまりの強い単層である。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば、中世後半から近世初頭と推定する。

SD2236（図版 30・145・304）　36B・C、37C・D、38D にわたって検出し、規模は延長 32.10m、最大幅 0.95m、深さ 0.10m を測る。調査区西側で北西方向に屈曲して調査区外へ伸び、調査区中央からはおおむね東西軸にほぼ平行したまま東進して調査区外へ伸びる。途中、36A24 グリッドで SD2237 を切り、37B17 グリッドまで両者は完全に重複したまま並走する。主軸方位は西側で N–53°–W、東側は N–85°–E を測る。覆土はやや粘性を帯びた暗オリーブ色シルトの単層である。37B22 グリッドで SD2238 を切り、37C9 グリッドで SD2239 を切る。さらに東進した先の排水路・用水路に分断される。排水路の先では類似した溝である SD2051 を検出しているが、同一かどうか不明確なために別遺構とした。ほかに P2245・P2319 を切り、後世の攪乱に一部を壊されている。

SD2237（図版 30・145・304）　36B・C、37C グリッドにわたって検出し、西端は調査区外へ伸びる。規模は延長 21.20m、最大幅 0.60m、深さ 0.26m、主軸方位は N–85°–E である。覆土は 2 層に分層した。1 層はⅤa 層土をブロック状に多く含む暗オリーブ褐色シルト、2 層は酸化鉄が少量見られ、粘性の強いオリーブ褐色シルトである。36A24 グリッドで SD2236 に切られ、37B17 グリッド付近で SD2353 に切られて行き先が不明になる。SD2353 の対岸では検出されないことから、同遺構は SD2353 内で収束するものと思われる。ほかに、後世の攪乱に一部を壊されている。

SD2238（図版 30・145）　35D・E、36D、37C・D グリッドにわたって検出し、南端は調査区外へ伸びる。規模は延長 27.60m、最大幅 0.52m、深さ 0.10m、主軸方位は N–2°–W を測る。覆土はⅣ層由来土を多く含み、強い粘性を帯びた暗オリーブ褐色土の単層である。同遺構はおおむね南北軸と並行するが、途中 37C17・22 グリッドで SD2353 に切られ、36C13 グリッドで SF3201 に切られる。さらに北進した先の 37B22 グリッドで SD2236 に切られ、37B23 グリッドで再び SD2353 に切られる。同遺構は

SD2353 内で収束するものと思われる。出土遺物はない。D 区居住域と D 東区居住域の区画溝と考える。

SD2239（図版 30・145・304）　37D グリッドに位置する。規模は延長 4.0m、最大幅 0.45m、深さ 0.14m、主軸方位は N-66°-E を測る。覆土はⅤ a 層土を多く含み、強い粘性を帯びたオリーブ黒色シルトの単層である。同遺構はおおむね SD2240 と並行するが、途中 37C9 グリッドで SD2236 に切られ、さらに東進した先で現代の用水路に分断される。同遺構は用水路の先では検出されないことから、水路内で収束するものと思われる。出土遺物はない。

SD2240（図版 30・145・304）　37C・D、38D グリッドに位置する。規模は延長 9.1m、最大幅 0.54m、深さ 0.08m、主軸方位は N-76°-E を測る。覆土はⅤ a 層土を少量含み、強い粘性を帯びた黒褐色シルトの単層である。同遺構はおおむね SD2239 と並行するが、東進した先で用水路に分断され、38C16 付近で収束する。SD2239 とは覆土・規模が似通っており、並立していた可能性が高い。出土遺物はない。

SD2292（図版 30 ・ 145）　38E10 ～ 39E17 にわたって検出し、西端は現代の排水路によって分断される。規模は、延長 4.90m、最大幅 0.40m、深さ 0.04m を測る。主軸方位は N-87°-E を測り、覆土は砂質の灰オリーブ色砂質土の単層で、酸化鉄が見られる。同遺構は非常に浅く、蛇行しながら収束する溝である。また E 区排水路西側調査区の SD2240 と主軸方位を同一とし、その延長の可能性も考えられたが、確証はないために別遺構とした。出土遺物はない。

SD2353（図版 30・145・304）　34E15 ～ 40A1 グリッドにわたって検出し、北端・南端ともに調査区外へ伸びる。規模は、現存長 61.94m、幅 1.70m、深さ 0.24m を測る。覆土は 2 層に分層した。大部分を占める 1 層は近現代の埋め戻し土と推定する。底面直上の 2 層は砂層であり、一定期間の水流があったことがうかがえ、流路と判断する根拠となる。38B1・2 グリッド周辺は、支流が合流することで最も幅広く、深い。底面は凹凸が激しく、50 本以上の杭が埋設されている。その配列は本流に平行する南北軸と、支流に平行する東西軸とに大別できる。前者は、杭間の広い配列ながらも直線に伸び、後者はやや濃密で、一見不規則な配列ながらも 3 ラインほどの東西軸が見受けられる。東西軸にて 2 ラインの截ち割り調査を実施したところ、杭はすべて打込み式であり、杭の付近はグライ化が著しい。杭の部材は規格が統一されず、先端が三角形・四角形・円形と様々であり、鉈によって加工が施されている。杭以外にも板状の部材を転用したものがわずかながらあり、同遺構は職人の造作とは思われ難い。同遺構の帰属時期は、覆土の様子からほかの中世溝とはかなりの時期差があり、遡ったとしても、ほぼ近世に入ってから開削されたものと判断する。

遺物は幕末期～明治期の陶器破片、下駄・桶底板などの木製品が出土した。ほかに、近代（戦前期）の薬瓶・ソース瓶が出土することから、当遺構の埋没時期は、近代～昭和 30 年頃と推定され、古渡路地内の土地改良事業の実施時期である、昭和 27・28 年頃である可能性が高い。また、支流は D 区にて検出の SD3007 と並行する上に、覆土・出土遺物もほぼ同内容を示すことから、両者は同一遺構である可能性が高い。

SD2367（図版 36・145）　本溝は 39G25･39H10 グリッドに位置する。溝はほぼ北西から南東方向へ走っており、北西端は SD2170 と分岐している。その部分は SD2079 と重複しており、分岐関係は判然としないが、本溝が古い時期の構築である。主軸方位は N-29°-W を示す。

規模は現存長で全長 2.80m、幅 0.37m、深さ 0.11m を測る、浅くて小型の溝である。また、溝の南東端は収束している。断面形は弧状を呈している。壁面は緩やかに立ち上がっており、底面はやや丸みを持つが、全体的には起伏のない様相を呈している。

覆土はシルト質で、粘性･しまりが共にある単層である。地山土のにぶい黄褐色土を多量に含んでいる。出土遺物はない。自然流路の可能性もある。存続時期は明確な資料がないため判然としないが、検出面からすれば中世後半期から近世初頭と推定する。

8）E 区居住域（図版 31・36・142・146 ～ 162・309 ～ 321）

自然流路 SD2050 の北側の居住域である。E 区居住域と F 区居住域の境を区切る区画溝はないが、掘立柱建物 SB1939 から北には土坑が散漫に分布するだけになるので、SB1939 までを E 区居住域とした。

8 棟の掘立柱建物を検出した。柱筋はあまり通らず、建築精度の低い建物が多いことから、専門技術者が建てたものではなさそうである。中には厩と推定される建物があり、建て替えも行われている。

方形土坑が 4 基あり、このうち溝と連続する SK1578 は水を用いる作業に関連したと考えている。

a　掘立柱建物・杭列（図版 146 ～ 154・310・311）

SB1939（図版 146・147・310）　47B、48B・C グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。西側が試掘坑で掘削されているが、残存する柱穴の配置から桁行 3 間（8.40m）×梁行 1 間（4.42m）の胴張型の四面廂付梁間一間型建物とした。桁行方向 N-68°-W の東西棟である。床面積は 37.1m^2 を測る。廂の部分は桁行推定 11.0m、梁行が 0.74 ～ 0.82m を測る。平面形は身舎がほぼ長方形であるが南側桁行と西側梁行が胴張状を呈する。廂は柱穴が不明瞭な西側梁行を除いては胴張状を呈する。

桁行の柱間は 2.22 ～ 2.52m、梁行の柱間は 2.16 ～ 2.22m を測る。柱穴は径 22 ～ 42cm の円形及び楕円形で、深さは 10 ～ 54cm である。断面形はおおむね U 字状で、P1385・P1205 が台形、P1212・P1388・P1391・P1233・P1199 が半円状である。柱穴の覆土は褐色～にぶい黄褐色砂質土の堆積が観察され、Ⅱ層主体である。土層断面の観察から P1200、P1215、P1216、P1227、P1222 から推定径 9 ～ 14cm の柱痕が検出された。出土遺物はない。

SB1940（図版 148・310）　46B・C、47B グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行 3 間（7.12m）×梁行 1 間（3.56m）の西側に廂が付く胴張型の梁間一間型建物である。桁行方向 N-10°-E の南北棟である。面積は 25.3m^2 を測る。平面形は身舎が東側桁行が胴張状を呈するが、廂は直線的である。

桁行の柱間は 2.16 ～ 2.60m、梁行の柱間は 3.52 ～ 3.82m でややばらつきがある。廂の部分は桁行が 7.12m、梁行が 0.68m を測る。柱穴は径 24 ～ 46cm の円形及び楕円形で、深さは 14 ～ 60cm である。断面形はほとんどが U 字状である。柱穴の覆土はにぶい黄褐色砂質土の堆積が多く、Ⅱ層土主体である。土層断面の観察から P1276 から推定径 10cm の柱痕が検出された。重複関係は SK1578 を本遺構の P1900・1993 が切る。出土遺物はない。

SB1941（図版 149・310）　46・47C・D グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行 4 間（8.28m）×梁行 2 間（4.12m）の梁間一間型建物である。主軸方位 N-69°-W の東西棟である。柱筋が悪く、特に北辺は出入りが激しい。構成柱穴は 16 基からなる。桁行の柱間距離は 1.68 ～ 2.48m、梁行の柱間距離は 1.76 ～ 2.08m を測り、東側梁行の柱間が狭くなる。柱穴の形状は平面形が円形、断面形が U 字状を呈するものが多く見られ、断面形が階段状を呈する 2 基から径 10・12cm の柱痕を推定している。覆土はオリーブ褐色砂質シルトの堆積が大半で、いずれもⅢ層土主体である。桁行南側と東西の梁行の柱穴は、北側に比べ深さの浅いものが多く見られる。SK1430・SK1480 を切ってい

る。また、建物内にSE1479・SK1461が位置するが、建物との関係は不明である。また、構成柱穴間で重複が見られ、建て替え・補強等がなされた可能性がある。

SB2766（図版150・151・311）　44C・Dグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行4間（8.90m）×梁行1間（3.84m）の南北に廂が付く梁間一間型建物である。主軸方位N-70°-Wの東西棟である。面積は34.2m^{2}を測る。平面形は身舎がほぼ長方形、廂が弱い胴張型を呈する。

桁行の柱間は2.16～2.32m、梁行の柱間は3.64～3.82m、廂の部分は、桁行が8.6m、梁行が0.98mを測る。周囲にはSE2001、SK2253が近接し、建物内にSK2041・SK2042が位置するが、重複関係は不明である。身舎の柱穴は径24～90cmの円形及び楕円形で、深さはP2030が18cmと浅く、ほかは20～74cmを測る。断面形はP2030が弧状、P2015が漏斗状を呈するほかは、U字状を呈する。廂の柱穴はP2380が階段状、P2049・P2008が箱状、P2023が台形を呈するほかは、U字状を呈する。深さは12～54cmで北西隅の2基が深くなっているほかは、身舎部に比べ浅くなっている。柱穴の覆土は灰～暗灰黄色砂質土の堆積が観察され、いずれもⅢ層主体である。土層断面からP2038・P2075・P2380・P2057から推定径は16～17cmの柱痕が検出された。出土遺物はない。

SB2767（図版151・152・311）　44C、45C・Dグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行4間（7.60m）×梁行1間（3.08m）の北側に廂の付く一面廂付梁間一間型建物である。桁行方向N-87°-Wの東西棟で、面積は23.4m^{2}を測る。廂部分のP2549はSB2768と共有する。本遺構はSB2768と桁行方向が同一で、身舎部分が重なる配置状況である。柱穴の共有、配置状況から建て替えを想定したが、柱穴同士の重複はなく判断し難い。

桁行の柱間は2.0～2.20mで、梁行の柱間は3.28～3.52m、廂の部分は、桁行が推定8.4m、梁行が1.04mを測る。柱穴は径24～48cmの円形及び楕円形で、深さは16～82cmで身舎・廂部ともばらつきがある。断面形はおおむねU字状で、P2671が箱状、P2711が漏斗状である。柱穴の覆土は灰オリーブ～暗灰黄色砂質土の堆積が観察され、いずれもⅢ層土主体である。土層断面の観察により、P2639、P2599、P2597、P2626から推定径10～18cmの柱痕を検出した。重複関係はSB2770-P2708と本建物P2624が重複し本遺構が切られる。建物範囲内にSK2763・SK2607が位置する。重複関係は不明であるが、SK2607を付帯施設とする厩の可能性がある。出土遺物はない。

SB2768（図版152・153・311）　45C・Dグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行4間（8.34m）×梁行1間（3.52m）の北側に廂の付く一面廂付梁間一間型建物である。桁行方向N-87°-Wの東西棟である。面積は29.3m^{2}を測る。平面形はほぼ長方形であるが、柱筋が乱れている。柱穴は径24～40cmの円形及び楕円形で、深さは12～64cmである。身舎・廂部とも東側の柱穴が深くなっている。断面形はおおむねU字状で、P2593・P2555が箱状である。柱穴の覆土は灰オリーブ～暗灰黄色砂質土の堆積が観察され、Ⅲ層土主体である。P2549、P2666、P2717、P2564、P2650から推定径12～18cmの柱痕が検出された。SB2676と同様に物範囲内にSK2763・SK2607が位置する。重複関係は不明であるが、SK2607を付帯施設とすると厩の可能性がある。出土遺物はない。

SB2769（図版153・311）　44・45Cグリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行3間（7.30m）×梁行1間（3.56m）の梁間一間型建物である。桁行方向N-4°-Eの南北棟である。面積は26.0m^{2}を測る。桁行の柱間は2.2～2.60mで、南側がやや間隔が狭くなる。

梁行の柱間は3.4～3.36mである。柱穴は径34～52cmの円形及び楕円形で、深さは48～74cmである。断面形はU字状のものが多い。柱穴の覆土は灰オリーブ～暗灰黄色砂質土の堆積が多く観察され、

Ⅲ層主体である。P2058・P2520 から柱痕が検出された。柱痕の推定径は 12 ～ 14cm である。出土遺物はない。

SB2770（図版 154） 44C・D、45C グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出し、柱穴配置は図上復元した。桁行 3 間（6.96m）×梁行 1 間（2.40m）の梁間一間型建物である。桁行方向 N-6°-E の南北棟である。面積は 16.7m^2 を測る。桁行の柱間は 1.95 ～ 2.56m で、南側がやや間隔が狭くなる。梁行の柱間は 2.25m ～ 2.28m である。柱穴は径 24 ～ 40cm の円形及び楕円形で、深さは 18 ～ 54cm である。断面形はすべて U 字状である。柱穴の覆土は灰オリーブ～暗灰黄色砂質土の堆積が観察され、Ⅲ層土主体である。重複関係は SB2767-P2624 と本遺構 P2708 が重複し本遺構が切る。出土遺物はない。

b 井　　戸（図版 154 ～ 157・312 ～ 316）

SE1424（図版 154・312） 46C19・20・24・25 グリッドに位置する素掘りの井戸である。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを検出した。平面形は円形で、長径 1.14m、短径 1.00m、検出面からの深さは 1.95m を測る。断面形は U 字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面の平面形は不整楕円形で、0.99 × 0.75m を測る。底面中央部に水溜があり、平面形は方形で、一辺 0.50m、底面からの深さ 0.32m を測る。断面形は台形で、礫層まで掘り込んでいる。覆土は 8 層に分層し、1 層は攪乱である。2・3 層は斜位に、4・5・7・8 層は水平に堆積している。2b 層は 2a 層と同質でにぶい黄褐色を呈し、2a 層がグライ化し変色したものである。6 層は壁面がグライ化し灰色を呈する。5 層下部に炭化物をブロック状に含む。遺物は、大型椀形鍛冶滓が下層から 1 点、自然礫が 2・3 層から散在して出土した。

SE1475（図版 154･312） 46D9･13･14 グリッドに位置する。Ⅲ層中で灰黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、長径 2.00m、短径 1.66m、確認面からの深さは 2.23m を測る。断面形は U 字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面から急斜度で立ち上がり、上部は緩やかに外傾する。底面の平面形は不整楕円形で、1.21 × 0.80m を測る。底面中央部に水溜がある。水溜の平面形は円形で、0.50 × 0.45m、底面からの深さ 0.33m を測る。断面形は台形で、礫層まで掘り込んでいる。覆土は 8 層に分層し、人為的埋土である。上部の 1 ～ 3 層はレンズ状に堆積するが、Ⅲ層・Ⅴ層ブロックを斑紋状に含み、下部の 4 ～ 6 層はブロック状の堆積である。遺物は自然礫が 1 ～ 3 層、7 層から散在して出土した。遺物は土師質土器片が 1 層から、珠洲焼片が 3 層から礫と混在して出土した。西側からの流れ込みと思われる。

SE1479（図版 155・313） 46D10・15、47D6・11 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 1.12m、短径 1.10m、確認面からの深さは 1.94m を測る。断面形は U 字状で、礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面の平面形は楕円形で、0.76 × 0.56m を測る。覆土は 6 層に分層し、斜位の堆積である。1 ～ 3 層はオリーブ褐色を呈しⅡ層に類似する。自然礫は西側からの廃棄と考えられ、2 層中にⅢ層ブロックを多量含む。5・6 層はオリーブ褐色を呈し、粘性がやや強い。壁崩落土である。遺物は自然礫が 1･3･5 層から多量に出土し、西側からの流れ込みと思われる。

SE1542（図版 155・313） 48D9・14 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で少量の礫を含む褐色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 1.20m、短径 1.16m、確認面からの深さは 1.65m を測る。断面形は U 字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部で緩やかに外傾する。底面の平面形は楕円形で、0.85 × 0.70m を測る。覆土は 2 層に分層し水平堆積である。1 層は褐色砂質

土で、全体に炭化物粒と自然礫を含む。2 層は褐色シルトでややしまりに欠ける。遺物は礫のみの出土で、西側からの一括廃棄と考える。

SE1576（図版 155・313・314）　46C4・5・9・10 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 2.14m、短径 1.94m、確認面からの深さは 2.36m を測る。断面形は漏斗状で礫層まで掘り込んでいる。壁は下部では北側が緩やか、南側が垂直に立ち上がり、上部では全体に緩やかに外傾する。底面の平面形は楕円形で、1.40 × 1.35m を測る。底面南東側に水溜がある。水溜の平面形は楕円形で、0.83 × 0.72m、底面からの深さ 0.64m を測る。覆土は 10 層に分層し、7・8 層は壁崩落土で、全体的にレンズ状の堆積である。遺物は 1 層から鉄滓、2 層から白磁皿（169）の小片、3 層から小型椀形鍛冶滓（273）が出土した。

SE1577（図版 156・314）　46B3・8・9 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 2.28m、短径 2.14m、確認面からの深さは 2.28m を測る。断面形は漏斗状で、礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部で緩やかに外傾する。底面の平面形は円形で、1.38 × 1.22m を測る。底面西側に水溜がある。水溜の平面形は円形で、0.56 × 0.55m、底面からの深さ 0.36m を測る。断面形は階段状で、礫層を壁、底面としている。上・下段の壁際から曲物の残滓が出土した。覆土は 9 層に分層し、5・6 層は壁崩落土で、全体的にレンズ状の堆積である。SK1898、SD1583、SD1597 と重複するが、新旧関係は不明である。遺物は、上層・5 層？から青磁端反椀片（172）、漆器椀（塗膜）（426）が出土した。

SE1866（図版 155･314･315）　47C18･19 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は方形で、長径 1.24m、短径 1.22m、確認面からの深さは 1.83m を測る。断面形はＵ字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面から急斜度で立ち上がり、上部は若干外傾する。底面の平面形は隅円方形で、一辺 1.02m を測る。底面中央に水溜がある。水溜の平面形は円形で、0.78 × 0.76m、底面からの深さ 0.43m を測る。断面形は台形で、礫層まで掘り込んでいる。覆土は 4 層に分層し、1 層はレンズ状の堆積で、西側からの流れ込みの砂礫を含む。2 ～ 4 層は水平堆積で、3 層は炭化物ブロックと自然礫を含む。1 層は黄褐色砂質土でⅡ層土に類似する。遺物は砥石（317）が下層から、青磁端反皿小片（170）が 2 層下位、珠洲焼片が 1 層から出土した。

SE2001（図版 156・315）　44D2・7 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 1.46m、短径 1.40m、確認面からの深さは 2.13m を測る。断面形はＵ字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部は緩やかに外傾する。底面の平面形は円形で、1.28 × 1.08m を測る。底面中央部に水溜がある。水溜の平面形は長方形で、1.15 × 1.02m、底面からの深さ 0.33m を測る。断面形は台形で礫層を壁、底面としている。覆土は 9 層に分層し、上位は水平堆積で、下位は斜位の堆積である。1 ～ 7 層は灰～灰オリーブ色を呈し、Ⅲ・Ⅴ層ブロックと炭化物粒を含む。8・9 層はグライ化し灰色を呈する。遺物は 9 層から木片、自然礫が出土した。

SE2201（図版 156・315）　44E6・11 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄灰色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 1.56m、短径 1.38m、確認面からの深さは 2.15m を測る。断面形はＵ字状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からやや急斜度で立ち上がり上部は若干外傾する。底面の平面形は隅円方形で、1.08 × 0.68m を測る。底面中央部に水溜がある。水溜の平面形は隅円長方形で 0.92 × 0.49m、底面からの深さは 0.17m、底面の平面形は方形で、0.48 × 0.44m を測る。断面形は台形で、礫層を壁とし、急斜度で立ち上がる。壁際に側板が 9 枚設置されていた。覆土は 8 層に分層し、上部の 1 ～ 3 層はレン

ズ状の堆積だが、Ⅲ層ブロック、礫を多量含む埋め戻し土、壁際の５・６層は壁崩落土、下位の７・８層は水平堆積である。１～３層は黄灰色砂質土で、８層はグライ化し灰色を呈する。遺物は水溜の側板のほか、５層から白磁皿（171）が出土した。

SE2406（図版 157・315・316）　44E5・10、45E1・6 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、長径 2.44m、短径 2.24m、確認面からの深さは 2.50m を測る。断面形は階段状で礫層まで掘り込んでいる。壁は底面から急斜度で立ち上がり上部はやや外傾する。底面の平面形は不整形で 1.48 × 1.37m を測る。底面中央部に水溜がある。水溜の平面形は円形で、0.61 × 0.60m、底面からの深さ 0.82m を測る。覆土は 15 層に分層し、１～５・８層はブロック状の堆積で、Ⅲ・Ⅴ層ブロック、炭化物、礫を多く含む。４・８層は壁崩落土である。6・7c 層は土層中に側板の残滓があり、6・7b・7c 層は側板裏込め土である。6・7b・7c 層は斜位の堆積で土圧により、遺構内側へ傾斜している。7・9・10 層は水平な堆積で、9・10 層は水溜覆土である。P2730 と重複し本遺構が切られる。遺物は、1 層から礫と混在して瀬戸･美濃焼卸皿片（177）、砥石（315）、2 ～ 10 層から珠洲焼壺片（176）･甕片（173）･片口鉢片（174･175）、10 層から木製椀（424･425）が重なって出土した。10 層下位では、箸状木製品（420 ～ 422）、白木皿（423）、水溜では砥石（316）が出土した。

SE2608（図版 157・316）　45D13・14・18・19 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを確認した。P2614・P2615 と重複し新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、長径 2.04m、短径 1.40m、確認面からの深さは 2.62m を測る。断面形は、上部では崩落のため不明だが、下部ではおおむね袋状で、礫層まで掘り込んでいる。底面の平面形は隅円方形で、0.80 × 0.79m を測る。底面中央部に水溜がある。水溜の平面形は隅円方形で、0.69 × 0.67m、底面からの深さ 0.99m を測る。断面形は階段状で、礫層を壁、底面としている。覆土は 14 層に分層し、１～８層はⅢ・Ⅴ層ブロック、炭化物粒を多く含む埋め戻し土である。10 ～ 12 層は壁崩落土である。13・14 層は水溜覆土で黄灰色を呈する。10 ～ 12 層上面から 1.56 × 1.52m の範囲で炭化物層を検出した。炭化物層は 10 ～ 12 層の壁崩落土上に堆積し、水溜の範囲では検出されていない。水溜の落ち込みは、炭化物堆積後再掘削された可能性がある。遺物は炭化物のほか、炭化物層（9 層）から珠洲焼片口鉢片（178）が出土した。帰属時期は出土遺物から中世後半と推定される。

c　土　　坑（図版 158 ～ 160・317 ～ 319）

SK1191（図版 158）　48A23・24 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、断面形は台形状である。長径 0.58m、短径 0.58m、深さ 0.14m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は単層で黄褐色砂質土である。Ⅱ層土主体で自然埋没土である。東側は SX1192 に切られる。出土遺物はない。

SX1192（図版 158）　48A24 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。底面東側に不整な落ち込みがあることから、性格不明遺構とした。平面形は不整形で、断面形は台形状である。壁はやや急斜度で立ち上がる。底面は全体的に平坦であるが、東側に二つの不整形な落ち込みがある。覆土は単層でⅢ層土主体である。黄褐色土でしまりが弱く、砂質が強い。西側で SK1191 と重複し本遺構が切る。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴から中世後半から近世初頭と考える。

SK1198（図版 158・317）　48B2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.86m、短径 0.62m、深さ 0.08m を測る。壁は緩やかに立ち

上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は単層で褐色土である。Ⅱ層土主体で、炭化物、焼土ブロックを含み人為的埋土である。

SK1255（図版 158）　47B19・24 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形、断面形は半円状である。長径 0.92m、短径 0.58m、深さ 0.22m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は単層でにぶい黄褐色土である。Ⅱ層土主体で炭化物、Ⅲ層ブロックを含む。出土遺物はない。

SK1407（図版 158）　46C16・17 グリッドに位置する。46C グリッド中央ベルト精査時に暗灰黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は箱状である。長径 1.28m、短径 0.92m、深さ 0.24m を測る。壁は全体的に急斜度で立ち上がり、南側はⅢ層を掘り込んでいる。底面はほぼ平坦である。覆土は 2 層に分層し、自然埋没土である。1 層は暗灰黄色砂質土で、Ⅲ層土主体である。2 層は暗灰黄色土である。出土遺物はない。

SK1430（図版 158）　46C20・25、47C16・21 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は方形で、断面形は弧状である。長径 2.18m、短径 2.06m、深さ 0.30m を測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は全体的に小さな凹凸があり、南側から北側へ緩やかに傾斜している。覆土は 2 層に分層し、自然埋没土である。1･2 層ともにぶい黄褐色土で、2 層は壁際～底面直上にⅢ層ブロックを多量含む。北東壁と南壁がSB1941–P1427 と P1432 に切られている。遺物は自然礫が少量出土した。

SK1435（図版 158）　47C17 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.96m、短径 0.56m、深さ 0.04m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層で自然埋没土である。暗灰黄色砂質土で、Ⅲ層土主体である。遺物の出土はない。

SK1461（図版 158・317）　46D5 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 1.26m、短径 0.92m、深さ 0.14m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は全体的に平坦で、南側に低い段差がある。覆土は単層で、オリーブ色シルトである。Ⅲ層ブロック、炭化物、砂礫を含み人為的埋土である。遺物は、確認面から白磁皿（183）が出土した。

SK1480（図版 158・317）　47D6・7・11・12・16・17 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整な長方形で、西側でやや幅が狭くなる。断面形は台形である。長径 3.44m、短径 2.80m、深さ 0.24m を測る。壁は西側でやや急斜度に立ち上がり、東側で緩やかに立ち上がる。底面は東側から西側へ緩やかに傾斜する。覆土は 3 層に分層し、レンズ状の堆積である。2・3 層はⅢ層土主体で、底面付近ではⅢ層粒が多く見られる。P1820・P1861・P1867、SB1941–P1821 に切られる。遺物は 1 層上面から銭貨片（265・267）が 2 点出土した。

SK1484（図版 158・317）　46D23 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄灰色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、断面形は台形状である。長径 1.06m、短径 1.00m、深さ 0.24m を測る。壁は急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層で、黄灰色シルトである。Ⅲ層ブロックを少量、酸化鉄を多く含む。東側で P1483 を切り、西側で P1482 に切られる。遺物は珠洲焼片口鉢片が 1 点（205）出土した。

SK1552（図版 158）　47C8 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で褐色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、断面形は弧状である。長径 0.62m、短径 0.56m、深さ 0.08m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面には小さな凹凸がある。覆土は単層で、Ⅱ層土主体である。褐色土で、Ⅲ層粒を含む。出土遺物はない。

SK1575（図版 159・317）　46B4・5・9 グリッドに位置する方形土坑である。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色

土の落ち込みを確認した。平面形は方形で、断面形は台形状である。長径 1.86m、短径 1.80m、深さ 0.66m を測る。壁は全体的に急斜度で立ち上がり、底面は全体的に平坦である。底面から壁立ち上がりにかけて、褐灰色の部分があり、Ⅴ層がグライ化により変色している。覆土は 3 層に分層し、レンズ状の堆積状況である。1 層はにぶい黄褐色土で炭化物を少量含み、Ⅱ層がグライ化したものである。3 層は底面直上層で、Ⅲ層ブロック、砂礫を全体に含む。重複は北東側で P1791 を切る。遺物は下層から剥片（72）が出土した。剥片は縄文時代の所産であるが、遺構の帰属時期は検出層位・覆土の特徴から中世後半と考える。

SK1578（図版 159）　46B13・14・18・19 グリッドに位置する方形土坑である。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は方形で、断面形は台形である。長径 2.42m、短径 2.42m、深さ 0.42m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 3 層に分層し、レンズ状の堆積である。全体的にグライ化が進み、南側でやや粘質が強く、北側で砂質が強くなる。1･2 層は砂質土でⅢ層ブロックを含む。Ⅱ層がグライ化したものである。3 層は黄灰色でⅢ層ブロックを多く含む。出土遺物はない。本遺構と重複する SD1581・1597 は SD1583 と同一方向へ走行し、SE1577 と連結する配置状況である。各遺構間の新旧関係は覆土が浅い堆積のため不明だが、2 層が SD1581 覆土と連続して堆積していることや配置状況から、同時期に埋没したと推定する。SB1940 と重複し本遺構が切られる。帰属時期は、重複関係・覆土の特徴から中世後半と考える。

SK1585（図版 159）　46B21・22 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は半円状である。長径 1.00m、短径 0.96m、深さ 0.14m を測る。壁は北側と東側に低い段差がある。覆土は単層でオリーブ褐色土である。炭化物、Ⅲ層粒を含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴により中世後半から近世初頭と考える。

SK1594（図版 159）　46B6・7・11・12 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は隅円方形で、断面形は弧状である。長径 1.40m、短径 1.30m、深さ 0.22m を測る。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 2 層に分層し、1 層は暗灰黄色砂質土で、砂礫を少量含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴により中世後半から近世初頭と考える。

SK1606（図版 159）　46B12・17 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は半円状である。長径 1.24m、短径 0.80m、深さ 0.16m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、南東側で P1962 に切られる。覆土は暗灰黄色砂質土で、Ⅲ層ブロック、自然礫を含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴により中世後半から近世初頭と考える。

SK1663（図版 159）　48C12･13 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で P1938 と褐色の落ち込みを確認した。平面形は東側の一部は開渠によって不明確だが、楕円形と思われる。断面形は台形状である。短径 0.60m、深さ 0.10m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦で東側で P1938 に切られる。覆土は単層で褐色を呈し、Ⅲ層主体である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴により中世後半から近世初頭と考える。

SK1667（図版 159）　46B16・17 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で P1936 と暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 1.18m、短径 0.66m、深さ 0.26m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は南側へ緩やかに傾斜している。覆土は 2 層に分層し、レンズ状の堆積である。1・2 層は暗灰黄色砂質土で、炭化物、砂礫を含む。P1936 を切り、P1937 と新旧不明である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴から中世後半から近世初頭と考える。

SK1898（図版 159）　46B7・8 グリッドに位置する。SE1577 精査時に、Ⅴ層上面で暗灰黄褐色の落ち

込みを確認した。平面形は、北側が重複し不明だが、現存部から円形を呈すると思われる。断面形は半円状である。長径 0.98m、深さ 0.26m を測る。SE1577 との切り合い関係は SE1577 完掘後に検出したため不明である。覆土は 3 層に分層し、1 層は暗灰黄色土で焼土を含む。2 層は黄褐色土で壁崩落土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位から中世後半から近世初頭と推定する。

SK2041（図版 159）　44D8 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 1.02m、短径 0.72m、深さ 0.14m を測る。壁は急斜度で立ち上がり、底面は北側に低い段差がある。覆土は 2 層に分層し、1 層は暗灰黄色砂質土で、Ⅲ層ブロックを含み人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2042（図版 159）　44D9 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は台形状である。長径 1.04m、短径 0.92m、深さ 0.18m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 3 層に分層し、1・2 層は暗灰黄色砂質土である。レンズ状の堆積で、炭化物粒、Ⅲ層ブロック・粒を含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位と覆土の特徴により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2140（図版 159）　43D20・24・25 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は円形で、断面形は弧状である。長径 1.80m、短径 1.68m、深さ 0.38m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 3 層に分層し、レンズ状の堆積である。1 層はオリーブ褐色砂質土で、Ⅰ' 層に類似する。2・3 層はオリーブ褐色砂質土でⅢ層ブロックを多く含む。レンズ状の堆積だが、Ⅲ層ブロックの混入から人為的埋土と考える。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2253（図版 160・318）　44D23、44E3 グリッドに位置する方形土坑である。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを確認した。平面形は長方形で、断面形は台形状である。長径 1.70m、短径 1.22m、深さ 0.22m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は東から西へ若干傾斜している。覆土は 2 層に分層し、1・2 層は灰オリーブ色砂質土で炭化物、Ⅲ層ブロックを斑紋状に含む。人為的埋土である。重複関係は、P2028・P2365 に切られ、P2372 とは新旧不明である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2274（図版 160・318）　42E14・15 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄灰色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.98m、短径 0.80m、深さ 0.12m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸が見られるがほぼ平坦である。覆土は単層で、黄灰色砂質土で下位にⅢ層ブロックを含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2394（図版 160・318）　44E16・17・21・22 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は弧状である。長径 1.76m、短径 0.88m、深さ 0.10m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。覆土は単層で、暗灰黄色砂質土である。Ⅲ層ブロックを斑紋状に含む人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2604（図版 160・318）　45D14・15 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを確認した。平面形は方形で、断面形は台形状。長径 1.60m、短径 1.34m、深さ 0.18m を測る。壁は全体的にやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 2 層に分層し、1・2 層は灰オリーブ色シルトである。Ⅲ層ブロックを斑紋状に含む人為的埋土である。SK2605、P2602・P2603・P2719 と重複し、

本遺構が切っている。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2605（図版 160・318）　45D9・10・14・15 グリッドに位置する方形土坑である。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は方形で、断面形は台形状である。短径 2.06m、深さ 0.28m を測る。壁は全体的にやや急斜度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。南側で SD2606、東側で SK2604 と重複し本遺構が切られている。覆土は 4 層に分層した。1･4 層は暗灰黄色砂質土､2 層は灰オリーブ砂質土、3 層は暗灰黄色粘土である。1・2 層はⅢ層ブロックを斑紋状に含み、3・4 層は炭化物を含む。人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2607（図版 160・319）　45C16・17・21・22、45D1・2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は長方形で、断面形は台形状である。長径 3.20m、短径 1.48m、深さ 0.24m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は 2 層に分層し、1・2 層は灰黄色砂質土である。全体にⅢ層ブロックを斑紋状に含み人為的埋土である。南側で SK2763 と、北側で SX2584 と重複し、本遺構が切っている。出土遺物はない。SB2767・SB2768 範囲内に位置することから厩施設の可能性がある。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2609（図版 160･319）　45D23･24､45E3･4 グリッドに位置する方形土坑である。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを確認した。平面形は長方形で、断面形は台形状である。長径 2.30m、短径 1.58m、深さ 0.10m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は単層で灰オリーブ色砂質土である。Ⅲ層ブロックを斑紋状に含み人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と推定する。

SK2763（図版 160）　45C21、45D1 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを確認した。平面形は現存部から長方形と推定した。断面形は台形状である。長径 1.60m、深さ 0.14m を測る。壁は急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層で暗灰黄色砂質土である。Ⅲ層ブロック、炭化物粒を斑紋状に含み、人為的埋土である。SK2607 に切られる。帰属時期は検出層位から中世後半から近世初頭と推定する。

d　溝（図版 31・36・161・319 ～ 321）

SD1581・SD1583・SD1597（図版 31・161・319・320）　46A・B・C グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。3 条ともほぼ主軸方位を同じくし東西方向に直線的に走行する。西端部で北方向へ屈曲し開渠等で行き先が不明となる。主軸方位は N−74 ～ 88°−W である。断面形は弧状で、Ⅲ層を掘り込み緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。3 条の溝は SK1578・SE1577 を間に挟んで走行し、規模・底面高に類似性が認められる。SD1583 から SD1597 にかけて、底面標高 14.57m から 14.55m へと下り SK1578 に至る。SD1581 では東から西へ向けて底面標高 14.60m からわずかに下り、SK1578 に接続する。接続部分の SD1581 の底面標高は 14.58m である。これら 3 条の溝は、SE・SK と連続する配置状況、類似する規模・覆土の状況等から連続する同一の溝と推定され、SE・SK も含めて排水溝等の役割を果たしたと推定する。

SD1586（図版 31・161・319・320）　46C2・7・13・18 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。SD 1587 と並走し、東西方向へ直線的に走行する。主軸方位は N−77°−W、底面の標高は 14.60 ～ 14.66m を測る。壁はⅢ層を掘り込み緩やかに立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込み平坦である。覆土は単層で黄褐色土である。P1899・P1891 に切られ、P1910・P1917 を切る。出土遺物はない。帰属時期は確認層

位から中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD1587（図版 31・161・319・320）　46C7・12 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。主軸方位 N-74°-W、底面の標高は、14.66m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は単層で黄褐色土である。P1891 に切られる。出土遺物はない。帰属時期は確認層位から中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD1588（図版 31・161・320）　46C10・15 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。東西方向へほぼ直線的に走行する。両端部は深さが浅くなり自然消滅する。主軸方位は N-76°-W、底面の標高は 14.54m を測る。壁は東西ベルト断面観察から、Ⅲ層を掘り込み緩やかに立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込みほぼ平坦である。覆土は単層で暗オリーブ色シルトである。出土遺物はない。

SD1591（図版 31・161・320）　45B20・24 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。南北方向に緩やかに弧を描いて走行する。主軸方位 N-20°-E、底面の標高は 14.57m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層でオリーブ褐色土である。出土遺物はない。帰属時期は確認層位により中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD1592（図版 31・161・320）　45B24・25 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。SD1591 と隣接し、緩やかに弧を描いて走行する。主軸方位は N-20°-E、底面の標高は 14.58m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層でオリーブ褐色砂質土である。出土遺物はない。帰属時期は確認層位により中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD1593（図版 31・161・320）　45C グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。東西方向にほぼ直線的に走行する。主軸方位は N-79°-W、底面の標高は 14.50 ～ 14.62m を測る。断面形は弧状である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が若干盛り上がる。覆土は単層で黄褐色土である。出土遺物はない。帰属時期は確認層位により中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD2606（図版 31・161・320・321）　45D9・14 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。長さが 3.48m と小規模な溝で、周囲にピット、井戸等の遺構が密集する。主軸方位は N-76°-E、底面の標高は 14.28m を測る。断面形は半円状である。壁は北西側で SK2605 を掘り込み、全体的に急斜度で立ち上がる。底面は平坦である。覆土は 2 層に分層し、1 層は暗灰黄色砂質土である。重複は、SK2605、P2722、P2718 を切る。帰属時期は確認層位により中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

SD2723（図版 31・161・321）　46E13 ～ 16 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。南北方向に走行し南側は調査区外へ伸びる。主軸方位は N-11°-E、底面の標高は 14.52m を測る。断面形は浅い弧状である。覆土は現存部で 4cm と浅く、堆積状況は判別できなかった。出土遺物はない。帰属時期は不明だが、配置状況から SD1141 が分岐した溝と考える。

SD2724（図版 36・161・321）　44F1 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。南北方向に走行し、北方向は調査区外へ伸びる。主軸方位は N-17°-E、底面の標高は 14.46 ～ 14.50m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北方向に SD2723 が位置し連続すると考える。南端部で P2725 と重複し切られる。出土遺物はない。帰属時期は確認層位により中世後半から近世初頭の時期であると推定する。

e　性格不明遺構（図版 161・162・321）

SX1213（図版 161）　48B11・12・16・17 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で褐色の落ち込みを検出した。

南側を試掘坑に壊されているが、平面形は不整形で、断面形は階段状である。壁は北側では緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。覆土は２層に分層し、斜位の堆積である。１層は褐色土で、Ⅱ層主体である。出土遺物はない。人為的な掘り込みと考えるが、壁の形状、平面形から性格不明遺構とした。帰属時期は検出層位・覆土の特徴により中世後半から近世初頭と考える。

SX1245（図版 161・321）　47A16 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で褐色の落ち込みを検出した。西側が調査区外のため全容は不明であるが、円形を呈すると推定する。断面形はⅤ字状でⅢ層を掘り込んでいる。壁は西側では急斜度に立ち上り、東側では緩やかに立ち上がる。覆土は３層に分層し、レンズ状の堆積である。底面に灰白色の粘土があり、水の影響を受けて変色したⅤ層と考える。壁の形状と変色部から溝の一部とも考えたが、平面形が円形を呈することから性格不明遺構とした。

SX1855（図版 161・321）　46E8 ～ 10・13 ～ 15 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、長径 3.78m、短径 2.54m である。断面形は台形状で、検出面からの深さ 0.52m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は３層に分層し、レンズ状の堆積である。３層は灰色砂質土で、炭化物を含みやや粒子が粗い。全体に自然流土と思われ、SD1141 南部の覆土に類似する堆積土である。SX2610 と重複し本遺構上部が切られる。SD1141 の支流 SD1888・SD1892 と重複しているが、浅く、類似する覆土のため、新旧関係は不明である。遺物は２層から珠洲焼片が１点、2・3 層から自然礫が 10 点ほど出土した。本遺構の用途は、SD1141 と支流が連結する配置状況、自然礫の出土、覆土の堆積状況等から溝と同時期の使用が考えられ、排水や水溜等に関連すると考える。

SX2080・SX2081（図版 162）　SX2080 は 44C2 グリッド、SX2081 は 43C5・10 グリッドに位置する。Ⅲ層中で灰色の落ち込みと多量の礫を検出し、SX2080 とした。平面形は楕円形で、断面形はＵ字状である。長径 0.6m、短径 0.36m、確認面からの深さ 0.18m を測る。壁は急斜度で立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込んで平坦である。覆土は単層で灰色を呈し、Ⅰ'層主体である。多量の自然礫が出土した。礫は径約５～ 30cm の扁平なもので、確認面から底面まで積まれていた。

Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みと多量の礫を検出し、SX2081 とした。平面形は楕円形で、断面形は半円状である。長径 0.78m、短径 0.58m、検出面からの深さ 0.18m を測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込んで、平坦である。覆土は単層で灰色を呈し、Ⅰ'層主体である。多量の自然礫が出土した。礫は径約５～ 80cm の扁平なものや棒状のものが見られ、確認面から底面まで積まれていた。

SX2080 と SX2081 は礫の出土状況、形状、規模が類似する。これらの二つの遺構は南北方向に約 3.6m 離れて位置する。礫の出土状況、位置関係から、神社鳥居等の２本で立脚する柱の礎石の用途が推定されるが、参道、社の検出はなく決定的な根拠に欠ける。帰属時期は覆土の特徴から近世以降と考える。

SX2163（図版 162）　43E グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを検出した。南側と北側が開渠等の掘削で不明だが、現存部から平面形は長方形と推定した。現存部の長辺は 6.68m、短辺は 3.56m、断面形は弧状で、検出面からの深さ 0.24m である。覆土は２層に分層した。1・2 層は砂質土でⅠ'層主体である。底面は、全面に深さ１～ 5cm の凹凸がある。出土遺物はない。遺構の規模・底面形状から水田の可能性もあるが、畦畔等は確認しておらず、決定的な根拠に欠ける。帰属時期は覆土の特徴から近世以降と考える。

SX2584（図版 162）　45C22・23 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗灰黄色の落ち込みを検出した。平面形は長方形で、断面形は台形状である。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦で、北側で約 8cm 落ち込んでいる。覆土は２層に分層し、周囲の中世遺構堆積土と類似する。SK2607 に切られる。出土

遺物はない。帰属時期は切り合い関係により中世後半から近世初頭であると推定する。

SX2610（図版 162）　45・46D・E グリッドに位置する。Ⅴ層上面で灰オリーブ色の落ち込みを検出した。北側が開渠等の削平で不明だが、現存部から平面形は方形と推定した。現存部の長辺は 6.92m、断面形は弧状で、検出面からの深さ 0.06m である。覆土は遺構北側でグライ化によって変色していたため、1a・1b 層に分層した。1a・1b 層は砂質土で炭化物を少量含む。Ⅰ'層主体である。底面は、全面に深さ 1cm 前後の凹凸がある。P2728・P2779、SX1855 を切る。出土遺物はない。遺構の規模・底面の形状から水田の可能性があるが、畦畔の検出などの決定的な根拠に欠ける。帰属時期は覆土の特徴から近世以降と考える。

SX2697（図版 162）　45E15・19・20 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ黒色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形はⅤ字状である。壁は全体に凸凹で、南側では中位から緩やかに傾斜し、立ち上がる。底面は全面に凹凸がある。覆土は単層でオリーブ黒色砂質土である。Ⅲ・Ⅴ層ブロックが斑紋状に含まれることから人為的埋土と考える。出土遺物はない。

9）F 区居住域（図版 31・32・142・163 ～ 166・322 ～ 324）

E 区居住域北端の掘立柱建物 SB1939 の北側から SD330・SD331 から構成される道路に挟まれた範囲を F 区居住域とした。調査範囲中最も標高が高く水はけもよい。現在の小字名が「海老屋敷」であることから、調査着手前には屋敷跡が存在すると予測していた場所である。また、Ⅲ・Ⅳ層が安定して堆積しており、遺構確認面が複数存在した。

遺構の帰属時期は中世のほか、近世以降、縄文時代がある。遺構出土遺物が少なく、帰属時期を明確にできる遺構は少ないが、検出層位及び遺構覆土と基本層の比較によって大まかな帰属時期を判断した。

遺構覆土は、F 区北側から中央部でⅡ・Ⅲ層主体のものを確認している。にぶい黄褐色～褐色粘質シルトはⅡ層主体、灰～灰白色砂質シルトはⅢ層主体と判断し、中世～近世初頭の遺構覆土の特徴とした。F 区北東端と南側～ E 区北側では、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層にグライ化による変色があり、基本層と遺構覆土の関係は曖昧となる。Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる遺構の覆土を観察し、暗灰色、灰色、オリーブ褐色砂質土が堆積しているものを中世～近世初頭の遺構覆土の特徴とした。また、遺構間の重複から、灰色砂質シルトが堆積する遺構は暗灰黄色・暗灰色砂質シルトが堆積するものよりも新しい傾向がある。

遺構は掘立柱建物がなく、井戸 1 基と土坑、道路を検出した。道路は D 区までとは軸方向が異なる。土坑等が分布する微高地から北側に段差を持って標高が下がり、湿地が広がるが、その湿地との境に道路は位置する。

a　井　　戸（図版 163・322）

SE1376（図版 163・322）　53C23・24 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを検出した。平面形は円形で、長径 1.10m、短径 1.08m である。検出面からの深さは 2.14m を測る。断面形はＵ字状で、礫層まで掘り込んでいる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面の平面形は楕円形で、0.52 × 0.44m を測る。覆土は 9 層に分層し、レンズ状の堆積である。全体的ににぶい黄褐色シルトが堆積し、7 層はグライ化し灰褐色を呈する。遺物は 6 層から自然礫が散在して出土した。

b 土　　坑（図版 163・322）

SK1137（図版 163） 51A20・25、52A16・21 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 0.96m、短径 0.78m、深さ 0.18m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がる。底面は若干の凹凸があるがほぼ平坦である。覆土は単層でⅢ層とⅣ層の混合土で炭化物、Ⅴ層ブロックを含む。北側で P1935 と重複し、本遺構が切られる。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1177（図版 163） 51D4 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は南側が狭くなる楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.78m、短径 0.58m、深さ 0.12m を測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。覆土は２層に分層し、1 層はⅤ層ブロックを多く含み、人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1354（図版 163・322） 53E2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 0.76m、短径 0.58m、深さ 0.12m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は２層に分層し、1 層は暗オリーブ褐色シルト、2 層は暗オリーブ色シルトである。1 層はⅡ層主体で自然埋没土である。出土遺物はない。

SK1355（図版 163） 53E4 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.94m、短径 0.80m、深さ 0.12m を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は２層に分層し、水平堆積である。1 層は暗オリーブ褐色砂質土で、2 層はオリーブ褐色シルトである。出土遺物はない。

SK1359（図版 163） 53D19 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は方形で、断面形は弧状である。長径 1.00m、短径 0.90m、深さ 0.12m を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は２層に分層し、水平堆積である。1 層は暗オリーブ褐色シルト、2 層はオリーブ褐色土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と考える。

SK1373（図版 163） 53C21 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 0.98m、短径 0.72m、深さ 0.12m を測る。壁は北側がやや急斜度、そのほかは緩やかに立ち上がる。底面は、おおむね平坦である。覆土は２層に分層し、人為的埋土である。1 層は暗オリーブ褐色シルトでⅤ層ブロックを含み、2 層はオリーブ褐色シルトである。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と考える。

SK1374（図版 163） 53C16 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 1.08m、短径 0.90m、深さ 0.12m を測る。底面は平坦である。覆土は２層に分層し、水平堆積である。1 層は暗オリーブ褐色シルトで炭化物を含み、2 層はオリーブ褐色土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位から中世後半から近世初頭と考える。

SK1546（図版 163） 53E12 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ色の落ち込みを検出した。平面形は不整形で、断面形は台形状である。長径 1.32m、短径 0.92m、深さ 0.24m を測る。壁は全体的にやや急斜度で立ち上がり、北西側に低い段がある。底面はほぼ平坦である。覆土は２層に分層し、水平堆積である。1 層は暗オリーブ褐色シルトで、Ⅲ層ブロックを含む。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭と考える。

SK1691（図版 163） 50E15、51E11 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ色の落ち込みを検出

した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 0.76m、短径 0.54m、深さ 0.10m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層で暗オリーブ褐色シルトである。Ⅴ層ブロックを斑紋状に含み、人為的埋土である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1692（図版 163）　51E7 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ色の落ち込みを検出した。平面形は方形で、断面形は台形状である。長径 0.76m、短径 0.62m、深さ 0.14m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層でオリーブ褐色土である。Ⅳ層主体である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1705（図版 163）　50D22・50E2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で暗褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は台形状である。長径 1.28m、短径 1.00m、深さ 0.26m を測る。壁はやや急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 3 層に分層し、斜位の堆積である。2 層は暗褐色シルトでⅤ層ブロックを多量含む。遺物は銭貨 4 枚（260）が膠着した状態で出土し、やや離れた地点からもう 1 枚（264）出土した。銭貨の出土から土坑墓の可能性も含め精査したが、銭貨以外に出土遺物はなく、用途は明確ではない。帰属時期は検出層位と出土遺物により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1787（図版 163）　50E1・2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ褐色の落ち込みを検出した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。長径 1.36m、短径 0.72m、深さ 0.18m を測る。底面は全体に凹凸があり、東端に深さ 10cm 程のピット状の落ち込みがある。覆土は単層で、オリーブ褐色シルトである。灰色土ブロックを斑紋状に含む。東側で SK1705、SK1868 を切る。出土遺物はない。帰属時期は検出層位と重複関係により中世後半から近世初頭であると推定する。

SK1868（図版 163）　50E2 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを検出した。西側を SK1705、南側を SK1787 に切られている。平面形は現存部から円形と推定でき、断面形は弧状である。長径 0.76m、深さ 0.16m を測る。底面は東端から重複する部分へ向かって緩やかに傾斜する。覆土は単層で、重複する SK1705 の 3 層に類似する。帰属時期は検出層位と重複関係により中世後半から近世初頭であると推定する。

c　溝・道路（図版 31・32・163・164・323・324）

SD1012（図版 32・163・323）　49・50A・B グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。東西方向へほぼ直線的に走行する溝で、長さは 9.44m を測り、断面形は台形状である。深さは 0.1 ～ 0.28m で西方向へ浅くなる。壁はⅢ層を掘り込み全体的にやや急斜度で立ち上がる。底面はⅤ層を掘り込みほぼ平坦である。主軸方位は N-65°-W である。覆土は 3 層に分層し、1･3 層はにぶい黄褐色土でⅢ層主体である。SX1382、P1377・P1380・P1381 を切る。出土遺物はない。

SD1141（図版 31・32・164・323）　46 ～ 54E グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出した。東西ベルトの観察によりⅢ層上面からの掘り込みを確認した。南北方向へ直線的に走行する溝で、北端部では東方向へ 45 度程屈曲して調査区外へ伸び、南端部では東方向へ湾曲する。底面の標高は 14.45 ～ 14.60m を測り、南へ向かって浅くなる。主軸方位は N-32°-E である。D 東居住域の SD2164 とつながる可能性が高い。52E グリッド付近の断面形は台形状で、壁はⅢ層を掘り込み、やや急斜度で立ち上がる。覆土は 8 層に分層した。レンズ状の堆積状況から自然埋没土と考える。その他の部分では単層とした。重複関係は南端部で SX1855 と重複する。南端部の堆積が浅く、また類似する覆土のため新旧関係は不明である。南端

部には、SD1892 と SD1888 が位置し本溝が南端部で分岐した同一の遺構と考えられ、SX1855 と連結する配置状況である。遺物は、北端部と南側で自然礫が多く出土し、上層から唐津焼、底面から珠洲焼片口鉢片（180）、瓦器擂鉢（187）、須恵器壺片（181）、青磁椀片（179）、瀬戸・美濃焼卸目付大皿（182）、小型椀形鍛冶滓が出土した。

SD1171（図版 32・163・324）　52C・D グリッドに位置する。V 層上面で確認した。東西方向へほぼ直線的に走行する。主軸方位は N-60°-W。長さは 3.04m を測り、断面形は台形状である。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は 2 層に分層し、1 層はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物はない。帰属時期は検出層位により中世後半期から近世初頭であると推定する。

SD1348（図版 32・164・324）　53・54D・E グリッドに位置する。V 層上面で検出した。調査区壁セクションではⅢ層上面からの掘り込みを確認している。東西方向へ直線的に走行し、主軸方位は N-56°-W を測り、断面形は台形状である。壁はⅢ層を掘り込み、急斜度で立ち上がる。底面はほぼ平坦で、南東端に深さ 36cm の土坑状の落ち込みがある。覆土は土坑状の部分で 2 層に分層し、その他の部分では単層である。1・2 層は暗灰黄色シルトで、砂礫を多く含む。遺物の出土はない。帰属時期は掘り込み層位により中世後半から近世初頭であると推定する。

SD1892・SD1888（図版 31・164）　SD1892・SD1888 は 46E グリッドに位置する。V 層上面で検出した。前述した SD1141 が分岐し、SX1855 と連続する形となる。調査段階では、SX1855 に付属する施設の可能性も考慮し、別番号を付した。底面の標高は 14.48m 前後を測る。断面形は弧状である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は両溝とも底面から、自然礫が散在して 50 点程出土した。

SD330・SD331（道路）（図版 32 ・ 164 ・ 324）　本道路は今回発掘を行った調査区の北部域に位置しており、54A ～ E、55B ～ E グリッドに位置する。主軸方位は N-63°-W で、V b 層で検出した。調査区外の東西へと伸びている。

道路周辺は南から北側へ非常に緩やかに傾斜していく地形であるが、その傾斜が始まる手前のほぼ平坦な部分の縁辺部に沿って本道路は構築されている。道路の北側には遺構がまったく検出されない、ややくぼんだ部分が存在している。このくぼんだ部分は湿地状の土地だったものと思われるが、東・西の調査区外にまで広がっていて、全体像は不明である。

道路の両側には側溝 SD330・SD331 が設けられており、北側に位置する側溝 SD330 は、調査区のほぼ中央部分において北側へ若干湾曲している。また、南側の側溝 SD331 は、北側の側溝に比べて全体に浅く作られており、東側は調査区内の 54D8 グリッドにおいて、西側は 53A グリッドにおいてそれぞれ徐々に浅くなり最後には途絶えている。

規模は、両溝の中心から中心の幅は約 6m を測る。北側の側溝 SD330 は幅約 60cm、深さ 30 ～ 35cm ほどであり、南側の側溝 SD331 は幅約 50cm、深さ 20 ～ 30cm ほどを測る。断面形はやや U 字状が開いたような状況を呈し、壁面はほぼ急激に立ち上がっている。底面はわずかに丸みを持つが、起伏も少なく平坦であるといえるだろう。また、道路表面は全体に平坦な面を見せている。

溝の覆土は基本的に 3 層で構成されている。1・2 層は暗灰黄色シルトで粘性・しまりは共に強い土質であり、3 層は灰オリーブの粘質シルトで砂が多量に混じる。遺物は遺構内からは出土していないが、側溝直上の堆積土からは珠洲焼の破片が 1 点出土した。

本道路北側の湿地帯からさらに北側は微高地（本道路から約 55m 先）が形成されているが、その微高地上には G 区居住域が営まれている。また反対側の本道路から南方向の 80 ～ 90m 先にも E 区居住域が形

成されている。さらに本道路の東方向約 1km の丘陵上に、中世山城の大葉沢城（城主は鮎川氏、1598 年頃に廃城となったと考えられている）が存在している。本道路が大葉沢城に関連するのかどうかは判断しかねるが、一つの情報として持っておくべきであろう。

d　性格不明遺構（図版 164・165）

SX1014（図版 164）　50A22・23、50B2・3 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを検出した。北側が開渠で掘削されている。平面形は現存部から方形であると判断した。断面形は不整形で、Ⅲ層を掘り込んでいる。壁はやや急斜度で立ち上がる。底面は全体に凹凸があり、東側に方形、西側に不整形の落ち込みがある。覆土は 3 層に分層し、上部はレンズ状の堆積である。1 層は暗褐色土で、砂質がある。Ⅱ層土に類似する。2・3 層はブロック状の堆積である。出土遺物はない。帰属時期は掘り込み面により中世後半～近世であると推定する。

SX1015（図版 165）　50B8・12・13・17・18 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形・断面形は不整形でⅢ層を掘り込み壁・底面としている。壁は全体に緩やかに立ち上がる。底面は全体に凹凸があり、北側に不整形の落ち込みがある。覆土は単層で、にぶい黄褐色土である。Ⅱ層土に類似する。出土遺物はない。

SX1017（図版 164）　50B18・23・24 グリッドに位置する。Ⅲ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形と断面形は不整形で、Ⅲ層を掘り込み壁･底面としている。壁は全体に緩やかに立ち上がる。底面は全体に凹凸があり、北東側にピット状の落ち込みがある。覆土は単層でにぶい黄褐色土である。出土遺物はない。

SX1026（図版 165）　49B17・18・22・23 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は弧状である。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、底面は全体に凹凸がある。覆土は単層でにぶい黄色土である。砂質がありⅢ層土に類似する。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴から中世後半から近世初頭と考える。

SX1028（図版 165）　49B21、49C1 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸はあるが全体に平坦である。覆土は単層でⅢ層土主体である。出土遺物はない。帰属時期は検出層位・覆土の特徴から中世後半から近世初頭と考える。

SX1029（図版 165）　49C1 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形は弧状である。壁は全体的に緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸はあるが全体に平坦である。覆土は単層で黄褐色土である。砂質が強くⅤ層土主体で、人為的な埋土と考える。出土遺物は石鏃（69）が出土したがⅤ層が縄文遺物包含層であることから埋土中に混じった遺物と考えられ、本遺構に伴うものではない。帰属時期は検出層位から中世後半から近世初頭と考える。

SX1139（図版 165）　51B3 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でにぶい黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕円形で、断面形はＵ字状である。壁は急斜度で立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。覆土は 2 層に分層し、Ⅲ層土主体である。1 層はにぶい黄褐色砂質土である。壁と底面に灰白色の粘土があり、水の影響によって変色したⅤ層と考える。出土遺物はない。帰属時期は覆土の特徴から中世後半から近世初頭と考える。

SX1360（図版 165）　53D7 に位置する。Ⅴ層上面で暗オリーブ褐色の落ち込みを確認した。平面形は楕

円形で、断面形は台形状である。壁は急斜度で立ち上がり、底面は若干の凹凸がある。覆土は単層で暗オリーブ褐色シルトである。粘性があり、Ⅳ層土主体である。壁と底面に灰白色の粘土があり、水の影響によって変色したⅤ層と考える。出土遺物はない。帰属時期は不明である。

SX1382（図版 165）　50A16・21 グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黄褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は一部袋状である。壁の立ち上がりは明瞭ではなく、底面は凹凸がある。覆土は単層でⅡ層土主体である。黄褐色土で灰色粘質土ブロックを含む。底面全体に灰白色の粘土があり、水の影響によって変色したⅤ層と考える。形状から、人為的な堀込みではなく抜根痕の可能性がある。

SX1785（図版 165）　49E10 グリッドに位置する。Ⅴ層上面でオリーブ褐色の落ち込みを確認した。平面形は不整形で、断面形は台形状である。壁は急斜度で立ち上がる。底面は平坦で西側にテラス状の平坦面がある。形状が溝と類似するが、テラス状の底面から 2 個のピットの重複の可能性もある。覆土は 2 層に分層した。1・2 層はオリーブ褐色シルトで、地山土であるⅤ層が多量混合する。SD1141 と重複し、本遺構が切られる。出土遺物はない。帰属時期は重複関係から中世後半かそれ以前であると推定する。

10）G 区居住域（図版 33・34・166 ～ 187・325 ～ 341）

G 区居住域は SD330・SD331 から構成される道路と SF799 に挟まれた居住域である。南側の SD330 までの間は湿地で、反対側の居住域北側には水田が広がる。SF799 に接して推定 25m 四方の掘立柱建物集中域が形成され、建て替えはすべてその範囲で行われている。集中域の周囲を細長い土坑等が囲むので、区画施設が存在したと推定する。調査中に多数出土した握りこぶしより一回り大きい円礫は屋根の置き石だった可能性がある。集中域外の南側には杭列や区画溝があり、約 20m のところには水田への出入り口と思われるような部分がある。

a　掘立柱建物・杭列（図版 167 ～ 175・326 ～ 328）

SB881（図版 167・326・327）　59・60A・B グリッドに位置する。西側に総柱型、東側に梁間一間型を合体した複合型建物である。桁行方向 N-18°-E の南北棟である。建物の形は正方形に近い。

棟方向を南北とすると規模は桁行 4 間（6.46m）×梁行 4 間（6.06m）で、東側に 1 間の廂が付く。身舎の構造は西側 2 間が総柱、東側 2 間は東側に廂が付く梁間一間型となっている。柱通りは比較的整っており、北側 1 間を除けは約 1.6m の等間になっている。床面積は西側総柱部分が 22.0m^2、側柱部分が 17.80m^2、廂部分は 10.10m^2 で合計 49.9m^2 となる。土間部分の中央西寄りには SE165 があって、屋内の井戸と考えている。SE165 は後述するほかの掘立柱建物では柱穴と切り合い関係があったり、そうでなければ柱筋の妨げになるような場所に位置してしまったりする。それに対して、SB881 との関係では柱筋を妨げることのない位置にあることから、屋内井戸と考えるに至った。

柱穴の規模は身舎のものは平面形が円形のものが多く、深さは 14 ～ 68cm とばらつきがある。柱穴の覆土は比較的単純で、1 ～ 2 層に分層した。覆土はⅤ層土であるが、柱痕を残す柱穴はほとんどなく、建て替えを示す痕跡も確認していない。上層部の覆土には炭化物が多く含まれる。P466 では礎盤と見られる石が柱穴底部から出土した。SD53 に切られ、SK406 を切っている。

SB882（図版 168・169・327）　59A・B、60B グリッドに位置する。桁行 4 間（6.76m）×梁行 1 間（2.92m）の二面廂付梁間一間型建物である。桁行方向は N-73°-W の東西棟である。床面積は身舎部分が 19.70m^2、廂部分を含めると 30.30m^2 となる。SE197 が中央北西寄りに配置されている。

規模は身舎南側と北側の１間が 1.8m、中央の２間がそれより短い 1.4m 前後の間尺である。身舎部分は柱筋がよく通っている。南と西側に１間（60 ～ 70cm）の廂が付いているが、柱通りは身舎に比べて非常に悪い。柱穴の平面形は隅円方形、円形で大きさも比較的平均化している。深さは南東隅部で浅いが、ほかは 40 ～ 60cm で比較的深い。柱痕は柱穴の掘形が 30cm 前後と大きくないため、掘形なのか柱痕なのかはっきりしないものが多いが、柱痕の太さは 10cm 前後と見られる。覆土はⅤ層土であり、層序も２～３層と比較的単純である。

柱痕には多くの炭化物が混入する。また、柱穴は上部の掘形と底部が階段状に著しく変わるものが数基あり、P361 のように柱痕部のみ異常に深くなっており、柱の重量による沈み込みによるものか、意図したものか判断が難しいものもあるが、P126 のような沈み込みと考えやすいものもある。また、P156 には柱痕部に礎盤の石が置かれている。SE165 が P418 を切り、SK351 を切っている。P207 から瀬戸・美濃焼平椀片（191）が出土した。

SB883（図版 169・170・327）　59・60A・B グリッドに位置する。桁行５間（10.16m）×梁行２間（4.60m）の総柱建物で、東西両方向に廂が付く。桁行方向 N–18°–E の南北棟である。床面積は身舎部分が 46.7m^2、廂を含む面積は 66.1m^2 になる。

建物の形は長方形で、柱通りは身舎、廂ともよく通っている。間尺は多少ばらつきがあり、身舎桁行では南から 2.0m、1.76m、2.0m、2.24m、2.14m となっており、梁行は南側で 2.28m 等間だが、北側では 2.0m、2.56m と西側に偏っている。柱穴の平面の形は不揃いで不整形のものが多いが、隅円方形のほか、楕円形のものがある。また、平面の大きさにかかわらず、深さは身舎のものは比較的深いものがあり、最深のものは P284 で 80cm を超えるものもある反面、南西隅の P294 で 28cm と浅くなっている。廂の柱穴は大きさ、深さとも身舎の柱穴を上回るものはない。柱通りは身舎に比べれば若干悪いことから、廂は場当たり的に設けられたものかもしれない。

覆土はⅤ層土であるが、層位は比較的単純で２層～３層で構成される。上層の覆土には多量の炭化物が含まれているものが多く、ほかのピットにも共通している。

柱痕は先にも述べたように、P146、P374 など掘形が狭いために掘形そのものが柱痕に見えるものもある。柱痕のないピットでは抜き取り穴の存在は確認できなかった。

建物内には井戸はないが、北西部分に SE7 があり、廂の柱穴１本を切っている。そのほか SB884・SK552 に切られ、SK6 を切る。また、SB885 の柱穴 P75・P483 は共有している。

P384 から珠洲焼甕片（190a）が出土した。

SB884（図版 171・172・328）　59・60A・B グリッドに位置する。東側に総柱型、西側に梁間一間型を合体した二面廂付複合型建物である。桁行方向 N–16°–E の南北棟である。床面積は、東総柱部分は 39.70m^2、西側柱部分は 41.80m^2、側柱部分を入れた総面積は 97.60m^2 である。

建物の形は長方形、規模は桁行５間（10.44m）×梁行４間（7.78m）で、南側と東側に１間の廂が付く。構造は東側２間が総柱、西側２間が側柱となっており、西側部分の中央北寄りには SE7 が位置し、この部分の身舎西側柱１本と、南側柱１本を欠いている。柱通りは比較的よく通っており、間尺は、桁行北側３間分は 2.2m の等間、南側２間は 2.0m、1.6m と少し短い。梁行は東から総柱部分が 1.8m 等間、側柱部分２間が 2.0m の等間となっている。

柱穴の規模は、身舎のものは平面形が隅円方形のものもあるが、不整形のものが多い。平面の大きさもまちまちで、小さいものは直径 22cm を超えず、大きいものは本建物の柱穴とした SX82 を除いて 76

× 50cm（P27）である。深さも 8 ～ 84cm と幅がある。また、東総柱部分の南北 2 列目の柱穴は P263 を除いて深さも浅く、大きさも側柱の柱穴に比べて貧弱であることから中柱の可能性が高い。

柱穴の中で特異なのは廂南西隅の柱穴 P203 で大きさはほかの柱穴を圧倒している。柱痕も 14cm ありほかの柱穴とは性格が異なっている。また、P74 には柱穴底部には礎盤（板）と思われる板材が置かれているが、ほかの柱穴には見られないことから、単に柱の沈下防止のためのものかは疑問が残る。

覆土はⅤ層土であるが、柱痕部には炭化物が多く混入する。

SB883 と切り合い、本遺構が SB883 よりも新しい。このほかに SK6、SK406、P48 を切っている。P57 から珠洲焼甕片（190a）、P207 から瀬戸・美濃焼平椀片（191）が出土した。

SB885（図版 173･174･328）　59 ～ 61A グリッドに位置する。建物の北西部分は調査区外に広がるため、全容は不明である。調査した範囲においては、二面以上廂付梁間一間型建物と推定される。桁行中央に柱穴が並び、総柱建物の様相を呈する。桁行方向 N–18°–E の南北棟である。床面積は推定で身舎部分が約 72.00m^2 である。

規模は桁行 6 間（16.00m）×梁行 2 間（4.50m）で、南側と東側に 1 間の廂が付く。柱通りは身舎、廂の桁行は比較的よく、間尺は桁行で南から 1.44m、1.6m、3 間めからは 1.7m の等間になっている。梁間 2 間は 2.2m でほぼ等間である。また廂の間尺も廂は身舎から 0.8m 離れて並ぶ。廂の柱通りはいいものの、間尺は一定ではない。

柱穴の平面形は不整形のものが多く、隅円方形や円形のものは少ない。大きさは側柱でも P106 のように長径が 20cm を超えない小さなものがあるが、40cm 前後のものが多い。深さは先の P106 のように形は小さいものの、深さは 39cm ある反面、P501 のように平面形の規模は大きいが、8cm と極端に浅いものがある。覆土はⅣ層土であり、2 ～ 3 層に分かれる。上層には炭化物が多く含まれる。東側廂柱穴は南東隅を SE165 に切られている。

SB887（図版 174・328）　59・60A グリッドに位置する。二面以上廂付梁間一間型建物である。廂と推定する柱穴列の方向を棟方向とすれば N–20°–E の南北棟である。建物の大半は西側の調査区外に出る。

構造は不明の点が多いが、身舎は南北方向の 2 間（7.2m）･3.6m 等間で、東側に廂が付くものと見られる。廂の柱通りは比較的いいが、間尺は 1.5m から 2.2m で不規則である。

柱穴は平面形が楕円形、円形のものが多い。大きさは P255 を除いて 30 ～ 40cm の規模のものが多い。深さはほとんどが 40cm 前後で比較的そろっている。覆土はⅣ層由来土で充填されている。P182 から珠洲焼片口鉢片（194）が出土した。

SA893（図版 175）　60･61B グリッドに位置する。全長 9.8m にわたり 5 基のピットが南北に並ぶ。ピットの平面形は円形で、径 16 ～ 26cm である。断面は台形状･U 字状で、深さは P438 が 36cm であるほかは、10 ～ 18cm である。柱痕は確認していない。

掘立柱建物集中域の東縁に並行して並ぶことから、居住域を区画する杭列あるいは柵のような施設だったと推定する。

SA897・SA898（図版 175・328）　60・61D グリッドに位置する。SA897 は SX701 を境に東西に食い違うため、A・B として区別した。60 ～ 100cm 東に SA898 が平行する。両者とも全長約 17m にわたり南北に走る。

SA897 は 9 基のピットからなる。ピットの平面形は円形・方形・不整形などがあり、一定しない。直径は 25cm 前後である。断面は U 字状で、深さは 20cm 前後のものがほとんどであるが、両端の

P771・P720 は 34cm・40cm であり、ほかより深い。この 2 基を中心として柵状の施設が作られていたのかもしれない。

SA898 は直径 8 ～ 16cm のピットが不規則に並ぶ。検出当初はモグラ等の生痕化石かと考えた。しかし、調査を進めるに従い、ピットが列状に並び、底面も検出できたことから遺構とした。底面は比較的尖った形をしていた。ほかの杭列とは著しく様相が異なることから、SA897 を柵と仮定した場合、これに杭のようなものを立掛けた裾部分の痕跡ではなかろうか。柴垣ならば柵の両側から芝が立掛けられるが、SA898 では片側からだけになるので、間垣のようなものだったのかもしれない。

掘立柱建物集中域から 17m 余り離れてはいるが、集中域の東縁に並行することから、建物群に伴う杭列あるいは柵のような施設だったと推定する。

b　井　　戸（図版 176 ～ 180・329 ～ 334）

SE7（図版 176・329）　60A13・14・18・19 グリッドに位置する素掘り井戸である。平面形は不整形で、長径 1.88m、短径 1.54m である。断面形は深さ 1.92m の U 字状で、底面標高は 12.48m である。底面はⅦ層まで掘り込まれており、覆土は 7 層に分層した。1 層はⅡ層落ち込み土、2 層は炭化物を多く含むオリーブ黒色シルト、3 層は粘性を帯びた灰色シルト、4 層はしまりの弱い暗オリーブ色粘土、5 層は灰色土が多量に混入したしまりの弱い灰オリーブ色粘土、6 層は強い粘性を帯びた灰色シルト、7 層は非常に強い粘性を帯びた灰色粘土である。4 層は地山崩落土であるが、ほかは人為的な埋め戻し土である。同遺構は開口部からほぼ垂直に掘り込まれ、標高 13.1m 付近から壁面が袋状に膨らむ。水流でえぐれたものであろうか。遺構南東部は崩落のため、不整な平面形を呈する。P449・P484 を切り、SB883 の廂部と重複する。また、SB884 とは柱穴の切り合いがなく直接的な関係は不明だが、本井戸が建物敷地内に位置することから屋内井戸の可能性がある。遺物は 3 層から珠洲焼片 1 点（197）、砥石（323）、6 層から珠洲焼甕片・片口鉢片（190a・196）と曲物底板、炭化した板状木製品が出土した。ほかに遺存状態の悪い木屑が少量出土した。

SE165（図版 176・329）　59A20・25、60A16・21 グリッドに位置する素掘り井戸である。平面形は円形で、長径 1.42m、短径 1.25m である。深さ 1.60m で、断面形は U 字状。底面標高は 12.82m である。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は 11 層に分層した。11 層が砂礫層であるほかはシルトである。1 層はⅡ層落ち込み土、2 層は炭化物を多く含むオリーブ黒色シルト、3 層は粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、4 層は炭化物が多く混入するしまりのあるオリーブ黒色シルト、5 層は崩落土とおぼしいしまりの弱い灰オリーブ色シルト、6 層は厚さ約 5cm の炭化物が帯状に 2 本入るオリーブ黒色シルト、7 層は崩落土とおぼしい粘性を帯びた灰色粘土シルト、8 層はしまりの弱い灰色シルト、9 層は厚さ約 5cm の炭化物層、10 層はしまりのある灰オリーブ色シルト、11 層は灰オリーブ色の砂礫層である。覆土は 10 層までレンズ状堆積を示し、一見すると自然堆積のように見える。しかし、6 層中及び 9 層に厚い炭化物の堆積があり、人為的廃棄の痕跡の可能性が残る。G 区は、覆土上層にブロック状の炭化物が多量に混入する遺構が大多数を占め、本井戸では 2 層・4 層に相当する。一方で 6 層・9 層のような炭化物のレンズ状堆積はほかに例がなく、詳細は不明とせざるを得ないが、遺構廃棄行為の結果とも考慮される。同遺構はおおむね緩やかに立ち上がるが、途中で崩落しているためにやや不整の断面形・平面形を呈する。重複遺構の新旧関係は SB882–P418、SB885–P634、P580、SK552 を切る。遺物は 2 層から銅製品（252）、3 層から青磁椀片 1 点（192）が出土した。ほかに遺存状態の悪い木屑が出土した。

SE192（図版 177・330） 59A17 グリッドに位置する素掘り井戸である。平面形は円形で、長径 1.40m、短径 1.30m である。深さ 1.68m で、断面形はＵ字状。底面標高は 12.80m である。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は 17 層に分層した。1 層はⅡ層落ち込み土、2 層は炭化物を多く含むオリーブ黒色シルト、3 層～ 6 層は炭化物を少量含むオリーブ黒色シルト、7 層・8 層は崩落土とおぼしい非常に強い粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、9 層・10 層は炭化物の少量混入するオリーブ黒色シルト、11 層は粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、12 層は炭化物を少量含むオリーブ黒色シルト、13 層はしまりのない砂質土、14 層～ 16 層は崩落土とおぼしい灰オリーブ色シルト及び砂質土、17 層はグライ化によって変色した灰色シルトである。同遺構は開口部から円筒形に掘り込まれ、標高 13.6m 付近の壁面が袋状に膨らむ。部分的に崩落した結果、遺構は東西に若干広がる平面形を呈する。重複遺構の新旧関係は P413 を切る。遺物は 10 層から珠洲焼片口鉢片 2 点（194・199）、12 層から遺存状態の悪い木片、17 層底面から円礫が出土した。

SE197（図版 177・330） 59A23・24 グリッドに位置する。水溜に曲物を据えた素掘り井戸である。平面形は円形で、長径 1.03m、短径 0.9m である。深さ 1.56m で、断面形はＵ字状。底面標高は 12.90m である。遺構はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は 8 層に分層した。1･2 層は粘性を帯びた灰色系シルト、3 層は炭化物を多く含むオリーブ黒色シルト、4・5 層は大粒の炭化物を含む粘性を帯びたオリーブ黒色シルト、6・7 層は崩落土とおぼしい非常に強い粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、8 層はＶｂ層土とおぼしい灰オリーブ色シルトである。覆土はおおむねレンズ状堆積を示し、自然埋没をうかがわせる。しかし、5 層には大粒の炭化物が多量に混入し、8 層では中世遺構検出面であるＶｂ層土に比定される粘質土が分厚く堆積する。これらは自然堆積ではなく、人為的廃棄行為が行われたと判断する方に妥当性があろう。同遺構は開口部からほぼ垂直に掘り込まれ、深部へ向かってわずかにすぼまる。比較的綺麗な円形で、規模も G 区井戸の中では最小である。大きな崩落が起きなかったためであろう。遺物は最下層 8 層から遺存状態の悪い曲物が出土した。これは水溜施設に用いられたもので、Ⅷ層の砂礫を 30cm ほど掘り込んで埋設されていた。曲物周囲は砂礫に囲まれているが、積極的な石組構造とは言い難く、砂礫層を掘り込んだが故の結果であると解釈したほうが妥当である。ただし、安定するように石を置き換えるなどの工夫はなされたことだろう。重複する遺構はない。

SE226（図版 177・331） 59A4・9 グリッドに位置する。半截後の断面観察中に壁面が大規模に崩落し、隣接する調査範囲外の水田の崩壊も危惧されたため、安全面の配慮から調査を中止し、完掘せずに埋め戻した。以下、崩落前に観察し得た分を記述する。同遺構は素掘り井戸である。平面形は不整楕円形で、長径 1.20m、短径推定 1.0m である。底面標高は不明である。底面はⅧ層付近まで掘り込まれており、覆土は 5 層に分層した。1 層は大粒の炭化物を少量含むオリーブ黒色シルト、2 層は粘性を帯びた灰色シルト、3 層はわずかな炭化物を含む粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、4 層は炭化物が多量に混入して強い粘性を帯びた灰オリーブ色土、5 層はグライ化により変色した灰色粘土である。覆土は 3 層が半分以上を占め、短期間に埋没したとおぼしい堆積状況を示す。4 層では炭化物が塊となって検出されていることから、廃棄行為の結果かもしれない。同遺構は開口部からほぼ垂直に掘り込まれ、深部へ向かって次第にすぼまる。現存では平面形は不整だが、崩落が無ければ比較的綺麗な円形であったろう。SX225 に切られる。遺物は半截時点まで何も出土しなかった。

SE233（図版 177・331） 59A3・8 グリッドに位置する素掘り井戸である。平面形はやや不整な円形で、長径 1.46m、短径 1.40m である。深さ 1.78m で、断面形はＵ字状。底面標高は 12.62m である。底面

はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は12層に分層した。1層はⅡ層由来の灰オリーブ色シルト、2層はⅤb層土が多量に混入して粘性を帯びた灰色シルト、5層は炭化物を多く含む粘性を帯びたオリーブ黒色シルト、6層は炭化物が少量混入し粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、7層は非常に強い粘性を帯びたオリーブ黒色シルト、8・10・11層は崩落土、9層は強い粘質を帯びた灰色シルト、12層は砂礫が多く混じる灰色シルトである。覆土はおおむねレンズ状堆積を示し、7層以上は自然埋没をうかがわせる。ただし、9層では炭化した板材と円礫が検出されていることから、こちらは廃棄行為の可能性がある。同遺構は開口部からほぼ垂直に掘り込まれ、途中崩落部分で膨らみ、底部へ向かって次第にすぼまる。平面形はやや不整な円形だが、崩落が無ければ比較的整った円形であったろう。重複遺構はない。遺物は2層から珠洲焼片2点（190a・c）、砥石1点（325）、瀬戸・美濃焼平椀片（191）、9層から砥石（324）が出土した。

SE245（図版178・331）　59A6・7・11グリッドに位置する、水溜に曲物を据えた素掘り井戸である。平面形はやや不整な円形で、長径1.96m、短径1.93mである。深さ1.74m。断面形はU字状であるが、崩落部分で膨らむ不整な袋状を呈する。底面標高は12.68mである。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は12層に分層した。1層はⅡ層由来の灰オリーブ色シルト、2層はⅤb層土が多量に混入して粘性を帯びた灰色シルト、3層は炭化物・Ⅴb層由来シルトともに少量混入し、粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、4・5層は壁面崩落シルト、6層はⅤb層が多量に混入して粘性を帯び、酸化鉄が全面に見られる灰オリーブ色シルト、7・8層はⅤb層が多量に混入して粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、9層は粘性の非常に強い灰色シルト、10・11層は壁面崩落シルト、12層は粘性の強い灰オリーブ色シルトである。覆土は自然堆積と崩落土の繰り返しによる埋没状況を示したが、特に10・11層は大規模な崩落を物語るように地山とほぼ同色・同質であり、底面付近の12層を含め壁面や底面との境界が非常に不明瞭であった。トレンチ最深部において水溜用の曲物がわずかに現れなければ、底面の位置を見誤っていたであろう。これにより、曲物から上部は崩落土を含む覆土であると判断でき、水溜築造面と底面を検出することができた。重複遺構の新旧関係はP464を切る。遺物は2・3層から珠洲焼片3点（190c・194・195）が出土した。190cはSX234出土の破片と接合した。また、底面から検出した曲物は経年により腐敗が著しく、脆弱化していた。取り上げ前の曲物計測値は、外径36.5×34.0cm・内径35.5×33.0cmを測る。底面は既に無かった。出土遺物は層位不明で曲物底板（427）が出土した。

SE601（図版178・332・333）　60E5・10グリッドに位置する。水溜に曲物を据えた木側井戸である。平面形は円形で、長径2.04m、短径1.92mである。断面形は深さ2.34mのU字状で、底面標高は12.46mである。井戸側は北を意識して組まれたようである。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は18層に分層した。1層はⅡ層の落ち込み、2・3層は炭化物を含むしまりのある黄灰色シルト、4層はⅤb層由来シルト、5層は暗灰黄色の砂質土、7層は炭化物をわずかに含む暗灰黄色シルト、8層はしまりの弱い黄灰色シルト、9層はⅤb層土が多量に混入する黄褐色砂質土、10層は木質痕跡、11層は暗オリーブ色シルトと灰白色土の混合シルト、12層は粘性が少ない暗オリーブ色シルト、13層は12層よりも粘性が強く、最大20cmの円礫が混じる暗オリーブ色シルト、14層は粘性を帯びた暗オリーブ色シルト、15層は砂礫を少量含む暗オリーブ色シルト、16層は酸化鉄の硬化が見られ、砂質部分を含む灰色粘土、17層は小礫を含み、グライ化により変色した暗緑灰色粘土である。15層が側板内覆土、17層が水溜用曲物内覆土である。12層付近からは砂礫層を掘り込んでおり、覆土には大小の円礫が多量に混入している。覆土上層の9層は両側からの土圧により内傾したⅤb層だと思われ、動いているために混入物が見られる。7層以下が水の影響によりやや変色しているのは、井戸廃絶後もしばらく水分が抜けなかっ

たためであろう。その遠因として、木組井戸側が側面の崩落を防ぎ、空間を維持していたことが考えられる。その痕跡が 10 層であり、深部では木組井戸側が遺存していることにつながる。一括埋め戻しであったとしても、それは 6 層付近までで、5 層以上は空間を残し、覆土は後世に埋まったものであろう。SK872 を切る。遺物は、13 層～ 15 層にかけて脆弱化した木組井戸側が遺存する。木組井戸側は 15 層中においては四面が残り、その中央部からも板材が出土した。これは井戸側上部の部材が転落したものであろう。さらに下層には、水溜用に深さのない底の抜けた曲物が据えられていた。取り上げ前の曲物計測値は外径 36cm × 35cm、厚さ 1.4cm を測る。脆弱化した曲物は取り上げ時に崩壊し、原形を止めていない。また、曲物内部から珠洲焼片口鉢片（193）、箸状木製品（428）、葦の小枝、桜樹とおぼしい枝が出土したが、梅の種は出土しなかった。このほかの遺物には漆塗膜（431）、曲物底板？（429・430）、曲物側板（432）があるが、出土層位は不明である。

SE606（図版 179・333）　58D15・19・20 グリッドに位置する。水溜に曲物を据えた素掘り井戸である。平面形は円形で、長径 2.12m、短径 1.86m である。深さ 1.79m で、断面形は半円状。底面標高は 12.80m である。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は 18 層に分層した。1 層はⅡ層の落ち込み、2 層～ 5 層は炭化物が少量混入した灰オリーブ色シルト、6 層～ 8 層・10 層はしまりのない灰オリーブ色粘土、9 層・11 層～ 13 層は崩落土とおぼしい灰オリーブ色粘土、14 層・16 層はしまりのあるⅤb 層土に比定されるオリーブ黄色シルト、15 層は暗オリーブ砂質シルトである。曲物内の覆土は 2 層に分層したが、ともに灰色系の砂質土である。5 層以上は自然堆積、9 層以下は底面付近を除き大半が崩落土であると考える。同遺構は崩落が著しく断面形・平面形が想定できないものの、遺構側面が均等に崩落したために円形の平面形を呈している。本来は現在形よりも幅の狭い井戸であったものと思われる。遺物は 5 層から珠洲焼片 1 点（190c）、底面から水溜用の曲物が出土した。190c は SE245 出土破片と接合する。曲物は完全に腐敗し土壌化しており、その痕跡が円形に巡るのを確認したに留まる。取り上げは不可能であり、さらなる分析も見込めないことから、写真記録にて調査を終え、実物は取り上げていない。曲物計測値は外径 54 × 48cm、深さ 38cm を測る。

SE648（図版 179・333・334）　60D24・25 グリッドに位置する。水溜に曲物を据えた簡易石組井戸である。平面形は不整形で、長径 1.72m、短径 1.60m である。深さ 2.12m で、断面形は階段状。底面標高は 12.56m である。底面はⅧ層まで掘り込まれており、覆土は 12 層に分層した。1 層はⅡ層落ち込み、2 層はしまりのある灰白色シルト、3 層は炭化物が少量混入した暗オリーブ褐色シルト、4 層は炭化物塊と暗オリーブ色土がブロック状に混入した暗オリーブ黒色シルト、5 層は粘性を帯びた暗オリーブ褐色シルト、6 層は粘性を帯びたオリーブ褐色シルト、7 層は最大 2cm の炭化物が多く混入するオリーブ褐色シルト、8 層はオリーブ褐色シルトがブロック状に混入する炭化物層、9 層は炭化物が多く混入したオリーブ褐色シルト、10 層は円礫が少量混入した灰オリーブ色シルト、11 層は木組井戸側の痕跡と思しき変色土、12 層は砂礫が多量に混入し、やや粘性を帯びた暗オリーブ色シルトである。炭化物堆積層が上下 2 層（4 層・8 層）あり、おおむねレンズ状堆積を示す。ただし、8 層はⅤb 層土とおぼしい土がブロックとともに炭化物が厚く堆積し、北方から大量に流れ込んだか、もしくは人為廃棄が行われた可能性がある。10 層・11 層は土色・土性質ともに似通った覆土であり、10 層までは短期間のうちに人為的に埋め戻されたことを示していよう。井戸深部は砂礫層（Ⅷ層）を掘り込んでおり、井戸側として円礫を簡易的に配置した石組みを造作している。その底面に水溜施設として曲物を埋設しているが、石組みの中心からは南側に寄り、土圧により変形している。大部分において木質部は遺存するが、腐敗が進み、状態は良くない。

取り上げ前の曲物計測値は外径 36cm × 28cm・深さ 16cm を測る。曲物は周囲の礫層を重機で撤去した後に取り上げた。また、曲物内部から樹皮に光沢のある桜樹とおぼしき枝が出土したが、類例は隣接の SE601、隣接地区の SE245 に認められる。何らかの廃棄儀礼の一部である可能性を指摘できる。ほかに 4 層から珠洲焼片口鉢片（197）、栓状木製品（433）、曲物内覆土から、葦、最下層から籾殻、層位不明の曲物側版（434）が出土した。

SE822（図版 180・334）　61A16・17・22 グリッドに位置する、曲物を据えた木側井戸である。平面形は円形で、長径 1.84m、短径 1.68m である。深さ 2.14m で、断面形はＵ字状。底面標高は 12.28m である。深さはＧ区居住域の中では深くはない。地下水位が比較的高位であったためか、曲物や井戸側などの部材をはじめ木製品の出土が多い。底面はⅧ層まで掘り込まれていた。井戸の部材として、側板（440 ～ 442）、水溜用の曲物（439）が出土した。側板は全部で 8 枚出土した。側板は軸方向が北向になるように組まれている。ほかの井戸では側板が横置きに用いられていたが当遺構では縦位置に用いられている。またこの側板の中で 440 は船の部材が転用されたものと見られる。板材は横位に置かれた丸太材によって留められていた。そして、丸太材は北東隅・北西隅に見られる打ち込み杭によって固定されていたものと見られる。東壁の板材は廃棄時には既に破損してしまっていた。

覆土は 16 層に分層した。下層部を除くと土層は弓なりになって堆積しており、自然堆積で埋まっていったものと見られる。ただし、1 ～ 4・11・12 層については、ほかの堆積土を切っている様子がうかがわれるので、掘り返しの痕跡と推定する。ほかの遺構との重複関係はない。

遺物は最下層から珠洲焼片口鉢（200）が 1 個体分出土したほか、層位不明の箸状木製品（435）、曲物底板（436 ～ 438）、曲物側板（439）が出土した。

c　土　　坑（図版 181 ～ 184・335・336）

SK2（図版 181）　61B6・60B10・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈す。長径 0.94m、短径 0.76m、深さ 0.22m を測る。覆土は 2 層に分層した。全体にオリーブ黒色土が主体を占め、大粒の炭化物が多く混入する。下層に行くに従って粘性を帯び、底面付近にはＶｂ層土がブロック状に混入する。P32 に切られるが、覆土に大きな違いはない。出土遺物はない。

SK3（図版 181・335）　60B9 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.92m、短径 0.80m、深さ 0.12m を測る。覆土はオリーブ黒色シルトが主体を占め、大粒の炭化物とＶｂ層土が多量に混入している。底面西側には段差があり、高低差は少ないものの、テラス状になっている。P326・P895 を切る。出土遺物はない。

SK4（図版 181）　60B13・14 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は半円状を呈す。長径 1.04m、短径 1.02m、深さ 0.46m を測る。覆土は 4 層に分層した。1・2 層はオリーブ黒色土が主体を占め、大粒の炭化物とＶｂ層土が多く混入している。2 層は全体に酸化鉄があり、一見すると赤みを帯びて見える。3 層以下は全体的に強い粘性を帯びたＶｂ層由来土が入り、地山との境には砂質土が溜まっていた。出土遺物はない。

SK5（図版 181）　60B7・12 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.80m、短径 0.61m、深さ 0.12m を測る。覆土は 2 層に分層したが、1 層にはしまりの強い灰オリーブ色シルトが入り、ほかの土坑と様相を異にする。2 層は暗オリーブ色土が主体を占め、小粒の炭化物とＶｂ層土が多く混入し、底面付近は地山のⅥｂ層に近接するためにやや砂質となる。SD10・P470 を切る。出土遺

物はない。

SK6（図版 181･335） 60B6･7 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 1.00m、短径 0.75m、深さ 0.20m を測る。オリーブ黒色シルトが大部分を占め、Ｖｂ層土と大粒の炭化物が多量に混入する。底面はやや凹凸があるが、おおむね擂鉢状を呈する。西側が急斜度に立ち上がるのは、重複する P496 の名残りであろう。SB883–P900 に切られる。出土遺物はない。

SK8（図版 181） 60A15 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.63m、短径 0.53m、深さ 0.14m を測る。Ｖｂ層由来とおぼしい灰オリーブ色シルトに、オリーブ黒色土が混入する覆土が大部分を占める。底面付近は粘性を帯びた灰オリーブ色シルトが入り、地山との境が不明瞭である。礫が出土したが加工痕・使用痕などはなかった。

SK46（図版 181） 60A24･25、60B4･5 グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は階段状を呈す。長径 0.87m、短径 0.55m、深さ 0.50m を測る。全体にオリーブ色系の覆土で、上層ほどＶｂ層土が多く混入する。最下層はしまりの弱い粘土である。各層とも炭化物の混入はごくわずかで、遺物の出土はない。底面は階段状を呈し、平面形は南側に張り出した不整形である。

SK56（図版 181・335） 60A21・22、60B1・2 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は階段状を呈す。長径 0.67m、短径 0.58m、深さ 0.36m を測る。全体的に粘質を帯びた灰オリーブ色シルトが入り、炭化物の混入はごくわずかである。断面形は階段状を示す。出土遺物はない。

SK108（図版 181） 60B13 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は箱状を呈す。長径 1.57m、短径 1.34m、深さ 0.76m を測る。覆土は 10 層に分層した。上層～中層までは暗オリーブ色シルトで、粘質土が混ざる部分もある。両端に崩落土層があり、平面・側面ともに不整形となっている。覆土には、全体的にＶｂ層土とともに炭化物が混入するが、特に 4 層において顕著である。また、ほかの土坑とは違って、底面直上層（10 層）にも多量の炭化物が混じる。出土遺物はない。同遺構は G 区検出の井戸と同規模程度であり、当初はその可能性も考えられたが、結局木質遺物や水溜の造作などは見つからなかった。また、G 区井戸群とは遠隔であったため、便所遺構の可能性も考慮したが、確証になるものは得られなかったため、単に土坑扱いとした。

SK109（図版 181） 60B12･17 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.72m、短径 0.50m、深さ 0.22m を測る。覆土は 4 層に分層したが、人為的な影響なのか堆積が斜状である。総じて暗・灰オリーブ色系統であり、炭化物の混入は少ない。出土遺物はない。

SK115（図版 181・335） 59B20 グリッドに位置する。Ⅵｂ層分布範囲の縁辺に当たる場所である。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。長径 0.81m、短径 0.44m、深さ 0.22m を測る。覆土は 2 層に分層でき、オリーブ系色の砂質シルト中にＶｂ層土が多量に混入する。確認面から珠洲焼壺片（203）が出土し、H 区水田出土破片と接合する。

SK116（図版 181） 59B20 グリッドに位置する。Ⅵｂ層分布範囲の縁辺に当たる場所である。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈す。長径 1.24m、短径 0.51m、深さ 0.62m を測る。覆土は 5 層に分層した。全体的に暗オリーブ系色のしまりの弱い粘質土が主体を占め、Ｖｂ層土が多量に混入する。中層（3 層）にて炭化物の集積がある。覆土・規模ともに SK385 に類似する。建物群を区画した塀跡のような性格も考えたが、確たる証拠はつかめなかった。

SK118（図版 181･335） 59B18･19 に位置する。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈す。長径 1.04m、短径 0.36m、深さ 0.46m を測る。覆土は 2 層に分層した。1 層にオリーブ黒色シルトが、2 層に灰オリー

ブ色シルトが入る。全体的にⅤｂ層土が多く混入し、炭化物が少ない。下部へ行くほど粘性を帯び、しまりが弱くなる。形状は前述 SK116・SK140 に近似し、SK116 とは約 90 度振った位置関係になるが、関連性は判然としない。出土遺物はない。

SK140（図版 181）　59B10・15 に位置する。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈す。長径 1.06m、短径 0.34m、深さ 0.14m を測る。覆土は３層に分層した。上層にオリーブ黒色土が、下層に灰オリーブ色土が入る。全体的にⅤｂ層土が多く混入し、最下層では特に顕著である。下部に行くに従って粘性を帯び、しまりが弱くなる。全体に炭化物はほとんど含まれない。関連性は判然としないものの、形状は前述 SK116・SK118 に近似し、SK118・SK394 とはおおよそ並行関係にある。出土遺物はない。

SK159（図版 181）　59B3･8 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.65m、短径 0.42m、深さ 0.10m を測る。覆土は灰オリーブ色土の単層で、粘性を帯びたⅤｂ層土が混入する。長さを除けば、近接の SD160 に類似する。出土遺物はない。

SK218（図版 181）　59A14 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。底面が緩やかに起伏する。長径 1.18m、短径 0.39m、深さ 0.15m を測る。覆土は２層に分層した。粘性を帯びた灰オリーブ色土が入る。１層はⅤｂ層土とともに炭化物が多く混入する。一方、２層はⅤｂ層土が主体を占め、炭化物はごくわずかしかない。SK256・SX343 と近接し、並行するも、その関連は不明である。１層で珠洲焼中甕片が１点（190b）出土した。

SK229（図版 181）　59A8 に位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈す。緩やかに立ち上がり、底面の中心が若干くぼむ浅い土坑である。長径 0.69m、短径 0.58m、深さ 0.15m を測る。覆土は灰オリーブ色シルトの単層で、粘性を帯びたⅤｂ層土が混入する。炭化物はごくわずかしか入らない。確認面にて円礫が出土した。

SK256（図版 181）　59A13 に位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。半截時に若干掘り過ぎてはいるが、緩やかに立ち上がる。長径 0.84m、短径 0.41m、深さ 0.10m を測る。覆土は灰オリーブ色シルトの単層で、粘性を帯びている。Ⅴｂ層土と炭化物が少量混入する。SK218・SX343 と 40cm 内に近接し、並行するも、その関連は不明である。出土遺物はない。

SK257（図版 182）　59A12 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。緩やかな立ち上がりと、東端に小ピット状のくぼみを持つ。長径 0.78m、短径 0.47m、深さ 0.30m を測る。覆土は３層に分層した。全体に強い粘性を帯びた灰オリーブ色シルトが入る。Ⅴｂ層土と少量の炭化物が混入する。出土遺物はない。

SK287（図版 182）　60B14・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。半截時に掘り過ぎているが、おおよそ平坦な底面を持つ。長径 1.28m、短径 1.07m、深さ 0.28m を測る。覆土は３層に分層した。暗オリーブ色系の土が入る。上層では炭化物の混入と酸化鉄が見られる。下層に行くに従い粘性を帯び、最下層の３層では粘土になる。P288 に切られる。出土遺物はない。

SK351（図版 182）　59B10・60B6 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.90m、短径 0.60m、深さ 0.12m を測る。覆土は２層に分層した。全体に粘性の強い灰オリーブ色シルトが入る。Ⅴｂ層土が多く入る一方、炭化物の混入はごくわずかである。同遺構は、大半を P349 と SB882–P350 に切られ断面では全体形を捉えにくい。出土遺物はない。

SK354（図版 182）　60B11 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。半截時に底面を掘り過ぎているが、ほぼ平坦な底面を持つ。長径 1.08m、短径 0.44m、深さ 0.22m を測る。覆土は

暗オリーブ色土の単層で、粘性のない砂質土である。Ｖｂ層土、炭化物の混入は、ともにごくわずかしかない。少量だが、底面直上に炭化物の堆積が見られる。SK410 を切り、SK394 に切られる。出土遺物はない。

SK380（図版 182）　60A21 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。長径 1.10m、短径 0.62m、深さ 0.28m を測る。立ち上がりはやや急斜度で不整形な底面を持つ。覆土は 3 層に分層した。1 層は粘性を帯びたオリーブ黒色シルトと灰オリーブ色土の混合土、2 層以下は灰オリーブ色シルトである。1 層においてＶｂ層土、炭化物の混入が多く見られる。P381 を切る。出土遺物はない。

SK385（図版 182）　59B19・24 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈す。溝状ながらも南方に張り出しを持つ。長径 1.30m、短径 0.54m、深さ 0.66m を測る。覆土は 5 層に分層した。1 層は炭化物の少ない、しまりのあるオリーブ黒色シルト、2 ～ 4 層は粘性を帯びたオリーブ黒色系土で、総じて大粒の炭化物を多く含む。橙色の酸化鉄が全面に見られ、一見すると焼土に見間違う。5 層においてはＶｂ層由来とおぼしい灰オリーブ色土が入る。同遺構はＵ字型に立ち上がり、深さのある溝状を呈するが、長さが短いため土坑扱いとした。覆土・規模ともに SK116 に類似する。重複遺構の新旧関係は P117 に切られる。底面付近から礫が出土した。

SK394（図版 182）　60B6･11 グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は台形状を呈す。長径 1.01m、短径 0.37m、深さ 0.30m を測る。覆土は 3 層に分層した。2 層のしまりのある灰オリーブ色シルトが大半を占める。全体に炭化物の混入はわずかで、粘性のない砂質土である。SK354・P894 を切る。1 層から砥石（328）、2 層から青磁椀片（201）が出土した。

SK400（図版 182）　59B20・60B16 グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は弧状を呈す。短い溝状ながらも西側に張り出しを持つ。長径 0.80m、短径 0.35m、深さ 0.16m を測る。覆土は 2 層に分層した。両者ともしまりのあるオリーブ黒色砂質土と暗オリーブ色土の混合土であるが、1 層が砂質である一方、2 層ではやや粘性を帯びてくる。全体に炭化物の混入はわずかである。出土遺物はない。

SK401（図版 182）　60B6 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。弧状の立ち上がりと、擂鉢状の底面を持つ。長径 0.64m、短径 0.52m、深さ 0.13m を測る。覆土は 2 層に分層した。両者ともしまりのある灰オリーブ色シルトであるが、2 層はＶｂ層土が主体を占め、やや粘性を帯びてくる。全体に炭化物の混入はわずかである。出土遺物はない。

SK406（図版 182）　60B1 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.74m、短径 0.58m、深さ 0.10m を測る。覆土は灰オリーブ色シルトの単層で、Ｖｂ層土が多く混入し、やや粘性を帯びている。炭化物の混入はわずかである。同遺構は、弧状の立ち上がりと、おおむね平坦な底面を持つ楕円形の土坑である。P576、SB884–P508、SB881–P578 に切られる。出土遺物はない。

SK410（図版 182）　59B15・60B11 グリッドに位置する。溝状で東側に張り出しを持つ不整形な土坑である。断面形は台形状を呈す。長径 1.48m、短径 0.76m、深さ 0.30m を測る。覆土は 2 層に分層でき、1 層はしまりのあるオリーブ黒色シルトであるが、2 層はやや粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。全体に炭化物の混入はわずかである。SK354 に切られる。出土遺物はない。

SK460（図版 182）　60A14 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面は弧状を呈す。半截時に掘り過ぎているが、弧状の立ち上がりと、おおむね平坦な底面を持つ。長径 0.88m、短径 0.45m、深さ 0.08m を測る。覆土はオリーブ黒色シルトの単層で、Ｖｂ層土が多量に、炭化物が少量混入する。出土遺物はない。

SK504（図版 182）　60A7 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形状を呈す。底面は、半

截時に若干掘り過ぎているものの、多少凹凸している。長径 1.37m、短径 0.56m、深さ 0.28m を測る。覆土は 3 層に分層した。全体に灰オリーブ色シルトが入る。総じて炭化物の混入はわずかで、2 層以下は次第にしまりが弱まり、粘性が強くなる。P422・P503 に切られる。出土遺物はない。

SK512（図版 182）　60D21 に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈す。長径 0.82m、短径 0.74m、深さ 0.43m を測る。壁面はやや凹凸があり、丁寧には掘られておらず、底面は平坦ではなく東に向かって深くなっている。覆土は上層にⅡ層に類似した灰黄色土を載せるが、大部分はⅤb 層土が堆積する。礫が数点まとまって、2 層中位の北辺部から出土した。出土遺物はない。

SK534（図版 182）　58B8 グリッドに位置する。G 区のピット群からは遠隔にあり、孤立した観がある。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈す。半截時に南端を多少掘り過ぎたが、半円状の立ち上がりと側壁に凹凸を持つ。長径 1.14m、短径 0.64m、深さ 0.36m を測る。覆土は粘性を帯びた灰オリーブ色シルトの単層で、Ⅴb 層土及び炭化物が少量混入する。出土遺物はない。

SK552（図版 182）　60A21 グリッドに位置する。平面形は円形を呈す。長径 0.88m、深さ 0.26m を測る。SE165 に大部分を切られているため全体形を把握できないが、長径 1m を超える土坑であったと思われる。覆土は 2 層に分層した。1 層はⅤb 層土と炭化物を多く含むオリーブ黒色シルト、2 層は 1 層と炭化物を少量含んだ灰オリーブ色シルトである。SB883–P421 を切る。出土遺物はない。

SK572（図版 182・336）　60B16・17 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はＵ字状を呈す。長径 0.80m、短径 0.26m、深さ 0.20m を測る。溝状を呈するが、やや長さが短いために土坑扱いとした。覆土は 2 層に分層した。全体にⅤb 層土と炭化物を少量含むオリーブ黒色砂質土である。1 層では砂質が強く、2 層下部ではやや粘質を帯びてくる。出土遺物はない。

SK595（図版 182）　59C24、59D4 グリッドに位置する。平面形は方形で、断面形は半円状で壁面、底面ともに平滑である。SD266 が西側中央部に接続している。長径 1.44m、短径 1.18m、深さ 0.68m を測る。検出面では切り合い関係が不明なため、両者にまたがるトレンチを設定して切り合い関係を調べたが、上層部では同じ覆土が連続しており、同時期に埋まっていったものと見られる。覆土上層にはⅡ層類似の灰黄色土があり、SD266 に連続している。中・下層部分はⅣb 層土によって埋まっており、いずれも炭化物が混入していた。SD266 の底面に顕著な高低差はないが、溝に流れ込んだ水を溜める役割を持っていたものと見られ、下層部の覆土には上層で見られたⅡ層類似の灰黄色シルトが混入していた。底面から珠洲焼片口鉢片（204）が 1 点出土した。

SK664（図版 183）　58E5・10 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は箱状を呈す。壁面は西側に凹凸があり、底面は中央部にピット状の落ち込みがある。長径 0.78m、短径 0.54m、深さ 0.42m を測る。断面の土層観察では柱痕などは観察されず、上部から底部まで単層になっていた。覆土はⅤb 層土が堆積するが、ほかの炭化物などの混入はない。隣接遺構に SD629 があり、覆土は SD629 と類似する。珠洲焼壺片（203）が出土した。

SK676（図版 183）　60D5・10 グリッドに位置する。平面は楕円形、断面形は台形状を呈す。壁面、底面は平坦である。長径 1.25m、短径 0.60m、深さ 0.36 を測る。覆土は上層部にⅤb 層類似土が浅く水平に堆積するが、本遺構の位置する地山部分はⅥb 層の砂質土であることから、覆土はシルト質になっており、3 層に炭化物の混入がある。出土遺物はない。

SK677（図版 183）　61C22 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。壁面、底面には浅い凹凸がある。長径 1.25m、短径 1.08m、深さ 0.16m を測る。覆土は確認面に一部Ⅴb 層土由来層

が見られるが、Ⅵｂ層土のシルト質の単層である。出土遺物はない。

SK680（図版 183） 60C18 グリッドに位置する。平面は楕円形、断面形は半円状を呈す。長径 0.57m、短径 0.32m、深さ 0.19m を測る。壁底面は平滑であるが、地山がⅥｂ層のなかでも砂に近いことから、本来の形状を止めていない可能性がある。覆土は１層が斑状に粒子の細かい炭化物と焼土が混入しており、その下はⅥｂ層土が堆積する。出土遺物はない。

SK681（図版 183） 60C12 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。壁面、底面は平滑である。長径 0.76m、短径 0.45m、深さ 0.22m を測る。覆土はＶｂ層土とⅥｂ層土が堆積するが、1 層にはやや多くの炭化物が混入し、東側に厚く偏って堆積していることから、短時間に埋まったものと考える。遺物は出土しなかった。

SK688（図版 183） 61C18・23 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。おおむね平坦な底面を持つ。長径 1.03m、短径 0.78m、深さ 0.20m を測る。覆土はオリーブ褐色シルトの単層で、褐鉄鉱が多い。出土遺物はない。

SK695（図版 183・336） 60D19 グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は台形状を呈す。壁面は平滑、底面は平坦である。長径 1.15m、短径 0.63m、深さ 0.48m を測る。覆土は１～３層がＶｂ層土、4 層がⅥｂ層土である。Ｖｂ層土は炭化物が多く混入する。出土遺物はない。

SK718（図版 183・336） 60C25 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。壁面、底面は凹凸が著しい。長径 1.00m、短径 0.50m、深さ 0.20m を測る。覆土はＶｂ層土が堆積するが、少量の炭化物が偏在して混入する。壁底面の形状から根痕の可能性が強い。出土遺物はない。

SK722（図版 183） 61E1･2 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。長径 0.78m、深さ 0.12m を測る。覆土はⅥｂ層土の単層である。南側を SD584 に切られる。出土遺物はない。

SK756（図版 183） 60C6・7 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。壁面、底面は平滑である。長径 1.22m、短径 0.96m、深さ 0.35m を測る。覆土はＶｂ層由来の 1 層とⅥｂ層由来の下層に分かれる。炭化物は両者に混入している。出土遺物はない。

SK812（図版 183） 61A23 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。半截時に若干掘り過ぎているものの、断面形に凹凸がある。長径 1.04m、短径 0.81m、深さ 0.20m を測る。覆土は 2 層に分層したが、総じて炭化物が少量混入する粘性を帯びた灰オリーブ色土である。1 層ではＶｂ層土が少なく、2 層では主体を占めるまでに多く混入する。出土遺物はない。

SK813（図版 183） 61A19 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は半円状で、底面は擂鉢状を呈す。長径 1.04m、短径 1.04m、深さ 0.26m を測る。覆土は 2 層に分層でき、1 層はＶｂ層土と炭化物が多く混入する粘性のない灰色シルト、2 層は強い粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。出土遺物はない。

SK814（図版 183） 61A14 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。底面は平坦である。長径 0.59m、短径 0.52m、深さ 0.08m を測る。覆土はＶｂ層土と炭化物が多く混入する粘性を帯びた灰色シルトの単層である。農道部分からの検出であり、農道造成時の工事によって上端が削平されていると思われる。出土遺物はない。

SK815（図版 183） 61A8・9 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は弧状を呈す。底面は平坦である。長径 0.88m、短径 0.58m、深さ 0.16m を測る。覆土は 2 層に分層した。1 層はＶｂ層土と炭化物が多く混入する粘性を帯びた灰色シルト、2 層は鉱物が蓄積し、粘性を帯びた灰色シルトである。農道部分からの検出であり、農道造成工事により上端が削平されていると思われる。出土遺物はない。

SK817（図版 183）　61B2･7 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈す。底面は平坦である。長径 0.78m、短径 0.68m、深さ 0.12m を測る。覆土はⅤｂ層土と炭化物が混入する粘性を帯びた灰色シルトの単層である。調査開始時に機械的に入れた確認トレンチにより遺構南端部が壊されている。また、現代の農道部分からの検出であり、農道造成工事により上端が削平されていると思われる。出土遺物はない。

SK831（図版 183・336）　63D12・13・17・18 に位置する。平面形は長方形、断面形は台形状で、溝が東辺に付く方形土坑である。溝は 1.3m と短く、確認面、土層観察では本遺構との切り合い関係は見られなかった。長径 2.62m、短径 2.12m、深さ 0.53m を測る。底面は平坦で壁面は緩く立ち上がる。覆土は 5 層に分層した。上層は地山のⅤｂ層に類似し、4 層には多量の炭化物が混入する。2・3 層はⅥｂ層土で粘性に富む土層になっている。遺物は出土していない。本遺構は東西の道路 SF799 上にあって、溝の走行もこの道路に並行している。調査中は降雨の度に南側の調査区からの雨水が流れ込み、度々水没した。溝が短い理由はこの辺にあったのかもしれないが、そうだとしても、隣接して北には水田が広がっており、貯水のためのものかどうかは疑問が残る。出土遺物はない。

SK853（図版 184）　62C2 グリッドに位置する。SD846 に切られる。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈す。壁面、底面は平滑である。長径 1.28m、短径 0.96m、深さ 0.22m を測る。覆土はⅣｂ層土、Ⅴ層土が堆積する。出土遺物はない。

SK854（図版 184）　60E8 グリッドに位置する。西側が開渠によって破壊されているため全容は不明である。断面形は台形状である。壁面、底面は平滑である。深さ 0.94m を測る。覆土はⅤｂ層土が堆積する。出土遺物はない。

SK872（図版 184）　60E4・5 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は半円状を呈す。底面は平坦である。短径 1.00m、深さ 0.39m を測る。覆土はⅤｂ層土が堆積する。SD855 と隣接しているが、切り合い関係はない。SE601 に切られる。出土遺物はない。

ｄ　溝・道路（図版 33・34・184 ～ 187・336 ～ 341）

SD1（図版 33・184・336）　59C ～ 62B グリッドにかけて 33.87m にわたり伸びる。断面形は弧状で、深さは 7cm と浅い。覆土はオリーブ黒色シルトの単層である。59C グリッドで SD266・SD568 が直行し、これを切る。62B グリッドで SD849 に切られる。SD849 は H 区水田と G 区居住域の間を東西に区切る道路遺構の側溝に当たる。出土遺物はない。G 区掘立柱建物集中域の東辺から約 3.5m のところを並行して走るので、区画溝であったと考える。

SD10（図版 34・184・337）　60B11 ～ 13 グリッドにわたって検出し、南端は自然消滅する。断面形は浅い弧状を呈すが、底面は部分的に凹凸があり不整である。主軸方位は N–19°–E を測る。規模は、延長 3.04m、最大幅 0.28m、深さ 0.04m を測る。覆土は単層、周囲のピット覆土上層と同様、オリーブ黒色砂質土であるが、炭化物を比較的多く含む。SK5、P470・P475 に切られる。また、SB881・SB882・SB883・SB884・SB885 と並行し、その関連性をうかがわせるが、情報が少なく、性格の特定には至らない。出土遺物はない。

SD53（図版 34・184・337）　60B2・3 グリッドに位置する。断面形は弧状を呈し、底面はおおよそ平坦だが、部分的に凹凸がある。平面形は直進せずにクランクがあるため不整形を呈する。主軸方位は N–7°–E を測る。規模は、延長 2.86m、最大幅 0.54m、深さ 0.12m を測る。覆土は 2 層に分層した。周囲の

ピット覆土上層と同様、オリーブ黒色土である。上層は、SD10 と同様に炭化物を多量に含む。P270・SB881–P481 を切る。また、SB883・SB885 とおおよそ並行し、その関連性をうかがわせるが、不整形のために、区画溝のような性格を断定するには至らない。出土遺物はない。

SD76（図版 34・184・337） 60A15・20 グリッドに位置するが、北端はトレンチ内で収束する。主軸方位は N–10°–E を測る。規模は、延長 1.5m、最大幅 0.61m、深さ 0.08m を測る。覆土は単層、ごく浅い上に、検出面であるＶｂ層の灰オリーブ色土で覆われるために掘り込みは不明瞭である。断面形は弧状を呈し、底面はトレンチ及び掘り過ぎのため不明確だが、おおよそ平坦であろうと思われる。P562・P738 を切る。出土遺物はない。

SD160（図版 34 ・ 184 ・ 337） 59B3 ・ 8 グリッドに位置する。規模は、延長 1.78m、最大幅 0.48m、深さ 0.08m を測る。覆土は単層、周囲のピット覆土上層と同様、オリーブ黒色砂質土である。断面形はおおむね台形状を呈し、底面はトレンチ及び掘り過ぎのため不明確だが、おおよそ平坦であろうと思われる。遺物は出土せず、重複遺構はない。主軸方位は N–80°–W を測る。同遺構を境に、南側へはピット群の広がりが急激に希薄になることから、区画溝の性格を持たせることも考慮されたが、確証になるものは得られなかった。また、近隣の SX119・SK118 などとの組み合せによる塀の可能性も考慮したが、精査中に布掘りピットの痕跡は検出されず､底面にもピットがなかったため断定を避ける。出土遺物はない。

SD266（図版 33・184・337） 59B・C グリッドにおいて東西 13.88m にわたり伸びる。西端部で北へ曲がる。東端は SK595 の西縁辺中央に接続している。覆土掘削時に土坑と当該遺構との切り合いを確認するために土層観察を行ったが、両者に切り合いは認められなかった。この種の土坑と溝が接続するものは E 区居住域にもあり、溝による土坑への引水の可能性があるが、この種の土坑に水が滞水している状況はない。底面は平坦ではなく所々に深い部分がある。後述する SD513・519・629 は別名称が付けてあるが、これらの溝は断続的に検出され、東西、南北方向に折れ曲がっているが、一連の溝として同時に存在していたものと考えられよう。また、これらの溝と溝との間は意図的に、掘削を行わなかった可能性があり、その部分は出入り口や通路部分に当たっていた可能性がある。

SD313（図版 33・184・338） 59B6・11 グリッドに位置する。規模は、延長 2.84m、最大幅 0.5m、深さ 0.08m を測る。覆土は 2 層に分層した。大部分を灰オリーブ色シルトが占める。断面形はおおむね弧状を呈し、底面はトレンチ及び掘り過ぎのため不明確だが、おおよそ平坦であろうと思われる。主軸方位は N–60°–W を測る。重複する遺構はない。遺物は珠洲焼片（197）が 1 点出土した。同遺構を境に、南側へはピット群の広がりがなくなり、数基が散在するのみにまで激減することから、小規模ながらも区画溝の性格を持たせることが可能である。

SD408（図版 33・184） 59D グリッドを南北 6.20m にわたり伸びる。深さ 0.06m、幅が 1m 前後、断面形はレンズ状の浅い溝である。溝の北側先端は二方向に枝分かれしており地山との境界は不明瞭になっている。底面はやや硬化している。この溝の確認面とほぼ同じレベルで小石や土器片が出土している。上層部は土地改良によって削平されていることを考慮すると、硬化面があること、周囲の溝の走行などから、道路状遺構の底面の可能性がある。

SD409（図版 33・184・338） 57E ～ 59D グリッドにかけて 22.6m にわたり伸びる。北端は SD513 の手前 2m のところで止まっており、南は試掘トレンチ内で止まっている。幅は 0.48m で断面形は南側で V 字形を呈する。底面にはところどころに扁平な河原石が出土している。これらの河原石は 2 個 1 対で 4 組検出され、意図的に配されているように見えるが、断面観察からはこの石が根石のように使われてい

るようには見られなかった。SD629 と並行して南北に走行しているが、北端部で、SD513 にぶつかるのを意識して避けているようで、端部を西に湾曲させている。

SD468（図版 34・184・338）　60A19・24・25、60B5 グリッドに位置する。規模は、延長 5.23m、最大幅 0.24m、深さ 0.08m を測る。覆土は単層、遺構確認面のⅤｂ層土に近似する灰オリーブ色シルトが入る。断面形は浅い弧状を呈し、底面は 60A19 グリッドでくぼみが 1 か所見られるほかは平坦である。主軸方位は N–88°–W を測る。出土遺物はない。P386 に切られる。

SD511（図版 33・184）　59・60E グリッドにおいて 0.78m を検出したが、本来は北へ続き、SD585 に連続したと推定する。断面の形は弧状で、幅は一様、深さは 4 ～ 8cm で浅く比較的高低差はないが、北側の延長上の SD585 とつながるものとすれば、流れは南方向から北方向に流れるものと見られる。溝底面は平坦である。覆土はⅤｂ層土で埋まっている。出土遺物はない。

SD513（図版 33・184・338・339）　59D グリッドにおいて東西に 8.5m にわたり伸びる。南端は SD519 につながるように湾曲し、一方の北端は SD809 とつながるようにも見えるが、西に存在する SD266 との関連も考えられる。断面は台形状、Ｖ字状の部分があり、幅は一様ではなく 0.3 ～ 0.6m とやや振幅がある。溝底面も凹凸があり、全体としては東側に傾斜するが、中央部が最も深い。覆土はⅤｂ層土で埋まっているが、中央部には炭化物、焼土が集中して混入している部分がある。また、断面の観察から何度か掘り直された可能性が強く、これが底面の凹凸や溝幅の振幅に関連している原因と見られる。遺物は珠洲焼片（197）、砥石（326）、磨石類（78）が検出面から出土したが、覆土中からは出土していない。

SD519（図版 33・184）　59D・E グリッドにわたり南北に伸びる。長さは 2.1m と短く、深さも 0.08m と浅い。断面の形は弧状で、幅 0.4 ～ 0.7m であるが、ほぼ一定である。底面は硬化しており、凹凸があるものの高低差はない。覆土は硬化した小砂礫を含むⅤｂ層土で、道路遺構として捉えられるものである。並行して SD409 が走る。出土遺物はない。

SD520（図版 33・184）　59・60E グリッドにおいて 9.4m にわたり伸びる。南端は SD630 に連続する。断面の形はレンズ状で、幅は凹凸がある。底面のレベルは南端と北端では差がない。底面は凹凸があるものの深さは 3 ～ 4cm と浅い。覆土はⅤｂ層土であるが、小砂礫が多く含まれている。SD519 と同じように道路遺構である。出土遺物はない。

SD568　59C・60C グリッドにわたって検出した東西方向の溝で、長さは 4.4m である。断面の形は弧状で、幅は 0.25 ～ 0.47m で中央部がややくびれた形である。深さは 0.3 ～ 0.47m で底面は凹凸があり、比較的高低差がある。覆土はⅥｂ層土で埋まってるいが、上層には粒子の細かい多量の炭化物が混入している。SD1 に切られる。出土遺物はない。

SD584（図版 33・184）　61E グリッドにおいて 7.10m にわたり伸びる。東西方向の溝で、東側は調査区外に伸びる。断面の形は弧状で、幅は多少の凹凸があるもののほぼ同じで、直線的に掘られている。深さは 0.1 ～ 0.14m で浅く、平坦である。底面のレベルからは流れの方向は分からない。覆土はⅤｂ層土で埋まっている。出土遺物はない。

SD585（図版 33・184・339）　60 ～ 62D グリッドにわたって検出した南北方向の溝である。SD511 を加えると、位置は離れているが 60 ～ 62 グリッドにある SD1 と同規模で、走行方向はほぼ平行する。北端では走行方向を東に変え、SD802 に切られている。この湾曲点は SF799 の伸長上に当たり、関連性をうかがわせる。

断面の形は台形状で、幅はほぼ一様、南端と北端では差がある。深さは浅く、深いところでも 0.24m

しかない。底面は平坦で、レベルは14.6m前後でほぼ一定している。南側でSE648に切られているが、SE648の前後で直線的であった走行が微妙に方向を変え、井戸に流れ込むように見えることから、SE648は同時期もしくは、井戸が埋まっていく過程で機能していたものと考える。また、同じグリッドにある南北方向に伸びるSA897・898とは走行方向が若干異なり、時期相違をうかがわせる。覆土はⅥb層土で埋まっているが、一部にⅤb層が載っている。出土遺物はない。

SD629（図版33・184・338・339）　57・58Eグリッドにおいて13.5mにわたって伸びる。SD409と並行する南北方向の溝である。南端はトレンチで切られているが、地山が南側に緩く傾斜していることから、SD409と同じように自然に消滅していったものと考える。北側の伸長先には同様の幅を持つSD519・SD513があり、SD409との直接な関係はないものの意識して掘られたものと見られる。断面の形は弧状で、幅は0.45m前後で、深さは約0.1mで浅く、底面は平坦である。覆土はⅤb'層土で埋まっている。遺物は珠洲焼中甕（190c）が出土した。

SD630（図版33・184・338・339）　57・58Eグリッドに位置する。南北10.22mにわたって断続的に伸び、59EグリッドでSD520に連続する。断面形は弧状で、幅は凹凸がある。底面にも浅い凹凸がある。SD520と同様に道路遺構の一部と考える。覆土はⅤb'層土で埋まっているが、小砂礫が混入している。溝の走行方向はSD409・SD585とも異なっており、時期の相違によるものと考える。

SD675（図版33・185・339）　60Dグリッドで検出した南北方向の溝である。長さは3.65mと短い。断面は台形状になっている。幅は一様で0.4m、深さは0.5m前後で南端と北端では差がなく、高低差はない。溝底面は平坦である。覆土はⅤb'層土で埋まっている。遺物は短刀？1点（253）、鍛冶滓が出土した。

SD802（図版33・185・340）　62・63D・Eグリッドにわたって検出した東西方向の溝で、SD851に並行する。東側は調査区外に伸びる。断面の形は弧状で、幅は西側で広く東に行くにつれて細くなる。底面のレベルは西端と東端では高低差がなく、標高14.5m前後である。浅く0.02～0.12mである。上層からは近世の陶磁器が出土することから近世の遺構と考えられたが、この上層は現代の農道両脇のコンクリート製U字溝及びその掘形に攪乱されているため、近世の遺構とは断定できなかった。また、西端では西のSD846・848・849と対峙して本遺構と、SD827・585が端部となっており、これに対応するようにSA897・898が伸びてくることから、本遺構もこれらの中世遺構に属するものとして考えた。覆土はⅥb層土で砂質であるが、色調はオリーブ黒色で腐植土性が強い。遺物は上層から珠洲焼片、近世陶磁器、砥石等が出土した。

SD803（図版33・185・340）　63Cグリッドにおいて東西5.64mにわたり伸びる。断面の形は弧状で、幅は一様で、直線的である。深さは0.10mとごく浅い。水田801に平行して走行する東西方向の溝であるが、西部にあるSF799の延長上にある、道路遺構の一部として捉えることもできる。溝底面は平坦である。覆土はⅤb'層由来土であるが、砂質分が多い。出土遺物はない。

SD809（図版33・185）　59・60Dグリッドにおいて南北3.84mにわたり伸びる。東側にあるSD675と2mの距離をおいて対応する。この位置関係は南に位置するSD266・SD513の間隔があることと示唆的である。断面の形は弧状で、幅は一様、深さは浅く0.06m前後で浅い。覆土はⅥb層土で埋まっている。出土遺物はない。

SD810（図版33・185・340）　63Eグリッドにおいて東西4.9mにわたり伸びる。断面の形は弧状で、幅は凹凸があり、くの字状に湾曲し東側は調査区外に出る。深さは0.01～0.07mでごく浅く、東端と西端では高低差はない。SF799道路状遺構の延長上にあり、本遺構もこの範疇に属するものと考える。溝

底面は多少の凹凸があるがおおむね平坦である。覆土はⅤ b' 層土で埋まっている。出土遺物はない。

SD827（図版 33・185・340）　63D グリッドにわたって検出した東西方向の溝で、南から北に緩く傾く斜面上にある。東端は SD847 に連続すると考える。断面形は台形状で、幅は一定ではない。深さは 0.10m 前後で、西端と東端では 0.1m の落差があり、東から西へ流れていたものと思われる。覆土はⅤ b' 層土で埋まっているが、砂質である。SD802 に切られ、SD845 を切る。最上層から珠洲焼片口鉢片（205）が出土し、E 区居住域 SK1484 の 1 層出土破片と接合する。

SD845（図版 33・340）　63D グリッドにわたって検出された 6.00m の東西方向の溝で、南から北に傾く斜面上にある。SD802、SD827 に切られる。断面形は台形状で、幅は凹凸があり、湾曲している。深さは 0.06 ～ 0.22m で比較的高低差がある。流れは南端と北端では地形と同じように 10cm の落差があることから、南方向から北方向に流れていたものと思われる。溝底面は比較的凹凸がある。覆土はⅤ b' 層土で埋まっている。出土遺物はない。

SD846（図版 33・185・340）　62C グリッドにおいて、東西 8.96m に伸びる。南から北へ緩く傾斜する斜面を横断するような形に配置されている。断面の形は弧状で、幅は凹凸があり、東西両端を北へ湾曲させる。深さは 0.07 ～ 0.12m で浅く凹凸があるが、流れは東西両端から北の低い部分に流れていたと推定する。溝底面には上端とは輪郭が異なる直線状の掘形が見え、SF799 の南端は本遺構と東にある SD802 を結んだ線上である可能性がある。覆土はⅤ b' 層土で埋まっている。SK853 を切る。出土遺物はない。

SD847（図版 33・340）　63D・E グリッドに位置する。断面は弧状で SD802、845 に切られる。位置と形状から SD827 につながっていた可能性がある。幅は凹凸があり、深さは 0.05m で浅い。

SD848（図版 33・185・340）　62C グリッドに位置する。SD846 と並行する東西方向の溝で、ほぼ同じ規模で、形状も両端部が湾曲しており、幅は少し狭いが、よく似ている。断面は弧状、底面は落差はないが凹凸がある。底面のレベルは東西でほぼ同じになっている。覆土はⅤ b' 層土であるが、砂質分が強い。出土遺物はない。

SD849（図版 33・185・341）　61A、62A ～ C グリッドにおいて東西 26.25m にわたり伸びる。SF799 の南側にあって、G 区居住域とを画する溝となっている。溝幅は凹凸があるが西側半分は一定で、直線状であるが、東半分ではやや弓なりに湾曲し、幅も 0.41 ～ 1.19m となっている。また西側では底面の凹凸が著しく、浅いピットが連続してあるように見える。東側半分は凹凸もあるが、比較的平坦になっている。覆土はⅤ b' 層土で埋まっているが、小砂礫のほか、直径 10cm 大の礫が入る。出土遺物はない。

SD850（図版 33・186・341）　62A・B・C グリッドにわたる東西方向の溝である。SD849 の北側に位置し並行する。中央部を試掘トレンチで削平されているが、中央ベルト付近で湾曲した形で検出した。SF799–P7 に切られることから、SF799 の中では古い時期のものである。幅は SD849 よりやや広く、凹凸がある。底面は浅く 0.1 ～ 0.18m で凹凸が見られる。道路状遺構の一部と考える。覆土はVb' 層土で、遺物は出土していない。

SD851（図版 33・185・340）　63D・E、64E グリッドにおいて東西 17.36m にわたり伸びる。SF799 の東延長上にある。北側は H 区水田域になっており、水田 805、853 に切られている。西端は SD802、827 と同じところで消滅し、東側は調査区外に出る。断面形は台形状で、底面は平坦である。平面形は大きく弓なりに湾曲しているが、幅は一定である。深さは 0.12 ～ 0.19m で底面の西端と東端では差がない。覆土はⅥ層土で埋まっている。この付近の地山はⅥ層に近いシルト質で、雨水などによりすぐに埋まってしまったものと思われる。出土遺物はない。

SD855（図版 33・185） 60E グリッドにあって、南端を開渠に破壊されている。北端は SE648 に接しているが切り合い関係はない。断面の形は弧状で、底面は平坦で落差はない。覆土はＶ b' 層土で埋まっている。出土遺物はない。

SF799（図版 33・187・341） 61・62A・62B グリッドにおいて東西 12m にわたり波板状に小土坑が連続する。南に平行する SD849 や SD850 は道路側溝で SF799 と一体の施設だろう。

e　性格不明遺構（図版 185・341）

SX93（図版 185） 60A3・8 グリッドに位置する。短い溝状を呈するが、上端を掘り飛ばしたためにごく浅い完掘状況となっている。覆土はＶ b 層土と炭化物を含み、しまりのあるオリーブ黒色シルトの単層である。遺物は出土せず、性格不明である。

SX119（図版 185・341） 59B13 グリッドに位置する。SX122 と重複する北部が浅く、断面観察した南東部が深い、不整形な平面形の遺構である。覆土は 2 層に分層でき、1 層はＶ b 層土と炭化物を少量含むオリーブ黒色シルト、2 層はＶ b 層土が主体を占める粘性を帯びた灰オリーブ色粘土である。SX122 を切る。遺物は出土せず、性格不明である。

SX122（図版 185） 59B13・14 グリッドに位置する。浅い弧状の断面形を呈し、南側に張り出しを持つ不整形な平面形の遺構である。覆土はＶ b 層土と炭化物を含む粘性を帯びた灰オリーブ色シルトの単層である。SX119 に切られる。遺物は 1 層から珠洲焼甕片（190c）が 1 点出土した。

SX225（図版 185） 59A9 グリッドに位置する。東から西へ向かってなだらかに傾斜する底面を持つ溝状の遺構であるが、溝とするには短いので SX 扱いとした。覆土は 5 層に分層した。1 層は隣接の SE226 と同様のⅡ層落ち込み土、2 層はしまりのあるⅡ層由来土、3 層はＶ b 層が多量に混入して粘性を帯びたオリーブ黒色シルト、4 層はやや大粒の炭化物が混入したオリーブ黒色シルト、5 層はＶ b 層が多量に混入して粘性を帯びたオリーブ黒色シルトである。SE226 を切る。遺物は出土せず、性格不明である。

SX234（図版 185） 59A12・13 グリッドに位置する。弧状の断面形とおおよそ平坦な底面を持つ遺構である。覆土はＶ b 層土と炭化物を含み、しまりのあるオリーブ黒色シルトの単層である。P427・SX343 を切る。遺物は 1 層から珠洲焼片口鉢片（194）が出土した。

SX236（図版 185） 59A12・17 グリッドに位置する。トレンチのためにやや不明確だが、凹凸のある底面と不整な平面形を持つ遺構である。覆土は 2 層に分層した。1 層はＶ b 層土と炭化物を少量含むオリーブ黒色シルト、2 層はＶ b 層土が多く混入し、粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。遺物は出土せず、性格不明である。

SX249（図版 185） 59B12・13 グリッドに位置する。トレンチのためにやや不明確だが、擂鉢状の底面と楕円形の平面形を持つ遺構である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化物を少量含む粘性を帯びた灰オリーブ色シルト、2 層はＶ b 層土が多く混入し、粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。遺物は出土せず、性格不明である。

SX259（図版 185・341） 59A5 グリッドに位置する。おおよそ平坦な底面と、東側に膨らんだ平面形を持つ遺構である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化物を少量含む粘性を帯びたオリーブ黒色シルト、2 層は炭化物がわずかに混入し、粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。遺物は出土せず、性格不明である。

SX343（図版 185） 59A12・13 グリッドに位置する。浅いながらもおおよそ平坦な底面で、南北に広がりを持つ遺構である。覆土は 2 層に分層した。1 層はＶ b 層土を多量に含み、粘性を帯びた灰オリーブ

色シルト、2 層は炭化物がわずかに混入し、1 層よりもやや色調が明るく、粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。SX234 に切られる。遺物は出土せず、性格不明である。

SX498（図版 185）　60A23・24、60B4 グリッドに位置する。浅いながらも、東西に弧状の広がりを持つ遺構である。覆土は 2 層に分層した。1 層は炭化物を少量含み、粘性のない砂質の灰オリーブ色砂質土、2 層は炭化物がわずかに混入し、粘性を帯びた灰オリーブ色シルトである。P499・P566 を切る。底面から焼けた円礫が出土したが、遺構の性格を推定する遺物にはならなかった。溝とも土坑ともとれず、性格は不明である。

SX608　58D4・9 グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。覆土はⅤb' 層土の単層である。出土遺物はない。

SX678　60・61C グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。壁面、底面とも凹凸がある。覆土は上層がⅤb' 層土、下層はⅥ層土が堆積する。形状から倒木、もしくは木根と思われる。遺物は出土しなかった。

SX700　60C グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。壁面、底面とも凹凸がある。覆土は上層に褐鉄鉱を多く含むⅤb' 層土、下層はⅥb 層土が堆積する。形状から倒木、もしくは木根と思われる。出土遺物はない。

SX701　61D2･7 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は台形状である。覆土はⅤb' 層土である。形状から倒木、もしくは木根と思われる。出土遺物はない。

SX723　61C21、61D1 グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は台形状である。覆土はⅤb' 層土である。形状から倒木、もしくは木根と思われる。出土遺物はない。

SX797　62A グリッドに位置する。平面形は不整形で、断面形は弧状である。SF799–P8･9 に切られる。底面は多少凹凸がある。覆土はⅤb' 層土の単層である。遺物は出土しなかった。

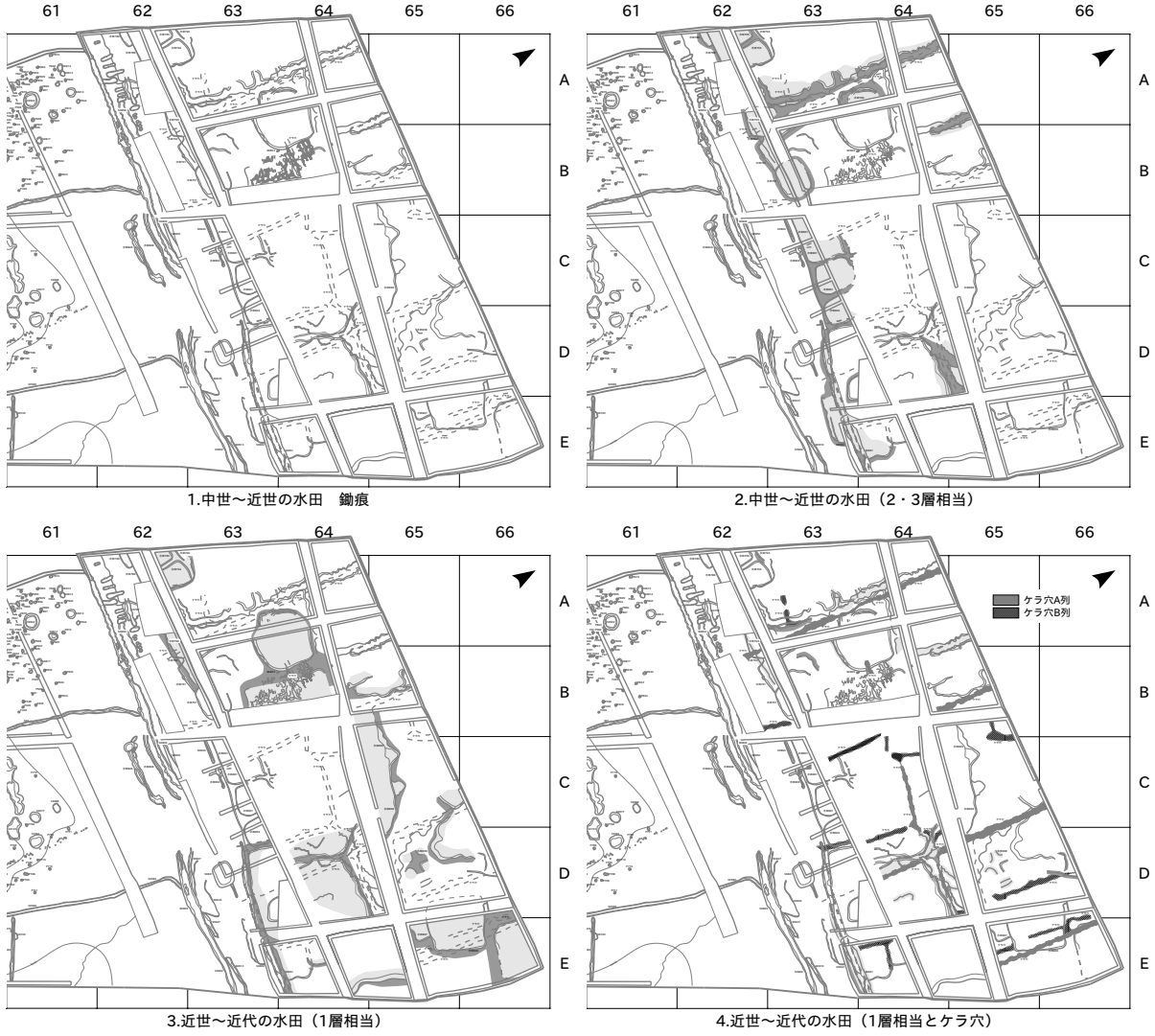
11）H 区水田域（図版 34・166・186 ～ 190・342 ～ 346）

a　概　　要

H 区では水田と G 区集落との境となる道路を検出した。調査着手当初は遺構の存在しない湿地という認識をしていた。しかし、土層を観察するとⅤb 層（地山）とその上位の層の境界が水平堆積ではなく、所々に攪拌されたような状況があることに気付いた。そこで、これを水田耕作による攪拌の痕跡の可能性があると考え、土層や平面の検出状況の検討を行った。その結果、セクションにおいては攪拌の痕跡だけではなく、「擬似畦畔 B」［仙台市教委 1987］も認識することができた（第 15 図）。目が慣れてくると平面的にも畦畔を識別できるようになってきた。ただし、地山と耕作土は色調が異なることで容易に区別できるが、耕作土間の分層は色調では漸移している場合が多く、砂やシルト等の粒子による視覚的な分層ができる所は少なかった。このため耕作土間の分層に際しては、この粒子の微妙な変化を移植ごてや鎌等で土層観察ベルト壁面をなぞることで、感覚的に行った部分も多い。

上記のような経過を踏まえて H 区を水田として調査し、中世、中世～近世、近世～近代のおおむね 3 時期の水田を識別した。

堆積土が非常に似通った土であったため、セクション・平面ともに検出は困難を極めた。そのため、各時期の水田の識別は現地での認識を優先しながらも、整理作業時にセクション図・平面図・遺物出土状況等を再検討した結果を報告する。



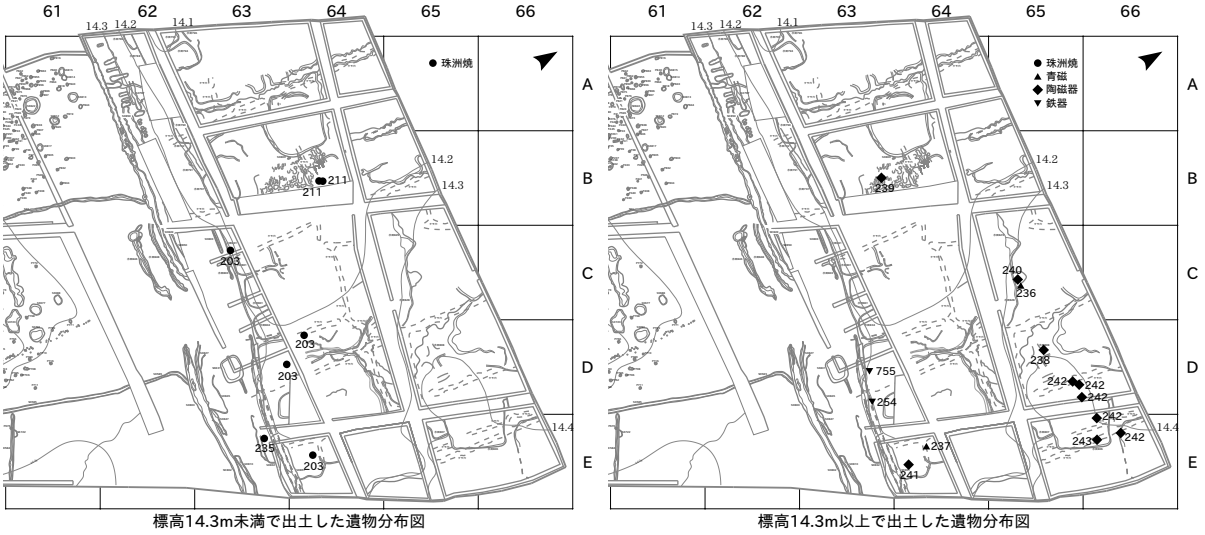
1.中世～近世の水田　鋤痕

2.中世～近世の水田（2・3層相当）

3.近世～近代の水田（1層相当）

4.近世～近代の水田（1層相当とケラ穴）

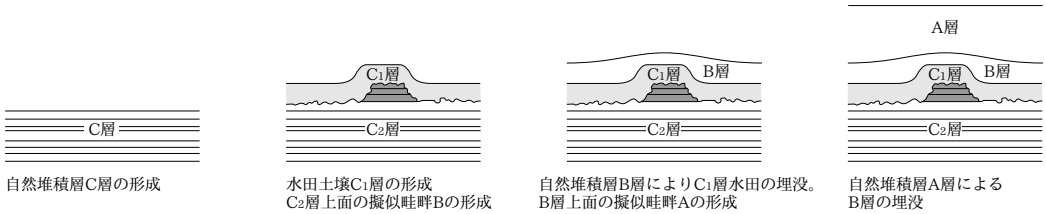
第 13 図　H 区水田変遷図（S=1：800）



標高14.3m未満で出土した遺物分布図

標高14.3m以上で出土した遺物分布図

第 14 図　H 区遺物平面分布図（S=1：800　番号は掲載遺物番号）



第 15 図　畦畔・擬似畦畔模式図（『富沢 - 富沢遺跡第 15 次発掘調査報告書』［斎野ほか 1987］p.91-92 を改変）

Ｈ区は土層観察ベルトで生じた区画ごとにＡ～Ｌブロックと呼称し、記録もこれに従って作成した。したがって、報告書に掲載する図面等もこれを踏襲する。

b　水田耕作土の識別

Ｈ区における土層は以下のように区分した。

Ｉ層：灰オリーブ色を基調とする層。調査着手前は水田だったので、近・現代の水田耕作土である。色調の違いで細分したが、各層の下部には褐鉄鉱が凝結している。Ｉａ層は現代、Ｉｂ・Ｉｃ層は近現代に相当する。

水田１層：オリーブ黒色を基調とする、近世～近代の水田耕作土。5 層程度に細分されるが、Ｖｂ層との攪拌層を 1b 層、それ以外は 1a 層として一括した。基本的には同じ層が長く続き、安定した水田耕作がおこなわれていたと推定する。その一方で、調査区西側のＧ～Ｆブロックにかけては層がこま切れとなり、東から西へ緩やかに流れ込むような堆積が重層している。この部分については短期間に土砂の移動があったと推定され、一時水田耕作をしていない時期があったと考える。

水田２層：オリーブ褐色土を基調とする、中世～近世の水田耕作土。Ｖｂ層との攪拌層を 2b 層、それ以外は 2a 層として一括した。

水田３層：灰色土を基調とする、中世の水田耕作土。Ｖｂ層との攪拌層を 3b 層、それ以外は 3a 層として一括した。

擬似畦畔Ｂ：仙台市富沢遺跡の分類に従って認識した（第 15 図）。「模式図では C_1 層が水田土壌であり、C_1 層上面において水田耕作が行われており他層は自然堆積層である。また C_1 層はＣ層最上部が水田土壌化された層であり[1]、C_2 層は水田土壌化されなかったＣ層である。「擬似畦畔Ｂ」とは、「C_1 層水田の畦畔直下に認められる C_2 層上面の畦畔上の高まりをいう。これは C_1 層水田の耕作の影響をさほど受けない畦畔直下において C_2 層上面が畦畔状に残存したものである。この擬似畦畔Ｂについては、C_1 層上面において畦畔が検出されなくとも C_2 層上面での擬似畦畔Ｂの検出により C_1 層水田の存在が想定される。」［斎野ほか 1987］

現地での分層作業等はこの擬似畦畔Ｂを認識することを重点的に実施した。セクション図には「擬畦Ｂ」として位置を表示した。古渡路遺跡で検出された擬似畦畔Ｂの多くは中世の水田耕作に伴うと推定するが、標高の高い北東側においては、近世以降の可能性が高い。

ケラ穴：平面観察をしていると、直径 1cm 程度の黒色や灰色の円形の染みが列状に検出される場所が複数あった。当初は何の痕跡か分からなかったが、農業を営んでいる作業員から「ケラが水を避けて田んぼのアゼに顔を出すから、ケラ穴があるところはアゼの跡だろう」という話がでた。そのような目で見る

1）　第 15 図の C_1 層で水田耕作土と畦畔が一連であるのは、水田耕作土を畦畔に盛ったため、C_2 層の攪拌土という点で両者を区別できない、という認識による（仙台市教育委員会荒井格氏ご教示）。

と、ちょうど畦畔のようにも見えた。そしてセクションでも、ケラ穴が縦に残る部分と畦畔と思しき堆積のところが一致する例が複数確認できた。そこで、ケラ穴についても水田耕作関係の痕跡として記録することにした（図版 189・343・345）。

ケラ類はコオロギの仲間で、水田や畑に生息する。植物根やミミズなどの昆虫類を捕食するための横穴と、巣との往来のための縦穴を掘るとされている。ケラ穴列に見られたケラ穴は円形であることから、巣に行き来するための縦穴とみなせる。もし、横穴が検出されればそれは畦畔の上層部に当たり、畦畔が遺存していることを示している可能性が高いが、縦穴が検出されることは畦畔の上部は既になく、その下部に当たるか、存在していた位置を示していることになる。

c 地　　形

調査終了時の地形を見ると、ちょうど現代の農道跡地北側に沿う形で浅い谷が走っていたことが分かる。谷は東から西へ向かって、標高 14.3m から 14.1m へ緩やかに下る。最も低いのは 62A4 グリッド付近である。谷の北東側（65・66D・E グリッド周辺）は 14.4m の微高地になっている。

d 遺　　物（第 14 図）

時期の推定ができる遺物には中世の珠洲焼、近世の陶磁器類がある。珠洲焼には珠洲Ⅱ期（235 ／ 13 世紀前半）、Ⅳ期（190a）、珠洲Ⅴ期（211 ／ 14 世紀後半～ 15 世紀前半）がある。近世陶磁器には越前焼（239 ／ 16 世紀？）、瀬戸・美濃焼（241 ／ 16 世紀？）、唐津焼（242・243 ／ 17 世紀前半）がある。第 14 図に遺物平面分布図を示した。谷に沿った部分に珠洲焼、つまり中世の遺物が、谷の北東側の高い部分に近世陶磁器がまとまっている様子が分かる。標高では、14.3m を境に低い部分から中世、高い部分から近世以降が出土している傾向が見られる。標高 14.3m は水田 2 層と 3 層の境界付近に当たることから、水田 3 層が中世、水田 2 層以上が近世以降の影響を受けていることを示す。

上記のほか、水田 805 では刀子（254）が出土した。

e 変　　遷（第 13 図）

（1）中世～近世

水田 3 層を耕作土とする水田は谷底に沿って連続する。遺存状況が悪いので正確な規模・規格・施設は不明だが、一辺が 3.5m 前後の方形をしていたようである。水田地帯と G 区居住域を区画するように側溝のある道路 SF799 が敷設されている。63D・E グリッドでは水田と SF799 が接し、一部は道路側溝の SD851 を切ることから、水田と道路の位置が南北に一進一退し、固定したものではなかったと考える。

「セクション図 F–3」左側の擬似畦畔 B は、F ブロックを南北に横切り A ブロックに続き、「セクション図 A–2」中央の擬似畦畔 B へ至る。同様に検出された B ブロックの擬似畦畔 B も中世の所産と考える。64D グリッドで中世とした水田は「セクション図 H–1」において水田 3 層とともに擬似畦畔 B が存在すること、標高が 14.3m 未満であることから中世に含めた。

第 13 図に示した「中世～近世の水田」の多くは立地・標高・遺物分布・規模から見て中世に属すると考える。しかし、調査段階で水田 2 層と水田 3 層の時期差を認識しておらず、いずれも中世とみなして平面図を作成した。このため両者を平面図上で厳密に区別できない。そこで両者を合わせて図示した。

鋤痕　63・64B グリッドでは中世の水田耕作土 3b 層完掘後、Ⅴb 層上面に断続的に十字状に褐色を帯

びた鋤痕または鍬痕（以下、鋤痕）を検出した（図版 344・345）。畦畔との新旧関係は不明だが、水田 910 よりも古い。鋤痕 1 本の幅は 8 ～ 22cm、深さは検出面から 10cm 前後で、断面形は逆三角形を呈する。走行方向は南北方向と、これに直行する東西方向に分かれており、間隔は 20 ～ 30cm でほぼ等間隔である。図版 188 では鋤で起こされて行く方向を→で示した。

検出した深さはそれほど深くないが、これは上部が後の耕作により削平されているので、本来の鋤起こされた深さより浅くなったためと推定される。また、田起こしとすれば、人や牛馬等の足跡も検出されてもよいものと思われるが、これらは検出されなかった。その理由としては、この鋤痕が水田耕作に伴うものではなく、畑作に伴うものであったということが考えられる。つまり、畑作では鋤が耕す深さまで人や牛馬の足がめり込むことがなく、上部は後世の耕作で削平されてしまい、深く鋤かれた部分だけが残ったという解釈である。壁面 G–2 においてプラント･オパール分析を実施した（第Ⅵ章）。この結果、最下層の「試料名：水田 3 層」において検出されたプラント・オパールが「同：水田 1・2 層」より少ないことの理由の一つになるとも考えられる。すなわち、開発当初は畑であり、のちに水田に変化した、という解釈である。

植物遺体　水田 791 底面において、小枝が敷かれたような状態で検出された（図版 346）。畦畔とは位置が一致しない。用途不明。

（2）近世～近代（1 層相当）

水田 1 層を耕作土とする水田は、H 区全域にわたって検出した。検出作業では、水田 1a 層を除去した後、Ⅴb 層より暗い部分として見え、耕作に伴う攪拌によるⅤb 層粒子の点在が確認できる範囲（水田 1b 層）を水田範囲とした。遺存状況は悪く規格的な平面形は見出し難いが、状態の良いものでは方形（水田 806・910）を呈する。1 枚の田面の大きさは 1 辺が約 6m 前後と推定される。中世の倍の大きさである。C ブロックの水田 828 と水田 829 の境は不明瞭であるが、水田 829 とした部分の標高が若干低い。北辺にはⅤ字状の突起状の緩く立ち上がる部分があり、水口の可能性があるが、断定できない。水田 828・水田 829 ともに掘り込みの深さは 6cm 以下で、上部は近世の耕作土に削平されている。水田 829 の土層観察ベルトを撤去して延長部の検出を試みたが、検出できなかった。

セクションでは、1a 層中に擬似畦畔的な部分や、盛土して畦畔とした可能性がある部分等を確認することができる。これについては図中に網がけで示した。

（3）近世～近代（ケラ穴と一部 1 層相当）

ケラ穴を追跡することで推定された水田である。ケラ穴を充填している土は、濃い灰色（A 列）、薄い灰色（B 列）に 2 大別出来た（図版 343）。B 列を A 列が切っており、走行方向も若干異なる。ただし、B 列のものは断片的であり、さらに時期が分けられる可能性がある。

A 列から推定される畦畔のうち、南北方向のものは 63・64A グリッド、63C ～ 65B グリッド、63D ～ 65C グリッド、65・66 グリッドの 4 列であり、それぞれの間隔は東西約 15m、南北 13 ～ 15m。東西方向は 63A ～ 64D にかけて 1 列検出しただけなので、間隔は不明である。B 列は断片的であるうえ、63・64C グリッドにおいて A 列と重複するため、A 列のように畦畔の間隔を推定するのは困難である。それでも南北方向の畦畔は 63A ～ 65E グリッドにかけて 7 列が検出されている。これらが同時期のものであったなら、A 列より間隔が狭かった可能性がある。現存の間隔は約 10m である。

3　中世以降の遺物

A　概　　要

中世の遺物は、調査区全域から出土した。種別には土器・土製品・石器・金属製品・銭貨・木製品がある。遺物量は木製品を除いて浅箱（内寸 54 × 34 × 10cm）換算で、約 18 箱である。内訳は土器・土製品 10 箱、石器・石製品 6 箱、金属製品・鉄滓 2 箱である。

土器は、珠洲焼を中心として瀬戸・美濃焼、常滑焼、在地瓷器系釜（笹神窯）、中世土師器皿、輸入陶磁器等がある。珠洲焼の年代観で 13 世紀後半～ 15 世紀半ばまでの幅があり、主体は 14 世紀にある。石器はほとんどが砥石で、粗砥から鳴滝産の仕上砥までそろっている。石製品には鳴滝産の硯等がある。土器・砥石・硯には破損後も漆継ぎで補修し使用されているものが散見される。集落廃絶時に持ち出されたものもあっただろうが、もともと少ない所持品を補修しつつ使用していた様子がうかがわれる。

以下の記載は遺物種別ごとに居住域単位で進める。遺物の番号は種別を超えて通し番号とした。

B　土　　器（図版 197 ～ 203・352 ～ 358）

1）概　　要

土器には珠洲焼、瀬戸・美濃焼、青・白磁等があるが、小片が多く器形全体を把握できる資料は少ない。

中世遺物の分類、年代観は、珠洲焼［吉岡 1994］、瀬戸・美濃焼（古瀬戸）［藤沢 2005］、中世前期の輸入陶磁器［山本 2000］、中世後期の白磁［森田 1982］、同じく青磁［上田 1982］、近世陶磁器［九州近世陶磁器学会 2000］をそれぞれ参考とした。これに合わせて周辺域の事例として胎内市下町坊城遺跡［水澤 2000］などを参考とした。

上述の編年観に基づいて遺物を検討したところ、古渡路遺跡の中世土器は 13 世紀後半～ 15 世紀半ばまでの幅があり、主体は 14 世紀にあることが明らかとなった（第 16 図）。

以下の各説では、居住域ごとに記載を進める。各土器の出土位置の詳細等は観察表を参照のこと。合わせて各居住域の土器組成表を示す（第 8 ～ 10 表）。表には器種別の破片数と推定個体数を記した。計量は各遺構と遺構外で行った。このため、遺構間接合や遺構と遺構外の土器が接合した場合には、居住域全体の推定個体数が各遺構・遺構外の和より少ない数値を示す。また、珠洲焼の体部破片（「壺か甕」）については個体の同定が不十分なため、実際の個体数より多い数値が示されている可能性がある。

2）各　　説

a　A 区居住域（図版 197・198・352）

SB7811　80 は青磁椀で SB7811 を構成する P6406 から出土した。外面に 3 か所彫り込みが見られる。

SE6237　81 は珠洲焼の片口鉢で体部のみであるが、密集する卸目からⅣ末～Ⅴ期と推定される。

SE6209　82 は珠洲焼の片口鉢底部、83 は珠洲焼の甕体部でそれぞれ井戸の上位層からの出土である。84 は珠洲焼の壺 R 種で、完形であるが胴部で上下に割れたものを漆で接いでいる。接ぎ目の外面は帯状に漆が塗布されている。全体に作りが雑で、口縁には歪みがあるほか、端部には粘土のこすれがあり、横ナデが途切れる。底部外面には粘土粒が付着している。内面下半には直径約 3cm の瘤状のふくらみがある。焼成の際に空気が膨張して生じたものかもしれない。時期は珠洲Ⅳ期後半期と推定される。出土位置は井

戸底部で、壁面の掘り込みに据えられ、板材（337・338）で覆われていた。

SE6278　85 は珠洲焼の甕体部でⅢ期以前のものと推定され、2 層からの出土である。

SE7133　88 は珠洲焼の甕体部でⅢ期以前のものと推定され、7 層からの出土である。

SE7180　86 は珠洲焼の片口鉢体部でⅢ～Ⅳ期と推定され、2 層からの出土である。

SE7323　87 は珠洲焼の片口鉢口縁部でⅣ期と推定され、上位層からの出土である。

SE8529　90 は須恵器の甕で、井戸の 8 層からの出土である。89 は珠洲焼の壺 T 種体部で綾杉文のタタキ目があり時期はⅣ期と推定される。井戸の曲物内からの出土である。AB 居住域内の SK7696 出土の 120 と同一個体の可能性がある。

SK6274　91 は珠洲焼の壺体部と推定される。

SK7217　92 は珠洲焼の甕口縁部で、Ⅱ～Ⅲ期と推定される。

SK7327　93 は珠洲焼の片口鉢底部である。内面の摩滅が顕著で卸目は認められず、器面も荒れている。被熱によって破損したのか、底部外面とそれに接する断面に煤が付着する。

SD7132　94 は珠洲焼の片口鉢口縁部でⅤ期と推定される。焼成は不良である。

P6204　95 は珠洲焼の片口鉢口縁～腰部でⅢ～Ⅳ期と推定される。

P6222　96 は珠洲焼の片口鉢体部で、卸目は確認できない。下端の破断面と右破断面に漆接ぎ痕がある。

遺構外　97 ～ 100 は片口鉢口縁部である。時期は 97・98 は珠洲Ⅳ期、100 は口縁端部に波状紋が施されることから、Ⅴ期と推定される。99 は口縁が内傾気味で、Ⅳ期末～Ⅴ期初頭と推定される。102 は壺 R 種肩部である。101 は転用砥石である。底部中央を横切る破断面に砥面がある。素材の片口鉢底部は内面の摩耗が顕著で、底部中央の厚さは 7mm と非常に薄くなっている。

103 は瀬戸・美濃焼であるが器種は不明である。104 は白磁で椀Ⅸ類、口禿で 13 世紀後半～ 14 世紀初頭のものと推定される。105 ～ 108 は青磁の椀である。105 は大型の蓮弁で鎬が確認できる。13 世紀後半と推定される。106 は底部で高台内は蛇の目釉剥ぎで、中心部を残し釉は見られない。15 世紀代と推定される。107 は底部である。外面に鎬の痕跡がある。見込み部はスタンプと片切彫の花文で、高台内は釉剥ぎである。108 は見込みにスタンプ文と片切彫の草花文がある。107・108 の年代は 14 世紀代と推定される。110 は土師質土器で手づくねと見られる。109 は瓷器系陶器で、笹神窯産の甕である。胎土に長石や赤色粒子を含むので 14 世紀代と推定される。112 は信楽産の壺の体部と見られる。

b　AB 区居住域（図版 198・352・353）

SB7604　113 は珠洲焼の片口鉢で、卸目が細く間隔が広いので、Ⅳ期と推定される。SB7604 を構成する P8659 から出土し、SE7602 出土破片とも接合した。114 は珠洲焼の壺 T 種の体部で、綾杉文のタタキ目があり、時期はⅣ期と推定される。SE8529 出土の 89 と SK7696 出土の 120 と同一の可能性がある。

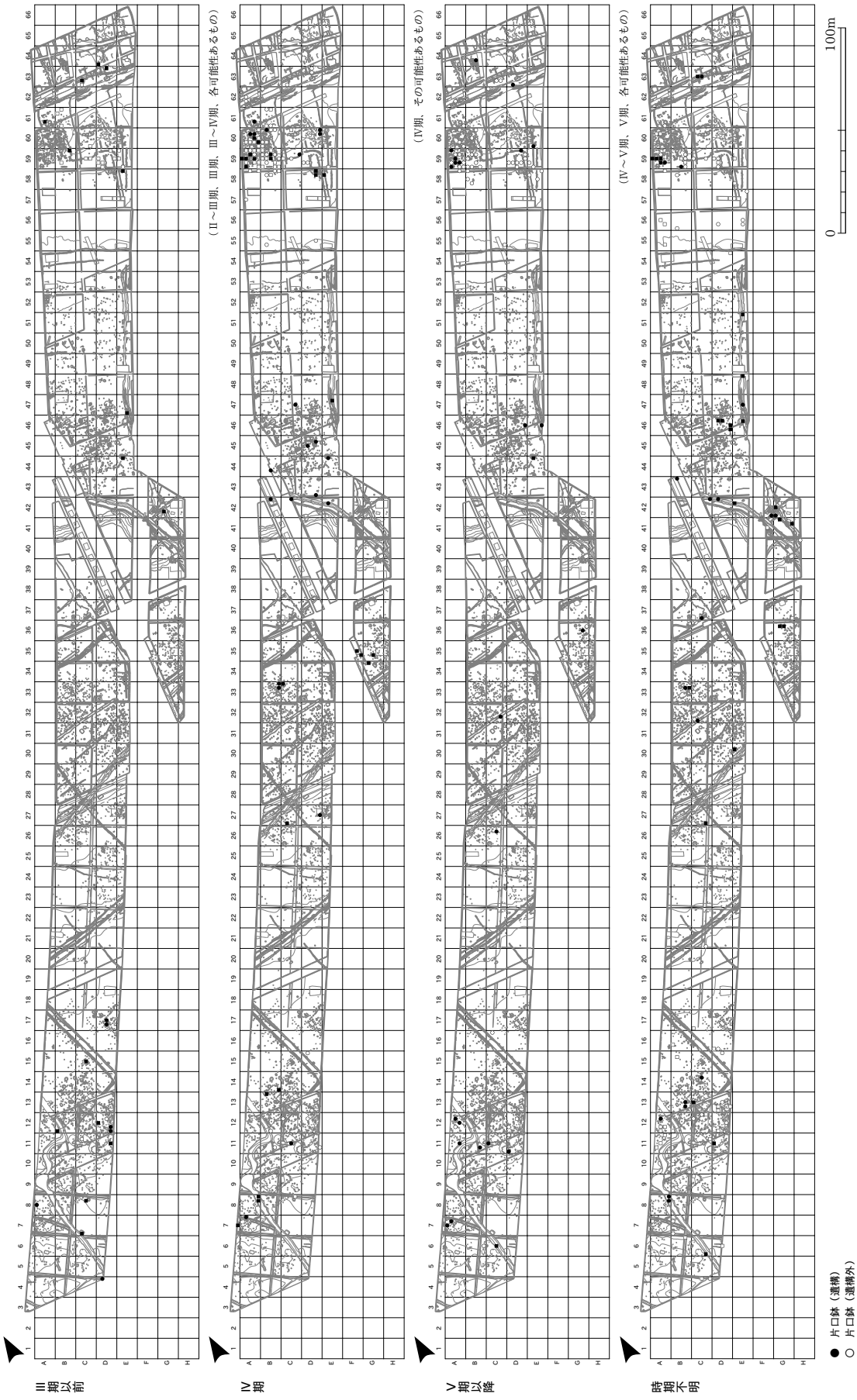
SE7409　117 は珠洲焼の片口鉢口縁～体部である。口縁部がしっかりしていること、卸目が太いことからⅤ期と推定される。1 層からの出土である。

SE7642　115 は白磁の腰折皿で、14 世紀後半と推定される。上位層からの出土である。

SE7692　116 は白磁の椀で口縁が外反する。椀Ⅴ –4 類の可能性があり、12 世紀後半と推定される。

SE8381　118 は珠洲焼の甕体部である。下位層からの出土である。

SB7822–P7418　119 は珠洲焼の片口鉢底部である。器面が赤化しているが、被熱によると推定される。A 区の SD7514 出土の破片と接合した。


Ⅲ期以前
Ⅳ期
（Ⅱ～Ⅲ期、Ⅲ～Ⅳ期、各可能性あるもの）
Ⅴ期以降
（Ⅳ期、その可能性あるもの）
時期不明
（Ⅳ～Ⅴ期、Ⅴ期、各可能性あるもの）
0
100m
● 片口鉢（遺構）
○ 片口鉢（遺構外）
■ 壺・甕（遺構）
□ 壺・甕（遺構外）

第16図　珠洲焼分布図

第８表　中世土器組成表（1）

注）「遺構外」のうち、Ⅰ層・攪乱・層位不明・表面採集の点数は下段に（　）で示した。「遺構外　上段」及び「遺構内外」の点数には（　）内の点数を含む。

			食膳具																						貯蔵具									調理具		他	
			土師質土器			瀬戸・美濃焼								青磁					青磁？	白磁			朝鮮？	珠洲焼				越前焼	信楽焼	笹神窯		瓷器系？	不明	珠洲焼	瓦器	青磁	珠洲焼の時期（遺構）
居住域	遺構外／	点数	皿（ロクロ）	皿（手づくね）	皿（不明）	天目茶椀	椀	皿	卸皿	杯	鉢	瓶子類？	不明	椀	皿	杯	盤	不明	椀	皿	不明	船徳利	壺R種	壺T種	甕	壺か甕	甕	壺	壺	壺	甕	壺	壺	珠洲焼	瓦器	香炉	
A居	SB7811-P6406	破片数												1																								
		個体数												1																								
	SE6209	破片数																					1		1									1			Ⅳ？・Ⅳ後・Ⅴ？	
		個体数																					1		1									1				
	SE6237	破片数																																1			Ⅳ末～Ⅴ？	
		個体数																																1				
	SE6278	破片数																							1												Ⅲ以前？	
		個体数																							1													
	SE7133	破片数																							1												Ⅲ以前？	
		個体数																							1													
	SE7180	破片数																																1			Ⅲ～Ⅳ	
		個体数																																1				
	SE8529	破片数																						1													Ⅳ	
		個体数																						1														
	SK6274	破片数																						1		1											Ⅲ？	
		個体数																						1		1												
	SK7217	破片数																							1												Ⅱ～Ⅲ	
		個体数																							1													
	SK7323	破片数																																1			Ⅳ？	
		個体数																																1				
	SK7327	破片数																																1			Ⅴ？	
		個体数																																1				
	P6204	破片数																																2			Ⅲ～Ⅳ	
		個体数																																1				
	P6222	破片数																																1			Ⅳ？	
		個体数																																1				
	SD6001	破片数			1																					3								1			Ⅳ1・Ⅴ	
		個体数			1																					3								1				
	SD7132	破片数																																1			Ⅴ	
		個体数																																1				
	SD7514	破片数																																1			Ⅴ	
		個体数																																13 (2)				
	遺構外	破片数		1 (1)									1 (1)	15 (2)						1			2	2		13 (4)	1	1		1				14 (2)		1 (1)	
		個体数		1 (1)									1 (1)	4 (2)						1			2	2		13 (4)	1	1		1				14 (2)		1 (1)	
	遺構内外	破片数		1	1								1	16						1	1		3	4	4	17	1	1		1				24		1	
		個体数		1	1								1	5						1	1		3	4	4	17	1	1		1				20		1	
AB居	SB7604-P8659	破片数																																1			Ⅳ	
		個体数																																1				
	SB7822-P7418	破片数																																1			Ⅴ	
		個体数																																1				
	P8674	破片数																						1													Ⅳ	
		個体数																						1														
	SE7409	破片数																																3			Ⅴ	
		個体数																																2				
	SE7602	破片数																																1			Ⅳ	
		個体数																																1				
	SE7608	破片数																								1												
		個体数																								1												
	SE7642	破片数																			1																	
		個体数																			1																	
	SE7692	破片数																		1														1				
		個体数																		1														1				
	SE7696	破片数																						9													Ⅳ前より古	
		個体数																						1														
	SE8381	破片数																							1												Ⅱ～Ⅲ	
		個体数																							1													
	SD6001	破片数																								1												
		個体数																								1												
	遺構外	破片数				1 (1)															1 (1)	1		1		11 (3)				1				6			Ⅴ	
		個体数				1 (1)															1 (1)	1		1		11 (3)				1				6				
	遺構内外	破片数				1														1	2	1		11	1	13				1				16				
		個体数				1														1	2	1		3	1	13				1				11				
B居	SK8331	破片数																																1			Ⅲ	
		個体数																																1				
	遺構外	破片数						1 (1)						1										1 (1)										6 (2)				
		個体数						1 (1)						1										1 (1)										6 (1)				
	遺構内外	破片数						1						1							1			1										7				
		個体数						1						1							1			1										6				
C居	SE9440	破片数																																1			Ⅴ	
		個体数																																1				
	SE9453	破片数			1																																	
		個体数			1																																	
	SE9603	破片数					1																		2	1											Ⅳ	
		個体数					1																		1	1												
	SD3007	破片数																								1												
		個体数																								1												
	遺構外	破片数																								1 (1)								1				
		個体数																								1 (1)								1				
	遺構内外	破片数			1		1																		2	3								2				
		個体数			1		1																		1	3								2				
D居	SA5323-SP3547	破片数									1																											
		個体数									1																											
	SE3384	破片数																																2			Ⅳ後	
		個体数																																2				
	SE3412	破片数				1																				1								3			Ⅳ後	
		個体数				1																				1								3				
	SE5177B	破片数																									1											
		個体数																									1											
	SK3971	破片数						1																														
		個体数						1																														
	P3413	破片数																																1				
		個体数																																1				
	SE9666	破片数																																1			Ⅳ（古）	
		個体数																																1				

第９表　中世土器組成表（2）

注）「遺構外」のうち、Ⅰ層・攪乱・層位不明・表面採集の点数は下段に（　）で示した。「遺構外　上段」及び「遺構内外」の点数には（　）内の点数を含む。

			食膳具																				貯蔵具									調理具		他	
			土師質土器			瀬戸・美濃焼								青磁				青磁？	白磁			朝鮮？	珠洲焼				越前焼	信楽焼	笹神窯		瓷器系？	不明	珠洲焼	瓦器	青磁	珠洲焼の時期（遺構）
居住域	遺構外／	点数	皿（ロクロ）	皿（手づくね）	皿（不明）	天目茶椀	椀	皿	卸皿	杯	鉢	瓶子類？	不明	椀	皿	杯	盤	不明	椀	皿	不明	船徳利	壺R種	壺T種	甕	壺か甕	甕	壺	壺	甕	壺	壺	珠洲焼	瓦器	香炉	
D居	P5156	破片数																								1										
		個体数																								1										
	SD3501	破片数																														2				V
		個体数																														2				
	SD9661	破片数																								1										
		個体数																								1										
	遺構外	破片数				1										1										1						2				
		個体数				1										1										1						2				
	遺構内外	破片数				2		1			1					1										4	1					11				
		個体数				1		1			1					1										4	1					9				
D東居	SB5316-P3479	破片数																														1				Ⅳ～Ⅴ
		個体数																														1				
	SB5320-P3160	破片数																						12												Ⅳ
		個体数																						2												
	SB5320-P4564	破片数																						1												Ⅳ
		個体数																						1												
	SB5320-P4575	破片数																						1												Ⅳ
		個体数																						1												
	SB5320-P4584	破片数																						4												Ⅳ
		個体数																						2												
	SE3008	破片数													1																					
		個体数													1																					
	SE3476	破片数																								1										
		個体数																								1										
	遺構外	破片数						1																		1						1				
		個体数						1																		1						1				
	遺構内外	破片数						1							1									18		2						2				
		個体数						1							1									1		2						2				
E南居	SE2243	破片数					1																													
		個体数					1																													
	SD2050	破片数	1														1								1	2						7				Ⅳ
		個体数	1														1								1	2						5				
	SD2151	破片数																								1										
		個体数																								1										
	SD2164	破片数												1												3										
		個体数												1												2										
	SD2165	破片数																								1						1				
		個体数																								1						1				
	SD2167	破片数																								1						1				
		個体数																								1						1				
	SD2178	破片数																								1										
		個体数																								1										
	SD2237	破片数																														1				
		個体数																														1				
	SD2353（近現代）	破片数																								1										
		個体数																								1										
	遺構外	破片数		1										2	1	1										2						2				
		個体数		1										2	1	1										1						2				
	遺構内外	破片数	1	1			1							3	1	1	1								1	12						12				
		個体数	1	1			1							2	1	1	1								1	8						10				
E居	SE1475	破片数			1																					1										
		個体数			1																					1										
	SE1576	破片数																		1																
		個体数																		1																
	SE1577	破片数												2																						
		個体数												1																						
	SE1866	破片数												1																		1				Ⅳ後
		個体数												1																		1				
	SE2201	破片数																		1																
		個体数																		1																
	SE2406	破片数							1															3	2	2						7				Ⅲ？・Ⅳ・Ⅳ～Ⅴ
		個体数							1															1	1	2						2				
	SE2608	破片数																														1				Ⅳ初
		個体数																														1				
	SK1461	破片数																		1																
		個体数																		1																
	SK1484	破片数																														1				Ⅴ
		個体数																														1				
	P1417	破片数																		1																
		個体数																		1																
	P1481	破片数																								1										
		個体数																								1										
	P1636	破片数													1																					
		個体数													1																					
	P2445	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	P2477	破片数																														1				
		個体数																														1				
	P2634	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	SX1855	破片数																								1										
		個体数																								1										
	SD1141	破片数							1					1										1		4						2	1			Ⅳ？・Ⅳ～Ⅴ・Ⅴ
		個体数							1					1										1		4						2	1			
	遺構外	破片数																								2						1（1）				
		個体数																								2						1（1）				
	遺構内外	破片数	1		1				2					4	1					4				1		11						17	1			
		個体数	1		1				2					3	1					4				1		9						11	1			
F居	SD1141	破片数																															3			
		個体数																															1			
	遺構外	破片数																							2	1（1）										
		個体数																							2	1（1）										
	遺構内外	破片数																							2	2							3			
		個体数																							2	2							1			

第 10 表　中世土器組成表（3）

注）「遺構外」のうち、Ⅰ層・攪乱・層位不明・表面採集の点数は下段に（　）で示した。「遺構外　上段」及び「遺構内外」の点数には（　）内の点数を含む。

			食膳具																				貯蔵具									調理具		他	
			土師質土器			瀬戸・美濃焼								青磁				青磁？	白磁			朝鮮？	珠洲焼				越前焼	信楽焼	笹神窯		瓷器系？	不明	珠洲焼	瓦器	青磁	珠洲焼の時期（遺構）
居住域	遺構外／	点数	皿（ロクロ）	皿（手づくね）	皿（不明）	天目茶椀	椀	皿	卸皿	杯	鉢	瓶子類？	不明	椀	皿	杯	盤	不明	椀	皿	不明	船徳利	壺R種	壺T種	甕	壺か甕	甕	壺	壺	甕	壺	壺	珠洲焼	瓦器	香炉	
G居	SB882・884-P207	破片数					1																													
		個体数					1																													
	SB883-P384	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	SB884-P203	破片数					2																													
		個体数					1																													
	SB884-P57	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	SB887-P182	破片数																														1				Ⅳ末～Ⅴ
		個体数																														1				
	SE 7	破片数																							1							2				Ⅳ
		個体数																							1							2				
	SE165	破片数												1																						
		個体数												1																						
	SE192	破片数																														4				Ⅳ末～Ⅴ・Ⅴ
		個体数																														2				
	SE233	破片数					1																		2	1										Ⅳ
		個体数					1																		1	1										
	SE245	破片数																							1							2				Ⅳ・Ⅳ末～Ⅴ・Ⅴ
		個体数																							1							2				
	SE601	破片数																														1				Ⅱ？
		個体数																														1				
	SE606	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	SE648	破片数																														2				Ⅳ
		個体数																														2				
	SE822	破片数																														13				Ⅳ
		個体数																														1				
	SK115	破片数																						1												Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1												
	SK218	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	SK394	破片数												1																						
		個体数												1																						
	SK595	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	SK664	破片数																						1												Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1												
	P30	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	P521	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	P654	破片数																														1				Ⅴ
		個体数																														1				
	P856	破片数																						1												Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1												
	SX122	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	SX234	破片数																								1						1				Ⅳ末～Ⅴ
		個体数																								1						1				
	SD313	破片数																														1				Ⅳ
		個体数																														1				
	SD513	破片数																														2				Ⅳ・Ⅴ
		個体数																														2				
	SD629	破片数																							1							2				Ⅳ
		個体数																							1							2				
	SD802（近世）	破片数			1																		1													
		個体数			1																		1													
	SD827	破片数																														1				Ⅴ
		個体数																														1				
	遺構外	破片数		1	3		7		2		1	1		5				1 (1)			1 (1)		1	21 (4)	51 (1)	14 (2)					2	112 (7)		1 (1)	
		個体数		1	3		2		2		1	1		5				1 (1)			1 (1)		1	2 (2)	1 (1)	13 (2)					1	27 (3)		1 (1)	
H水田	SF799	破片数																														1				
		個体数																														1				
	水田Ｃブロック	破片数																														1				Ⅴ
		個体数																														1				
	水田Ｇブロック	破片数																														3				Ⅴ
		個体数																														1				
	水田Ｌブロック	破片数												1										1												
		個体数												1										1												
	水田 794	破片数																							1											Ⅳ
		個体数																							1											
	水田 801	破片数																						2		2										Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1		2										
	水田 805	破片数																						1												Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1												
	水田 806	破片数											1																							
		個体数											1																							
	水田 826	破片数																						1												Ⅲ～Ⅳ
		個体数																						1												
	水田 828	破片数													1																					
		個体数													1																					
	水田 852	破片数																														2				Ⅱ
		個体数																														1				
	遺構外	破片数																						4		1						4				
		個体数																						1		1						2				
G居・H水田		破片数		1	4		11		2		1	1	1	8	1			1	11		1		1	33	62	19					2	157		1	
	遺構内外	個体数		1	4		2		2		1	1	1	8	1			1	2		1		1	2	1	17					1	34		1	

SK7696　120 は珠洲焼の壺Ｔ種の体部から底部で、綾杉文のタタキ目がある。胎土が赤褐色を呈することから、時期はⅣ期と推定される SE8529 出土の 89 と P8674 出土の 114 と同一個体の可能性がある。
遺構外　121 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、口縁に波状紋が施されることからＶ期と推定される。122 は天目茶椀で、瀬戸・美濃焼の後期と推定される。123 は白磁で皿Ⅸ類、口禿で底面は平底で底面周辺は無釉となる。13 世紀後半～ 14 世紀初頭のものと推定される。124 は船徳利で、産地は朝鮮または唐津の可能性がある。125 は簾状文と菊花文の押印があり、笹神窯（権兵衛沢窯）産の可能性がある。

c　B 区居住域（図版 198・353）

SK8331　126 は珠洲焼の片口鉢で、内外面が被熱により赤化している。破断面に赤化は見られないので、破損前の被熱であろう。卸目の幅が広いことから、Ⅲ期と推定される。
遺構外　127 ～ 129 は珠洲焼の片口鉢口縁部である。127 は片口部が 1/3 程度残っている。128 はⅣ期と推定される。129 は口縁に波状紋が施されるので、Ｖ期と推定される。130 は珠洲焼の片口鉢底部である。内面は摩耗により卸目は消滅し、一部剥落している。厚さ 1cm まですり減っている。131 は白磁の皿である。132 は青磁の椀で鎬が確認できる。133 は口縁に釉がかかる緑釉小皿の口縁部で、瀬戸・美濃焼後期と推定される。

d　C 区居住域（図版 198・199・353）

SE9440　134 は珠洲焼片口鉢で、Ｖ期と推定される。5 層からの出土。135 は須恵器で、7 層から出土した。外面と破断面に摩耗が見られる。中世集落の存続時期を遡る時期の遺物なので、遺跡内に至るまでに水流などにより摩耗した可能性も考えた。しかし、内面には摩耗が見られないので転用砥石の可能性が高い。ただし、古代の段階での転用なのか、中世に入ってからの転用なのかは不明である。
SE9603　136 は瀬戸・美濃焼後期の平椀と見られる。137 は瓷器系陶器で越前産の甕体部と見られ、漆接ぎの痕跡が確認できる。138 は珠洲の甕体部である。いずれも 10 層から出土した。

e　D 区居住域（図版 199・353）

SA5323　139 は SA5323 を構成する P3547 から出土した。瀬戸・美濃焼の椀形鉢で、後Ⅱ期と推定される。
SE3384　142・143 は珠洲焼片口鉢の口縁～体部である。142 はⅣ期後半と推定される。下位層から出土したが、隣接する SE3412 の中位層出土破片と接合している。143 は片口鉢破片の 2 破断面に砥跡がある。1 層から出土した。
SE9666　144 は珠洲焼片口鉢である。内面は摩耗のため卸目は消えかかり、器面も荒れている。Ⅳ期と推定される。10 層から出土した。
SE3412　140 は瀬戸・美濃焼の天目茶椀で、後Ⅱ期と推定される。5 層からの出土である。
SE5177B　141 は瓷器系陶器で越前産の甕体部と見られる。1 破断面とそれに沿う形で外面に漆が付着することから、漆接ぎされていたことが分かる。
SD3501　146 は珠洲焼Ｖ期の片口鉢を素材とする転用砥石である。1 破断面の一部に砥跡がある。片口鉢の内面には黒色付着物が認められる。被熱による煤とも考えたが、台石の黒色部分がトチのすり潰しによって生じる事例がある［栗島 2007］ことから、これもそのような原因が考えられる。

SK3971　145 は瀬戸・美濃焼で足付の皿類と推定される。脚部は剥離しており、底面付近にその痕跡がある。釉はナガシガケと推定され、底部外面の縁まで釉が垂れている。瀬戸・美濃焼後期と推定される。
遺構外　147 は須恵器有台杯底部である。148 は青磁の小杯と見られる。外面に 3 本の平行な線刻がある。

f　D 東区居住域（図版 199・354）

SB5320　150 は珠洲焼の壺 T 種である。Ⅳ期中葉と推定される。破片は建物を構成する 4 基の柱穴から出土した。すべて接合したわけではないが、調整や胎土に共通性が見られることから同一個体とした。出土状況からすると、建物廃絶後の柱穴埋没（埋め戻し）に伴うもので、柱穴の根石代わりに据えられたものではない。口縁部は P4575、体部は P3160・4564・4584 から出土した。
SB5316　149 は珠洲焼の片口鉢体部～底部で、Ⅳ～Ⅴ期と推定される。SB5316 を構成する P3479 から出土した。
SE3008　151 は青磁の皿底部で、見込みにスタンプ文がある。高台内は無釉で、畳付は釉剥ぎされる。部分的に煤が付着する。14 世紀代と推定される。出土層は最下層である。
遺構外　152 は瓷器系陶器で越前産の甕。153 は瀬戸・美濃焼の丸皿で、中Ⅳ期と推定される。

g　E 南区居住域（図版 199・200・354）

SE2243　154 は瀬戸・美濃焼の平椀で、後Ⅰ～Ⅱ期と推定される。中位層の出土である。
SD2164　155 は青磁の椀体部である。156 は瓷器系陶器で信楽産の甕と推定される。
SD2050　157 は珠洲焼の甕口縁～体部、158 は片口鉢体部～底部である。159 は青磁の盤口縁部で、内面に丸彫りを施す。160 は唐津焼の徳利口縁部で藁灰釉がかかる。Ⅰ期と推定される。161 は土師質土器で、ロクロ成形ヘラ切りか。
遺構外　162 は土師質土器で、手づくね成形と見られる。163 は青磁の皿で 15 世紀初めと推定される。164 は青磁の端反椀で、内外面に削込による文様が施される。15 世紀初めと推定される。165 は青磁で小杯と見られる。166 は瓷器系陶器で信楽産の甕と推定される。167 は備前産の擂鉢口縁で、16 世紀代である。168 は唐津焼の皿で、見込みには目積み痕が確認できる。Ⅰ–2 期と推定される。

h　E 区居住域（図版 200・354・355）

SE1576　169 は白磁の皿 D 群である。2 次的に被熱している。15 世紀前半と推定される。中位層の出土である。
SE1866　170 は青磁の端反椀口縁部である。14 紀末～ 15 世紀初めと推定される。上位層の出土である。
SE2201　171 は白磁の皿で、森田 D 群である。高台部無釉では 4 か所のえぐりがあり、見込みに窯積み跡がある。また底部無釉部には煤が付着する。15 世紀半ばと推定される。中位層の出土である。
SE1577　172 は青磁の端反椀口縁部である。14 世紀末～ 15 世紀初めと推定される。同一個体の破片は 2 点出土し、上位層から中位層の出土である。
SE2406　173 は珠洲焼の甕体部と推定される。中位層の出土である。174 は珠洲焼の片口鉢で、Ⅳ期と推定される。上層から下層にかけて出土している。175 は珠洲焼の片口鉢底部である。酸化焔焼成のため、器面の色調は赤褐色を呈する。使用により内面は摩耗する。中位層の出土である。176 は珠洲焼の壺 T 種である。やや浅く幅の広い単位のタタキ目である。上位層からの出土である。177 は瀬戸・美濃焼の

卸皿底部で見込みに卸目が施される。瀬戸・美濃焼後Ⅰ～Ⅱ期と推定される。上位層の出土である。

SE2608　178 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、Ⅳ期初頭に位置付けられる。中位層の出土である。

P1636　184 は青磁の皿口縁部で内面に文様が施される。14 世紀末～ 15 世紀初めと推定される。

SK1461　183 は白磁の皿で、森田Ｄ群である。高台部は無釉で、高台内に［井］の墨書がある。14 世紀末～ 15 世紀初めと推定される。土坑確認面から出土した。

P1417　185 は白磁の皿で、森田Ｄ群の口縁部である。

P2634　186 は珠洲焼の片口鉢である。内面の底部中央は摩耗が顕著で、卸目がほぼ消滅している。

SD1141　179 は青磁の椀腰部で、1 破断面に漆接ぎの痕跡がある。180 は珠洲焼の片口鉢である。口縁端部が内傾することから、Ⅴ期に位置付けられる。181 は須恵器で、壺肩部と推定される。

i　F 区居住域（図版 200・355）

SD1141　187 は瓦器の擂鉢底部である。破断面を含む全体が摩耗している。SD1141 を流されて来た時に水摩したのだろう。

遺構外　188 は珠洲焼の甕で、口縁がくの字を呈することからⅢ期に位置付けられる。189 は瓷器系陶器で、越前産の擂鉢と見られる。

j　G 区居住域（図版 201 ～ 203・355 ～ 358）

SB883　190a ～ c は珠洲焼の中甕である。190a の短く外反する口縁形状などから見て、Ⅳ期に該当する。190b・c は体部～底部で、胎土やタタキ目の共通性から同一個体とした。190 は破片が多く、しかも比較的広い範囲に分散していた。出土位置は 59A・59B・60A・60B グリッドの遺構集中区からの出土が多く、この地区の SE・SD・P・SX などの遺構出土遺物も接合した。なお 190a の接合破片 1 点はＦ区居住域（49B22 Ⅳ層）から出土した。

SB884　191 は瀬戸・美濃焼の平椀で、後Ⅱ期と推定される。破片は SB884–P203、SB882–P207、SE233 から出土した。P203 では柱痕よりも下の底面から、P207、SE233 では上位層から出土した。ここから、SB882、SE233 の埋没後、SB884 の柱穴底面に同一個体破片を入れて建物を建てた、という流れが分かる。一連の遺物の埋没が意図的なものだったのか偶然だったのかは不明である。

SE165　192 は青磁の椀で、鎬連弁文を持つことから 13 世紀末～ 14 世紀初頭と推定される。中位層からの出土である。

SE601　193 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、内面に卸目はない。Ⅱ期に該当する可能性がある。井戸枠内層からの出土である。

SE7　196・197 は珠洲焼の片口鉢底部である。卸目が米字状に施されることから、ともにⅣ期と推定される。196 は 6 層から出土した。197 は卸目が体部中ほどで止まっており、ほかの片口鉢の卸目に比べて短い。底部中央は半径約 4cm の範囲の摩耗が進んでおり、これを取り巻くように、黒色付着物が幅約 4cm の帯状に巡る。3 層から出土し、SE648、SD513 出土破片と接合する。

SE245　194・195 は珠洲焼の片口鉢口縁部である。194 は口縁端部が内傾することから、Ⅳ期末～Ⅴ期に位置付けられる。上位層から出土した。SX234 出土破片も接合した。195 は卸目が密に施されるのでⅤ期に位置付けられる。中位層の出土である。

P30　198 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、Ⅳ期と推定される。口縁端部と、外面の口縁端部から 1 ～ 2cm

下がったところに幅約 2cm の帯状に黒色付着物が認められ、197 と同一個体の可能性がある。

SE192　199 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、卸目が密に施されることからⅤ期と推定される。197 と同様に、内面底部中央が半径約 4cm の範囲にわたり摩耗が進んでおり、これを取り巻くように、黒色付着物が幅約 4cm の帯状に巡る。下位層の出土である。接合破片は遺構集中区を中心として出土している。

SE822　200 は珠洲焼Ⅳ期の片口鉢口縁部で、卸目はほぼ等間隔で 10 単位施される。内面底部は中央の半径約 9cm の摩耗が顕著で、卸目は消滅し、器面は荒れて小さな凹凸が生じている。底厚は約 8mm まで減じている。摩耗の範囲を縁取るように、幅 1 ～ 5cm の帯状に黒色付着物が認められる。底部は外面から穿孔されているが、内面側の割れ口に摩耗が認められず、穿孔後に擂鉢として使用された形跡はない。体部上半分から口縁部にかけて、内外面ともに赤変している。下半部外側は底面まで煤が付着する。外面の煤の範囲は内面の黒色付着物の範囲と対応する。このような赤変、黒色付着物・煤の在り方から、内部に液体を入れ、鍋のように火にかけた可能性が考えられる。その場合、液体は黒色付着物のあたりまで入れられていたと推定される。底部片は SE822 の曲物内から出土した。

SK394　201 は青磁椀の口縁である。13 世紀末～ 14 世紀前葉の可能性がある。

P856　202 は珠洲焼の壺Ｔ種口縁で、直線的に伸びる口縁が弱く外反することから、Ⅲ～Ⅳ 1 期に位置付けられる。外面は綾杉文。203 と同一個体の可能性がある。

SK664　203 は珠洲焼の壺体部で、外面のタタキは綾杉文を呈する。遺構集中区から出土した破片は少なく、多くは 59D グリッドから出土した。202 と同一個体の可能性がある。

SK595　204 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、Ⅳ期と推定される。

SD827　205 は珠洲焼の片口鉢底部で、卸目が密に施されることからⅤ期と推定される。205 の破片の大部分はＧ区居住域の出土であるが、接合破片 1 点はＥ居住域の SK1484 から出土している。

遺構外　206 は珠洲焼の片口鉢口縁部で、内面に卸目はない。Ⅱ期に該当する可能性がある。SE601 の 193、Ｈ区水田 852 の 235 は同一個体の可能性がある。207 ～ 210 は珠洲焼の片口鉢口縁部である。207・208 はⅤ期、209 はⅣ期後半、210 はⅣ期末～Ⅴ期に位置付けられる。211・212 は珠洲焼の片口鉢底部で、卸目が密に施されることからⅤ期と推定される。212 は外面の一部に弱い赤変が認められるので、被熱の可能性がある。赤変範囲は接合した破片形状とは一致しないので、被熱したとすれば破損前であろう。214 は珠洲焼の壺か甕の体部で「大」がヘラ書きされている。

221 は瓷器系の小壺で、珠洲焼に近い胎土であるが中国産の可能性がある。被熱のため、全体に発泡したようになっている。

222 ～ 228 は青磁である。222 は内面に彫による文様があり劃花文の可能性がある。223 の蓮弁文は鎬を失っているが彫り込みが丁寧なので、13 世紀後半と推定される。224・225 も鎬無しの蓮弁文である。幅広の蓮弁が彫り込まれているので、14 世紀代の可能性がある。226 は小椀で、高台内は釉がかかり、畳付は釉剥ぎとなる。高台の直径は 4.8cm と小さい。14 世紀代の可能性がある。227 は盤と推定され、近世の可能性がある。228 は香炉と推定される。

229 は天目茶椀である。釉は 2 重に掛けられ、中国産の可能性がある。

230 は土師質土器の皿である。口縁端部に小さな打ち欠きがあり、厚く煤が付着することから、燈明皿と推定される。

213・215 ～ 218 は瀬戸・美濃焼である。213 は椀形鉢、215 は卸皿で、ともに後期と推定される。216 は卸皿の口縁部～体部で、見込み近くにわずかに卸目が残る。中Ⅲ～Ⅳ期と推定される。217 は平

椀で、破断面に漆接ぎの跡がある。高台は摩耗しているが、低い作りであり、後Ⅱ～Ⅲ期と推定される。218 は壺類または瓶子類と推定される。

219・220 は瀬戸・美濃の大窯Ⅳ期、16 世紀末～ 17 世紀初めと推定される。219 は折縁皿、220 は丸皿である。231 ～ 234 は唐津焼で、おおよそ 16 世紀末～ 17 世紀初めと推定される。234 は内面に鉄絵が施される。

k　H 区水田域（図版 203・358）

水田　235 は珠洲焼の片口鉢底部で、見込みに卸目はない。Ⅱ期に該当する可能性がある。193・206 は同一個体の可能性がある。236 は青磁の皿で、見込みに円形文様が彫り込まれている。また見込みには粘土塊が付着する。高台外面まで釉がかかり、畳付・外底は無釉である。年代は 14 世紀後半と推定される。237 は青磁の椀口縁部である。241 は瀬戸・美濃の端反皿で、大窯期と推定される。238 ～ 240 は瓷器系陶器で 238 は信楽焼、239・240 は越前焼と推定される。242 は唐津焼の皿で、灰釉が施され、内面に目積みの胎土がある。時期は 17 世紀前半と推定される。

遺構外　243・244 は唐津焼で、見込み部に砂目痕が確認できる。17 世前半と推定される。

C　土　製　品（図版 203・358）

転用砥石　6 点出土した。A 区居住域 3 点、B・D・G 区居住域各 1 点である。いずれも珠洲焼の破片を素材とする。245 は片口鉢破片を素材とする。中央に漆継ぎがされているが、転用後の砥石端部に漆のはみ出しがないこと、砥面の漆にも砥跡が残ることから補修は転用前に行われたことが分かる。破損した片口鉢を漆継ぎで補修して使用したものの、再度破損したため破片を砥石に転用したのであろう。246 は甕破片の周縁を打ち欠いて円盤状に整えられている。器形復元が可能だった 101・143 は「A. 土器」に記載した。

D　金 属 製 品（図版 204・358・359）

1）概　　要

中世の金属製品は 7 点出土した。内訳は刀子 2 点、鎌 1 点（373）、火打ち金 1 点、不明 3 点、銭貨 9 点、製鉄関連遺物 32 点である。

2）各　　説

a　鉄・銅製品（図版 204・358・359）

いずれも表面全体に錆が付着するため、詳細な観察は困難である。249 は E 区居住域の P1445 から出土した。山なり形状から火打金の可能性もある。250 は F 区居住域Ⅱ層から出土した。用途は不明である。251 ～ 253 は G 区居住域出土である。G 区居住域ではほかに用途不明金属製品 1 点がある。251 は P776 から出土した。用途は不明である。252 は SE165 から出土した。表面に青錆が付着することから、銅製品と見られる。中央部には装飾があり、端部を内側に折り返し突起を作る。装飾的な釣り金具と推定される。253 は SD675 から出土した。先端は破損があるが尖っており、片刃が付く。大型の刀子または短刀と推定される。254 は H 区水田域の水田 805 から出土した。刀子の可能性がある。水田 805 からはほかに用途不明金属製品 1 点がある。

b　銭　　貨（図版 204・358）

銭貨 256 ～ 259 と板（255）は 07 年度の試掘調査時に出土した。出土位置はＥ区居住域に該当する。銭貨は板に乗った状態で出土した。256 は一部破損するものの熙寧元寶（1068 年）である。257 は２枚重なっているため、下の銭貨の種類は不明である。上の１枚は元祐通寶（1093 年）である。258 も一部を破損するものの、元祐通寶の可能性がある。259 は腐食により判読不能である。255 は板状の木製品である。銭貨のあった部分はその形に浅くくぼんでいる。六道銭と見られる、まとまった枚数の銭貨を伴うことから、木棺の底板の可能性がある。このため試掘調査では墓坑の存在が想定されたが、本発掘調査では関連する遺構は検出できなかった。

260・264（写真のみ）はＦ区居住域の SK1705 から出土した。260 は４枚重なっているため、最上部のみ判読が可能で、至和元寶（1054 年）であった。261 はＧ区居住域の遺構外から出土した。皇宋通寶（1039 ～ 1053 年）である。262 は熙寧元寶（1068 年）である。263 は宣和通寶（1119 ～ 1125 年）である。266（写真のみ）は腐食が著しく「〇〇元寶」のみの判読である。264 は腐食が著しいが皇宋通寶（1039 ～ 1053 年）の可能性がある。SK1705 では合計５枚の銭が出土したことから、六道銭であった可能性が高い。265・267（ともに写真のみ）はＥ区居住域の SK1480 の１層から出土した。ともに腐食が著しいが、267 は元祐通寶（1093 年）、265 は「治〇〇寶」と判読できた。

c　製鉄関連遺物（図版 203・204・358・359）

製鉄関連遺物にはフイゴの羽口、鉄滓がある（第 11 表・第 17 図）。

フイゴの羽口　破損品が２点出土した（247・248）。247・248 ともに内面の孔壁が一部残存しており、ここから孔径が約 4cm と推定できる。

鉄滓　鉄滓はＤ・Ｅ区居住域を中心に 30 点出土した。鉄滓は椀形鍛冶滓、ガラス質滓、鍛冶滓に分類できる。椀形鍛冶滓には大型（268 ～ 270）と小型（272・273）がある。大きさの違いは排滓場の大きさあるいは掃除の頻度を反映している。いずれも裏～側面にかけて炉体の粘土が付着している。268 は表面にフイゴの羽口破片が付着している。羽口の内径は約 4cm と推定される。裏面には粘土のほか木炭片も付着している。

第 11 表　鉄滓関係遺物点数表（Ⅱ層以下）

分類＼居住域	椀型鍛冶滓			鍛冶滓	ガラス質滓	合計
	大型	小型	破損品			
A						0
AB		1	1		1	3
B						0
C		1			2	3
D	2	3	2		1	8
D 東	1					1
E	2	3	0			5
E 南	1		1			2
F			2			2
G		3		1		4
合計	6	11	6	1	4	28

ガラス質滓（271）は光沢を帯びたガラス質部分が木炭や小礫を取り込んだ状態で凝固している。気泡は 1mm 未満から 1cm 程度の大きさである。

E　石　　器（図版 205 ～ 210・359 ～ 362）

1）概　　要

中世の石器は 72 点出土した。内訳は砥石 71 点・硯３点であり、砥石が９割を占める。このほかに円盤状石製品２点、墨で人物像などが描かれた円礫１点がある（第 12 表）。石器は日常道具として当時の生活の在り方を反映する。そこで、各居住域単位で記載を進め、居住域ごとの違いを比較・検討する。

2）分　　類

石器の分類を以下に記す。

砥石　「刃物を研ぎ鋭利にする道具」［汐見 1999］。研磨に起因する平滑面や刃物傷がある石器を砥石とした。形状と大きさをもとに、以下のように細分した。

A 類：板状の砥石。

B 類：四～多角柱状の砥石。砥面に反りや歪みが生じているものもある。

B1 類：小型、扁平なもの。

B2 類：大型、角柱状のもの。

C 類：素材礫の形状を生かした砥石。

C1 類：手に持って使用可能な小型のもの。

C2 類：置いて使用したと推定される大型のもの。

石材は、A 類が細粒の粘板岩や凝灰岩、B 類が細～中粒の凝灰岩・流紋岩・砂岩等、C 類が黒色で節理が発達した粘板岩を主体に中～粗粒の砂岩や凝灰岩等が用いられている。とくに B 類で多用される黄白色地に鉄分由来の褐色の網目模様がある凝灰岩は、「出羽産」と推定される。

各分類の用途は、A 類が仕上砥、B 類が中砥、C 類が中砥・荒砥に相当しよう。

なお、A 類には鳴滝産及びその可能性があるもの 5 点がある。鳴滝産砥石については刀子や小刀が研磨対象として考えられている。そして、鳴滝産が安定供給されていれば、日常生活で刀子等の刃物類を使用していたであろうことは、金属製品が出土していなくても類推し得る資料になることが指摘されている［汐見 1999］。また、加賀の集落遺跡、木越光琳寺遺跡では鳴滝産などの仕上砥がなく、B 類のような砥石だけが出土した。B 類のような中砥石に見られる反りや歪みは「鎌砥」特有のものである。このことから、住人が鎌を多用し、平刃物も中砥石で研いでいた名主身分の農民が推定されている［垣内 1999］。砥石の分布は第 18 図に示す。

硯　墨をするための道具。ふつう墨をする「オカ」（墨道）、墨汁を溜める「ウミ」（墨池）に分かれ、堤である「フチ」がこれを取り囲んでいる［垣内 1999］。

石製品　扁平な円礫の縁辺に剥離が施され、研磨痕が認められる円盤状石製品 2 点と、人物像などが描かれた円礫 1 点がある。

3）各　　説

各居住域の石器組成は第 12 表、掲載石器の属性等は観察表を参照のこと。

第 12 表　中世石器組成（居住域単位、遺構内外合計点数）

居住域	砥石									硯	円盤状石製品	墨描礫	合計
	A	B			C			不明	小計				
		B1	B2	不明	C1	C2	不明						
A	0	3	2	0	6	1	0	0	12	1	0	0	13
AB	2	2	1	0	1	4	0	0	10	0	0	0	10
B	0	1	0	0	1	0	0	0	2	1	0	0	3
C	1	1	2	0	4	1	1	1	11	0	0	0	11
D	1	1	0	0	0	4	0	0	6	1	1	1	9
D 東	0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
E	1	1	2	0	1	2	0	0	7	0	0	0	7
E 南	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
F	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
G	2	3	3	1	5	6	0	0	20	0	0	0	20
合計	7	12	13	1	18	18	1	1	71	3	2	1	77

※上記のほか、出土地点不明の砥石 C 類 1 点、中世の可能性がある砥石 C1 類 1 点がある。

a　A 区居住域（図版 205・359）

SE6431　274 は扁平礫の両面に微弱な研磨痕が認められる。砥石 C1 類とした。

SE7133　275 は扁平礫の両面に研磨痕が認められる。表面には幅約 2mm の浅い溝状の擦痕が残る。

SB7813–P7201　276 は使用が進み、表裏面の砥面が凹状を呈する。とくに表面で顕著である。表面上部や左側面が破損あるいは剥離後も研磨が続けられている。

SB7821–P6350　277 の表裏面には幅約 3 ～ 4mm の浅い擦痕が密に残る。左右側面には鋭利な刃物傷

が残る。

P7179　278 は両面に鋭い刃物傷が残る。

SD6003　279 は上部と右半分、縁の上半部を欠損する。ウミ中央が深く研磨され、長軸方向の擦痕が明瞭に残る。粘板岩製なので破損面は鋭利になるはずだが、279 に関しては割れ面の鋭さを欠き、丸みを帯びる。合わせて破損する縁部にも研磨が及ぶことから、欠損後は砥石に転用されていた可能性がある。

遺構外　B2 類の砥石 1 点と C1 類の砥石 2 点（280・281）がある。281 の表面は擦痕も目立つが、砥面も黒光りするほど研磨が進んでいる。

b　AB 区居住域（図版 205・206・360）

SE7642　282 は全面が厚く炭化物（煤）に覆われているため、詳細は不明であるが、炭化物の合間に砥痕や擦痕を見出すことができる。

SE7534　283 は緑色がかった凝灰岩製で、上野産と推定される。

SE8381　284 は比較的細粒の凝灰岩製である。下端の破損（折断？）面も研磨に用いられている。

SE7790　285 は被熱しており、幅約 2 ～ 3cm の帯状に煤が巡る。下半部の破損は被熱後である。

SE8506　砥石 A 類（286）と C2 類（287）がある。286 は節理に沿って剥離した面を表裏の砥面としている。裏面はまだ砥痕が顕著ではない。287 は被熱が原因で、裏面が剥落している。

P7373　288 は表裏面と右側面が平滑な砥面である。残る面では、砥痕は顕著ではないが刃物傷が残る。

SB7823–P7420　289 の表面は非常に平滑な砥面で、細かな擦痕が多数認められる。左下に幅、深さとも約 1mm の太い刃物傷が 1 条残る。右側面には多数の太い刃物傷、裏面には多数の細い擦痕に混じり、太い刃物傷も数条認められる。

SD7787　290 の石材は破損面の新鮮な割れ口で観察すると、硬質・緻密であることが分かる。裏面が凹状を呈するが、むしろ表面に顕著な摩耗が見られる。

遺構外　291 は表面・下面に擦痕が認められる。

c　B 区居住域（図版 206・360）

SK8331　292 は三角柱の礫の 3 面に研磨痕があるが、裏面は顕著ではない。表面と右側面は研磨が進み、黒光りしている。面境の稜線は、刃物で面取りされたようになっている。右側面には敲打痕が残る。

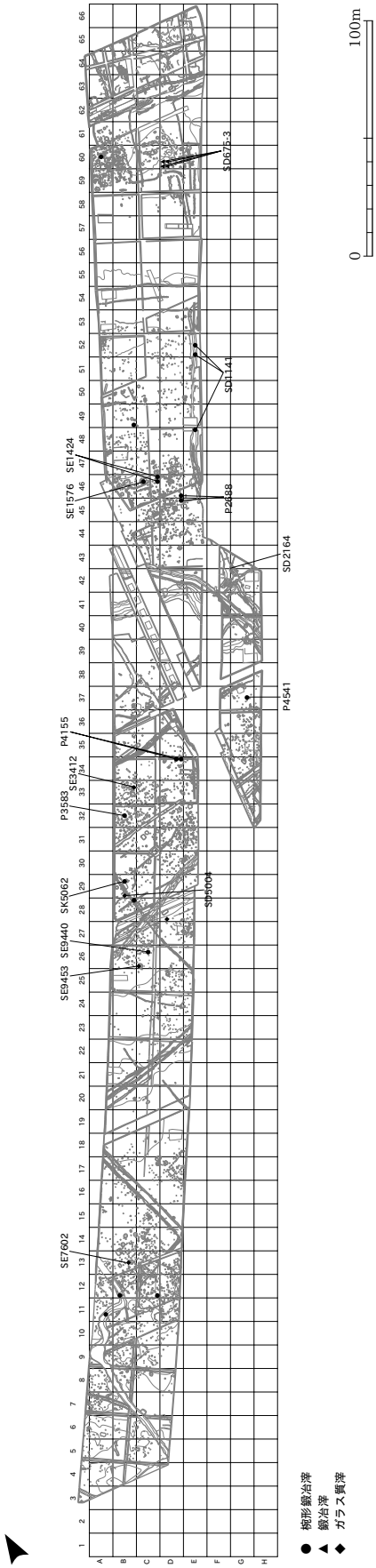
SB8025–P8408　293 は左側とフチを欠損する。ウミ側の縁は欠損面に漆が付着している。このことから、破損後も漆で補修して使い続けられたと推定される。

遺構外　294 は上下端を欠損（折断？）後、研磨が続けられている。

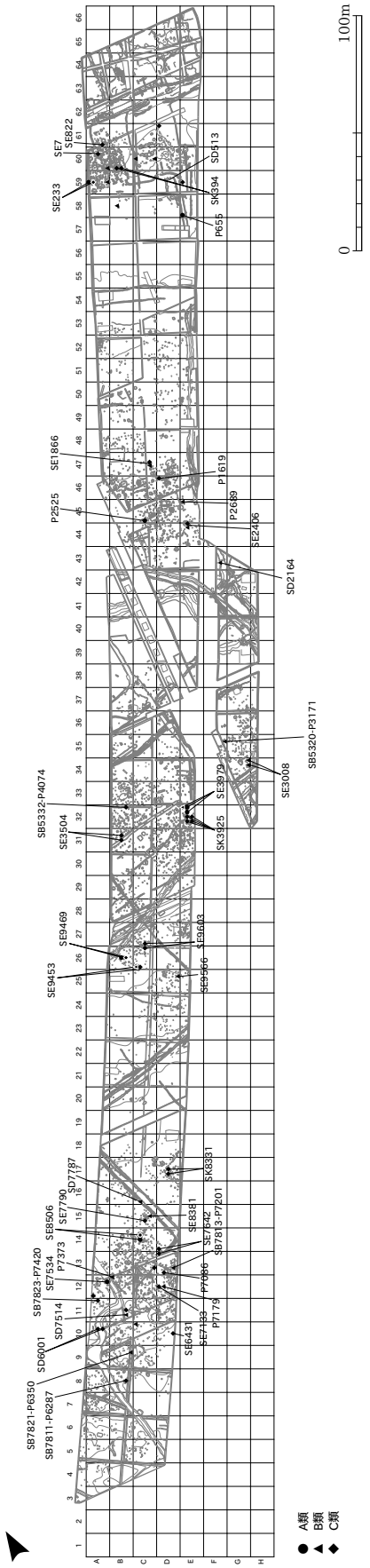
d　C 区居住域（図版 206・207・360）

SE9453　砥石 4 点がある。295 は凹面状の砥面が使いこまれており、最も薄い部分の厚さは 8mm である。296 の砥面は研磨のために光沢を帯びている。297 の砥面は平滑で、細かな擦痕が見られる。298 は左側面に残る砥面から、大型の置砥石の破片であることが分かる。表裏面となる稜線に摩耗は見られないので、表面に残る加工痕や使用痕は破損前についた可能性が高い。表面左下にはハツリ痕が残る。工具の刃部幅は約 1cm である。

SE9469　砥石が 2 点ある。299 の素材礫の表面には節理に沿って凹凸がある。表面中央には細い擦痕が



第17図　鉄滓分布図



第18図　中世砥石分布図

密集する。裏面にもわずかに刃物傷が残る。300 は裏面が節理で剥落している。下端部に右側面方向から鋸引きをし、最後に折り採った痕跡が残る。

SE9603　砥石が 2 点ある。301 は裏面等を節理での剥落で欠損する。表面の平滑な砥面には長軸方向の擦痕が残る。工具幅は 3 ～ 4mm と推定される。302 は扁平礫の表裏面に弱い研磨痕がある。表面や右側面には刃物傷が残る。

SE9566　303 は上下端の剥離面（折断面？）にも、研磨が及び始めている。

遺構外　304 は細長い角柱状の礫を素材とする。裏面に微弱な砥面がある。右側縁は稜線状に斜め方向の擦痕が連続する。

e　D 区居住域（図版 207・208・361）

SE3504　305 は扁平な礫を素材とする置き砥石である。周縁部に炭化物が厚く付着する。

SE3979　306 は鳴滝産の硯に似た粘板岩製である。中央付近で縦に 2 分割されたものが、漆で接着されている。右側面にも黒漆が厚く付着しているので、本来は破片が接着されていたと推定される。

SE3511　307 は節理が発達した砂岩製である。表裏面に墨で絵が描かれているが、墨痕は非常に不鮮明である。表面は人物像である。顔は丸顔に目と眉がある。刀のような細長いものを持った右手を掲げ、左手は腰に当てられている。両足で立っているようであるが、何かの上に乗っているようにも見える。裏面は意匠不明である。動物のようにも見える。307 は遺構掘削時に発見したのではなく、同遺構の掘削土や礫を積んでおいた排土山から発見した。このような経緯であるため、出土状況の詳細は不明である。

SA5322–P3582　308 は鳴滝産の硯である。裏面には「硯」の文字が刻書されている。ウミ側のフチが節理に沿って剥がれているが、漆で補修されている。オカ側の硯面は装飾的に彫り込まれているが、フチの延長線上にケビキが残っている。側縁から硯面を削り出す際の目印であろう。

SB5332–P4074　309 は表面が非常に平滑な砥面である。

SD3501　310 は扁平な礫を素材とする置砥石で、表面は緩やかな凹面を呈する。

遺構外　円盤状石製品（311）と砥石（312）がある。311 は円盤状石製品で、裏面左下に刃物傷がある。上部のえぐりは不明瞭である。312 は砥石 B1 類の破片である。腹面にも摩耗が見られる。

f　D 東区居住域（図版 208・361）

SB5320–P3171　313 は大型の粗目の置砥石で、各砥面は凹状を呈する。とくに裏面中央は深くくぼんでいる。

SE3008　314 は石英粒を多く含む凝灰岩製である。暗灰色を呈する。上下の破損（折断？）面にも刃物傷が残る。伊予産の可能性がある。

g　E 区居住域（図版 209・361・362）

SE2406　315 は六角柱の置砥石である。砥面は緩やかな凹面を呈する。表面の幅が狭い砥面は段差が生じるほどに強く研磨されている。316 は表面に平滑な砥面がある。裏面は厚く煤が付着する。

SE1866　317 は破損して中間を欠損する。表裏面と左側面の砥面は平滑で光沢を帯びる。

P2689　318 は左側面の砥面が凹状を呈するほかは、比較的平らである。右側面には石材切り出し時の鑿痕と見られる傷が並行する。

P2525　319 は鳴滝産仕上砥である。両側面と上下端の小口に原石切り出し時の鋸痕が残る。上下端部ともに鋸は砥面方向から入れられ、上端では表側で折り採られている。両小口と両側面に成形痕が残るので、生産地の出荷時製品規格を推定することができる。寸法は長さ 157mm（5.2 寸）、幅 35.7mm（1.2 寸）、厚さ 6.5mm（0.2 寸）であり、汐見氏が鎌倉市内の遺跡出土品に基づいて算出した鳴滝砥の規格「幅 1 寸 2 分・長さ 6 寸」［汐見 1999］に当てはまる。砥面が平らなので、鎌のような湾曲した刃部を研ぐためのものではない。

P1619　320 は表裏面に砥面があるが、とくに表面はまっ平らになるほど平滑である。上端に刃物傷が大きく残る。

h　E 南区居住域（図版 209・362）

SD2164　321 は下端の破損（折断？）面にも研磨が開始されている。

i　F 区居住域（図版 209・362）

遺構外　322 は円盤状石製品で、礫の一端に剥離が加えられている。

j　G 区居住域（図版 209・210・362）

SE7　323 は三角柱状の礫を素材とし、表面と右側面に砥面を持つ。両側面には敲打痕も認められる。裏面には砥面が形成されていないが、深い刃物傷が残る。

SE233　324 は扁平な礫の表裏面に砥面がある。裏面は非常に平滑だが、表面はややざらつく。表面には幅約 3mm の溝状の刃物傷がある。右側面の砥面も裏面と同様、非常に平滑である。325 は砥石 C2 類の破片である。

SD513　326 は表面右側が階段状に下がるいびつな形状の粘板岩を素材としている。表面では出っ張った左半分に擦痕が残る。

P655　327 は鳴滝産仕上砥石である。表裏面に剥落があるが、その面にも擦痕が残る。

SK394　328 は、両側面は平滑な砥面であるが、表面はざらつき、なおかつ歪みがある。

遺構外　砥石 10 点が出土し、B1 類 3 点（329･332･333）、B2 類 3 点（330･331･334）、C1 類 3 点（335）、C2 類 1 点（336）に細分される。335 は棒状の礫の表裏面･両側面に研磨痕があるが、左側面は微弱である。細かな擦痕がほぼ全面を覆う。

F　木　製　品（図版 211 ～ 218・363 ～ 370）

1）概　　要

木製品はすべて井戸から出土した。各井戸の木製品組成を第 13 表に示す。木片・竹片・炭化木は木製品ではないが、祭祀等に関連する可能性もあり、表に入れた。点数は破片数であり個体数とは異なる。各遺物の出土位置等の属性は観察表に記す。

2）各　　説

a　A 区居住域（図版 211・363）

SE6209　337・338 は井戸底部で出土した加工痕のある板材で、井戸側板の可能性がある。珠洲焼の壺

第 13 表　各井戸の木製品組成（破片数）

		容器																		食事具			祭祀具		服飾具	運搬具	農具	部材			その他															
居住域	遺構番号	漆器椀	漆器皿	漆器小皿	漆器	白木椀	白木皿	木地椀	椀	曲物	曲物側板	曲物側板？	曲物底板	曲物底板？	曲物部材	曲物蓋？	曲物籠	折敷	折敷底板	枡	箸状木製品	箸状木製品？	しゃもじ状木製品	人形	板状人形	下駄	櫂	鍬の柄	井戸側板	井戸枠	井戸枠？	杭	杭？	栓状木製品	不明木製品	用途不明品	用途不明部材	加工材	部材	加工板	板材	薄板	竹薄割	木片	竹片	炭化材	炭化木
A居	SE6189																																								1						
	SE6209										1																		2			1					1									4	
	SE6278																									1																					
	SE6288																				1																4						10			
	SE7320																				1																										
	SE7323		1								1			1																						1										
	SE8529	2	1		1	1				1					5																			2		1			4		1	17			
	合計	2	2		1	1				1	2			1	5						2					1			2			1			2		7			5		1	27		4	
AB居	SE7602																																											7			
	SE7606																																											2			
	SE7608																																								1						
	SE7641																																			1							4			
	SE7642	1								3																1	1									2				1			2			1
	SE7692																																											4			
	SE7777		1	1									1								3	1			1									1							1			7			
	SE7790	1				1				3					4																										2			5			
	SE8381														1					1																								1			
	合計	2	1	1		1				6			1		5					1	3	1			1	1	1							1		3				5			32			1
B居	SE8353	3								1	1																																				
	合計	3								1	1																																				
C居	SE9440																																											1			
	SE9453									1											1	2				1		1																4			
	SE9469																																											4			
	SE9523																																			1							2			
	SE9566																																											3			
	SE9603					1	1		1	1					2																1									1			3			
	合計					1	1		1	2					2						1	2				1		1			1					1				1			17			
D居	SE3384				1																																										
	SE3412	2								1	1											1	1											1			1										
	SE3504										2		1																															6			
	SE3508				1								1						3		1																							11			
	SE3913	1											1					1													1													1			
	SE3979				1						1					1	1	1	1		20	1		1								1				1	14	2			7						
	SE5177B																																				1										
	SE9654														1						1	2														1	1			1			3	1		
	SE9660																																											4			
	合計	3			3					1	4		3		1	1	1	2	4		22	4	1	1							1	1		1		2	17	2		1	7		25	1		
D東居	SE3008	1						1			1								5											1						1		1									
	SE3009	1																																													
	SE3476									1			1																						1											
	合計	2						1		1	1		1						5											1					1	1		1									
E居	SE1577	1																																													
	SE2001																																											1			
	SE2201																																											6			
	SE2406						1		2												3													2													
	SE2608									1																																					
	合計	1					1		2	1											3													2									7			
G居	SE7										1																			1		3						1								
	SE197										6																																				
	SE226																					1																									
	SE245											1	1	1																				3													
	SE601				1						3		1				1				1	2								3	12																
	SE606																																	1													
	SE648										5	1										1											1	5				1	1								
	SE822									1			5								1								3	5	1		6						1								
	合計				1					1	15	2	7	1			1				2	4							3	8	14		9	1	9				3								

（84）を覆うように位置していた。

SE6288　339 は箸状木製品で、一端を欠く。

SE7320　340 は箸状木製品で、一端を欠く。

SE6278　341 は下駄で、歯の部分のみ遺存する。

SE7323　343 は曲物底板である。344 は内外面黒漆塗りの漆器皿で、見込みに朱書き文様がある。

SE8529　井戸水溜の曲物のほか、漆器片 1 点、白木の椀（347）、板材 4 点、竹薄割り 1 点、木製品 2 点、木片約 20 点が出土した。345 は加工木材で、側面にえぐりがあり、両端部は切断痕が残る。曲物は脆弱なため図化できなかった。

SD6003　342 は木杭で、先端部は加工されるが、ほかは樹皮が残存する。

b　AB 区居住域（図版 212・213・363・364）

SE7642　348 は櫂と見られ、両端部を欠損する。349 は下駄である。350 は漆器椀である。351・352 は両端部に穿孔があり、ともに同じ寸法であることから、同一製品の部材であろう。用途は不明である。ほかに曲物片 3 点、板材 1 点、木片 2 点、炭化木 1 点がある。漆器椀（350）と炭化木が 7 層、ほかは 8

層出土である。

SE7641　353 は自然木を半裁し、両端部にえぐりを施す。ほかに木片 4 点が 10・12 層から出土した。

SE7777　354 は板状の人形である。人物を横から見た姿が彫刻されている。355 ～ 357 は箸状木製品で、すべて一端を欠く。358 は漆器の皿で内外面が黒漆塗りである。359 は曲物底板で片面は炭化している。ほかに漆皿塗膜 1 点、板材 1 点、不明木製品 1 点、木片 7 点が 6・7 層から出土した。

SE8381　360 は枡の部材で、すべての端部に木釘やその痕跡が確認できる。ほかに曲物部材 1 点が 12 層から、木片 1 点が 10 層から出土した。

SE7790　361 は曲物である。側板の遺存状態は悪い。底板は側面に釘穴が確認できる。362・363 は曲物側板の綴じ部で、それぞれ厚みと、材質に違いがあることから別個体と判断する。また、両者ともに表面は炭化する。364 は漆器椀である。このほかに炭化米の塊がある。握りこぶし大なので当初は握り飯の可能性も考えた。しかし、指痕が観察されないことや、塊内部から広葉樹の葉がはみ出ていることなどから、廃棄あるいは井戸廃絶に伴う供物が偶然、塊になって残ったものと考える。

c　B 区居住域（図版 213・365）

SE8353　365 は曲物側板である。366 ～ 368 は漆器椀である。366 は高台内も漆塗りである。368 は底部に文字が刻まれており、「五」または「玉］と判読できる。

d　C 区居住域（図版 213・214・365・366）

SE9603　369 は曲物である。内面はケビキ線が著しい。370 は木杭で先端部に加工が施される。371 には漆層はなく、炭粉地のみが塗布されている。このため未完成品の可能性もある（第Ⅵ章 7 節参照）。372 は白木の皿である。ほかに白木椀片 1 点が 11 層、曲物片 2 点、板材 1 点、木片 3 点が 10 ～ 12 層から出土した。

SE9453　373 は鎌の柄と考えられる。先端部の割り込みに金属部が残る。374 は柄杓である。376 は箸状木製品である。375 は連歯下駄で、2 対の貫通孔がある。ほかに箸状木製品 2 点、木片 4 点が 16・17 層から出土した。

SE9523　377 は角棒状木製品で先端に加工とえぐりがある。ほかに木片 2 点が 16 層から出土した。

e　D 区居住域（図版 214 ～ 216・366・367）

SE9654　378 は板状で、穿孔があり、両側部に三角形のえぐりがある。379 は表面全体に加工痕がある。380 は箸状木製品である。ほかに 5 層から曲物片・木片各 1 点、10 層から木片 2 点、竹片 1 点、箸状木製品？ 2 点が出土した。

SE3508　381 ～ 384 は曲物または折敷の底板で、それぞれ刃物傷がある。ほかに 5 層から赤絵のある漆塗膜 1 点、7 層から箸状木製品？ 1 点、木片 8 点、8 層から木片 3 点が出土した。

SE3504　385 は曲物底板である。縁辺部に貫通孔が確認できる。ほかに 10 層から曲物側版片 2 点、8・10・不明層から木片 6 点が出土した。

SE3913　386 は漆器椀、387 は曲物底板、388 は杭である。このほか最下層から折敷片 1 点、木片 1 点が出土した。

SE3412　389 はしゃもじ状木製品である。390 は漆器椀で、見込み中央に朱書きで文様が描かれている。

391a･b は曲物で、391b は口縁部破片である。このほか 5 層から漆椀片 1 点、最下層から箸状木製品？1 点が出土した。このほか 4 層から漆椀片 1 点、最下層から箸状木製品・不明木製品各 1 点が出土した。

SE3979　392 は蓋類の可能性がある。中央の穴は、持ち手を付けるための穴であろう。393 は折敷の底板。394・395 は表面が加工されているが、用途は不明である。396 ～ 406 は箸状木製品である。407 は人形であり、ほぼ完形である。354 が平面的な表現なのに対して、こちらは頭部を立体的に表現している。下端はあらかじめ全周に刻みをいれてから折っている。このほか箸状木製品 10 点、薄板 7 点、加工材 13 点、部材 2 点、杭？1 点、折敷・漆塗膜・曲物側板片・曲物箍片各 1 点、自然木 12 点がある。本遺跡の井戸では最も多くの遺物が包含されていた。

f　D 東区居住域（図版 216・367・368）

SE3008　411 は木地椀の未使用品である（第Ⅵ章 7 節参照）。412 は漆器椀で側面 2 か所と見込みに朱書きで絵が施される。絵柄はすべて同一と見られる。413 は端部にえぐりを入れた加工製品であるが用途は不明である。414 ～ 418 は折敷または曲物底板で、刃物傷や 2 か所の穿孔があるものもある。このほか、最下層から井戸枠？・部材・側板・樹皮各 1 点が出土した。

SE3476　408 は曲物で、ほぼ完形である 409 は曲物底板で、片面の表面は炭化が見られる。410 は破損のため全体の形状は不明確であるが、しゃもじ状木製品の可能性がある。

g　E 南区居住域（図版 217・368）

SD2050　419 は木杭で、先端部のみの加工である。このほか杭？2 点がある。

h　E 区居住域（図版 217・368）

SE2406　420 ～ 422 は箸状木製品で、すべて一端を欠いている。423 は白木皿である。424・425 は白木または漆の椀で、重なって出土した。425 は摺り漆のみで漆層がない（第Ⅵ章 7 節参照）。このほか 10 層から木製品？2 点が出土した。

SE1577　426 は漆塗膜のみであるが、朱漆塗の椀である（第Ⅵ章 7 節参照）。

i　G 区居住域（図版 217・218・369・370）

SE245　427 は曲物底板で、全体に複数の刃物痕がある。このほか曲物底板？・側板？各 1 点、不明木製品 3 点がある。

SE601　428 は箸状木製品で一端を欠いている。429・430 は曲物底板で、重なって出土した。432 は曲物側板である。このほか箸状木製品？3 点、曲物箍片 1 点、曲物側板・その可能性があるもの各 1 点、井戸枠 3 点、井戸枠の可能性があるもの 11 点、枝 3 点がある。

SE648　433 は木栓状製品である。434 は曲物側板である。そのほか箸状木製品？1 点、曲物側板 4 点、その可能性があるもの 1 点、部材・板各 1 点、不明木製品 5 点、木片 2 点がある。

SE822　435 は箸状木製品でほぼ完形である。436 ～ 438 は曲物底板である。439 は大型の曲物である。ほぼ完形である。440 ～ 442 は井戸の側板である。この中で 440 は屈曲する側板同士が接合し、舟を転用したものと考えられる。そのほか、曲物側板・底板各 1 点、板 1 点、杭？6 点、井戸枠 6 点がある。井戸枠のうち 1 点は舟を転用したものである。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　植物珪酸体

鈴木　　茂（株式会社　パレオ・ラボ）

A　はじめに

新潟県村上市古渡路に所在する古渡路遺跡は、三面川と門前川に挟まれた沖積地上に立地している。この古渡路遺跡において行われた発掘調査で、13 世紀後半～ 15 世紀中頃と考えられている時期の掘立柱建物、井戸、溝、道路、水田などが、また、縄文時代中期以降と考えられている陥穴列も出土している。以下に、この陥穴や基本土層より採取された土壌試料について行った植物珪酸体分析の結果を示し、縄文時代前期末葉～後期のイネ科植生について検討した。

B　試料と分析方法

分析用試料は基本土層及び陥穴より採取された 7 試料（試料番号 1 ～ 7）である。各試料について、試料 1（JSK9703 トレンチの基本土層Ⅳ d 層）は暗オリーブ褐色の砂質粘土で、縄文時代中期～後期の包含層である。試料 2（JSX9747 の基本土層Ⅴ層）は出土した土器の直下より採取された土で、縄文時代中期初頭の包含層である。試料 3（D 区基本土層Ⅵ層）は暗オリーブ褐色の砂質粘土、縄文時代前期末葉の包含層である。試料 4（D 区基本土層Ⅶ a 層）はオリーブ黒色の粘土で、同じく縄文時代前期末葉の包含層である。試料 5（JSK9741 の 2 層）はオリーブ色の粘土が混じる黒褐色粘土で、縄文時代中期以降の陥穴覆土である。試料 6（JSK9820 の 3 層）は暗褐色の粘土で、縄文時代中期以降の陥穴覆土である。試料 7（JSK9703 の 3 層）は黒～黒褐色の粘土で、同じく縄文時代中期以降の陥穴覆土である。これら 7 試料について下記の方法にしたがって植物珪酸体分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30％の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体についてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

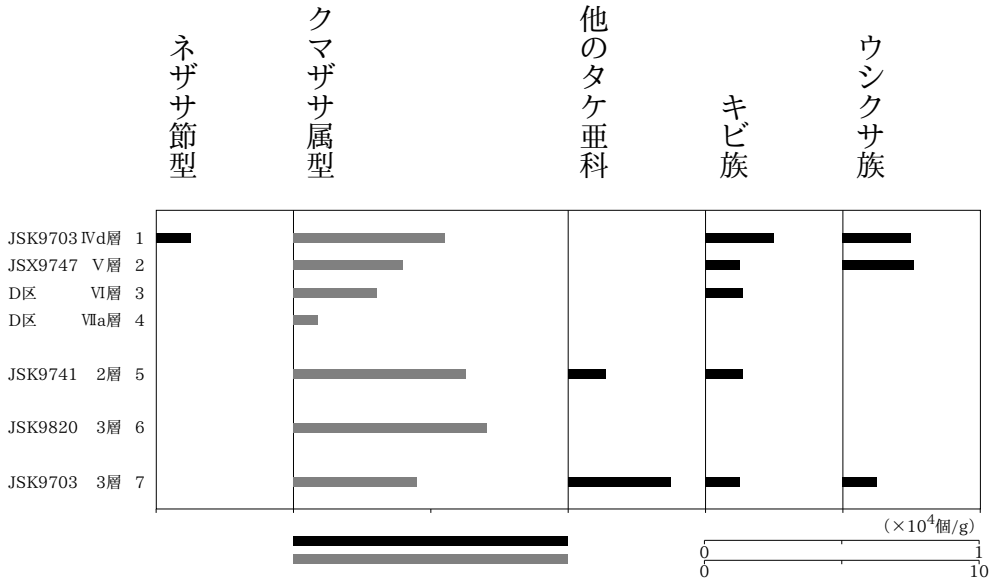
C　分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当たりの各機動細胞珪酸体個数を求め（第 14 表）、それらの分布を第 19 図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料 1g 当たりの検出個数である。

検鏡の結果、最も多く検出されたのはクマザサ属型で、多くの試料で 30,000 個以上を示しており、試料 6 では 70,000 個を超えている。その他、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などが観察されているが、個数的には 2,000 個前後と少ない。その中ではキビ族が多くの試料で観察されている。

第 14 表　試料 1g 当たりの機動細胞珪酸体個数

試料番号	ネザサ節型（個 / g）	クマザサ属型（個 / g）	他のタケ亜科（個 / g）	キビ族（個 / g）	ウシクサ族（個 / g）	不明（個 / g）
1	1,200	55,000	0	2,500	2,500	3,700
2	0	39,800	0	1,300	2,600	3,900
3	0	30,500	0	1,400	0	1,400
4	0	9,000	0	0	0	2,200
5	0	62,400	1,400	1,400	0	1,400
6	0	70,300	0	0	0	1,300
7	0	44,800	3,700	1,200	1,200	8,700



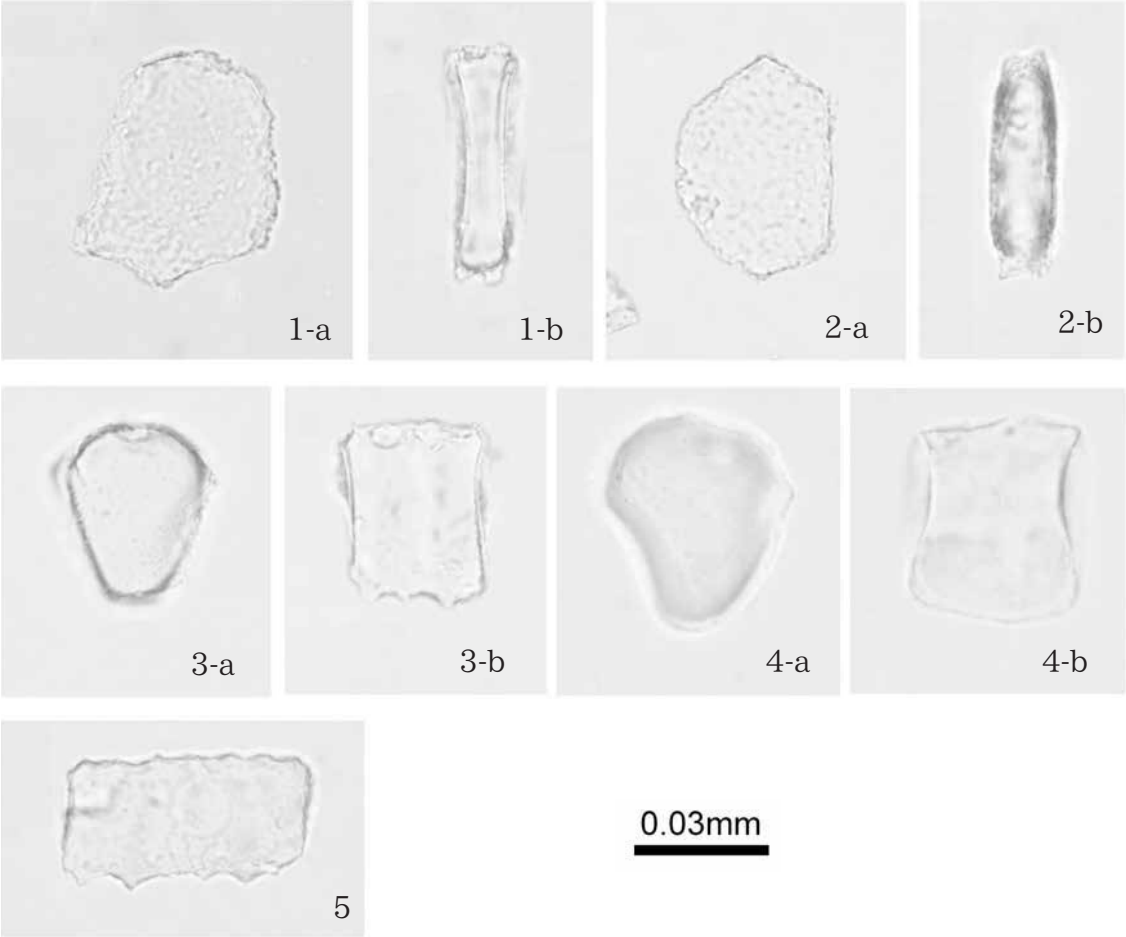
第 19 図　機動細胞珪酸体分布図

D　古渡路遺跡周辺のイネ科植物

上記したように、クマザサ属型の機動細胞珪酸体が多く検出されている。このクマザサ属型のササ類（チマキザサ、スズダケなど）は森林の下草的存在で生育していたと推測される。花粉分析結果を見ると、スギやコナラ属コナラ亜属などが検出されており、遺跡周辺ではこれらの樹木が生育していたと考えられている（第Ⅵ章 2 参照）。こうしたことから縄文時代中期以降の古渡路遺跡周辺ではスギやコナラ亜属などが生育する森林の下草的存在でチマキザサなどのクマザサ属型のササ類が広く分布していたと推測される。また、キビ族（イヌビエ、エノコログサなど）やウシクサ族（ススキ、チガヤなど）は日のあたる開けたところに生育していたと考えられ、遺跡周辺の空き地や花粉分析で存在が推測されている湿地などの周辺に分布していたと見られる。

こうしたイネ科植生について、縄文時代前期に相当する試料 3・4 においてクマザサ属型は増える傾向を示していることから、上記したイネ科植生は前期頃より拡大し始めた可能性が推察される。

なお、昨年度に行った植物珪酸体分析においてイネの機動細胞珪酸体が多く観察され、検出された水田遺構を支持する結果が示されたと判断されている。花粉分析結果を見ると、縄文時代中期の古渡路遺跡周辺では湿地や水域の存在が推測され、その周辺に樹木のハンノキ属、サワグルミ属－クルミ属、トチノキ属、草本類のイネ科、ヨモギ属、水生植物のガマ属、オモダカ属などが生育していたと考えられている。詳しい時期は不明であるが、こうした所を切り開き水田がつくられ、稲作が行われるようになったと思われる。



1、2：クマザサ属型（ａ：断面、ｂ：側面）1：試料5、2：試料7
3：他のタケ亜科（ａ：断面、ｂ：側面）試料5
4：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）試料1
5：キビ族（側面）試料5

第 20 図　古渡路遺跡の機動細胞珪酸体

2　花粉化石

鈴木　　茂（株式会社　パレオ・ラボ）

A　はじめに

新潟県村上市に所在する古渡路遺跡において行われた発掘調査で、縄文時代中期以降と考えられている陥穴列などが検出された。以下に、この陥穴より採取された土壌試料を用いて行った花粉分析結果を示し、縄文時代中期以降における古渡路遺跡周辺の古植生についての検討を試みた。

B　試料と分析方法

試料は、縄文時代中期以降と考えられている陥穴３基より採取された陥穴覆土３点（試料番号５～７）である。各試料について、試料５(JSK9741の２層)はオリーブ色の粘土が混じる黒褐色粘土、試料６(JSK9820の３層）は暗褐色粘土、試料７（JSK9703の３層）は黒～黒褐色の粘土である。花粉分析はこれら３試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約 5g）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え 20 分間湯煎する。水洗後 0.5mm 目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に 46％フッ化水素酸溶液を加え 30 分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液：比重 2.1 を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸の混酸を加え 3 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

C　分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉 14、草本花粉 7、形態分類を含むシダ植物胞子 3 の計 24 である。これら花粉・胞子の一覧を第 15 表に示したが、分布図については得られた花粉化石数が少なく、分布図として示すことができなかった。なお、表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

検鏡の結果、先にも記したが得られた花粉化石数、分類群数ともに少ない結果であった。そのうち樹木花粉のサワグルミ属－クルミ属とコナラ属コナラ亜属、草本類のイネ科の 3 分類群のみが全試料で観察された。樹木花粉はそのほか、スギ、ハンノキ属、ブナ属、カエデ属、トチノキ属などが観察されている。また、草本類はイネ科のほかにアブラナ科、マメ科、ヨモギ属などが得られており、試料 7 においては水生植物のガマ属、オモダカ属が検出されている。

第 15 表　産出花粉化石一覧表

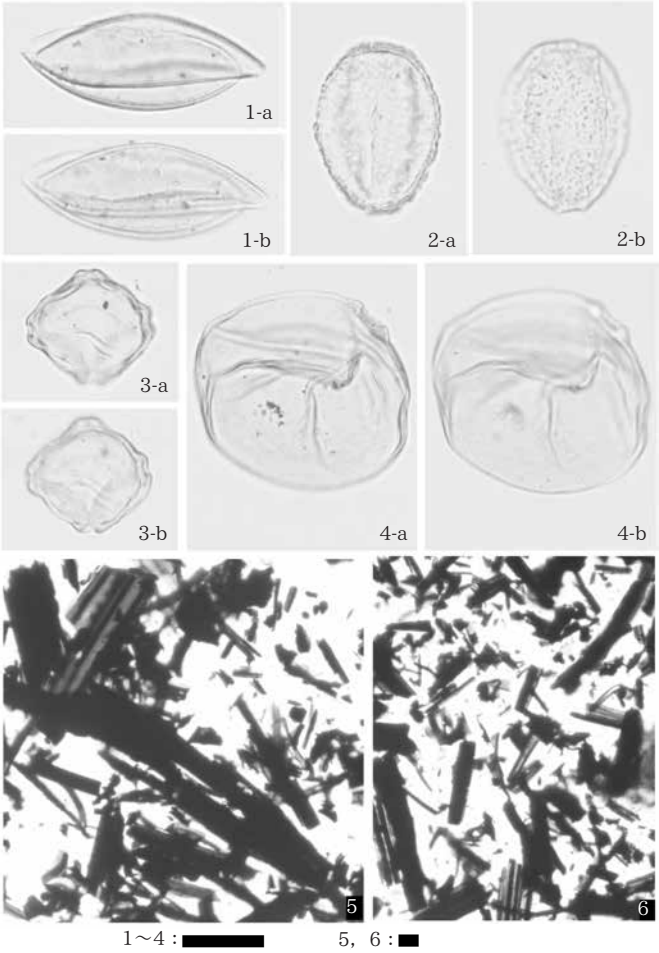
和名	学名	5	6	7
樹木				
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	-	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	1	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T. - C.	-	1	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya - Juglans*	2	1	3
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	-	-	4
ブナ属	*Fagus*	-	1	1
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	2	3	8
ヤドリギ属	*Viscum*	-	-	1
キハダ属	*Phellodendron*	-	1	-
ニシキギ科	Celastraceae	1	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	1
トチノキ属	*Aesculus*	-	1	-
ガマズミ属	*Viburnum*	2	-	-
草本				
ガマ属	*Typha*	-	-	1
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	1
イネ科	Gramineae	2	6	5
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	1
アブラナ科	Cruciferae	1	-	2
マメ科	Leguminosae	1	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	6	-	6
シダ植物				
ゼンマイ科	Osmundaceae	-	-	7
単条型胞子	Monolete spore	12	9	9
三条型胞子	Trilete spore	2	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	8	9	19
草本花粉	Nonarboreal pollen	10	6	17
シダ植物胞子	Spores	14	10	16
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	32	25	52
不明花粉	Unknown pollen	3	0	2

T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae を示す

D 考　　察

上記したように得られた花粉化石数、分類群数ともに少ない結果であった。第21図で示したように作製したプレパラート中には植物遺体が多く認められるものの花粉化石は少なく、その多くがボロボロに傷んでいるものであった。こうしたことから、多くの花粉化石は分解消失している可能性が高いと思われる。よって、古渡路遺跡周辺の古植生については概略を述べるに留め、遺跡周辺に成立していた森林の様相については今後の課題としたい。

縄文時代中期以降の古渡路遺跡周辺にはスギ、コウヤマキ属といった針葉樹や、コナラ亜属、クマシデ属－アサダ属、カエデ属などの落葉広葉樹類が生育していたと見られる。また、水生植物のガマ属、オモダカ属（いずれも抽水植物）が検出されていることから、遺跡周辺においてはこれらが生育できる湿地や水域の存在が推測される。この湿地や水域周辺に湿地林要素のハンノキ属が分布していたと見られ、サワグルミ属－クルミ属やトチノキ属、草本類のイネ科、ヨモギ属なども付近に生育していたであろう。また、ヤドリギ属がこれら樹木に寄生していたと見られる。さらに、植物珪酸体分析においてクマザサ属型が多く検出されていることから、これら樹木類の下草的存在でチマキザサやスズダケといったクマザサ属型のササ類も多く生育していたことが推測されよう。



1：イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 PLC.SS 5030 試料6
2：コナラ属コナラ亜属 PLC.SS 5031 試料6　4：イネ科 PLC.SS 5029 試料6
3：ハンノキ属 PLC.SS 5032 試料7　5、6：プレパラートの状況 5：試料5、6：試料7

第21図　古渡路遺跡の花粉化石（scale bar：0.02mm）

3　プラント・オパール

鈴木　　茂（株式会社　パレオ・ラボ）

A　はじめに

新潟県村上市古渡路に所在する古渡路遺跡において行われた発掘調査で、掘立柱建物、井戸、溝、道路、水田などの遺構が検出されている。時期は出土遺物から 13 世紀後半～ 15 世紀中頃と考えられている。この発掘調査の際、調査区壁面より水田遺構を検証する目的で土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、水田稲作について検討した。

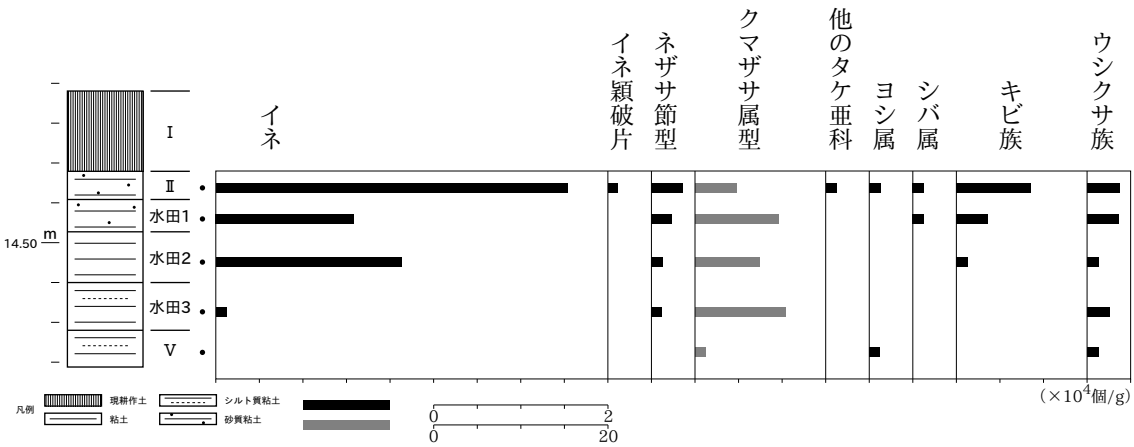
B　試料と分析方法

分析用試料はＨ区Ｇブロックの南壁セクションより採取された５試料（Ⅱ層、水田１層～水田３層、Ｖ層）である。各試料について、Ⅱ層試料は暗オリーブ褐色の砂質粘土で、その上位Ⅰ層は現水田耕作土である。水田１層試料はⅡ層より明るい暗オリーブ褐色の砂質粘土、水田２層試料はオリーブ黒色の粘土、水田３層試料は黒褐色のシルト質粘土、Ｖ層試料は灰色のシルト質粘土である。これらのうち、Ⅱ層は中・近世包含層、水田１・２層は中世～近世、水田３層が中世である。これら５試料について下記の方法にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにと

第 16 表　試料 1g 当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ（個 /g）	イネ穎破片（個 /g）	ネザサ節型（個 /g）	クマザサ属型（個 /g）	他のタケ亜科（個 /g）	ヨシ属（個 /g）	シバ属（個 /g）	キビ族（個 /g）	ウシクサ族（個 /g）	不明（個 /g）
Ⅱ	40,300	1,200	3,700	47,600	1,200	1,200	1,200	8,500	3,700	7,300
水田１層	15,900	0	2,400	96,500	0	0	1,200	3,700	3,700	6,100
水田２層	21,300	0	1,300	74,000	0	0	0	1,300	1,300	3,800
水田３層	1,200	0	1,200	103,400	0	0	0	0	2,500	3,700
Ⅴ	0	0	0	12,700	0	1,300	0	0	1,300	1,300



第 22 図　古渡路遺跡のプラント・オパール分布図

り、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30％の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300 個に達するまで行った。

C　分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当たりの各プラント・オパール個数を求め（第 16 表）、それらの分布を第 22 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1g 当たりの検出個数である。

検鏡の結果、地山試料を除く 4 試料からイネのプラント・オパールが検出された。個数的には最上部のⅡ層試料が約 40,000 個と最も多く、水田 1 層試料、水田 2 層試料も 15,000 個以上を示しているが、水田 3 層試料は 1,000 個をやっと超えた程度である。またⅡ層試料からはイネの穎部（籾殻）に形成される珪酸体の破片が若干観察されている。

イネ以外ではクマザサ属型が最も多く、水田 3 層試料では 100,000 個を超えている。キビ族は上位試料において急増しており、ネザサ節型も上部で漸増している。その他ではウシクサ族が 3,000 個前後を示しており、ヨシ属はⅡ層と地山で、シバ属は上位 2 試料で若干観察されている。

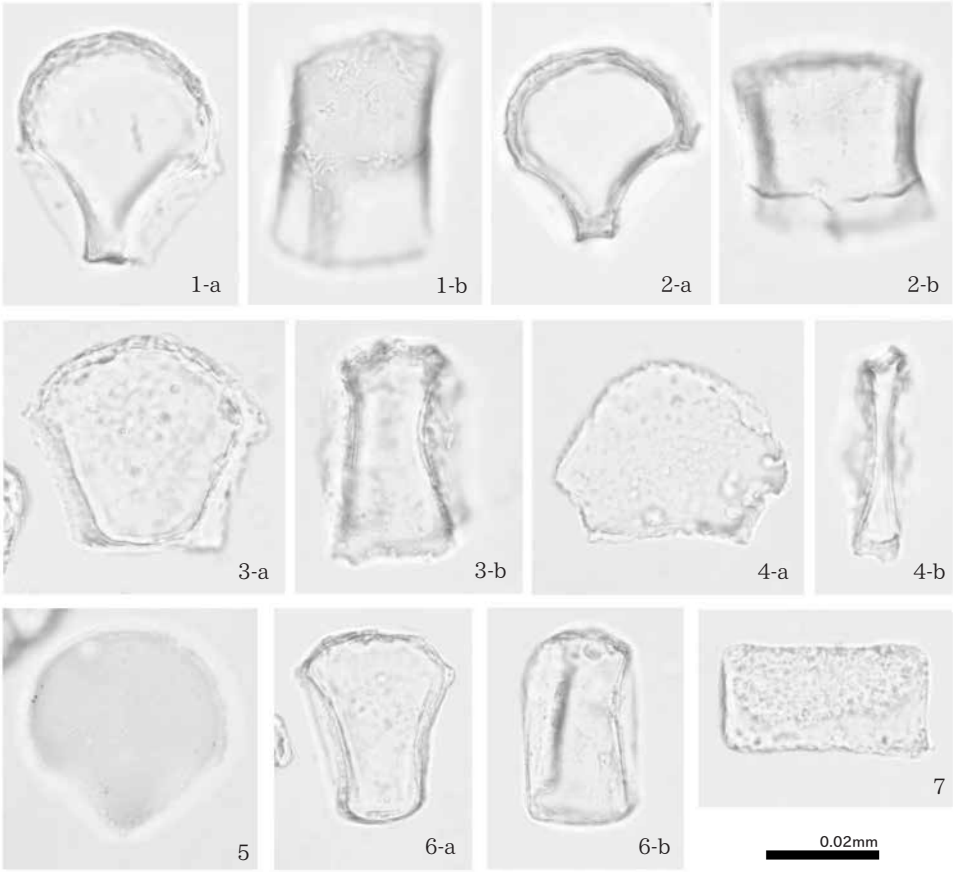
D　稲作について

上記したようにⅤ層試料を除く上位 4 試料よりイネのプラント・オパールが検出された。ここで検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料 1g 当たり 5,000 個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている［藤原 1984］。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上記したようにⅡ層、水田 1 層、水田 2 層においては 15,000 個以上と 5,000 個をはるかに超えるイネのプラント・オパールが検出されており、稲作が行われていた可能性は高いと判断される。すなわち、水田遺構を支持する結果が示されたと判断されよう。一方、水田 3 層試料においては 1,200 個と 5,000 個には達しておらず、上記からみると稲作が行われていた可能性は低いと判断される。おそらく上位層からの混入が考えられ、床土の可能性が推察される。

なお、上位試料で急増しているキビ族についてはその形態からアワ・ヒエ・キビといった栽培種であるのか、イヌビエ・エノコログサなどの雑草類であるのか分類が難しいのが現状であるが、上記したように水田稲作が行われていることからこのキビ族はタイヌビエなどの水田稲作に伴う雑草類の可能性が高いと思われる。また最も多く得られているクマザサ属型についてはチマキザサやスズダケなどが考えられ、遺跡周辺に成立している森林の下草的存在で広く分布していたと推測される。

文献

藤原宏志　1984　「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227 p2-7　ニューサイエンス社



1・2：イネ（a：断面、b：側面）　1：Ⅲ層、2：Ⅳ層
3：ネザサ節型（a：断面、b：側面）　Ⅱ層
4：クマザサ属型（a：断面、b：側面）　Ⅳ層
5：ヨシ属（断面）　地山
6：ウシクサ族（a：断面、b：側面）　Ⅱ層
7：キビ族（側面）　Ⅱ層

第 23 図　古渡路遺跡のプラント・オパール

4　樹種同定

中尾　七重（木質部材研究所）

A　はじめに

古渡路遺跡から出土した木製品 111 点について、木材組織学に基づく樹種同定調査を行った。

B　調査方法

出土木材から採取した木片試料から剃刀を使用して、木材組織切片を木口面・板目面・柾目面の 3 面を作成し、生物顕微鏡観察により樹種名を同定した。樹種名の同定に当たっては、『図説木材組織』［島地・伊藤 1982］、『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ　木材研究・資料第 31 ～ 35 号』［伊藤 1995 ～ 1999］、『広葉樹材の識別』［IAWA 委員会・E.A.Wheeler・P.Baas・P.E.Gasson1998］、独立行政法

人森林総合研究所木材データベースを参考にし、筆者が所持するプレパラートと比較して、確認した。

C　同定の根拠

樹種名を同定した根拠について述べる。

マツ属単維管束亜属（マツ科マツ属）　*Pinus* subgen.*Haploxylon*

垂直・水平樹脂道を持つマツ科の針葉樹。分野壁孔は大型の窓状で１分野に通常１個。放射仮道管の水平壁は平滑。日本に自生ずる本属はキタゴヨウ、ハイマツ、ゴヨウマツ（ヒメコマツ）、チョウセンゴヨウ、ヤクタネゴヨウがある。

スギ（ヒノキ科スギ属）　*Cryptomeria japonica* D.Don

垂直・水平樹脂道を持たないヒノキ科の針葉樹で、晩材の幅が広く、早材と晩材の硬さの違いが大きい。樹脂細胞は年輪外側に接線方向に散在する。分野壁孔は典型的な大型のスギ型で、1 分野に１～３個、通常は２個存在する。日本特産で１属１種。

クロベ（ヒノキ科クロベ属）　*Thuja standishii*（Gordn）Carr.

別名ネズコ。垂直・水平樹脂道を持たないヒノキ科の針葉樹で、早材から晩材への移行は緩やかで晩材はヒノキより多い。樹脂細胞は年輪外側に接戦方向に散在する。分野壁孔は中型のスギ型で１分野に１～３個。インデンチャーがよく発達する。

ブナ（ブナ科ブナ属）　*Fagus crenata* Blume

散孔材。道管が密度高く均等に分布する。年輪界は幅の広い放射組織のところで波をうつ。道管は単穿孔と階段穿孔を持つ。放射組織は短列ないし数列のものと、広放射組織がある。ブナ科。

ナラ類（ブナ科コナラ属コナラ節）　*Quercus* sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae, Dentatae*

環孔材。孔圏部に１～３列の円形の大道管が単独に接戦方向に並ぶ。小道管は孔圏外で急に大きさを減じ、単独あるいは２～３個かたまって火炎状に配列する。放射組織は単列同性の放射組織と複合型広放射組織の２種類からなり、全て平伏細胞。「ナラ類」と称されるブナ科の本属にはコナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワがある。

クリ（ブナ科クリ属）　Castanea crenata Sieb. et Zucc.

環孔材。孔圏部は３～４列の大きな大道管が接戦方向に並ぶ。小道管は孔圏外で急に大きさを減じて、複合して火炎状に配列。放射組織は単列同性。道管を囲み捩れ絡みあう周囲仮道管が特徴的。

ケヤキ（ニレ科ケヤキ属）　*Zelkova serrata*（Thumb.）Makino

環孔材。孔圏は１列、孔圏外は小道管が集合し、斜線状の集団環孔を形成。小道管側壁にらせん肥厚。放射組織は６～７細胞幅で異性、紡錘形で端部直立細胞に結晶を含む。

カツラ（カツラ科カツラ属）　*Cercidiphyllum* japonicum Sieb. Et Zucc.

散孔材。道管はやや小さく単独で多数が密に分布する。道管の階段穿孔は階段の数がきわめて多い。道管側壁に階段壁孔が見られる。放射組織は異性で１～２細胞幅。

ホオノキ（モクレン科モクレン属）　*Magnolia obovata* Thunb.

散孔材。中～小径の道管が単独ないし２～６個不規則に複合して均等に分布する。単穿孔で、階段穿孔も存在する。道管側壁に顕著な階段壁孔と対列壁孔が見られる。

アオハダ（モチノキ科モチノキ属）　*Ilex macropoda* Miq.

散孔材。小さい道管は単独ないし２～５個が塊状や放射方向に複合し、年輪界では接戦方向に並ぶ。

軸方向住細胞は短接戦状及び散在状。階段穿孔があり、道管と木繊維に水平のらせん肥厚。放射組織は１～ 10 細胞幅で異性、高さは時に 1mm を超える。直立細胞に結晶が見られる。

ヒサカキ（ツバキ科ヒサカキ属）　Eurya japonica Thunb.

散孔材。小型の均一な道管が多くは単独、一部は２～３個複合し、均等に多数散在する。道管の階段穿孔は階段数が多く間隔が狭い。道管尾部の側壁にはらせん肥厚。放射組織は１～４細胞幅で異性。放射組織縁辺部の直立細胞の高さはきわめて高い。

カバノキ属（カバノキ科カバノキ属）　*Betula* L.

散孔材。道管は単独ないし２～６個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有する。道管側壁にらせん肥厚が存在しない。放射組織は１～５細胞幅で同性ないし異性。

スノキ属（ツツジ科スノキ属）　*Vaccinium* L.

散孔材。小さい道管が多くは単独、一部は放射方向に数個複合し、均等に分布する。道管は単穿孔と階段穿孔を有する。道管にらせん肥厚が見られる。放射組織は異性で、単列部と多列部からなる。

D　調査結果の概要

曲物の底板・側板、折敷底板・側板、白木皿、箸、しゃもじ、人形、鎌の柄など板材・曲物を中心にスギが用いられていた。白木椀や漆椀などの刳物にはケヤキ、ブナ、アオハダ、クリが用いられていた。これらの食器類の樹種は現在の使用例と共通する。また、箸状の棒にヒサカキが用いられており、斎串の可能性がある。井戸側板に転用されていた船材（準構造船のオモキ）はカツラである。カツラ材は大材が得られ軽く加工しやすいので船材に使われる。オモキ造りと同系統の準構造船であるムダマハギのムダマ（船底部材）[1] やアイヌのイタオマチプ（板綴船）にもカツラの使用が報告されている。下駄にもカツラが使われていた。このほかゴヨウマツ類（マツ属単維管束亜属に属するキタゴヨウ、ハイマツ）、ネズコ、クリ、ナラ類（コナラ属コナラ節に属するコナラ、ミズナラ）、ホオノキ、カバノキ属、スノキ属が見いだせた。

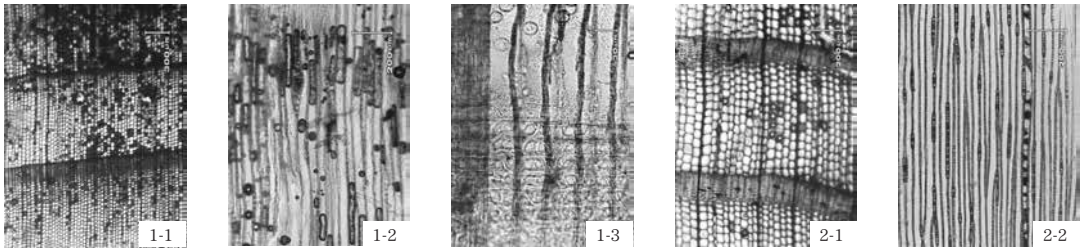
文献

伊藤隆夫　1995　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31　京都大学木質科学研究所
伊藤隆夫　1996　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32　京都大学木質科学研究所
伊藤隆夫　1997　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33　京都大学木質科学研究所
伊藤隆夫　1998　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34　京都大学木質科学研究所
伊藤隆夫　1999　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35　京都大学木質科学研究所
島地謙・伊藤隆夫　1982　『図説木材組織』　地球社
IAWA 委員会・E.A.Wheeler・P.Baas・P.E.Gasson　1998　『広葉樹材の識別』　海青社

1）　函館市史都市・住文化編、函館市、1995

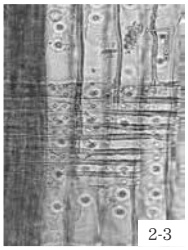
第 17 表　樹種調査試料一覧

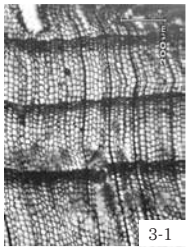
サンプル番号	報告 No.	器種	樹種	地区	遺構 No.	サンプル番号	報告 No.	器種	樹種	地区	遺構 No.
1	427	曲物底板	スギ	G	SE 245	55	400	箸状木製品	スギ	D	SE 3979
2	434	曲物側板	スギ	G	SE 648	56	401	箸状木製品	スギ	D	SE 3979
3	433	栓状木製品	スギ	G	SE 648	57	439	曲物側板	スギ	G	SE 822
4	428	箸状木製品	ヒサカキ	G	SE 601	58	344	漆器皿	ケヤキ	A	SE 7323
5	432	曲物側板	スギ	G	SE 601	59	340	箸状木製品	クロベ	A	SE 7320
6	430	曲物底板？	スギ	G	SE 601	60	339	箸状木製品	スギ	A	SE 6288
7	429	曲物底板？	スギ	G	SE 601	61	343	曲物底板？	スギ	A	SE 7323
8	441	井戸側板	ゴヨウマツ	G	SE 822	62	341	下駄歯	ホオノキ	A	SE 6278
9	440	井戸側板（船）	カツラ	G	SE 822	63	337	井戸側板	クリ	A	SE 6209
10	442	井戸側板	ケヤキ	G	SE 822	64	338	井戸側板	広葉樹	A	SE 6209
11	438	曲物底板？	スギ	G	SE 822	65	377	用途不明部材	スギ	C	SE 9523
12	436	曲物底板	スギ	G	SE 822	66	375	下駄	カツラ	C	SE 9453
13	437	曲物底板？	スギ	G	SE 822	67	374	曲物	スギ	C	SE 9453
14	419	杭	スギ	E 南	SD 2050	68	374	曲物	スギ	C	SE 9453
15	423	挽物皿	クリ	E	SE 2406	69	373	鎌の柄	スギ	C	SE 9453
16	425	椀	ケヤキ	E	SE 2406	70	371	椀	アオハダ	C	SE 9603
17	424	椀	ケヤキ	E	SE 2406	71	369	曲物	スギ	C	SE 9603
18	421	箸状木製品	スギ	E	SE 2406	72	369	曲物底板	スギ	C	SE 9603
19	420	箸状木製品	スギ	E	SE 2406	73	372	挽物皿	アオハダ	C	SE 9603
20	422	箸状木製品	スギ	E	SE 2406	74	358	漆器小皿	ケヤキ	AB	SE 7777
21	413	用途不明部材	ホオノキ	D 東	SE 3008	75	354	板状人形か	スギ	AB	SE 7777
22	416	折敷底板	スギ	D 東	SE 3008	76	357	箸状木製品	スギ	AB	SE 7777
23	417	折敷底板	スギ	D 東	SE 3008	77	355	箸状木製品	スギ	AB	SE 7777
24	415	折敷底板	スギ	D 東	SE 3008	78	353	用途不明部材	クリ	AB	SE 7641
25	412	漆器椀	ブナ	D 東	SE 3008	79	359	曲物底板	スギ	AB	SE 7777
26	411	木地椀	ケヤキ	D 東	SE 3008	80	349	下駄	ケヤキ	AB	SE 7642
27	418	折敷底板	スギ	D 東	SE 3008	81	348	櫂	ナラ類	AB	SE 7642
28	414	折敷底板	スギ	D 東	SE 3008	82	351	用途不明部材	スギ	AB	SE 7642
29	390	漆器椀	ケヤキ	D	SE 3412	83	378	用途不明部材	スギ	D	SE 9654
30-1	391a	曲物	スギ	D	SE 3412	84	360	枡	スギ	AB	SE 8381
30-2	391b	曲物側板	スギ	D	SE 3412	85	350	漆器椀	ケヤキ	AB	SE 7642
31	389	しゃもじ状木製品	スギ	D	SE 3412	86	364	漆器椀	ケヤキ	AB	SE 7790
32-1	408	曲物	スギ	D 東	SE 3476	87	362	曲物部材	スギ	AB	SE 7790
32-2	408	曲物	スギ	D 東	SE 3476	88	361	曲物	スギ	AB	SE 7790
33	410	用途不明品	スギ	D 東	SE 3476	89	361	曲物	スギ	AB	SE 7790
34	409	曲物底板	スギ	D 東	SE 3476	90	363	曲物部材	スギ	AB	SE 7790
35	385	曲物底板	スギ	D	SE 3504	91	366	漆器椀	ケヤキ	B	SE 8353
36	383	曲物底板	スギ	D	SE 3508	92	367	漆器椀	ケヤキ	B	SE 8353
37	384	折敷底板	スギ	D	SE 3508	93	368	漆器椀	ケヤキ	B	SE 8353
38	382	折敷底板	スギ	D	SE 3508	94	347	白木椀	ケヤキ	A	SE 8529
39	381	折敷底板	スギ	D	SE 3508	95		曲物	スギ	A	SE 8529
40	386	漆器椀	ケヤキ	D	SE 3913	96	376	箸状木製品	スギ	C	SE 9453
41	388	杭	ゴヨウマツ	D	SE 3913	97		井戸枠？	クリ	G	SE 601
42	387	曲物底板	スギ	D	SE 3913	98	435	箸状木製品	スギ	G	SE 822
43	407	人形	スギ	D	SE 3979	99	405	箸状木製品	スギ	D	SE 3979
44	406	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	100	404	箸状木製品	スギ	D	SE 3979
45	397	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	101	342	杭	ナラ類	A	SD 6003
46	398	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	102	356	箸状木製品	スギ	AB	SE 7777
47	403	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	103	380	箸状木製品	スギ	D	SE 9654
48	399	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	104	379	加工材	クリ	D	SE 9654
49	396	箸状木製品	スギ	D	SE 3979	105	365	曲物側板	スギ	B	SE 8353
50	392	曲物蓋？	スギ	D	SE 3979	106	345	加工材	シロダモ	A	SE 8529
51	393	折敷底板	スギ	D	SE 3979	107	352	用途不明部材	スギ	AB	SE 7642
52	394	用途不明部材	ケヤキ	D	SE 3979	108	370	杭	スノキ属	C	SE 9603
53	395	加工材	スギ	D	SE 3979	109	255	用途不明部材	スギ	E	方形遺構
54	402	箸状木製品	スギ	D	SE 3979						



ゴヨウマツ木口　ゴヨウマツ板目　ゴヨウマツ柾目　スギ木口　スギ板目

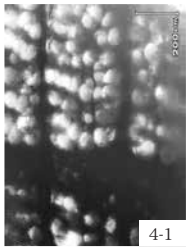
第 24 図　古渡路遺跡の木材（1）

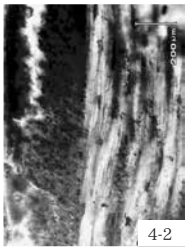

2-3
スギ柾目


3-1
クロベ木口

3-2
クロベ板目

3-3
クロベ柾目

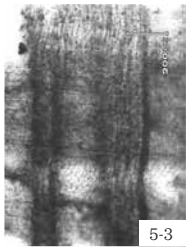

4-1
ブナ木口

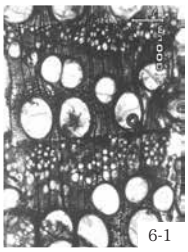

4-2
ブナ板目

4-3
ブナ柾目

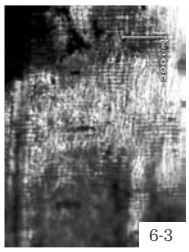
5-1
ナラ類木口

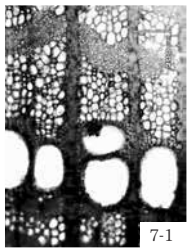
5-2
ナラ類板目


5-3
ナラ類柾目

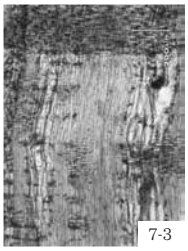

6-1
クリ木口

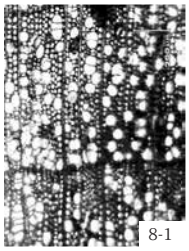
6-2
クリ板目


6-3
クリ柾目

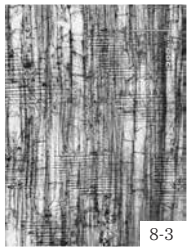

7-1
ケヤキ木口

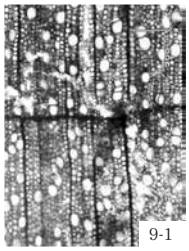
7-2
ケヤキ板目

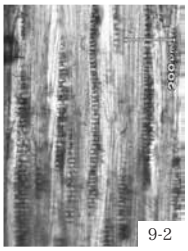

7-3
ケヤキ柾目


8-1
カツラ木口

8-2
カツラ板目


8-3
カツラ柾目


9-1
ホオノキ木口

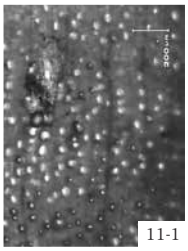

9-2
ホオノキ板目

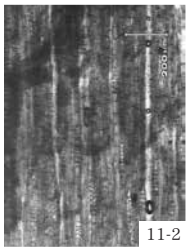
9-3
ホオノキ柾目

10-1
アオハダ木口

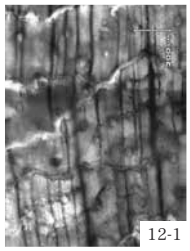
10-2
アオハダ板目

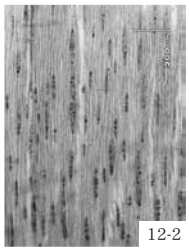
10-3
アオハダ柾目


11-1
ヒサカキ木口

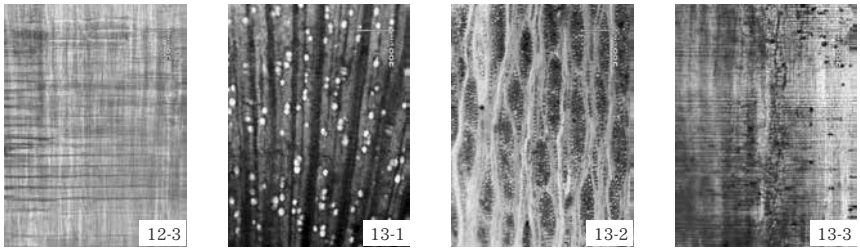

11-2
ヒサカキ板目

11-3
ヒサカキ柾目


12-1
シロダモ木口


12-2
シロダモ板目

第 25 図　古渡路遺跡の木材（2）



シロダモ柾目　スノキ属木口　スノキ属板目　スノキ属柾目

第 26 図　古渡路遺跡の木材（3）

5　放射性炭素年代測定

中尾　七重（木質部材研究所）

A　はじめに

古渡路遺跡から出土した木製品 4 部材 7 試料について、放射性炭素年代測定を行った。うち 3 部材についてはウィグルマッチ法を用いた。

B　調査方法

1）試料採取

2009 年 10 月 9 日に古渡路遺跡発掘事務所において保管中の出土木製品群から遺構面の年代に対応する遺物であること、樹木の伐採年代を知るために必要な樹皮隣接層や辺材部が存在すること、ウィグルマッチ法の適用可能な年輪数が確保できること、の 3 点に注目して選定を行った。その結果、SE822（No.440）、SE7790（No.361）、SE9603（No.369）、SE6209（No.337）の木製品 4 部材を選定し、放射性炭素年代測定対象とした。それぞれ写真撮影等の記録を行い、放射性炭素 14 ウィグルマッチ用に、No.440、No.361、No.337 は各 2 点、No.369 は 1 点の年輪試料各 5 年輪分を採取した。最外年輪を第一年輪として、それぞれ最外層からの年輪位置を記録し、数十ミリグラムの年代測定試料の採取を行った。

2）試料処理及び炭素 14 測定

分析試料として十数ミリグラムを分取し、標準的な酸・アルカリ・酸による洗浄処理（AAA 処理）、化学洗浄した試料の二酸化炭素への変換、二酸化炭素のグラファイト化、ならびに放射性炭素 14（^{14}C）の加速器質量分析測定を行った。

3）炭素 14 測定について

得られた炭素 14 測定の測定結果を第 18 表に示す。炭素 13 同位体比は、炭素 13 の炭素 12 に対する同位体比の標準資料に対する偏差で、千分率で表される。炭素 14 年代は、炭素 14 濃度（$^{14}C/^{12}C$ 比）の測定によって得られた値を炭素 14 年代に換算した値で示されている。炭素 14 年代値には測定施設のラボ番号が付される。

炭素 14 年代値は、西暦 1950 年に相当する大気炭素 14 濃度基準値に対する試料の濃度比から計算されるモデル年代で、$\delta^{13}C$ の同位体効果補正（-25‰に規格化）を行った値である。通常炭素年代値は

yrBP で示される。表の炭素 14 年代に付けられた誤差は、測定における統計誤差（1 標準偏差、68％信頼限界）である。暦年値に換算するには、較正曲線を用いて実年代（暦年代）に変換する必要があるが、基本的には、測定試料の炭素 14 濃度と、過去の大気の炭素 14 濃度曲線（較正曲線）との比較から年代が得られる。実際には濃度を炭素年代に換算した値（モデル年代）で解析する。

4）測定値の解析…ウィグルマッチ法による年代解析

木材がもつそれぞれの年輪の炭素 14 濃度（同位体組成）は木材繊維（セルロース）が形成された年代の大気二酸化炭素の炭素 14 濃度（同位体組成）×経過時間による壊変減衰率である。年輪中の炭素 14 濃度は全体としては、時間の経過による放射壊変減衰のため、過去に遡るほど少なくなっているが、詳細に見るとそれぞれの年の大気中炭素 14 濃度の変動によって凸凹の特性を持っている。すなわち暦年較正曲線は凸凹（wiggle）を持っているため、測定値はしばしば複数の年代に対応することになる。この問題を解決するため、年代間隔の分かった複数試料で炭素 14 測定値を得て、暦年較正曲線の凸凹の特性と照合解析し年代推定誤差を小さくする方法（ウィグルマッチ法）が、近年の暦年較正曲線の整備や年代測定精度の向上に伴って実用化している。年輪に沿って多数の測定値がある場合には、全体のデータのパターンを満たす条件は極めて限られ、高精度に年代が決定される。ここでは、ウィグルマッチ法のための歴博製解析プログラム RHC3.2w[1] で計算した。プログラムは現在国際的に広く用いられているベイズ統計の方法を用いるもので、通常 95％の信頼限度で推定年代範囲を算出した。数値は最外年輪の較正年代を cal AD で表した。年代の計算値は用いる基準データ（暦年較正データベース）や計算法で一桁台は変わり得るので、細かな数字の違いを議論することは意味がない。暦年較正データベースは IntCal04[2] を用いている。

第 18 表　古渡路遺跡出土木製品の炭素 14 年代測定結果

試料 No.	報告 No.	出土地区	遺構 No.	種類	年輪層 / 総年輪数	樹種	炭素 13 同位体比＊ δ ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	測定番号	較正暦年代範囲
古 1	440	G	SE822	船材	1-5/120	カツラ	-24.98 ± 0.19	815 ± 20	PLD-14641	1213-1247 1249-1266
古 2					116-120/120		-24.44 ± 0.14	965 ± 20	PLD-14642	
古 3	361	AB	SE7790	曲物	1-5/205	スギ	-23.35 ± 0.12	955 ± 20	PLD-14643	1026-1074 1080-1091
古 4					201-205/205		-22.39 ± 0.13	1200 ± 20	PLD-14644	
古 5	369	C	SE9603	曲物	1-5/74	スギ	-23.20 ± 0.17	810 ± 20	PLD-14645	1211-1271
古 6	337	A	SE6209	井戸側板	1-5/123	クリ	-25.70 ± 0.19	560 ± 20	PLD-14646	1317-1351
古 7					119-123/123		-26.86 ± 0.11	840 ± 20	PLD-14647	

＊炭素 13 の炭素 12 に対する同位体比の標準試料に対する偏差を千分率で表示したもので、AMS による測定で参考値。
炭素 14 濃度（^{14}C/^{12}C）の同位体効果の補正に用いられる指標。

C　年代解析結果

古 1・2（No.440）は井戸側板に転用されていたカツラ材の船材で、120 年輪あり、樹皮隣接層及び辺材は確認できなかった。平均年輪幅は 1.8mm である。最外層の年代は 1213-1247 年の 13 世紀前半と、1249-1266 年の 13 世紀後期と得られる。辺材が認められないため、伐採年は確定できないが、形状から材の使用可能範囲いっぱいに使ったと推測でき、13 世紀あるいはそれ以降の伐採と推定される。

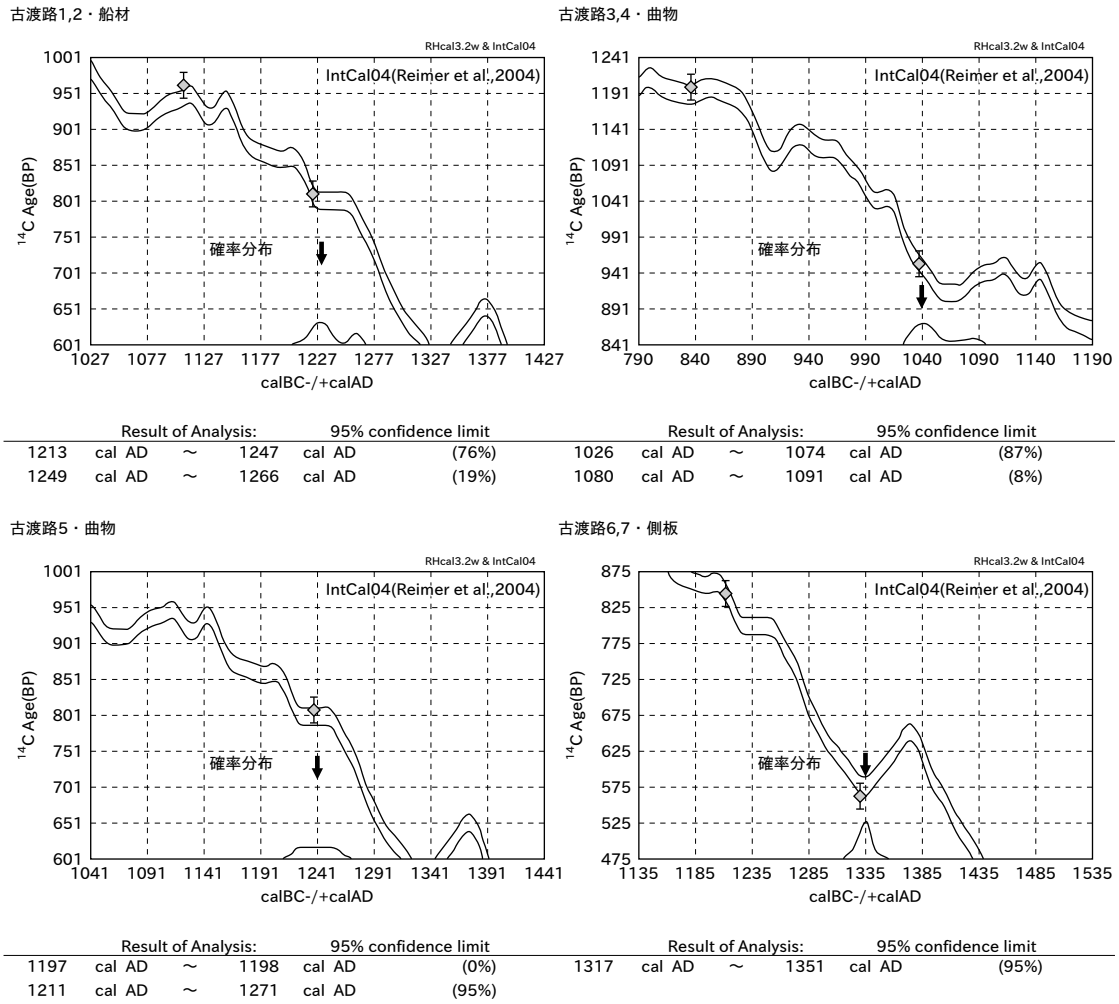
古 3・4（No.361）は井戸底から出土したスギの曲物の底板で 205 年輪あり、樹皮隣接層及び辺材は確認できなかった。平均年輪幅は約 1 ミリである。最外層の年代は 1026-1074 年と 1080-1091 年と得ら

1）今村峯雄　2007「炭素 14 年代較正ソフト RHC3.2 について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集　pp.79-88
2）Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talmo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.　2004　Radiocarbon 46　pp.1029-1058.

れた。No.361 は年輪年代法によって最外層年代は 1082 年と明らかにされている[1] ので、1080-1091 年の可能性が選択される[2]。曲物の底板という小さい部材であり平均年輪幅が狭いため、表皮隣接層から本資料最外部までの年輪数が 100 年以上の可能性も存在するため、伐採年代は 12 世紀～ 13 世紀以降と推定される。

古 5（No.369）は井戸底から出土したスギの曲物の底板で 74 年輪あり、樹皮隣接層及び辺材は確認できなかった。最外層の年代は 1211-1271 年と得られた。曲げ物の底板という小さい部材であるが平均年輪幅が約 3 ミリと大きいため、伐採年代は 13 世紀以降と推定される。

古 6・7（No.337）はクリ材の井戸側板で、123 年輪あり、樹皮隣接層及び辺材は確認できなかった。平均年輪幅は 1.3mm である。最外層の年代は 1317-1351 年の 14 世紀と得られる。伐採年は 14 世紀以降と推定される。



第 27 図　放射性炭素年代測定の暦年較正結果

1）第Ⅵ章 6 参照。

2）1026-1074 年に可能性が高くなる理由として次の理由が考えられる。すなわち平安時代の中頃は日本の暦年較正曲線が炭素年代値で 20 年程度古い方にずれている可能性がある。INTCAL のデータを構成する緯度の高いヨーロッパ・アメリカの樹木と比較して、日本の樹木は温暖な時代である平安時代中頃には炭素年代値が大きく出るために、日本産の樹木を INTCAL で解析すると、この時期には暦年較正された暦年代が古くなる傾向がある。（ex. 小田寛貴他　2010 「炭素 14 年代測定法を用いた古筆切の伝承筆者と書写年代の相違に関する研究―伝中臣鎌足筆、伝宗尊親王筆古筆切等を例として―」『日本文化財科学会第 27 回大会研究発表要旨集』pp.134-135）この問題を解決するために、今後、年輪年代の明らかな日本産樹木による ^{14}C 年代の基礎データの蓄積が必要である。

6　曲物底板の年輪年代測定

光谷　拓実（総合地球環境学研究所／奈良文化財研究所）

このたび、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団から古渡路遺跡の発掘調査で出土した曲物容器の底板２点について年輪年代法による年代測定の調査依頼を受けた。以下にその結果について報告する。

A　試料と方法

底板２点の出土遺構は、No.391 が SE3412、No.361 が SE7790 であった。樹種は、スギで柾目に木取りされたものであった。２点の底板は、いずれも心材につづく辺材部（白太ともいう）がすべて失われているので、得られる年輪年代は、伐採年代よりかなり古い年代を示す。したがって、年輪年代の扱いには注意を要する。

年輪幅の計測は、年輪読取器を使用した（最小読取単位：10 ミクロン）。年代を割り出すに当たっては、山形県下の遺跡出土木材（スギ材）の年輪を用いて作成した暦年標準パターン（813 年～ 1285 年）を使用した。コンピューターによる年輪パターン照合は、相互相関分析手法によった［光谷・田中・佐藤 1990］。

B　結　　果

底板の計測年輪数や暦年標準パターンとの照合によって得られた年輪年代は、第 19 表に示したとおりである（表中の t 値は、照合確定位置での t 検定による最大 t 値を示す）。

第 19 表　底板２点の年輪年代

報告 No.	遺構 No.	木製品	樹種	計測年輪数	t 値	年輪年代
391	SE3412	曲物底板	スギ	229	6.2	1272 ＋α層
361	SE7790	曲物底板	スギ	196	4.3	1082 ＋α層

まず、No.391 の底板からは 1272 年、No.361 からは 1082 年の年輪年代が得られた。この２点の年輪年代は最外年輪の年代を示し、伐採年代ではない。したがって、伐採年代を求めるにはこの年輪年代にさらに削除された心材部や辺材部の年輪数を加算しなければならない。

心材部の削除年輪数を推定することはできないが、少なくとも辺材部の年輪数については、平均的な年輪数（秋田スギを例にとるとおよそ 40 層前後）を加算することによって、大まかな伐採年代を推定するための拠とすることはできる。

No.391 の場合であれば少なくとも 1300 年代の前半代、No.361 は 1100 年代の前半代まで年代が下がることが想定される。さらに、井戸に投棄されるまでの使用期間などを考えると、今回の場合は井戸の構築年代や廃絶年代に直接結び付く年代情報とはなりにくい。

文献

光谷拓実・田中琢・佐藤忠信　1990　「年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－」『奈良国立文化財研究所学報』第 48 冊　同朋社出版

7　古渡路遺跡出土漆器の科学分析

四柳　嘉章（漆器文化財科学研究所）

A　はじめに

新潟県村上市古渡路遺跡は、三面川と門前川にはさまれた低地に営まれた縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡である。今回は中世漆器（13 世紀後半～ 15 世紀中葉）について、漆器考古学的な観点をふまえながら各種分析を行ったので、以下分析結果を報告する。

B　分析の方法

漆器は階層や価格に応じた各種の製品が生産され、その品質が考古学的には所有階層復元の手がかりとなる。この品質差を材料や技術的側面から評価する場合、肉眼による表面観察だけでは使用や廃棄後の劣化状態でしか判断できず、それも専門的な経験に左右される。しかし漆器本来の耐久・堅牢性は塗装工程（髹漆）にあり、この塗膜の下に隠された情報は、以下の科学分析によって引き出される。

塗膜分析は漆器の内外面数か所から数 mm の塗膜片を採取し実体顕微鏡顕で観察した後、ポリエステル樹脂に包埋後その断面を研磨のうえプレパラートに接着し、さらに研磨を加えて（＃ 100 ～ 3000）金属・偏光顕微鏡で観察する方法である。各種状況に応じたデータ（手板）と比較検討しながら塗装工程や下地材料の同定を行う。これによって表面観察ではわからない時代的地域的な塗装工程の特色、製品の品質が把握できるので、遺跡における所有階層の推定やデータが集積されれば製品の流通問題にも迫ることができる。塗料の直接的な分析は、赤外線を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法(FT-IR)を用いた。上塗漆と漆絵赤色顔料の分析はエネルギー分散型蛍光 X 線分析を実施した。

なお、本稿で用いる用語については基本的には漆工用語に従うこととし、意味が曖昧で誤解をまねくものについては、以下のように規定して使用する。

①赤色漆

赤色の主な顔料である朱（HgS）やベンガラ（Fe_2O_3）が未同定の場合には「赤色漆（未同定）」と最初に断って使用し、同定済みは「赤色（朱）漆」「朱漆」「ベンガラ漆」などと表記する。よく使われる「赤漆（あかうるし）」は「赤漆（せきしつ）」（木地を蘇芳で染め透漆を施したもの）との混同をさけるために用いない。内外面とも赤色漆の場合は、未同定は「総赤色（未同定）漆」、同定ずみの場合は「総赤色（朱）漆」、あるいは慣例による「総（惣）朱」「皆朱」「朱漆器」などを用いる。

②黒色漆と黒色系漆

肉眼で上塗漆が黒色の場合の観察表現として、従来「黒漆」と表記されていた。ここでは黒色顔料の炭素粒子（油煙・松煙）や鉄系化合物粒子などが含まれているものを「黒色漆」、黒色顔料が含まれていないものを「黒色系漆」として区別する。後者では黒色顔料を含まなくても漆塗膜が茶黒色に変質し、さらに下地色を反射して肉眼では黒色に見えるので、材料科学の上からも両者を区別する必要がある。未同定の場合は、はじめに「黒色漆（未同定）」とことわる。内外面とも黒色漆の場合は「総黒色漆」、同じく黒色系は「総黒色系漆」（いわゆる「総黒」は両者を含んだもの）、内面赤色外面黒色は「内赤外黒色漆」、同じく

「内赤外黒色系漆」とする。赤色顔料が同定されている場合は「内朱外黒色漆」あるいは「内赤（ベンガラ）外黒色漆」などと呼称する。

③下地の分類－漆下地と渋下地

粗い鉱物粒子を用いたものは「地の粉漆下地」、より細かい砥の粉類似は「サビ漆下地」（基本的には近世以降）、膠使用は「地の粉またはサビ膠下地」、炭粉は漆を用いたものは「炭粉漆下地」、柿渋を用いたものは「炭粉渋下地」とする。炭粉下地は粒度により３分類する。

細粒…破砕工程が中粒炭粉より細かく炭粉粒子は均一で、針葉樹の木口の放射組織を全くとどめないもの。

中粒…炭粉粒子は１～２μｍ×５～10μｍ程度の針状粒子と長径５μｍ前後の多角形粒子などからなり、針葉樹の木口の放射組織は一部にしか認められないもの。

粗粒…破砕工程が粗く針葉樹の木口の放射組織を各所にとどめるもの。炭粉粒子は不均一で各種形状のものを含み、長径30μｍ前後の針状ないし棒状粒子を含むことが多い。

C　分析結果

塗膜分析を行った漆器は１資料につき、内外面各２点の試料を作成し平均値を算出した。したがって必ずしも図版のスケールとは一致しない。「表層変質」とあるものは、酸化劣化防止層の形成を意味する。赤色漆の色調表現はマンセル値で、「4R　４／11」とあれば、4Rは色相、４／11は明度／彩度である（分析番号は遺物番号）。

1）塗膜分析

No.426（46B3・8・9、SE1577、第28図）：椀（朱漆）

器形・表面観察　朱漆塗膜だけの遺存であるが、カーブからみて椀。朱漆のマンセル値は9R　3.5／8.5(赤錆色)。

塗膜分析　内外面不詳①炭粉漆下地層。層厚は不詳。炭粉粒子は中粒。表層２μｍ前後が分離。②赤色（朱）漆層。層厚24μｍ。朱粒子は長径２～３μｍ前後のものと、それ以下のものからなる。

No.425（44E10、SE2406、第28図）：椀（摺り漆）

器形・表面観察　短脚高台（畳付はやや広い）から緩やかに立ち上がる、薄手の椀。全体に薄く摺り漆が施されたもので、その上の漆層はみられない。ヨコ木（柾目）取り。

No.412（34G25、SE3008、第28図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　短脚高台（畳付はやや広い）から内湾ぎみに立ち上がる、薄手の総黒色系椀（口径13.5cm前後）。内外面全体に朱漆絵による同じ意匠の加飾がある。漆絵の意匠は中央に綾杉、左に梅、右の詳細はわからないが、半楕円内に草か樹と思われるものを配している。意匠としては珍しい構成である。口縁部に布着せは見られない。朱漆絵のマンセル値は9R　3.5／8.5（赤錆色）。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内面①炭粉渋下地層。層厚30～120μｍ。表層７μｍ前後が分離。炭粉粒子は中粒。②漆層。層厚24μｍ前後。表層３μｍ前後が変質。

外面①炭粉渋下地層。層厚50～148μｍ。表層７μｍ前後が分離。炭粉粒子は中粒。②漆層。層厚15μｍ前後。表層９μｍ前後が変質。

No.411（34G25、SE3008）：椀（木地）

器形・表面観察　三角状の短脚高台から緩やかに立ち上がる、薄手の木地椀。外面腰まわりに荒型のはつり痕が残る。使用された痕跡は見られない。ヨコ木（柾目）取り。

No.390（33B24、SE3412、第 28 図）：皿（総黒色系）

器形・表面観察　短脚高台から内湾ぎみに緩やかに立ち上がる総黒色系皿。内面見込みには、洲浜に松と思われる朱漆絵が加飾。塗膜は硬く光沢があり、高台裏の塗りもしっかりしているが、ロクロ爪跡が残る。朱漆絵のマンセル値は緋色に近く、7.5R　4.5 ／ 11。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内面①炭粉漆下地層。層厚 100 ～ 171 μ m。炭粉粒子は中粒。②漆層。層厚 14 ～ 34 μ m。③漆層。層厚 32 μ m 前後。表層 5 μ m が変質。

外面①炭粉漆下地層。層厚不詳。炭粉粒子中粒。②漆層。層厚 36 μ m。若干炭粉粒子が混入。③漆層。層厚 38 μ m 前後。表層 3 μ m が変質。

No.344（11C13・18、SE7323、第 29 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　短脚高台から斜上方に緩やかに立ち上がる総黒色系椀。内面見込みに大きく飛翔する鶴の赤色（ベンガラ）漆絵がある。マンセル値は 8R　4.5 ／ 4.5（小豆色）。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内面①炭粉漆下地層。層厚 49 ～ 110 μ m。炭粉は中粒。②漆層。層厚 17 μ m 前後。表層 7 μ m 前後が変質。

外面①炭粉漆下地層。層厚 36 ～ 100 μ m。炭粉は中粒。②漆層。層厚 15 μ m 前後。表層 7 μ m 前後が変質。

No.371（26C15・27C11、SE9603、第 29 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　短脚高台から内湾ぎみに立ち上がる、身の浅い椀。一見摺り漆のように見えるが、全体に炭粉地が施されたもの。高台裏は露胎。高台内側には削りの凹溝(幅約 4mm)がある。ヨコ木(柾目)取り。

塗膜分析　内面①炭粉漆地層。層厚 10 ～ 20 μ m。炭粉粒子（中粒）が 5 ～ 10 μ m ほど沈殿。

外面①炭粉漆地層。層厚最大 85 μ m。炭粉粒子（中粒）が 5 ～ 10 μ m ほど沈殿。

通常の塗りでは炭粉漆下地で、この上に漆層が施される。本例は上の漆層がなく、これで完成品として使用されたのか、あるいは途中の未完成品かのいずれかである。

No.358（14B24、SE7777、第 28 図）：小皿（総黒色系）

器形・表面観察　内湾ぎみに立ち上がる総黒色系小皿で、全体の 3 分の 2 が残る（口径 8.9cm 前後）。高台内側には削りの凹溝がある。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内外面①炭粉渋下地層。層厚 14 ～ 50 μ m。炭粉はやや粗粒。②漆層。層厚 29 ～ 50 μ m。

No.350（13D5、SE7642、第 28 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　緩やかに立ち上がる大ぶりの総黒色系椀。体部の器厚は 2 ～ 3mm で下半部を欠く。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内外面①炭粉漆下地層。層厚 10 ～ 40 μ m。炭粉は中粒。炭粉粒子が沈殿（層厚 7 ～ 10 μ m）。②漆層。層厚 12 ～ 27 μ m。

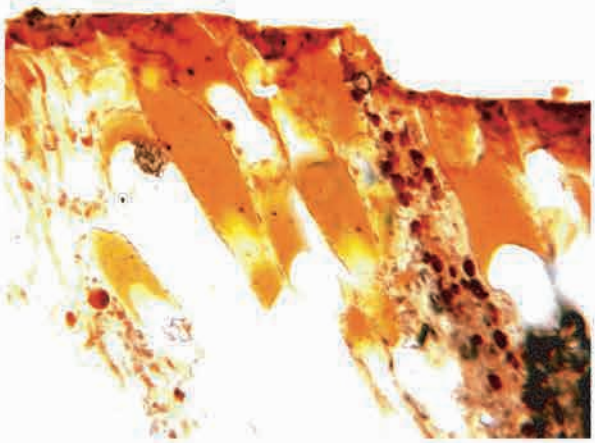
No.364（15C12、SE7790、第 29 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　緩やかに立ち上がる、薄手の総黒色系椀。ヨコ木（柾目）取り。古渡路遺跡出土では良品。

塗膜分析　内面①炭粉漆下地層。道管にはかなり炭粉粒子が入っているが、層厚平均は 10 μ m ほど。炭粉は中粒。②漆層。層厚 24 μ m 前後。③漆層。層厚 20 μ m 前後。

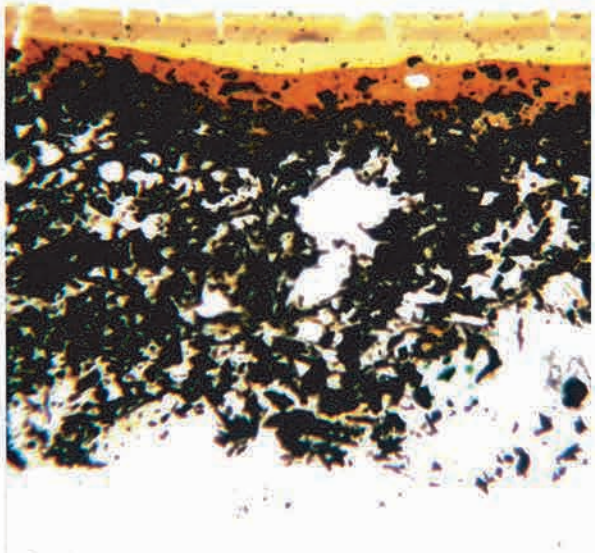
外面①炭粉漆下地層。層厚平均は 10 μ m ほど。炭粉は中粒で沈殿している。②漆層。層厚 24 μ m 前後。③漆層。層厚 24 μ m 前後。

No 426　×400

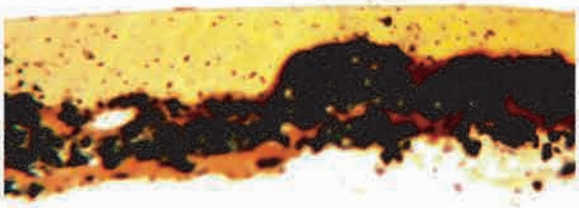


No 425　×200

No 390（外面）　×200

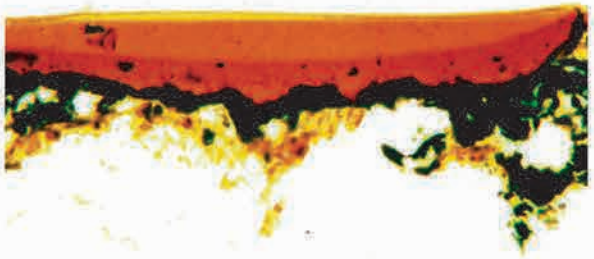


No 412（内面）　×400



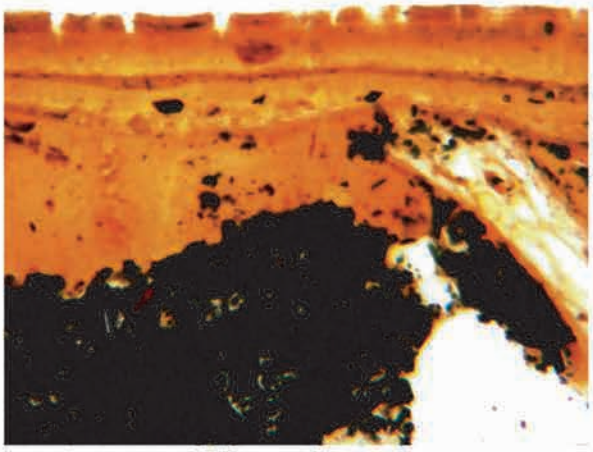
No 358（内面）　×400

No 350（内面）　×200

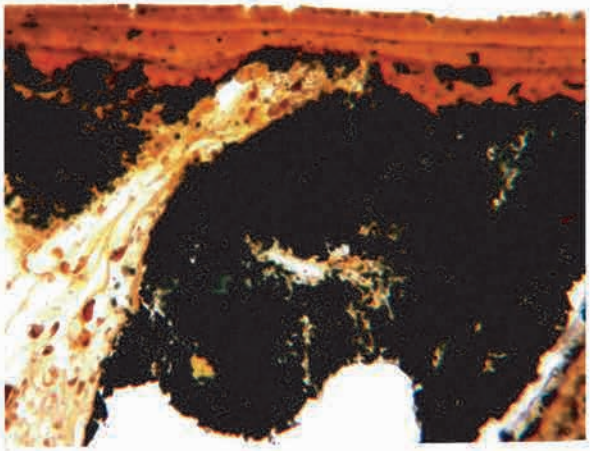


No 350（外面）　×400

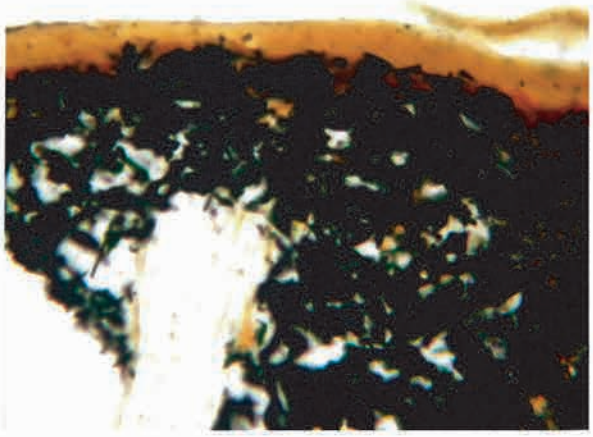
第 28 図　漆器塗膜断面の顕微鏡写真（1）



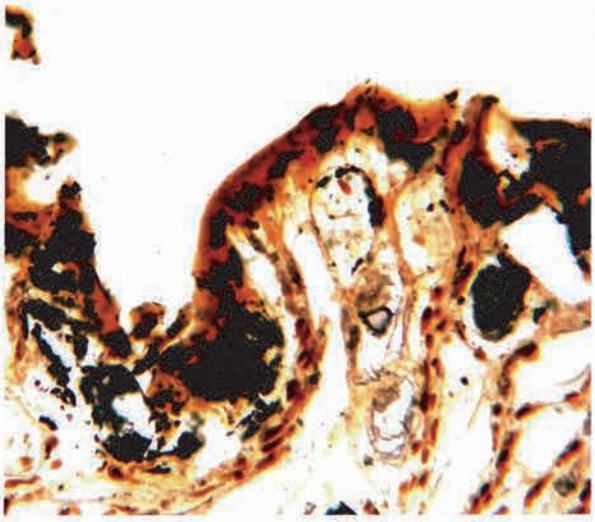
No 364（内面）　×400



No 364（外面）　×200

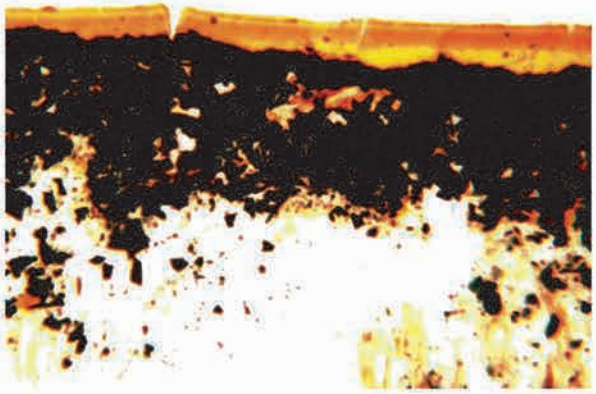


No 367（内面）　×400



No 371（内面）　×200

No 346　×400



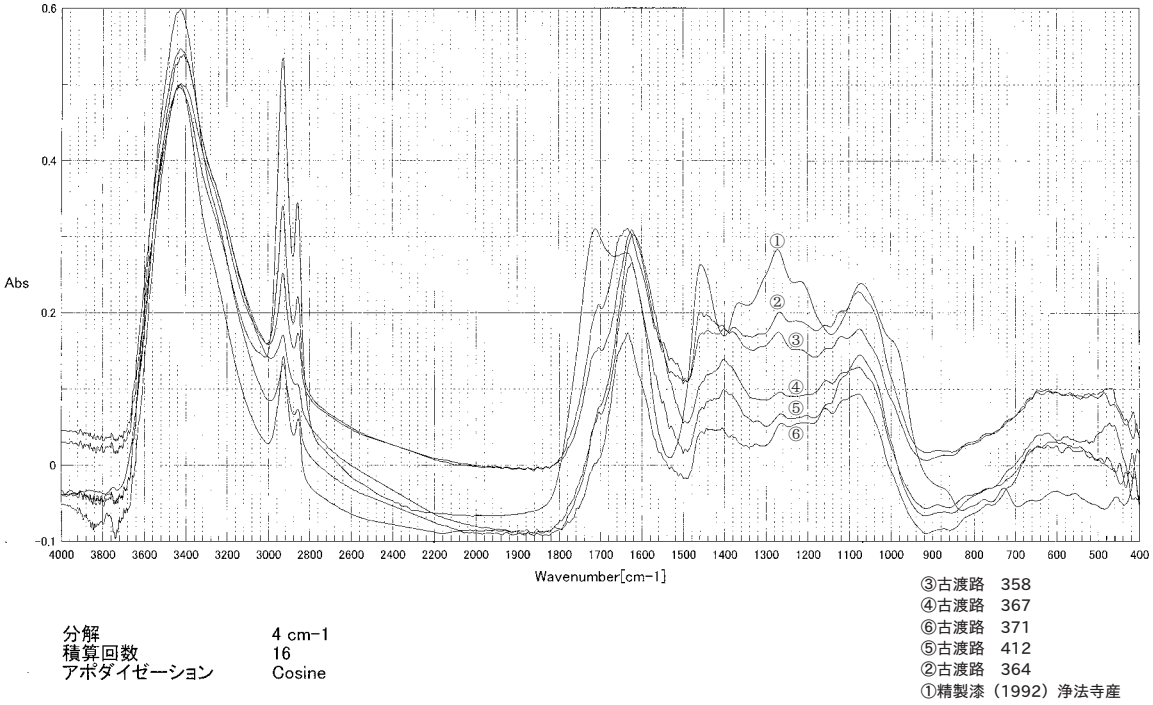
No 344（外面）　×400

第 29 図　漆器塗膜断面の顕微鏡写真（2）

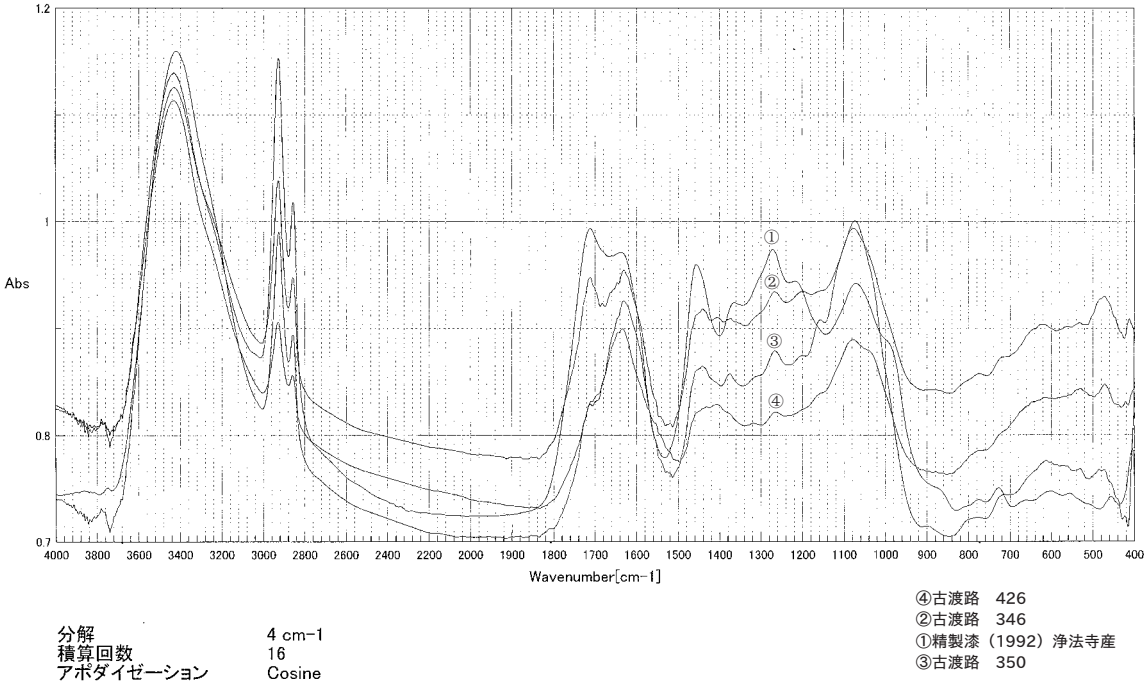
No.367（17C25、SE8353、第 29 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　短脚高台から丸腰をへて真っすぐ立ち上がる総黒色系椀（口径 13.3cm 前後）。口縁部の器厚は 1mm 前後の薄いものであるが、底部厚は 5mm ほどである。塗りは薄く全体にあらいカンナ目が目立つ。高台裏は露胎で、中央にロクロ爪痕が残る。高台内側には削りの凹溝がある。ヨコ木（柾目）取り。

塗膜分析　内外面①炭粉渋下地層。層厚 74 μ m 前後。炭粉は中粒。表層 7 μ m が分離。②漆層。層厚 12 μ m。



第 30 図　赤外線吸収スペクトル（1）



第 31 図　赤外線吸収スペクトル（2）

No.346（11D3、SE8529、第 29 図）：椀（総黒色系）

器形・表面観察　椀と判断される塗膜片だけで、茶色が強いために赤色漆と誤解しやすい。

塗膜分析　内外面不明①炭粉漆下地層。層厚 20 ～ 74 μ m。炭粉はやや細粒。②漆層。層厚 37 μ m 前後。表層 5 μ m 前後が変質（表層は漆ではなく付着物）。

2）赤外分光分析

漆液の直接的な同定は、赤外線（普通赤外波長 2.5 ～ 25 μ m、波数 4000 ～ 400cm^{-1}）を固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて照射して、分子構造を解析するフーリエ変換赤外分光法（FT - IR）を用いた（測定機器は日本分光製 FT - IR420）。試料は 2mg を採取し、KBr（臭化カリウム）100 をメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものを使用（錠剤法）。条件は分解能 4cm^{-1}、積算回数 16、アポダイゼーション関数 Cosine。第 30･31 図はその赤外線吸収スペクトル（ノーマライズ）で、縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）。

第 30 図は上塗漆（黒色系漆、①～⑤）と漆下地（⑥、No.371）の赤外線吸収スペクトルで、漆の基準データは岩手県浄法寺産精製漆（①、1992 年作製）。1070 ～ 1030cm^{-1}（ゴム質）の吸収がやや増大し、1280cm^{-1}（フェノール）と 1720 ～ 1710cm^{-1} （カルボニル基）の吸収が減少、1459 ～ 1340cm^{-1} がブロードとなっている。しかし 2925cm^{-1}（炭化水素の非対称伸縮振動）、2850cm^{-1}（炭化水素の対称伸縮振動）、1630 ～ 1620cm^{-1}（糖タンパク）、1465cm^{-1}（活性メチレン基）の吸収と合わせて、漆塗膜の特徴を示している。第 31 図は劣化によって 1070 ～ 1030cm^{-1}（ゴム質）の吸収がやや増大したグループ。④（No.426）は 2925cm^{-1}、2850cm^{-1} のアルキル基がやや減少しており、紫外線による酸化劣化が進行していると考えられる。だが一方で③（No.350）④はカルボニル基の吸収が少ないという傾向が見られる。

3）蛍光 X 線分析

蛍光 X 線分析は試料に X 線を当てると、元素特有の X 線（特性 X 線ないし固有 X 線）が発生（放出）する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う方法。

分析対象　赤色漆顔料分析（No.412・426・346・344、第 32 ～ 35 図）

使用機器　PANalytical ／ PW4025、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置。

使用管球　Rh ターゲット 9W。

検 出 器　高分解能電子冷却 Si 半導体検出器。

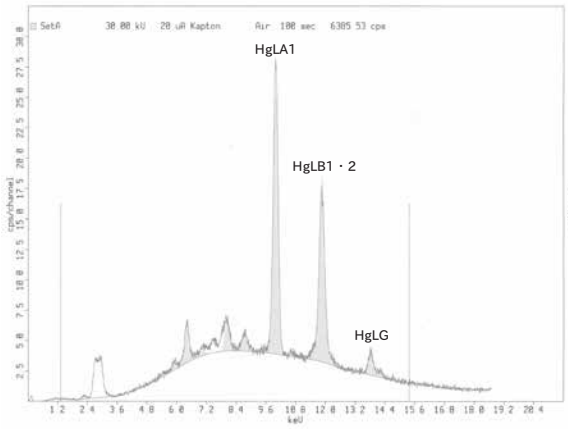
測定条件　30kV、20 μ A、フィルター　Kapton、100sec。

測定室雰囲気　大気。測定部径は 1mm。サンプルカップに入れて測定。

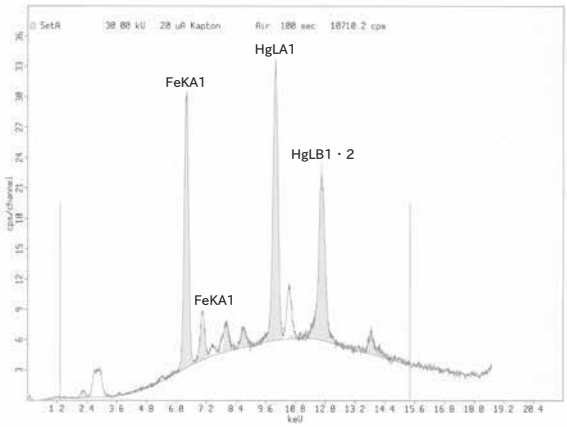
測定結果　No.412・426 は朱（HgS）、No.344 の漆絵は酸化第二鉄（ベンガラ、Fe_2O_3）。No.346 については塗膜が赤色を帯びているために、顔料の確認を行った。朱は検出されず、塗膜分析でも顔料の存在は認められなかった。酸化第二鉄の吸収は漆及び下地からのものである。

D　終 わ り に

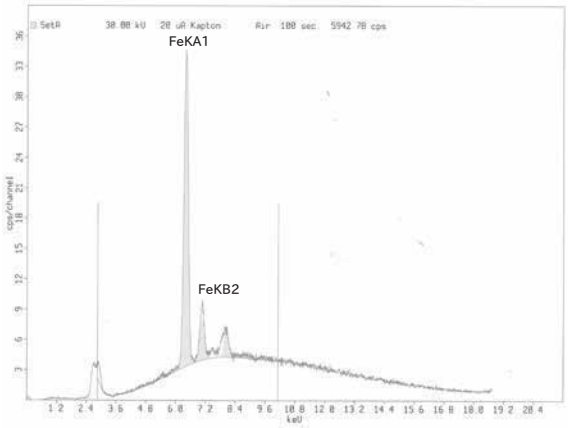
以上 3 方法による分析結果を報告してきたが、漆器考古学的視点を加えて 2 つの問題点を紹介し、まとめとしたい。



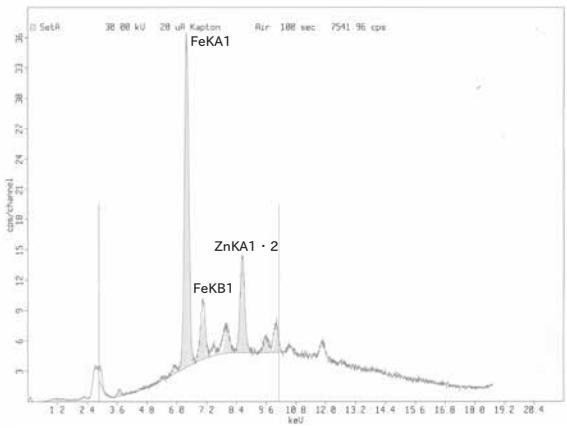
第 32 図　蛍光 X 線スペクトル（No.426）



第 33 図　蛍光 X 線スペクトル（No.412）



第 34 図　蛍光 X 線スペクトル（No.346）



第 35 図　蛍光 X 線スペクトル（No.344）

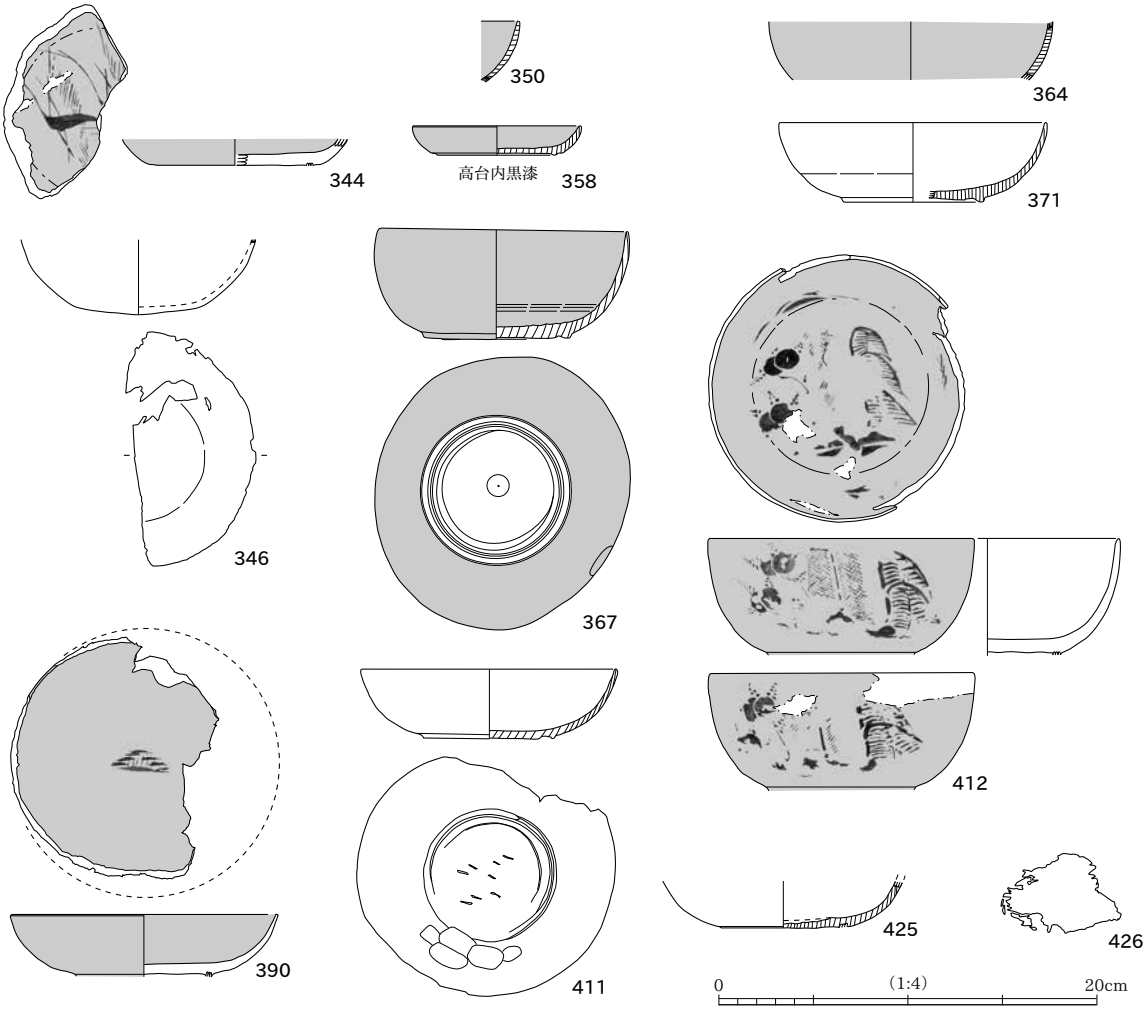
1）漆器から見た時期

中世集落の存続期間は 13 世紀後半～ 15 世紀中葉の長い時期幅が考えられているが、漆器の器形的特徴からより時代をしぼって見ることにしたい。

まず新潟県における 15 世紀前半の基準としている漆器は、上越市（旧頸城村）水久保遺跡の上質漆器である（第 38 図）[四柳 1996]。この漆器群は調査所見から 118 を除いて 15 世紀前半に比定されており、該期の重要資料であることから、塗装工程を紹介しておきたい。

報告書番号 121 と 122 の内面有段皿（椿皿）は、器形や底部の銘からセットと考えられるもので、木胎（木地）に漆を吸わせる「木固め」が施された後、地の粉漆下地＋漆＋漆＋朱漆（上塗）の工程がとられ、朱漆の顔料破砕工程も同じであることが判明した。117 の皆朱鉢もまた同一の髹漆で、これら 3 点に共通する特色は内面に段を有すること、口唇部と高台には朱漆を塗らず中塗のまま残すこと、高台裏の塗りは地の粉漆下地の上に漆 1 層であり、中塗りで終わっていること、高台の厚さが器形を問わずほぼ同一であることである（同一木地師、同一塗師による製品と推測）。

120 の端反皆朱椀は、口唇部に中塗りをそのまま残している点は上記 3 点と共通しているが漆塗りが 1 層省略されている。しかし中塗りに黒色顔料（油煙）を含んだ漆（黒色漆）が施されている点は注目される。油煙による黒色着色法は古代以来の技法であるが、中世では化粧箱・硯箱、椀類では上質品においてのみ用いられている。新潟県では新発田市宝積寺館跡土坑 26 より出土した皆朱椀（玉縁）の例があり、髹漆

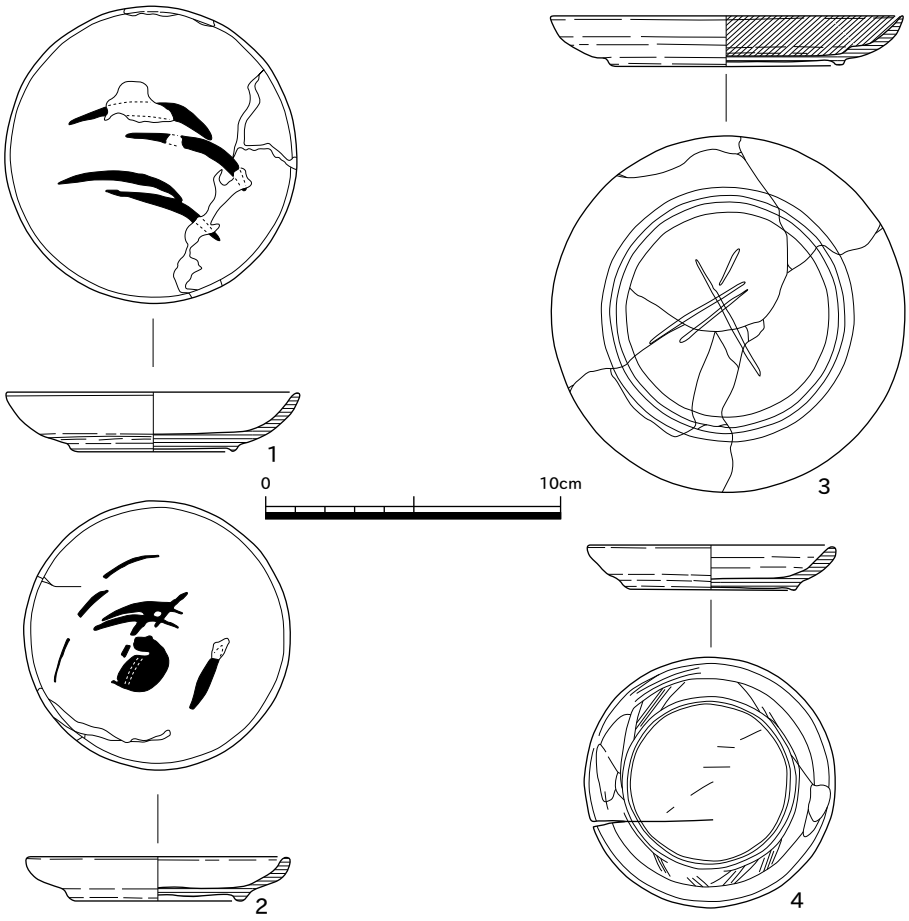


第 36 図　分析漆器実測図

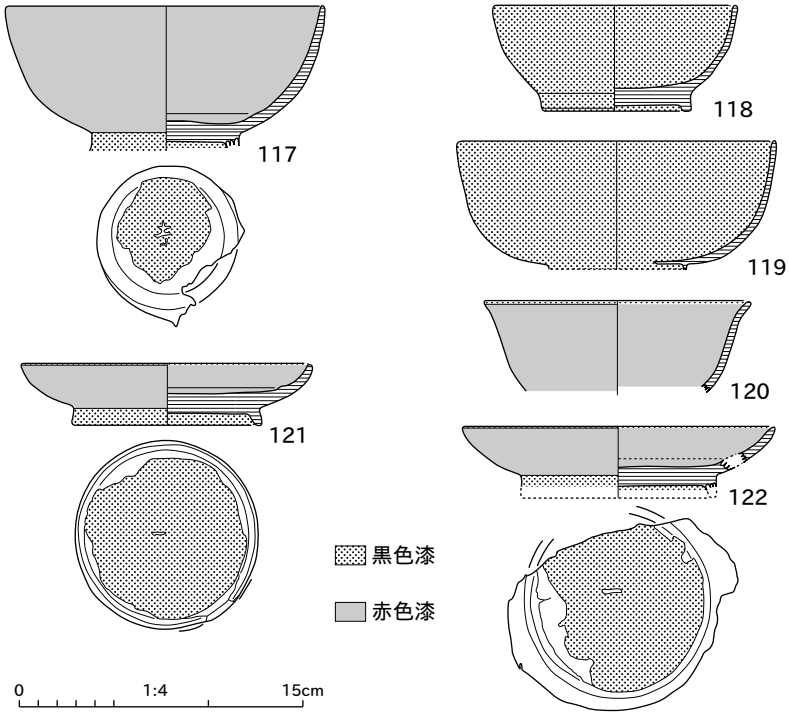
は地の粉漆下地＋漆＋黒色漆＋朱漆＋朱漆という丁寧な工程によるものであることが判明している[田中・鶴巻ほか 1990]。中塗りに油煙による黒色漆が施されており、高台裏はこの塗り面である。土坑 26 は僧侶の墓跡と考えられているが、それに相応しい遺物である。119 の総黒色系鉢は繊細な轆轤挽きによって仕上げられたもので、底部の厚さは 1.5 mm しかない。髹漆は十分木固めがされた上に地の粉漆下地が施され、上塗漆 1 層で仕上げられているが、上塗漆の光沢は麗しく堅牢なものとなっている。

以上は下地が木胎の痩せを防ぎ堅牢な漆器作りに不可欠な漆下地（本堅地）技法によった上質品である。これに対して 118 の総黒色系椀は下地が柿渋に炭粉粒子を混ぜた普及タイプの渋下地で、上塗りは漆 1 層である。いま一つ紹介したいのは 14 世紀後半の皿の基準としている富山県立山町辻遺跡出土（01 土坑）の 4 点の皿で、すべて渋下地＋上塗り漆 1 層の簡素な普及タイプの漆器である（第 37 図）[四柳 1993]。

以上を参考として古渡路遺跡（第 36 図）の漆器を観察すると、椀は内湾ぎみに立ち上がるふっくらとした体部、薄い底部厚と小さな短脚高台という特徴があり、水久保遺跡に先行する 14 世紀代の特徴をそなえている。皿も辻遺跡と同じ特徴が認められるので、椀皿は同時代の所産と考えられる。このほか上越市伝至徳寺跡［水澤 2001］・［鶴巻 2003］、胎内市下町・坊城遺跡群［四柳 2001］、同江上館跡［四柳 2000］などからは、詳細は省くが多量の上質漆器を含む各種漆器が出土しており、越後の中世漆器の階層的品揃えと漆芸的奥深さを示している。合わせて参照していただければと思う。



第 37 図　富山県辻遺跡出土の中世漆器（三鍋秀典ほか　1991 『辻遺跡－第 3 次発掘調査報告』立山町教育委員会）



第 38 図　新潟県水久保遺跡出土の中世漆器（秦繁治ほか　1998 『水久保・中島古屋敷遺跡』新潟県頸城村教育委員会）

2）遺跡の性格と出土漆器

掘立柱建物（92 棟確認）は、梁間一間型を主体として、廂や縁側の付いた例があること、硯の存在は識字階級であること、中国製の青磁や白磁などの所有からみて、名主階級以上であることがうかがえる。漆器では水久保遺跡例のような、地の粉（鉱物粒子）漆下地に何層もの漆を塗り重ねた上質品である朱漆器ないし総黒色漆器は確認できなかったが、その 2 ランクほど下の朱漆器（No.426、地の粉漆下地＋朱漆 1 層）や炭粉漆下地＋漆 2 層の黒色系漆器の存在は、名主クラスの家財であることを暗示させる。ほかの黒色系漆器は炭粉漆下地（漆に炭粉粒子）＋漆 1 層と炭粉渋下地（柿渋に炭粉粒子）＋漆 1 層の普及品である。

以上分析結果に基づいて漆器考古学的な所見を付した。本稿作成に当たっては、新潟県埋蔵文化財調査事業団土橋由理子氏、胎内市市教育委員会水澤幸一氏から、何かとご便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げる。

文献

田中耕作・鶴巻康志ほか　1990　『三光館跡・宝積寺館跡』新発田市教育委員会

鶴巻康志　2003　「至徳寺遺跡」『考古―中・近世資料―』上越市史叢書 8　上越市

水澤幸一　2001　「伝至徳寺跡出土の威信材―瓦器と漆器―」『上越市研究』第 7 号　上越市

四柳嘉章　1993　「立山町辻遺跡出土中世漆器の塗膜分析」『大境』第 15 号　富山考古学会

四柳嘉章　1996　「新潟県水久保遺跡出土漆器の塗膜分析」『水久保遺跡』 新潟県教育委員会･(財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

四柳嘉章　2000　「新潟県中条町江上館跡出土漆器の科学分析」『下町･坊城遺跡Ⅳ―B 地点―』中条町教育委員会

四柳嘉章　2001　「新潟県中条町下町・坊城遺跡 C 地点出土漆器の科学分析」『下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町教育委員会

第Ⅶ章　ま　と　め

1　縄文時代

A　下　　層

下層はⅥ～Ⅶ層を対象とし、時期は縄文時代前期末葉である。

C 区ではⅦ層でピット16 基を検出した。配置から住居跡の可能性があると考えた。E 区では前期末葉の大木6 式土器がまとまって出土した。平面的に若干の広がりがあること、出土層位にⅥ～Ⅶ層の幅があることなどから厳密には一括とは言い難いが、比較的限られた時間の中で残された土器群であろう。同じ場所で性格不明遺構やピットが検出されたことから、簡単な建物を伴う短期的な滞在地であったと推定した。

E 区の大木 6 式土器はいわゆる金魚鉢形の深鉢 1 点と深鉢 5 点がある。いずれも縄文施文のみでほかの加飾はなく、詳細な時期検討は困難である。しかし、胴部の張り出しが比較的高い位置にある（1・2）、口縁が短く外反する（1 ～ 6）、口縁部が多単位の羽状を呈する（2・4）などいくつかの特徴が見られる。これを大木 6 式土器の変遷についてまとめた松田氏の論考［松田 2003］に照らして検討すると、古～中段階に該当しそうである。大木 6 式土器の類例は、古渡路遺跡の近くでは村上市アチヤ平遺跡［滝沢・富樫 1998］、本道平遺跡［山崎 2000］、八幡山遺跡［田辺 1994］などがある。このうち八幡山遺跡の表面採集資料には有文土器とともに縄文のみの土器がある。山形県吹浦遺跡［渋谷・黒坂 1988］にも両者があるが、こちらの縄文のみの土器は撚糸文や結節羽状縄文などが用いられており、古渡路遺跡とは若干様相が異なる。また、吹浦遺跡例では胎土に繊維を含む点も相違点として挙げられる。

B　上　　層

上層はⅤ層以上を対象とした。A 区で中期後半の埋設土器、C 区で中期初頭の土器集中部、A ～ C 区で陥穴列、D・E 区では性格不明遺構を検出した。土器は中期初頭～晩期の土器が出土したが、いずれも数個体に満たない程度である。中心となる時期は後期前葉の三十稲場式、南三十稲場式である。

いずれの時期の遺構・遺物とも少量であるので、長期間滞在したような集落跡ではない。

A 区の埋設土器は大木 8b 式古段階の土器である。当該期の埋設土器の類例は少ないが、山形県野新田遺跡に口縁部を欠く深鉢が正位に埋設された例がある［伊藤・黒坂ほか 1996］［菅原 1999］。

C 区の土器集中部は中期初頭最新段階の土器がまとまって出土し、周囲にピットを検出したことから住居と推定した。炉などの施設は検出されていない。

A ～C 区の陥穴はすべて細長い平面形を呈し、22 基ある。遺物包含層と遺構構築面との関係から、構築時期は中期後葉以降とした。土壌分析結果では、陥穴使用時の環境は湿地や水域の存在が推測された。陥穴の配置は、標高が低い場所の等高線上に並ぶものが多いので、水域近くの地形やそれに関わる動物の習性を活かした狩猟が行われたのであろう。宮本常一氏は、湿地の「陥穽」は猪が毛虱を落とすために体を湿地にこすりつける習性を利用したものと推定している［宮本1981a］。本遺跡近辺での陥穴の検出例には、村上市ガラハギ遺跡［立木1997］、下ゾリ遺跡［和田ほか1990］、本道平遺跡［山崎2000］、東興屋遺跡［石川2009］などがあるが、いずれも河岸段丘や丘陵上に立地し、本遺跡の在り方とは異なる。

2 中　　世

A 古渡路遺跡の掘立柱建物

中尾　七重（木質部材研究所）

1）中世掘立柱建物の柱穴からみた分類

中世掘立柱建物跡の研究は、考古学の高橋與右衛門を初めとする東北地方の遺構研究[1]から、建築史学の宮本長二郎が本州・四国・九州地方に研究領域を広げ、「総柱型住居」「梁間一間型住居」等の類型による中世住居分析枠組を提示した[宮本 1999]。これにより掘立柱建物跡を系統的に分類することができ、発掘遺構に基づく中世住居史解明へのいとぐちが開かれたのである。以降日本各地で中世掘立柱建物遺構が多数報告され[2]、遺跡に対応した分類や、対象地域を拡大した比較研究も行われている［浅川・箱崎 2001］。

古渡路遺跡でも多数の柱穴が出土し、それらの柱穴を関連付けることによって発掘時及び遺構整理時に合わせて 92 棟の掘立柱建物跡を確認することができた。本稿では古渡路遺跡の掘立柱建物を宮本の分類を基本にして分析し、民家研究の知見を加えて考察した。その結果、古渡路遺跡は梁間一間型建物を主体とし、総柱建物を含んだ中世集落遺跡と位置付けられる。

2）建物遺構の概要

古渡路遺跡の掘立柱建物形式の分類について、さしあたり以下の類型を用いる[3]。梁間一間型と総柱型は住居あるいはそれ以外の用途の可能性もあると思われる。古渡路遺跡では当時の生活面が削平されており炉跡は検出できなかったが、一部住居に井戸の共伴が認められた。

本稿では建物の主体部を「身舎」、身舎の周囲に取りつく空間を「廂」と表記する。「身舎」と「廂」は寝殿造建物の建築構造に由来する屋内空間を表した歴史用語で、律令時代の文書に間面記法による表記として用いられている。本報告が対象とする中世掘立柱建物は、柱は細く柱間間隔は狭く建物の規模は小さく釘などの建築金物は全く出土せず、寝殿造と同様の構造を持つとは思われない[4]。また構造主体部に取りつく周囲柱と主体部側柱の間隔は 1 メートル以内の例が大半で、寝殿造の廂のような縁側ではなく、屋内に取り込まれた土間床の空間と思われる。これは礎石建ではあるが柱の並び方が良く似ている近世民家の上屋柱－下屋柱の関係を思わせる（第 39 図）[5]。このような廂の出の狭い場合「下屋」とするのが適

1） 高橋與右衛門　2003 「中世の建物跡」『戦国時代の考古学』pp497-508 高志書院、東北中世考古学会編　2001 『東北中世考古学叢書 2 掘立と竪穴 中世遺構論の課題』高志書院、福島県考古学会中近世部会いわき事務局編　2000 『東北地方南部における中近世集落の諸問題』福島県考古学会中近世部会平成 12 年度研究セミナー　など。

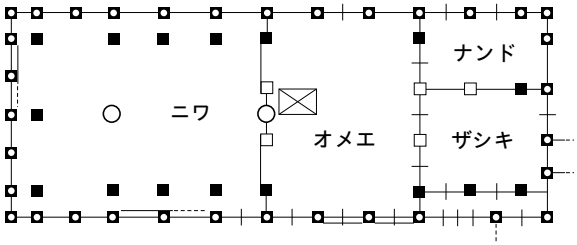
2） 北陸地方の各発掘報告書のほか、北陸中世土器研究会　1993 『第 6 回北陸中世土器研究会 中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』など

3） 奈良文化財研究所古代官衙遺跡データベース建物データでは、建物形式を「側柱建物」「総柱建物」「床束建物」に分類している。建物の用途や質など本遺跡出土建物遺構とは大きく異なるためそのまま適用できるものではないが、出土柱穴のあり得る状況を網羅しており参考にした。

4） 宮本は、「総柱型住居は古代の総柱建物とは全く異なる構造形式をもった新形式の住居建築が古代末期に発生し鎌倉時代に普及した。そして梁間一間型住居は弥生時代以来の伝統形式（在来型）が総柱型の影響を受けて生まれ変わり中世に復活したもので、律令型（新様式）の掘立柱建物とは構造が異なる。」と述べている［宮本 1999］。

5） 重要文化財滝沢本陣横山家住宅、福島県会津若松市、延宝年間（17 世紀後半）の建築と思われる。（財）文化財建造物保存技術協会編　1978 『重要文化財　旧滝沢本陣横山家住宅修理工事報告書』、中尾七重　2009 「重要文化財滝沢本陣横山家住宅の放射性炭素年代測定について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』

当であるが[1)]、「上屋－下屋」の概念が一般的ではなく理解を遠ざける可能性があるため、本稿では便宜的に「身舎」「廂」を掘立柱建物の屋内空間を示す用語として限定的に用いる。また、妻側に廂のある柱穴配置の時、身舎の妻壁まで棟の延びた切妻・身舎梁上の束が棟木を受ける寄棟・廂の屋根が四周に廻る入母屋の可能性があるが、その他に「身舎－廂」に架けられた屋根とは別の構造で、壁面上部に小屋根がさしかけられた場合もあると思われる。本稿ではこのさしかけの小屋根を「庇」と表記する。古渡路遺跡では柱穴配置からは、隅の廂柱を持たない妻側の廂を妻庇と推定した。



■ 上屋柱（じょうやばしら）　□ 下屋柱（げやばしら）

第 39 図　古民家の上屋柱と下屋柱

重要文化財滝沢本陣横山家住宅（福島県）

【梁間一間型】

平行した 2 本の柱列が建物を形づくる側柱建物のうち、平行した 2 本の柱列の向かい合った柱どうしが相対し、柱筋が通っている（梁を架けることができる）もの。廂の無いもの、あるいは 1 ～ 4 面に廂のつくものがある。身舎内部に柱の立つ例があり、床束、間仕切柱、棟持柱や梁を受ける構造柱の可能性があるが、区別は概して困難である。また、身舎妻面[2)]に柱の立つ遺構で、特に梁間が 4m 程度（桁行柱間の 2 間分）で中央に柱が立ち廂の無い場合、律令型梁間二間型掘立柱建物との区別は困難である。しかし廂のある場合は廂の出が柱間の半分程度であれば梁間一間型、廂の出が柱間と同じ一間分程度の大きさであれば律令型の梁間二間型掘立柱建物と考えることができる。

【（中世）総柱型】

碁盤の目の交点全てに柱の立つ建物で、内部の柱と側の柱の大きさが同じである。規模の大きさや梁行・桁行に関係なく柱間は一定。古代の総柱建物は高床倉庫であるから基本的に廂は付かない。これに対し中世の総柱型建物は廂の出が柱間の半分程度の廂の付く例があり、高床倉庫ではなく、土間床あるいは一部床張りの建物と思われる。本遺跡の総柱型は梁間 2 間のものが検出された。

【複合型】

古渡路遺跡では梁間一間型 2 棟が棟を平行にして平側を接して合体した建物と、梁間一間型 1 棟と総柱型 1 棟が棟を平行にして平側を接して合体した建物の 2 種類の複合型建物が検出された。

【不揃いの側柱型】

平行した 2 本の柱列（側柱）が建物を形づくる側柱建物のうち、側柱の柱間が不揃いで向かい合う柱筋が通らないもの。小規模な遺構に多く見られる。

1）宮本は「中世の梁間一間型住居の下屋は在来型を継承して、軒下を屋内に取り込む形式であったとすることができる。（中略）総柱型住居の下屋についても、一般集落の場合は梁間一間型住居と同様であるが、支配階層の大型主屋の、特に礎石建てで四面に取り付く形式の場合には、下屋ではなく縁束である可能性を考慮しなければならない。」と述べている［宮本 1999］。

2）棟に平行な建物の側面を「平（ひら）」、直行する建物の面を「妻（つま）」という。

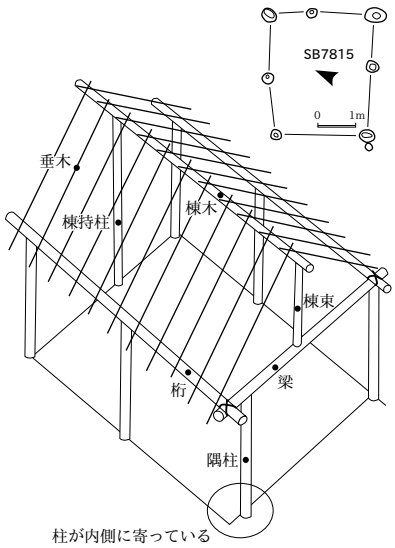
【方形】

矩形をなす 4 本の柱およびそれに連なる柱が建物を形づくると思われる遺構。

3）建物の特徴

A　区

14 世紀に（時期は第Ⅶ章 2B 参照）SB7811 が SB7821 に建て替えられている。この 2 棟のみが廂付きで規模が大きく、この区画の主たる住居と思われる。SB7811 は桁行 7 間の二面廂付梁間一間型住居で、妻壁梁間中央の柱は壁心棟持柱と思われる。廂の出が桁行 1 間の半分程度の幅であることや、身舎柱径が 12 ～ 15cm、廂柱径が 8 ～ 13cm と細いなどの点で律令型梁間二間型と異なっている。身舎柱は廂柱と比べて太く、掘形も深い。両妻壁に棟持柱のあることから、切妻屋根と思われる。



第 40 図　SB7815 推定復元図

SB7821 は方位および梁間の大きさが SB7811 とほぼ同じで、建替えと思われる。桁行 5 間と SB7811 に比べて小さくなっているが、東側にも廂をつけた三面廂である。西妻側中央の P6345 は壁心棟持柱と思われる。これに対応する東妻壁中央には柱穴は無いが、P6346 が東妻壁から 45 度の位置にある [1]。棟持柱としては掘形の浅いため、P6411 と P6343 間に架けた身舎梁を支える柱かもしれない。西妻側は壁心棟持柱のため切妻である。東妻側は廂が廻るので、入母屋か寄棟あるいは切妻の可能性が考えられる。入母屋屋根の場合、P6411 と P6343 が身舎の隅柱となるが、この 2 本の柱穴は深さが 11cm、13cm と浅く、構造的に重要な柱とは思われない。寄棟の場合は P6299 と P6350 が身舎の隅柱となるが、この 2 本の柱穴は 22cm と 24cm の深さがある。SB7811 の柱を再利用した柱穴は 56 ～ 62cm とたいそう深いが、SB7821 のために新しく掘った柱は、西妻棟持柱の深さ 56cm 以外は深いもので 20 ～ 30cm 程度、浅いものは 10cm 程度なので、P6299 と P6350（根石あり）が身舎の隅柱として妥当と思われ、東妻側は寄棟屋根の可能性がある。また、SB7821 の西妻側は切妻なので、東妻側廂柱に梁を架けて束を立てるなら、東妻側は切妻となる。この東妻側が寄棟か入母屋かは柱穴配置からは分からない。

SB7830 は SB7811 の柱を 2 本再利用として用いた建物で、SB7821 と同時期と考えられる。桁行 3 間であるが梁間が 7m 余あり、向かい合う側柱同士に梁を架け、梁上の束で棟木と垂木と屋根を受けるのは不可能である。このような梁間の大きい正方形平面の建物は特異な例ではなく、例えば下町・坊城遺跡のⅣ期第 76 号建物［水澤 2001］も柱配置は異なるものの梁を架けて小屋（屋根構造）を支えたとは思えないという点で同様である。周囲の柱は壁を形作る一方、内部に嵩の高い物を収納し置き屋根を乗せるなど、側柱－梁－小屋構造からなる一般的な建築とは異なった構造物を想定したほうがいいかもしれない。

SB7815、SB7818、SB7826 は同形式同構造の建物で、いずれも梁間 1 間桁行 2 間、一方の妻側に棟持柱があり、もう片方には無い。SB7815 と SB7818 は壁心棟持柱で、SB7826 は近接棟持柱である。

1）隅柱から 45 度の位置に棟木の端がありそこから隅木を隅柱に出すならば、妻側と平側の屋根勾配が同一となる。今日では一般的に妻と平の屋根勾配は同一であるが、古渡路遺跡で同一であったかどうかは不明。

SB7815 は東妻壁に壁心棟持柱があり、西妻壁は梁に棟束を乗せ棟木を受けていたと思われる（第 40 図）。北西隅の柱 P7057 は側柱筋よりも内側に立てられている。これは P7091 と P7057 に渡した妻梁と P7076 から渡された桁の交差する箇所と柱 P7057 の位置をずらしているためと思われる。梁と桁を蔓等で結束して固定する場合、柱の真上よりずらした方が簡便である。東妻は壁心棟持柱があるから、妻側に梁を架ける必要は無く、棟持柱から左右横材を隅柱上部に渡すにはホゾ差の仕口が必要となるので、復元図では東妻に妻梁などの横架材を描いていない。しかし東妻面に梁が架からず、側柱と棟持柱がつながらなければ構造的に弱いと思われる。

この点を SB7826 は棟持柱を妻壁近接位置に置くことで解決したと思われる。柱穴 P7271 は妻側に傾いており、上部で妻梁に接していたと推定される（第 43 図）。SB7815 と同様、隅の柱は幾分内側に寄り、平面全体は胴張の形状をしている。このように隅の柱が内側に寄るのは妻側の梁の端部に桁を架けるためと思われる。

SB7815･SB7818 は片側のみ胴張状柱配置であり、SB7826 は両妻側とも胴張状柱配置となっている。この違いは棟持柱の位置によるものと考えられる。すなわち、棟持柱が妻梁間中央にある場合、その妻面に梁を架ける必要は無いので、壁心棟持柱を持つ SB7815 と SB7818 は棟持柱の無い方の隅柱が内側に寄っている。一方近接棟持柱の SB7826 は両妻に梁を架け、両側の梁の先端部と桁行中央柱の 3 か所に桁を乗せるので、桁行中央の柱が少し外側に出ることとなる。複雑な仕口を作らず結束により組み立てることができるため、この方法は現在でも仮設物に用いられる手法である。棟持柱の無い妻側は妻梁上に棟束を立てて棟木を受けたと思われ、この 3 棟は切妻の小規模な小屋に復元できる。

AB　区

Ⅱａ期の主屋と思われる二面廂付梁間一間型の SB7816 は、A 区の SB7821 と規模形式が近い。SB7821 に見られた屋内棟持柱は見られない。東北隅の廂柱が検出されなかったので、東妻側に廂があったかどうかは不明である。西側には壁心棟持柱があり切妻屋根となるので、東面は軒の出の小さい妻庇があったかもしれない。SB7681 は廂の付かない梁間一間型で桁行 4 間。南妻壁に壁心棟持柱、桁行・梁間中央に独立棟持柱の P7709 があり、切妻屋根で、棟木長さが 4 間のため中央の棟持柱で支えていると思われる。SB7681 に隣接した SB8499 も主屋に付属する副屋であろう。

Ⅲｂ期（15 世紀中葉）に複合型の SB7604 が出現する。西廂付梁間一間型の東側に東廂付総柱型が身舎柱を共有して合体し、全体で 10m × 11.2m の正方形平面をしている。梁間一間型部分の身舎内北側には井戸 SE7602 が掘られている。総柱部分は梁行 2 間桁行 5 間で東側に 1.2m の出の廂が付く。総柱部分が高床か土間床かは不明である。屋根は梁間一間型部分と総柱部分にそれぞれ屋根を架けて棟が 2 本平行に並ぶ形（第 41 図）と、全体に大屋根を架けた形が考えられる。SB7604 の梁行（東西）中央に位置する P8668 と P7024 は掘形が深く棟持柱の可能性があり、そうならば全体に切妻の大屋根を架けていたと思われる。北面に P8662、P7648、P7662 で構成される妻庇、南面に P7015、P7006、P7009 で構成される妻庇を梁間一間型の妻側両面に張り出して、大きく目立つ外観を形成していたと思われる。この区の主たる住居と思われ、SB7822 と SB7829 を副屋とする。そうすると、AB 区の主屋 SB7816 と SB7604 はいずれも切妻妻側に妻庇のある外観となる。

この区でも SB7683、SB7822、SB7823、SB7824、SB8695 は胴張形状で、SB7683、SB7822、SB8695 は妻梁に桁を掛ける位置に柱穴が並び、SB7823、SB7824 は側桁に妻梁を架ける柱穴位置となっている。

SB7683（Ⅱｂ期）と SB7682（Ⅲａ期）はほぼ同位置に内部柱が立つ。この内部柱は棟木を受ける位置には無いので、梁受けと間仕切兼用と思われる。同位置に柱の立つのは、間仕切りに関係する柱で、間取や屋内の使用法が共通すると思われる。

B　区

B 区では 4 棟の梁間一間型建物が検出された。Ⅰａ期の SB8026 は四面廂付桁行 3 間で、内部には厩の床面によく見られる形状の隅丸方形掘込み SK8331 が東妻壁に接して掘られており、厩建物であったと考えられる[1)]。四面廂にもかかわらず、妻側梁間中央の廂柱が 2 本とも棟持柱と思われ切妻屋根となる。廂は胴張型柱配置となっている。Ⅱａ期に建て替わった SB8024 と SB8025 は廂の無い梁間一間型で、より実用的と思われる。厩なので柱穴は深く頑丈に作られている。SB8025 は内部棟通に P8293 の棟持柱を持っているが、これは桁行が大きいための構造的な補強と思われる。厩建物はいずれも西側に掘込みがある。これは西側妻壁に開口部を設けず、その壁際まで厩掘込みを設けて飼養に充てていたもので、当地の西風の強い環境に対応したものと考えられる。厩状掘り込みのない SB8539 は、内部柱の柱穴が最も深く、その他は 20 ～ 38cm 程度であるので、厩以外の用途の可能性が考えられる。また深い内部柱は棟持柱と考えられる。古渡路遺跡のほとんどの建物が切妻であるため切妻屋根の可能性が高いと思うが、棟持柱の位置から寄棟屋根の可能性もある。

C　区

Ⅰａ期に主屋 SB9063 及び主屋 SB9222 と井戸上屋 SB9963 の 2 戸が併存している。SB9063 は廂柱が胴張状の配置であるから、廂四面に桁が廻っていたと考えられる。ところが、一方西妻梁行中央の掘形が深い廂柱 P9383 は近接棟持柱で、東妻中央の P9582 は壁心棟持柱と思われる。桁が四面に廻るならば屋根は寄棟か入母屋、妻中央に棟持柱があれば切妻屋根と考えられるが、SB9063 は胴張状の廂柱配置と妻中央柱穴が認められ、その解釈は難しい。寄棟・入母屋の場合、P9383 と P9582 は棟持柱ではない。切妻の場合、妻側に架けられた横架材は桁ではなく妻側の壁面を構成する柱繋ぎ材と考えられる。東妻側は三本の柱を意図的に並べた意匠のように思われる。

SB9222 も桁行 3 間四面廂付梁間一間型住居であるが、桁行きの柱間が 3 ～ 4m と広くなり住居の規模が大きい。身舎・廂ともに棟持柱は無い。身舎の対向する柱に梁を架けてその上に束を立て棟木を乗せると思われる。両妻側の廂柱は梁行中央付近に 2 本の廂柱が近接して立てられているが、これはこの 2 本の間に梁を架け、棟束を立て、棟木を受けていたならば切妻屋根となる。廂柱は胴張り状の配置で、SB9063 と同様寄棟や入母屋の可能性がある。また妻壁の意匠も SB9063 と共通する。

Ⅱａ期は主屋 SB9054 が SB9063 の建替え、主屋 SB9220 が SB9222、SB9221 の建替えで、屋敷地の併存が続く。SB9054 は桁行 4 間の四面廂付梁間一間型住居で、規模が少し大きくなり、東妻側には上屋 SB9058 のある井戸が軒を接して建てられている。SB9220 は桁行 3 間の四面廂付き梁間一間型住居で、やはり廂柱は胴張状配置の四面廂ではあるが妻側中央に棟持柱と思われる柱穴が見られる。4m ほど西側の SE9469 が同時期で付帯する井戸と思われる。SB9370 は SB9054 の副屋である。SB9370 も西側と南側に廂の付く梁間一間型で、主屋に準じる住居と思われる。SD9542 は途切れているか所があり、溝を横切る通行路とするとそのか所は、SB9220 の東妻側に面した位置となる。この位置関係から主屋の妻側に入口があると考えることもできる。

1）「うまやは……床は 1 尺ほど掘り下げ、奥の 3 分の 1 ほどは床面をさらに低くして小便所になり、牛の糞尿もそこに流し込んで汲み取るようにし……」（大阪府豊能郡能勢町の事例）［太田 1967］

C 区の主屋は胴張型柱穴配置の四面廂付梁間一間型で、廂の妻側中央に棟持柱と思われる柱穴の見られる例もいくつかあり、屋根型の推定は困難であるが、一応切妻と考える。

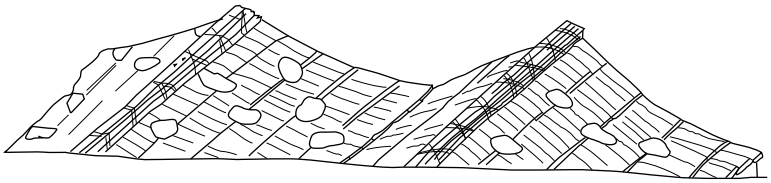
D　区

D 区は最も建物が密集していた地区である。D 区の建物は全体に柱筋が通り、柱間が均等で基準尺の存在を窺わせる。また、柱径は細く規格的な用材使用で、建築技術者が普請に関わった可能性がある。

Ⅰ a 期には主屋桁行 5 間四面廂付梁間一間型 SB5295 と、桁行 4 間以上の 2 面以上廂付梁間一間型 SB5332、副屋は廂なし桁行 3 間以上梁間一間型 SB5340 と廂なし側柱建物 SB5337 が検出された。SB5295 は身舎の対向する身舎柱に梁を架けてその上に棟束を乗せ棟木を受け、妻廂中央の廂柱でも棟木を受ける、古渡路遺跡で一般的な構造である。その中でも、SB5295 は柱径が 10 ～ 12cm 程と細く、柱筋が特に良く通っている。

Ⅱ a 期には桁行 4 間三面廂付梁間一間型の SB5335 と桁行 3 間四面廂付梁間一間型の SB5328 が検出された。SB5335 は屋内柱が棟下通りと側柱梁行筋の交点に 2 本あるものの、妻面中央に柱が無いので総柱型ではなく梁間一間型とするが、他の梁間一間型建物に比べて柱径が幾分太い。梁行中央の廂柱 P3828 が棟持柱となる。内部柱の P3623 と P3639 は間仕切り柱か床束かは不明である。SB5328 は棟持柱の無い廂付梁間一間型で、身舎柱の柱穴が深く廂柱の柱穴はそれより細く浅いので、身舎柱が屋根荷重を受けていると思われる。桁行が 7m 以上あり桁行柱間も 2.4m 程度と間隔が広いので、東妻から西妻まで向かい合った身舎柱の頂部に 4 本の梁が架けられたと思われる。梁上に棟束を立て棟木を受ける。妻側の廂柱にも梁が架けられ棟束が立てられ棟木を受ける。身舎柱の梁を挟んだ上部には桁行に身舎の桁が架けられ、棟木から身舎の桁に垂木が掛け下ろされる。桁行の廂柱は身舎柱より低くなり、廂柱の頂部に架けられた軒桁に垂木の端部が乗せられる。東妻壁を梁行 1 列目とすると、東から 2 列目および 3 列目の梁行は身舎柱と廂柱の柱筋がそろっている。身舎柱とそれに対応する廂柱が繋梁でつながれていたとすれば廂柱が外側に開くのを止めることが目的と思われる。

Ⅲ b 期には桁行 5 間四面廂付梁間一間型の主屋 SB5330 および、副屋の廂なし梁間一間型 SB5325 と廂なし梁間一間型 SB5326 が検出された。SB5330 はⅠ a 期の SB5295 と同様、廂柱も含めて柱筋がよく通っており、整然とした柱穴の配置である。また 7 尺を基準尺としていると思われ、掘立柱建物としてはかなり質の高い建物と推測できる。側柱は隅の部分で胴張状の配置をしている。SB5325 は桁行の柱列がジグザクしているが、ジグザグに規則性が見られるので、建築技術が未熟なための不揃いではなく、壁小舞を柱に結束するためなど壁の工法による可能性もある。壁小舞とは壁の下地を作る材で、細い棒や細竹を縄で縦横に結び付け柱間に渡される。柱の外側から隣り合う柱の内側へ横棒を差し渡し、縦の小舞は地面に直接突き刺して壁下地とした土壁の大壁の可能性も考えられる[1)]。そうであるなら、SB5325 建物の用途は不明であるが、他の桁行柱間の大きい建物と比べて頑丈な壁を構築したと思われる。



天狗草子よりリライト

第 41 図　二棟が平行に接合した屋根

Ⅳ期に桁行 5 間の梁間一間型を 2 棟平行に接続した複合

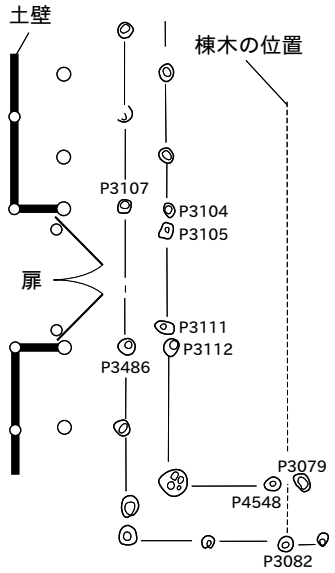
1）重文箱木家住宅（室町時代）の地下発掘調査で地面に直接差し込んだ壁小舞が発見された。『重要文化財箱木家住宅（千年家）保存修理工事報告書』1979.1

型建物 SB5301 が検出された。北から 3 列目の桁行柱列は柱穴が浅く荷重を受けることをあまり期待されていないことから、全体に大屋根を架けるのではなく、梁間一間型のそれぞれに梁を架け、2 列の平行な棟をあげていたと思われる。その場合北から 3 列目桁行柱列と 4 列目桁行柱列の間に屋根の谷ができ雨漏りが起こる。このような場合、神社建築の八幡造や近世民家の軒を接した分棟型系の民家[1] で見られるように、谷の部分に樋をかけて妻側に雨水を排出する方法がある。実際に SB5301 家でどうだったかは分からないが、13 世紀末に作られた「天狗草子」［小松 1993］に棟が平行に並ぶ石葺板置屋根の姿が描かれている（第 41 図）。屋根の谷の部分は樋が無く特に工夫も見られないので雨仕舞いは良くないが、雨漏りを苦にしない住まい方を想定するしかなく、SB5301 もこのような形状の屋根であった可能性が考えられる。但し、天狗草子に描かれた第 41 図の家屋は廂が 1 間程度あるかもしれず、律令型梁間二間型の可能性がある。

D 東区

D 東区ではⅠa 期に廂なし側柱建物 SB5317 と井戸上屋 SB5321 が、Ⅱa 期には三面以上廂付側柱建物 SB5316 が、Ⅲa 期には桁行 3 間の四面廂付梁間一間型住居 SB5320 が検出された。発掘区外に主屋級の建物が存在する可能性があり、これだけで他の区に比較して規模が小さいということはできないが、特にⅠa 期とⅡa 期の建物は柱穴の不揃いが目立つ。

SB5316 は三面あるいは四面廂のつく梁間一間型の主屋と思われる建物である。身舎の桁行柱は掘形が深く構造柱と思われる。P3104 脇の P3105 と、P3112 脇の P3111 は柱穴の形状や深さが同一で一対の柱穴と思われる。構造を受ける身舎柱ほどは柱穴に深さがないので、P3105 と P3111 は何か柱間の装置に関わる一対の柱あるいは束柱だとすれば、P3105–P3111 間は入口扉という推測も可能である。P3105 と P3111 は身舎の側筋より幾分外側にあるので内開きの扉かもしれない。その場合、P3104 と P3107、P3112 と P3486 は身舎柱と廂柱がここだけ相対するので、廂柱筋の外壁（土壁）が廻っていたと思われる。入口が半間分中に入り、扉前は屋根のある入口空間となる。南側は身舎の桁行柱列と廂の柱列が全く相対していないので、身舎柱と廂柱はつながっていない。西妻壁には棟高近くまである母屋柱 P4548 と P3079 が棟木を受け、棟木は棟持ちの廂柱 P3082 まで延びていたと思われる。SB5316 は切妻で北向きの平入住居となる。



第 42 図　SB5316 入口の復元

E　区

Ⅰa 期の厩建物 SB2768 がⅠb 期に厩建物 SB2767 に建て替えられている。桁行 4 間一面廂の梁間一間型で西側に深さ約 30cm の厩状掘り込み（SK2607）がなされている。この掘り込みが建物範囲より外にはみ出しており、その理由は不明。先に示した大阪府豊能郡の例から外側は小便所の可能性があるかもしれない。建替えや柱の入替補修が行われたらしく、柱穴の重なりが多くみられる。また柱 2 本を近接して立て強度を高め、あるいはそれぞれ梁受けと桁受けに用いた可能性なども考えられる。

Ⅱa 期になり桁行 3 間四面廂付梁間一間型住居 SB1939 が主屋クラスの建物として建てられる。全体

1） 重要文化財旧境家住宅（肥後民家村、熊本県玉名郡和水町）や重要文化財旧太田家住宅・重要文化財旧作田家住宅（日本民家園、川崎市）など

に浅い柱穴で柱位置もズレが見られ、精度の高くない建物である。

D 東区と E 区はⅠａ期の主屋遺構が少なく、Ⅱ期～Ⅲ期に主屋クラスの住居が建てられるが、その建築は比較的素朴な技術を用いたもので、専門技術者の手になるものではない。古渡路遺跡の集落が発展した時期に、一時的に居住域が拡大した周縁部の地区と思われる。

G　区

G 区は古渡路遺跡の中でも最も異色な区画である。推定約 25m 四方が堀と杭列および木立で区画されており、Ⅰａ期に 1 棟の梁間一間型住居が認められるが、その後いったん途切れ、Ⅲ期になると総柱型建物や総柱型と梁間一間型の複合建物が同じ狭い区画に、次々に建て替えられるのである。

Ⅰａ期に二面廂付梁間一間型 SB882 が建てられる。SB882 は屋内に井戸を伴うもので、住居と思われるが、同時期の A 区 SB7811 と比較すると、規模の差はもちろんのこと、柱列も不規則にでこぼこした精度の低い建物である。

Ⅲａ期に二面廂付総柱型 SB883 と三面廂以上の梁間一間型 SB887 が隣接して検出される。SB883 は梁行 2 間桁行 5 間の総柱型の平側に廂の付いた建物である。総柱内部は南側棟下通りの柱位置に掘立柱が 1 本存在せず、また中央北寄り棟下通りの柱位置（SX322）も掘り込みが浅い。総柱部分の四隅と棟下通りは特に深い柱穴で、構造を支えていたことが推測される。

Ⅲｂ期には、Ⅲａ期の 2 棟が、二面廂付複合型 SB884 に建て替わる。東側に総柱部分、西側に梁間一間型部分が合体した複合型建物で、Ⅲａ期の 2 棟の配置関係そのままに平面が接合している。Ⅲａ期 2 棟の使い方を継承するとともに利便性を図った結果がこの複合型建物と考えられる。SB884 は総柱部分が梁行 2 間桁行 5 間で、梁間一間型部分は梁間の幅が 2 間分で桁行 5 間、東側と南側廂が付く。梁間一間型部分の屋内北側には井戸があり、住居であったと思われる。この廂は 80cm ほどの出であり、特に南側は柱位置が身舎柱ともそろっておらず、廂柱をつないで壁を形作っていたと思われ、縁側とはならない。総柱部分中央部（北妻面を 1 列目とした梁行の並び列で、北から 2 列目、3 列目、4 列目）が特に掘形が深く強固な構造となっている。そのなかで、P461 と P52 が 12 ～ 18cm と浅い柱穴であり、床束の可能性があるかもしれない。但し他の区の住居の例からも、古渡路のこの時期は土座住まいが基本であったと思われ[1)]、SB884 家でも梁間一間型部分が居住空間と思われる。総柱部分が一部高床であったとするならば、その空間は特別な空間、非日常的な接客用座敷なり大切なものの収納庫などが考えられる。屋根は AB 区Ⅲｂ期 SB7604 で述べたように、梁間一間型部分と総柱部分それぞれに南北の棟が平行に並ぶ屋根形態と、P388–P301 を棟通りとして大屋根を架ける方法がある。

Ⅲｃ期には SB885 に建て替わる。SB885 は碁盤の目の交点に柱が立つが、梁間 1 間の間隔は 2.2m 程度、桁行 1 間の間隔は 1.8m で、梁間の方が広い。これは宮本の梁間一間型平面類型Ⅲ型に該当するが、梁間 1 間と桁行 1 間の長さの差が小さいので総柱型と見るべきか[2)]。建物は発掘区域外に延びるため、全容が明らかではないが、二面以上廂付桁行 6 間以上の長い建物で、柱の並びに規格性は無く精度は低い。

Ⅳ期には SB881 に建て替えられる。西側に総柱型、東側に梁間一間型を合体した複合型建物で、Ⅲｂ期 SB884 とは総柱と梁間一間型の位置関係が逆転している。総柱型部分は梁行 2 間桁行 4 間で、北側列

1）「（近世民家の）床の構造には 2 形式があって、土座の方が古いことが、土座→板床の改造例によってわかる。なお土座から板床への変化は東北地方、日本海側、中部地方の一部など広範囲にみられる。」［太田 1967］

2）このように棟下通りに柱列があり左右の梁間が大きい近世民家として摂丹型民家や四国の古民家があり、投げ掛け梁の架構となっている。SB885 も投げ掛け梁架構の可能性もあるが、棟下通りの柱穴に浅いもののあること、古渡路遺跡では 1 例のみであるので、可能性を指摘するにとどめたい。

の桁行間が若干狭い。梁間一間型部分は梁間が２間分、桁行は４間で、南妻側梁間中央に柱が立てられる。東側に１間幅の廂が付き、身舎柱、廂柱、総柱の柱筋はほぼそろっている。屋根の形状は、総柱型部分と梁間一間部分が別々に棟を並べる方法と全体に大屋根を架ける方法がある。G 区においてこうも次々に建て替わる理由が建物の劣化によるものならば、総柱型部分と梁間一間型部分それぞれに屋根を架けて、P502–P359 の辺りに屋根の谷がきていたかもしれない。このような場合、先にも述べたように雨仕舞いが悪く、雨漏りが日常となるので建物の劣化は早く進行するだろう。

4）考　　察

a　梁間一間型の梁束構造

古渡路遺跡で最も多く検出された梁間一間型の建物は、向かい合う掘立柱に梁を架け、梁の上に束を乗せる。この柱－梁－束を２組以上作って桁行に並列し、束に棟木を架ける。また身舎柱上の梁の両端に桁を乗せる[1)]。そして棟木から桁に垂木を掛けて屋根を形作る構造と思われる。桁行３間程度の規模の小さい建物は両妻側にのみ束を立てるが、桁行の大きい場合は中間の身舎柱に梁を架けて棟束により棟木を支持したと思われる。廂付の場合は、身舎柱より細く掘形の浅い廂柱は屋根の荷重をあまり受けておらず、外壁を形作っていたと思われる。身舎梁上の身舎桁から垂木が延びて廂柱上の側桁に乗せられる。廂柱は総じて身舎柱より柱径は細く掘形は浅いので、身舎柱より短いと思われる。身舎柱と廂柱は半間程度（1m 以内）の間隔と狭く、廂柱は身舎柱より低いので、身舎の屋根勾配と廂の屋根勾配は同じで、茅か割板などの屋根材を葺き下ろすことになる。すなわち、梁間一間型の身舎柱は屋根を支える構造部材であり、廂柱は壁を形作る部材となる。これは近世民家の構成と同じで、第 39 図に見られるような身舎柱(＝上屋柱)が壁に沿って立ち並ぶ内部空間だったと思われる。砥石が出土しており、主屋クラス構造部分は柱と梁、柱と桁、梁と棟束、棟束と棟木は、鑿などで加工した仕口で組まれていたと思われるが、簡単な建物や廂の場合は蔓等で結び付けられる場合もあったと思われる。

梁間は最長で 5m 弱の例(SB5320)がある。また妻側のみ棟束の立つと思われる遺構で、桁行４間(8.5m)の中央に棟持柱のある例(SB7681)や、桁行３間(6.8m)の２間位置(4.4m)に梁受けの柱が立つ例(SB9220)、桁行３間（6.4m）の２間位置（4m）に梁受けの柱が立つ例（SB5327）など、5m を超える場合は途中に柱で支持していることが窺える。近世でも２間半～３間（4.5 ～ 5.5m）が中間の支持なしで強度を保って横材を渡せる目安であったので[2)]、本遺構の柱配置は構造上妥当な間隔であるといえる。またこのことより、5m をこえる桁行の建物遺構で内部柱の無い場合は、妻側だけでなく中間の梁間に身舎梁を架けていたことが推測できる。棟下通り梁行き柱筋の内部柱で掘形の浅い柱穴は梁の垂れ下りを防ぐために入れられた柱の可能性がある。

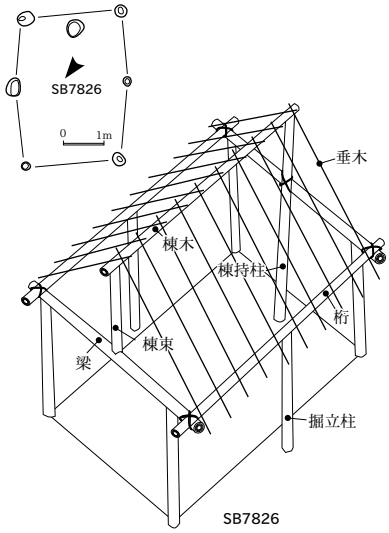
b　胴張状柱配置の廂なし梁間一間型

建物外側の隅柱が内側寄りになるため、全体として胴張状の柱配置となる例がいくつか見られた。胴張状柱配置の廂なし梁間一間型 SB7826 を事例に見てゆく。先にのべたように隅では梁の柱上ではなく端

1）柱上の梁の上に桁を乗せる組み方を折置組（おりおきぐみ）、柱上に桁を乗せて梁を桁に架ける組み方を京呂組（きょうろぐみ）という。民家は近世を通じて折置組から京呂組へと構造が発達する。

2）「当時このような梁のスパンは、三間を限界とする目安を持っていたらしい。その根拠は、ヒロマの桁行の大きい安西家住宅や平野家住宅では、スパン三間の位置の室内に、使い勝手を犠牲にしてまで独立して立つ柱を残していることでうなづけよう。」［田中 1992］

部に桁が乗っているが、桁行中央の柱は直接桁を支えているため胴張状の柱配置となる。梁の柱位置に桁が乗らない(柱列をそろえない)のは、ホゾなどの仕口を作らず相欠（あいかき : 材双方を同形に欠き込み、組む）など簡単な加工と蔓等による結束で固定するため、一か所に材が集中することを避けたためと思われる。また隅だけ桁を梁で受けるのであるから、中央列では梁が架けられていないことも分かる。このSB7826では南妻側屋内に近接棟持柱と思われる柱穴が認められた。近接棟持柱は、実測図によれば妻壁より50cm弱程度離れており、柱穴はやや妻側に傾いていた。この棟持柱が妻側に傾き、妻梁と接して結束されていたとすれば、妻梁の高さは1.7mほどと思われる。当時の生活面が削平されているため、もう少し低かったかもしれないが、土間床の建物で背をかがめず入れる高さとして適当である。柱穴による上屋の復元において高さ関係は不明の場合が多いので、参考となる数値が得られたことは幸運である。屋根が茅葺であったか、樹皮や板で葺いたかは分からない。推定復元図では茅葺の場合に良く見られる45度の屋根勾配としたが、勾配が緩かった可能性も充分ある。

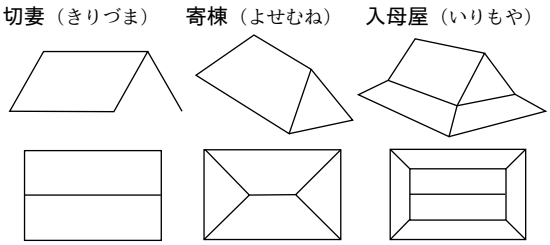


第43図　SB7826推定復元図

身舎柱が胴張状柱配置の建物は規模が小さい。小屋などの付属建物で、鑿等による仕口加工が少ない簡易な建物だったと思われる。

c　廂柱と棟持柱、屋根について

四面廂建物は主屋と思われ、構造を支える身舎部分は梁間一間型で、各区の各時期に1～2棟が認められる。廂柱の並び方は、ⅰ胴張状配置、ⅱ身舎柱と相対して一直線にそろう場合、ⅲ直線状にそろうが身舎柱と相対しない場合が見られる。ⅰ廂柱の胴張状配置は本項4）bで述べた身舎柱と同様、隅の柱では廂柱に架けられた梁に廂桁が架けられるが、平の柱は直接に廂桁を受けるため生じる柱配置である。ⅱ身舎柱と相対する例はSB5328（D区）で述べたように、身舎柱と廂柱に繋梁が架けられ、あるいは壁が作られていたと思われる。ⅲ身舎柱と相対しない場合は、掘立柱なので自立し、側に並ぶ廂柱同士で壁を形成し、上部に廂桁を架けて葺き下ろしの垂木を受けていたと思われる[1)]。すなわち平側については本



第44図　屋根の形と切妻茅葺の例

神奈川県指定文化財　広瀬家住宅
（川崎市立日本民家園所蔵、写真提供）

1）重要文化財箱木家住宅の場合、下屋柱と上屋柱間に繋ぎ梁は見られず、構造的に繋がっていない。『重要文化財箱木家住宅（千年家）保存修理工事報告書』1979.1

項 4）a で述べたように葺き下ろしと思われるが妻側はどうだったのだろうか。

四面廂つき梁間一間型の例として SB9063（C 区）を見ると、廂柱の両妻側中央に柱穴が認められる。掘形が深いので棟持柱とするなら、妻側の廂は、身舎の切妻屋根を棟方向に延伸し、妻側の廂筋で妻壁を立ち上げていたと考えられる。妻面廂柱列に棟持柱が認められない例でも、廂梁を架け廂筋の棟束で棟を受けることができる。この場合外観はシンプルな切妻屋根になり、外観に見える側廻りの柱は廂柱となる（第 44 図　広瀬家住宅の例）[1]。これまで妻側の廂は妻庇と考えられてきたので、妻側中央の廂柱が棟持柱であるなら新しい知見といえるだろう。棟持柱と思しい柱穴の無い場合は妻側の廂柱が妻庇であった可能性がある。SB5329（D 区）は北側と東側の 2 面に廂があるが、北東隅の廂柱が無いことと北妻側廂柱の掘形が浅いことから妻庇の可能性がある。

古渡路遺跡の梁間一間型建物では棟持柱は廂柱か屋内柱に用いられている。構造柱である身舎柱は梁を受けるので棟持柱とはならず、棟持柱は主構造の補助として使われている。

切妻屋根は、瓦葺きを除けば板葺が一般的であるが、切妻茅葺の民家も存在する（第 44 図）。茅葺の場合、一般的に矩勾配（かねこうばい）といって雨水が茅表面を流れるために 45 度程度の勾配が必要とされる。板葺石置屋根の場合は屋根押さえに乗せる石がころげ落ちないよう 2 寸 5 分～ 3 寸勾配 [2]（30 度程度）と勾配は緩くなる。中世の絵巻物には屋根面の外側と内側の両方から竹のような細い棒で屋根板を挟み、屋根上に自然木を重しとして乗せ細棒を押さえている例も見られる [3] ので、このような場合は石置屋根よりは屋根勾配が大きかったと思われる。

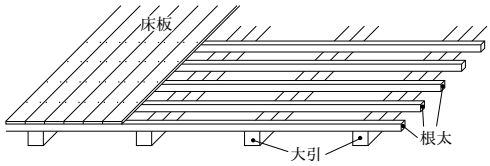
古渡路遺跡の建物の多くは切妻屋根だったと思われるが、茅葺屋根か板葺屋根かは不明である。寄棟屋根には茅葺が適している。茅とは屋根を葺く草の総称で、一般的に山茅と呼ばれる薄（すすき）や海茅（= 湖茅うみがや）と呼ばれる葦（あし、よし）のほか、耐久性に劣る麦藁や稲藁なども用いることがある。三面川や山田川に沿った古渡路の立地から葦を用いた茅葺の可能性もあるが、廂を含めた梁行の大きい建物の場合、屋根勾配の大きい茅葺では棟がとても高くなるので、梁間規模の大きい主屋などは勾配の緩い屋根で、割板や樹皮を用いた可能性がある。

（与那国島の民家）

第 45 図　ころばし根太の例

d　床（ゆか）

建物遺構の内部に柱穴の認められる場合がある。柱穴の掘形が深い場合は構造材、浅い場合は構造の補助的な役割あるいは間仕切りのための柱か床束と考えられる。梁間一間型は土間床と考えられ、床張りが判明した遺構例もある [4] が、それは身舎柱脇の添え束と内部の床束



第 46 図　床の構造

1）神奈川県指定文化財広瀬家住宅、17 世紀末期建築と推定。川崎市編　1971.3 『旧広瀬家住宅移築修理工事報告書』旧所在地：山梨県塩山市萩原
2）屋根勾配を表す時には角度は使わず、たとえば 4 寸勾配（4/10）というように、直角三角形の底辺を 10 としたときの高さによる表記を用いる。
3）春日権現記絵［小松 1991］、法然上人絵伝［小松 1990］など。
4）徳島県中島田遺跡Ⅱ　SA3006 ［徳島県埋蔵文化センター 1996］

に大引（おおびき）を渡し、その上に直交して根太（ねだ）を掛けて床張りとしたと思われる。すなわち第 46 図の大引を、添え束と床束に乗せた形態である。古代の例では枝付材の枝部分を床束に用いた例もある［岡本 2009］。古渡路遺跡の建物遺構の場合、身舎柱付近に内部柱穴に対応する床束らしい柱穴が無いため、内部柱穴が床束の可能性は低いと思われる。根太などの床材を組んだ床パネルを直接屋内地面に置いて、柱と構造的につながらないころばし根太で床を作る方法もある。また北陸地方の近世民家は土座住まいの慣習が江戸時代まで残り、床構造の発達が遅れる傾向にある。ただし、総柱建物についてはいくつかの柱穴が床束であった可能性は否定できない。

e　総柱型建物と複合型建物

古渡路遺跡では少数ながら総柱型建物と思われる遺構が検出された。SB883 は東西に廂の付く 2 間×5 間の総柱型建物、SB881 は 2 間×4 間の総柱型と 1 面廂付き桁行 4 間の梁間一間型の複合建物、SB884 は 2 間×5 間の総柱型と桁行 5 間の梁間一間型の複合建物ですべて G 区の遺構である。Ⅲb 期の SB884 は、Ⅲa 期の総柱型 SB883 と梁間一間型 SB887 の構成が位置関係もそのままに合体したと思われる複合建物で、東側と南側に幅 80cm ほどの廂が廻っている。SB881 は 2 間×4 間の総柱型と 1 面廂付き梁間一間型の複合建物でⅣ期の遺構である。SB883 は柱間が 2.4m 程度、SB884 は柱間が 2m 程度あるのに対し、SB881 は柱間が 1.6m 程度で全体の規模はかなり小さい。

総柱型と梁間一間型が複合した中世住居について、寡聞にしてこれまでの報告例はあまり無いように思われる。古渡路遺跡では遺構を精査して、それでも複合型と判断されたもので、屋根の架け方や内部の室構成など不明である。今後同様の事例の増加を期待する。

古渡路遺跡では総柱型と梁間一間型の複合型のほかに、SB7604 や SB5301 の梁間一間型と梁間一間型の複合型もあり、梁行の拡大による正方形平面の住居形式が存在していたように思われる。近世民家の成立過程として土間棟と床上棟の接合が想定されており[1)]、古渡路遺跡の事例は近世民家成立研究からもたいへん興味深い。

f　ま　と　め

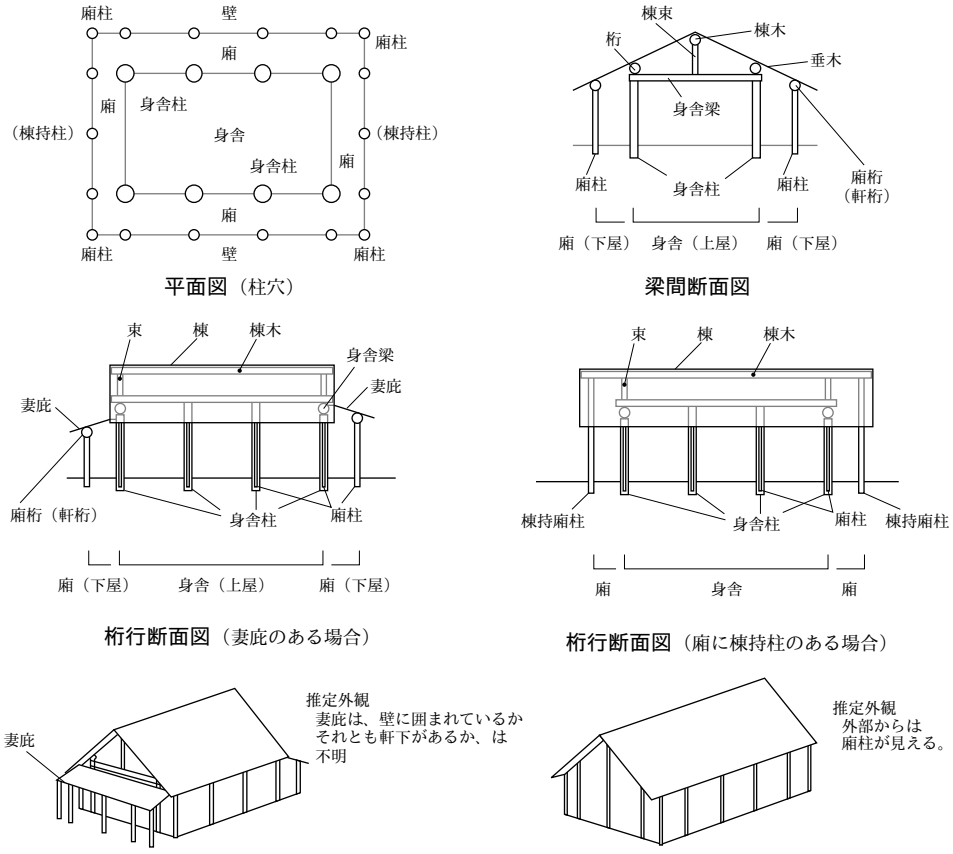
古渡路遺跡で検出された梁間一間型の推定復元標準モデルを第 47 図に示す。

四面廂付き桁行 3 間の梁間一間型で、屋根は板葺あるいは樹皮葺の屋根勾配として描いた。妻側身舎柱に梁を架け、棟束を立てて棟木を受ける。梁の両端には桁が渡される。身舎柱より柱間半分程度外側に廂柱列があり、廂柱の柱頭に廂桁（側桁）が架けられる。棟木から身舎梁に垂木を掛け、廂桁まで垂木を延ばす。梁行が大きい建物の場合、身舎柱の対ごとに梁が架けられ棟束で棟木を受けていた。

妻側は妻庇を出す例と、棟持廂柱で棟木を受ける例の 2 つを図示した。これまで妻側の廂（下屋）は妻庇を出すと理解されてきたが、古渡路遺跡の建物遺構において棟持ちと思われる妻側梁間中央廂柱が確認されたので、妻側廂が棟まであった可能性がある。この場合、身舎柱で構成された建物の構造体を廂柱と外壁でぐるりと囲んだ構成となる[2)]。

1）南日本および太平洋側に分布する分棟型は居住棟と台所棟を別棟にする民家形式で、近世を通じて合体化が進行する［宮澤 1989］。2 つの棟が平行して接しひとつの内部空間を形作っている例として旧緒方家住宅（肥後民家村、熊本県玉名郡和水町）などがある。

2）上屋と下屋からなる構造方式をフタガワヅクリ、ウチガワヅクリなどとよぶ地域がある［宮澤 1979］。



第 47 図　四面廂付梁間一間型推定復元モデル図

古渡路遺跡の建物遺構は、検出された遺構数が大量であり、新潟県に卓越する梁間一間型遺構が特に多く検出されたこと、総柱型＋梁間一間型と梁間一間型＋梁間一間型の複合型建物等これまであまり知られていない建物類型を見出したこと等、建物遺構研究にとって大きな成果を得た。古渡路建物遺構から復元される建物の形態は、新潟県下越地方の近世民家と全く異なっており[1)]、古渡路遺跡の時代から近世民家の遺構の残る 18 世紀の間に、住居について大きい転換のあったことが推測される。

今回柱穴遺構から上部構造の推定復元が幾分なりとも可能となったのは、注意深くすぐれた発掘がなされ、掘立柱建物遺構について考古学と建築史の観点からディスカッションを繰り返し、相互の知識を交換しつつ復元作業を進めることができたためである。このような機会を与えていただいた新潟県埋蔵文化財調査事業団に感謝申し上げるとともに、今後さらに発掘建築遺構の研究が進むことを願ってやまない。

引用文献

浅川滋男・箱崎和久編　2001 『埋もれた中近世の住まい』同成社

太田博太郎編　1967 『民家のみかた調べかた　文化庁監修』第一法規

岡本智子　　2009　「第 2 章 よみがえる高床建物 岡山県津島遺跡」『弥生建築 – 卑弥呼の住まい – 大阪府弥生文化博物館図録 41』大阪府立弥生文化博物館

1） 古渡路遺跡の建物は切妻屋根が主体と推測されるが、瀬波郡絵図（慶長 2･1597 年、村上市史別編）の「ふるとの村（古渡路遺跡とは位置が異なる）」の民家は茅葺で入母屋あるいは切妻廂付きと思われる（第 49 図）。また現存遺構については「古い農家は寄棟造、かやぶきが一般的である。町家や地主層の家では切妻造、木羽ぶきがみられる」［宮澤 1981］と記され、古渡路遺跡の知見とも瀬波絵図に描かれた民家とも異なっている。

小松茂美　1990　「法然上人絵伝」『続日本の絵巻』1　中央公論社
小松茂美　1991　「春日権現記絵」『続日本の絵巻』13・14　中央公論社
小松茂美　1993　「土蜘蛛草紙・天狗草子・大江山絵詞」『続日本の絵巻』26　中央公論社
田中文男　1992　「北関東民家の変遷」『大工・田中文男 普請研究』第 39 号　普請帳研究会
徳島県埋蔵文化財センター　1996　『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 中島田遺跡Ⅱ』徳島県埋蔵文化財センター
宮本長二郎　1999　「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－関口欣也先生退官記念論文集』中央公論美術出版
宮澤智士　1979　『越後の民家－中越編－新潟県民家緊急調査Ⅱ』新潟県教育委員会
宮澤智士　1981　『越後の民家－下越編－新潟県民家緊急調査Ⅲ』新潟県教育委員会
宮澤智士　1989　『日本列島民家史　技術の発達と地方色の成立』住まいの図書館出版局
水澤幸一　2001　『中条町埋蔵文化財調査報告 第 21 集 下町･坊城遺跡Ⅴ（C 地点遺構編･総論編－奥山荘政所条）』中条町教育委員会

B　中世集落の変遷

1）分析の方法

古渡路遺跡では 13 世紀後半～ 15 世紀半ばまで集落が営まれていたことが判明した。主体は 14 世紀代である。南北 650m に及ぶ広い範囲に 10 区画の居住域を設定したが、これらは 13 世紀後半の集落造営当初から出そろっており、計画的な地割りが行われていた様子がうかがえる。地割は緩やかな起伏のある地形を活かしながら、微高地に居住域を設定しつつ、各居住域間の距離もほぼ等間隔になるよう調整されている（図版 25）。各居住域は掘立柱建物・井戸・土坑から構成されており、これらが適宜杭列（柵か）や区画溝で区切られていた。各居住域内では建物の建て替えが行われたが、軸方向の変化には居住域を超えた斉一性がある。ここから、古渡路遺跡に営まれた集落がかなり強固な支配体制に組み込まれていたことが推定される。

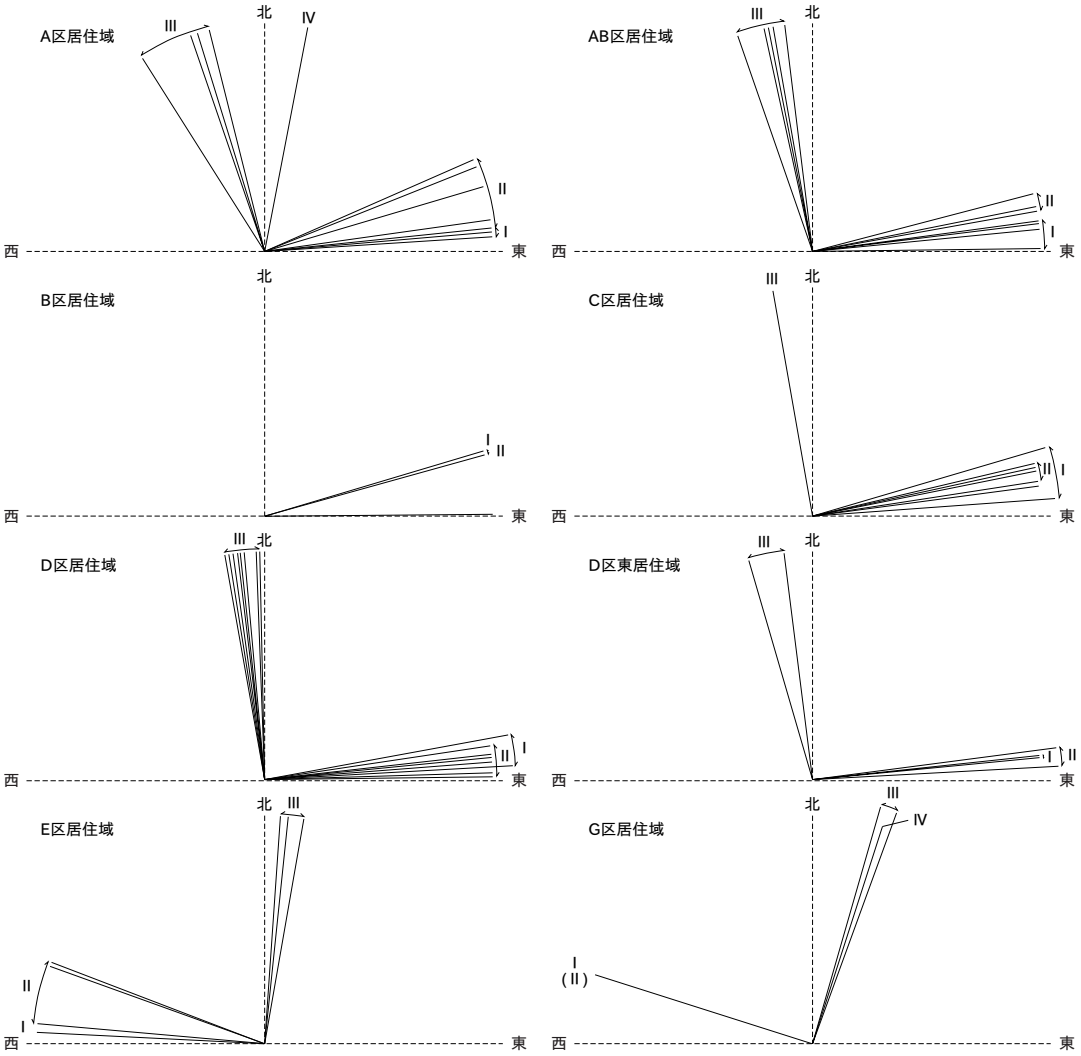
以上が概要であるが、本項では上記のような変遷を提示するに至った分析過程について説明する。

分析目的は、古渡路遺跡の集落全体の変遷を追うことである。まず、10 区画ある居住域内の変遷を捉えつつ、居住域同士の併存関係を考える。次に、どのような規格に基づき造営されたのか明らかにする。

分析対象は掘立柱建物、杭列、井戸、方形土坑、道路、区画溝、水田、川である。まず、居住域ごとに掘立柱建物の主軸方位をグラフ化した（第 48 図）。主軸方位は基本的には桁行方向を用いたが､時期によって主体となる主軸方位へ梁行を 90 度反転させたものもある。次に、居住域ごとに遺構の切り合い関係や遺構からの出土遺物を検討し、それぞれの変遷を推定した。切り合い関係が無い場合は、方位や遺構配置から推測した。井戸については、井戸の上屋が、桁行あるいは梁行を主屋と思われる掘立柱建物にそろえて隣接する例が複数見られた。そこで、上屋がない井戸についても建物に隣接するものをその建物に付帯するものという前提で割り振った。このとき、掘立柱建物の所属時期と井戸からの出土遺物の時期が合わない場合は、無理にセットにしないで、それぞれの時期に割り振った。遺物に遺構間の接合関係がある場合は、関係する遺構を同時期に割り振った。最後に居住域間の時期的な平行関係の擦り合わせを行った。

2）各居住域の変遷

主軸方位のグラフから、南北棟を主体とするものが 1 群、東西棟を主体とするもの 2 群があることがわかる。これを遺構の切り合い関係と照らし合わせると、東西棟が古く、南北棟が新しいという傾向がつ



第 48 図　掘立柱建物方位図

かめた。東西棟をⅠ期、Ⅱ期、南北棟をⅢ期とし、必要に応じて細分した。細分は、ある一部分の建て替えなどが行われたことを意味し、大きな区切りの中ではほかの建物は継続していると捉えている。

各時期の年代は、当遺跡出土遺物の時期幅が 13 世紀後半～ 15 世紀半ばであることから、Ⅰ期を 13 世紀後半～ 14 世紀中葉、Ⅱ期を 14 世紀後半～ 15 世紀初頭、Ⅲ期を 15 世紀前葉～中葉に当てた。Ⅲ期の建物より新しいものはⅣ期とし、時期は 15 世紀中葉を当てた。

これを前提として各居住域の分析を行う。第 50・51 図に変遷図を示したので参照願いたい。

A 区居住域

切り合い関係があるのは SB7821 と SB7811 で、SB7821 が新しい。両者は隣接し、共用する柱穴もあるので建て替えが行われたと推定する。南にある SE6278 からはⅢ期以前の珠洲焼（85）が出土している。珠洲焼Ⅲ期は、当遺跡で出土した遺物の最も古い段階の遺物である。よって、先行する SB7811 と SE6278 をセットとし、珠洲焼Ⅲ期以降の建物すなわちⅠ期とした。SE6419 も伴う。

SB7811 に後続する SB7821 をⅡ期とした。SB7821 の西 7m にある SB7817（掘立柱建物の一部あるいは杭列）は SB7821 の梁行に並行するので同時期だろう。東 4m にある SB7830 や西 20m にあ

るSB7820も主軸方位がほぼそろうことから同時期と考える。井戸はSE6278、SE6419を埋めて、SE6288、SE6441が掘削されたと考える。Ⅳ期の珠洲焼が出土したSE7323、SE8529も伴う。

SE6209、SE6237からはⅣ～Ⅴ期の珠洲焼（82～84・81）が出土しているので、当遺跡では新しい時期に属する。なおかつSE6209はⅡ期のSB7820を切る。これとセットになるSB7818、SB7818と主軸方位がそろうSB7825はこの時期に属するのだろう。時期は遺物の時期と主軸方位からⅢ期とした。

南に離れて存在するSB7812は東に隣接するSE6189がセットになると考えた。主軸方位がSB7818やSB7825に近いのでⅢ期とした。Ⅲｂ期としたが、出土遺物や切り合い関係がないので時期の詳細は不明である。Ⅲａ期の遺構と共存していたり、あるいは前後が逆転したりする可能性もある。

12・13Dグリッドの SB7827、SB7815、11・12B・Cグリッドの SB7814は東西棟なので古い時期に属する。SB7827と SB7814は北桁行がそろうので併存する。SB7814はAB区居住域でⅡ期としたSB7816と西梁行がそろうのでこれも併存する。11A・Bグリッドの SB7826と、12・13Dグリッドの SB7813は南北棟なのでⅢ期以降に属する。AB区居住域の主屋SB7604に替わるものとしてⅣ期としたが、平面形が長方形なので、SB7604と並存し、Ⅲ期の可能性もある。SB7813にはSE7180が隣接するが、出土遺物が13世紀後半～14世紀初頭の時期を示すため、セット関係はないと判断した。

AB区居住域

AB区居住域では多数の掘立柱建物が重複するが、直接の切り合い関係はない。そこで主軸方位等から推測した。まず、SB7690とSB8540、SB8540とセットになるSE7789とその上屋SB7686が東西棟なので古く、これをⅠ期とした。SB8540の南にあるSE7692から13世紀前葉を遡る白磁椀（116）が出土しているので、両者をセットにする。先に上屋のあるSE7789もセットにしたが、こちらは浅く、井戸以外の施設－例えばトイレ－の可能性がある。SB7745は南北棟であるが、SB8540とは主軸が約90度振れた配置であるので、これも同時期とする。東にあるSE8506をセットにする。これらの一群と軸が合うSB7824や方形土坑SK7601、SB7745の南にある区画溝SD7023は同時期であろう。区画溝は建物南側を東西に走るSD7084とこれの延長線に直交するSD7023である。SD7023とSD7084の間には幅4.5mの間隔がある。ここが居住域への出入口だった可能性がある。

Ⅱａ期に主軸方位が若干南へ振れるSB8499、SB7681へ変遷する。おそらくSB8540がSB8499へ、SB7745がSB7681へ建て替わったのだろう。SB7681は内部にSK7700を伴う作業所のような建物だった可能性がある。同じ軸の建物にSB7816、SB7823があり、SB7816にはSE7608が伴う。続くⅡｂ期には、SB8499、SB7681、SB7816が取り囲む空間内にSB7683がSE7641とともに配置される。さらにⅢａ期のSB7682、SB8695へと移り変わる。

最後のⅢｂ期に、南北棟の複合型建物SB7604が登場する。SB7604は内部井戸SE7602を伴う。両者の出土遺物は接合する。SB7604はⅠ期の区画溝SD 7023を切るので、この段階でⅠ～Ⅱ期にかけて継続していた区画やそれに基づく配置の建て替えが終わり、区画や建物構造に変化が生じたことが分かる。

B区居住域

B区居住域は厩にほぼ限定された場所である。SB8025とSB8026には切り合い関係があり、SB8026が先行する。両者ともに東西棟であるので、SB8026をⅠ期、SB8025をⅡ期とした。南に隣接するSB8024はSB8025と西側梁行が一致するので、Ⅱ期とした。厩の付帯施設SA8411、SA8412

は継続使用されたと考えた。SA8411 の西側に P8117、P8360、P8375、P8029 が長方形に配置されるが、小屋あるいは作業台だった可能性がある。

厩から 12m 北に SB8539 がある。主軸方向が SB8025 に近いのでⅡ期としたが、Ⅰ期から継続していたかもしれない。

B 区居住域にはⅢ期以降の建物はない。厩は焼失したと推定されるので、何かこの場所を放棄しなければならない理由があったのだろう。

C 区居住域

C 区居住域は南側の 24・25C・D グリッドと北側の 26・27B・C グリッドの 2 か所の掘立柱集中域に分かれる。建物はすべて東西棟である。

24･25C･D グリッドでは切り合い関係から SB9063 から SB9054 への建て替えがあったことが分かり、さらに SE9523 はこれらの建物より新しい。したがって、SB9063 をⅠ期、SB9054 をⅡ期、SE9523 をⅢ期とした。SB9370 は北側桁行が SB9054 の南桁行の延長にあるので、SB9054 の副屋と捉えた。同じように SB9054 の南側桁行の延長上にある井戸上屋 SB9058 も伴う。区画溝 SD9171 は SB9370 に切られるので、前段階の SB9063 に伴う。溝の途切れた部分は道路から屋敷地への出入口だろう。

26・27B・C グリッドでは切り合い関係から SK9434、SK9604 → SB9222 → SB9221 → SB9220、SE9469 → SB9223 → SB9961、SE9603 の順序が捉えられる。これに基づいて、Ⅰa 期は SB9222 と井戸上屋 SB9963 及び SE9453、Ⅰb 期は SB9221 と井戸上屋 SB9962 及び SE9440 とし、区画溝として SD5119 と SD9538 を配置した。Ⅱa 期は SB9220 と SE9469、Ⅱb 期は SB9223 と引き続き SE9469 とし、区画溝として SD5003 と SD9542 を配置した。Ⅰ期、Ⅱ期とも区画溝に途切れた部分があるのは道路から屋敷地への出入口だろう。最後に SB9961 となるが、配置からみて SE9603 が伴う。SE9603 からは 15 世紀前葉の瀬戸･美濃焼(136)が出土したので､SB9961 とともにⅢa 期に位置付ける。区画溝は前段階より若干北へ振れて SB9961 の主軸に沿った SD9628 を配置した。

D 区居住域

D 区居住域は南側の 29 ～ 32D・E グリッドと北側の 31 ～ 33B・C グリッドの 2 か所の掘立柱建物集中域に分かれる。建物は東西棟と南北棟がある。

南側の集中域では切り合い関係から SB5295 → SD5112 の順に変化したことが分かる。SD5112 は区画溝である。SB5297、SB5298、SB5299 を避けるように湾曲していることから、既に建物があったか、建物と同時期に作られたと考える。3 棟の建物は重複するが、東西棟の SB5297 が古く、南北棟の 2 棟が新しいものとする。そして、SD5112 を挟んだ北側にある SB5296 は SB5297 と主軸方位が一致し､なおかつ SD5112 までの距離が両者とも約 2m とほぼ等しいので､同時期に存在したものと推定する。SB5296 の東にある方形井戸 SE3979 は西辺が SB5296 の東側梁行と平行するので、両者はセットとする。続く SB5298 と SB5299 は主軸が南北棟であるのでⅢ期以降とする。SB5299 の北にある SB5302 も軸を同じくするので伴うと考える。SB5302 は内部に SK3925 を伴う。SK3925 は覆土に灰層があることから､何らかの作業に関わる土坑とした｡すると､SB3925 は作業小屋のような役割を持つ建物となる。井戸は SB5298 の西にある SE5177 をセットする。このような組み合わせとすると、SB5302 が区画溝 SD5112 と重複するので、この段階には区画溝は消滅していた可能性が高い。SD5112 より新しい土

坑にSK5194、SK5281がある。これと軸が同じ土坑にはSK3503、SK3532がある。これらが同じ時期とするならば、この時期、南側の集中域は何かの作業を行っていた場所だったと推定される。SK5194の西約10mにあるSB5300も主軸方位が一致し、南側梁行がSB5298の南側梁行の延長に当たることから同時期の存在だろう。また、東側に平行して並ぶピット列（P5095・5096・5069・5070・5117）は杭列（柵か）の可能性もある。

SB5300東側桁行を南へ約22m延長した27D・Eグリッドに SB9904がある。主軸方位がきれいに一致するので、これも同時期に存在したと考える。SB9904は北側梁行の1m北側にピット列があるのでこれも杭列(柵か)かもしれない。長軸が梁行と平行するSK9900もSB9904に関連する可能性が高い。井戸は南東隅に近接するSE9654がセットになる。

北側の集中域では切り合い関係からSB5331 → SB5330 → SE3384の順序が捉えられるが、SB5331、SB5330は南北棟であることからⅢ期と推定した。Ⅱ期以前の建物は南側集中域の軸方向を参考にしながら、東西棟から抽出した。Ⅰａ期はSB5295と主軸方位がほぼ一致するSB5337、SB5340、SB5332を抽出した。隣接するSB5337、SB5340とSB5332の間にはSA5322で仕切りを設けた。そして、南北の集中域を区画する溝としてSD5100、D区居住域の北限を示す区画溝としてSD2237・2240・2292を配置した。井戸はSB5337、SB5340にはSA5322の東端に近いSE3508、SB5332にはSE3400をセットした。これをⅠａ期とする。SB5337、SB5340はほぼ同じ配置でSB5338、SB5336に建て替わる。井戸、仕切りはⅠａ期に引き続き、SA5322、SE3508とした。これをⅠｂ期とする。

Ⅱａ期には、SB5340を切るSB5335が来る。SA5322はSA5323に建て替わり、この延長にあるSB5328が同時期に当たる。井戸はSE3511をセットした。SA5323出土の瀬戸・美濃焼の時期は14世紀末～15世紀初頭である（139）。もしかすれば、どの建物とも重複関係のないSB5332がSA5323の北側に前段階に引き続き残っていたかもしれない。この段階に道路SF3201ができたと推定する。理由は後述する。

Ⅱｂ期には、SA5323の跡地にSB5334が建つ。ただし、SB5334はSB5332と桁行・梁行ともによくそろうので、併存する建物として最初期に建っており、その跡地にSA5322やSB5340が建てられた可能性もある。切り合い関係からは検証できないので、一応、この段階に位置付けておく。そして、この段階で区画溝がSD5112に移動し、南側の集中域にあるSB5297等が共存すると考える。

Ⅲ期は建物の主軸が南北棟に変化するとともに、区画が道路からSD3501、SD3200に変化する。SD3501からは珠洲焼Ⅴ期の片口鉢（146）が出土している。2本の区画溝の中間にSB5331とSB5329が位置する。井戸はSE3513をセットする。次の段階ではこの2棟が建て替わる形で、大型のSB5330が現れる。区画溝の外、東へ約5mのところにSB5327ほか3棟の建物がある。重複するものの、直接の切り合い関係がないので前後関係は不明であるが、SB5326とSB5325は北側梁行が一致するので同時存在と捉える。平面形が正方形を呈するSB5327は、より新しい時期の可能性が高い。そして南側梁行がSB5330の南側梁行の延長線上にあるSB5326がこれと併存するならば、SB5325を含む3棟が併存したと推定できる。すると、残るSB5324がⅢａ期にSB5329などと併存したと考えられる。

最後に、SD3501を切るSB5339が来る。この建物の東側に南辺が平行するSB5327がある。そして、東辺を南へ延長したところにSB5301がある。これら3棟は平面形もほぼ正方形で共通することから同時期（Ⅳ期）に位置付けて問題ないと思う。時期は珠洲焼Ⅴ期が出土したSD3501を切るので15世紀中葉頃と考える。井戸はⅢｃ期のSB5330を切るSE3384、SD3501を切るSE3504と、SB5339の南

にあるSE3913をセットにした。SE3384出土の珠洲焼、Ⅳ期の甕（142）の接合破片があるSE3412も同時期とする。SE3412の覆土中ほどからは、14世紀末～15世紀初頭の天目茶椀（140）が出土している。

上記のほか、建物を構成する柱ではないが、深さ約180cmのピットP3646がある。底部に柱根と見られる木が残存していたので柱穴と考える。ほかの柱穴と比べて格段に深いので、建物を構成する柱よりも高いところまで届くような柱が建てられていた可能性がある。位置的にSB5299、SB5297、5298と重複するので、伴うとすれば北にあるSB5295が候補となる。両者の柱穴の中心距離は2.5mである。『長谷雄草紙』に板葺屋根に立掛けられ、屋根の上まで斜めに高く突き出ている柱松の絵がある。柱松とは松明の一種で、夜の燈である[宮本1981b]。P3646に建てられた柱は、SB5295の南側廂に立てかけられて、柱松として利用されていたのかもしれない。

D東区居住域

D東区居住域では建物の大半が調査区外に伸びているものがあり、これらについては位置付けの検討から除外した。まず、東西棟のSB5317、SB5316が古く、南北棟のSB5320が新しいとする。このほか、井戸上屋としてSB5321（SE3008）、SB4594（SE3009）、SB4595（SE3476）があるが、主軸方位や梁行・桁行の一致から、SB5317とSB5321、SB5316とSB4594、SB5320とSB4595をそれぞれセットにした。変遷については出土遺物を参考に検討した。SE3008から14世紀代の青磁椀（151）、SB5316から珠洲焼Ⅳ～Ⅴ期（14世紀初頭～15世紀初頭）の片口鉢（149）、SB5320から珠洲焼Ⅳ期（14世紀初頭～後葉）の中型壺（150）が出土しているので、SB5317→SB5316とした。SB5316とSB5320では遺物ではSB5320が古い可能性があるが、主軸方位の変化を優先し、SB5316→SB5320とした。そして、この順でそれぞれをⅠ～Ⅲ期に当てることにした。

E区居住域

E区居住域も建物の重複があるが、切り合い関係から前後関係を把握できるものがある。SB2768－P2587→SB2767－P2588→SB2767－P2589、SB2767－P2624→SB2770－P2708。このような前後関係と主軸方位を基に変化を捉える。

まず、SB2768と内部の土坑SK2607が最も古く、厩と考える。井戸は東に隣接するSE2608をセットする。SE2608からは14世紀前葉の珠洲焼片口鉢（178）が出土した。次にSK2607を継続利用するSB2767。さらに、SB2767の南側のSB2766へ変化するが、SB2766と重複しないので両者は併存した可能性もある。井戸は14世紀初頭～15世紀前葉の珠洲焼や瀬戸・美濃焼（173～177）が出土したSE2406をセットする。これと主軸を同じくするSB1941とSB1939、方形土坑SK1578、SK1575も同時期だろう。方形土坑に関連するSD1583・1597、SD1581、SE1577も伴う。SB1941には隣接するSE1475をセットする。

次に南北棟のSB2770とSE2001、続いてSB2769とこの東側桁行の延長上にあるSB1940へと変化する。井戸はSB2769にはSB2770に引き続きSE2001、SE1940には隣接するSE1576をセットする。SE1576からは15世紀中葉の白磁皿（169）が出土した。15世紀前半の白磁皿（171）が出土したSE2201や、珠洲焼Ⅴ期の片口鉢（205）が出土したSK1484も併存する。SK1484の遺物はG区居住域SD827の破片と接合した。

G 区居住域

複数の建物が重複するが、ピットや土坑に囲まれた長方形の区画から絶対にはみ出さないのがＧ区居住域の特徴である。取り囲む土坑等は調査所見では倒木もしくは木根と推定されたものがほとんどである。中世の宅の周囲には木が植えられていたことが文献（『作庭記』『庭訓往来』）からうかがい知ることができるので［藤原 2001 ほか］、Ｇ区居住域の建物の周囲にも、木が植えられていたと想像する。

掘立柱建物に関する切り合い関係は次に示すとおりである。SB883 － P290 → SB884 － P291。SB885 － P501 → SB881 － P502。SB884 － P78 → SB885 － P79 → SB883 － P77。SB882 － P418 → SE165。SB885 － P634 → SE165。SB883 と SB884 は齟齬があるが、直接切り合う SB883 － P290 → SB884 － P291 を優先して、SB883 → SB884 とする。これを整理すると SB883 → SB884 → SB885 → SB881 が決定する。SE165 は SB882 と SB885 より新しいので、おそらく SB881 に伴う。SB887 は SB885 と重複するのでこれとは併存しない。

主軸方位と切り合い関係から、以下のような推移を考える。

初めに東西棟の SB882 と屋内井戸 SE197。Ｇ区居住域の東西棟はこれ１棟なので、おそらくⅠ～Ⅱ期にかけて継続したものと推定する。屋外井戸には珠洲焼Ⅳ期の片口鉢（200）が底面付近に設置されていた SE822 をセットする。Ｈ区水田域との境は SD850 とこれに対峙する SD845 とした。SD850 と SD845 の間を水田域への出入口と仮定し、SX700 と SX678 の間を居住域までの通路の一部とした。SX700 と SX678 は植え込みのようなものだったと考えている。この延長上のＧ区居住域の区画に SK108 と SK287 というやや大きめの土坑があるが、出入口を示すと推定する。通路沿いには珠洲焼Ⅱ期（13 世紀代？）の可能性がある片口鉢（193）が出土した SE601 を配置する。なお、Ｈ区水田域は当初は畑作が行われていたと推定した。そこで、初めは SD845 の北に平行する SD851 も道路側溝の役目を果たした可能性がある。その後水田に移行し、SD851 は埋没し、道路全体が若干Ｇ区居住域寄りへ移動したと推定する。続くⅡ期では、SF799 とその延長にある SD848、SD827・810 がそれである。Ｃ区居住域やＤ区の状況を参考にすると、この段階で道路整備が本格化するようなので、SD827 と SD848 の間から南へ 30m のところにある砂利敷きの遺構 SD408 もこの時期の道路の可能性がある。

次に南北棟のⅢ期になるが、前述のとおり、SB883 → SB884 → SB885 の順に推移する。この順でⅢａ、Ⅲｂ、Ⅲｃ期とする。南北棟にはもう１棟 SB887 があり、SB885 とは併存しない。単独で存在した可能性もあるが、ここでは建物規模が類似する SB883 と併存したこととする。井戸は SE245 をセットする。SE245 の出土遺物は珠洲焼Ⅴ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）の片口鉢である。SX234 出土破片と接合した。この時期の出土遺物に珠洲焼の甕（190a ～ c）があり、Ｇ区居住域全域に破片が散乱している。破片が出土した遺構には SB883、SE245、SE606、SD629、SX122、SK218、Ｈ区水田 794 がある。したがって、これらの遺構を同時期に置いた。なお、Ⅰ期の井戸 SE233 からも 190 の破片が出土しているが、覆土上位からの出土であるのでⅢ期には埋没していたと考えた。SX122 は居住域の南東隅にある遺構で、区画外側から内側に伸びる。この形状から出入口に関わる施設を推定した。そして、SD629 と一連の溝を居住域へ至る道路と考えた。

SB884 は居住域内の位置が前段階とほぼ同じなので、同じ道路等を引き継ぎながら建て替えられたものと考える。SB884 と屋内井戸 SE7 からも珠洲焼甕 190 の破片が出土したので SB883 から SB884 への建て替えは短期間に行われたと推定する。

次にSB885の段階である。前段階の道路側溝SD266を切るSD1とこれに平行するSD585が区画溝あるいは道路側溝であろう。居住域への通路は居住域の南側にあるSD313に導かれつつ、SE245跡地を出入口としていたのかもしれない。もう一つの出入口として、SD1の北端とSF799の側溝の東端との間を想定する。

最後に正方形のSB881の段階（Ⅳ期）である。井戸は珠洲焼Ⅴ期の片口鉢が出土したSE192をセットする。道路もしくは区画には、SB881の南北軸に平行するSA897～899が相当する。H区水田域との境はSD585より新しいSD802とこれと対になるSD846が該当しよう。SF799も残存していたと推定する。軸方向がSD802に平行する方形土坑SK831もこの時期かもしれない。

3）道路・区画溝の変遷

ここまで各居住域内の変遷を中心にみてきたが、ここからは居住域境や居住域内の道路や区画溝を中心に検討する。区画として初めに目につくのは、整理作業で用いてきた居住域の単位（第9図）である。大きくはこの単位でまとまるとして問題ないが、掘立柱建物を中心とする変遷を追ったところ、もう少し細かな区画や区画の変化に気付いた。以下に検討結果を記す。

A区・AB区居住域

A区居住域とAB区居住域の境界は、東西方向に伸びる道路とした。切り合い関係からⅠ・Ⅱ期ではSD7084とSD8243、Ⅲ期ではSD7029とその延長にあるSD7260とした。SD7084とSD7029は14D23グリッドで終息し、SD7084は1mの間隔をおいてSD8243へ連続し、SD7029は南へほぼ直角に曲がる。このことから、14D23グリッドに辻があったと考える。この辻から北へは、SD7084がSD7787の北側の溝、SD7029がSD7787の南側の溝へ連続する。

このほかⅠ期では、A区居住域ではSB7819に伴うSD6470とSD6132が区画溝の可能性がある。AB区居住域ではSD7084の延長線と直交するSD7023が区画溝で、道路とSB7745等との出入口を示す。Ⅲb期ではSB7604を道路から遮蔽するようにSD7029に沿って杭列（柵か）が設けられている。

AB区・B区居住域

AB区居住域とB区居住域の境界は、南北方向に伸びる道路とした。切り合い関係からⅠ・Ⅱ期ではSD7787（北半は南側の溝、南半は北側の溝）とこれに平行するSD8421（南半はSD7788と重複）、Ⅲ期ではSD7787（Ⅰ・Ⅱ期と逆）とこれに平行するSD7788とした。道路幅は溝の芯－芯で約3mである。

建物は妻側が道路に面するように建てられ、杭列（柵か）も道路に面する。

B区・C区居住域

B区居住域とC区居住域の境界は、東西方向に伸びる道路とした。切り合い関係からⅠ・Ⅱ期ではSD9008とこれに平行するSD9025・9085、Ⅲ期ではSD9024とこれに平行するSD9027とした。道路幅は溝の芯－芯で、前者が約4m、後者が約2.5mである。

Ⅰ・Ⅱ期ではB区居住域の東を区画する溝としてSD9055、C区居住域の西を区画する溝としてSD9134を置いた。SD9055、SD9134は連続する溝ではないが、ともに道路に直交する位置にあり、両者を延長した場合の間隔（芯－芯）は約4mで、SD9008・9025の間隔とほぼ一致する。したがって、

SD9055 と SD9134 を一連のものとして、ここに道路があったと推定する。すると、21C14 グリッドに辻があったことになる。

C 区・D 区・D 東区居住域

C 区居住域と D 区居住域の境界は、南北方向に伸びる区画溝とした。建物との切り合い関係から、この区画溝が機能していたのはⅠ・Ⅱ期で、Ⅲ期以降は廃絶する。溝同士の切り合い関係から、Ⅰ期には SD9538 とその延長の SD5119、Ⅱ期には SD9542 とその延長 SD5003 を配置する。Ⅰ期では、SD5119 の 27C15 グリッドにある切れ間が SB9222 への出入口、Ⅱ期では SD9542 の 27C14 グリッドにある切れ間が SB9220 への出入口であると想定する。

D 区居住域と D 東区居住域の境界は SD2238 とする。SD2238 は 37C22 グリッドで SD2237 の延長線と直交する。この地点を辻と想定すると、SD2237 は東の SD2240、SD2292 へと続く。そこで SD2237・2240・2292 を D 区居住域の北境と推定した。D 東区居住域境の SD2238 は道路 SF3201 に切られる。したがって、SF3201 は SD2238 よりも新しい時期の区画であると考え、Ⅱ期に位置付けた。

上記の居住域境の他に各居住域内にも区画がある。Ⅰ期では、C 区居住域内の SD9171、D 区居住域の SD5002 も区画溝であると考える。SD5002 は SD5119 に切られるので比較的古い区画と推定する。それぞれ途中に切れ間があるが、建物敷地への出入口だろう。SD9171 はほかの区画溝と方向が異なるが、理由には地形に即した軸に溝を設定したことなどが考えられる。

Ⅱ期では D 区居住域の SB5297 と SB5296 を仕切る SD5112 が区画溝である。

Ⅲ期では D 区居住域の SF3201 を切る SD3200 が区画溝となる。これに平行する同規模の SD3501 は対になるだろう。両溝に挟まれる空間の中央に SB5329、SB5331 が作られる。

Ⅳ期には前段階の区画溝 SD3501 を切って SB5339 が作られる。この段階の区画溝に明確なものはないが、あえて設定するならば、SB5301 の北桁行の延長上にある SD5004 が挙げられる。SB5301 の北側にある SX3528 は SD5004 の延長線上に当たるので、区画施設かもしれない。

E 南区・E 区・F 区・G 区居住域

E 南区居住域と E 区居住域の境界は自然の河川 SD2079 とした。E 区居住域と F 区居住域の境に明瞭な区画溝はないが、E 区居住域の最北の掘立柱建物 SB1939 の北側桁行の延長線を境と仮定した。

F 区居住域と G 区居住域の境は SD330・331 から構成される道路とした。道路の北側には湿地が広がり、湿地が終わるところに G 区居住域が築かれている。Ⅱ期とした理由は、E 区居住域Ⅱ期の建物主軸と道路の主軸がほぼ一致するからである。

D ～ F 区居住域の SD1141 は 14 世紀末～ 15 世紀後半の遺物（179 ～ 182・187）が出土したのでⅣ期とした。

G 区居住域・H 区水田域

G 区居住域は土坑等に囲まれた区画が明確である。西側が調査区外なので全容は不明であるが、東辺は 25m である。これが正方形に近い区画になるか、西へ伸びる長方形なのかは不明である。

H 区水田域との境は基本的に道路で区切られるが、時期により若干場所が移動していた。

4）造営の規格

ここまで居住域単位で道路や区画溝を見てきた。次に、集落全体（A ～ G 区居住域・H 区水田域）に共通する規格について検討する。

まず、道路や辻が明瞭な A ～ C 区居住域で検討する。Ⅰ期であれば SD7787・8421 の道路とその辻、SD9008・9025 の道路とその辻、これらを起点にそれぞれの道路を延長すると、東西 30 ～ 40m、南北約 60m のほぼ長方形の区画が現れる。このほかに、Ⅰ・Ⅱ期の B 区・C 区居住域内の SD9134・9055 と C － D 区居住域境の SD9538 間は約 40m、B － C 区居住域境の SD9008・9025 と D 区居住域内区画溝 SD5002 間は約 60m である。SD5002 と D － E 区南居住域境の SD2237・2240・2292 間は約 60m である。ここから 60m が区画の単位であると仮定する。なお、区画には 60m の半分の 30m や、そのまた半分の 15m、これらを足した 45m という数が単位として現れると推定する。そこで、以下では道路や区画溝について、約 30m を単位として整理できるかどうか検討する。約 30m とするのは 1 尺を 30.3cm とした場合、約 100 尺という区切りの良い数だからである。

Ⅱ期の A 区・AB 区居住域では A 区居住域側に SB7830、SB7821 の梁行が平行し、AB 区居住域側に SB7816、SB7814 が梁行を平行して建っており、A 区居住域側の建物群と AB 区居住域側の建物群が対峙するような配置となる。そこでその境界線を引くと、AB － B 区居住域境の道路（SD7787・8421）から約 35m のところに、道路に平行する線が引かれる。遡ってⅠ期にも同じ位置に線を引くと、SB7824 と SE7534 がちょうど線の南側に収まる。

D 区居住域ではⅠ期の SA5322 が SD5002 の北 30m に平行する。建物の建て替えはこの線をまたぐことなく行われている。また、この線を D 東区居住域まで延長すると、ここでもこの線の南側だけで建て替えが行われていることが分かる。Ⅰ期の D － D 東区居住域境の SD2238 は C － D 区居住域境の SD5119・9538 の東へ 60m のところに平行する。Ⅱ期の道路 SF3201・3499 と B － C 区居住域境の道路 SD9025・9088 との間隔は約 110m（約 1 町？）である。そして SF3201 から南へ約 15m のところに SA5323 や SB5328 が平行する。Ⅱ b 期の SD5112 は SB5297 と SB5296 付近で湾曲するが、湾曲の始点は SD5003 から 30m の地点に当たる。Ⅲ期に区画溝が SD3501 と SD3200 へ変化した後も、これを D 東区居住域に延長して区切られた範囲内に SB5320 が建てられている。SD3501 と SD3200 の東端を結ぶ線を延長すると、南側にある SB5299 と SB5302 の東桁行と一致する。そしてこの線を東へ約 30m 平行移動すると、D 東区居住域の SB5320 の西桁行とほぼ一致する。逆に西へ平行移動すると、SE9654 があり、そのすぐ西側に桁行が平行する SB9904 がある。西へ平行移動した線上の SB5300 の東側にあたる場所にはピットが連続することから、ここに杭列（柵か）が設けられていた可能性がある。区画溝 SD9628 は SD3501 の南約 30m のところに平行する。

以上の検討では、区画の単位として約 30m（約 100 尺）は妥当な数字に思える。

次に E ～ G 区居住域について検討する。E・G 区居住域は掘立柱建物の軸方向のグラフを見ても分かるとおり、A ～ D 区居住域とは主軸方位が異なる。それでもⅠ・Ⅱ期はともに東西棟、Ⅲ期だけは南北棟を主体とするので、大きな流れの中では A ～ D 区居住域と同様にⅠ・Ⅱ期→Ⅲ期として時期的な平行関係を捉えても問題ないだろう。

それではこの 2 居住域の主軸方位が A ～ D 区居住域と異なる理由は何か。E 区居住域と E 南区居住域の境にある SD2079 は自然の河川で、遺跡成立当初から廃絶時まで存在していたと考えている。そうな

れば、この川を無視して集落を造営した可能性は低いと考える。SD2079 の南岸まではＡ区居住域と一連の規格で造営してきたものの、対岸では地形が変化することもあり、規格が崩れたのではないだろうか。むしろ、川の流れを重視して集落を造営したのではないだろうか。

そのように推定して、Ｅ区居住域の北端にある SB1939 の主軸を南へ平行移動してみた。すると、SB1939 の軸と河川 SD2079 の軸線がほぼ一致することが分かった。そこで、SB1939 の北桁行を起点として、30m ごとに区切り線を引いてみた。すると、SB1939 の北桁行から約 60m のところに道路 SD330・331 が位置し、そこから約 45m のところにＧ区居住域の掘立柱建物集中域の南辺が来ることが分かった。さらにそこから 30m 北へ行くと道路 SF799 がある。このことから、Ｅ区居住域までと同様に、区画は 30m を単位としていたと推定する。Ｅ区居住域のⅢ期には SB2770 から SB2769 への建て替えが行われるが、区画からはみ出すことはない。Ⅰ期の SB2768 と SB2767 の主軸は SB1939 の主軸をもとに設定した軸とは一致しないが、SD2079 の流れの方向と良く一致する。おそらく居住域造営開始にあたり、自然地形に沿って建物を建てたためこのような主軸方向になったのだろう。

以上のように、古渡路遺跡の集落造営は当初から約 30m（約 100 尺）を単位として区画が設定され、その後の変遷過程でもこの区画に即しつつ建て替えなどを行っていた様子が明らかとなった。

5）集落の性格

これまでの検討で古渡路遺跡の集落が 13 世紀後半の開発当初から一定の区画に基づいて造営され、この区画が 15 世紀中葉まで引き継がれたことが分かった。さらに、建物の主軸方位の変化から東西棟のⅠ・Ⅱ期、南北棟のⅢ期、正方形建物のⅣ期という変遷を追うことができた。ここではどうしてそのような変化が起こったのか検討する。

はじめに主軸方位の変化について検討する。古渡路遺跡の立地する場所は、日本海から三面川を伝って吹き上げてくる強烈な季節風が西側から直撃する。春先や初冬には人が立っていられなかったり、簡易テントが飛ばされたりするほどの勢いである。Ⅰ・Ⅱ期の建物が東西棟である理由は、この季節風をうまくやり過ごすために妻側を西に向けたためだと考える。それでは、Ⅲ期に南北棟を主体とする理由はなにか？

自然地形を無視して主軸を変化させる理由には当時の時代背景を考慮する必要がある。14 世紀には南北朝の争乱、15 世紀には越後国内で応永の大乱（1423 年）が勃発し、本庄氏や色部氏が参戦している。そのような中、古渡路遺跡の南約 1.2km には 14 世紀に成立した大館跡があり、その防御施設は本庄氏が 15 世紀以降に構築した可能性が高いとされている［青木 2008・2009］。本庄氏は鎌倉時代に小泉荘の地頭職を得て、勢力を伸ばした一族である。一方、遺跡の東約 1.2km にある大葉沢城は 15 世紀半ば以降勢力を伸張した鮎川氏の拠点である。鮎川氏は当初小泉荘の一領主であったものが、その後、本庄氏に対抗する勢力を持つに至った一族である［長谷川 1999 ほか］。

このような在地有力者の拠点に挟まれた古渡路遺跡の集落であるが、遺構や出土遺物からこれらに対抗するような立場ではないことは推定できる。したがって、Ⅲ期の軸方向の変化には大館跡や大葉沢城跡が何らかの形で影響を与えたと推定するが、文献が残されていないことから、いずれの影響下に変化が生じたのか判断するのは早計であり、言及できない。

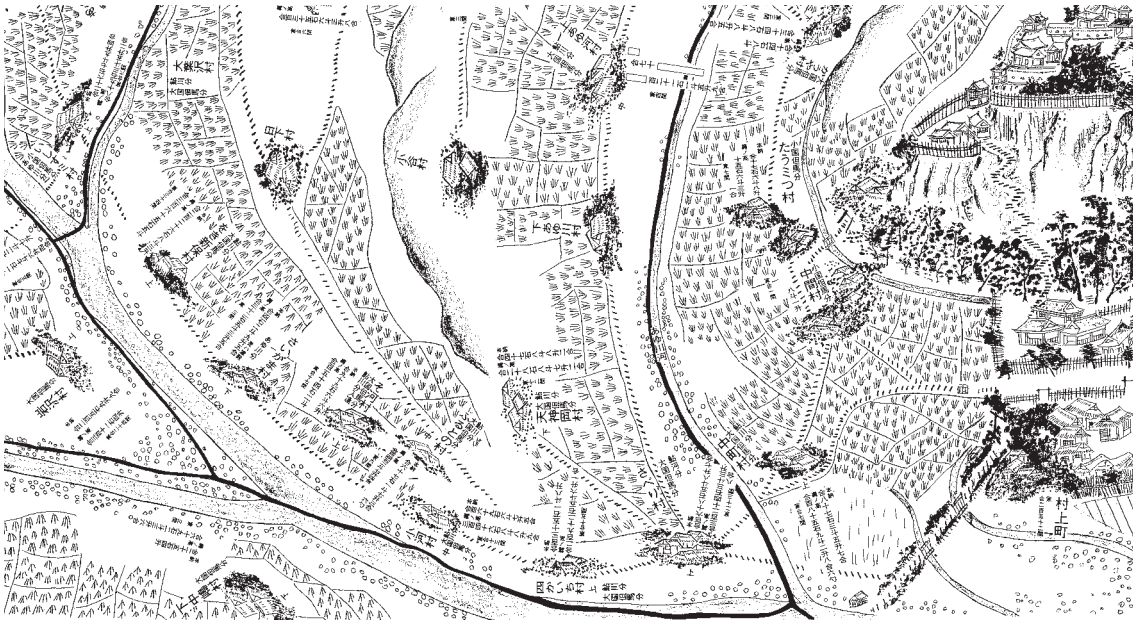
同じく 13 世紀後半～ 15 世紀前半の集落跡として、古渡路遺跡の北約 900m に下新保高田遺跡がある［青木 2010］。この遺跡も掘立柱建物や井戸で構成される。軸方向の変化も古渡路遺跡とよく似ているので、同じ社会的影響下に変化したと推定される。当時、この地域に強い規制が働いていたことが分かる。

最後に古渡路遺跡を残した人々の性格について考える。掘立柱建物はＤ区居住域のような建築技術者が普請に関わった可能性がある場所もあれば、Ｅ区居住域のような非専門技術者が建てたような素朴な技術で建てられた場所もあることから（第Ⅶ章 2A 参照）、一連の区割りの中であっても均一な集団ではなかったことがうかがわれる。

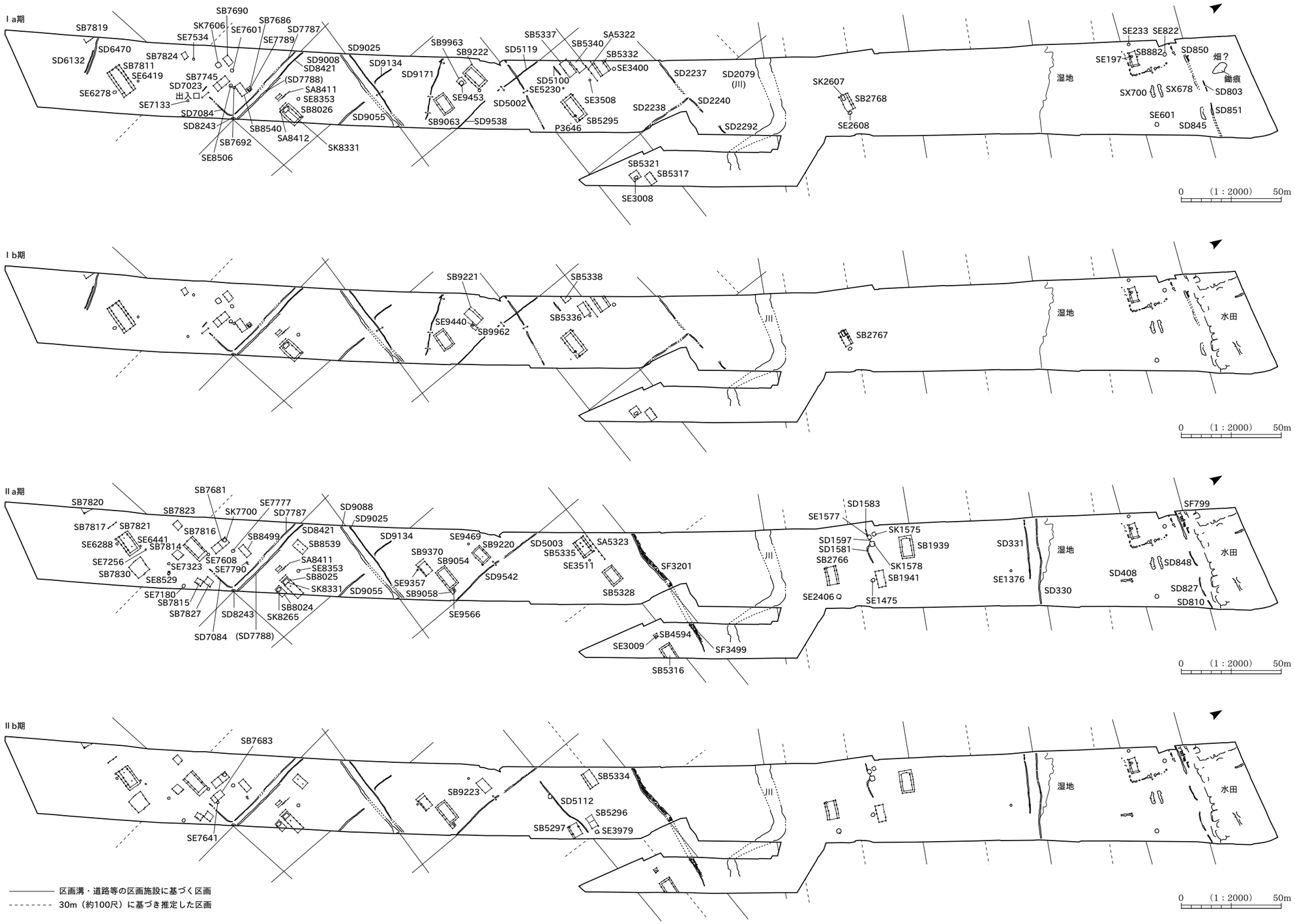
遺物は少量であり、高級な輸入陶磁器や上質な漆器は出土していないが、日常生活に直結しない天目茶椀もわずかながらあることから、若干の富は有していたのだろう。石器には刀用とみられる鳴滝産砥石や硯があることから、刀を所持する識字層の存在が想定される。しかし、砥石についていえば、多くは鎌用の砥面が湾曲したものであったことから、農作業に重きが置かれていたことは確かだろう。

慶長２（1597）年の「瀬波郡絵図」には現在の古渡路集落の場所に「ふるとのむら」の文字が見え、古渡路遺跡に相当する場所は水田として描かれている［村上市 2000］。坂井氏によれば 15 ～ 16 世紀にかけて、人々は旧来の村を離れて新しい村を形成し、それが近世の村になったと考えてよいという［坂井 1999］。ここから、古渡路遺跡は近世の村成立以前の農民層が残したと推定する。建物規模は、各居住域に 40m^2 前後あるいはそれを超えるえるものが主屋にある。大きいものでは 80m^2 余りある。零細農民の村とされる上越市今池遺跡では 40m^2 が大型で、多くは 2、30m^2 ということである。これに対して有力農民の遺跡と推定される出雲崎町番場遺跡では 100m^2 近い建物がある［坂井前掲］。これと古渡路遺跡を比較すれば、番場遺跡に及ばないまでも、決して零細農民ではなかっただろう。刀や硯、わずかながら天目茶椀を所持することからも、農業だけではなくほかの職能を併せ持った有力農民層だったと推定する。

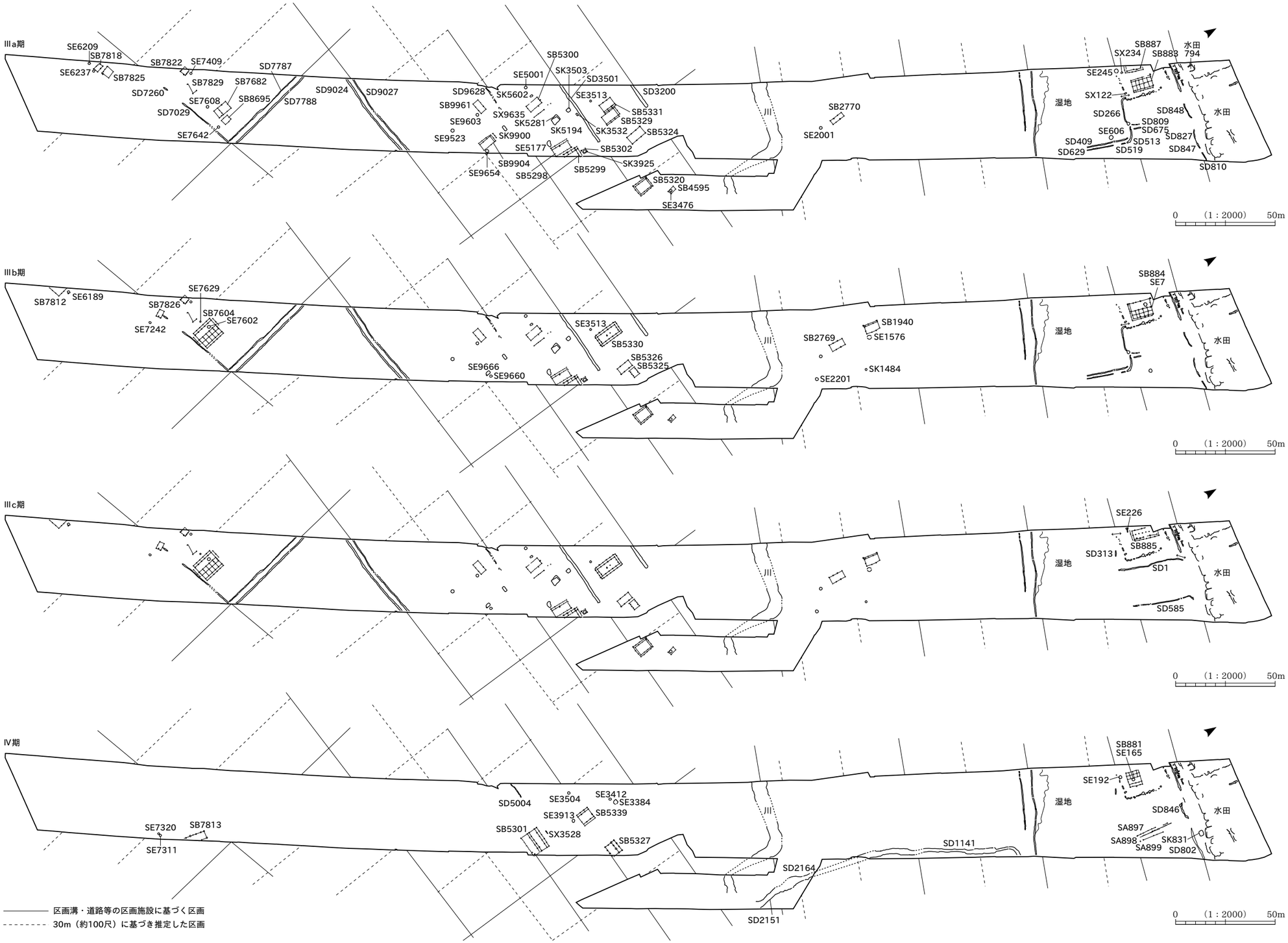
今回掘立柱建物の復元に当たっては木質部材研究所中尾七重氏に建築学の立場から数多くの助言をいただいた。その中で強調されたのは、建物の復元は平面的な柱穴の並びだけでは不可能で、深さや角度も重要という点であった。深さはその柱穴が構造を支える柱なのかどうかを決定するのに必要であるし、角度からは SB7826 のように柱（棟持柱）の立て方を推定することが可能である（第 43 図）。今後発掘調査を進める上で留意したい点である。



第 49 図　瀬波郡絵図（白描）（原図：［村上市 2000］の「白描　瀬波郡絵図」B-7 ～ 9）


Ⅰa期
SB7819
SD6470
SD6132
SB7824
SB7811
SE6419
SE6278
SE7534
SB7690
SK7606
SE7601
SB7686
SE7789
SD7787
SB7745
SD7023
出入口
SE7133
SD7084
SD8243
SB7692
SE8506
SB8540
SA8412
SK8331
(SD7788)
SA8411
SE8353
SB8026
SD9008
SD8421
SD9025
SD9134
SD9171
SD9055
SB9963
SB9222
SE9453
SB9063
SD9538
SD5119
SB5337
SB5340
SA5322
SB5332
SE3400
SD5100
SE5230
SD5002
SE3508
SB5295
P3646
SD2237
SD2238
SD2240
SD2079
(JII)
SD2292
SK2607
SB2768
SE2608
SB5321
SB5317
SE3008
湿地
SE233
SE822
SE197
SB8822
SD850
畑？
鋤痕
SX700
SX678
SD803
SE601
SD845
SD851
0　(1：2000)　50m
Ⅰb期
SB9221
SB5338
SE9440
SB9962
SB5336
川
SB2767
湿地
水田
0　(1：2000)　50m
Ⅱa期
SB7820
SB7817
SB7821
SE6441
SE6288
SB7814
SE7256
SB7830
SE7323
SE8529
SE7180
SB7815
SB7827
SD7084
(SD7788)
SB7681
SB7823
SB7816
SK7700
SE7777
SD7787
SE7608
SE7790
SB8499
SD8421
SB8539
SA8411
SE8353
SB8025
SK8331
SD8243
SK8265
SB8024
SD9088
SD9025
SD9134
SD9055
SE9469
SB9220
SB9370
SB9054
SE9357
SB9058
SD9542
SE9566
SD5003
SB5335
SA5323
SE3511
SB5328
SF3201
SB4594
SE3009
SB5316
SF3499
川
SD1583
SE1577
SK1575
SD1597
SD1581
SB1939
SB2766
SK1578
SB1941
SE2406
SE1475
SD331
SE1376
SD330
湿地
SF799
SD848
SD408
SD827
SD810
水田
0　(1：2000)　50m
Ⅱb期
SB7683
SE7641
SB9223
SB5334
SD5112
SB5296
SB5297
SE3979
川
湿地
水田
0　(1：2000)　50m
区画溝・道路等の区画施設に基づく区画
30m（約100尺）に基づき推定した区画

第 50 図　遺構変遷図（1）


Ⅲa期
SE6209
SB7818
SE6237
SB7825
SB7822
SE7409
SD7787
SB7829
SB7682
SD7260
SE7608
SB8695
SD7029
SD7788
SE7642
SD9024
SD9027
SD9628
SK5602
SB9961
SX9635
SE9603
SE9523
SK9900
SE5001
SK5281
SB5300
SK3503
SD3501
SE3513
SK5194
SK3532
SB5331
SB5329
SB5324
SD3200
SE5177
SB5302
SB9904
SE9654
SB5298
SB5299
SK3925
SB5320
SB4595
SE3476
川
SB2770
SE2001
湿地
SB887
SX234
SB883
水田
794
SE245
SX122
SD266
SD848
SD809
SD675
SE606
SD513
SD827
SD409
SD629
SD519
SD847
SD810
水田
0　(1：2000)　50m
Ⅲb期
SB7812
SE6189
SE7629
SB7826
SB7604
SE7602
SE7242
SE3513
SB5330
SB5326
SB5325
SE9666
SE9660
川
SB2769
SB1940
SE1576
SK1484
SE2201
湿地
SB884
SE7
水田
0　(1：2000)　50m
Ⅲc期
川
湿地
SE226
SB885
SD3131
SD1
SD585
水田
0　(1：2000)　50m
Ⅳ期
SD5004
SE3504
SE3412
SE3384
SE3913
SB5339
SB5301
SX3528
SB5327
SE7320
SB7813
SE7311
川
SD2164
SD2151
SD1141
湿地
SB881
SE165
SE192
SD846
水田
SA897
SA898
SA899
SK831
SD802
0　(1：2000)　50m
区画溝・道路等の区画施設に基づく区画
30m（約100尺）に基づき推定した区画

第 51 図　遺構変遷図（2）

要　　約

1　古渡路遺跡の本発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、平成 20･21 年度に実施した。調査は、調査主体である新潟県教育委員会から委託された（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

2　古渡路遺跡は村上市（旧朝日村）古渡路字海老屋敷 337-2 ほかに位置する。調査区の地形は北から南へ緩やかに下っているが、中央部はやや高くなっており、そこから南に向かい標高を下げ、三面川の支流山田川へと至る。標高は 12.5 ～ 14.5 mである。近隣には中世城館が点在し、南西 1.2km には大館跡、東 1.2km には大葉沢城跡がある。

3　調査は縄文時代と中世の 2 時期に分けて、重層調査を実施した。調査面積は縄文時代 6,784m^2、中世 26,770m^2 で、2 面合わせた延べ面積は 33,554m^2 である。

4　調査によって、遺跡は縄文時代の狩場と 13 世紀後半～ 15 世紀中葉の中世集落であったことが判明した。

5　縄文時代は前期～晩期の時期幅があるが、いずれの時期においても遺構･遺物量は非常に少なく、長期的な定住地とはみなせない。その中で注目されるのが、前期末葉の大木 6 式土器がまとまって出土した点と、中期以降の陥穴列が検出された点である。狩猟施設である陥穴列は通常丘陵の斜面などで検出されるので、古渡路遺跡のような低湿地で検出された例は希少である。

6　縄文時代の遺構には、前期の性格不明遺構、ピット、中期初頭の土器集中部（住居跡）1 基、中期後半の埋設土器 3 基、中期以降の陥穴 22 基などがある。

7　縄文時代の遺物には、土器･石器がある。土器は後期前葉（三十稲場式、南三十稲場式）を主体に、前期末葉（大木 6 式）、中期初頭、中期後葉（大木 8b 式）、後期中葉（加曾利 B2 式）等がある。石器は石鏃が多い。

8　中世集落は、地形の起伏を活かして微高地に居住域を設け、居住域の境には道や区画溝が作られていた様子が明らかとなった。居住域は 10 か所に分けられ、調査区北端では水田も検出した。集落は 13 世紀後半の開発当初から、一定の区割りに基づいて計画的に造営されていた。3 ないしは 4 段階の変遷を経ており、それに伴って建物の構造にも変化が見られることが明らかとなった。遺構や遺物の在り方から、この集落を残したのは有力農民層であると推定した。

9　中世の遺構には、掘立柱建物 92 棟、杭列 8 基、井戸 83 基、土坑 246 基、溝 136 条、道路、水田、ピットがある。

10　中世の遺物には、珠洲焼、青磁、白磁、瀬戸･美濃焼、信楽焼、越前焼、土師質土器、木製品（人形･箸状木製品･漆器椀･曲物等）、石器（砥石･硯等）、墨で人物像等が描かれた円礫、金属製品（銭貨･鉄滓等）がある。

11　中世の掘立柱建物の構造を復元した。掘立柱建物は柱穴配置によって「梁間一間型」「（中世）総柱型」「複合型」「不揃いの側柱型」「方形型」に分類した。「梁間一間型」のうち四面廂付については、妻庇を出す例と、棟持廂柱で棟木を受ける例の 2 例の推定復元モデルを示した。「複合型」は、梁間一間型と総柱型あるいは梁間一間型が桁行をそろえ平側の軒を接して合体した建物で、これまであまり認識されてこなかった形態である。集落変遷の後葉に登場するので、中世と近世をつなぐ上で興味深い事例である。なお「梁間一間型」「総柱型」「複合型」は下越の 18 世紀の近世民家と異なっており、遺跡の時代からこの間に、住居について大きい転換があったことが推測される。また、先の分類とは別の観点から、柱列の隅柱が内側によるものを「胴張型」とした。桁行に対して隅柱が内側に入る場合、隅柱の外まで伸ばした妻側の梁の端部に桁を架けることで、長方形の建物が建てられると推定した。

引用・参考文献

青木　学　2008　「第Ⅴ章５　2）　構築年代および構築者」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 180 集　松蔭東遺跡・中曽根遺跡・大館跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木　学　2009　「第Ⅲ章　大館跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 192 集　大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木　学　2010　「第Ⅶ章 1A 中世集落」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 218 集　下新保高田遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木　学ほか 2008　「第Ⅴ章　大館跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 180 集　松蔭東遺跡・中曽根遺跡Ⅱ・大館跡Ⅰ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木　学ほか 2009　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 192 集　大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

青木　学ほか 2010　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 218 集　下新保高田遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

朝日村教育委員会　1980　『朝日村史』　新潟県朝日村教育委員会

阿部恭平　1998　「第Ⅳ章　中世」『十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 14 集　笹山遺跡発掘調査報告書』　新潟県十日町市教育委員会

荒川隆史・加藤学ほか 1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 93 集　和泉 A 遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史・島津賢男ほか　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 153 集　大坪遺跡』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川博行　2009　「第Ⅳ章　東興屋遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 192 集　大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤　晃　1995　「9［4］備前」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

伊藤邦弘・黒坂洋美　1996　『山形県埋蔵文化財センター調査報告書　第 40 集　野新田遺跡発掘調査報告書』（財）山形県埋蔵文化財センター

稲野裕介ほか 1983　『北上市文化財調査報告書　第 33 集　滝ノ沢遺跡（1977 ～ 1982 年度調査）』　北上市教育委員会

稲野裕介ほか 1991　『北上市文化財調査報告書　第 63 集　滝ノ沢遺跡Ⅲ（1984・86・87・88・90 年度調査）』　北上市教育委員会

今村啓爾　2006　「大木 6 式土器の諸系譜と変遷過程」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 20 号

岩野邦康・森行人　2007　『平成 19 年度特別展　船と船大工―湊町新潟を支えた木造和船―』　新潟市歴史博物館

上田秀夫　1982　「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

宇野隆夫　1997　「中世食器様式の意味するもの　計量分析による使用法の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 71 集　国立歴史民俗博物館

大島秀俊ほか 2010　「第Ⅲ章　谷地遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 193 集　谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡Ⅱ・宮の越遺跡Ⅱ』　新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

大野　亨　2001　「竪穴建物とはなにか」『東北中世考古学叢書 2　掘立と竪穴　中世遺構論の課題』　高志書院

尾崎高宏・土橋由理子　2009　「古渡路遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 20 年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

海峡土器編年研究会　2005　『第 3 回　東北・北海道の縄文時代前期末葉～中期初頭土器の課題　　資料集』　海峡土器編年研究会

垣内光次郎　1999　「石の文化誌」『第 12 回　北陸中世考古学研究会　資料集　中世北陸の石文化Ⅰ』　北陸中世考古学研究会

春日真実　2009　「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学Ⅱ』 新潟県考古学会
加藤　学　2008a　「村上 I.C. ～朝日 I.C. 間　遺跡推定地 15　試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 19 年度 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤　学　2008b　「村上 I.C. ～朝日 I.C. 間遺跡推定地 11　試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成 19 年度 （財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
加藤三千雄　1988　「新保・新崎土器様式」『縄文土器大観 3　中期Ⅱ』 小学館
金田章裕　1995　「条理地割の形態と重層性」『条里制研究』第 11 号　条里制研究会
北村　亮　1990　「第Ⅲ章 4B　石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 56 集　岩原遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会
木戸雅寿　1995　「9［3］信楽」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会
國平健三　1979　「第Ⅴ章第 2 節　中世」『神奈川県埋蔵文化財調査報告 15　上浜田遺跡』 神奈川県教育委員会
栗島義明　2007　「秩父のトチ餅作り（Ⅰ）」『紀要』7 号　埼玉県立川の博物館
小林巖雄・吉村尚久ほか　2000　『新潟県地質図（改訂版）・新潟県地質図説明書（2000 年版）』 新潟県
小山正忠・竹原秀雄　1996　『新版標準土色帖　1996 年版』 農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所
小山正忠・竹原秀雄　2006　『新版標準土色帖　2006 年版』 農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所
斎野裕彦ほか　1987　『富沢ー富沢遺跡第 15 次発掘調査報告書』 仙台市教育委員会
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2008a　『村上市　古渡路遺跡現地説明会資料』2008 年 8 月
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2008b　『村上市　古渡路遺跡現地説明会資料』2008 年 11 月
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団　2009　『日本海沿岸東北自動車道　遺跡発掘調査報告会資料』
坂井秀弥　1999　「第 2 部　民衆が語る中世の世界　中世越後の村・家・住まい」『中世の越後と佐渡　環日本海歴史民俗学叢書 7』 古志書院
坂井秀弥・戸根与八郎ほか　1984　「第Ⅲ章　今池遺跡の調査」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 35 集　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
坂井秀弥ほか　1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 48 集　三島郡出雲崎町番場遺跡』 新潟県教育委員会
塩原知人・竹内　裕　2001　『高平遺跡』 新潟県村上市教育委員会
汐見一夫　1999　「砥石についてー中世遺跡出土の仕上砥を中心にー」『第 12 回　北陸中世考古学研究会　資料集　中世北陸の石文化Ⅰ』 北陸中世考古学研究会
渋谷孝雄・黒坂雅人　1988　『山形県埋蔵文化財調査報告書　第 120 集　吹浦遺跡　第 3・4 次緊急発掘調査報告書』 山形県教育委員会
白鳥良一　1989　「前期大木式土器様式」『縄文土器大観 1　草創期　早期　前期』 小学館
菅原哲文　1999　「山形県における縄文時代中期の土器様相ー中期後半の編年を中心としてー」『山形考古』第 6 巻　第 3 号（通巻 29 号） 山形考古学会
鈴木道之助　1991　『図録　石器入門事典　縄文』 柏書房
住田雅和　2009　「炭化米塊より推定できるその由来」『日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集』 日本文化財科学会第 26 回大会実行委員会
仙台農耕文化勉強会　1990　『第 3 回　東日本の水田跡を考える会ー資料集ー』 東日本の水田跡を考える会
高橋保雄ほか　1998　「岩船郡朝日村古四王林遺跡出土の縄文時代後・晩期の遺物について（上）」『新潟考古』第 9 号　新潟県考古学会
高橋保雄ほか　1999　「岩船郡朝日村古四王林遺跡出土の縄文時代後・晩期の遺物について（下）」『新潟考古』第 10 号　新潟県考古学会
高橋與右衛門　2001　「第 2 部　東北の中世遺構を読む　古代型竪穴住居から中世型竪穴建物跡へ」『東北中世考古学叢書 2　掘立と竪穴　中世遺構論の課題』 高志書院

高橋與右衛門　2003 「中世の建物跡」『戦国時代の考古学』 高志書院
高橋與右衛門　2004 「掘立と言う名の建物」『第17回　北陸中世考古学研究会　資料集　掘立柱建物から礎石建物へ』 北陸中世考古学研究会
滝沢規朗ほか 1995 『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第68集　大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗　2009 「長割遺跡」『第16回　遺跡発掘調査報告会資料』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗・富樫秀之 1998 『朝日村文化財報告書　第14集　アチヤ平遺跡中・下段』 新潟県朝日村教育委員会
田口勇・穴澤義巧 1994 「付論　本研究関係用語解説」『国立歴史民俗博物館研究報告　第59集　日本・韓国の鉄生産技術〈調査編2〉』 国立歴史民俗博物館
田中耕作　1989 「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』 小学館
田中真吾　1999 「六章　四節　岩船郡内の城館の分布」『村上市史』通史編1　原始・古代・中世　村上市
田辺早苗　1994 『神林村埋蔵文化財報告　第5　八幡山遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗　2008 『神林村埋蔵文化財報告　第26　上ノ山遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗・大賀　健 2003 『神林村埋蔵文化財報告　第18　樋渡遺跡・堀下遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
田辺早苗ほか 2001 『神林村埋蔵文化財報告　第10　城田遺跡発掘調査報告書』 新潟県神林村教育委員会
千葉正彦　2001 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書　第351集　清水ヶ野遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団
立木宏明　1997 「ガラハギ遺跡」『朝日村文化財報告書　第12集　二又遺跡・竪岩遺跡・ガラハギ遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
續伸一郎　1995 「11［3］中世後期の貿易陶磁」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
寺﨑裕助　1996 「古屋敷式土器」『日本土器事典』 雄山閣
田海義正　1999 「第2章　第4節　第2項　狩猟」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
富岡直人・浅利洋美 2002 「第Ⅴ章　10　元屋敷遺跡出土動物遺体の分析」『朝日村文化財報告書　第22集　元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』 新潟県朝日村教育委員会
友廣哲也　2009 『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第474集　福島大島遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子　2009 「古渡路遺跡」『埋文にいがた』68号　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子　2010a 「古渡路遺跡」『埋文にいがた』70号　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子　2010b 「古渡路遺跡」『埋文にいがた』71号　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由理子　2010c 「古渡路遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』平成21年度　（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
永井久美男　2002 『新版　中世出土銭の分類図版』 高志書院
中野晴久　1995 「9［2］常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
奈良国立文化財研究所　1993 『奈良国立文化財研究所史料　第36冊　木器集成図録　近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所
新潟県教育委員会　1987 『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
西田康民　1989 「堀之内・加曾利B式土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』 小学館
丹羽　茂　1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観1　草創期　早期　前期』 小学館
長谷川伸　1999 「六章　三節　国人領の世界」『村上市史』通史編1　原始・古代・中世　村上市
藤澤良祐　1995 「9［1］古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会
藤澤良祐　2005 『日本の遺跡5　瀬戸窯跡群』 同成社
藤澤良祐　2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
藤原良章　2001 「第1部　掘立と竪穴を考える　館・集落の景観－宅を中心に－」『東北中世考古学叢書2　掘立と竪穴　中世遺構論の課題』 高志書院

北陸中世土器研究会　2001　『第 14 回　北陸中世考古学研究会　資料集　中世北陸の井戸』 北陸中世考古学研究会
本田祐二　2008　「新潟県の様相」『第 21 回　北陸中世考古学研究会　資料集　北陸中世のみち』 北陸中世考古学研究会
松田光太郎　2003　「大木 6 式土器の変遷とその地域性」『神奈川考古』第 39 号　神奈川考古同人会
水澤幸一　1993　「越後における中世村落の様相」『第 6 回　北陸中世土器研究会　資料集　中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』 北陸中世考古学研究会
水澤幸一　2000　『中条町埋蔵文化財調査報告書　第 20 集　下町・坊城遺跡Ⅳ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一　2001　『中条町埋蔵文化財調査報告書　第 21 集　下町・坊城遺跡Ⅴ』 新潟県中条町教育委員会
水澤幸一ほか　2008　「越後・佐渡」『第 21 回　北陸中世土器研究会　資料集　北陸中世のみち』 北陸中世考古学研究会
宮本常一　1981a　「四　人間と動物　陥穽」『絵巻物に見る　日本庶民生活誌』 中央公論新社
宮本常一　1981b　「一〇　火と生活　柱松」『絵巻物に見る　日本庶民生活誌』 中央公論新社
宮本長二郎　1999　「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間―関口欣也先生退官記念論文集』 中央公論美術出版
村上章久　2008　「第Ⅳ章 6　まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 186 集　大坂上道遺跡Ⅱ・猿額遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
村上市　2000　『村上市史別編　絵図・地図、年表』 村上市
森田　勉　1982　「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山　形　県　1969　『山形県史』資料篇 11　考古資料　山形県
山崎忠良　2000　『朝日村文化財報告書　第 20 集　本道平遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
山本信夫　2000　『大宰府条坊跡ＸＶ　―陶磁器分類編―』 太宰府市教育委員会
横山勝栄　1978　『朝日村文化財報告書　第４集　駒山遺跡－第１次・第２次発掘調査報告』 新潟県朝日村教育委員会
横山勝栄・田中真吾　1976　『朝日村文化財報告書　第１集　熊登遺跡』 新潟県朝日村教育委員会
横山勝栄・田中真吾　2005　「フィールドノート　猿澤城の研究」『新潟考古』第 16 号　新潟県考古学会
吉岡恭平・斎野裕彦・中富洋編　1990　『第３回　東日本の水田跡を考える会―資料集―』 東日本の水田跡を考える会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢　1989　『人類史叢書 10　日本海域の土器・陶磁［中世編］』 六興出版
吉岡康暢監修　1989　『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
和田寿久ほか　1990　『朝日村文化財報告書　第５集　下ゾリ遺跡』 新潟県朝日村教育委員会

縄文時代下層　C 区　ピット（JP）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9808	26B7・8・13	Ⅶ	円形	U 字状	28	(28)	24			
9809	26B8	Ⅶ	円形	箱状	26	(26)	24			
9810	26B13	Ⅶ	円形	V 字状	32	(32)	34			
9813	26C21	Ⅶ	円形	弧状	21	(21)	7			
9814	25B3	Ⅶ	円形	弧状	28	(28)	14			
9815	26C11	Ⅶ	円形	U 字状	24	(24)	24			
9817	28E3	Ⅶ	円形	V 字状	(28)	26	23			
9818	25C2	Ⅶ	円形	U 字状	21	(21)	26			
9821	28E4	Ⅶ	円形	U 字状	20	(20)	16			
9822	25C7	Ⅶ	円形	U 字状	14	(14)	16			
9823	25C12	Ⅶ	円形	U 字状	20	(20)	20			
9824	25C17	Ⅵ	円形	U 字状	27	(27)	72			
9825	25D17	Ⅶ	楕円形	弧状	62	50	14			
9827	25B16	Ⅵ	円形	V 字状	(36)	32	32			
9828	26C20	Ⅵ	円形	U 字状	(30)	26	32			
9832	25C16	Ⅶ	円形	U 字状	(22)	20	14			

縄文時代下層　E 区　ピット（JP）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
2735	39B22	Ⅶa	円形	U 字状	34	28	16		JSD2738 が旧	
2740	39C16	Ⅶa	円形	弧状	28	(28)	12			
2741	39C16	Ⅶa	楕円形	弧状	52	(26)	12			
2742	38C20	Ⅶa	円形	弧状	23	(23)	14			
2743	38C19	Ⅶa	円形	U 字状	27	(26)	18			
2744	38C14	Ⅶa	円形	弧状	26	(26)	16			
2745	38C13	Ⅶa	円形	弧状	24	(23)	14			
2746	38C17	Ⅶa	円形	弧状	24	(24)	6			
2749	39C6	Ⅶa	円形	弧状	15	(15)	11		JSX2751 が旧	
2750	39C1	Ⅶa	円形	弧状	26	(26)	16		JSX2751 が旧	
2752	38B25	Ⅶa	楕円形	U 字状	34	(28)	26			
2757	38C19	Ⅶa	円形	弧状	22	(22)	6			
2758	38C20	Ⅶa	円形	弧状	30	(20)	8		JSX2753 が旧	
2759	38C15、39C11	Ⅶa	円形	弧状	50	42	12		JSX2753 が旧	
2760	39C7	Ⅶa	円形	U 字状	18	(18)	14		JSX2751 が旧	

縄文時代下層　E 区　性格不明遺構（JSX）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
2734	39B16	Ⅶa	楕円形	台形状	0.58	0.38	0.14			
2736	39C8	Ⅶa	不整形	弧状	0.62	(0.25)	0.12			
2737	39C7・8・12・13	Ⅶa	円形	弧状	0.48	(0.45)	0.18			
2739	39C13	Ⅶa	円形	台形状	0.42	0.40	0.12			
2747	39B16	Ⅶa	円形	弧状	0.40	0.32	0.15		JSX2748 が旧	
2748	38B20・25、39B16・17・21・22	Ⅶa	不整形	弧状	3.44	1.52	0.34	縄文土器深鉢（1・2）	JSX2747 が新	JSX2751 と接合
2751	38C5、38B25、39B21・22、39C1・2・6・7・11・12	Ⅶa	不整形	弧状	5.60	4.64	0.10	縄文土器深鉢（1・5・6）、石製品（65）	JP2749・2750・2760、JSD2738 が新	JSX2748・JSX2759 と接合
2753	38C9・10・14・15・20、39C11	Ⅶa	不整形	弧状	(5.20)	3.20	0.16	縄文土器深鉢（3・4）	JP2758・2759 が新	

縄文時代下層　E 区　溝（JSD）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長さ	幅	深さ			
2738	39B21、39C1	Ⅶa	長楕円形	弧状	1.64	0.40	0.14		JP2735 が新 JSX2751 が旧	

縄文時代上層　C 区　JSX9747 内　ピット（JP）（1）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9748	22C25、22D5	V	楕円形	V 字状	45	21	58			
9749	22C24	V	円形	V 字状	27	25	20			
9750	22C19	V	円形	U 字状	23	20	25			
9751	22C15	V	楕円形	V 字状	27	21	17			
9752	22C24	V	楕円形	U 字状	(30)	18	31			
9753	22D4・9	V	円形	U 字状	21	21	22			
9754	22D3	V	円形	U 字状	25	24	35			
9755	22D2	V	楕円形	U 字状	24	18	25			
9756	22D2・3	V	円形	U 字状	27	27	26			
9757	22C23	V	円形	U 字状	19	17	26			
9758	22C24	V	円形	U 字状	18	17	23			

縄文時代上層　C 区　JSX9747 内　ピット（JP）（2）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9759	22D4・5	V	楕円形	U 字状	21	17	20			
9761	22C19	V	円形	U 字状	19	(19)	27			
9762	22C18	V	楕円形	V 字状	31	25	28			
9763	22C17	V	楕円形	V 字状	23	18	36			
9764	22C17	V	円形	U 字状	29	29	12		JSK9731 が新	
9765	22C19・20	V	円形	V 字状	21	21	32			
9766	22C20	V	円形	U 字状	22	19	30			
9767	22C16	V	円形	U 字状	29	27	40			
9768	22C16	V	円形	U 字状	27	26	27			
9771	22C18・23	V	円形	U 字状	22	(22)	21			
9831	23C16	V	円形	U 字状	24	22	25			

縄文時代上層　C 区　JSX9747 内　炉（JSF）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9786	22C24、22D3・4	V	楕円形	台形状	79	44	18			底面は起伏がある

縄文時代上層　B・C 区　ピット（JP）（1）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
8605	15D7	V	円形	U 字状	26	21	36			
8606	15D12	V	円形	U 字状	26	22	22			
8607	15D16	V	円形	U 字状	22	20	36			
8638	10D5	V	円形	U 字状	16	(16)	16			
8639	10D5	V	円形	U 字状	22	20	30			
8657	17C10、18C6	V	円形	U 字状	26	22	18			
8692	18C6・11	V	不整形	U 字状	38	34	48			
9710	25C17	V	円形	U 字状	28	(26)	50		JP9948 が旧	
9711	25C12	V	楕円形	U 字状	40	20	48			
9712	25C7	V	円形	U 字状	24	(23)	14			
9714	25C3	V	楕円形	U 字状	32	(22)	26			
9716	25C3	V	不整形	漏斗状	(36)	30	30			
9717	25C3	V	円形	弧状	25	(22)	12			
9718	25C3	V	円形	U 字状	19	(18)	16			
9719	25B23	V	円形	V 字状	23	(22)	30			
9720	25C13	V	円形	U 字状	22	(20)	28			
9721	25C8	V	円形	弧状	20	(20)	6			
9722	25C14	V	円形	弧状	21	(18)	14			
9723	25C15	V	円形	V 字状	22	(21)	36			
9724	25C5	V	方形	U 字状	26	(25)	56			
9725	26C16	V	楕円形	U 字状	48	(32)	34			
9726	26C17	V	円形	U 字状	28	(24)	46			
9727	26C17・18	V	円形	弧状	30	(28)	20			
9728	26C18	V	楕円形	漏斗状	(38)	(25)	44			
9729	26C7	V	円形	弧状	24	(24)	14		JP9795 が旧	
9730	26C13	V	円形	U 字状	19	(19)	24			
9745	24D12	V	円形	U 字状	36	(30)	42			
9770	25D13	V	円形	U 字状	20	(20)	18			
9772	27D19	V	円形	U 字状	20	(20)	32			
9773	27D10・15	V	円形	U 字状	22	(22)	36			
9774	28D21・22	V	円形	U 字状	20	(20)	32			
9775	28E3	V	円形	U 字状	(20)	18	40			
9776	28E3	V	円形	U 字状	20	(20)	32			
9777	28D14・19	V	円形	U 字状	26	(26)	38			
9778	26D1	V	円形	U 字状	20	(20)	20			
9779	26D6	V	円形	U 字状	16	(16)	26			
9780	26D6・11	V	円形	U 字状	20	(20)	26			
9781	26D11	V	円形	U 字状	18	(18)	32			
9782	25D15、26D11	V	円形	U 字状	20	(20)	20			
9783	26C23	V	円形	U 字状	20	(20)	16			
9784	26D4	V	円形	U 字状	24	(22)	34			
9785	26C23、26D3	V	円形	U 字状	20	(18)	20			
9787	25C23・24	V	円形	台形状	28	26	18	縄文土器		
9788	26D7	V	円形	U 字状	25	(24)	18			
9789	26C24	V	円形	U 字状	19	(17)	23			
9790	26C17	V	円形	V 字状	28	(28)	30			
9791	26C16	V	円形	弧状	20	(20)	14			
9792	26C18	V	楕円形	弧状	32	(22)	18			
9793	26C17	V	円形	U 字状	22	(20)	20			
9794	26C7	V	円形	U 字状	22	(20)	24			
9795	26C7	V	円形	弧状	(20)	(20)	15		JP9729 が新	
9796	25C18	V	円形	U 字状	24	(24)	28			

縄文時代上層　B・C 区　ピット（JP）（2）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9797	25C16	V	円形	U 字状	24	(22)	28			
9798	26D5、27D1	V	円形	V 字状	(24)	20	54			
9799	26D5・10	V	円形	V 字状	29	(27)	24			
9800	25C8	V	円形	U 字状	20	(20)	22			
9802	26C11	V	円形	弧状	32	(30)	26			
9803	26C12・13	V	円形	弧状	28	(26)	16			
9804	26C19	V	円形	U 字状	28	(28)	28			
9805	26C7・8	V	円形	V 字状	22	(22)	22			
9806	26C25	V	円形	弧状	20	(20)	11			
9807	25C10	V	円形	U 字状	24	(24)	48			
9811	26C17	V	円形	弧状	30	24	8			
9942	25C17	V	円形	弧状	64	54	20			
9943	25C17・18	V	円形	U 字状	30	26	32			
9944	25C24	V	楕円形	U 字状	21	16	12			
9945	25C19	V	円形	U 字状	24	24	8			
9947	25B22・23	V	円形	漏斗状	34	(30)	30			
9948	25C17	V	楕円形	U 字状	(24)	22	6		JP9710 が新	
9949	25C4	V	円形	U 字状	16	(14)	14			

縄文時代上層　C 区　集石遺構（JSS）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9769	24D10・15、25D6・11	Ⅳ d			2.82	1.48		石錘（38）		掘り込みなし

縄文時代上層　C 区　性格不明遺構（JSX）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9747	22C12 ～ 15・17 ～ 20・22 ～ 25、22D2 ～ 5	V	円形	弧状	3.96	3.65	0.10	縄文土器深鉢（8a ～ 8c）		住居跡の可能性高い
9829	25B16・17・21・22	Ⅶ	楕円形	弧状	2.40	2.12	0.26	縄文土器深鉢（9a ～ 9d）		V 層上位からの掘り込みの可能性

縄文時代上層　A 区　埋設土器（JSH）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
8587	10C10	V	不整円形		37	33	10	縄文土器深鉢（12a・12b）		逆位で埋設
8588	11C19・24	V	円形		33	30	15	縄文土器深鉢（11）		逆位で埋設
8625	10C5	V	円形		32	32	9	縄文土器深鉢（10）		逆位で埋設

縄文時代上層　A・B・C 区　陥穴状土坑（JSK）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	上端（m）		下端（m）		深さ（m）	方位	出土遺物	切り合い	備考
					長軸	幅	長軸	幅					
6083	4ZZ18・19	Ⅳ d	溝状	V 字状	(1.99)	0.30	(1.80)	0.10	0.53	N-3° -E		中世遺構（SX6009）が新	
6084	4A23・24	Ⅳ d	溝状	楔形状	2.96	0.36	3.00	0.10	0.72	N-14° -E			
6075	4ZZ25、5ZZ21	Ⅳ d	溝状	U 字状	2.61	0.54	2.30	0.22	0.49	N-24° -E			
8602	11B21、11C1	V	溝状	V 字状	3.90	0.47	3.93	0.14	0.97	N-64° -W			
8626	11D7・8・12・13・17	V	溝状	楔形状	3.67	0.54	3.52	0.11	0.99	N-29° -W			
8655	17C5・10・15	V	溝状	漏斗状	2.60	0.62	2.52	0.16	1.00	N-67° -W			
8656	18B16・21、18C1	V	溝状	U 字状	3.47	0.36	3.41	0.18	0.54	N-51° -W			
9700	21A20・24・25	Ⅳ c	溝状	楔形状	1.78	0.34	1.75	0.16	0.92	N-29° -W			
9701	21C21、21D1	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.55	0.50	2.53	0.22	1.05	N-60° -W			
9702	21D14・15	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.13	0.42	2.06	0.10	1.08	N-23° -W			
9703	22E8・9	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.02	0.49	1.98	0.09	1.00	N-3° -E			土壌サンプル採取
9704	22C4・9	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.16	0.53	2.27	0.12	0.91	N-30° -W			
9705	23C12・17	Ⅳ c	溝状	漏斗状	2.08	0.57	2.54	0.18	1.11	N-1° -W			
9706	23D2・6・7	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.40	0.50	2.25	0.13	0.98	N-2° -W			
9708	24C21・22	Ⅳ c	溝状	楔形状	1.97		2.05		0.98	N-21° -E			
9709	24D23・24、24E3・4	Ⅳ c	溝状	楔形状	2.32	0.42	2.22	0.14	0.86	N-72° -E			
9738	25B19・20・24	V	溝状	楔形状	2.54	0.24	2.43	0.07	0.70	N-18° -E			
9739	24D8・9	Ⅳ d	溝状	U 字状	2.32	0.34	2.36	0.21	0.76	N-4° -W			
9740	21C6・7・11・12	V	溝状	U 字状	3.03	0.44	3.66	0.22	0.80	N-5° -W			
9741	21B15・20	V	溝状	楔形状	2.38	0.34	2.27	0.09	0.90	N-2° -E			土壌サンプル採取
9744	19B3・4	V	溝状	楔形状	2.02	0.37	2.05	0.22	0.60	N-18° -W			
9820	28D3・4・8・9	Ⅶ	溝状	楔形状	2.20	0.30	2.28	0.16	0.64	N-39° -W			

縄文時代上層　B 区　性格不明遺構（JSX）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
8447	17A13・14・18・19	Ⅳ c		弧状	2.80		0.24	縄文土器深鉢（13b ～ 13f）	P8603・8604 が新	Ⅳ b 層からの掘り込み
8549	16C5、17C1・2・6・7	Ⅳ c	不整形	弧状	3.38	2.28	0.40			
8561	14C3・4	Ⅳ d	楕円形	台形状	0.52	0.40	0.32			

縄文時代上層　C 区　土坑（JSK）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
9707	23C19・20・24・25	Ⅳc	楕円形	弧状	2.20	0.96	0.22			
9731	22C12・13・17・18	Ⅳd	長楕円形	U 字状	2.46	0.56	0.45	縄文土器	JP9764 が旧	

縄文時代上層　F 区　性格不明遺構（JSX）

遺構番号	位置	検出層位	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
1020	50C2 ～ 4・7 ～ 9	V	楕円形	半円状	3.12	2.52	0.46	石鏃（66）		
1894	49D10・15・20、50D6・7・11・16	V	不整形	弧状	4.10	2.85	0.28	縄文土器深鉢（33）		
1929	46B17・18	V	不整形		1.48	0.84	0.08	縄文土器深鉢（34）		
1930	47C4・9	V	不整形		1.72	0.86	0.08	縄文土器深鉢（35）		
1931	48B4・9	V	不整形	弧状	2.20	1.24	0.16	縄文土器深鉢（32a ～ 32i）		縄文中期末葉の土器片多量出土

中世　A 区　掘立柱建物（1）

SB7811	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	8・9B・C		7 間（14.66m）		2 間（4.58m）		N - 85° - E	67.1㎡（107.0㎡）		二面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6292	不整形	箱状	88	76	62	12.47	12			石の配置から柱径を推定 標高 12.55m 付近に石 底面に根固め石　SB7821 と共有
P6429	円形	弧状	(46)		20	12.92			SB7821-P6289 が新	
P6450	円形	階段状	49	48	36	12.64	12			SB7821 と共有
P6442	円形	U 字状	(47)	42	61	12.49				SB7821 と共有
P6445	楕円形	U 字状		48	63	12.52			SB7821-P6461 と新旧不明	
P6406	円形	U 字状	44	42	55	12.61	15	青磁椀（80）		
P6404	円形	U 字状	45	43	67	12.50	12			
P6407	円形	U 字状	31	30	51	12.64	12			SB7830 と共有
P6413	楕円形	階段状	54	42	62	12.57	13			
P6426	円形	U 字状	30	30	46	12.72	14			
P6422	楕円形	U 字状	54	44	67	12.52	12			
P6405	円形	U 字状	44	42	62	12.52	15			
P6290	楕円形	U 字状	48	39	55	12.56	14			確認面からの深度
P6280	円形	U 字状	48	47	55	12.43	14			
P6286	円形	U 字状	42	38	40	12.59	14			
P6447	円形	U 字状	57	(54)	40	12.76				
P6287	円形	U 字状	50	45	50	12.54	12			標高 12.7m 付近に石あり 浅深度に根固め石
P6295	円形	箱状	60	59	51	12.57			P6296 が旧	
P6291	楕円形	U 字状	79	51	56	12.62	12			石の配置から柱径を推定 標高 12.7m 付近に石 底面に根固め石　SB7821 と共有
P6449	円形	弧状	28	24	8	12.96				SB7821 と共有
P6451	円形	階段状	58	55	34	12.78	13			柱穴底面に柱痕のくぼみ SB7821 と共有
P6424	円形	弧状		31	19	12.78			SB7821-P6423 が新	
P6412	円形	台形状	67	56	28	12.86			SB7821-P6411 が新	
P6298	円形	U 字状	45	44	32	12.82	9			
P6402	円形	V 字状	43	39	62	12.63	10			底面に柱痕のくぼみあり
P6440	円形	U 字状	34	28	40	12.83	12			SB7830 と共有
P6425	円形	V 字状	36	34	58	12.64	10			標高 13.1m 付近に石あり
P6416	円形	U 字状	36	32	36	12.86	10			
P6444	楕円形	U 字状	(36)	(30)	38	12.68				
P6262	楕円形	U 字状	37	30	37	12.70	8			
P6277	円形	U 字状	35	30	26	12.69	10			
P6279	楕円形	U 字状	32	23	30	12.70	12			
P6446	円形	U 字状	29	26	35	12.77	12			底面の形状から柱径を推定
P6448	円形	階段状	43	40	38	12.52				
P6297	円形	階段状	31	26	39	12.78	11			
P6401	円形	弧状	26	25	7	13.11				

SB7812	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	5・6ZZ・A		3 間（6.24m）以上		3 間（5.82m）以上		N - 14° - W	36.3㎡以上		（側柱型・一棟）西側は調査区外
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6179	円形	U 字状	19	16	16	12.67				
P6176	円形	U 字状	27	23	45	12.44				
P6175	楕円形	V 字状	31	22	34	12.51	16			
P6174	円形	U 字状	23	23	42	12.42	8			
P6180	不整形	半円状	37	14	15	12.68				
P6177	楕円形	U 字状	24	19	45	12.39				
P6185	楕円形	U 字状	(18)		13	12.77				

中世　A 区　掘立柱建物（2）

SB7813	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12・13D		4 間（9.49m）以上		1 間（3.55m）以上		N － 11° － E	33.7㎡以上		側柱型・南北棟（南東側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7201	円形	漏斗状	64	63	56	12.86	15	砥石（276）		
P7207	楕円形	U 字状	43	34	57	12.86	12			
P7161	円形	漏斗状	48	47	53	12.86	6			
P7163	楕円形	漏斗状	76	67	37	13.05				
P7185	円形	V 字状	25	24	37	13.03				
P7071	楕円形	階段状	51	45	58	12.82	13	縄文土器		
P7081	円形	漏斗状	49	43	58	12.84	15			
P7082	楕円形	階段状	66	57	55	12.87	16		P7093 と新旧不明	

SB7814	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	11・12B・C		4 間（4.06m）		3 間（3.76m）		N － 73° － E	15.3㎡		側柱型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7113	円形	V 字状	30	30	45	12.88	7			
P7125	円形	階段状	32	31	22	13.13	9			
P7103	円形	U 字状	33	31	36	13.00	7			
P7112	楕円形	U 字状	31	24	41	12.98				
P7099	楕円形	U 字状	37	21	28	13.08				
P7100	楕円形	弧状	29	22	11	13.21				
P7117	円形	U 字状	26	23	31	13.00				
P7120	円形	U 字状	33	28	30	13.00				

SB7815	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12・13D		2 間（3.37m）		1 間（2.84m）		N － 66° － E	9.6㎡		胴張型の梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7057	円形	U 字状	28	27	26	13.13				
P7376	円形	V 字状	31	29	46	12.96	12			
P7076	楕円形	階段状	41	33	46	12.98				
P7080	円形	V 字状	29	25	27	13.14				
P7189	楕円形	台形状	54	40	36	13.04				
P7187	円形	U 字状	34	31	60	12.80	7			
P7091	円形	U 字状	37	36	28	13.11				

SB7817	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	8A				3 間（5.02m）以上		N － 6° － W			
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6214	楕円形	U 字状	58	40	33	12.79				
P6215	楕円形	U 字状	50	34	43	12.68				
P6248	円形	弧状	28	24	16	12.93				
P6211	楕円形	V 字状	44	36	60	12.52				

SB7818	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	7・8A		3 間（4.00m）		1 間（2.37m）		N － 17° － W	9.5㎡		胴張型の梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6232	楕円形	U 字状	40	32	39	12.70	15			
P6231	円形	U 字状	36	36	26	12.81	18			
P6228	楕円形	階段状	38	32	48	12.62	10			
P6261	円形	U 字状	24	22	21	12.87			SD6470 が旧	
P6219	楕円形	U 字状	46	35	28	12.85	16			
P6226	円形	U 字状	26	26	22	12.79			SD6470 が旧	
P6227	円形	U 字状	36	36	21	12.88				
P6256	楕円形	U 字状	46	36	42	12.66	13			

SB7819	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	7ZZ・A		4 間（5.14m）以上		1 間（2.00m）以上		N － 3° － W	10.3㎡以上		側柱型・南北棟（北西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6502	円形	U 字状	（18）		12	12.96				
P6238	円形	U 字状	21	21	22	12.90				
P6230	円形	U 字状	25	24	37	12.84				
P6194	円形	U 字状	29	26	22	12.92	10			
P6192	楕円形	U 字状	43	27	28	12.83				
P6201	円形	U 字状	22	20	18	12.96				

SB7820 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	7ZZ・A		3 間（4.23m）以上		1 間（3.51m）以上		N － 1° － E	14.85㎡以上		側柱型・南北棟（西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6205	円形	U 字状	22	18	43	12.71	12			

中世　A 区　掘立柱建物（3）

SB7820 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P6260	円形	U 字状	26	24	41	12.74			SE6209 が新	
P6117	円形	U 字状	12	12	6	13.06				
P6118	円形	U 字状	26	22	6	13.07				
P6120	円形	弧状	24	21	34	12.88				
P6140	円形	U 字状	26	23	24	12.87				
P6170	円形	V 字状	(12)		41	12.67				

SB7821	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	8B、9A・B・C、10B		5 間（10.02m）		1 間（4.43m）		N - 84° - E	44.4㎡（80.0㎡）以上		三面廂付梁間一間型・ 東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P6309	円形	U 字状	24	22	43	12.61				
P6337	円形	台形状	46	39	31	12.71				
P6341	円形	台形状	42	41	30	12.81				
P6342	楕円形	弧状	32	21	13	12.93				
P6343	円形	弧状	32	28	13	12.96				
P6350	円形	箱状	28	26	24	12.85		砥石（277）		根石
P6299	円形	U 字状	36	35	22	12.93				
P6411	円形	弧状	30	26	11	13.00			SB7811-P6412 が旧	
P6423	円形	弧状	45	44	12	12.85			SB7811-P6424 が旧	
P6451	円形	階段状	58	55	34	12.78	13			SB7811 と共有
P6449	円形	弧状	28	24	8	12.93				SB7811 と共有
P6291	楕円形	U 字状	79	51	56	12.62	12			SB7811 と共有 床面に根固め石
P6345	円形	階段状	53	47	55	12.52				
P6329	円形	U 字状	28	28	22	12.79				
P6336	円形	U 字状	20	20	10	12.93				
P6335	円形	弧状	31	30	12	12.96				
P6333	円形	U 字状	26	22	24	12.83				
P6311	円形	V 字状	18	18	20	12.87				
P6348	円形	V 字状	20	20	13	13.00				
P6347	楕円形	弧状	28	20	10	13.04				
P6403	円形	U 字状	32	28	18	12.99				
P6433	円形	U 字状	26	26	17	13.01				
P6461	円形	U 字状	34		24	12.87			SB7811-P6445 と新旧不明	
P6442	円形	U 字状	(47)	42	61	12.49				SB7811 と共有
P6450	円形	階段状	49	48	36	12.64	12			SB7811 と共有
P6289	円形	弧状	32	(25)	24	12.94			SB7811-P6429 が旧	
P6292	不整形	箱状	88	76	62	12.47	12			SB7811 と共有 床面に根固め石
P6344	円形	U 字状	29	26	34	12.64				
P6346	円形	弧状	31	30	22	12.85				

SB7825	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	8A		3 間（4.40m）		1 間（4.24m）		N - 19° - W	18.7㎡		方形型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P6252	円形	U 字状	24	21	42	12.70				
P6242	円形	弧状	22	18	11	12.99				
P6239	楕円形	弧状	38	30	14	12.88				
P6233	円形	U 字状	31	25	27	12.80	12			
P6234	円形	U 字状	24	22	36	12.85	10			
P6244	楕円形	U 字状	24	19	57	12.52			P6243 が旧	

SB7826	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	10・11A・B		2 間（3.84m）		1 間（2.46m）		N - 32° - W	9.4㎡		胴張型の梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7270	円形	U 字状	23	21	37	12.89				
P7269	楕円形	箱状	46	36	48	12.79	13			
P7266	円形	U 字状	42	37	50	12.81	11			
P7271	円形	U 字状	44	44	52	12.76				
P7245	円形	U 字状	31	30	19	13.09				
P7257	円形	弧状	22	20	11	13.20				
P7264	楕円形	弧状	36	28	15	13.15				

SB7827	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	13D		2 間（3.76m）		2 間（3.23m）		N - 68° - E	12.1㎡		胴張型の方形型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7203	円形	階段状	48	41	45	12.98	8		P7212 と新旧不明	
P7083	円形	V 字状	31	31	48	12.95				
P7074	円形	V 字状	31	30	48	12.96	7			
P7063	円形	V 字状	27	26	32	13.10				
P7053	円形	V 字状	44	40	38	13.08				

中世　A 区　掘立柱建物（4）

SB7830	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	9・10C・D		3 間（7.36m）		3 間（4.60m）		N － 82° － E	60.7㎡		側柱型？建物・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P6420	円形	階段状	32	30	40	12.82	12			
P6417	円形	U 字状	32	32	58	12.67	11			
P6415	円形	U 字状	42	36	48	12.72	14			
P6430	円形	階段状	26	26	47	12.76	7			
P8633	円形	U 字状	38	32	48	12.78				
P6432	円形	U 字状	41	36	35	12.82	16			
P6435	円形	U 字状	34	32	56	12.84				
P6439	円形	U 字状	34	30	41	12.76				
P6454	円形	U 字状	38	36	39	12.79				
P6428	円形	階段状	38	34	58	12.59	10			
P6414	円形	U 字状	38	34	30	12.86	8			
P6407	円形	U 字状	31	30	51	12.64	12			SB7811 と共有
P6440	円形	U 字状	34	28	40	12.83	12			SB7811 と共有
P6434	楕円形	U 字状	28	22	56	12.65	10			

中世　A 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
6189	6ZZ23、6A3	不整形	台形状	1.46	1.05	1.22	11.58	素掘り			SX6190 が旧	
6209	7ZZ23、7A3	円形	U 字状	1.18	1.14	1.89	11.27	素掘り		珠洲焼片口鉢（82）・甕（83）・壺 R 種（84）、井戸側板（337・338）	SB7820-P6260 が旧	
6237	7A9	円形	U 字状	1.13	1.09	1.62	11.51	素掘り	細砂層	珠洲焼片口鉢（81）		
6278	8C14・15・19・20	楕円形	U 字状	1.90	1.35	2.32	10.78	素掘り	砂層	珠洲焼甕（85）、下駄歯（341）		
6288	8B15・20	楕円形	U 字状	1.21	0.92	1.76	11.30	素掘り		箸状木製品（339）		
6419	9C5	円形	U 字状	1.01	0.94	1.10	12.08	素掘り				
6431	10D18	楕円形	台形状	(0.85)	0.74	0.66	12.50	素掘り	砂層	砥石？（274）		
6441	10B16	円形	U 字状	0.68	0.66	1.36	11.82	素掘り			SD6306 が旧	
7133	12C23、12D2・3	円形	U 字状	1.09	0.96	1.56	11.88	素掘り		珠洲焼甕（88）、砥石（275）		
7180	12D16・17	円形	U 字状	1.71	1.52	1.70	11.70	素掘り		珠洲焼片口鉢（86）		
7242	10B13・14	円形	U 字状	1.15	0.96	1.67	11.58	素掘り	砂層			
7256	10B22	楕円形	U 字状	0.73	0.60	1.08	12.12	素掘り	砂層			
7311	11D11・16	円形	箱状	1.07	1.05	1.15	12.13	素掘り				
7320	10D15、11D11	円形	U 字状	0.97	0.88	1.69	11.56	素掘り		箸状木製品（340）		
7323	11C13・18	円形	U 字状	1.28	1.14	1.85	11.40	素掘り		珠洲焼片口鉢（87）、曲物底板（343）・漆器皿（344）		
8529	11D3	楕円形	漏斗状	1.42	1.12	1.66	11.20	素掘り	砂礫層	石鏃（46）、珠洲焼壺（89）、須恵器甕(90)、加工材(345)・漆器椀（346）・白木椀（347）・曲物		

中世　A 区　土坑（SK）（1）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
6063	5C5・10、6C1・6	楕円形	弧状	0.71	0.44	0.13			
6101	6B23、6C3	楕円形	半円状	1.56	0.76	0.16			
6130	7B2	楕円形	弧状	0.66	0.44	0.11			
6131	7B2	楕円形	弧状	0.64	0.42	0.08			
6247	7A19・20・24・25	円形	台形状	1.12	1.06	0.24		SD6470、SX6245・6246 が旧	
6274	7C1・2・6・7	方形か	台形状		2.35	0.39	珠洲焼壺？（91）	SD6001 が新	
6452	10A8・9	楕円形か			0.28	0.06		SK7401 と新旧不明	
7028	12C25	楕円形	弧状	0.50	0.32	0.12			
7040	12C9	楕円形	弧状		0.57	0.14		SD7029 が新 P7041 と新旧不明	
7050	12C7	楕円形	弧状	0.64	0.37	0.05			
7055	12C19	円形	半円状	0.69	0.61	0.27			
7058	12D15、13D11	楕円形	弧状	0.81	0.49	0.14			
7066	12C15・20	楕円形	台形状	1.57	0.83	0.40		SD7036 が旧	
7067	13D7・8・12・13	楕円形	弧状	0.69	0.47	0.15			
7068	12D15	円形	弧状	(0.85)	0.70	0.11		P7069 が新	
7075	13D18	円形	弧状	0.71	0.67	0.07			
7095	12C11・12	楕円形	台形状	0.77	0.54	0.16			
7128	12C17	楕円形	半円状	0.61	0.42	0.24			
7134	12C21	楕円形	弧状	0.60	0.46	0.13			
7138	11C25、12C21、12D1	楕円形	台形状	1.92	1.15	0.23		P7137 が新	
7184	12D14	円形	台形状	(0.90)	0.80	0.16		P7177 が新	
7192	12D20・25	楕円形	台形状	1.20	0.60	0.23			
7193	13D16	楕円形	弧状	0.63	0.51	0.19			
7195	12D8	楕円形	半円状	0.83	0.51	0.28			
7198	12D24・25	円形		(0.74)	0.67	0.21			
7206	13D22	円形	弧状	(1.26)	(1.06)	0.37			
7210	13D20・25	円形	弧状	0.72	0.62	0.10			
7211	13D25	円形か	台形状	0.72		0.24			

中世　A 区　土坑（SK）（2）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
7213	13D18・19	楕円形	弧状	0.62	0.42	0.16			
7217	11D18	楕円形	弧状	1.20	0.92	0.08	珠洲焼甕（92）	P7325・7326 と新旧不明	
7304	11D20、12D16	楕円形			1.90	0.70			倒木痕か
7309	11D2・7	楕円形	弧状	0.89	0.43	0.14			
7314	12D6	不整形	半円状	1.10	0.77	0.37			
7327	11D1・2	楕円形	弧状	1.03	0.73	0.08	珠洲焼片口鉢（93）	P7324 が新	
7340	10B24	楕円形	弧状	0.59	0.32	0.11			
7401	10A9	円形か			0.30	0.04		SK6452 と新旧不明	

中世　A 区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
6001	5C・D、6C、7B・C、8A・B、9・10A、11・12A・B、13A	N-4°-W	半円・台形状	91.13 以上	2.80 以上	0.36	土師質土器皿、珠洲焼壺か甕・片口鉢、施釉陶器壺	SE7534、SK6274、SD6002・6306・6470・7260・7514、P6351・7273・7533 が旧 SD7274 と新旧不明	近世以降
6002	4・5C・D		台形状	14.96 以上	2.72 以上	1.30		SD6001 が新	
6003	3ZZ・A	N-34°-W	弧状	6.42 以上	3.00 以上	0.36	硯（279）、杭（342）		
6004	3ZZ		弧状	2.78 以上	1.90 以上	0.17			
6109	6D	N-83°-W	弧状	4.68 以上	1.62	0.25			
6132	7A・B	N-67°-W	弧状	11.95	0.42	0.13	縄文土器	P6224 が新 P6207 が旧	
6306	9A・B、10B	N-81°-W	弧状	13.10	0.24	0.08		SD6001、SE6441 が新	
6421	9・10C	N-58°-W	弧状	3.11	0.35	0.06			
6470	7ZZ・A・B	N-68°-W	半円・台形状	18.97 以上	0.52	0.44		SB7818-P6226・6261、SK6247、SD6001、P6222・6223・6227、SX6245 が新	
7038	12・13C	N-23°-E	弧状	3.04	0.18	0.05		P7020 が新	
7132	11B・C	N-56°-W	弧状	8.35	1.73	0.12	珠洲焼片口鉢（94）		
7260	11B	N-60°-W	弧状	2.58 以上	0.48	0.12		SD6001 が新 P7272 が旧	
7305	11D	N-67°-E	弧状	1.92	0.26	0.06			
7514	10・11B	N-25°-E	弧状	6.77	0.72	0.10	珠洲焼片口鉢（119）	SD6001 が新	近世か
7274	10A・B	N-86°-E		5.44	0.31	0.07		SD6001、P8621 と新旧不明	近世か
7402	10A	N-16°-E		1.40	0.22	0.14			

中世　A 区　ピット（P）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
6204	8A3	円形	U 字状	34	34	46	珠洲焼片口鉢（95）		
6222	7A10	円形	階段状	36	34	33	珠洲焼片口鉢（96）	SD6470 が旧	
7179	12D8	円形	U 字状	41	35	51	砥石（278）		

中世　A 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
6009	4ZZ19・24	不整形	弧状		0.59	0.07			
6035	5C9・14	楕円形	弧状	0.63	0.34	0.12			
6045	5C9	楕円形	弧状	0.49	0.28	0.10			
6047	5B16	楕円形	階段状	0.58	0.46	0.22			
6097	5A24、5B2・3・4・7・8	不整形	弧状	6.30	0.95	0.15			
6190	6A3	楕円形		0.48	0.42	0.04		SE6189 が新	
6031	5C7	円形		0.42	0.32	0.04			
6042	5B16	不整形		0.38	0.22	0.04			
6062	5B23、5C3・4	不整形	弧状	1.60	1.34	0.12			
6208	8A11・12	不整形		0.66	0.52	0.15			
6245	7A19・24	長方形か	弧状		0.70	0.29		SK6247 が新	
6246	7A20・25	長方形か	弧状		0.72	0.30		SK6247 が新	
6258	7A11	不整形		0.66	0.60	0.12			
7166	11D5、12D1	長方形	台形状	1.96	1.59	0.21		P7164・7165 が新	
7235	10A21	不整形	弧状	1.36	0.56	0.06			
7241	10B7・12	円形	弧状	1.10	1.07	0.48			
7265	11B2	楕円形	弧状	0.64	0.34	0.08			
7346	10C25、11C16・17・21・22、10D25、11D1・2	不整形	弧状	3.99	3.15	0.11			

中世　AB 区　掘立柱建物（1）

SB7604 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12 ～ 14B・C		5 間（11.00m）		3 間（7.84m）		N - 12° - W	86.2㎡（112.2㎡）		二面廂付複合型・南北棟（SE7602 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8675	円形	U 字状	39	34	50	12.92	10			
P8676	円形	U 字状	36	34	54	12.86	10		P7699 が旧	柱痕：底面方向へ細い
P8677	楕円形	U 字状	39	32	56	12.90	12			柱痕：漏斗状
P8678	円形	U 字状	37	36	58	12.84	13			
P7694	円形	U 字状	32	28	46	12.94	8			柱痕：底面方向へ細い

中世　AB 区　掘立柱建物（2）

SB7604 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7079	楕円形	漏斗状	56	39	48	12.89	12			柱痕：底面方向へ細い
P7510	円形	U 字状	(40)	36	64	12.85				
P7632	円形	U 字状	36	35	48	12.94	14			柱痕：底面方向へ太い
P8666	円形	U 字状	41	40	44	12.96	14			
P8665	楕円形	U 字状	45	38	57	12.90	20			柱痕：若干斜位
P8664	円形	U 字状	38	32	52	12.93	16			
P8669	方形	U 字状	34	32	61	12.88				
P8673	円形	U 字状	32	30	30	13.16	10			
P8674	楕円形	U 字状	37	30	28	13.16		珠洲焼壺（114）		
P8668	方形	U 字状	35	31	65	12.79	10			柱痕：漏斗状
P7669	円形	U 字状	32	31	40	13.05	12			柱痕：漏斗状
P7674	楕円形	U 字状	34	28	43	12.96				
P7677	円形	U 字状	28	26	28	13.12				
P7024	円形	U 字状	24	20	56	12.90	10			
P7398	方形	U 字状	18	18	24	13.09				
P7022	楕円形	U 字状	32	24	48	12.93			SD7023 が旧	
P7503	楕円形	U 字状	54	44	44	13.05	10			
P7381	円形	U 字状	50	42	54	12.88	10			柱痕：底面方向へ細い
P7367	円形	U 字状	42	38	52	13.02				
P8659	円形	U 字状	39	37	54	12.92		珠洲焼片口鉢（113）		
P8660	円形	階段状	40	35	56	13.02	14			柱痕径は底面から推定
P8661	円形	U 字状	41	35	49	13.01	14			
P8681	円形	U 字状	28	26	38	13.00	14			
P8682	円形	U 字状	32	30	50	12.96	14			
P8683	円形	階段状	47	43	61	12.81	10			柱痕：漏斗状
P8684	楕円形	U 字状	38	29	44	12.90				炭化材
P7691	円形	U 字状	29	29	44	12.98	16			
P7361	円形	U 字状	34	30	28	13.09				
P7351	楕円形	U 字状	36	16	36	13.03				
P8672	円形	U 字状	30	26	50	13.03	10			柱痕：底面方向へ細い
P8671	円形	U 字状	33	31	56	12.91	14			
P8670	円形	U 字状	32	30	39	13.11				
P8662	円形	U 字状	28	24	43	13.08				
P7648	円形	階段状	34	34	40	13.10	13			柱痕径は底面から推定
P7662	楕円形	U 字状	37	29	44	12.90				
P7009	楕円形	V 字状	32	20	32	13.08				
P7006	円形	U 字状	32	28	36	13.10	8			
P7015	円形	U 字状	28	28	32	13.10				

SB7681	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	13B・C、14B		4 間（8.56m）		1 間（3.66m）		N － 7° － W	31.3㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7758	円形	階段状	35	33	53	12.92	18			
P7770	楕円形	U 字状	33	26	78	12.64	12			
P7711	円形	U 字状	35	34	59	12.84	10			柱痕：漏斗状
P7667	円形	U 字状	28	26	47	12.96	10			
P7607	楕円形	U 字状	36	(30)	40	13.00	8		SB7681-P7678 が新	
P7678	円形	階段状	25	24	37	13.01			SB7681-P7607 が旧	
P8650	円形	弧状	(20)	20	24	13.16				
P7653	楕円形	U 字状	37	29	40	13.04	10			
P7651	円形	U 字状	33	32	70	12.79				
P8663	楕円形	U 字状		29	34	13.10			SB7681-P8694 が新	
P8694	円形	U 字状		31	51	12.97	10		SB7681-P8663 が旧	
P7702	円形	階段状	35	34	65	12.80	10			柱痕：斜位
P7619	円形	U 字状	32	32	60	12.86	16			
P7709	円形	U 字状	24	22	44	13.04	14			

SB7682	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	13C、14B・C		3 間（7.64m）		1 間（4.42m）		N － 9° － W	33.8㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7784	円形	U 字状	33	31	46	12.98			SE8506 が旧	
P8241	円形	階段状	30	28	42	12.98	12		SK8240 が旧	柱痕は底面形から推定
P8235	円形	U 字状	27	27	32	13.05				
P8230	円形	U 字状	26	25	33	13.10	14			
P7661	楕円形	U 字状	32	26	34	13.12	14			
P8503	楕円形	U 字状	31	25	40	13.02				
P7720	不整形	弧状	51	35	28	13.12				
P7714	円形	U 字状	23	22	34	13.06				
P8567	楕円形	U 字状	18	14	10	13.37				
P7750	円形	U 字状	20	19	32	13.08				
P7734	方形	U 字状	26	23	68	12.72				

中世　AB 区　掘立柱建物（3）

SB7683	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	13・14C		3 間（6.44m）		1 間（3.24m）		N － 11° － W	20.9㎡		胴張型の梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8247	円形	U 字状	27	24	25	13.11	12			
P8231	円形	U 字状	26	23	24	13.10				
P7775	円形	台形状	26	22	14	13.22				
P8519	円形	U 字状	24	22	30	13.02				
P7759	楕円形	台形状	39	28	35	13.03				
P7685	楕円形	U 字状	30	25	28	13.06				
P7723	円形	階段状	25	21	37	13.08	6			
P7732	円形	U 字状	（20）	20	24	13.11				
P7774	円形	U 字状	20	20	34	13.07				
P7717	円形	U 字状	22	20	32	13.02				

SB7686	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	15C		2 間（1.97m）		1 間（1.80m）		N － 84° － E	3.5㎡		方形型・東西棟（SE7789 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8260	楕円形	弧状	32	20	16	13.24				
P8016	円形	U 字状	28	28	32	13.08	10			
P8142	円形	U 字状	24	24	18	13.22				
P8147	円形	U 字状	24	22	18	13.23	10			柱痕：ブロック状
P8149	楕円形	U 字状		34	22	13.18			SK7791 が新	
P8498	円形	弧状	20	16	8	13.28			SK7791 が新	
P8485	円形	漏斗状	26	（24）	52	12.84			SE7790 が新	
P8154	円形	U 字状	28	28	36	13.04	10			柱痕：底面方向へ細い

SB7690	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	14A・B		3 間（4.75m）		1 間（3.00m）		N － 82° － E	14.3㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8688	円形	U 字状	34	29	47	12.98	12			
P8689		U 字状	24		30	13.16				
P8690	楕円形	階段状	30	22	51	12.97				
P8691	円形	U 字状	23	（23）	53	12.95				
P8685	円形	U 字状	30	27	37	13.09	12			柱痕：斜位
P8686	円形	U 字状	31	27	51	12.97				
P8687	方形	U 字状	24	24	38	13.08				
P8302	円形	U 字状	30	27	53	12.95	20			

SB7745	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	13C、14B・C		3 間（7.68m）		1 間（3.68m）		N － 7° － W	28.3㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7778	楕円形	U 字状	42	32	52	12.88	15			
P7733	楕円形	漏斗状		32	63	12.73			SB7745-P8500 が新	
P8500	円形	U 字状	33	29	42	12.89			SB7745-P7733 が旧	
P7693	円形	U 字状	44	40	58	12.79	12			
P8518	楕円形	U 字状	37	30	46	12.83	14			
P8513	楕円形	階段状	44	33	48	12.96	10			
P7679	楕円形	階段状	43	28	43	12.95	14			
P7719	楕円形	階段状	43	34	46	12.94	12			柱痕径は平面から推定
P7772	楕円形	階段状	44	36	62	12.80				
P8505	楕円形	U 字状	26	20	22	13.20				

SB7816 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12・13B・C		4 間（9.82m）		1 間（4.73m）		N － 75° － E	46.4㎡（74.1㎡）		胴張型の三面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7525	円形	U 字状	27	26	38	12.96				
P7370	楕円形	U 字状	45	37	61	12.80	8			
P7368	円形	U 字状	35	35	56	12.94	9			
P7382	楕円形	U 字状	50	41	61	12.88				
P7530	円形	U 字状	35	30	47	13.02				
P7013	円形	漏斗状	38	32	67	12.76	6			
P7502	円形	弧状	（48）	41	42	12.96	16			
P7509	円形	U 字状	31	27	72	12.70				
P7385	円形	漏斗状	51	49	62	12.81	9			
P7393	円形	漏斗状	44	41	46	12.96				
P7384	楕円形	U 字状	46	39	50	12.96	5			
P7522	円形	U 字状	31	28	33	13.01	10			
P7365	楕円形	U 字状	50	35	28	13.12				
P7364	円形	U 字状	30	30	24	13.14				
P7366	楕円形	U 字状	45	32	28	13.11	6			
P7638	円形	U 字状	36	32	58	12.88	14			

中世　AB 区　掘立柱建物（4）

SB7816 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7039	円形	U 字状	22	22	48	12.93				
P7016	円形	U 字状	21	19	32	13.06				
P7007	円形	U 字状	23	23	27	13.14				
P7025	円形	U 字状	24	22	27	13.10			P7014 が新	
P7513	円形	U 字状	34	31	42	12.88	6			
P7508	方形	弧状	32	28	21	13.14				
P7528	円形	U 字状	33	28	28	13.06				

SB7822	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12A		2 間（3.18m）		3 間（2.13m）		N － 70° － E	6.8㎡		胴張型の側柱型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7461	円形	U 字状	28	28	47	12.84	12			
P7418	円形	U 字状	30	25	30	13.08		珠洲焼片口鉢（119）		
P7417	円形	U 字状	26	23	68	12.71	5			柱痕：底面方向へ細い
P7416	方形	U 字状	25	22	59	12.79	12			
P7403	円形	U 字状	49	42	45	12.93	15			
P7419	円形	階段状	37	34	65	12.73				
P7425	円形	U 字状	22	20	40	13.00				
P7422	円形	U 字状	22	20	36	13.04				

SB7823	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	11・12A		1 間（3.90m）		3 間（3.22m）		N － 78° － E	12.56㎡		胴張型の側柱型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7443	円形	U 字状	25	20	38	12.92	9			
P7434	円形	U 字状	23	22	60	12.71	9			
P7411	楕円形	U 字状	36	26	58	12.86	9			
P7439	円形	U 字状	30	29	50	12.92	9			
P7437	円形	U 字状	27	27	58	12.78	9			
P7438	円形	U 字状	25	24	50	12.98	6			柱痕：底面方向へ細い
P7420	円形	U 字状	23	20	38	13.00	6	砥石（289）		

SB7824	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12A		1 間（3.10m）		1 間（2.32m）		N － 89° － E	7.19㎡		胴張型の側柱型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7406	円形	U 字状	31	29	41	13.00	9			
P7457	楕円形	台形状	28	23	36	13.00	9			
P7445	円形	U 字状	32	28	36	13.08				
P7447	楕円形	U 字状	33	28	40	12.96	9			
P7429	楕円形	U 字状	36	26	43	12.88	9			

SB7829	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	12・13B		1 間（6.78m）以上		1 間（2.32m）以上		N － 89° － E			側柱型・東西棟（北東側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P7355	円形	階段状	34	30	47	13.04	7			
P7369	円形	階段状	37	35	41	13.01	7			
P7360	円形	U 字状	35	34	65	12.78				

SB8499	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	14B、15B・C		3 間（6.00m）		1 間（3.08m）		N － 79° － E			梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P8000	円形	U 字状	32	30	45	13.02				
P8004	円形	U 字状	35	33	45	13.04	8			柱痕：底面方向へ細い
P8012	円形	U 字状	32	29	37	13.06	9			
P8014	円形	U 字状	30	28	60	12.82	10			
P8259	円形	U 字状	31	28	38	13.02	7			柱痕：底面方向へ細い
P8021	円形	U 字状	30	26	47	13.00	12			
P8009	円形	U 字状	30	26	43	13.00				
P8484	円形	U 字状	25	24	46	12.99	10			

SB8540 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	14・15C		3 間（6.26m）		1 間（3.28m）		N － 84° － E	20.5㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)	柱痕推定径(cm)	出土遺物	切り合い	備考
P8483	円形	U 字状	33	29	55	12.88	8			柱痕：底面方向へ細い
P8257	円形	U 字状	29	27	45	12.99				
P8156	円形	U 字状	28	27	47	12.93	10			
P8486	円形	弧状	23	18	13	13.23			SE7790 と新旧不明	
P8151	円形	U 字状	22	21	44	12.94				
P8181	楕円形	U 字状	32	27	30	13.10	12			

中世　AB 区　掘立柱建物（5）

SB8540　その２

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8584	方形	U 字状	21	21	36	13.08	12			
P8170	円形	U 字状	24	24	18	13.28				
P8251	円形	U 字状	38	34	52	12.92	10			
P8490	楕円形	U 字状	28	23	23	13.21				
P7727	円形	U 字状	32	26	34	13.00			SK7687 が新	
P8523	円形	U 字状	29	27	45	13.01	10			柱痕 : 底面方向へ細い

SB8695	位置	桁行	梁行	桁行方向	床面積（敷地面積）	構造
	14C・D	2 間（3.98m）	1 間（2.84m）	N - 10° - W	11.3㎡	胴張型の側柱型・南北棟

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P7659	円形	U 字状	28	26	36	13.04				
P8493	円形	台形状	26	24	22	13.22	8			
P8592	円形	U 字状	(22)	19	40	13.04				
P8521	円形	U 字状	22	20	44	13.05				
P7726	楕円形	U 字状	22	16	36	13.09				
P8495	円形	U 字状	24	20	54	12.88				

中世　AB 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
7409	12A13・14	円形	U 字状	1.09	1.03	2.06	11.35	素掘り		珠洲焼片口鉢（117）		
7534	12A24、12B4	楕円形	V 字状	1.22	1.02	1.55	11.49	素掘り	砂質土	砥石（283）	SD6001 が新	
7602	13B18	円形	漏斗状	1.57	1.40	1.73	11.74	素掘り	礫層	珠洲焼片口鉢（113）、ガラス質滓（271）、木片、骨片		SB7604 に伴う
7606	14B13・14	円形	台形状	1.76	1.56	1.88	11.58	素掘り	礫層	木片、骨片		
7608	13C3	円形	漏斗状	1.40	1.28	2.09	11.50	素掘り	礫層	縄文土器深鉢（25a）、珠洲焼甕か壺、板材	SB7816 が旧	
7629	13B11	円形	U 字状	(0.70)	0.68	0.96	12.46	素掘り	砂質シルト			
7641	13C20・25	円形	U 字状	1.26	1.15	1.80	11.64	素掘り	礫層	用途不明部材（353）	P8245 が旧	
7642	13D5、14D1	円形	U 字状	1.22	1.14	1.87	11.58	素掘り	粘土質間層	白磁腰折皿（115）、砥石（282）、櫂（348）・下駄（349）・漆器椀（350）・用途不明部材（351・352）		
7692	14C9・14	円形	U 字状	1.19	1.03	2.03	11.44	素掘り	礫層	白磁椀（116）、珠洲焼片口鉢、木片	P7676 が新	
7777	14B24、14C4	円形	漏斗状	1.77	1.60	2.07	11.36	素掘り	礫層	人形(354)・箸状木製品(355～357)・漆器小皿（358）・曲物底板（359）、骨片		底面直上に円礫を充填する
7789	15C13	円形	U 字状	1.00	0.96	1.33	12.10	素掘り	粘質シルト		P8264 が旧	SB7686 に伴う
7790	15C12・13・18	円形	U 字状	0.92	(0.91)	2.17	11.20	素掘り	砂層？砂礫層	砥石（285）、曲物（361）・曲物部材（362・363）・漆器椀（364）、骨片	SB7686-P8485、SE8381 が旧 SB8540-P8486 と新旧不明	
8381	15C12・13・18	円形	U 字状	0.74		1.62	11.74	素掘り	粘質シルト	珠洲焼甕（118）、砥石（284）、枡（360）	SE7790、SK7791 が新	
8506	14C8・9	円形	漏斗状	1.78	1.60	1.86	11.64	素掘り	礫層	砥石（286・287）	SB7682-P7784、P7735・8249 が新	

中世　AB 区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
7511	12B8・9・13・14	方形	弧状	1.26	1.15	0.11			
7526	12C10、13C6	楕円形	台形状	(0.97)	0.70	0.20			
7601	13B5・10、14B1・6	方形	台形状	2.60	2.42	0.46		SK7696 が新 P7644 が旧	方形土坑
7622	13A18・23	楕円形	弧状	1.04	0.63	0.17			
7635	13B7・8	長方形	弧状	1.54	1.06	0.16			
7687	14C15	楕円形	弧状	1.18	0.82	0.12		SB8540-P7727 が旧	
7696	13B10	楕円形	弧状	1.30	1.03	0.34	珠洲焼壺（120）	SK7601 が旧	
7700	14B7・12	円形	台形状	1.80	1.68	0.58		P7620 が新	
7764	14B20	楕円形	弧状	1.03	0.80	0.11			
7780	14C3	楕円形	台形状	0.82	0.63	0.17			
7791	15C13・18	楕円形	弧状	0.96	0.76	0.22		SB7686-P8149・8498、SE8381 が旧	
8240	14C8・13	楕円形	弧状	1.75	1.15	0.04		SB7682-P8241 が新	

中世　AB 区　溝（SD）（1）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			底面標高（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ	西	中	東			
7023	13C	N-16° -W	半円状	3.27	0.26	0.20					SB7604-P7022 が新	
7029	12B・C、13C・D、14D	N-73° -E	弧状	30.04	0.36	0.16	13.27	13.33	13.30		SK7040、P7033 が旧 P7712 が新	
7036	12・13C	N-61° -E	弧状	2.10	0.26	0.07					SK7066 が新	
7084	13C・D、14D	N-73° -E	弧状	14.40	0.42	0.12		13.33	13.30		SD7787 が新	
7672	12A	N-2° -E	弧状	1.34	0.22	0.06						
7680	12A	N-5° -E	弧状	1.80	0.36	0.16						

中世　AB 区　溝（SD）（2）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			底面標高（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ	西	中	東			
7787	14D、15C･D、16B･C、17A・B	N-14°-W	弧状	46.20以上	0.84	0.20	13.42	13.35	13.25	磨石類（63）・砥石（290）、縄文土器	P7950・7954・8532 が新 SD7084、P7705・7895・7900・7901・7902・7904・7916・7923・8167・8443・8489、SX7869 が旧	
7788	14D、15C･D、16B･C、17A・B、18A	N-13°-W	台形状	47.00以上	0.60	0.30	13.11	13.17	13.19		SK7793・8209、P7944 が新 SD8421、P8222・8564 が旧	
8243	14D	N-51°-E	弧状	1.80以上	0.66	0.12	13.24	13.10	13.20			
8421	17A・B、18A	N-12°-W	弧状	17.50以上	0.40	0.15	13.39	13.33			SD7788 が新	

中世　AB 区　ピット（P）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
7373	12B5	円形	U 字状	30	30	47	砥石（288）		
7956	16C2	円形	弧状	32	30	19	縄文土器（28）		

中世　AB 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
7849	16A21・22	長楕円形	弧状	1.90	0.51	0.14			
7869	17B6・11	楕円形	U 字状	0.39	(0.26)	1.24		SD7787 が新	

中世　B 区　掘立柱建物（1）

SB8024	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	16・17D・E		3 間（5.20m）		1 間（3.03m）		N - 75° - E	15.8㎡		梁間一間型・東西棟 (SK8265 を伴う)
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8268	円形	V 字状	28	24	58	12.97	8			柱痕 : 漏斗状
P8340	円形	U 字状	31	29	40	13.02				
P8276	円形	U 字状	26	(24)	32	13.11				
P8267	円形	U 字状	28	27	45	13.02	12			
P8324	方形	U 字状	24	24	45	13.04				
P8056	円形	U 字状	24	(20)	45	13.06				

SB8025	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	17・18D・E		5 間（11.53m）		1 間（3.80m）		N - 74° - E	43.8㎡		梁間一間型・東西棟 (SK8331・SA8412 を伴う)
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8337	円形	U 字状	33	30	58	12.92				SB8026 と共有
P8285	円形	U 字状	44	40	49	13.06				
P8300	円形	U 字状	36	35	54	12.96	10		SB8025-P8320 が旧	柱痕 : 漏斗状
P8320	円形			19	13	13.38			SB8025-P8300 が新	
P8327	楕円形	階段状	42	34	64	12.86	14		SK8309 が旧	
P8310	楕円形	U 字状	(46)	36	54	12.96	14		SB8026-P8311 が旧	柱痕 : ブロック状
P8316	円形	U 字状	39	37	63	12.88				
P8408	円形	階段状	43	43	65	12.86		硯（293）		
P8283	円形	U 字状	33	28	55	12.94	10		SB8025-P8289 が旧	
P8289	円形	U 字状		21	16	13.34			SB8025-P8283 が新	
P8280	楕円形	U 字状	52	36	70	12.85	10			
P8334	円形	V 字状	30	27	70	12.84	8			SB8026 と共有
P8293	楕円形	U 字状	42	34	57	12.99				

SB8026	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	17D・E、18D		3 間（8.00m）		1 間（4.09m）		N - 74° - E	32.7㎡（59.3㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟 （南東側は調査区外　SK8331 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8288	楕円形	V 字状	48	35	67	12.87	8			柱痕 :V 字状
P8292	楕円形	U 字状	40	32	48	13.05				
P8304	円形	U 字状	45	38	46	13.06	11			
P8311		U 字状		41	54	12.98			SB8025-P8310 が新	
P8287	円形	U 字状	42	36	55	12.96				
P8279	方形	U 字状	33	31	56	12.94				
P8333	方形	U 字状	33	29	57	12.92				
P8338	楕円形	U 字状	26	(20)	42	13.04				
P8322	円形	U 字状	32	28	44	13.06	12			
P8306	楕円形	U 字状	44	34	57	12.94				
P8278	円形	弧状	29	25	20	13.17			SK8314 が新	
P8318	楕円形	漏斗状	47	38	40	13.12				
P8544	円形	U 字状	(26)	25	39	13.07	8			
P8277	楕円形	U 字状	30	24	46	13.04	14			
P8270	楕円形	U 字状	29	23	50	13.04				
P8334	円形	V 字状	30	27	70	12.84	8			SB8025 と共有
P8336	楕円形	U 字状	33	24	59	12.94				
P8337	円形	U 字状	33	30	58	12.92				SB8025 と共有

中世　B 区　掘立柱建物（2）

SB8539	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	17B、18B・C		4 間（6.77m）		1 間（4.03m）		N － 74° － E	27.3㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8537	方形	U 字状	26	24	35	13.10	12			
P8533	円形	U 字状	26	25	32	13.18	10			
P8534	楕円形	U 字状	23	19	25	13.28	10			
P8466	方形	U 字状	26	22	30	13.26				
P8470	円形	U 字状	26	25	26	13.30				
P8536	楕円形	U 字状	28	23	38	13.15				
P8452	方形	U 字状	27	25	30	13.18				
P8535	方形	U 字状	22	21	14	13.36				
P8438	楕円形	U 字状	32	25	36	13.14				
P8439	円形	U 字状	32	28	62	12.87	8			
P8468	楕円形	V 字状	35	28	64	12.86	10			
P8437	円形	V 字状	32	32	54	12.96	10			柱痕：底が尖る V 字状
P8538	円形	U 字状	30	30	38	13.10				
P8436	楕円形	U 字状	27	（22）	22	13.20				

中世　B 区　杭（柵か）（SA）

SA8411	位置		全長	間尺	主軸方向					
	16D、17C		7.44m		N － 12° － W					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8369	円形	U 字状	26	26	24	13.21				
P8376	円形	U 字状	23	（22）	26	13.19				
P8368	円形	U 字状	22	（20）	33	13.10				
P8365	円形	台形状	26	24	15	13.28				
P8361	円形	U 字状	24	（21）	30	13.18				
P8362	楕円形	台形状	20	16	9	13.31				
P8377	楕円形	階段状	28	26	14	13.35				
P8379	円形	台形状	22	20	12	13.30				

SA8412	位置		全長	間尺	主軸方向					
	17D		4.36m	1.94、2.10m	N － 11° － W					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P8387	円形	U 字状	34	32	54	13.00				
P8396	円形	弧状	30	28	9	13.40				
P8335	方形	U 字状	26	22	52	12.96				

中世　B 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
8353	17C25、17D5、18C21、18D1	円形	漏斗状	1.60	1.47	2.03	11.44	素掘り	礫層	曲物側板（365）・漆器椀（366 ～ 368）・曲物	SK8366 が旧	

中世　B 区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
7793	15D9	楕円形	台形状	0.77	0.65	0.20	骨片	SD7788 が旧	
8209	15D13・18	円形	弧状	1.24	1.00	0.12		SD7788 が旧	
8265	16D20・25、17D16・21	長方形	台形状	2.10	1.67	0.15			SB8024 に伴う
8290	17D18	楕円形	弧状	0.60	0.42	0.06			
8309	17D20、18D16	楕円形	弧状	1.32	0.82	0.35		SB8025-P8327 が新	
8314	18D21	円形	弧状	0.86	0.78	0.22		SB8026-P8278、P8313 が旧	
8315	18D21・22	円形	弧状	0.85	0.78	0.24			
8329	17D13	円形	弧状	0.62	0.53	0.12			
8331	17D7・8・11 ～ 13・17	長方形	台形状	2.85	2.00	0.17	珠洲焼片口鉢（126）、砥石（292）		SB8025 に伴う
8366	17C25、17D5、18C21、18D1	楕円形	台形状	2.62	1.67	0.32		SE8353 が新	
8390	18C19・24	円形	弧状	0.76	0.68	0.26			
8552	18C14・15	楕円形	漏斗状	0.76	（0.62）	0.45			
9016	20B19・20	楕円形	台形状	1.13	0.55	0.28		SD9008 が新	
9065	20C12	楕円形	弧状	（1.64）	0.94	0.15			
9092	22D13・14・18・19		弧状	2.20		0.32		SD9024・9085 が新	
9131	21C2・3・7・8	円形	弧状	1.32		0.22		SD9024 が新	

中世　B 区　溝（SD）（1）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			底面標高（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ	西	中	東			
9000	21B・C	N-86° -W	台形状	8.20	0.40	0.18					SD9027 が新 SD9134、P9208・9209 が旧	
9008	20A ～ C、21C、22D・E	N-88° -E	弧状	45.80 以上	0.80	0.10	13.54	13.63			SK9016 が旧	
9024	20A・B、21B・C、22C ～ E、23E	N-86° -E	弧状～台形状	44.80 以上	0.72	0.31	13.35	13.26	13.38		SK9092・9131、SD9085、P9023 が旧	
9025	20A・B、21B・C	N-85° -E	弧状	24.20	0.35	0.06	13.61	13.60			SD9027 が新 P9041・9207・9212 ～ 9214 が旧	SD9085 と連続

中世　B 区　溝（SD）（2）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			底面標高（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ	西	中	東			
9027	20A・B、21B・C、22C・D、23D・E	N-88°-E	弧状～台形状	44.90 以上	0.58	0.20	13.50	13.52	13.62		SD9000・9025・9067、P9107・9108・9208 が旧	
9055	19E、20D・E、21D	N-10°-W	台形状	17.13 以上	0.50	0.20						
9067	22C	N-60°-E	弧状	1.30 以上	0.47	0.24					SD9027 が新	
9085	22C ～ E、23E	N-90°-E	弧状～台形状	19.20 以上	0.35	0.06		13.57	13.56		SD9024 が新 SK9092、P9088・9117 が旧	SD9025 と連続
9134	21B・C、22B	N-10°-W	弧状	10.80 以上	0.36	0.08					SD9000、P9178 が新	

中世　B 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
8341	17D4・5・9・10	不整形	弧状	2.06	1.71	0.18			
8343	17C24・25	不整形	U 字状	1.98	1.56	0.61			
9013	20B22・23	不整形	弧状	1.36	1.32	0.29			

中世　C 区　掘立柱建物（1）

SB9054	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	24・25C・D		4 間（9.44m）		1 間（4.16m）		N - 82° - E	39.3㎡（66.7㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9509	円形	U 字状	28	26	38	13.51				
P9515	円形	U 字状	27	26	38	13.50				
P9521	円形	U 字状	27	26	24	13.65				
P9593	長方形	階段状	（38）	（29）	48	13.40			SE9523 が新	
P9600	円形	U 字状	31	27	49	13.41				
P9576	楕円形	弧状	39	30	9	13.72				
P9562	方形	U 字状	31	30	38	13.46				
P9585	円形	U 字状	30	29	35	13.50				
P9501	楕円形	U 字状	35	27	37	13.48				
P9503	円形	階段状	31	28	40	13.46	8			底面から柱痕径推定
P9250	円形	U 字状	29	27	42	13.43				
P9408	楕円形	U 字状	28	23	32	13.42	10			
P9511	楕円形	U 字状	32	25	65	13.26				
P9516	円形	弧状	26	24	10	13.84				
P9520	円形	U 字状	26	25	29	13.62	8			
P9528	方形	U 字状	30	26	33	13.58	12			
P9531	方形	U 字状	24	22	26	13.61	6			柱痕 : 台形状
P9574	円形	U 字状	30	29	54	13.32				
P9564	方形	U 字状	26	24	34	13.51	8			
P9560	楕円形	U 字状	30	22	45	13.43			P9561 が旧	
P9588	楕円形	U 字状	30	20	44	13.35			SB9063-P9587 が旧	
P9498	円形	U 字状	28	27	41	13.43			SB9063-P9499 が旧	
P9502	円形	U 字状	30	26	72	13.16	8			
P9247	円形	U 字状	30	26	20	13.63				
P9397	円形	階段状	30	30	38	13.42	8			柱痕 : 底面方向へ細い
P9249	方形	U 字状	27	26	28	13.62				
P9508	方形	U 字状	26	24	40	13.42				

SB9058	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	25D・E		2 間（2.56m）		1 間（1.92m）		N - 11° - W	4.9㎡		側柱型・南北棟 (SE9566 が伴う)
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9567	円形	弧状	19	（17）	4	13.80				
P9555	楕円形	階段状	24	20	20	13.63				
P9558	円形	U 字状	29	28	35	13.51				
P9559	円形	U 字状	29	25	25	13.62				
P9573	円形	U 字状	20	18	25	13.58	10			柱痕 : 斜位

SB9063 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	24・25C・D		3 間（7.88m）		1 間（4.44m）		N - 86° - E	35.0㎡（59.9㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9510	円形	U 字状	29	28	50	13.41	12			
P9514	楕円形	U 字状	39	32	52	13.34	12			
P9522	円形	U 字状	30	29	40	13.48	16			
P9578	円形	U 字状	28	28	44	13.44				
P9587		U 字状	32		48	13.32			SB9054-P9588 が新	
P9499	円形	階段状	32	30	52	13.34	12		SB9054-P9498 が新	
P9251	円形	U 字状	36	32	58	13.32	14			
P9398	円形	U 字状	35	32	46	13.36	10			
P9405	円形	U 字状	24	21	37	13.52	9			柱痕 : 底面方向へ細い
P9512	円形	U 字状	35	31	30	13.56	12			
P9519	楕円形	階段状	34	28	35	13.54				
P9594	円形	U 字状	（28）	（25）	27	13.60			SE9523 が新	

中世　C 区　掘立柱建物（2）

SB9063 その 2										
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9580	円形	U 字状	28	24	32	13.56				
P9582	方形	U 字状	30	26	32	13.53				
P9584	円形	U 字状	29	28	30	13.56				
P9596	円形	U 字状	33	30	32	13.51	12			
P9496	円形	U 字状	30	27	56	13.29	7			柱痕：底面方向へ細い
P9248	楕円形	U 字状	46	36	34	13.40				
P9395	円形	U 字状	24	21	30	13.50	14			柱痕：上部が細くなる
P9174	方形	U 字状	26	26	20	13.58	10			
P9383	楕円形	漏斗状	30	24	62	13.30				

SB9220	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26・27B・C		3 間（6.73m）		1 間（3.92m）		N － 77° － E	26.4㎡（43.7㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9589	楕円形	階段状	37	31	35	13.56				
P9447	円形	U 字状	24		26	13.60	14		SB9961-P9354 が新	
P9617	楕円形	U 字状	38	30	50	13.44	12			SB9961 と共有
P9648	円形	U 字状	26	26	37	13.52				
P9605	円形	U 字状	22	20	28	13.73				
P9608	楕円形	U 字状	33	25	59	13.40	10			
P9541	楕円形	U 字状	29	24	22	13.72				
P9414	楕円形	U 字状	24	20	29	13.49	10			
P9590	楕円形	U 字状	24	20	15	13.75				P9527 と接する補強的な柱か？
P9527	円形	U 字状	25	23	28	13.58	8			
P9919	楕円形	U 字状	41	27	29	13.60				
P9619	円形	U 字状	27	26	29	13.65				
P9916	楕円形	U 字状	32	23	49	13.41	12			
P9651	楕円形	U 字状	27	22	34	13.55	6			
P9090	円形	U 字状	30	27	52	13.48			SK9604 が旧	
P9586	楕円形	漏斗状	29	23	59	13.40	10		SK9434、P9591 が旧	
P9431	円形	階段状	24		25	13.68	10		P9432 が新	
P9480	円形	U 字状	25	22	24	13.66				
P9423	円形	U 字状	27	25	28	13.60	16			
P9612	円形	弧状	25	22	4	13.95				

SB9221	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26・27B・C		3 間（8.38m）		1 間（3.70m）		N － 74° － E	31.0㎡（40.7㎡）		胴張型の一面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9471	不整形	弧状		52	20	13.70			SE9469 が新	
P9424	円形	台形状	22	20	9	13.80				
P9426	円形	台形状	26	22	15	13.75				
P9613	円形	台形状	26	22	14	13.82				
P9400	方形	階段状	26	24	16	13.80	10			
P9483	楕円形	台形状	28	20	11	13.83				
P9476	円形	台形状	22	20	8	13.82				
P9479	方形	U 字状	24	22	26	13.62				
P9421	円形	U 字状	26	24	30	13.60	12			
P9532	円形	U 字状	24	24	34	13.56	6			柱痕：底面方向へ細い
P9615	円形	U 字状	26	24	32	13.64				

SB9222 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26・27B・C		3 間（9.32m）		1 間（4.10m）		N － 74° － E	38.2㎡（66.4㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9624	方形	U 字状	28	28	33	13.60				
P9420	円形	U 字状	32	31	40	13.53				
P9622	円形	U 字状	33	27	25	13.60				
P9621	楕円形	台形状	45	30	31	13.60				
P9554	楕円形	台形状	50	33	40	13.60	12			
P9428	不整形	U 字状	46	32	39	13.50			SB9222-P9429 が新	
P9429	楕円形	台形状	46	32	39	13.51			SB9222-P9428 が旧	
P9473	楕円形	階段状	47	26	46	13.42	14			
P9465	方形	U 字状	(33)	28	46	13.42	16		P9466 が旧	
P9467	円形	U 字状	24	22	38	13.52	12			
P9495	楕円形	台形状	45	26	34	13.55			SD3007 が新	
P9407	方形	U 字状	24	22	28	13.68			SD3007 が新	
P9620	楕円形	U 字状	29	22	21	13.72	14			
P9616	楕円形	台形状	44	25	25	13.72				
P9611	円形	U 字状		24	28	13.72			P9610 が新	
P9072	方形	台形状	50	(42)	17	13.79			SE9603 が新	
P9433	円形	U 字状	26	24	29	13.65	10		P9432 が新	柱痕：底面方向へ細い

中世　C 区　掘立柱建物（3）

SB9222 その 2										
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9482	不整形	階段状	48	36	30	13.62	16			
P9474	円形	U 字状	26	24	30	13.60			SB9222-P9475 が旧	
P9475	円形	U 字状	40		29	13.59			SB9222-P9474 が新	
P9448	方形	U 字状	24	22	40	13.70			P9472 が旧	
P9461	円形	U 字状	22	19	18	13.69	10			
P9544	楕円形	弧状	33	21	20	13.69				
P9460	方形	U 字状	25	24	32	13.60				

SB9223	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26・27B・C		3 間（6.80m）		1 間（4.10m）		N － 79° － E	27.9㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9623	円形	U 字状	23	20	20	13.60			SD3007 が新	
P9073	楕円形	V 字状	27	20	30	13.48			SD3007 が新	
P9638	円形	弧状	25	22	8	13.72			SD3007 が新	
P9662	円形	U 字状	30	26	33	13.65				
P9614	円形	U 字状	26	25	30	13.48				
P9556	方形	U 字状	22	22	33	13.58	10			
P9422	円形	U 字状	26	22	32	13.56				

SB9370	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	23C、24C・D		3 間（6.07m）		1 間（3.92m）		N － 83° － E	23.8㎡（36.5㎡）		二面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9167	円形	U 字状	37	37	38	13.51	16			
P9170	円形	U 字状	30	30	42	13.43	18		P9169 が旧	
P9045	円形	階段状	30	27	47	13.36	14		SD9171 が旧	
P9394	円形	階段状	26	24	35	13.43	10			柱痕 : 底面方向へ細い
P9372	楕円形	U 字状	27	22	32	13.48	12			
P9115	方形	U 字状	24	24	40	13.40				
P9391	円形	U 字状	30	27	34	13.44				
SK9387	不整形	階段状	82	78	50	13.29				
P9044	円形	U 字状	33	28	50	13.45				
P9369	円形	U 字状	39	36	56	13.24				
P9390	円形	階段状	29	27	42	13.35	6			
P9389	円形	U 字状	30	30	54	13.25	12			
P9052	楕円形	U 字状	30	23	31	13.53	14			柱痕 : 斜位
P9168	円形	U 字状	25	22	33	13.53	14			
P9166	円形	U 字状	38	36	39	13.48	10			柱痕 : 底面方向へ細い

SB9961	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26・27B・C		3 間（6.24m）		1 間（3.24m）		N － 80° － E	20.2㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9354	円形	U 字状	30	26	20	13.66	9		SB9220-P9447 が旧	
P9617	楕円形	U 字状	38	30	50	13.44	12			SB9220 と共有
P9918	円形	U 字状	25	24	24	13.74				
P9607	円形	U 字状	28	26	14	13.88				
P9609	円形	U 字状	26	26	29	13.71				
P9430	円形	U 字状	24	20	13	13.78				
P9425	楕円形	弧状	24	18	10	13.81				

SB9962	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	26C		2 間（3.60m）		1 間（1.74m）		N － 73° － E	6.3㎡		胴張型の側柱型・東西棟（SE9440 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9446	円形	U 字状	20	19	20	13.73				
P9439	円形	U 字状	24	23	20	13.76	9			
P9438	円形	U 字状	28	（24）	23	13.75				
P9673	円形	U 字状	（22）	20	18	13.75				
P9401	楕円形	U 字状	（26）	（20）	31	13.63				
P9441	円形	階段状	23	21	24	13.67				
P9442	円形	U 字状	20	20	18	13.78				

SB9963 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	25・26B・C		2 間（3.70m）		2 間（3.32m）		N － 79° － E	12.3㎡		胴張型の側柱型・東西棟（SE9453 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9458	円形	U 字状	17	16	13	13.77				
P9478	楕円形	U 字状	25	19	12	13.79				
P9477	円形	U 字状	（17）	15	14	13.76				
P9450	円形	U 字状	20	18	16	13.68				
P9452	円形	漏斗状	31	28	34	13.50				

中世　C 区　掘立柱建物（4）

SB9963 その 2										
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9455	円形	V 字状	23	22	16	13.65				
P9457	円形	V 字状	21	20	16	13.74				

中世　C 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
5001	29B2・3・7・8	円形	U 字状	1.44	1.40	2.56	11.64	素掘り	砂礫層			
9357	23C25	円形	U 字状	0.82	0.75	1.90	11.88	素掘り	砂礫層			覆土中から小円礫多数
9440	26C14	円形	U 字状	1.01	0.87	1.52	12.44	素掘り	粘質シルト層	珠洲焼片口鉢（134）、須恵器甕（135）、鉄滓、木片		礫多量 SB9962 に伴う
9453	26C1・6	円形	漏斗状	2.13	1.99	2.06	11.84	素掘り	砂礫層	砥石（295 ～ 298）、鎌の柄（373）・曲物（374）・下駄（375）・箸状木製品（376）、土師質土器、骨片		SB9963 に伴う
9469	26B13・18	円形	U 字状	0.96	0.96	1.94	11.98	素掘り	砂礫層	砥石（299・300）、木片	SB9221-P9471 が旧	
9523	25D9・10	円形	漏斗状	1.73	1.68	2.05	11.88	素掘り	砂礫層	棒状用途不明部材（377）・木片	SB9054-P9593・SB9063-P9594 が旧	
9566	25D24	円形	U 字状	0.94	0.90	2.24	11.60	素掘り	砂礫層	砥石（303）、木片		SB9058 に伴う
9603	26C15、27C11	円形	漏斗状	1.42	1.35	2.22	11.74	素掘り	砂礫層	瀬戸・美濃焼平椀（136）、越前焼甕（137）、珠洲焼甕（138）、砥石（301・302）、曲物（369）・杭（370）・椀（371）・挽物皿（372）・曲物部材・板材・木片	SB9222-P9072 が旧	

中世　C 区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
9165	23C10、24C6	不整形	階段状	0.92	0.67	0.34			
9225	24E2・3	円形	台形状	0.84	0.80	0.57			
9434	26C10・15、27C6・11	円形	台形状	1.21	1.15	0.26		SB9220-P9586、P9591 が新	
9551	25E9・10	方形	弧状	0.96	0.92	0.15			
9604	27C16	不整形	弧状	0.94	0.72	0.19	珠洲焼甕か壺	SB9220-P9090 が新	

中世　C 区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			底面標高（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ	西	中	東			
5003	28B・C、29B	N-5°-W	弧状	19.75 以上	0.62	0.22	14.05	13.96			SD5002・5036、P5163、SX9635 が旧 SD3007・5004・9639 が新 SD5119 と同時期か	SD9542 に連続
5119	28B・C、29B	N-5°-W	弧状	20.40 以上	0.54	0.11	14.08	14.02			SD5002、SX9635・P5163 が旧 SD3007・5004・9639、SX5005、P5127 が新 SD5003 と同時期か	SD9538 に連続
9171	24B・C、25A	N-37°-W	弧状	16.80	0.34	0.10	13.86	13.80	13.80		SB9370-P9045 が新	SD9253・9336・9412 に連続
9253	24D	N-33°-W	弧状	3.00	0.30	0.04	13.77	13.80	13.81		P9255 が旧	SD9171・9336・9412 に連続
9336	24C・D	N-47°-W	弧状	6.65	0.36	0.05	13.78	13.72	13.77			SD9171・9253・9412 に連続
9412	25ZZ・A	N-39°-W	弧状	1.90 以上	0.42	0.08	13.75	13.87	13.93			SD9171・9253・9336 に連続
9538	25E、26D・E、27C・D	N-15°-W	台形状	20.50 以上	0.28	0.09		13.90	13.77		SD3007・9542 が新	SD5119 に連続
9542	25E、26D・E、27C・D	N-13°-W	台形状	28.68 以上	0.42	0.20		13.94	13.79	陶器	SD3007、P9550 が新 SD9538、SX9602 が旧	SD5003 に連続
9628	27B	N-87°-W	弧状	9.25	0.35	0.10						
9639	27・28C	N-70°-E	弧状	5.50	0.34	0.06					SD3007 が新 SD5003・5119、SX9635 が旧	

中世　C 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
9179	26D22	不整形	台形状	0.50	0.30	0.12			
9517	25C23・24、25D3	不整形	不整形	0.75	0.71	0.27			
9526	25D10	不整形	弧状	0.78	0.48	0.12			
9529	25D10・15、26D6・11	楕円形	弧状	0.65	0.33	0.14			
9533	26D11	不整形	弧状	0.94	0.45	0.19			
9602	26D22・23	不整形	不整形	0.64	（0.50）	0.18		SD9542 が新	
9635	28C1・6・7	楕円形	弧状	1.70 以上	0.62	0.08		SD3007・5003・5119・9639 が新	

中世　D 区　掘立柱建物（1）

SB9904 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	27D・E		3 間（6.78m）		1 間（3.56m）		N － 10° － W	24.1㎡（33.1㎡）		胴張型の二面廂付梁間一間型・南北棟（SE9666 が建物内に位置する）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9122	円形	U 字状	25	22	35	13.66	10			
P9665	円形	U 字状	25	25	47	13.44	11			
P9066	円形	U 字状	25	（25）	40	13.46	10			柱痕：底面方向に細い

中世　D 区　掘立柱建物（2）

SB9904 その 2										
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P9082	円形	U 字状	25	22	60	13.39	10			
P9080	円形	U 字状	24	24	32	13.62	10			
P9672	円形	階段状	29	29	57	13.39				
P9681	楕円形	階段状	30	24	53	13.46	12			柱痕径は底面から推定
P9685	円形	U 字状	28	25	26	13.61				
P9667	円形	U 字状	22	21	46	13.56				
P9671	円形	U 字状	21	20	36	14.64				
P9679	楕円形	U 字状	29	22	35	13.61	10			
P9686	方形	U 字状	20	18	33	13.62				
P9902	円形	U 字状	23	20	46	13.56				
P9835	楕円形	U 字状	32	26	37	13.66				

SB5295	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31C ～ E、32D・E		5 間（10.76m）		1 間（4.10m）		N － 85° － E	44.1㎡（87.4㎡）		四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5218	楕円形	台形状	50	36	30	13.76				
P3922	楕円形	U 字状	44	30	45	13.84				
P3932	楕円形	U 字状	50	（38）	30	13.70				
P3934	楕円形	U 字状	44	（30）	44	13.66				
P3940	円形	台形状	44	42	38	13.55				
P3920	円形	漏斗状	（46）	40	44	13.66	10			
P3834	円形	U 字状	（44）	40	51	13.62				
P5238	円形	U 字状	44	44	54	13.62			SK3519 が旧	
P3895	楕円形	U 字状	54	（40）	52	13.54	10			
P3988	楕円形	漏斗状	48	（40）	44	13.65			SD5112 が新	
P3918	楕円形	U 字状	66	36	66	13.58				
P3862	円形	U 字状	52	（52）	56	13.58				
P3727	円形	U 字状	44	（41）	48	13.56				
P3729	円形	U 字状	42	40	39	13.66			P3728 が旧	
P5216	楕円形	階段状	90	40	66	13.35				
P5239	円形	U 字状	42	（36）	96	12.99			SE3913 と新旧不明	
P3911	円形	U 字状	40	（36）	72	13.24				
P3942	楕円形	階段状	50	36	81	13.17				
P5227	楕円形	漏斗状	48	28	58	13.39				
P3961	楕円形	U 字状	60	（34）	55	13.44				
P3966	楕円形	U 字状	46	（36）	24	13.86				
P3962	円形	漏斗状	44	（44）	54	13.65				
P3806	楕円形	U 字状	30	24	50	13.68			P3813 が旧	
P5226	楕円形	漏斗状	（54）	42	70	13.55			SK3840 が新	
P3810	楕円形	U 字状	60	（40）	67	13.58			P3787 が新	
P5208	楕円形	漏斗状	52	（42）	65	13.66				
P5256	楕円形	漏斗状	56	（34）	59	13.62			P5251 が新	
P3896	円形	階段状	40	（38）	49	13.72	12			
P3855	円形	U 字状	（60）	54	77	13.38				
P3890	円形	漏斗状	56	52	71	13.36			SK3515 と新旧不明	
P5229	楕円形	階段状	44	34	51	13.57	12		SD5112 が新	
P5231	円形	U 字状	40	（36）	46	13.66	12		SD5112 が新	
P3936	円形	V 字状		（43）	55	13.45			P3863 が新	
P5204	楕円形	台形状	62	34	33	13.69				

SB5296	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32D・E		2 間（6.26m）		1 間（3.44m）		N － 90° － E	21.5㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3973	円形	V 字状	38	（35）	39	13.56				
P3970	円形	U 字状	26	（26）	34	13.66	17			
P4156	円形	U 字状	40	34	29	13.81			P5255 と新旧不明	
P3893	楕円形	階段状	44	36	24	13.82				
P3804	円形	台形状	30	（26）	19	13.90				
P3963	楕円形	階段状	50	（42）	33	13.72				
P3968	円形	台形状	30	（30）	18	13.84				

SB5297 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31D・E、32E		3 間（6.36m）		1 間（4.36m）		N － 89° － W	27.7㎡（33.1㎡）		一面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3837	円形	U 字状	28	（28）	47	13.68				
P5237	円形	U 字状	26	24	38	13.67			SK3840 と新旧不明	
P5266	円形	U 字状	32	30	54	13.70	9			
P5262	円形	U 字状	26	26	59	13.65				
P5279	円形	U 字状	30	（30）	54	13.71				

中世　D 区　掘立柱建物（3）

SB5297 その 2										
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5213	楕円形	階段状	78	58	50	13.76				
P5273	円形	U 字状	32	30	45	13.82	9			
P5247	円形	U 字状	36	32	72	13.52			SK3786 が旧	
P5278	円形	U 字状	23	21	34	13.96				
P3793	楕円形	弧状	63	(32)	31	13.96				
P3770	円形	U 字状	(32)	30	30	13.90				

SB5298	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	30E、31D・E		4 間（8.88m）		1 間（3.83m）		N - 1° - W	34.0㎡（42.6㎡）		一面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5280	円形	U 字状	23	22	64	13.65			P5271 が新	
P3765	楕円形	U 字状	54	(34)	55	13.75				
P3771	円形	漏斗状	40	(35)	49	13.76				
P3520	楕円形	U 字状	36	(28)	52	13.75				
P5153	円形	U 字状	32	28	49	13.78				
P5253	円形	階段状	32	30	70	13.60				
P3796	不整形	漏斗状	72	44	74	13.51				
P3751	円形	U 字状	32	(28)	38	13.80				
P3892	楕円形	U 字状	42	(34)	61	13.61	8			
P5207	楕円形	階段状	44	(28)	25	14.00				
P5155	円形	U 字状	41	36	64	13.64				
P3756	円形	U 字状	28	(28)	65	13.56				
P3759	楕円形	階段状	32	(25)	46	13.75	14			
P5306	円形	U 字状	(38)	36	64	13.58				

SB5299	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31・32E		3 間（6.26m）以上		1 間（3.96m）以上		N - 2° - W	24.8㎡以上（39.8㎡以上）		二面以上廂付梁間一間型・南北棟（南東側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5221	不整形	U 字状	84	54	52	13.75	19			
P5261	円形	U 字状	34	30	39	13.86				
P3617	楕円形	漏斗状	52	(43)	58	13.67			P5276 と新旧不明	
P3842	方形	箱状	52	(50)	50	13.76	14			
P3791	円形	U 字状	44	(40)	53	13.74				
P5220	円形	U 字状	50	44	50	13.74				
P3788	円形	U 字状	44	(40)	30	13.88	10			
P3762	楕円形		(80)	56						
P5288	楕円形		54	30						
P3660	方形	U 字状	62	60	65	13.60	12			
P5290	楕円形	階段状	72	(50)	78	13.52				
P5289	円形	U 字状	62	54	52	13.75				

SB5300	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	29・30B・C		3 間（7.20m）		1 間（3.70m）		N - 9° - W	26.6㎡以上		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5132	方形	台形状	28	26	21	13.96				
P5074	楕円形	階段状	28	(20)	40	13.81	10			
P5066	円形	U 字状	32	(30)	56	13.56				
P5067	方形	階段状	32	31	43	13.77	14			
P5059	円形	U 字状	30	30	34	13.80				
P5305	方形		27	24					SD5037 と新旧不明	
P5064	円形	漏斗状	28	(26)	29	13.90	10			
P5124	方形	階段状	26	24	24	13.98	7			

SB5301 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	29・30D・E		5 間（11.32m）		3 間（8.08m）		N - 85° - E	91.5㎡（106.0㎡）		複合型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5162	方形	階段状	40	38	56	13.70				
P5161	円形	階段状	44	42	50	13.70				
P5160	円形	U 字状	44	42	34	13.86	16			
P5159	円形	U 字状	36	34	45	13.74	15			
P5158	方形	U 字状	35	34	35	13.90				
P5157	円形	台形状	36	32	15	13.86				
P5310	楕円形	U 字状	58	38	29	13.88			SD5002 が旧	
P5314	楕円形	U 字状	58	46	24	13.85			SD3007 が新 SD5002 が旧	
P5309	円形	U 字状	44	38	29	13.83				
P5210	円形	V 字状	34	31	23	13.96				
P5199	円形	V 字状	36	33	35	13.78				
P5312	長方形	U 字状	26	18	34	13.50				

中世　D 区　掘立柱建物（4）

SB5301 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5166	方形	U 字状	38	33	56	13.64				
P5167	方形	U 字状	34	32	57	13.66				
P5170	円形	U 字状	38	36	56	13.66	14			
P5174	円形	U 字状	40	38	43	13.78				
P5196	楕円形	階段状	36	30	52	13.72	8			
P5311	楕円形	U 字状	34	22	33	13.89				
P5148	円形	U 字形	(32)	(32)	40	13.78				
P5149	円形	U 字状	36	32	62	13.48	10		SB5301-P5197 が旧	
P5197	円形	U 字状	24		42	13.77			SB5301-P5149 が新	
P5150	円形	階段状	46	40	51	13.62	13			
P5151	円形	階段状	42	(42)	55	13.58				
P5198	楕円形	弧状	38	24	18	13.84				
P5152	方形	U 字状	34	32	25	13.65	16			
P5140	円形	漏斗状	44	(39)	76	13.35	14		P5144 が旧	
P5141	円形	U 字状	32	(30)	49	13.66	18			
P5142	円形	階段状	38	38	47	13.69	14			
P5143	円形	U 字状	26	(26)	37	13.62	9			
P5146	円形	U 字状	(40)	35	62	13.55				
P5147	円形	台形状	27	27	28	13.70				
P5313	円形	階段状	28	24	70	12.90				

SB5302	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32E		1 間（2.22m）		1 間（2.20m）		N - 84° - E	4.9㎡		方形型・一棟（SK3925 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5224	楕円形	U 字状	38	30	24	13.94				
P3795	円形	U 字状	(32)	30	60	13.60	16			
P5222	楕円形	階段状	54	36	35	13.90				
P5223	楕円形	U 字状	42	32	39	13.80	10		SD5112 と新旧不明	

SB5324	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	34D・E、35D		3 間（8.64m）		1 間（4.28m）		N - 9° - W	37.0㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4020	円形	U 字状	42	40	56	13.66	12			柱痕 : 円形
P4028	円形	U 字状	38	34	59	13.60	12			柱痕 : 円形
P4162	円形	階段状	40	37	63	13.55	12			
P4039	楕円形	U 字状	50	34	55	13.67				
P4048	方形	U 字状	36	35	43	13.80	12			柱痕 : 円形
P4062	円形	階段状	38	38	68	13.58				
P4093	円形	U 字状	37	36	57	13.66				
P4025	円形	U 字状	40	39	70	13.48	10			柱痕 : 円形
P4034	円形	弧状	47	46	15	14.09				中柱

SB5325	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	34・35D・E		4 間（4.24m）		1 間（3.15m）		N - 80° - E	13.4㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4037	円形	U 字状	33	(33)	52	13.64	10			
P4155	円形	U 字状	36	(36)	53	13.75	7	椀形鍛冶滓		
P4163	楕円形	U 字状	31	24	38	13.84				
P4139	円形	U 字状	35	32	61	13.56	12			柱痕 : 円形
P4032	楕円形	U 字状	35	28	40	13.78				
P4041	楕円形	U 字状	37	28	46	13.77	6			
P4043	円形	U 字状	28	28	51	13.69	12			柱痕 : 円形
P4044	円形	U 字状	35	30	68	13.56	8			
P4165	楕円形	U 字状	(20)	(14)	46	13.74			SK4045 が新	

SB5326	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	34D・E		3 間（7.04m）		1 間（3.36m）		N - 8° - W	23.7㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4035	円形	U 字状	32	27	67	13.58				
P4046	長方形	U 字状	41	26	60	13.64				
P4105	楕円形	U 字状	41	32	46	13.60	10			柱痕 : 円形
P4097	円形	U 字状	28	25	34	13.86				
P4110	円形	U 字状	30	30	60	13.48				
P4108	円形	U 字状	36	34	64	13.44	13			柱痕に石、柱痕 : 円形
P4056	円形	U 字状	30	27	57	13.58				
P4051	円形	U 字状	35	31	69	13.56				
P4107	円形	弧状	30	28	11	14.07				中柱

中世　D 区　掘立柱建物（5）

SB5327	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	33D・E、34E		3 間（6.34m）		2 間（3.92m）		N － 83° － E	24.9㎡（36.9㎡）		一面廂付梁間一間型・東西棟（南東隅は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4122	楕円形	U 字状	78	61	68	13.33	14		P4121 が旧	柱痕：隅丸長方形
P4130	楕円形	U 字状	60	44	56	13.44	14			柱痕：円形
P4127	楕円形	台形状	88	67	50	13.51				
P4104	楕円形	台形状	76	60	56	13.54	16			柱痕下扁平礫 柱痕：楕円形
P4134	楕円形	U 字状	64	49	57	13.45	14			柱痕：楕円形
P4136	円形	U 字状	46	46	31	13.73				
P4137	長方形	U 字状	55	35	62	13.43	14			柱痕：円形
P4132	円形	半円状	36	35	16	13.87				
P4113	不整形	U 字状	64	30	66	13.37	14			柱痕：円形
P4111	楕円形	台形状	75	45	60	13.43	14			柱痕：隅丸長方形
P4100	楕円形	U 字状	50	37	62	13.41	15	鉄滓		柱痕：楕円形
P4094	円形	箱状	49	44	43	13.64				
P4129	円形	弧状	27	23	6	13.87				中柱

SB5328	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	33C・D、34D		3 間（7.18m）		1 間（4.28m）		N － 82° － E	30.7㎡（55.1㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3291	円形	U 字状	（30）	28	53	13.68				
P4078	円形	U 字状	36	35	59	13.68				
P4075	円形	U 字状	33	30	65	13.64				
P4073	楕円形	U 字状	34	26	62	13.56				
P4117	円形	U 字状	32	32	52	13.52				
P4082	円形	U 字状	36	33	53	13.68	16			柱痕：円形
P4084	円形	U 字状	33	31	56	13.65				
P4029	楕円形	U 字状	29	24	43	13.72				
P3289	円形	U 字状	29	28	50	13.66				
P4148	円形	U 字状	28	25	22	14.02				
P4069	円形	U 字状	30	30	24	14.06				
P4066	円形	U 字状	32	30	33	13.95				
P4063	円形	U 字状	33	32	45	13.72				
P4072	円形	U 字状	28	27	46	13.67				
P4115	円形	U 字状	29	26	35	13.83				
P4119	円形	U 字状	31	30	49	13.66	10			柱痕：円形
P4118	円形	U 字状	32	32	42	13.75	9			柱痕：円形
P4083	円形	U 字状	28	28	43	13.73	10			柱痕：円形
P4085	円形	U 字状	32	30	29	13.88	14			柱痕：円形
P4126	円形	U 字状	31	29	30	13.80				
P4152	不整形	U 字状	40	35	43	13.66				
P3293	円形	U 字状	32	（32）	51	13.62				

SB5329	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	33C・D、34C		3 間（7.48m）		1 間（4.28m）		N － 6° － W	32.0㎡（42.0㎡）		二面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3276	円形	U 字状	33	30	41	13.82				
P3279	円形	U 字状	32	31	55	13.61				
P4151	方形	U 字状	30	30	46	13.79				
P4079	円形	U 字状	33	30	44	13.80				
P3297	円形	U 字状	30	30	53	13.60				
P3327	楕円形	U 字状	37	27	64	13.50				
P3346	円形	U 字状	33	31	48	13.66	10			柱痕：円形
P3357	円形	U 字状	29	28	38	13.81				
P3275	円形	U 字状	29	27	52	13.70				
P3278	円形	U 字状	30	28	61	13.58	10			柱痕：円形
P4147	円形	U 字状	34	30	34	13.90				
P4080	円形	U 字状	35	32	55	13.74	15		SK4081 が旧	柱痕：円形
P3358	円形	U 字状	31	28	34	13.87				
P3286	円形	U 字状	26	22	31	13.90				
P3274	円形	U 字状	26	23	31	13.91				
P3311	円形	U 字状	27	27	20	13.94				中柱

SB5330 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32C、33・34B・C		5 間（10.61m）		3 間（4.24m）		N － 6° － W	45.0㎡（78.1㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3362	円形	U 字状	36	32	69	13.51	18			柱痕：円形
P3385	円形	U 字状	41	（35）	77	13.41	18		SE3384 が新	柱痕：円形
P3356	円形	U 字状	33	32	76	13.44	18		SB5331-P3355 が旧	柱痕：円形
P3343	円形	U 字状	36	32	72	13.40	18			柱痕：円形
P3328	円形	U 字状	39	35	62	13.49	16			柱痕：円形

中世　D 区　掘立柱建物（6）

SB5330 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3307	円形	U 字状	35	32	69	13.45	14			柱痕 : 円形
P3306	円形	U 字状	36	30	51	13.63				
P3301	円形	U 字状	29	27	43	13.69				
P4164	円形	U 字状	38	38	55	13.48	16			柱痕 : 円形
P3321	円形	U 字状	34	32	74	13.40	16			柱痕 : 円形
P3331	円形	U 字状	34	34	69	13.44	17			柱痕 : 円形
P3414	円形	U 字状	45	43	58	13.60				
P3381	円形	U 字状	36	31	49	13.72				
P3390	楕円形	U 字状	39	30	73	13.48	18			柱痕 : 円形
P3262	円形	弧状	25	22	11	14.09				
P3361	円形	U 字状	30	28	46	13.78				
P3364	円形	U 字状	34	29	58	13.63	8		P3365 が旧	柱痕 : 円形
P3284	円形	U 字状	31	29	56	13.64	16			柱痕 : 円形
P3282	円形	U 字状	34	31	53	13.68	13			柱痕 : 円形
P3386	円形	U 字状	32	27	63	13.57	16			柱痕 : 円形
P3351	円形	U 字状	26	25	37	13.78				
P3330	方形	U 字状	30	30	63	13.53	8			柱痕 : 円形
P3295	円形	U 字状	37	34	48	13.69	16			柱痕 : 円形
P3296	円形	U 字状	37	34	59	13.56	15			柱痕 : 円形
P3298	楕円形	U 字状	60	30	51	13.62				
P3299	円形	U 字状	29	28	39	13.74				
P3303	円形	U 字状	35	32	71	13.40	11			柱痕 : 円形
P4125	楕円形	U 字状	40	32	44	13.66	12			柱痕 : 円形
P5293	円形	U 字状	31	26	59	13.75			P5292 が新	
P4092	楕円形	U 字状	43	29	50	13.66				
P3468	円形	U 字状	37		42	13.68	12		P3320 が新	柱痕 : 円形
P3424	円形	U 字状	28	27	42	13.70	14			柱痕 : 円形
P3418	円形	U 字状	41	36	57	13.60				
P3409	円形	U 字状	31	28	61	13.60	12			柱痕 : 円形
P3393	楕円形	U 字状	43	32	62	13.60	13			柱痕 : 円形
P3392	円形	U 字状	29	26	51	13.70	14			柱痕 : 円形
P3369	楕円形	U 字状	35	30	62	13.60	18			柱痕 : 円形
P3367	円形	U 字状	30	29	44	13.77	16			柱痕 : 円形
P3363	円形	U 字状	29	25	57	13.64	12			柱痕 : 円形
P3336	円形	U 字状	30	29	30	13.92				中柱
P3338	円形	U 字状		37	42	13.75			P3339 が新	中柱

SB5331	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	33B・C		3 間（6.78m）		1 間（4.00m）		N － 6° － W	27.1㎡（32.8㎡）		一面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3354	円形	U 字状	34	34	73	13.47			P3353 が旧	
P3340	方形	U 字状	34	34	43	13.74				
P3310	円形	U 字状	36	33	45	13.69	8			柱痕 : 円形
P3319	円形	U 字状	36	33	53	13.61				
P3425	方形	U 字状	38	32	37	13.76				
P3411	円形	U 字状	38	33	45	13.72				
P3419	円形	U 字状	34	30	46	13.72				
P3355	円形	U 字状	28	25	49	13.71			SB5330-P3356 が新	
P3342	円形	U 字状	30	27	43	13.70				
P3326	円形	U 字状	27	26	33	13.77				
P3322	円形	U 字状	28	26	19	13.96				中柱

SB5332	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32・33B		4 間（9.06m）以上		1 間（3.98m）		N － 86° － E	36.1㎡（55.8㎡）		二面以上廂付梁間一間型・東西棟（西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3435	円形	U 字状	39	39	31	13.91	10			柱痕 : 隅円方形
P3431	円形	U 字状	36	32	54	13.65	15			柱痕 : 隅円方形
P3466	円形	U 字状	37	35	41	13.77				
P3458	円形	U 字状	36	32	42	13.67				
P3605	楕円形	台形状	49	35	33	13.78				
P3534	円形	台形状	49	43	24	13.80				
P3429	円形	U 字状	29	25	33	13.89				
P3406	円形	U 字状	29	28	25	13.92				
P3465	円形	半円状	34	34	19	13.88				
P4074	円形	U 字状	29	（28）	45	13.70		砥石（309）		
P3535	円形	半円状	31	27	16	13.92				
P3537	円形	階段状	45	（45）	27	13.86				
P3439	円形	U 字状	36	30	47	13.73	10			中柱 柱痕 : 円形

中世　D 区　掘立柱建物（7）

SB5333	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32・33B		1 間（2.38m）以上		1 間（2.90m）		N － 85° － E	6.9㎡以上（9.5㎡以上）		一面以上廂付梁間一間型・一棟（北西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3430	円形	U 字状	34	(32)	68	13.52			P3434 が新	
P3436	円形	U 字状	30	26	39	13.81				
P3438	円形	U 字状	31	30	46	13.71	10			柱痕：円形
P4055	円形	U 字状	36	30	59	13.60				
P3440	円形	U 字状	36	30	67	13.47				
P4064	楕円形	漏斗状	40	32	40	13.80				

SB5334	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32B・C		4 間（8.36m）		2 間（3.79m）		N － 87° － E	31.7㎡（41.4㎡）		胴張型の一面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3538	円形	階段状	35	30	52	13.58	10			
P3586	円形	U 字状	29	28	53	13.58				
P3598	円形	U 字状	34	31	44	13.63	10			柱痕：円形
P3603	円形	階段状	32	30	33	13.78				
P4096	円形	U 字状	29	27	23	13.94				
P3601	楕円形	階段状	39	25	19	13.79				
P3610	円形	U 字状	35	30	23	13.80				
P3591	円形	U 字状	31	30	41	13.65				
P3580	円形	U 字状	28	27	33	13.72				
P3558	楕円形	U 字状	35	29	32	13.79				
P3699	円形	半円状	37	32	26	13.82				
P3826	円形	U 字状	38	36	26	13.80				
P3654	円形	漏斗状	45	40	36	13.72	12			柱痕：円形
P3632	楕円形	U 字状	41	31	39	13.66				
P3622	円形	半円状	37	31	19	13.90				

SB5335	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31B、32B・C		4 間（8.04m）		2 間（4.16m）		N － 84° － E	33.4㎡（57.9㎡）		三面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3561	円形	漏斗状	63	56	47	13.62				
P3573	楕円形	漏斗状	71	54	53	13.52				
P3650	円形	漏斗状	58	52	47	13.57				
P3569	楕円形	漏斗状	72	53	38	13.66	18			柱痕：円形
P3587	楕円形	漏斗状	62	50	46	13.55	22			柱痕：円形
P3675	円形	U 字状	27	24	36	13.72				
P3678	円形	U 字状	53	48	39	13.62				
P3655	円形	U 字状	43	(40)	41	13.63				
P3638	円形	階段状	62	54	34	13.70	23			柱痕：円形
P3628	円形	台形状	58	50	30	13.74				
P3658	円形	漏斗状	72	62	46	13.58	23			柱痕：円形
P3621	円形	U 字状	32	29	31	13.73			SB5340-P3619 が旧	
P3555	円形	U 字状	40	33	44	13.68			SB5340-P3550 が旧	
P3551	円形	階段状	38	35	59	13.48	18			柱痕：円形
P3552	円形	U 字状	38	35	43	13.60	17			柱痕：円形
P3594	円形	U 字状	70	62	68	13.30			P3593 が新	
P3607	楕円形	階段状	72	42	52	13.48			P3606 が旧	
P3611	円形	U 字状	38	35	50	13.50				
P3828	円形	U 字状	37	37	70	13.36				
P3679	円形	U 字状	47	44	44	13.60				
P3681	円形	U 字状	42	36	57	13.46				
P3677	円形	漏斗状	53	46	54	13.51				
P3670	円形	漏斗状	52	47	37	13.65				
P3667	円形	階段状	53	48	44	13.60	16			柱痕：円形
P3664	長方形	U 字状	46	39	47	13.55				
P3661	円形	U 字状	34	34	22	13.80				
P3623	楕円形	台形状	72	54	35	13.68				中柱
P3639	円形	U 字状	55	52	52	13.54	12			中柱 柱痕：円形

SB5336	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31B、32B・C		3 間（6.36m）		1 間（3.60m）		N － 87° － E	22.9㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3559	円形	U 字状	40	36	60	13.52	10			柱痕：円形
P3574	楕円形	漏斗状	45	33	37	13.68				
P3590	円形	U 字状	34	31	33	13.75				
P3567	円形	漏斗状	36	33	43	13.59				
P3673	円形	台形状	45	39	32	13.72				
P3636	円形	U 字状	30	28	36	13.71			P3640 が旧	

中世　D 区　掘立柱建物（8）

SB5337	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31B		2 間（8.36m）		1 間（4.22m）		N － 84° － E	35.3㎡		側柱型・東西棟（西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3642	円形	U 字状	37	32	54	13.50				
P3701	円形	U 字状	48	（40）	37	13.68	12			柱痕：円形
P3657	楕円形	U 字状	32	20	30	13.76	12			柱痕：円形
P3669	円形	U 字状	33	32	23	13.83				
P3718	楕円形	U 字状	29	（24）	38	13.68				
P3710	楕円形	U 字状	36	23	28	13.68			P3711 が新	
P3709	円形	U 字状	44	41	53	13.50				
P3707	円形	U 字状	32	28	44	13.59				
P3703	楕円形	漏斗状	60	38	45	13.62				
P5215	円形	台形状	36	30	21	13.83				

SB5338	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31B		2 間（3.56m）以上		2 間（3.56m）以上		N － 84° － E	12.7㎡以上		胴張型・東西棟（西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3644	円形	U 字状	32	29	13	13.97				
P3641	円形	U 字状	37	36	26	13.79				
P3705	円形	V 字状	34	29	37	13.66	14			柱痕：円形
P3702	円形	U 字状	37	34	30	13.72				
P3676	不整形	U 字状	34	33	54	13.55	14			柱痕：円形

SB5339	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	32C・D		3 間（6.56m）		2 間（4.60m）		N － 7° － W	30.2㎡（45.4㎡）		胴張型の二面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3533	円形	U 字状	34	31	28	13.58				
P3568	円形	階段状	37	33	74	13.58				
P5341	円形	U 字状	39	36	40	13.56			SD3501 と新旧不明	
P5234	円形	U 字状	38	（38）	35	13.52	10			柱痕：楕円形
P5259	円形	弧状	24	24	8	13.81				
P5241	円形	U 字状	33	32	49	13.57	10			柱痕：円形
P3530	円形	U 字状	43	40	52	13.55	10		SD3501 が旧	柱痕：円形
P3687	円形	U 字状	33	30	21	13.83	14			柱痕：円形
P3690	円形	U 字状	34	31	36	13.68	13			柱痕：不整形
P3694	楕円形	台形状	83	31	42	13.52	14			柱痕：円形
P3267	円形	U 字状	34	20	64	13.70	12			柱痕：円形
P5236	長方形	U 字状	35	27	18	13.79				
P5342	円形	U 字状	42	40	37	13.59			SD3501 と新旧不明	
P5233	円形	V 字状	33	（31）	36	13.52				
P5240	円形	U 字状	27	27	46	13.58				
P3531	円形	U 字状	40	38	62	13.44	15		SD3501 が旧	柱痕：円形
P3685	楕円形	U 字状	46	37	34	13.72				
P3700	円形	V 字状	35	33	41	13.66	10			柱痕：円形

SB5340	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	31・32B		3 間（7.09m）以上		1 間（4.48m）		N － 80° － E	31.8㎡		梁間一間型・東西棟（西側は調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3550	円形	U 字状	（38）	34	43	13.70	15		SB5335-P3555 が新	柱痕：円形
P3576	円形	U 字状	40	（37）	42	13.68	12		P3577 が旧	柱痕：楕円形
P3627	円形	U 字状	37	36	37	13.68	14			柱痕：円形
P3619	円形	U 字状	42	36	29	13.78			P3620 が旧 SB5335-P3621 が新	
P3647	円形	U 字状	30	（30）	39	13.70				
P3643	円形	U 字状	39	35	46	13.62	16			柱痕：円形

中世　D 区　杭列（SA）（1）

SA5323	位置		全長	間尺	主軸方向					
	32B・C、33C		16.9m	2.42m	N － 83° － E					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	床面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P5346		漏斗状								
P3547	楕円形	階段状	49	32	62	13.48		瀬戸・美濃焼椀形鉢（139）		
P3585	楕円形	漏斗状	59	38	54	13.56				
P3597	楕円形	U 字状	60	36	51	13.55	12			柱痕：円形
P3821	楕円形	U 字状	53	41	48	13.51	10			柱痕：円形
P4090	楕円形	U 字状	56	34	58	13.56	13			柱痕：円形
P3318	楕円形	階段状	60	36	75	13.37	20			柱痕：円形
P3305	楕円形	階段状	63	28	49	13.62				

中世　D 区　杭列（SA）（2）

SA5322	位置	全長	間尺	主軸方向
	32B・C	9.8m	2.42m	N － 84° － E

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	床面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3578	円形	階段状	32	27	54	13.58				
P3582	楕円形	U 字状	54	42	43	13.63		硯（308）		
P3595	楕円形	階段状	61	42	39	13.65				
P3824	円形	U 字状	24	（24）	21	13.78			P3823 と新旧不明	

中世　D 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
3384	33B25、33C5、34B21、34C1	不整形	階段状	2.16	2.11	1.79	12.47	素掘り水溜有	シルト層	珠洲焼片口鉢（142・143）、漆塗膜	SB5330-P3385、SB5331、SK3382、P3264 が旧	
3400	33B9・14・15	円形	U 字状	1.61	1.58	2.34	11.87	素掘り	砂礫層			
3412	33B19・24	楕円形	箱状	1.32	1.03	2.18	12.02	素掘り水溜有（曲物）	砂礫層	瀬戸・美濃焼天目茶椀（140）、珠洲焼片口鉢（142）、しゃもじ状製品（389）・漆器椀（390）・曲物（391a）・曲物側板（391b）、ガラス質滓	P3350 が旧	
3504	31B13・14	円形	U 字状	1.27	1.24	2.74	11.28	素掘り		砥石（305）、曲物底板（385）	SD3501 が旧	
3508	32B23、32C3	円形	U 字状	1.05	0.93	2.54	11.62	素掘り		曲物底板（383）・折敷底板（381・382・384）・漆器		
3511	32C8・13	円形	U 字状	0.93	0.90	1.89	12.17	素掘り		墨描礫（307）		
3513	32B19・24	円形	U 字状	1.00	0.95	2.56	11.44	素掘り				
3913	31C24・25	楕円形	箱状	1.62	1.26	1.99	12.30	素掘り	砂層	漆器椀（386）・曲物底板（387）・杭（388）・折敷？	SB5295-P5239 と新旧不明	
3979	32E5・9・10	方形	箱状	1.60	1.54	2.40	11.90	素掘り		砥石（306）、曲物蓋？（392）・折敷底板（393）・用途不明部材（394）・加工材（395）・箸状木製品（396 ～ 406）・人形（407）・折敷？・漆塗膜、骨片	P4159 が旧	
5230	31C6・7・11・12	円形	U 字状	0.77	0.70	1.82	12.18	素掘り				
5177A	30D23・24、30E3・4	楕円形	漏斗状	2.55	1.72	2.10	12.21	素掘り	砂層	骨片	SE5177B、P5195 が旧	
5177B	30E4		U 字状	1.53		2.48	11.83	素掘り	砂層	越前焼甕（141）、加工材	SE5177A が新	
9654	27E8・13	楕円形	漏斗状	1.81	1.49	2.43	11.52	素掘り		用途不明部材（378）・加工材（379）・箸状木製品（380）・曲物部材・木片	P9734 が旧	
9660	27E4・9	楕円形	U 字状	1.42	1.08	2.54	11.36	素掘り		木片	SD9661、P9659 と新旧不明	
9666	27D23・24、27E3・4	楕円形	漏斗状	2.37	1.50	1.80	12.10	素掘り	礫層	珠洲焼片口鉢（144）	P9099・9732 が新 SX9098 が旧	

中世　D 区　土坑（SK）（1）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3211	35B13	楕円形	台形状	0.54	0.34	0.14			
3222	35B25	楕円形	台形状	0.71	0.52	0.18			
3252	35C2	不整形	台形状	1.06	0.76	0.22		SF3201 が新	
3258	35C18・23	円形	半円状	0.76	0.71	0.24			
3260	35C13・14・18・19	楕円形	半円状	0.90	0.69	0.41		SF3201 が旧	
3261	35C13	円形	台形状	0.86	0.86	0.38		SF3201 が旧	
3312	33C20	楕円形	弧状	0.46	0.24	0.13			
3314	33C19	楕円形	弧状	0.57	0.37	0.12			
3382	33B25	楕円形	弧状	0.68		0.04		SE3384 が新	
3502	31C9・10・14・15・19・20	円形	台形状	1.62	1.42	0.24			
3503	31C3・4・8・9	長方形	台形状	2.12	1.71	0.42			方形土坑
3512	32C13	円形	台形状	0.81	0.78	0.22		P3692 が旧	
3515	31D7・12	楕円形	台形状	1.45	0.80	0.23		SB5295-P3890 と新旧不明	
3517	31D16・17	楕円形	弧状	0.78	0.63	0.20			
3518	31D19	楕円形	台形状	1.89	1.13	0.30		SD5112 が新	
3519	31D19・20・24・25	楕円形	台形状	1.23	0.91	0.23		SB5295-P5238 が新	
3529	30E4・5	楕円形	弧状	0.98	0.75	0.14			
3532	31C15、32C11	長方形	台形状	1.38	0.75	0.41			
3612	31B10	方形	台形状	0.80	0.77	0.57			
3624	31E13	楕円形	弧状	0.88	0.44	0.09			
3752	31D5・10	円形	弧状	0.78	0.70	0.16			
3768	31D20	円形	台形状	0.71	0.68	0.10		SD5112 が新	
3786	31E3	楕円形	台形状	1.01	0.75	0.17		SB5297-P5247 が新	
3840	31D25、31E5、32E1	楕円形	弧状	1.00	0.57	0.24		SB5295-P5226 が旧 SB5297-P5237 と新旧不明	
3915	31D5	楕円形	弧状	0.79	0.65	0.08			
3923	32E3・8	楕円形	弧状	1.32	0.75	0.26			
3924	32E2	楕円形	台形状	1.48	0.64	0.34		SD5112 が新	
3925	32E7・8・12・13	楕円形	台形状	1.45	1.16	0.15		SD5112、SX5345 と新旧不明	SB5302 に伴う
3926	32E8・9	楕円形	弧状	1.26	0.78	0.32			
3945	32D1・2	円形	台形状	0.88	0.87	0.17			
3955	32D6・7・11・12	楕円形	台形状	1.52	0.69	0.09		SK3956、P3953 が旧 P5285 と新旧不明	

中世　D 区　土坑（SK）（2）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3956	32D6・11	楕円形	半円状	1.06		0.52		SK3955 が新 P5287 が旧	
3958	32D13	円形	弧状	0.70	0.68	0.13			
3971	32D13・14・19	楕円形	台形状	1.98	0.80	0.33	瀬戸･美濃焼皿（145）		
3976	32D19・20・24・25	円形	台形状	1.94	1.82	0.48			
3983	31E10・15、32E6・11	楕円形	台形状	2.10	1.54	0.32		P5294 が新	
4040	34E5	楕円形	半円状	0.56	（0.42）	0.15			
4045	34D23・24	長方形	箱状	1.59	0.95	0.68		SB5325-P4165 が旧	
4081	33D3・4・8・9	楕円形	弧状	3.02	0.72	0.09		SB5329-P4080 が新	
4086	33D2・7	長方形	箱状	1.30	0.69	0.60			
4087	33D1・2	楕円形	台形状	1.27	0.65	0.42			
4095	34E7	楕円形	弧状	（1.22）	0.34	0.12			
4102	34E6・11	楕円形	台形状	1.49	1.14	0.59			
4109	34D21、34E1	方形	箱状	0.92	0.80	0.19			
4123	33D22・23、33E2・3	楕円形	弧状	2.48	1.18	0.26			
4128	33E10・15	不整形	V 字状	0.85	0.70	0.36		P4133 が旧	
5041	28C9	楕円形	台形状	0.65	0.36	0.10			
5042	28C14・15	楕円形	台形状	0.78	0.38	0.12			
5062	29B14・19	長方形	台形状	1.44	0.83	0.46	椀形鍛冶滓（268）	P5063 が新	
5113	30C13・14・18・19	長方形	弧状	1.97	1.54	0.11		SD5112 が旧	方形土坑
5114	30C7・12	円形	台形状	0.74	0.65	0.13			
5184	30D3・4	楕円形	U 字状	0.70	0.54	0.42			
5194	30C19・20・24・25、31C16・21、30D5	長方形	台形状	3.54	2.72	0.39		SK5281、SD5112 が旧 P5284 と新旧不明	方形土坑
5201	31C21・22	楕円形	台形状	1.41	0.56	0.18			
5202	31C23	楕円形	弧状	1.13	0.60	0.29			
5203	31C17・22	楕円形	台形状	1.05	（0.80）	0.23			
5228	31D2・7	円形	弧状	1.35	（1.20）	0.24		SD5112 が新	
5242	32D15	円形	U 字状	0.76	0.70	0.86		SD3501 が新	
5252	30E15、31E11	楕円形	半円状	（2.04）	1.05	0.86		SD3007（近現代）が新	
5281	30C15・19・20、31C11・16	長方形	台形状	（3.46）	3.22	0.16		SD5112 が旧 SK5194 が新 P5283・5284 と新旧不明	方形土坑
9118	28C16・17	楕円形	弧状	0.77	0.51	0.14			
9688	27D3・4	円形	弧状	0.83	0.81	0.07			
9894	27C20・25	楕円形	台形状	1.05	0.59	0.20			
9900	28D2・3・7・8	長方形	箱状	2.72	1.30	0.81			
9906	28D21	楕円形	弧状	1.04	0.58	0.07			
9912	28E7	円形	半円状	0.71	0.68	0.27			

中世　D 区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
3007	26A・B、27B・C、28・29C・D、30D・E、33G・H、34H	N-72°-E	弧状	97.80 以上	2.40	0.20	磁器、漆器、近現代の遺物、銭貨、珠洲焼甕か壺、縄文土器深鉢	SB5301・9222・9223、SK5252、SD5002・5003・5119・9542・9538、SX9653、P9094・9407・9579・9633・9898 が旧	近現代の溝
3501	31B・C、32C・D、33D	N-89°-E	台形状	34.00 以上	1.10	0.33	石鏃（70）、珠洲焼片口鉢（146）、砥石（310）	SK5242 が旧 SB5339、SE3504 が新 P5343・3682 と新旧不明	
5002	28B・C、29C・D、30E	N-87°-E	弧状	38.80 以上	0.55	0.16		SD5003・5119・3007、SB5301-P5310・5314 が新	
5004	28・29B	N-87°-E	弧状	8.50 以上	0.31	0.14	フイゴ羽口（247）、ガラス質滓	SD5003・5119 が旧	
5036	28・29B	N-87°-E	弧状	5.40 以上	0.22	0.04		SD5003 が新	
5037	29B、30B・C		台形状	8.70	0.34	0.08		SB5300-P5305 と新旧不明	
5094	29C	N-48°-W	台形状	0.60	0.32	0.06			
5100	30・31B	N-83°-E	台形状	5.12	0.32	0.10			
5104	30B	N-38°-W	弧状	1.24	0.20	0.08			
5112	30B・C、31C・D、32D・E	N-83°-E	弧状	35.20	0.45	0.08		SK5228・3518・3768・3924、SB5295-P3988・5231・5229 が旧 SK5113・5194・5281 が新 SB5302-P5223、SK3925、P5116 と新旧不明	
9639	27・28C	N-70°-E	U 字状	8.70	0.14	0.14		SD5003・5119、SX9635 が旧	
9661	27E	N-88°-W	台形状	3.14	0.30	0.28	珠洲焼甕か壺	P9232 が旧 SE9660 と新旧不明	

中世　D 区　ピット（P）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3646	31E3・8	楕円形	U 字状	64	（46）	180			

中世　D 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3525	30D3・8	楕円形	弧状	0.95	0.28	0.16			素掘り
3527	30D10・14・15	楕円形	弧状	1.12	0.30	0.17			
3528	30D13	楕円形	台形状	1.78	0.31	0.17			
3754	32D1	楕円形	弧状	1.10	0.55	0.07			
3884	31D24	楕円形	台形状	1.21	0.20	0.10			
5005	28B24･25、28C3 ～ 5･8・9	不整形	弧状	(3.90)	1.36	0.20		SD5119、P5034・5121・5044 が旧	
5192	30D9	楕円形	V 字状	0.97	0.47	0.42			
5345	32E7	楕円形	弧状	1.02	(1.00)	0.08		SK3925 と新旧不明	
9098	27E3	楕円形	弧状	(0.80)	0.54	0.16		SE9666 が新	

中世　D 東区　掘立柱建物（1）

SB5316	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	36G・H		4 間（7.00m）以上		2 間（4.35m）		N － 87° － E	30.5㎡以上（51.1㎡）以上		三面以上廂付梁間一間型・東西棟（東側が調査区外。柱間が不揃いなのは出入口の施設か？）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3129	円形	U 字状	33	33	65	13.68	13			柱痕：円形
P3074	円形	U 字状	30	30	76	13.54				
P3100	円形	U 字状	23	21	44	13.81				
P3079	楕円形	台形状	31	22	18	14.06				
P4548	楕円形	弧状	30	23	18	14.04				
P3114	円形	階段状	50	47	57	13.74				
P3112	円形	U 字状	29	27	42	13.80				
P3111	楕円形	U 字状	33	24	43	13.94				
P3105	方形	V 字状	26	26	24	14.00				
P3104	楕円形	U 字状	24	19	31	13.97				
P3096	円形	U 字状	25	21	28	13.92	16			柱痕：円形
P3130	円形	U 字状	28	25	55	13.74				
P3127	楕円形	漏斗状	36	25	60	13.70			SB5316-P3128 が旧 P3126 が新	
P3128	円形	U 字状	26	24	50	13.80			SB5316-P3127 が新	
P3134	楕円形	U 字状	28	23	25	14.06				
P3072	円形	U 字状	24	20	52	13.78			SB5316-P3071 が旧 P3073 と新旧不明	
P3071	円形	漏斗状	26	(24)	53	13.77			SB5316-P3072 が新	
P3064	方形	U 字状	25	24	34	13.90	14			柱痕：円形
P3083	方形	U 字状	20	18	22	14.03				
P4544	方形	U 字状	18	18	31	13.95				
P3082	円形	U 字状	26	24	38	13.88				
P3188	円形	半円状	23	22	14	14.14				
P3182	円形	U 字状	31	31	50	13.78	14			柱痕：円形
P3477	円形	箱状	37	31	23	14.04				
P3479	円形	U 字状	28	27	35	13.90		珠洲焼片口鉢（149）		
P3486	円形	U 字状	28	26	49	13.78				
P3107	円形	U 字状	23	21	41	13.86	7			柱痕：楕円形
P4558	円形	U 字状	29	(27)	25	14.04	8			
P4557	円形	U 字状	26	23	64	13.62				柱痕：円形

SB5317	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	35G・H		3 間（5.92m）		2 間（3.36m）		N － 84° － E	19.9㎡		胴張型の側柱型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3184	円形	U 字状	28	26	46	13.76				
P3045	円形	半円状	35	33	15	13.96				
P3046	円形	U 字状	30	28	45	13.80				
P3060	円形	U 字状	30	30	54	13.68	16			
P3059	楕円形	U 字状	47	36	48	13.76				
P3057	円形	U 字状	26	24	43	13.82				
P3052	円形	U 字状	18	17	25	14.08				
P3120	円形	U 字状	26	22	39	13.94				
P3039	円形	U 字状	22	21	20	14.00				
P3040	円形	U 字状	26	25	45	13.83				
P3033	円形	U 字状	20	18	53	13.78				
P3042	楕円形	U 字状	23	18	28	13.94				
P3043	円形	U 字状	23	22	21	13.92				

中世　D 東区　掘立柱建物（2）

SB5318	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	35H		2 間（3.48m）以上		2 間（2.12m）以上			7.4㎡以上		—・東西棟？（南東側が調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4532	円形	U 字状	（36）	30	38	13.96				側溝トレンチに東側が切られている
P3038	楕円形	U 字状	23	18	57	13.64				
P3122	楕円形	漏斗状	61	50	61	13.64	10		P4593 と新旧不明	柱痕：円形
P3049	円形	U 字状	25	23	23	14.08	8			柱痕：円形
P3053	方形	U 字状	37	32	48	13.84				

SB5319	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	35・36H		2 間（2.76m）以上		1 間（2.36m）以上			6.5㎡以上		—・—棟（南東側が調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3121	円形	半円状	24	（24）	15	14.17				
P3056	楕円形	V 字状	31	25	21	14.05				
P3054	円形	階段状	32	29	65	13.66				
P3124	円形	半円状	30	（29）	14	14.16			P3123・3125 と新旧不明	

SB5320	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	34G、35F・G		3 間（6.65m）		1 間（4.76m）		N － 7° － W	31.7㎡（51.5㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3168	円形	U 字状	31	31	43	13.86				
P3163	円形	U 字状	30	28	39	13.89	8			
P3153	楕円形	U 字状	29	24	50	13.76				
P3160	円形	U 字状	27	25	52	13.79		珠洲焼中型壺 T 種（150）		
P3145	楕円形	U 字状	35	28	52	13.72				
P4568	方形	U 字状	33	33	40	13.82	8			柱痕：円形
P4564	円形	U 字状	31	27	47	13.74	15	珠洲焼中型壺 T 種（150）		柱痕：円形
P4575	楕円形	U 字状		34	72	13.52		珠洲焼中型壺 T 種（150）	P4576・4577 と新旧不明	
P4582	円形	U 字状	26	（25）	24	14.00				
P3169	円形	U 字状	33	28	55	13.71				
P3190	楕円形	U 字状	34	25	39	13.87				
P3162	円形	U 字状	30	29	85	13.48				
P3154	円形	U 字状	31	27	45	13.80				
P3161	円形	U 字状	27	23	61	13.68				
P4588	円形	U 字状	30	25	38	13.89	13			柱痕：円形
P4584	楕円形	V 字状	40	27	38	13.80		珠洲焼中型壺 T 種（150）		
P3140	円形	半円状	44	38	22	14.04				
P3144	円形	U 字状	31	28	49	13.74				
P4565	円形	U 字状	27	26	39	13.85	10			柱痕：円形
P4563	円形	U 字状	29	26	43	13.81	20			柱痕：円形
P4569	円形	U 字状	32	30	51	13.77	10			柱痕：円形
P4562	楕円形	U 字状	42	（32）	41	13.86	13			柱痕：円形
P3171	円形	V 字状	26	24	42	13.88	27	砥石（313）		柱痕：円形

SB5321	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	34G・H、35G		2 間（4.48m）		2 間（4.20m）		N － 6° － W	18.8㎡		方形型・南北棟（SE3008 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3115	円形	半円状	26	22	15	14.16				
P3023	円形	U 字状	29	28	61	13.68				
P4583	円形	U 字状	25	22	24	14.06				
P4589	円形	半円状	28	25	18	14.13				
P3017	円形	U 字状	25	25	36	13.97				
P4579	円形	V 字状	21	21	25	14.00				
P4580	方形	階段状	32	31	36	13.89				
P4592	円形	U 字状	24	20	59	13.68			SK3183 と新旧不明	
P4591	円形	V 字状	22	21	22	13.99			SK3184 と新旧不明	
P3147	楕円形	U 字状	34	26	31	13.96			P4545 が旧	

SB4594	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	35G		1 間（2.00m）		1 間（1.97m）		N － 83° － E	3.9㎡		方形型・東西棟（SE3009 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P3170	円形	U 字状	30	30	40	13.84				
P3174	円形	弧状	29	27	17	14.11				
P3166	円形	U 字状	28	26	30	13.94	9			
P3189	円形	U 字状	24	22	20	14.06				

中世　D 東区　掘立柱建物（3）

SB4595	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	36G		1 間（3.63m）		1 間（1.96m）		N － 16° － W	7.1㎡		方形型・南北棟（SE3476 を伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P4560	円形	U 字状	24	22	36	13.92				
P3485	方形	台形状	29	26	15	14.10				
P3481	楕円形	U 字状	31	24	48	13.72				
P4561	円形	U 字状	24	23	50	13.74				

中世　D 東区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
3005	32G24・25 32H4・5	円形	階段状	1.00	0.87	2.10	12.20	素掘り				
3008	34G24・25	楕円形	階段状	2.16	1.20	2.16	12.16	素掘り		青磁椀（151）、砥石（314）、木地椀（411）・漆器椀（412）・用途不明部材（413）・折敷底板（414～418）・部材・側板		SB5321 に伴う
3009	35G5・9・10	円形	U 字状	1.05	1.01	2.22	12.07	素掘り		漆器椀		SB4594 に伴う
3476	36G9・10・14	円形	U 字状	1.35	1.30	2.30	11.88	素掘り		曲物（408）・曲物底板（409）・用途不明品（410）、珠洲焼甕か壺		SB4595 に伴う

中世　D 東区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3077	36G22	楕円形	半円状	0.82	0.60	0.30		SK3078 が旧	
3078	36G22	楕円形	弧状	0.95	0.74	0.12		SK3077 が新	
3179	35G15	楕円形	弧状	0.72	0.55	0.15		SK3180 が旧	
3180	35G15	楕円形	台形状		0.48	0.37		SK3179 が新	
3183	34G14・15・19・20	不整形	弧状	2.25	1.57	0.10		SB5321-P4591・4592、P4581・4590 と新旧不明	炭化物が底面上に厚く堆積している
4542	37G15・20、38G11・16	楕円形	V 字状	1.65	1.12	0.50			
4559	36G15、37G11	楕円形	弧状	0.70	（0.57）	0.14			1 層は炭化物層

中世　D 東区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
3001	33G、34G・H	N-83° -E	台形状	12.10 以上	1.04	0.42		P3013・3014 と新旧不明	両側の調査区外へと伸びている SD3002 と併走する
3002	33G、34G・H	N-83° -E	台形状	13.15 以上	1.04	0.32			両側の調査区外へと伸びている SD3001 と併走する
3003	32H、33G・H		弧状	9.20 以上	1.04	0.17		SD3006 が旧	東側の調査区外へと西両端が伸びている
3004	32G・H	N-68° -E	弧状	4.80 以上	0.82	0.20			
3006	33G・H	N-3° -E	台形状	6.00 以上	0.72	0.48		SD3003 が新	北側は収束しているが、南側は東側調査区外へと伸びている
3200	34B、35B・C	N-88° -E	台形状	12.70 以上	1.61	0.36		SF3201、P3219 が旧	

中世　D 東区　道路（SF）

遺構番号	位置	主軸方位	部位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長さ	幅	深さ			
3201	34B、35B～D、36D	西 N-82° -W、東 N-78° -E	側溝	U 字状	33.80 以上	0.70	0.22		SK3252、SD2238 が旧 SK3260・3261、SD2353・3200 が新 P3249・3250・3251・3253 と新旧不明	SF3499 に連続
3201	34B、35B～D、36D		波板状凹凸面	弧状	33.80 以上	1.54	0.06			
3499	37F・G、38G	N-89° -E	側溝	U 字状	16.34 以上	0.66	0.24			SF3201 に連続
3499	37F・G、38G		波板状凹凸面	弧状	9.80 以上	1.30	0.10			

中世　D 東区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
3474	36F22・23	楕円形	台形状	0.97	0.32	0.20			
3475	36F22	楕円形	台形状	0.80	0.24	0.11			

中世　E 南区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
2243	37B21・22	円形	U 字状	1.28	1.12	1.96	12.31	素掘り	Ⅷ	瀬戸・美濃焼平椀（154）		
2244	37B21	円形	U 字状	1.04	0.94	2.00	12.30	素掘り	Ⅷ			

中世　E南区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
2242	37B3・4・8	楕円形	弧状	1.20	0.54	0.24			
2250	38B8	楕円形	弧状	1.38	0.42	0.22			
2366	40G13・14・18・19	不整形	弧状	(2.30)	1.48	0.16		SD2050 が新 SD2051 と新旧不明	
2371	42D4・5	不整形	台形状		1.28	0.23		SD2050 が新	
3211	35B13	楕円形	台形状	0.54	0.34	0.14			
3222	35B25	楕円形	台形状	0.71	0.52	0.18			

中世　E南区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
2050	39H、40G･H、41F･G、42B ～ F、43C	西 N-46°-W、東 N-16°-W	弧状	70.50 以上	1.92	0.54	石鏃（67）、珠洲焼甕（157）・片口鉢（158･174）、青磁盤（159）、唐津焼得利（160）、土師質土器皿（161）、杭（419）、近世・近代磁器椀・仏飯器	SD2151・2165・2167・2079、SK2371・2366 が旧	SD2170 が西側に併走している 中・近世
2051	38・39E、40F・G	N-72°-E	台形状	31.00 以上	0.75	0.21		SD2170 が旧 SK2366 と新旧不明	SD2236 に連続 中・近世
2079	39F･G、40A･B･E･G、41A ～ E 、42D・E		弧状	76.00 以上	4.25	0.20	近世・近代陶器擂鉢	SD2050 が新 SD2170・2367 が旧	中・近世
2151	40H、41G・H、42G	N-4°-W	弧状	17.30 以上	1.18	0.18	珠洲焼壺か甕	SD2050 が新 SD2166 が旧 SD2164 と新旧不明	南側は東壁調査区外へ伸びている　中・近世
2164	42・43F・G	N-11°-E	弧状	13.50 以上	4.40	0.26	青磁椀（155）、信楽焼甕（156）、砥石（321）、珠洲焼壺か甕、近世･近代陶器椀、椀形鍛冶滓	SD2151・2168・2169・2187・2188 と新旧不明 SD2166・2167 が旧	北側は調査区外へと伸びている 中・近世
2165	40G・H、41・42F・G	西 N-82°-E、東 N-8°-W	弧状	21.00 以上	2.82	0.37	珠洲焼片口鉢・壺か甕	SD2050 が新	両端部共に SD2050 と重複している　中・近世
2166	42・43G・H	N-86°-E	台形状	7.55 以上	1.50	0.30		SD2151・2164 が新	東側は調査区外へと伸びている　中・近世
2167	41F、42F・G	N-88°-E	台形状	7.30 以上	1.10	0.15	珠洲焼片口鉢・壺か甕	SD2050・2151・2164 が新 SD2168・2169 と新旧不明	SD2166 と同じ溝の可能性がある　中・近世
2168	42F	N-62°-E	弧状	3.20 以上	0.60	0.09		SD2164・2167 と新旧不明	中・近世
2169	42F	N-65°-E	弧状	3.50 以上	0.90	0.12		SD2164・2167 と新旧不明	西側は調査区外へと伸びている　中・近世
2170	39G・H、40・41F・G、42B ～ E	N-13°-W	弧状	71.5 以上	0.54	0.26		SD2051・2079 が新 SD2177 と同時期	両端部は調査区外へ伸びている　中・近世
2177	41F・G	N-9°-W	弧状	5.95 以上	0.54	0.26		SD2170 と同時期	北側は調査区外へと伸びている　中・近世
2187	43G	N-54°-E	半円状	4.30 以上	0.45	0.24		SD2164・2188 と新旧不明	自然流路の可能性有り両側は調査区外へ伸びている　中・近世
2188	42・43G	N-17°-W	弧状	3.30 以上	0.35	0.06		SD2164・2187 と新旧不明	自然流路の可能性有り南端検出　中・近世
2236	36B・C、37C・D、38D	西 N-53°-W、東 N-85°-E	弧状	32.10 以上	0.78	0.10		SD2237 ～ 2239、P2245・2319 が旧 SD2353 が新	SD2051 に連続
2237	36B・C、37C	N-85°-E	弧状	21.20 以上	0.29	0.26	珠洲焼片口鉢	SD2236・2353 が新	
2238	35D・E、36D、37C・D	N-2°-W	弧状	27.60 以上	0.52	0.10		SD2236・2353、SF3201 が新	
2239	37D	N-66°-E	弧状	4.00 以上	0.40	0.14		SD2236 が新	
2240	37C・D、38D	N-76°-E	弧状	9.10	0.47	0.08		P2247 が旧	
2292	38・39E	N-87°-E	弧状	4.90	0.39	0.04			
2353	34E、35D・E、36D、37B ～ D、38B・C、39・40A・B	N-3°-W	弧状	61.94 以上	1.70	0.24	珠洲焼甕か壺、近世～現代陶磁器	SF3201、SD2236 ～ 2238 が旧	近世～近現代
2367	39G・H	N-29°-W	弧状	2.80 以上	(0.37)	0.11		SD2079 が新	南端検出 中・近世

中世　E区　掘立柱建物（1）

SB1939 その1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	47B、48B・C		3 間（8.40m）		1 間（4.42m）		N - 68° - W	37.1㎡（67.6㎡）		胴張型の四面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P1897	円形	U 字状	28	28	20	14.37				
P1203	円形	U 字状	30	30	20	14.40			SB1939-P1204 が旧	
P1204	円形	U 字状	(28)	24	30	14.33			SB1939-P1203 が新	
P1210	円形	U 字状	38	36	36	14.32				
P1216	円形	U 字状	36	32	37	14.28	11			
P1226	楕円形	U 字状	34	28	36	14.27				
P1232	円形	U 字状	30	30	54	14.14				
P1221	円形	U 字状	26	24	16	14.46				
P1219	円形	U 字状	38	36	52	14.11				
P1200	円形	U 字状	(30)	28	39	14.23	14			
P1202	円形	U 字状	34	30	33	14.36				
P1212	円形	半円状	30	28	10	14.52				束柱
P1385	円形	台形状	22	22	14	14.47				
P1205	円形	台形状	30	26	24	14.42				
P1206	円形	U 字状	26	24	22	14.40				
P1209	円形	U 字状	30	30	30	14.35				

中世　E 区　掘立柱建物（2）

SB1939 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P1388	楕円形	半円状	30	22	12	14.50				
P1215	楕円形	U 字状	32	26	28	14.34	12			
P1225	円形	U 字状	34	30	29	14.36				
P1391	楕円形	半円状	28	20	11	14.50				
P1227	円形	U 字状	30	26	28	14.36	9			
P1228	円形	U 字状	34	32	38	14.22				
P1231	楕円形	U 字状	42	32	48	14.14				
P1233	円形	半円状	38	34	18	14.48				
P1235	円形	U 字状	34	32	28	14.34				
P1222	楕円形	U 字状	36	28	24	14.35	9			
P1199	円形	半円状	26	24	14	14.46				

SB1940	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	46B・C、47B		3 間（7.12m）		1 間（3.56m）		N － 10° － E	25.3㎡（32.0㎡）		胴張型の一面廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P1272	円形	U 字状	30	28	34	14.24				
P1271	円形	U 字状	34	28	24	14.36				
P1276	楕円形	U 字状	46	34	30	14.30	10			
P1599	円形	U 字状	30	28	34	14.28				
P1598	円形	U 字状	36	34	47	14.16				
P1615	円形	U 字状	34	34	38	14.31				
P1611	楕円形	U 字状	40	32	36	14.34				
P1790	楕円形	U 字状	31	26	34	14.31				
P1993	円形	U 字状	24	19	60	14.00			SK1578 が旧	
P1602	円形	U 字状	34	32	26	14.30				
P1268	円形	U 字状	30	26	26	14.31				
P1560	円形	U 字状	42	38	36	14.22				
P1559	円形	U 字状	24	22	16	14.42				
P1900	円形	半円状	28	26	14	14.04			SK1578 が旧	
P1605	円形	U 字状	38	(36)	34	14.31			SB1940-P1961 が新	
P1961	円形	U 字状	38	33	36	14.29			SB1940-P1605 が旧	

SB1941	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	46・47C・D		4 間（8.28m）		2 間（4.12m）		N － 69° － W	34.1㎡		梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P1432	円形	U 字状	34	30	35	14.26			SK1430 が旧	
P1746	円形	U 字状	26	(22)	44	14.22				
P1466	円形	U 字状	(38)	34	50	14.15				
P1465	円形	U 字状	(34)	(30)	54	14.09				
P1821	円形	台形状	48	40	30	14.34			SK1480 が旧	
P1512	方形	階段状	36	34	54	14.10	10			
P1508	円形	台形状	26	26	10	14.58				
P1825	楕円形	弧状	22	18	8	14.61				
P1503	円形	U 字状	30	28	16	14.54				
P1498	円形	台形状	36	32	16	14.50			SB1941-P1497 が旧	
P1497	円形	台形状		24	14	14.51			SB1941-P1498 が新	
P1842	円形	U 字状	38		42	14.24			SB1941-P1841 が新	
P1841	円形	階段状	40	34	48	14.18	12		SB1941-P1842 が旧	
P1457	不整形	弧状	52	46	4	14.48				
P1678	楕円形	台形状	44	32	26	14.37				
P1427	楕円形	弧状	48	36	8	14.55			SK1430 が旧	

SB2766 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	44C・D		4 間（8.90m）		1 間（3.84m）		N － 70° － W	34.2㎡（49.4㎡）		胴張型の二面廂付梁間一間型・東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2377	楕円形	U 字状	44	36	42	14.05				
P2019	長方形	U 字状	34	28	62	13.70				
P2045	円形	U 字状	32	(28)	52	14.10				
P2061	円形	U 字状	28	28	40	14.14				
P2038	円形	U 字状	40	40	48	14.02	17			
P2030	円形	弧状	26	22	18	14.30				
P2071	楕円形	U 字状	38	28	56	13.96			SB2766-P2070 が新	
P2070	円形	U 字状	35	(30)	30	14.20			SB2766-P2071 が旧	
P2004	楕円形	U 字状	50	40	28	14.22				
P2075	円形	U 字状	38	34	48	14.06	16			
P2015	円形	漏斗状	90	82	74	13.79				
P2380	楕円形	階段状	50	36	58	13.94	16		SB2766-P2381 が旧	
P2381	円形	弧状	28	24	11	14.38			SB2766-P2380 が新	
P2057	円形	U 字状	40	34	46	14.68	16			
P2049	円形	箱状	36	30	16	14.36				

中世　E 区　掘立柱建物（3）

SB2766 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2055	円形	階段状	26	24	32	14.22				
P2023	円形	台形状	30	(28)	28	14.18			SB2766-P2022 が新	
P2022	円形	U 字状	29	(28)	32	14.18			SB2766-P2023 が旧	
P2158	楕円形	U 字状	26	18	22	14.29				
P2008	円形	箱状	24	22	22	14.35				
P2010	円形	U 字状	26	24	21	14.31				
P2011	楕円形	U 字状	26	21	14	14.38				
P2013	円形	U 字状	36	32	20	14.32			SB2766-P2014 が新	
P2014	円形	U 字状	(38)	36	18	14.34			SB2766-P2013 が旧	

SB2767	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	44C、45C・D		4 間（7.60m）		1 間（3.08m）		N － 87° － W	23.4㎡（30.4㎡）		一面廂付梁間一間型・東西棟（SK2607 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2624	円形	U 字状	(36)	34	22	14.30			SB2767-P2546 が旧 SB2770-P2708 が新	
P2546	円形	U 字状	40		22	14.34			SB2767-P2624 が新	
P2709	円形	U 字状	38	32	60	13.94			SB2767-P2583 が新	
P2583	不整形	U 字状	84	54	77	13.78			SB2767-P2709 が旧	
P2710	楕円形	U 字状	32	24	20	14.35			SX2621 が新	
P2732	円形	U 字状	24	24	20	14.20			SX2621 が新	
P2639	円形	U 字状	42	40	42	14.12	18			
P2635	楕円形	階段状	40	32	22	14.34			SB2767-P2636 が旧	
P2636	円形	U 字状	(32)	30	16	14.38			SB2767-P2635 が新	
P2671	楕円形	箱状	38	30	20	14.32				
P2599	円形	U 字状	42	38	32	14.19	16			
P2597	円形	階段状	(32)		52	13.98	10		SB2767-P2596 が新	
P2596	円形	階段状	(44)		58	13.92			SB2767-P2597 が旧	
P2711	円形	漏斗状	48	44	82	13.70			SB2767-P2618 が旧	
P2618	楕円形	階段状	74	60	40	14.08			SB2767-P2711 が新	
P2589	円形	U 字状	42	36	42	14.12			SB2767-P2588 が旧	
P2588	円形	U 字状	36	(30)	48	14.04			SB2767-P2589 が新 SB2768-P2587 が旧	
P2549	円形	U 字状	40	36	64	13.82				SB2768 と共有
P2626	円形	U 字状	28	24	28	14.28	16			
P2577	円形	U 字状	28	26	22	14.35				
P2642	円形	U 字状	30	30	26	14.19				

SB2768	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	45C・D		4 間（8.34m）		1 間（3.52m）		N － 87° － W	29.3㎡（37.9㎡）		一面廂付梁間一間型・東西棟（SK2607 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2549	円形	U 字状	40	36	64	13.82	16			SB2767 と共有
P2761	円形	U 字状	24		30	14.26			SB2768-P2579 が新	
P2579	円形	U 字状	28	28	33	14.21			SB2768-P2761 が旧	
P2644	円形	U 字状	30		24	14.29			SB2768-P2643 が新	
P2643	円形	U 字状	34	34	42	14.12			SB2768-P2644 が旧	
P2666	楕円形	U 字状	36	28	40	14.04	14			
P2669	楕円形	U 字状	(36)	25	50	13.99				
P2717	円形	U 字状	(30)		38	14.14	12		SB2768-P2716 が新	
P2716	円形	U 字状	28	(28)	41	14.11			SB2768-P2717 が旧	
P2598	円形	U 字状	36	32	40	14.12				
P2593	円形	箱状	26	24	24	14.27				
P2587	円形	U 字状	28		12	14.38			SB2767-P2588 が新	
P2555	楕円形	箱状	38	30	24	14.33				
P2564	円形	U 字状	32	28	38	14.20	14			
P2576	円形	U 字状	30	30	26	14.31				
P2650	円形	U 字状	38	34	50	14.00	18		SB2768-P2649 が旧	
P2649	円形	U 字状	33	(28)	25	14.24			SB2768-P2650 が新	

SB2769	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	44・45C		3 間（7.30m）		1 間（3.56m）		N － 4° － E	26.0㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2557	円形	U 字状	34	30	64	13.92				
P2548	円形	U 字状	52	44	52	13.92				
P2058	円形	漏斗状	36	(32)	74	13.79	12			
P2233	楕円形	U 字状	42	28	50	14.00				
P2520	楕円形	階段状	48	34	48	14.01	14			
P2517	円形	U 字状	38	36	62	13.90			SB2769-P2516 が新	
P2516	長方形	U 字状	29	22	23	14.28			SB2769-P2517 が旧	
P2706	楕円形	U 字状	40	26	60	13.91				

中世　E区　掘立柱建物（4）

SB2770	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	44C・D、45C		3間（6.96m）		1間（2.40m）		N - 6° - E	16.7㎡		梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P2556	円形	U字状	24	24	22	14.24				
P2708	楕円形	U字状	34	24	20	14.32			SB2767-P2624が旧	
P2060	円形	U字状	30	30	18	14.34				
P2068	楕円形	U字状	40	26	28	14.30				
P2538	円形	U字状	30		34	13.96			SB2770-P2537が新	
P2537	円形	U字状	30	28	54	13.98			SB2770-P2538が旧	
P2524	円形	U字状	39	34	36	14.19				
P2514	円形	U字状	30	28	34	14.19				

中世　E区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
1424	46C19・20・24・25	円形	U字状	1.14	1.00	1.95	12.67	素掘り 水溜有	礫層	椀形鍛冶滓		
1475	46D9・13・14	不整形	U字状	2.00	1.66	2.23	12.37	素掘り 水溜有	礫層	珠洲焼小型壺？、土師質土器		
1479	46D10・15 47D6・11	円形	U字状	1.12	1.10	1.94	12.69	素掘り	礫層			
1542	48D9・14	円形	U字状	1.20	1.16	1.65	13.03	素掘り	礫層			
1576	46C4・5・9・10	円形	漏斗状	2.14	1.94	2.36	12.30	素掘り 水溜有	礫層	白磁皿（169）、椀形鍛冶滓（273）		
1577	46B3・8・9	円形	漏斗状	2.28	2.14	2.28	12.36	素掘り 水溜有 （曲物）	礫層	青磁端反椀（172）、漆器椀（426）	SK1898、SD1583・1597と新旧不明	
1866	47C18・19	方形	U字状	1.24	1.22	1.83	12.77	素掘り 水溜有	礫層	青磁端反椀（170）、砥石（317）・珠洲焼片口鉢		
2001	44D2・7	円形	U字状	1.46	1.40	2.13	12.42	素掘り 水溜有	礫層	木片		
2201	44E6・11	円形	U字状	1.56	1.38	2.15	12.38	素掘り 水溜有 （側板）	礫層	白磁皿（171）、加工材		
2406	44E5・10 45E1・6	円形	階段状	2.44	2.24	2.50	11.96	木組み？ 水溜有	礫層	珠洲焼甕（173）・片口鉢（174・175）・壺T種（176）、瀬戸・美濃焼卸皿（177）、砥石（315・316）、箸状木製品（420～422）・白木皿（423）・椀（424・425）・不明木製品	P2730が新	
2608	45D13・14・18・19	楕円形	袋状	2.04	1.40	2.62	11.84	素掘り 水溜有	礫層	珠洲焼片口鉢（178）、瓦？、曲物細片	P2614・2615と新旧不明	

中世　E区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
1191	48A23・24	円形	台形状	0.58	0.58	0.14		SX1192が新	
1198	48B2	楕円形	弧状	0.86	0.62	0.08			
1255	47B19・24	楕円形	半円状	0.92	0.58	0.22			
1407	46C16・17	不整形	箱状	1.28	0.92	0.24		P1677が新	
1430	46C20・25、47C16・21	方形	弧状	2.18	2.06	0.30		SB1941-P1427・1432が新	竪穴遺構
1435	47C17	楕円形	弧状	0.96	0.56	0.04			
1461	46D5	楕円形	弧状	1.26	0.92	0.14	白磁皿（183）		
1480	47D6・7・11・12・16・17	長方形	台形状	3.44	2.80	0.24	銭貨（265・267）	SB1941-P1821、P1820・1861・1867が新	竪穴遺構
1484	46D23	円形	台形状	1.06	1.00	0.24	珠洲焼片口鉢（205）	P1483が旧 P1482が新	
1552	47C8	円形	弧状	0.62	0.56	0.08			
1575	46B4・5・9	方形	台形状	1.86	1.80	0.66	剥片石器（72）	P1791が旧	方形土坑
1578	46B13・14・18・19	方形	台形状	2.42	2.42	0.42		SB1940-P1900・1993が新 SD1581・1597と新旧不明	方形土坑
1585	46B21・22	楕円形	半円状	1.00	0.96	0.14			
1594	46B6・7・11・12	方形	弧状	1.40	1.30	0.22			
1606	46B12・17	楕円形	半円状	1.24	0.80	0.16		P1962が新	
1663	48C12・13	楕円形	台形状		0.60	0.10		P1938が新	
1667	46B16・17	楕円形	台形状	1.18	0.66	0.26		P1936が旧	
1898	46B7・8	円形	半円状	0.98		0.26		SE1577と新旧不明	
2041	44D8	楕円形	台形状	1.02	0.72	0.14			
2042	44D9	不整形	台形状	1.04	0.92	0.18			
2140	43D20・24・25	円形	弧状	1.80	1.68	0.38			
2253	44D23、44E3	長方形	台形状	1.70	1.22	0.22		P2028・2365が新P2372と新旧不明	方形土坑
2274	42E14・15	楕円形	弧状	0.98	0.80	0.12			
2394	44E16・17・21・22	不整形	弧状	1.76	0.88	0.10			
2604	45D14・15	方形	台形状	1.60	1.34	0.18		P2602・2603・2719、SK2605が旧	
2605	45D9・10・14・15	方形	台形状		2.06	0.28		SD2606、SK2604が新	方形土坑
2607	45C16・17・21・22、45D1・2	長方形	台形状	3.20	1.48	0.24		SK2763、SX2584が旧	SB2767・2768に伴う（厩付帯施設）
2609	45D23・24、45E3・4	長方形	台形状	2.30	1.58	0.10			方形土坑
2763	45C21、45D1	長方形	台形状	1.60		0.14		SK2607が新	

中世　E区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
1581	46B・C	N-78°-W	弧状	10.08以上	0.38	0.06		P1780・1779 が旧 SK1578 と新旧不明	
1583	46A・B	N-74°-W	弧状	3.44以上	0.38	0.07		SE1577 と新旧不明	
1586	46C	N-77°-W	弧状	7.16	0.36	0.07		P1899・1891 が新 P1910・1917 が旧	
1587	46C	N-74°-W	弧状	1.84	0.17	0.02		P1891 が新	
1588	46C	N-76°-W	弧状	2.80	0.24	0.08			
1591	45B	N-20°-E	弧状	4.32	0.34	0.14			
1592	45B	N-20°-E	弧状	2.88	0.22	0.04			
1593	45C	N-79°-W	弧状	4.96	0.32	0.10			
1597	46B	N-88°-W	弧状	1.36	0.20	0.04		SE1577、SK1578 と新旧不明	
1888	46E10・15	N-28°-E	弧状	2.20	0.84	0.12		SX1855 と新旧不明	SD1141 と同一遺構か
1892	46E15	N-67°-E	弧状	0.80	0.28	0.06		SX1855 と新旧不明	SD1141 と同一遺構か
2606	45D	N-76°-E	半円状	3.48	0.62	0.26		SK2605、P2718・2722 が旧	
2723	46E	N-11°-E	弧状	4.00	0.48	0.04			
2724	44F	N-17°-E	弧状	2.44以上	0.44	0.05		P2725 が新	

中世　E区　ピット（P）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
1417	46D2	円形	U字状	28	(26)	43	白磁皿（185）		
1445	46D7	円形	漏斗状	28	(26)	29	火打ち金？（249）		
1619	46D5	円形	U字状	(34)	(32)	20	砥石（320）		
1636	45C10	円形	U字状	33	28	24	青磁皿（184）		
2525	45C11	楕円形	U字状	32	26	24	砥石（319）		
2634	45D8	円形	U字状	34	32	28	珠洲焼片口鉢（186）		
2689	45E5	円形	U字状	28	(28)	41	砥石（318）		

中世　E区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
1192	48A24	不整形	台形状	0.88	0.52	0.14		SK1191 が旧	
1213	48B11・12・16・17	不整形	階段状		0.60	0.24			
1245	47A16	円形	V字状	1.18		0.54			
1855	46E8～10・13～15	楕円形	台形状	3.78	2.54	0.52	珠洲焼壺か甕	SX2610 が新　SD1141・1892・1888 と新旧不明	
2080	44C2	楕円形	U字状	0.60	0.36	0.18			自然礫多量出土　近世以降
2081	43C5・10	楕円形	半円状	0.78	0.58	0.18			自然礫多量出土　近世以降
2163	43E1・2・6・7・11・13	長方形	弧状	6.68以上	3.56以上	0.24			近世以降
2494	44B9・10・14・15	円形	半円状	0.85	0.76	0.23			
2574	45C24	不整形	台形状	0.82	0.38	0.26		P2713 が新	
2584	45C22・23	長方形	台形状		0.56	0.12		SK2607 が新 P2625 が旧	
2610	45・46D・E	方形	弧状	6.92		0.06		SX1855、P2728・2729 が旧	近世以降
2621	45D3	楕円形	弧状	1.12	0.78	0.12		SB2767-P2710・2732 が旧	
2697	45E15・19・20	楕円形	V字状	1.28	1.06	0.36			

中世　F区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
1376	53C23・24	円形	U字状	1.10	1.08	2.14	12.58	素掘り	礫層			

中世　F区　土坑（SK）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
1137	51A20・25、52A16・21	楕円形	台形状	0.96	0.78	0.18		P1935 が新	
1177	51D4	楕円形	弧状	0.78	0.58	0.12			
1354	53E2	楕円形	台形状	0.76	0.58	0.12			
1355	53E4	楕円形	弧状	0.94	0.80	0.12			
1359	53D19	方形	弧状	1.00	0.90	0.12			
1373	53C21	楕円形	弧状	0.98	0.72	0.12			
1374	53C16	楕円形	弧状	1.08	0.90	0.12			
1546	53E12	不整形	台形状	1.32	0.92	0.24			
1691	50E15、51E11	楕円形	台形状	0.76	0.54	0.10			
1692	51E7	方形	台形状	0.76	0.62	0.14			
1705	50D22、50E2	楕円形	台形状	1.28	1.00	0.26	銭貨（260・264）	SK1787 が新 SK1868 が旧	
1787	50E1・2	楕円形	弧状	1.36	0.72	0.18		SK1705・1868 が旧	
1868	50E2	円形	弧状	0.76		0.16		SK1705・1787 が新	

中世　F区　溝（SD）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
1012	49・50A・B	N-65°-W	台形状	9.44以上	1.00	0.28		SX1382、P1377・1380・1381が旧	
1141	46～54E	N-32°-E	台形状	75.75以上	2.20	0.58	青磁椀（179）、珠洲焼片口鉢（180）、須恵器壺（181）、瀬戸・美濃焼卸目付大皿（182）、瓦器擂鉢（187）、近世・近代陶器、椀形鍛冶滓	SX1785が旧 SX1855と新旧不明	SD1888・1892と同一遺構か
1171	52C・D	N-60°-W	台形状	3.04	0.38	0.26			
1348	53D・E 54C～E	N-56°-W	台形状	16.00	0.40	0.10			

中世　F区　道路（SF）

遺構番号	位置	主軸方位	部位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長径	短径	深さ			
330	54A・B・D、55B～E	N-64°-W	側溝	台形状	42.80以上	0.56	0.36			道路幅 4.54～5.98m
331	54A～D	N-63°-W	側溝	台形状	29.57	0.52	0.30			

中世　F区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
1014	50A22・23、50B2・3	方形	不整形	1.76		0.62			
1015	50B8・12・13・17・18	不整形	不整形	3.76		0.14			
1017	50B18・23・24	不整形	不整形	1.72	1.35	0.12			
1026	49B17・18・22・23	不整形	弧状	1.24	1.06	0.12			
1028	49B21、49C1	楕円形	弧状	0.76	0.38	0.06			
1029	49C1	楕円形	弧状	0.56	0.38	0.10	石鏃（69）		
1139	51B3	楕円形	U字状	1.04	0.32	0.20			
1360	53D7	楕円形	台形状	0.70	0.34	0.12			
1382	50A16・21	不整形	袋状	1.14	0.74	0.28		SD1012が新	
1785	49E10	不整形	台形状		0.50	0.26		SD1141が新	

中世G区　掘立柱建物（1）

SB881	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59・60A・B		4間（6.46m）		4間（6.06m）		N－18°－E	39.8㎡（49.9㎡）		複合型・南北棟（SE165が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P502	円形	U字状	25	23	44	14.06			SB885-P501が旧	
P490	円形	U字状	24	22	36	14.06				
P359	不整形	U字状	26	22	30	14.13				
P307	円形	U字状	26	24	28	14.16				
P217	円形	U字状	26	26	14	14.24				
P466	円形	U字状	21	21	18	14.20				底面に礎盤
P178	方形	U字状	22	22	30	14.06				
P101	円形	漏斗状	30	28	32	14.06				
P739	楕円形	U字状	36	28	39	13.98				
P510	楕円形	U字状	30	22	30	14.21			P173が旧	
P206	円形	U字状	24	24	46	13.98				
P481	楕円形	U字状	24	20	36	13.96			SD53が新	
P273	円形	U字状	28	28	24	14.22				
P578	楕円形	U字状		20	36	13.98			SK406が旧 P405が新	
P332	楕円形	U字状	24	16	68	13.80				
P149	楕円形	U字状	40	30	58	13.82				
P150	方形	U字状	22	18	26	14.20				
P598	楕円形	U字状	24	18	30	14.07				
P407	円形	U字状	30	26	40	14.08	14			
P392	楕円形	U字状	24	18	32	14.14				
P63	方形	U字状	28	26	50	13.96				
P311	長方形	U字状	28	20	34	14.12				

SB882 その1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59A・B、60B		4間（6.76m）		1間（2.92m）		N－73°－W	19.7㎡（30.3㎡）		二面廂付梁間一間型・東西棟（SE197が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P207	楕円形	箱状	44	36	24	14.12		瀬戸・美濃焼平椀（191）		SB884と共有
P416	円形	U字状	18	18	56	13.85	8			
P418	不整形	漏斗状	64	38	52	13.89			SE165が新	
P296	楕円形	漏斗状	36	30	40	14.09				
P145	円形	U字状	28	26	60	13.92			SB882-P144と新旧不明	
P144	円形	U字状	21	20	16	14.33			SB882-P145と新旧不明	
P324	円形	箱状	28	24	16	14.32				
P334	円形	U字状	20	19	15	14.33				
P155	楕円形	U字状	36	25	37	14.11				

中世 G 区　掘立柱建物（2）

SB882 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P156	円形	U 字状	28	28	30	14.20				底面に礎盤
P184	円形	U 字状	22	20	33	14.13				
P185	方形	箱状	24	22	16	14.19				
P361	楕円形	階段状	32	24	48	14.06	8		SB882-P196 が旧	
P196	楕円形	U 字状	31	22	21	14.24			SB882-P361 が新	
P212	楕円形	U 字状	20	18	44	14.06			SB882-P213 が新	
P213	方形	U 字状	20	18	50	14.04			SB882-P212 が旧	
P350	円形	U 字状	32	28	56	13.92			SK351 が旧	
P142	円形	漏斗状	30	26	54	13.87				
P333	方形	U 字状	30	28	38	14.06			P127・129 と新旧不明	
P126	楕円形	階段状	38	30	42	14.03	10			
P153	不整形	U 字状	30	26	24	14.22				
P158	方形	V 字状	24	22	24	14.21				
P186	円形	U 字状	30	28	49	13.98				
P195	方形	U 字状	24	20	22	14.26				
P193	楕円形	階段状	38	28	30	14.14				

SB883	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59・60A・B		5 間（10.16m）		2 間（4.60m）		N － 18° － E	46.7㎡（66.1㎡）		二面廂付総柱型 ・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P290	楕円形	漏斗状	48	38	72	13.71			SB884-P291 が新	
P556	円形	U 字状	24	20	42	14.03				
P284	円形	階段状	(40)	36	82	13.65			SB884-P27 と新旧不明	
P493	楕円形	漏斗状	32	24	55	13.96	8			
P900	楕円形	U 字状	20	14	46	14.04			SK6 が旧	
P395	方形	U 字状	26	22	40	14.03				
P335	長方形	U 字状	32	24	48	14.05	10			
P146	方形	U 字状	26	23	60	13.88	12			
P294	円形	U 字状	34	30	28	14.10	8			
P421	楕円形	U 字状	44	35	40	14.00	12		SK552 が新	
P58	方形	漏斗状	36	34	36	14.09				
P67	方形	U 字状	38	34	40	14.02				
P483	円形	漏斗状	32	28	38	14.00	10			SB885 と共有
P75	楕円形	U 字状	44	30	52	13.91				SB885 と共有
P281	円形	U 字状	34	30	69	13.72				
P278	楕円形	箱状	40	31	38	14.05				
SX322	楕円形	弧状	60	32	10	14.35				
P54	楕円形	漏斗状	42	36	60	13.86				
P35	円形	U 字状	24	22	30	14.14				
P436	円形	U 字状	22	20	22	14.21				
P285	長方形	U 字状	30	22	16	14.30				
P22	楕円形	U 字状	36	28	40	14.01				
P20	円形	U 字状	32	28	34	14.18				
P396	円形	U 字状	24	24	36	14.20				
P352	長方形	台形状	36	22	16	14.37				
P489	不整形	漏斗状	40	30	44	14.04				
P374	円形	U 字状	28	26	64	13.80	14			
P384	円形	U 字状	32	32	48	13.90		珠洲焼中型甕（190a）	P69 と新旧不明	
P77	円形	U 字状	28	24	20	14.24			SB885-P79 が旧	

SB884 その 1	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59・60A・B		5 間（10.44m）		4 間（7.78m）		N － 16° － E	81.5㎡（97.6㎡）		二面廂付複合型・南北棟（ SE7 が伴う）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P291	楕円形	漏斗状	38	26	32	14.08			SB883-P290 が旧	
P31	楕円形	U 字状	44	31	84	13.58				
P27	不整形	U 字状	76	50	50	13.96			SB883-P284 と新旧不明	
P15	楕円形	U 字状	48	32	52	13.98			P16 が旧	
P496	円形	U 字状	24	22	45	14.05			SK6 が旧	
P600	円形	U 字状	22	22	30	14.20				
P147	方形	U 字状	32	32	44	14.02				
P301	方形	U 字状	44	42	38	14.05				
P579	円形	台形状	44	40	20	14.28				
P57	楕円形	階段状	52	34	50	13.96		珠洲焼中型甕（190a）	P522 が旧	
P66	楕円形	U 字状	65	44	56	13.87			P264 が新	
P74	円形	U 字状	49	45	53	13.90		加工板？	P448 と新旧不明	
P388	楕円形	階段状		44	34	14.06	10		P387 が新	
P461	不整形	半円状	24	22	12	14.28				

中世 G 区　掘立柱建物（3）

SB884 その 2

柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P263	不整形	階段状	44	36	60	13.84			P48 が旧	
P52	楕円形	U 字状	30	22	18	14.29				
P36	楕円形	U 字状	26	22	40	14.05				
P508	楕円形	U 字状	24	20	28	14.20			SK406 が旧	
P207	円形	半円状	44	38	26	14.13		瀬戸・美濃焼平椀（191）		SB882 と共有
P174	円形	弧状	44	38	8	14.36				SB885 と共有
P176	楕円形	U 字状	36	26	56	13.82				SB885 と共有
P95	楕円形	階段状	60	42	74	13.67				
SX82	不整形	台形状	112	64	20	14.26				
P78	円形	U 字状	29	（26）	38	14.06			SB885-P79 が新	
P283	円形	弧状	44	36	10	14.35				
P389	円形	U 字状	36	30	18	14.28				
P581	円形	U 字状	30	26	12	14.36				
P18	楕円形	U 字状	24	20	20	14.34				
P135	円形	U 字状	20	20	28	14.15				
P136	円形	U 字状	24	22	22	14.28				
P148	円形	U 字状	26	24	36	14.13				
P151	楕円形	U 字状	26	20	42	14.06	10			
P300	円形	U 字状	22	22	28	14.20				
P357	円形	箱状	22	22	16	14.26				
P204	方形	U 字状	24	22	46	13.98				
P203	不整形	階段状	60	54	66	13.77	14	瀬戸・美濃焼平椀（191）		

SB885	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59 ～ 61A		6 間（16.00m）		2 間（4.50m）		N － 18° － E	72.0㎡		二面以上廂付梁間一間型・南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P841	楕円形	U 字状	30	20	20	14.26				
P79	円形	U 字状	46	44	72	13.73			SB884-P78 が旧 SB883-P77 が新	
P329	楕円形	漏斗状	44	36	68	13.71			P70 が旧	
P501	不整形	弧状	46	36	8	14.35			SB881-P502 が新	
P373	不整形	箱状	70	54	50	13.92				
P168	円形	箱状	36	34	20	14.24				
P174	円形	弧状	44	38	8	14.36				SB884 と共有
P258	円形	弧状	28	26	10	14.24				
P180	円形	階段状	42	40	45	13.88				
P106	円形	U 字状	18	16	39	13.96				
P97	円形	U 字状	40	34	47	13.92				
P92	円形	U 字状	24	23	32	14.08				
P80	方形	箱状	25	23	26	14.18				
P459	楕円形	階段状	32	24	26	14.13				
P94	円形	U 字状	36	30	42	14.02				
P382	楕円形	U 字状	32	24	25	14.14			P383 が新	
P176	楕円形	U 字状	36	26	56	13.82				SB884 と共有
P886	円形	台形状	36	36	28	14.16				
P874	楕円形	U 字状	44	36	72	13.76				
P75	楕円形	U 字状	44	30	52	13.91				SB883 と共有
P483	円形	漏斗状	32	28	38	14.00	10			SB883 と共有
P555	楕円形	箱状	32	24	16	14.24				
P59	方形	U 字状	32	28	30	14.18				
P420	円形	U 字状	32	28	42	14.00				
P634	円形	U 字状		20	34	14.09			SE165 が新	
P219	円形	U 字状	26	25	28	14.13				

SB887	位置		桁行		梁行		桁行方向	床面積（敷地面積）		構造
	59・60A		3 間（7.12m）				N － 20° － E			二面以上廂付梁間一間型・南北棟（西側が調査区外）
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P98	円形	U 字状	30	28	40	13.98				
P105	楕円形	階段状	50	34	48	13.88			SK104 が新	
P182	楕円形	U 字状	34	24	46	13.90		珠洲焼片口鉢（194）		
P227	円形	U 字状	40	（34）	45	13.94			P549 と新旧不明	
P90	円形	U 字状	30	24	40	14.02			P262 と新旧不明	
P103	楕円形	U 字状	20	16	44	13.94				
P179	円形	漏斗状	26	25	44	13.90				
P222	楕円形	漏斗状	38	24	48	13.90			P221 が新	
P430	円形	U 字状	22	22	32	14.05	14			
P255	円形	U 字状	20	18	24	14.12				
SK256	楕円形	弧状	84	42	10	14.28				
P465	楕円形	箱状	32	24	14	14.23				

中世　G 区　杭列（SA）

SA893	位置		全長	間尺	主軸方向					
	60・61B		9.80m	2.5 ～ 2.8m						
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P834	円形	台形状	26	24	14	14.37				
P438	円形	U 字状	25	24	36	14.12				
P439	円形	U 字状	20	18	10	14.40				
P446	方形	U 字状	16	14	11	14.35				
P636	円形	U 字状	22	21	18	14.31				

SA897A	位置		全長	間尺	主軸方向					
	60・61D		10.16m	1.6、2.0m	N － 3° － E					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P766	方形	U 字状	26	25	20	14.42				
P735	楕円形	U 字状	28	23	18	14.40				
P698	方形	U 字状	20	20	16	14.46				
P693	楕円形	U 字状	26	21	16	14.48				
P691	円形	U 字状	32	28	18	14.48				根石
P720	不整形	U 字状	25	20	40	14.23				
P730	不整形	U 字状	36	23	28	14.34				

SA897B	位置		全長	間尺	主軸方向					
	60・61D		2.16m		N － 3° － E					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
P771	楕円形	箱状	42	28	34	14.28				
P769	円形	U 字状	21	22	20	14.46				

SA898	位置		全長	間尺	主軸方向					
	60・61D		17.16m		N － 5° － E					
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	底面標高（m）	柱痕推定径（cm）	出土遺物	切り合い	備考
多数	円形		8 ～ 16	8 ～ 16	5 ～ 26	14.42 ～ 14.60				径 10cm、深さ 10cm 程の小ピット 66 基で構成される

中世　G 区　井戸（SE）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			底面標高（m）	形態	底面の土層	出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ						
7	60A13・14・18・19	不整形	U 字状	1.88	1.54	1.92	12.48	素掘り	Ⅶ	珠洲焼中型甕（190a）・片口鉢（196･197）、砥石（323）、曲物側板・加工板・杭？・井戸枠？	P484・449、SB883 が旧	SB884に伴う
165	59A20・25 60A16・21	円形	U 字状	1.42	1.25	1.60	12.82	素掘り	Ⅶ	青磁椀（192）、銅製品（252）	SB882-P418・SB885-P634、SK552、P580 が旧	SB881に伴う
192	59A17	円形	U 字状	1.40	1.30	1.68	12.80	素掘り	Ⅶ上方	珠洲焼片口鉢（194・199）	P413 が旧	
197	59A23・24	円形	U 字状	1.03	0.90	1.56	12.90	素掘り 水溜曲物	Ⅶ下方	曲物側板		SB882に伴う
226	59A4・9	楕円形	U 字状	1.20	（1.00）	0.90 以上		素掘り	Ⅶ付近	箸？	SX225 が新	
233	59A3・8	円形	U 字状	1.46	1.40	1.78	12.62	素掘り	Ⅶ	珠洲焼中型甕（190a・c）、瀬戸・美濃焼平椀（191）、砥石（324・325）		
245	59A6・7・11	円形	U 字状	1.96	1.93	1.74	12.68	素掘り 水溜曲物	Ⅶ	珠洲焼中型甕（190c）、片口鉢（194・195）、曲物底板（427）	P464 が旧	
601	60E5・10	円形	U 字状	2.04	1.92	2.34	12.46	井戸側 曲物	Ⅶ	珠洲焼片口鉢（193）、箸状木製品（428）・曲物底板（429・430）・漆塗膜（431）・曲物側板（432）・井戸枠	SK872 が旧	
606	58D15・19・20	円形	半円状	2.12	1.86	1.79	12.80	素掘り 曲物	Ⅶ	珠洲焼中型甕（190c）、木製品		
648	60D24・25	不整形	階段状	1.72	1.60	2.12	12.56	曲物 簡易石組	Ⅶ	珠洲焼片口鉢（197）、栓状木製品（433）・曲物側板（434）・加工板・部材・箸？	SD585 が旧	
822	61A16・17・22	円形	U 字状	1.84	1.68	2.14	12.28	井戸側 曲物	Ⅷ層	珠洲焼片口鉢（200）、箸状木製品（435）・曲物底板（436 ～ 438）・曲物（439）・井戸側板（440 ～ 442）、骨片		

中世　G 区　土坑（SK）（1）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
2	60B10・15、61B6	楕円形	半円状	0.94	0.76	0.22		P32 が新	
3	60B9	円形	弧状	0.92	0.80	0.12		P326・895 が旧	
4	60B13・14	円形	半円状	1.04	1.02	0.46			
5	60B7・12	楕円形	弧状	0.80	0.61	0.12		SD10、P470 が旧	
6	60B6・7	楕円形	弧状	1.00	0.75	0.20		SB883-P900・SB884-P496 が新	
8	60A15	円形	弧状	0.63	0.53	0.14			
46	60A24・25、60B4・5	不整形	階段状	0.87	0.55	0.50			
56	60A21・22、60B1・2	円形	階段状	0.67	0.58	0.36			
104	60A6・7	円形	漏斗状	0.60	0.54	0.66		SB887-P105 が旧	

中世　G 区　土坑（SK）（2）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
108	60B13	円形	箱状	1.57	1.34	0.76			
109	60B12・17	楕円形	弧状	0.72	0.50	0.22			
115	59B20	楕円形	台形状	0.81	0.44	0.22	珠洲焼中型壺 T 種（203）		
116	59B20	楕円形	U 字状	1.24	0.51	0.62			
118	59B18・19	楕円形	U 字状	1.04	0.36	0.46			
140	59B10・15	楕円形	U 字状	1.06	0.34	0.14			
159	59B3・8	楕円形	弧状	0.65	0.42	0.10			
218	59A14	楕円形	弧状	1.18	0.39	0.15	珠洲焼中型甕（190b）		
229	59A8	円形	漏斗状	0.69	0.58	0.15			
256	59A13	楕円形	弧状	0.84	0.41	0.10			
257	59A12	楕円形	弧状	0.78	0.47	0.30			
287	60B14・15	楕円形	弧状	1.28	1.07	0.28		P288 が新	
351	59B10、60B6	楕円形	弧状	0.90	0.60	0.12		SB882-P350、P349 が新	
354	60B11	楕円形	弧状	1.08	0.44	0.22		SK394 が新 SK410 が旧	
380	60A21	楕円形	台形状	1.10	0.62	0.28		P381 が旧	
385	59B19・24	楕円形	U 字状	1.30	0.54	0.66		P117 が新	
394	60B6・11	不整形	台形状	1.01	0.37	0.30	青磁椀（201）、砥石（328）	P894、SK354 が旧	
400	59B20、60B16	不整形	弧状	0.80	0.35	0.16			
401	60B6	円形	弧状	0.64	0.52	0.13			
406	60B1	楕円形	弧状	0.74	0.58	0.10		SB881-P578・SB884-P508、P576 が新	
410	59B15、60B11	不整形	台形状	1.48	0.76	0.30		SK354 が新	
460	60A14	長方形	弧状	0.88	0.45	0.08			
504	60A7	長方形	台形状	1.37	0.56	0.28		P422・503 が新	
512	60D21	円形	台形状	0.82	0.74	0.43			
534	58B8	楕円形	半円状	1.14	0.64	0.36			
552	60A21	円形		0.88		0.26		SE165 が新 SB883-P421 が旧	
572	60B16	楕円形	U 字状	0.80	0.26	0.20			
595	59C24、59D4	隅丸方形	半円状	1.44	1.18	0.68	珠洲焼片口鉢（204）	SD266 と同時期	
664	58E5・10	長方形	箱状	0.78	0.54	0.42	珠洲焼中型壺 T 種（203）		
676	60D5・10	楕円形	台形状	1.25	0.60	0.36			
677	61C22	円形	弧状	1.25	1.08	0.16			
680	60C18	楕円形	半円状	0.57	0.32	0.19			
681	60C12	楕円形	台形状	0.76	0.45	0.22			
688	61C18・23	楕円形	弧状	1.03	0.78	0.20			
695	60D19	不整形	台形状	1.15	0.63	0.48			
718	60C25	楕円形	台形状	1.00	0.50	0.20			
722	61E1・2	楕円形	弧状	0.78	（0.60）	0.12		SD584 が新	
756	60C6・7	楕円形	台形状	1.22	0.96	0.35			
812	61A23	楕円形	弧状	1.04	0.81	0.20			
813	61A19	円形	半円状	1.04	1.04	0.26			
814	61A14	円形	弧状	0.59	0.52	0.08			
815	61A8・9	楕円形	弧状	0.88	0.58	0.16			
817	61B2・7	円形	弧状	0.78	0.68	0.12			
831	63D12・13・17・18	長方形	台形状	2.62	2.12	0.53			方形土坑
853	62C2	楕円形	台形状	1.28	0.96	0.22		SD846 が新	
854	60E8		台形状			0.94			
872	60E4・5	円形	半円状	（1.04）	1.00	0.39		SE601 が新	

中世　G 区　溝（SD）（1）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
1	59C、60B・C、61・62B	N-26°-E	弧状	33.87	0.40	0.07		SD266・568 が旧 SD849 が新	
10	60B	N-19°-E	弧状	3.04	0.22	0.04		SK5、P470・475 が新	
53	60B	N-7°-E	弧状	2.86	0.42	0.12		SB881-P481、P270 が旧	
76	60A	N-10°-E	弧状	1.50	0.60	0.08		P562・738 が旧	
160	59B	N-80°-W	台形状	1.78	0.46	0.08			
266	59B・C	N-69°-W	台形状	13.88	0.58	0.11		SD1 が新 SK595 と同時期	
313	59B	N-60°-W	弧状	2.84	0.45	0.08	珠洲焼片口鉢（197）		
408	59D	N-29°-E	弧状	6.20	1.08	0.06			溝底面は道路の硬化面と類似している
409	57E、58D・E、59D	N-20°-E	台形状	22.60	0.48	0.54			
468	60A・B	N-88°-W	弧状	5.23	0.22	0.08		P386 が新	
511	59・60E	N-25°-E	弧状	0.78	0.28	0.06			SD585 に連続
513	59D	N-65°-W	台形状	8.50	0.65	0.36	磨石類（78）、珠洲焼片口鉢（197）、砥石（326）		
519	59D・E	N-18°-E	弧状	2.10	0.39	0.08			
520	59・60E	N-34°-E	弧状	9.40	0.50	0.04			溝底面は道路の硬化面と類似している
568	59・60C	N-78°-W	弧状	4.40	0.38	0.45		SD1 が新	
584	61E	N-56°-W	弧状	7.10 以上	0.32	0.14		SK722、P696 が旧	
585	60D・E、61・62D	N-22°-E	台形状	25.10	0.37	0.14		SE648、SD802、P640・641 が新	SD511 に連続

中世　G 区　溝（SD）（2）

遺構番号	位置	主軸方位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長さ	幅	深さ			
629	57・58E	N-21°-E	弧状	13.50	0.45	0.10	珠洲焼中型甕（190c）		
630	57・58E	N-32°-E	弧状	10.22	0.50	0.03			底面は道路遺構の硬化面に類似する
675	60D	N-21°-E	台形状	3.65	0.44	0.54	短刀？（253）、鍛冶滓		
802	62D、63D・E	N-82°-W	弧状	17.30 以上	0.65	0.10	珠洲焼小型壺、土師質土器皿、近世染付椀・皿	SD585・827・845・847 が旧	
803	63C	N-79°-W	弧状	5.64	0.32	0.10			
809	59・60D	N-28°-E	弧状	3.84	0.26	0.08			
810	63E	N-87°-W	弧状	4.90 以上	0.36	0.07			
827	63D	N-63°-W	台形状	5.08	0.32	0.15	珠洲焼片口鉢（205）	SD802 が新、SD845 が旧	
845	63D	N-73°-W	台形状	6.00	1.52	0.13		SD802・827・847 が新	
846	62C	N-83°-W	弧状	8.96	0.60	0.12		SK853 が旧	
847	63D・E	N-59°-E	弧状	3.48	0.40	0.06		SD802・845 が新	
848	62C	N-83°-W	弧状	7.80	0.36	0.08			
849	61A、62A ～ C	N-81°-W	弧状	26.25	0.95	0.20		SD1 が旧	
850	62A ～ C	N-81°-W	台形状	16.83	1.10	0.02		SF799-P7 が新	
851	63D・E、64E	N-79°-E	台形状	17.36 以上	0.66	0.19		水田 805 が新	
855	60E	N-13°-E	弧状	2.87	0.30	0.10			

中世　G 区　道路（SF）

遺構番号	位置	主軸位置	部位	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
					長さ	幅	深さ			
799	61A、62A・B	N-81°-W	側溝	弧状	3.00 以上	0.20	0.05		SX797 が旧	
			波板状凹凸面	弧状	12.00 以上	2.50	0.02		SD850 が旧	

中世　G 区　ピット（P）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（cm）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
30	60B10	楕円形	漏斗状	45	26	56	珠洲焼片口鉢（198）		
521	60A19	円形	U 字状	20	18	49	珠洲焼片口鉢（198）		
655	58E1	楕円形	弧状	34	24	5	砥石（327）		
776	60C23	楕円形	U 字状	29	22	22	鉄製品（251）		
856	61A12	円形		28	24	50	珠洲焼中型壺 T 種（202）		

中世　G 区　性格不明遺構（SX）

遺構番号	位置	平面形	断面形	規模（m）			出土遺物	切り合い	備考
				長径	短径	深さ			
93	60A3・8	楕円形	弧状	0.58	0.18	1.04			
119	59B13	不整形	箱状	1.14	0.42	0.22		SX122 が旧	
120	59B17・18	楕円形	弧状	0.62	0.45	0.09			
122	59B13・14	不整形	弧状	1.22	0.56	0.08	珠洲焼中型甕（190c）	SX119 が新	
225	59A9	楕円形	台形状	1.80	0.38	0.30		SE226 が旧	
234	59A12・13	楕円形	弧状	1.01	0.76	0.11	珠洲焼片口鉢（194）・壺か甕	P427、SX343 が旧	
236	59A12・17	不整形	半円状	0.86	0.60	0.24			
249	59B12・13	楕円形	半円状	0.59	0.36	0.22			
259	59A5	不整形	半円状	0.62	0.50	0.20			
343	59A12・13	楕円形	弧状	2.52	0.80	0.10		SX234 が新	
498	60A23・24、60B4	不整形	弧状	2.48	0.92	0.20		P499・566 が旧	
608	58D4・9	不整形	弧状	1.46	0.33	0.06			
678	60C10・15、61C6・11・16・21	不整形	弧状	6.24	1.38	0.32			
700	60C9・13・14・19・24	不整形	弧状	6.00	1.80	0.44			
701	61D2・7	円形	台形状	1.54	1.40	0.26			
723	61C21、61D1	不整形	台形状	2.42	1.39	0.23			
797	62A12・13・17・18	不整形	弧状	2.18	1.78	0.12		SF799 が新	
909	58C21・22	不整形	弧状	0.66	0.20	0.11			

中世　H 区　水田

遺構番号	位置	ブロック	規模（m）		出土遺物
			長軸	短軸	
788	62A	J	3.44	1.20	
789	62A	J	1.86	0.84	
790	62A・B	J			
791	63B	J	3.10	(3.87)	
792	62B	J			
793	62B	J	1.00	3.20	
794	62・63A	F	2.80	2.68	珠洲焼中型甕（190a）
795	62A	F	1.64	1.70	
796	62・63A	F			
798	63・64A	F			
800	63C	K			

遺構番号	位置	ブロック	規模（m）		出土遺物
			長軸	短軸	
801	63C	K			珠洲焼中型壺 T 種（203）
804	63C・D	K			
805	63D	K			刀子？（254）、珠洲焼中型壺 T 種（203）
806	65・66E	E			
807	65E	E			
808	65D	D			
825	64D	H			
826	63・64C・D	H			珠洲焼中型壺 T 種（203）
828	65C	C	5.60	3.40	
829	64・65B・C	C			
852	63E				珠洲焼片口鉢（235）
910	63・64A・B	G			

縄文土器観察表（1）

凡例：1　色調　［小山・竹原 1996］に依る。　2　胎土　英：石英、長：長石、針：海面骨針　3　残存部位　口：口縁部、体：体部、底：底部、完：完形品およびこれに準ずるもの。

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
1	E	JSX2748 土器集中②・ JSX2751/	39B21・39C1/ 39C7	1/ Ⅶa	縄文土器	深鉢	口～底	18.8	11.6	33.8	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	前期末葉	大木６式。　体：縄文 LR。
2	E	JSX2748 土器集中①	39B21	1、Ⅶa	縄文土器	深鉢	口～底	13.1	12.8	32.5	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	前期末葉	大木６式。　口：連続指頭圧痕。体：縄文 LR。底：ナデ。
3	E	JSX2753 土器集中①	38C15	1	縄文土器	深鉢	口～体	(29.0)	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　繊維	黄橙	並	前期末葉	大木６式。体：縄文 LR。
4	E	JSX2753 土器集中② /	38C15/ 38C15	1/ Ⅵ	縄文土器	深鉢	完	24.4	14.3	34.2	褐灰 / 英　長　白砂	褐灰	並	前期末葉	大木６式。口：波状口縁。体：縄文 RL。底：ナデ。
5	E	JSX2751・ JSX2759・ JSX2748 土 器集中① /	39C1・38C15・39B21/ 39B21、38C5・10・15、 39C1・6 38C5・15	1・1/ Ⅵ、Ⅶa、Ⅶb	縄文土器	深鉢	口～体	21.7	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	前期末葉	大木６式。口：窪み２か所。体：縄文 LR、補修孔１対。
6	E	JSX2751/	39C1/ 39B21	1、覆土 / Ⅶa		深鉢	口～体	12 .0	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　繊維	黄橙	並	前期末葉	大木６式。体：縄文 LR。
7a～c	E	自然流路	43B24（下層 5Tr）	覆土	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	にぶい黄褐 / 英　長　白砂　繊維	にぶい黄橙	並	前期末葉	
8a	C	JSX9747	22C18・19・23・24	1、Ⅳd	縄文土器	深鉢	口～体	(30.5)	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　金雲母	明黄褐	並	中期初頭	古屋敷式併行。口：半截竹管文。体：縄文 LR。
8b	C	JSX9747/	22C18・19・23・24/ 22C13・18・19・23・24	1/ Ⅳ・Ⅳd	縄文土器	深鉢	口～体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　金雲母	明黄褐	並	中期初頭	古屋敷式併行。口：半截竹管文。体：縄文 LR。
8c	C	JSX9747/	22C18・19・23/ 22C18・19	1/ Ⅳd	縄文土器	深鉢	体～底	—	14.5	—	褐灰 / 英　長　白砂　金雲母	明黄褐	並	中期初頭	古屋敷式併行。体：縄文 LR。底：ナデ。
9a	C	JSX9829	25B17	1	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	中期中葉	王冠型土器。
9b	C	JSX9829	25B17	1	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	中期中葉	王冠型土器。
9c	C	JSX9829/	25B17/ 25B17、25C3	1/ Ⅴ	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	中期中葉	王冠型土器。
9d	C	JSX9829	25B17	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	中期中葉	王冠型土器。
10	A	JSH8625/	10C5/ 10C5	1/ Ⅳd	縄文土器	深鉢	口～体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄橙	並	中期	体：縄文 LR・RL。
11	A	JSH8588	11C19・24/ 23D24、10C	1/ Ⅳc、攪乱	縄文土器	深鉢	口～体	30.5	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	明黄褐	並	中期中葉	大木 8b 式（古）。口：４単位波状。
12a・b	A	JSH8587	10C10	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい橙	並	中期中葉	大木 8b 式。体：縄文 LR、平行沈線。
13a	B	—	17A24	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	体：縄文 LR。
13b	B	JSX8447	17A19	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	体：縄文 LR。
13c	B	JSX8447	17A19	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	体：縄文 LR。
13d	B	JSX8447	17A24	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	体：縄文 LR。
13e	B	JSX8447	17A19	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	体：縄文 LR。
13f	B	JSX8447	17A13・18	Ⅳc	縄文土器	深鉢	底	—	8.8	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい黄褐	並	後期中葉	底：ナデ。
14a	C	—	22D14	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　径～ 3mm の礫多	浅黄橙	並	中期初頭	体：縄文 RL。
14b	C	—	22D14	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体～底	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　径～ 3mm の礫多	浅黄橙	並	中期初頭	
15	C	—	21D23	Ⅴ	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂	黄褐	並	中期中葉	馬高式。
16	C	—	28D13	Ⅴ	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　金雲母	にぶい褐	並	後期前葉	三十稲場式。口：隆帯上連続刺突。体：爪形文。
17	C	—	28D13	Ⅴ	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　金雲母	明赤褐	並	後期前葉	三十稲場式。体：爪形文。
18	B	—	14D20	Ⅳd	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　金雲母	にぶい黄褐	並	後期前葉	三十稲場式。体：丸棒状工具による連続刺突。
19	B	—	15D13	Ⅳd	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂多　金雲母多	にぶい黄褐	並	後期前葉	三十稲場式（新）。口：隆帯状沈線・刺突。
20	B	—	18E5	Ⅳd'	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	にぶい黄橙 / 英　長　白砂多　金雲母	にぶい黄橙	並	後期前葉	三十稲場式（新）。体：沈線、器面荒れ顕著。
21a	B	—	12C9	Ⅳc	縄文土器	注口土器	口～体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂　角閃石	黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式。口：橋状把手、沈線。体：沈線、縄文 LR。
21b	B	—	12C9	Ⅳc	縄文土器	注口土器	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂　角閃石	黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式。体：沈線、縄文 LR。
21c	A	—	12C15	Ⅳc	縄文土器	注口土器	注口	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂　角閃石	黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式。注口：ミガキ。
21d	B	—	12C9・10	Ⅳc	縄文土器	注口土器	体～底	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂　角閃石	黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式。体：ミガキ、沈線。

縄文土器観察表（2）

凡例：1　色調　［小山・竹原 1996］に依る。　2　胎土　英：石英、長：長石、針：海面骨針　3　残存部位　口：口縁部、体：体部、底：底部、完：完形品およびこれに準ずるもの。

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
22a	B	—	14B16	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	にぶい黄橙 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：器面荒れ顕著。
22b	B	—	14B16	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	にぶい黄橙 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：条痕。
23	B	—	15B2	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	褐灰 / 英　長　白砂　金雲母	にぶい黄橙	並	後期前葉	三十稲場式（新）。口：沈線。
24	B	—	15A22	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	にぶい黄橙 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期前葉	三十稲場式（新）。口：沈線。
25a	A・B	JSX7638 SE7608/	13C3・4・8 13C3/ 12B22、13C3・5・7・8	覆土 5・6・9/ Ⅳc	縄文土器	深鉢	口～底	(34.8)	10.6	—	褐灰 / 英　長　白礫・砂　金雲母	明黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式併行。口：刻み、ミガキ。体上半：地文縄文 LR、沈線。体下半：ミガキ。底：網代痕のちナデ。
25b	B	JSX7638/	13C4・9/ 13C9	覆土 / Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白礫・砂　金雲母	明黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：地文縄文 LR、沈線。
25c	B	—	13C3	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白礫・砂　金雲母	明黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：地文縄文 LR、沈線。
25d	B	JSX7631/	13C3/ 13C3	覆土 / Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白礫・砂　金雲母	明黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：地文縄文 LR、沈線。
25e	B	—	13C3	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	褐灰 / 英　長　白礫・砂　金雲母	明黄褐	並	後期前葉	南三十稲場式併行。体：地文縄文 LR、沈線。
26	B	—	19D25	Ⅳc	縄文土器	—	底	—	5.2	—	黒褐 / 英　長　白砂	橙	並	後期前葉	南三十稲場式併行？底：ナデ。
27	B	—	19C6	Ⅳc	縄文土器	—	底	—	7.4	—	褐灰 / 英　長　白砂	にぶい橙	並	—	器面荒れ顕著。
28	B	P7956	16C2	1	縄文土器	—	体～底	—	9.0	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並		体：縄文 LR（複節？）。底：網代。
29a	A	—	5A16	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口～体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。口：突起。体：磨消縄文。
29b	A	—	5A11	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。口：突起。
29c	A	—	5A11	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文。
29d	A	—	5A11	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文。
29e	A	—	5A11	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文。
29f	A	—	5A11・16	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文。
29g	A	—	5A16	Ⅳc	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文。
30	B	—	14A22	Ⅳc	縄文土器	深鉢	口～体	—	—	—	黒褐 / 英　長　白砂	にぶい黄橙	並	後期	絡条体撚糸文。
31a	A	—	11B21 11B	Ⅳc 攪乱	縄文土器	注口土器	口	—	—	—	黒 / 英　長	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。口：ミガキ。
31b	A	—	11B21	Ⅳc	縄文土器	注口土器	口～体	—	—	—	黒 / 英　長	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：磨消縄文（縄文 RL 充填）。
31c	A	—	11B21	Ⅳc、攪乱	縄文土器	注口土器	体	—	—	—	黒 / 英　長	にぶい黄橙	並	後期中葉	加曾利 B2 式。体：ミガキ。
32a	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	口～体	32.5	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。
32b	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	口～体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。
32c	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。
32d	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。
32e	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体～底	—	7.8	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。底：ナデ。
32f	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：磨消縄文（縄文 LR 充填？）。
32g	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：縄文 LR。
32h	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：縄文 LR。
32i	F	JSX1931	48B4	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂　金雲母	黄褐	並	中期末葉	大木 10 式？体：縄文 LR。
33	F	JSX1894	50D11	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	黒 / 英　長　白砂　金雲母	橙	並	—	体：縄文 LR。
34	F	JSX1929	46B17	1	縄文土器	深鉢	体～底	—	—	—	にぶい黄橙 / 英　長	明黄褐	並	—	体：底との接合部に指頭圧痕。底：ナデ。
35	F	JSX1930	47C9	1	縄文土器	深鉢	体	—	—	—	明黄褐 / 英　長	明黄褐	並	—	体：縄文 LR。
36	F	—	51B1	Ⅳ	縄文土器	深鉢	体～底	—	—	—	明黄褐 / 英　長　白礫・砂多	橙	並	—	器面荒れ顕著。
37	G	—	57A19	Ⅱb2	縄文土器	甕	口	—	—	—	褐灰 / 英　長	暗灰黄	並	晩期	口：突起、沈線。口内：沈線。

縄文時代　石器観察表

凡例：「被熱」○あり、×なし。「破損」○あり、×なし、調査時欠損（ガジリ）△

報告No.	区	遺構	グリッド	層位	器種	分類	石材	法量				被熱	破損	備考
								長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）			
38	C	JSS9769	25D6・11	Ⅳd	石錘	—	砂岩	65.0	57.0	19.1	106.2	×	×	
39	C	—	27C12	Ⅴ	石鏃	凸基有茎	玉髄	31.4	13.7	3.3	1.3	×	×	
40	C	—	24C24	Ⅳc	石鏃	凸基有茎	玉髄	36.8	12.4	3.2	1.1	×	×	
41	B	—	17D1	Ⅴ層中風倒木	石鏃	凹基無茎	流紋岩	13.1	11.4	2.6	0.1	×	×	風化顕著
42	B	—	10C20	Ⅳd	石鏃	凹基無茎	鉄石英	30.6	13.8	3.5	1.8	×	○	
43	C	—	21C2	Ⅳd'	石鏃	凹基無茎	鉄石英	24.7	14.0	4.1	0.9	×	○	
44	C	—	27D25	Ⅴ	石鏃	凹基無茎	珪質頁岩	19.7	21.1	3.5	1.0	×	○△	
45	C	—	28E4	Ⅴ	石鏃	凹基無茎	黒曜石	19.7	10.8	3.0	0.3	×	×	
46	A	SE8529	11D3	9	石鏃	凹基無茎	玉髄	29.5	16.1	4.0	1.1	×	×	
47	C	—	23E3	Ⅳc	二次加工ある剥片	—	流紋岩	25.1	36.6	4.5	3.7	×	×	
48	C	—	27C9	Ⅴ	擦切具	—	砂岩	56.6	54.5	9.9	33.1	×	○	
49	C	—	24E1	Ⅳd	二次加工ある剥片	—	珪質頁岩	34.8	49.5	8.8	18.0	×	×	
50	C	—	25D4	Ⅳd	打製石斧未製品？	—	粘板岩	108.0	66.6	26.6	188.1	×	×	
51	B	—	16C10	Ⅳd	両極石器	—	珪質頁岩	23.5	35.4	11.5	10.0	×	×	
52	C	—	21C5	Ⅳd	微細剥離ある剥片	—	珪質凝灰岩	102.7	25.4	9.1	19.6	×	×	
53	C	—	23B16	Ⅳc	剥片	—	玉髄	23.0	26.0	6.2	3.6	×	×	
54	C	—	23B1	Ⅳc	微細剥離ある剥片	—	流紋岩？	49.3	22.7	7.7	2.6	×	△	風化顕著
55	B	—	13B17	Ⅳb	剥片	—	玉髄	52.8	28.5	6.9	6.8	×	△	
56	C	—	27E2	Ⅴ	剥片	—	流紋岩？	38.2	64.5	9.7	12.0	×	△	風化顕著
57	C	—	25B25	Ⅴ	剥片	—	流紋岩？	41.5	35.3	6.8	5.8	×	△	風化顕著
58	C	—	28D21	Ⅴ	剥片	—	流紋岩？	53.1	46.2	16.7	22.8	×	○	風化顕著
59	B	—	16C11	Ⅳc	磨製石斧	—	蛇紋岩	58.2	28.3	10.8	27.8	×	△	
60	C	—	25D20	Ⅳd	磨製石斧	—	蛇紋岩	34.3	27.8	10.5	12.4	×	○	
61	C	—	24D16	Ⅳc	磨製石斧	—	蛇紋岩	36.2	20.3	21.5	17.3	×	○	
62	B	—	14B19	Ⅳd	磨製石斧	—	凝灰岩	58.6	34.0	12.1	20.9	×	○	
63	B	SD7787	17B6	1	磨石類	—	砂岩	90.6	70.9	37.3	400.2	○	○	基部欠損後磨石類に転用。その後、刃部側を欠損。
64	C	—	27B14	Ⅴ	磨石類	—	砂岩	128.0	55.7	28.8	288.2	×	○	
65	E	JSX2751	39C6	Ⅶa	石製品	—	凝灰岩	185.5	75.4	21.3	332.3	×	×	
66	F	JSX1020	50C8	1（底面）	石鏃	凹基無茎	珪質頁岩	30.7	15.4	3.4	1.0	×	×	
67	E	SD2050	43C21	1	石鏃	凸基有茎	玉髄化した珪質頁岩	40.1	18.5	5.7	2.9	×	×	
68	G	—	55C23	Ⅱb2	石鏃	平基有茎	ホルンフェルス	35.1	11.3	4.1	1.7	×	×	
69	F	SX1029	49C1	1	石鏃	凹基無茎	流紋岩	31.4	17.9	3.8	0.9	×	△	
70	D	SD3501	31B	3	石鏃	凹基無茎	玉髄化した珪質頁岩	30.2	12.0	3.6	1.3	×	○△	
71	D	—	32D7	Ⅲ	石鏃	—	玉髄化した珪質頁岩	21.3	16.3	3.3	0.8	×	○	
72	F	SK1575	46B4・5	下層	剥片	—	鉄石英	26.8	8.7	6.9	1.8	×	×	両極剥離
73	G	—	61E16	Ⅴ上面	微細剥離ある剥片	—	鉄石英	16.2	23.7	5.9	1.8	×	×	
74	G	—	59E6	Ⅴ上面	微細剥離ある剥片	—	頁岩	28.5	13.0	4.8	16.6	×	×	
75	D	—	29C22	Ⅲ	微細剥離ある剥片	—	流紋岩	54.1	66.9	11.4	29.9	×	△	
76	E	—	40G3	Ⅱ	箆状石器	—	凝灰岩	87.8	41.1	15.2	56.6	×	×	
77	F	—	47B25	Ⅳ～Ⅴ	磨製石斧	—	蛇紋岩	45.9	24.5	10.6	18.6	×	×	
78	G	SD513	59D	—	磨石類	—	花崗斑岩？	90.2	69.1	57.5	518.1	×	×	中世の溝出土だが、所属時期を縄文時代とした。
79	D	—	28B25	—	磨石類	—	砂岩	85.5	56.0	47.2	260.0	×	×	

中世　金属製品・銭貨観察表

報告No.	区	遺構	グリッド	層位	種別	器種	法量				備考
							長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	
249	E居	P1445	46D6	1	鉄製品	火打ち金？	72.0	18.0	4.5	11.8	
250	F居	—	51E19	Ⅱ	鉄製品	不明	25.0	30.0	2.5	10.6	
251	G居	P776	60C23	確認面	鉄製品	不明	30.0	26.0	6.0	4.5	
252	G居	SE165	59A25、60A21	2	銅製品	不明	28.0	40.0	3.5	6.9	
253	G居	SD675	60D1、60D2	1、2	鉄製品	短刀？	231.0	22.0	4.0	41.6	
254	H水田	水田805	63D24	—	鉄製品	刀子？	90.0	13.0	4.0	12.1	一部欠け。
256	E居	方形遺構	試掘28Tr	覆土	銭貨	熙寧元寶	24.0	—	1.0	1.2	一部欠け、1068年
257	E居	方形遺構	試掘28Tr	覆土	銭貨	元祐通寶	24.0	—	2.6	3.2	2枚貼付き、1093年
258	E居	方形遺構	試掘28Tr	覆土	銭貨	（元）祐通寶？	24.0	—	1.0	1.2	「元」部欠け、1093年
259	E居	方形遺構	試掘28Tr	覆土	銭貨	—	24.0	—	1.0	1.6	表面腐食
260	F居	SK1705	50D22、50E2	Ⅱb2	銭貨	至和元寶	27.0	24.5	4.5	9.4	4枚貼付き、1054年
261	G居	—	58B3	Ⅱb2	銭貨	皇宋通寶	23.0	—	1.0	1.4	1039～1053年
262	G居	—	60A2	Ⅱb2	銭貨	熙寧元寶	23.0	—	1.0	1.7	外形部欠け、1068年
263	G居	—	60A13	Ⅱb2	銭貨	宣和通寶	28.0	—	2.0	3.9	一部欠け、1119～1125年
264	F居	SK1705	50D22、50E2	一括	銭貨	（皇）宋通寶？	21.0	—	1.0	1.1	外形部欠け、1039～1053年
265	E居	SK1480	47D17	1	銭貨	治○○寶	24.0	—	1.0	1.2	外形部欠け。
266	G居	—	60B1	Ⅱb	銭貨	○○元寶？	24.0	—	1.0	1.1	外形部欠け。
267	E居	SK1480	47D12	1	銭貨	元祐通寶	25.0	—	1.0	1.5	1/2欠け、1093年。

中世土器観察表（1）

凡例：1　色調［小山・竹原 1996］に依る。　2　胎土　英：石英、長：長石、針：海面骨針　3　残存部位　口：口縁部、体：体部、底：底部、完：完形品およびこれに準ずるもの。

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
80	A 居	SB7811-P6406	9C3	1	青磁	椀	腰	—	(13.0)	—	灰白	灰白オリーブ	良	14c 後半	彫り込み有。
81	A 居	SE6237	7A9	5	珠洲焼	片口鉢	体	—	—	—	灰 / 白礫　白砂　針	灰	並	珠洲Ⅳ期末～Ⅴ期？	卸目：密。
82	A 居	SE6209	7A3	2	珠洲焼	片口鉢	底	—	11.9	—	褐灰 / 白砂　針	褐灰	並	珠洲Ⅴ期？	卸目：13 本 /3.5cm。
83	A 居	SE6209	7ZZ23	2	珠洲焼	甕	体	—	—	—	にぶい赤褐 / 白礫　白砂	褐灰	並	珠洲Ⅳ期？	
84	A 居	SE6209	7ZZ23	底	珠洲焼	壺 R 種	完	10.0	9.6	18.6	—/ 白礫　白砂	黄灰	並	珠洲Ⅳ期後半	漆継ぎ痕。
85	A 居	SE6278	8C14	2	珠洲焼	甕	体	—	—	—	にぶい赤褐 / 白礫　白砂	褐灰	良	珠洲Ⅲ期以前？	タタキ目細かい。
86	A 居	SE7180	12D16・17	2	珠洲焼	片口鉢	体	—	—	—	褐灰 / 白礫　白砂　胎土粗	褐灰	並	珠洲Ⅲ～Ⅳ期	
87	A 居	SE7323	11C13/ 11B17	Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	褐灰 / 黒色の吹き出し	褐灰	並	珠洲Ⅳ期？	
88	A 居	SE7133	12D3	7	珠洲焼	甕	体	—	—	—	にぶい赤 / 白砂	褐灰	並	珠洲Ⅲ期以前？	
89	A 居	SE8529	11D3	13	珠洲焼	壺	体	—	—	—	赤褐 / 英　白砂	黄灰	良	珠洲Ⅳ期	体：綾杉文。内：黒色付着物。114・120 と同一個体？
90	A 居	SE8529	11D3	8	須恵器	甕	体	—	—	—	黄灰 / 白砂　黒砂　黒色の吹き出し	褐灰	良		外：格子タタキ目。内：同心円当具痕。小泊産
91	A 居	SK6274	7C6	2	珠洲焼	壺？	体	—	—	—	黄灰 / 海面骨針	灰白	並	珠洲Ⅲ期？	漆継ぎ。
92	A 居	SK7217	11D18	1	珠洲焼	甕	口	—	—	—	にぶい赤褐 / 白砂　胎土粗	褐灰	並	珠洲Ⅱ～Ⅲ期	
93	A 居	SK7327	11D1	1	珠洲焼	片口鉢	底	—	(11.5)	—	灰 / 英　白礫　白砂	灰	並	珠洲Ⅴ期？	底外：煤付着。底内：摩耗顕著。
94	A 居	SD7132	11C3	1	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	にぶい黄橙 / 白砂　針	にぶい黄橙	不良	珠洲Ⅴ期	酸化焔焼成。
95	A 居	P6204	8A3/ 4D10	/ Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	口・体	(28.4)	—	—	黄褐 / 英　白砂	黄褐	不良	珠洲Ⅲ～Ⅳ期	酸化焔焼成。卸目：6 条 /1.8cm。
96	A 居	P6222	7A10	2	珠洲焼	片口鉢	体	—	—	—	灰 / 白礫　白砂多　針　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅳ期？	漆継ぎ痕。
97	A 居	—	11D22	Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期？	
98	A 居	—	12D9	Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 英　白砂　黒砂	灰	並	珠洲Ⅳ期？	
99	A 居	—	6B23	Ⅳ d	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 英　白砂　針	灰	並	珠洲Ⅳ末～Ⅴ期初頭	
100	A 居	—	11D5	Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 白礫　白砂	灰	並	珠洲Ⅴ期	口：波状文。卸目：6 条 /1.5cm。
101	A 居	—	12D2	Ⅳ b	珠洲焼	片口鉢	底	—	13.9	—	灰 / 英	灰		珠洲Ⅴ期	転用砥石。内：摩耗顕著。1 破断面に砥面あり。
102	A 居	—	11C9	Ⅳ c	珠洲焼	壺 R 種	肩	—	—	—	灰 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅲ～Ⅳ期前半	
103	A 居	—	10B3	—	瀬戸・美濃焼	—	口	(14.3)	—	—	灰白 /	明緑灰	並		施釉にむらがある。
104	A 居	—	11C4	Ⅳ b	白磁	口禿椀	口	(14.8)	—	—	灰白 /	明緑灰	並	13c 後半～ 14c 初頭	白磁椀Ⅸ類。
105	A 居	—	5B4	Ⅳ d	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	13c 後半	鎬蓮弁文。
106	A 居	—	11B17	Ⅳ b	青磁	椀	底	—	5.2	—	浅黄橙	オリーブ	並	15c 代	高台内：蛇の目釉剥ぎ。
107	A 居	—	12D2	Ⅰ	青磁	椀	底	—	5.2	—	灰白 /	オリーブ灰	並	14c 代	腰：鎬蓮弁文？見込み：草花文。
108	A 居	—	12C21	Ⅰ	青磁	椀	底	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	14c 代	見込み：草花文。
109	A 居	—	12D1	Ⅳ b	笹神窯	甕	体	—	—	—	にぶい赤褐 / 白礫　赤粒子	褐灰とオリーブ灰の斑	並	14c 代	1 破断面に黒色付着物、漆継ぎ？
110	A 居	—	6D13	Ⅰ	土師質土器	皿	口	—	—	—	灰 / 精良	浅黄橙	並		手づくね（京都系）。
111	A 居	—	13D11	Ⅳ b	越前	甕	体	—	—	—	褐灰 / 大白礫　白砂　胎土粗	橙	並		
112	A 居	—	13D18	Ⅳ b	信楽	壺	体	—	—	—	灰白 / 黒礫	にぶい橙	並	14c 後半	
113	AB 居	SB7604-P8659 SE7602	16C10 13B18	1 1	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰赤 / 黒砂　胎土粗	灰白	不良	珠洲Ⅳ期前半	
114	AB 居	SB7604-P8674	14B21	1	珠洲焼	壺	体	—	—	—	赤褐 / 胎土密	褐灰	良	珠洲Ⅳ期	体：綾杉文。89・120 と同一個体？
115	AB 居	SE7642	13D5、14D1	覆土上層	白磁	腰折皿	腰	—	—	—	白 /	灰白	並	14c 後半	
116	AB 居	SE7692	14C14・19	覆土	白磁	椀	口	—	—	—	灰白 /	灰白	並	12c 後半	白磁椀Ⅴ -4 類？
117	AB 居	SE7409	12A14、11A18	1	珠洲焼	片口鉢	口～体	(30.2)	—	—	灰 / 白砂	褐灰	並	珠洲Ⅴ期	被熱。卸目：9 条 /2.9cm。
118	AB 居	SE8381	15C13	10	珠洲焼	甕	体	—	—	—	黄灰 / 黒砂　黒色の吹き出し	黄灰	良	珠洲Ⅱ～Ⅲ期	
119	AB 居	SB7822-P7418 SD7514	12A18 11B17	1 1	珠洲焼	片口鉢	体～底	—	—	—	褐灰 / 白礫　白砂　胎土粗	にぶい橙	並	珠洲Ⅴ期（古）	被熱。卸目：9 条 /2.8cm。
120	AB 居	SK7696	13B10	1、3、底面	珠洲焼	壺	体～底	—	11.5	—	にぶい赤褐色 / 白礫　白砂　針	褐灰	良	珠洲Ⅳ期前半よりも古い	体：綾杉文。89・114 と同一個体？
121	AB 居	—	12B15	Ⅳ a	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	褐灰・白礫　白砂	褐灰	並	珠洲Ⅴ期	口：波状文。
122	AB 居	—	14A20	Ⅰ	瀬戸・美濃焼	天目茶椀	体	—	—	—	灰黄 /	黒　明赤褐	並	古瀬戸後期 14c 末～ 15c 後半	

中世土器観察表（2）

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
123	AB居	—	12B13	Ⅰ	白磁	口禿皿	底	—	(5.5)	—	灰白 /	灰白	良	13c後半～14c初頭	白磁皿Ⅸ類。
124	AB居	—	11A18	Ⅳa	陶器	船徳利？	体	—	—	—	褐灰 /	オリーブ褐・褐	並	16c代？	朝鮮または唐津？
125	AB居	—	11B7、12A21	Ⅳa	笹神窯	壺	体	—	—	—	褐灰 / 白礫　白砂　大礫	橙		北越窯？ 13c後半～14c中葉	体：簾状文・菊花文あり、権兵衛沢？ 内：黒色付着物。
126	B居	SK8331	17D12・13	1	珠洲焼	片口鉢	底～体	—	(11.9)	—	灰 / 英　白砂　黒砂	灰　明赤褐	並	珠洲Ⅲ期	底：静止糸切り。卸目：12条/2.5cm。被熱。
127	B居	—	16D	Ⅳb	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 白礫　白砂　黒砂　針	灰	並	珠洲Ⅲ期	卸目：6条/1.2cm。
128	B居		15D10	Ⅳb	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期末	
129	B居		16C10	Ⅰ	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 英　白砂　針　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅴ期	口：波状文。卸目：11条/2.4cm
130	B居	—	21C16	Ⅳb	珠洲焼	片口鉢	底	—	10.8	—	にぶい橙	にぶい橙	不良		酸化焔焼成。底：静止糸切り。
131	B居		21C18	Ⅳb	白磁	皿	口	—	—	—	灰白 /	灰白	並	15c前葉？	森田D群？
132	B居		16C10	Ⅳd	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	暗オリーブ	並	13c代	鎬蓮弁文。
133	B居	—	B区	—	瀬戸・美濃焼	緑釉小皿	口～腰	—	—	—	灰白 /	灰白、釉：オリーブ灰		古瀬戸後期 15c中葉	内外口縁部のみ施釉。
134	C居	SE9440	26C14	5	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 白砂　黒砂　針	灰	並	珠洲Ⅴ期	
135	C居	SE9440	26C14	7	須恵器	甕	体	—	—	—	灰 / 白砂多	灰	並		外：平行タタキ目。内：同心円当具痕。外面摩耗顕著、転用砥石？小泊産？
136	C居	SE9603	27C11	10	瀬戸・美濃焼	平椀	腰	—	—	—	灰白 /	オリーブ黄	並	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期 15c前葉	内：胎土目。
137	C居	SE9603	27C11	10	越前焼	甕	体	—	—	—	灰 / 英　白礫　白砂	明赤褐	並		漆継ぎ。
138	C居	SE9603	27C11	10	珠洲焼	甕	体	—	—	—	灰 / 白礫　白砂　針	灰	良	珠洲Ⅳ期	
139	D居	SA5323 －P3547	32B8	1	瀬戸・美濃焼	椀形鉢	口～体	23.2	—	—	灰白 /	浅黄	並	古瀬戸後Ⅱ期 14c末～15c初	
140	D居	SE3412	33B24/ 32C24	5/ Ⅲ？	瀬戸・美濃焼	天目茶椀	口～底	10.1	3.4	5.2	灰白 /	黒・暗赤褐	並	古瀬戸後Ⅱ期 14c末～15c初	高台：削り出し高台。施釉：鉄釉。
141	D居	SE5177B	30E4	下層	越前焼	甕	肩～底	—	—	—	灰オリーブ / 白砂	にぶい赤褐色	並		漆継ぎ。
142	D居	SE3384 SE3412	33B25、 33B24、 33C3	2 3 Ⅱ	珠洲焼	小型片口鉢	口	25.5	—	—	灰 / 白礫　白砂多　針　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅳ期後半	卸目：10条/2.6cm
143	D居	SE3384	33C5	1	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 白砂　黒砂	灰	並	珠洲Ⅳ期後半	転用砥石。
144	D居	SE9666	27D23	10	珠洲焼	片口鉢	底	—	—	—	灰 / 英　白礫　白砂　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅳ期前半？	底：ナデ。内：摩耗顕著。
145	D居	SK3971	32D14・19	3	瀬戸・美濃焼	皿	底	—	6.9	—	灰 /	オリーブ灰	並	古瀬戸後期 14c末～15c後半	足付の皿？底：回転糸切り。
146	D居	SD3501	32C17	3	珠洲焼	片口鉢	底	—	12.9	—	灰白 / 英　白砂　針	灰	不良	珠洲Ⅴ期	転用砥石。内：黒色付着物。卸目：11条/3.5cm。 底：静止糸切り。
147	D居	—	34C11	Ⅱ	須恵器	有台杯	高台	—	7.2	—	灰 / 英	灰	並		底：回転糸切り。
148	D居	—	33C3	Ⅱ	青磁	小杯？	腰	—	—	—	灰白 /	緑灰	並	14c？	腰外：平行な線刻。
149	D東居	SB5316-P3479	36G18	1	珠洲焼	片口鉢	体～底	—	11.9	—	灰 / 白砂　黒砂　針	灰	並	珠洲Ⅳ～Ⅴ期	底：静止糸切り。卸目：12条/3.3cm。
150	D東居	SB5320-P3160 -P4564 -P4575 -P4584	35G12 35F22 35F18 34G10	2 1 2 1	珠洲焼	中型壺	口・体	(17.6)	—	—	灰 / 白砂　針	灰	並	珠洲Ⅳ期中葉	
151	D東居	SE3008	34G24・25	2	青磁	皿	底	—	5.1	—	灰白 /	オリーブ灰	並	14c	見込み：スタンプ文。高台内：無釉。畳付：釉剥。
152	D東居	—	33G21	Ⅱ	越前焼	甕	体	—	—	—	灰 / 白砂	明赤褐	並		
153	D東居	—	34G23	Ⅱ	瀬戸・美濃焼	丸皿	口～体	6.6	4.1	1.1	灰白 /	オリーブ灰	並	古瀬戸中Ⅳ期 14c中葉	底：回転糸切り。
154	E南居	SE2243	37B21・22	6	瀬戸・美濃焼	平椀	口～体	6.6	—	—	灰白 /	浅黄	並	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期 14c後～15c初	
155	E南居	SD2164	42G5/ 42G10	—/ Ⅱ	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰		14c後半～末	
156	E南居	SD2164	43F16	—	信楽焼？	甕	肩	—	—	—	灰白 / 長	灰褐	並	近世	
157	E南居	SD2050	42E・F	2	珠洲焼	甕	口～体	—	—	—	褐灰 / 白礫	褐灰	良	珠洲Ⅳ期中葉	外：自然釉。体内：剥落。

中世土器観察表（3）

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
158	E 南居	SD2050	42C15、42B15、42E9	2	珠洲焼	片口鉢	体～底	—	12.5	—	灰 / 白礫　白砂	にぶい赤褐	不良	珠洲Ⅳ期	酸化焔焼成？卸目：10 条 /2.1cm。底：静止糸切り。
159	E 南居	SD2050	42C20	2	青磁	盤	口～体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	15c 前半？	
160	E 南居	SD2050	42C20	2	唐津焼	徳利	口	(4.6)	—	—	褐灰 /	明青灰	並	16c 末～ 17 初	施釉：藁灰釉。
161	E 南居	(SD2050)	41F19	攪乱	土師質土器	皿	底	—	(7.6)	—	橙 / 黒砂	橙	並	14c	ロクロ成形。底：ヘラ切り。
162	E 南居	—	43G2	Ⅱ	土師質土器	皿	口	(7.9)	—	—	にぶい橙 / 精良	にぶい橙	並	13c 後半	手づくね。
163	E 南居	—	41H10	Ⅱ	青磁	皿	口	(12.7)	—	—	灰 /	オリーブ灰	並	15c 初	
164	E 南居	—	40F24	Ⅱ	青磁	端反椀	口	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	15c 初	内外：丸彫による施文。
165	E 南居	—	38F23	Ⅱ	青磁	小杯？	体	—	—	—	灰白 /	明緑灰	並	14c ？	
166	E 南居	—	42H9	Ⅱ	信楽焼	甕	肩	—	—	—	灰 / 英　長	灰・赤褐	並	近世	
167	E 南居	—	38F23	Ⅱ	備前焼	擂鉢	口	—	—	—	灰 / 白砂　黒砂	赤	並	16c ？	
168	E 南居	—	40F20	Ⅱ	唐津焼	皿	口～底	(10.7)	4.8	3.4	明褐灰	褐灰	並	16c 末～ 17 初	被熱。高台：削り出し。見込み：胎土目状の痕跡。
169	E 居	SE1576	46C4	2	白磁	皿	口	—	—	—	灰白 /	灰白	並	15c 前半	森田 D 群。被熱。
170	E 居	SE1866	47C18	2	青磁	端反椀	口	—	—	—	灰 /	オリーブ	並	14c 末～ 15 初	
171	E 居	SE2201	44E6	5	白磁	皿	口～底	9.5	4.6	2.3	灰白 /	黄灰	並	15c 中葉	森田 D 群。見込み：胎土目状の痕跡。高台裏：施釉後抉り。被熱。
172	E 居	SE1577	46B8・9	上層・5 ？	青磁	端反椀	口	(12.7)	—	—	灰 /	オリーブ灰	並	14c 末～ 15 初	
173	E 居	SE2406	44E10	2、5	珠洲焼	甕	体	—	—	—	灰白 / 英　白砂　針	灰白	並	珠洲Ⅲ期？	
174	E 居	SE2406 SD2050	44E10 43D16	2、10 2	珠洲焼	片口鉢	口～底	29.2	12.0	13.9	灰 / 白砂　黒砂　針	灰	並	珠洲Ⅳ期中葉	卸目：9 条 /2cm。
175	E 居	SE2406	44E10	5	珠洲焼	片口鉢	底	—	11.5	—	赤褐 / 英　白砂　針	赤褐	不良	珠洲Ⅳ期？	酸化焔焼成。底：静止糸切り後指ナデ。内：摩耗顕著。
176	E 居	SE2406	44E10	2	珠洲焼	壺	肩	—	—	—	灰 / 白砂　針	灰	良	珠洲Ⅳ～Ⅴ期	
177	E 居	SE2406	44E10	1	瀬戸・美濃焼	卸皿	底	—	8.4	—	灰 /	灰オリーブ	並	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期 14c 後半	底：回転糸切り。内：胎土目。施釉：一部外面底面に及ぶ。被熱。
178	E 居	SE2608	45D19	炭化物層	珠洲焼	片口鉢	口	(29.6)	—	—	にぶい橙 / 英　白礫　白礫	灰	並	珠洲Ⅳ期初	卸目：11 本 /2.6cm。
179	E 居	SD1141	46E18	覆土	青磁	椀	腰	—	—	—	灰白 /	緑灰	並	14c 末～ 15c 初	漆継ぎ。
180	E 居	SD1141	46E18	覆土	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰白 / 針	灰白	不良	珠洲Ⅴ期	内：黒色付着物。
181	E 居	SD1141	47E12	底面	須恵器	壺	肩	—	—	—	灰 / 白礫　白砂	灰	良		外：格子目タタキ目。内：同心円？当て具痕。
182	E 居	SD1141	46E18	覆土	瀬戸・美濃焼	卸目付大皿	口	(31.3)	—	—	灰 /	オリーブ灰	並	古瀬戸後Ⅲ期 15c 前半	
183	E 居	SK1461	46D5・6	1	白磁	皿	完	11.6	5.1	2.9	灰白 /	灰白	並	14c 末～ 15c 初	森田 D 群。高台内：墨書「井」。1 破断面に漆継ぎ痕。
184	E 居	P1636	45C10	2	青磁	皿	口	(14.6)	—	—	灰～にぶい橙 /	オリーブ灰	不良	14c 末～ 15c 初	内：丸彫で施文。
185	E 居	P1417	46D2	1	白磁	皿	口	(10.4)	—	—	灰白 /	灰白	並	15c 前半	森田 D 群。
186	E 居	P2634	45D8	1	珠洲焼	片口鉢	底	—	12.7	—	にぶい橙 / 英　白礫　針	にぶい橙	不良	珠洲Ⅳ期	酸化焔焼成。卸目：12 条 /2.6cm。底：静止糸切り。
187	F 居	SD1141	46 ～ 54E、52E13、54E17	一、4、1・2	瓦器	擂鉢	底	—	(9.5)	—	灰白 / 英　長	灰白	並	15c 後半	全面が摩耗。
188	F 居	—	52A25	攪乱	珠洲焼	甕	口	—	—	—	灰白 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅲ期	
189	F 居	—	51E19	Ⅱ	越前焼	擂鉢	体	—	—	—	にぶい橙 /	にぶい橙	並		酸化焔焼成。内：摩耗顕著。
190a	G 居 H 水田 F 居	SB883 － P384 SB884 － P57 SE7 SE233 水田 794/	60A18 60A22 60A14 59A3・8 62・63A/ 58A15、59A10・14・20、59B9・17、60A21、60B2・15 59D23 59E6 49B 22	1 1 6 2 覆土 / Ⅱ b2 Ⅱ Ⅱ下 Ⅳ	珠洲焼	中型甕	口～体	(4.0)	—	—	灰白 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期	
190b	G 居	SK218	59A14/ 59A22、59B3・21	1/ Ⅱ b2	珠洲焼	中型甕	体	—	—	—	灰白 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期	

中世土器観察表（4）

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
190c	G 居	SE233 SE245 SE606 SD629 SX122/	59A3・8 59A6 58D19・20 58E4 59B13・14/ 60C15 58A25 58B14・25、59A7・17・19・21・25、59B1・3～5・8・15・16、59C3、59D23、60A17・19・23、60A7、60B1・6・7 59D2 59D7 -	2 2 5 2 1/ Ⅱ Ⅱb1 Ⅱb2 Ⅱ下 Ⅴ上 表面採集	珠洲焼	中型甕	底	—	—	—	灰白 / 英　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期	
191	G 居	SB882・884-P207 SB884-P203 SE233/	59A14 59A14 59A3・8/ 59B12、60A14、 G 区一括	1 底面 2/ Ⅱb2	瀬戸・美濃焼	平椀	口～腰	15.6	—	—	灰白 /	浅黄	並	古瀬戸後Ⅱ期 14c 末～ 15c 初	外：ロクロ成形後、下半部回転ヘラケズリ。一部黒変、被熱？
192	G 居	SE165	59A25、60A21	3	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	13c 末～ 14c 初	鎬蓮弁文。
193	G 居	SE601	60E5・10/ 59D19、59E3	井戸枠内 / Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	口～体	(18.0)	—	—	灰白 / 英　白礫　白砂	灰	良	珠洲Ⅱ期？	206・235 と同一個体？
194	G 居	SB887 － P182 SE192 SE245 SX234/	59A10 59A17 59A6 59A12・13/ 58B3 58B7、59A6・16・21、59B1・6・16 59D11・24、59E2・6 58E20	2 10 2 1/ Ⅱb1 Ⅱb2 Ⅱ 一	珠洲焼	片口鉢	口	(28.5)	—	—	灰白 / 白礫　白砂	灰	並	珠洲Ⅳ期末～Ⅴ期	卸目：12 条 /3cm。
195	G 居	SE245	59A6	3	珠洲焼	片口鉢	口	(26.4)	—	—	灰白 / 白礫　白砂　胎土粗	灰	良	珠洲Ⅴ期	卸目：15 条 /2.6cm。
196	G 居	SE7/	60A14/ 58B9 55D18、58B19・20、 60B2 60D21	6/ Ⅱb1 Ⅱb2 Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	口	12.8	—	—	灰白～にぶい橙 / 白礫　白砂	灰	不良	珠洲Ⅳ期	卸目：7 条 /3cm。底：静止糸切り。
197	G 居	SE7 SE648 SD313 SD513/	60A14 60D24・25 59B11 —/ 59D2 56E12 59D7・8、63D15	3 4 Ⅱb2 上層 / Ⅱ上面 Ⅱb2 Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	底	—	13.6	—	灰白 / 英　白砂　黒砂	灰	並	珠洲Ⅳ期	卸目：9 条 /3.3cm。底：静止糸切り。
198	G 居	P30 P521	60B10 60A19	1 1	珠洲焼	片口鉢	口	(32.3)	—	—	灰白 / 英　白砂　黒砂	灰	並	珠洲Ⅳ期中葉	口縁内外：黒色付着物。197 と同一個体？
199	G 居	SE192/	59A17/ 59A17・19、59B3・7・14・16、59D2、59C3、60A17・20・21、60B8、61A21 59D2、62A12	10/ Ⅱb2 Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	口～底	(30.8)	11.1	(13.0)	灰白 / 白礫　白砂　黒砂多	灰白	並	珠洲Ⅴ期	卸目：14 条 /3.5cm。底：静止糸切り後、ナデ。
200	G 居 H 水田	SE822/	61A17/ 57A8、59B8 62A7・8	覆土 / Ⅱb2 Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	完	30.9	14.4	14.2	灰白 / 白砂　黒砂	灰～赤褐	良	珠洲Ⅳ期	被熱、鍋として使用された？　卸目：10 条 /2.7cm。底：静止糸切り後、ナデ、焼成後穿孔。内：摩耗顕著。
201	G 居	SK394	60B6・11	2	青磁	椀	口	—	—	—	灰白 /	緑灰	並	13c 末～ 14c 前半	口：外反。
202	G 居	P856/	61A12/ 61B4・10	上層 / Ⅴ上	珠洲焼	中型壺	口～肩	(18.5)	—	—	灰 / 白礫　白砂　黒砂	灰	並	珠洲Ⅲ～Ⅳ期前半	203 と同一個体？

中世土器観察表（5）

報告No.	区	出土位置			種別	器種	残存部位	法量（cm）			断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
		遺構	グリッド	層位				口径	底径	器高					
203	G居 H水田	SK115 SK664 水田801 水田805 水田826/	59B20 58E10 63C7 63D15 64D1/ 60A25、61B6 64E12 59C18、59D2・3・6・7・20・23、59E3、63C6・7 59E6、60C16	1 1 覆土 覆土 —/ Ⅱb2 Ⅱ下 Ⅱ —	珠洲焼	中型壺T	体～底	—	14.5	—	灰 / 白礫　白砂　黒砂	灰		珠洲Ⅲ～Ⅳ期	202と同一個体？ 体：綾杉文。
204	G居	SK595/	59C24/ 59A15・19、60A14、61B11 63C6、63D14	覆土 / Ⅱb2 Ⅱ	珠洲焼	片口鉢	口	(29.7)	—	—	灰 / 白礫　白砂　針	灰	良	珠洲Ⅳ期	卸目：10条 /2.3cm。
205	E居 G居	SK1484 SD827/	46D23 63D6/ 55C22	1 最上層 / Ⅱb2	珠洲焼	片口鉢	底	—	12.7	—	灰白 / 英　白砂　針	灰白	並	珠洲Ⅴ期	卸目：10条 /2.4cm。底 / 静止糸切り後、ナデ。
206	G居	—	59D20	Ⅴ上	珠洲焼	片口鉢	口～体	(17.8)	—	—	灰 / 白砂　針　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅱ期？	193・235と同一個体？
207	G居	—	60B15・59D7・58E13	Ⅱb2・Ⅴ上・—	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰白 / 白砂　針	灰	不良	珠洲Ⅴ期	焼成むらがあり、体部内面は一部明赤褐色を呈する。卸目：7条 /2.5cm。
208	G居・ H水田	P654/	60E6/ 59D5・12、62C5、63C12 63C17	上層 / Ⅱ Ⅴ上面	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰白 / 白礫　白砂　黒砂	灰白	不良	珠洲Ⅴ期	
209	G居	—	55B7、59B7 59D7、62B5、59C13、61B10 試掘11Tr	Ⅱb2 Ⅱ Ⅴ上	珠洲焼	片口鉢	口	—	—	—	灰 / 白砂多　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅳ期後半	卸目：10条 /2.3cm。
210	G居	—	59A21・22、59B9・12 59D17、58E4 58A7	Ⅱb2 Ⅱ 表面採集	珠洲焼	片口鉢	口	25.2	—	—	灰 / 白砂多　胎土粗	灰	並	珠洲Ⅳ期末～Ⅴ期	卸目：19条 /3.2cm。
211	G居 H水田	水田Gブロック /	64B12 59D23 59D2	覆土、覆土上 Ⅱ Ⅴ上	珠洲焼	片口鉢	底	—	(11.6)	—	灰 / 白砂多	灰	並	珠洲Ⅴ期	卸目：10条 /2.3cm。底：静止糸切り。
212	G居	—	59A14・20、58B5、59B16	Ⅱb2	珠洲焼	片口鉢	底	—	11.1	—	灰白 / 英　白礫	灰白	並	珠洲Ⅴ期	被熱？　卸目：10条 /2.8cm。底：静止糸切り後、ナデ。
213	G居	—	59D23	Ⅱ	瀬戸・美濃焼	椀形鉢	腰	—	—	—	灰白	灰オリーブ	並	古瀬戸後Ⅰ期 14c末	
214	G居	—	59E5	Ⅱ	珠洲焼	壺か甕	体	—	—	—	灰 / 白礫。白砂。	灰	並	珠洲Ⅲ～Ⅳ期	篦書き「大」。
215	G居	—	59B7	Ⅱb2	瀬戸・美濃焼	卸皿	底	—	(8.7)	—	灰白 /	オリーブ黄	並	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期 15c前後	底：回転糸切り、一部釉がかかる。
216	G居	—	55D5	Ⅱb2	瀬戸・美濃焼	卸皿	口～体	—	—	—	灰白 /	オリーブ黄	並	古瀬戸中Ⅲ～Ⅳ期 14c中葉	
217	G居	—	60C16	Ⅱ	瀬戸・美濃焼	平椀	底	—	(4.9)	—	灰白 /	浅黄	並	古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期 15c前後	高台：摩耗。漆継ぎ。
218	G居	—	56E13	Ⅱb2	瀬戸・美濃焼	瓶子類？	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ黄	並	古瀬戸後期 14c末～15c後半	
219	G居	—	試掘14Tr	—	瀬戸焼	折縁皿	口～底	10.6	5.1	2.0	灰白	オリーブ灰	並	大窯Ⅳ期 16c末～17c初	
220	G居	—	63B22	Ⅱ （水田1層）	瀬戸焼	丸皿	口～体	(10.2)	—	—	灰白 /	オリーブ黄	並	大窯Ⅳ期 16c末～17c初	
221	G居	—	59A10・13	Ⅱb2	瓷器系	小壺	口～底	(6.5)	(6.8)	(6.4)	灰 / 白礫　黒砂	暗オリーブ灰	並	13c～14c	被熱。中国産？
222	G居	—	59B15	Ⅱb2	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	12c末～13c初	内：劃花文？
223	G居	—	60A11	Ⅱb2	青磁	椀	口	—	—	—	灰白	オリーブ灰	並	13c後半	外：蓮弁文（鎬なし）。
224	G居	—	59B3	Ⅱb2	青磁	椀	腰	—	—	—	灰白 /	灰オリーブ	並	13c～14c後	漆継ぎ。体：連弁文（鎬なし）。
225	G居	—	59A23	Ⅱb2	青磁	椀	体	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	13c～14c後	体：蓮弁文（鎬なし）。
226	G居	—	58B9	Ⅱb1	青磁	小椀	底	—	(4.8)	—	灰白 /	オリーブ灰	並	14c	畳付：釉剥。

中世土器観察表（6）

報告No.	区	出土位置 遺構	出土位置 グリッド	出土位置 層位	種別	器種	残存部位	法量（cm） 口径	法量（cm） 底径	法量（cm） 器高	断面色調 / 胎土	外面色調	焼成	時期	備考
227	G 居	—	55E15	Ⅱ b2	青磁	盤？	口	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並	近世 16c 末	
228	G 居	—	58E13	—	青磁	香炉	腰	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並		腰：幅 2mm の線刻あり。
229	G 居	—	60A14	Ⅱ b2	中国	天目茶椀	口～体	—	—	—	灰白 /	黒に褐色	並		釉は二重掛け。
230	G 居	—	59E1	Ⅱ	土師質土器	皿	口	—	—	—	橙 / 精良	橙	並	13c 後半	手づくね（京都系）。燈明皿。
231	G 居	—	55A21	Ⅱ b2	唐津焼	皿	口～底	(11.7)	4.2	(3.3)	灰白 /	オリーブ黄	並	近世 16c 末～ 17c 初	灰釉。
232	G 居	—	58A23、58B3	Ⅱ b1	唐津焼	皿	口～底	10.3	4.0	3.4	灰白 /	にぶい橙・灰白にオリーブ灰斑点	並	近世 16c 末～ 17c 初	藁灰釉。
233	G 居	—	59E	Ⅱ	唐津焼	椀	底	—	4.3	—	橙	橙・灰オリーブ	並	近世 17c 初	
234	G 居	—	62B3	Ⅱ （水田 1 層）	唐津焼	大皿	体	—	—	—	にぶい橙	灰	並	近世 16c 末～ 17c 初	鉄絵。
235	H 水田	水田 852	63E9	覆土	珠洲焼	片口鉢	底	—	9.6	—	灰 / 英　黒砂	灰	並	珠洲Ⅱ期？	193・206 と同一個体？　底：静止糸切り。内：摩耗顕著。
236	H 水田	水田 828 ？	65C17	Ⅱ下 （水田 1 層）	青磁	皿	底	—	4.9	—	灰白 /	緑灰	並	14c 後	見込み：粘土塊付着。
237	H 水田	水田 L ブロック	64E7	Ⅱ （水田 1 層）	青磁	椀	口	—	—	—	灰白 /	オリーブ灰	並		
238	H 水田	水田 D ブロック	65D8	Ⅱ下 （水田 1 層）	信楽焼	甕	体	—	—	—	灰白 / 英　黒砂	にぶい赤褐	並	近世 16c 末～ 17c 初	
239	H 水田	水田 G ブロック	63B15	Ⅱ （水田 1 層）	越前焼	擂鉢	体～底	—	—	—	橙 /	橙	不良	近世 16c ？	卸目：11 条 /3cm。
240	H 水田	水田 C ブロック	65C17	Ⅱ下 （水田 1 層）	越前焼	甕	肩	—	—	—	灰 /	オリーブ	並	近世 16c 末～ 17c 初	
241	H 水田	水田 I ブロック	64E11	Ⅱ下 （水田 1 層）	瀬戸・美濃焼	端反皿	底	—	(6.0)	—	灰白 /	灰オリーブ	並	大窯 I 期 16c ？	
242	H 水田	水田 D ブロック 水田 E ブロック	65D20・25 66E1・2	Ⅱ下 （水田 1 層）	唐津焼	皿	口～体	(22.6)	—	—	にぶい橙	暗オリーブ	並	近世 17c 前半	胎土目あり。
243	H 水田	水田 E ブロック	66E6	Ⅱ下 （水田 1 層）	唐津焼	皿	底	—	4.8	—	橙 /	灰白	並	近世 17c 前半	砂目痕あり。
244	H 水田	—	62A11	Ⅱ （水田 1 層）	唐津焼	皿	底	—	4.0	—	灰白 /	灰オリーブ・浅黄	並	近世 17c 前半	高台：回転糸切り、削り出し。砂目痕あり。内：砂目痕あり。

中世　鉄滓観察表

報告No.	居住域	遺構	グリッド	層位	器種	分類	法量 長さ（mm）	法量 幅（mm）	法量 厚さ（mm）	法量 重さ（g）	被熱	破損	備考
268	D 居	SK5062	29B14・19	6	椀形鍛冶滓	大型	99.7	75.8	67.4	450.3	○	×	
269	E 居	—	49B21	Ⅳ a	椀形鍛冶滓	大型	76.7	67.9	42.0	194.7	○	×	
270	D 東居	（P4541 直上）	37G18	Ⅱ	椀形鍛冶滓	大型	83.4	73.0	39.1	269.6	○	×	
271	AB 居	SE7602	13B18	9 層上部	ガラス質滓	-	76.0	58.6	37.0	127.8	○	×	木炭付着。鉄分なし。羽口先端部？
272	G 居	—	—	—	椀形鍛冶滓	小型	45.8	38.2	26.2	55.8	○	×	
273	E 居	SE1576	46C9	3	椀形鍛冶滓	小型	35.9	32.0	22.4	27.5	○	×	緻密。

中世　土製品・石器観察表

凡例：「被熱」○あり、×なし。「破損」○あり、×なし、調査時欠損（ガジリ）△

報告No.	居住域	遺構	グリッド	層位	器種	分類	石材	産地	法量				被熱	破損	備考
									長さ（㎜）	幅（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）			
245	A居	—	11D10	Ⅳb	転用砥石	—	—	—	52.9	46.0	14.0	27.98	×	×	珠洲焼片口鉢片（Ⅳ期末～Ⅴ期初）の破断面に砥跡あり。
246	G居	—	59E12	Ⅱ	転用砥石	—	—	—	57.8	51.8	12.0	52.1	×	×	珠洲焼甕片の内面に砥跡あり。
247	C居	SD5004	29B11	1	フイゴ羽口	—	—	—	92.2	74.0	70.1	171.4	○	○	孔径4cm
248	F居	—	54E24	Ⅱb2	フイゴ羽口	—	—	—	52.5	68.0	64.3	71.2	○	○	孔径4cm
274	A居	SE6431	10D18	1	砥石？	C1	緑色凝灰岩？	—	119.7	93.9	18.8	351.1	×	×	両側面中央に刃物による凹部あり。偶発的なものか？
275	A居	SE7133	12D3	—	砥石	C2	砂岩	—	188.5	123.0	96.1	1242.4	○	○	煤付着。
276	A居	SB7813 - P7201	13D17	1	砥石	B2	凝灰岩	出羽	63.6	36.6	53.9	150.6	×	○	
277	A居	SB7821 - P6350	9B24	2	砥石	B2	凝灰岩	出羽	86.0	53.7	45.8	154.9	×	○	
278	A居	P7179	12D8	1	砥石	B1	凝灰岩	出羽	51.7	37.7	18.1	37.6	×	○	
279	A居	SD6003	3ZZ24	3	硯	—	粘板岩	—	87.9	32.3	14.4	55.5	×	○	破損後、砥石に転用されたか？
280	A居	—	13C22	Ⅳb	砥石	C1	凝灰岩	—	79.4	45.2	40.9	69.4	×	○	
281	A居	—	11B18	Ⅳb	砥石	C1	粘板岩	—	112.3	79.8	44.6	574.1	×	○△	
282	AB居	SE7642	13D5、14D1	8	砥石	C2	流紋岩？	—	194.5	162.0	90.0	4550.0	○	○	全体に炭化物が厚く付着。
283	AB居	SE7534	12A24	5	砥石	A	凝灰岩	上野？	64.4	29.2	12.8	46.0	×	○	
284	AB居	SE8381	15C18	12	砥石	B1	凝灰岩	出羽	45.8	46.0	17.1	54.2	×	○	
285	AB居	SE7790	15C12	15（曲物内）	砥石	C2	砂岩	—	129.3	109.0	68.6	1489.9	○	○	煤付着。
286	AB居	SE8506	14C8・9	覆土	砥石	A	粘板岩	鳴滝？	54.1	36.5	8.5	32.0	×	×	仕上砥。石材は鳴滝産に類似。
287	AB居	SE8506	14C8・9	覆土	砥石	C2	砂岩	—	127.3	101.6	44.0	918.0	○	○	
288	AB居	P7373	12B5	1	砥石	B1	凝灰岩	—	65.6	74.6	35.6	181.4	×	×	全体に鉄分が付着。
289	AB居	SB7823 - P7420	11A15	1	砥石	C2	粘板岩	—	169.0	95.3	84.1	1760.9	○	○	全体に煤付着。
290	AB居	SD7787	16C6	1	砥石	B2	珪質凝灰岩	在地	111.8	52.5	30.7	209.1	×	△	全体に鉄分が付着。
291	AB居	—	12A6	Ⅳa	砥石	C1	泥岩	—	76.8	53.5	50.5	304.1	×	×	
292	B居	SK8331	17D12・13	1	砥石	C1	粘板岩	—	107.4	52.2	41.3	292.4	×	○	
293	B居	SB8025 - P8408	17E4	—	硯	—	粘板岩	鳴滝	118.4	81.6	16.2	271.9	×	○	破損部に漆付着。破損後も使用されている。
294	B居	—	—	Ⅰ	砥石	B1	凝灰岩	出羽	51.9	69.5	26.8	130.0	×	△	
295	C居	SE9453	26C1・6	14	砥石	B1	凝灰岩	出羽	51.5	51.5	20.8	66.0	×	○	
296	C居	SE9453	26C1・6	14	砥石	C1	粘板岩	—	105.4	38.1	31.4	176.9	×	×	
297	C居	SE9453	26C1・6	2	砥石	C1	粘板岩	—	73.2	60.5	31.1	251.5	×	○	鉄分付着。
298	C居	SE9453	26C1・6	14	砥石	B2	凝灰岩	—	89.4	72.3	33.0	217.9	○	○	
299	C居	SE9469	26B13・18	7	砥石	C1	粘板岩	出羽	171.0	71.3	35.5	644.5	×	×	
300	C居	SE9469	26B13・18	8	砥石	A	粘板岩	鳴滝	51.0	24.6	4.3	9.4	×	○	仕上砥。下端に石材切り出し時の鋸痕あり。裏面節理割れ。
301	C居	SE9603	27C11、26C15	10	砥石	C2	粘板岩	—	135.6	79.9	15.0	190.2	×	○	
302	C居	SE9603	27C11、26C15	10	砥石	C1	砂岩	—	94.2	57.4	8.9	71.2	×	×	
303	C居	SE9566	25D24	7	砥石	B2	凝灰岩	—	78.6	49.1	36.0	123.9	○	○△	
304	（C居）	—	25D22	Ⅳc	砥石	C1	粘板岩	—	180.0	40.5	25.4	262.0	×	×	
305	D居	SE3504	31B13・14	8	砥石	C2	砂岩	—	288.5	212.0	73.9	6340.0	○	○	
306	D居	SE3979	32E5・9・10	覆土	砥石	A	粘板岩	鳴滝？	101.9	22.6	9.1	37.1	×	○	仕上砥。石材は鳴滝産硯に類似。縦に割れたものを漆継で補修。
307	D居	SE3511	32C13	13	墨描礫	—	砂岩	—	149.0	90.2	57.1	1058.6	×	×	表面に人物像、裏面に意匠不明の墨描き絵あり。
308	D居	SA5322 - P3582	32B13	5	硯	—	粘板岩	鳴滝	78.6	51.3	13.9	103.6	×	○	裏面に「硯」の刻書あり。破損部を漆継で補修。全面に鉄分付着。
309	D居	SB5332 - P4074	32B20	—	砥石	C2	粘板岩	—	240.0	116.0	111.0	3580.0	○	○	
310	D居	SD3501	—	7	砥石	C2	粘板岩	—	178.0	120.9	28.4	952.0	×	○	両面に刃物傷あるが、面的砥跡不明瞭。
311	D居	—	33E2	Ⅱ	円盤状石製品	—	安山岩	—	83.1	80.2	12.6	123.1	×	×	
312	D居	—	32E5	—	砥石	B1	流紋岩	—	58.5	82.7	26.7	125.2	×	△	
313	D東居	SB5320 - P3171	35F24	—	砥石	B2	砂岩	—	139.1	91.5	93.8	1197.6	×	○	
314	D東居	SE3008	34G24・25	最下層	砥石	B2	凝灰岩	伊予	80.0	74.0	33.3	246.4	○	○	中砥。上下端に破損後の刃物傷あり。
315	E居	SE2406	44E10	1	砥石	B2	凝灰岩	—	125.8	101.4	102.0	1641.3	○	○△	上下端に被熱後あるいは被熱に伴う割れあり。
316	E居	SE2406	44E10	水溜部底	砥石	C2	凝灰岩	—	134.9	156.5	72.9	214.0	○	○	裏面に煤付着。
317	E居	SE1866	47C18	下層	砥石	C2	粘板岩	—	176.0	52.0	69.4	955.1	×	○	
318	E居	P2689	45E5	1	砥石	B2	凝灰岩	—	125.7	51.9	48.7	460.7	○	○	火はじけ。
319	E居	P2525	45C11	—	砥石	A	粘板岩	鳴滝	157.0	35.7	6.5	131.3	×	×	仕上砥。石材切り出し痕残る。
320	E居	P1619	46D5	1	砥石	C1	凝灰岩	—	90.1	66.1	30.5	275.7	×	×	
321	E南居	SD2164	43F17	1	砥石	B2	凝灰岩	出羽	54.1	54.0	45.1	179.5	×	×	
322	F居	—	55C1	Ⅱb2	円盤状石製品	—	凝灰岩	—	74.7	75.1	10.2	86.4	×	×	
323	G居	SE7	60A14	3	砥石	C1	砂岩	—	164.0	55.8	40.4	436.6	×	×	敲打痕あり。
324	G居	SE233	59A3・8	9	砥石	C2	ヒン岩	—	229.0	123.7	42.8	1899.1	○	×	表裏面とも中央の砥跡が非常に平滑。左側面に煤付着。
325	G居	SE233	59A3・8	2	砥石	C2	砂岩	—	45.8	30.8	40.3	77.5	○	○	
326	G居	SD513	59D	—	砥石	C2	粘板岩	—	138.7	91.7	52.5	811.2	×	○	
327	G居	P655	58E1	1	砥石	A	粘板岩	鳴滝	45.0	25.7	5.3	9.2	○	○	仕上砥。裏面に剥離後の刃物傷あり。
328	G居	SK394	60B6・11	1	砥石	C2	砂岩	—	144.9	114.4	86.2	2069.0	○	○	被熱による破損。煤付着。
329	G居	—	59A23	Ⅱb2	砥石	B1	凝灰岩	出羽	70.4	34.4	21.0	75.9	×	×	
330	G居	—	—	Ⅱ下～Ⅴ上面	砥石	B2	凝灰岩	出羽	80.2	39.4	17.7	82.0	×	○	
331	G居	—	60C23	Ⅱ下～Ⅴ上面	砥石	B2	凝灰岩	出羽	68.5	48.5	36.7	140.9	○	×	
332	G居	—	60C3	Ⅱ下	砥石	B1	凝灰岩	出羽	71.5	54.9	21.7	103.2	×	○	
333	G居	—	58B8	Ⅱb1	砥石	B1	凝灰岩	出羽	41.8	54.4	22.2	65.0	×	×	
334	G居	—	60A21	Ⅱb2	砥石	B2	凝灰岩	出羽	123.1	44.2	36.7	263.7	×	○	中砥。
335	G居	—	61D5	—	砥石	C1	ホルンフェルス	—	158.0	42.0	20.8	265.5	×	○	
336	G居	—	59E3	Ⅱ下	砥石	C2	ホルンフェルス	—	160.0	46.8	36.1	391.6	×	○	

中世　木製品観察表（1）

報告番号	地区	遺構番号	グリッド	層位	種別	器種	法量（cm）				樹種	木取り	造り	備考
							長	長径 / 幅 / 口径	短径 / 厚 / 底径	器高				
255	E 居	—	試掘 28Tr		その他	用途不明部材	(7.3)	(6.7)	0.5	—	スギ	板目	銭周辺のみ残存。表面に銭の痕跡が残る。	
337	A 居	SE6209	7ZZ23	最下層	部材	井戸側板	(61.8)	(41.0)	4.6	—	クリ	板目	片面は腐食により加工痕観察不能。加工痕の観察できる面はほぼ全面に加工痕認められる。成形は丁寧。	
338	A 居	SE6209	7ZZ23	最下層	部材	井戸側板	(62.4)	25.2	6	—	広葉樹	板目	両面ともにほぼ全面に加工痕認められる。成形は丁寧。	
339	A 居	SE6288	8B15	最下層	食事具	箸状木製品	(10.2)	0.6	0.4	—	スギ	板目	断面は長方形。	両端を欠く。
340	A 居	SE7320	10D16、11D 11	3	食事具	箸状木製品	(11.1)	(0.6)	0.5	—	クロベ	柾目	断面は正方形。	一端を欠く。
341	A 居	SE6278	8C19	3	服飾具	下駄（歯）	—	—	—	—	ホオノキ	板目		歯の部分のみ２点であるが、木取り、台板厚さ、歯の形状、サイズから同一個体の歯と判断。
342	A 居	SD6003	3A3	4	その他	杭	(61.9)	5.8	5	—	ナラ類	芯持材	樹皮が一部残る。先端部のみ加工。	
343	A 居	SE7323	11C13・18	最下層	容器	曲物底板？	—	24.8	0.9	—	スギ	柾目	側面に目釘痕なし。片面に刃物痕あり。表裏面ともに丁寧な切削。	
344	A 居	SE7323	11C13・18	—	容器	漆器皿	—	(11.6)	8	(1.4)	ケヤキ	横木柾目	内と外面は黒漆塗。内面見込みに朱書きで模様が描かれている。鳥の可能性がある。	塗膜分析試料（総黒色系漆椀、赤色（ベンガラ）漆絵）。
345	A 居	SE8529	11D3	13	その他	加工材	14.5	3.3	3.2	—	シロダモ	芯持材	自然木をそのまま利用。樹皮が残る。抉り部と両端部は複数の加工痕がある。	
346	A 居	SE8529	11D3	4	容器	漆器椀	—	—	—	—	—	—	漆膜のみ遺存。	漆膜分析試料（総黒色系）。
347	A 居	SE8529	11D3	15	容器	白木椀	—	(10.3)	6.9	(2.1)	ケヤキ	板目		体部が一部残る、腐食顕著。
348	AB 居	SE7642	14D1	8	運搬具	櫂	(73.6)	7.6	1.9	—	ナラ類	板目	表面は腐食で加工痕は確認できない。上下端部は欠損。	土圧により、しなる。
349	AB 居	SE7642	14D1	8	服飾具	下駄	22.6	9.5	5.5	—	ケヤキ	板目	先端付近に指痕がある。	前部の歯周辺は欠損が多い。
350	AB 居	SE7642	13D5	7	容器	漆器椀	—	—	—	(3.2)	ケヤキ	横木柾目	口縁部～体部、内面と外面は黒漆塗。	塗膜分析試料（総黒色系椀）。
351	AB 居	SE7642	13D5	8（上部）	その他	用途不明部材	(21.8)	(0.7)	0.5	—	スギ	柾目	両端部付近に穿孔があり。穿孔の間隔 352 と同じ。	352 と同一製品？
352	AB 居	SE7642	13D5	8	その他	用途不明部材	(19.3)	(0.7)	0.5	—	スギ	柾目	両端部に穿孔痕があり。穿孔の間隔は 351 と同じ寸法。	351 と同一製品？
353	AB 居	SE7641	13C25	9	雑具	用途不明部材	27.1	6	4.4	—	クリ	芯持材	自然木を半載し利用、一端に抉り込みを施す側縁は片側が山状になっている。	413 と同様の用途か？
354	AB 居	SE7777	14B24	6	祭祀具	板状人形か	13.9	1.6	5	—	スギ	板目	板面のみの表現、鳥帽子をかぶった姿か。	
355	AB 居	SE7777	14B24	6	食事具	箸状木製品	(15.9)	0.8	0.3	—	スギ	板目	断面は長方形。	一端を欠く。
356	AB 居	SE7777	14B24	6	食事具	箸状木製品	(13.9)	0.7	0.4	—	スギ	柾目	断面は不整な楕円形。	一端を欠く。
357	AB 居	SE7777	14B24	6	食事具	箸状木製品	(13.6)	0.4	0.4	—	スギ	柾目	断面は正方形。	一端を欠く。
358	AB 居	SE7777	14B24	6	容器	漆器小皿	—	8.9	6.3	1.6	ケヤキ	横木柾目	内面と外面は黒漆塗。	塗膜分析試料（総黒色系小皿）。
359	AB 居	SE7777	14B24	6	容器	曲物底板	16.5	3.6	0.8	—	スギ	柾目	片面は炭化する。側面に木釘あり。	
360	AB 居	SE8381	15C13	8	容器	枡	(18.1)	(7.8)	1	(7.8)	スギ	板目	4 箇の側面と、接合部に木釘または木釘痕が確認できる。底板の一部が残る。	
361	AB 居	SE7790	15C12	15	容器	曲物	(17.2)	(9.9)	0.5	—	スギ	側板：柾目 底板：柾目	側板部は底部付近に釘穴があり。底板は完形で、側面に釘穴あり。	側板部の半面は欠損。
362	AB 居	SE7790	15C12	13	容器	曲物部材	(16.5)	(6.8)	0.4	—	スギ	柾目	綴じ部破片。２重に綴じる。内面に斜め方向のケビキ線あり。外面と内面の一部は炭化。	ほぼ完存品。
363	AB 居	SE7790	15C12	14	容器	曲物部材	—	—	(22.1)	(15.8)	スギ	柾目	綴じ部破片。２重に綴じる。外面は一部炭化、内面に漆が付着と、炭化がある。	
364	AB 居	SE7790	15C12	13	容器	漆器椀	—	(15.0)	(12.4)	(3.1)	ケヤキ	横木柾目	口縁部と底部欠く、内面と外面は黒漆塗。	塗膜分析試料（総黒色系椀）。
365	B 居	SE8353	17C25		容器	曲物側板	(15.1)	(13.7)	0.2	—	スギ	柾目	綴じ部破片。綴じ皮は残るが１枚のみ。内面に斜め方向と垂直ののケビキ線あり。	
366	B 居	SE8353	17C25	15	容器	漆器椀	—	(14.9)	7.7	(4.6)	ケヤキ	横木柾目	口縁部欠損、内面と外面および高台ないは黒漆塗。底面にロクロ爪痕残る。	
367	B 居	SE8353	17C25	15	容器	漆器椀	—	14.6	7.2	6.8	ケヤキ	横木柾目	口縁部欠損、内面と外面は黒漆塗、高台内は漆なし。中央にケズリ痕あり。	ほぼ完存品。塗膜分析試料（総黒色系椀）。
368	B 居	SE8353	18C21	15	容器	漆器椀	—	14.0	7.6	5.1	ケヤキ	横木柾目	口縁部欠損、内面と外面は黒漆塗、高台内は漆なし。「五」または「玉」の刻みあり。	ほぼ完存品。
369	C 居	SE9603	26C15、27C11	12	容器	曲物	27.8	24.2	11.6	—	スギ	側板：柾目 底板：柾目	側板は２重。側板内面に縦方向のケビキが著しい。	中央で２つに折れるが、ほぼ完存品。
370	C 居	SE9603	26C15、27C11	11	その他	杭	(26.6)	3.3	2.9	—	スノキ属	芯持材	樹皮が一部残る。先端部のみ加工。	
371	C 居	SE9603	26C15、27C11	12	容器	椀	—	14.2	7.4	4.2	アオハダ	横木柾目		塗膜分析試料（総黒色系椀、漆層なし、炭粉地）。
372	C 居	SE9603	26C15、27C11	12	容器	挽物皿	—	(9.3)	(7.1)	1.2	アオハダ	横木柾目		口縁は一部残る、破損が著しい。
373	C 居	SE9453	26C1・6	16	農具	鎌の柄	50.7	1.8	3.2	—	スギ	柾目	上部先端の割り込みに金属をはめ込む。穿孔は貫通すものと、金属部でさえぎられるものがある。	鎌の刃部は欠損。
374	C 居	SE9453	26C1・6	16	容器	曲物	—	—	9.6	9.4	スギ	側板：柾目 底板：柾目	柄杓、側板は２重、前後に柄穴が貫通する。	口径はつぶれて計測不能。
375	C 居	SE9453	26C1・6	16	服飾具	下駄	20.9	10.8	(4.8)	—	カツラ	板目	両側の貫通坑は２か所で対となる。	
376	C 居	SE9453	26C1・6	16	食事具	箸状木製品	19.9	0.4	0.2	—	スギ	柾目	断面は長方形。	ほぼ完存品。
377	C 居	SE9523	25D9	16	その他	用途不明部材	21.6	1.6	1.6	—	スギ	柾目	角棒状の整形で、端部に加工細いホゾ穴あり。	
378	D 居	SE9654	27E8	9	その他	用途不明部材	(16.9)	5.3	0.7	—	スギ	柾目	両側に２か所の抉りがある。穿孔あり。	
379	D 居	SE9654	27E8	10	その他	加工材	18.2	1.1	1.2	—	クリ	芯持材	表面に全体に加工痕がある。	

中世　木製品観察表（2）

報告番号	地区	遺構番号	グリッド	層位	種別	器種	法量（cm）				樹種	木取り	造り	備考
							長	長径 / 幅 / 口径	短径 / 厚 / 底径	器高				
380	D 居	SE9654	27E8	10	食事具	箸状木製品	20.8	0.5	0.4	—	スギ	柾目	断面形は五角形。	ほぼ完存品。
381	D 居	SE3508	32C3	8	容器	折敷底板	25.3	（6.6）	0.5	—	スギ	柾目	両端部に２個一対の貫通する小孔あり。側板を留める綴じ皮を通す孔と見られる。両面ともに刃物痕が多数見られる。	
382	D 居	SE3508	32C3	8	容器	折敷底板	（26.1）	（6.1）	0.4	—	スギ	柾目	周縁は多角形になる様に整形。両面ともに刃物痕あり。	
383	D 居	SE3508	32C3	8	容器	曲物底板	22.3	5.8	0.6	—	スギ	柾目板	周縁部に２か所２個一対の小孔あり。	小孔は側板を留める革を通したものと推測される。
384	D 居	SE3508	32C3	8	容器	折敷底板	（21.4）	（2.8）	0.5	—	スギ	柾目	表面は平滑に加工される。両端は面取り、あるいは鋭利な刃物で切断されている。一端は転用時の加工によると思われる。両面には刃物痕が密に残る。	
385	D 居	SE3504	31B14	8	容器	曲物底板	—	26.5	0.9	—	スギ	柾目	周縁部に１０か所のφ３～5mm の貫通孔あり。またこの孔の近くにφ 1mm 程の小孔があり、木釘？が残っている。	完存品。
386	D 居	SE3913	31C25	最下層	容器	漆器椀	—	（14 .4）	—	（2.4）	ケヤキ	横木柾目	内と外面は黒漆塗。	
387	D 居	SE3913	31C25	最下層	容器	曲物底板	—	22.0	0.6	—	スギ	柾目	２個一対と思われる小孔が２か所（それぞれ２個目の孔は破断部に位置する）あり。割れた底板の補修用か？ 全面黒い皮膜で覆われるが、周縁の 1cm 程度の幅で残りが良く、その内側ははがれたりしている。この境目付近には、皮膜がない部分が 1mm くらいの幅で存在する。この部分に側板が当たっていた証拠か？	
388	D 居	SE3913	31C25	最下層	その他	杭	（37.0）	4.6	4.8	—	ゴヨウマツ	芯持材	全体に腐食が進み明瞭な加工痕の観察不能。一部に樹皮が残る。	頭部付近のみ一部炭化している。
389	D 居	SE3412	33B19・24	7	食事具	しゃもじ状木製品	23.2	7.6	0.4	—	スギ	柾目		
390	D 居	SE3412	33B24	7	容器	漆器椀	—	（13.8）	7.2	3.2	ケヤキ	横木柾目	高台を欠く。内面と外面は黒漆塗。内面見込みに朱書きで木の絵が描かれる。	塗膜分析試料（総黒色系皿、朱漆絵）。
391a	D 居	SE3412	33B24	7	容器	曲物	—	22.6	21.4	（15.8）	スギ	側板：柾目 底板：柾目	側板は２重半。底部と上部にタガを巻く。	上部破損、391b と同一個体。
391b	D 居	SE3412	33B24	7	容器	曲物側板	（20.1）	（12.3）	0.1	—	スギ	柾目板	内面に斜め方向のケビキ痕残る。２か所綴じ皮で結束。３重綴じ。	ほぼ曲物の巻き終わりの位置、391a と同一個体。
392	D 居	SE3979	32E10	覆土	容器	曲物蓋？	—	14.0	0.6	—	スギ	柾目	中央に穿孔あり。片面に刃物痕多数。両面とも丁寧な加工を施す。	穿孔の用途不明。
393	D 居	SE3979	32E10	覆土	容器	折敷底板	（14.1）	（3.0）	0.5	—	スギ	柾目	一端は折損、もう一端にはケビキ線状のものが確認できる。	
394	D 居	SE3979	32E10	覆土	その他	用途不明部材	（12.9）	2.0	2.0	—	ケヤキ	芯持材	一端は凸字状の作り出し、もう一端は斜めに切断した後、切断部を２次加工している。円柱状の材を細かく面取り加工している。	欠損部は認められない。使用痕も確認できない。
395	D 居	SE3979	32E10	覆土	その他	加工材	（10.6）	1.5	1.0	—	スギ	柾目	一端を欠く、表面は面取りして断面楕円形状に整形される。丁寧な加工を施す。	箸状木製品にしては太過ぎる。
396	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（10.9）	0.6	0.4	—	スギ	柾目	断面は長方形。	両端を欠く。
397	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（11.0）	0.7	0.4	—	スギ	柾目（密）	断面は六角形。	一端を欠く。
398	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	12.5	0.6	0.4	—	スギ	柾目	断面は楕円形。	完存品。
399	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（12.0）	0.7	0.5	—	スギ	柾目	断面は八角形。	一端を欠く。
400	D 居	SE3979	32E10	覆土	食事具	箸状木製品	（12.4）	0.7	0.5	—	スギ	柾目	断面は台形状。	一端を欠く。
401	D 居	SE3979	32E10	覆土	食事具	箸状木製品	（13.6）	0.6	0.4	—	スギ	柾目	断面は不整六角形。	一端を欠く。
402	D 居	SE3979	32E10	覆土	食事具	箸状木製品	（14.5）	0.5	0.6	—	スギ	板目	断面はほぼ円形。	一端を欠く。
403	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（17.5）	0.9	0.4	—	スギ	板目	扁平な板状。断面は六角形。	一端を欠く。
404	D 居	SE3979	32E10	覆土	食事具	箸状木製品	（18.0）	0.6	0.4	—	スギ	柾目（密）	断面は扁平な六角形。	一端をわずかに欠く。ほぼ完存品。
405	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（18.8）	0.8	0.4	—	スギ	柾目	断面形は不整五角形。	一端をわずかに欠く。
406	D 居	SE3979	32E10	—	食事具	箸状木製品	（21.9）	0.7	0.4	—	スギ	柾目	断面は不整な楕円形。	一端をわずかに欠く。ほぼ完存品。
407	D 居	SE3979	32E10	—	祭祀具	人形	（19.2）	（1.4）	2.0	—	スギ	柾目（細かく密）	烏帽子ををかぶった姿を表現	烏帽子端部をわずかに欠く。
408	D 東居	SE3476	36G9・14	10・11	容器	曲物	—	26.1	20.4	18.6	スギ	側板：柾目 底板：柾目	側板は１重。側板内面に斜方向のケビキあり。	ほぼ完存品。
409	D 東居	SE3476	36G9	最下層	容器	曲物底板	—	23	0.6	—	スギ	柾目	両面に漆？柿渋？による黒色皮膜が一部残る。側面１か所に目釘孔痕あり。	
410	D 東居	SE3476	36G9	—	その他	用途不明品	（19.5）	6.3	0.5	—	スギ	柾目	しゃもじ状。両面及び側面も丁寧な加工を施すことから食事具か？	
411	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	木地椀	—	13.4	6.9	3.7	ケヤキ	横木柾目	底面にロクロ爪痕残る。刺し変えている。外面の低部付近にロクロ成形後面取り加工を施す。	塗膜分析試料（木地椀、未使用）。
412	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	漆器椀	—	14.1	7.8	（6.2）	ブナ	横木柾目	高台を欠く。内面と外面は黒漆塗。内外面に朱書きの絵が描かれる。風景画か？内外面同じ図柄と推定される。	塗膜分析試料（総黒色系椀、朱漆絵）。
413	D 東居	SE3008	34G25	最下層	雑具	用途不明部材	（15.5）	4.8	1.8	—	ホオノキ	柾目	ほぼ全面炭化する。一端に抉り込みを施すが、ヒモズレの痕跡は確認できず。側縁は片側が山状になっている。対称的な形状であると仮定し、頂点で折り返した場合長さは約 20cm 程度になる。	
414	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	折敷底板	（20.9）	（4.9）	0.5		スギ	柾目板	両面ともに丁寧な加工を施す。また両面に刃物痕顕著。短辺は一方を折り取っており、他辺は完全に切断している。	片面の片側の長辺の中央付近に凹みがありその部分のみ炭化する。

中世　木製品観察表（3）

報告番号	地区	遺構番号	グリッド	層位	種別	器種	法量（cm）				樹種	木取り	造り	備考
							長	長径 / 幅 / 口径	短径 / 厚 / 底径	器高				
415	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	折敷底板	（13.5）	（8.9）	（0.6）	—	スギ	柾目板	両面とも丁寧に加工、刃物痕あり。角を落としている。	2 個一対の小孔と未貫通の小孔 1 つが縁辺部にある。側板を留める綴じ皮通した孔と推定される。
416	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	折敷底板	（19.8）	（6.4）	0.4	—	スギ	柾目	両面とも腐食が進み加工痕の観察不能。2 個一対の貫通する小孔が長辺の片側にある。側板を留める綴じ皮を通す孔と推定される。	
417	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	折敷底板	（20.0）	（7.7）	0.4	—	スギ	柾目（細かく密）	2 個一対の小孔が 1 か所あり、片面のみ刃物痕。	
418	D 東居	SE3008	34G25	最下層	容器	折敷底板	（21.0）	（2.7）	0.6	0.6	スギ	柾目	2 個一対と思われる小孔が 1 か所あり。折損部付近に擂鉢状になった炭化痕が 1 ケ所あり。意味不明。	
419	E 南居	SD2050	40G19	一括	その他	杭	（41.3）	5.4	4.9	—	スギ	芯持材	先端部は 5 面面取り。	樹皮は残らないが、先端部以外は未加工。
420	E 居	SE2406	44E10	10 層下位	食事具	箸状木製品	（9.8）	0.6	0.4	—	スギ	柾目	断面形は比較的整った長八角形。	一端を欠く。
421	E 居	SE2406	44E10	10 層下位	食事具	箸状木製品	（10.9）	0.5	0.5	—	スギ	板目	断面は六角形形状。	一端を欠く。
422	E 居	SE2406	44E10	10 層下位	食事具	箸状木製品	（11.1）	0.6	0.5	—	スギ	柾目	断面は扁平な六角形。	一端を欠く。
423	E 居	SE2406	44E10	10 層下位	容器	白木皿	—	9.3	7	1.6	クリ	横木柾目	底面以外は渋？仕上げ。底面見込みは再調整を行っているためロクロ爪痕確認不能。外面にはロクロ目が明瞭。	
424	E 居	SE2406	44E10	10 層	容器	椀	—	（13.4）	6.7	（3.7）	ケヤキ	横木柾目	口縁部を欠く。	425 と重なって出土。
425	E 居	SE2406	44E10	10 層下位	容器	椀	—	（12.6）	6.6	（2.5）	ケヤキ	横木柾目	口縁部と高台を欠く。	424 と重なって出土。 塗膜分析試料（漆層なし、摺り漆）。
426	E 居	SE1577	46B3・8・9	7	容器	漆器椀	—	—	—	—	—	—	漆膜のみ遺存。	漆膜分析試料（朱漆椀）。
427	G 居	SE245	59A6	—	容器	曲物底板	—	25	1	—	スギ	柾目	側面に 1 か所木釘の穴が残る。表面は非常に平滑に仕上られている。両面とも刃物痕多数。	
428	G 居	SE601	60E5・10	曲物内	食事具	箸状木製品	（7.5）	0.5	0.3	—	ヒサカキ	柾目	断面形は扁平な六角形。	両端欠損。
429	G 居	SE601	60E5・10	—	容器	曲物底板？	—	19.6	0.7	—	スギ	柾目	両面とも加工痕は確認できず。側面に木釘無し。	430 と 2 枚重ねで発見された。
430	G 居	SE601	60E5・10	—	容器	曲物底板？	—	18.6	0.8	—	スギ	柾目（非常に密）	1 か所に綴じ皮残し、両面とも加工痕は確認できず。刃物痕は認められる。側面に木釘無し。	429 と 2 枚重ねで発見された。
431	G 居	SE601	60E5・10	—	容器	漆　塗膜	—	—	—	—	—	—	漆膜のみ遺存。	
432	G 居	SE601	60E5・10	—	容器	曲物側板	（26.5）	15	0.2	—	スギ	柾目	側板綴じ合わせ部破片、内面に縦方向のケビキあり。	
433	G 居	SE648	60D25	4	その他	栓状木製品	5	2.5	—	—	スギ	芯持材	キノコ状を呈し、軸部はほぼ製円に近い状態に加工を施している。頭部は半球状を呈するが、年輪に沿って腐食が進行し、加工痕の観察は不能。	
434	G 居	SE648	60D25	—	容器	曲物側板	（16.8）	（8.5）	0.2	0.2	スギ	柾目	綴じ部破片、3 重に綴じる。内面に密に上下方向のケビキ線あり。外面には「×」印が刃物で付けられている。内面のケビキ痕よりも深く刃物を当てている。	
435	G 居	SE822	61A17	—	食事具	箸状木製品	26	0.6	0.4	—	スギ	柾目	断面は長方形に近い五角形。	完存品。
436	G 居	SE822	61A17	下層	容器	曲物底板	（22.1）	（4.4）	0.6	—	スギ	柾目板	側面に 2 か所木釘が残る。	
437	G 居	SE822	61A17	下層	容器	曲物底板？	（24.7）	（5.5）	0.5	—	スギ	柾目板	片面に刃物痕あり。	側面は摩滅が著しく、断面形状が尖るような形状を呈す。木釘はなし。
438	G 居	SE822	61A17	—	容器	曲物底板？	—	24.8	0.9	—	スギ	柾目	両面とも丁寧な加工で、側面には目釘痕なし。	約 1/2 欠。桶の底板の可能性もある。
439	G 居	SE822	61A17	—	容器	曲物（側板）	—	55.5	50.9	（36.7）	スギ	柾目	2 枚重ね。内面に縦方向のケビキ。外面にところどころ格子目状のケビキ痕。底板はない。	井戸水溜に転用。
440	G 居	SE822	61A17	—	部材	井戸側板	（81.4）	（55.2）	3.6	—	カツラ	板目	舷側版を結束するためと思われる方形孔あり。	丸木舟を転用。
441	G 居	SE822	61A17	—	部材	井戸側板	（82.0）	（34.2）	5	—	ゴヨウマツ	板目	端部を中心に細かく面取り。	
442	G 居	SE822	61A17	—	部材	井戸側板	（63.9）	（39.7）	（3.9）	—	ケヤキ	板目	端部を中心に細かく面取り、切断面も 2 次整形。	

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ふるとろいせき
書　　名	古渡路遺跡
副　書　名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書
巻　　次	ＸＸＸⅥ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 221 集
編 著 者 名	土橋由理子・尾崎高宏（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団） 園村維敏・東園千輝男・山﨑良二・蝦名　純・長内礼二・青木利文・丹下昌之・稲垣森太・真田　敦（国際文化財株式会社）、野水晃子・矢部英生（株式会社吉田建設埋蔵文化財調査部） 鈴木　茂（株式会社パレオ･ラボ）、中尾七重（木質部材研究所）、光谷拓実（総合地球環境学研究所／奈良文化財研究所）、四柳嘉章（漆器文化財科学研究所）
編 集 機 関	財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒 956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地 1　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2011（平成 23）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふるとろ 古渡路遺跡	にいがたけんむらかみしふる 新潟県村上市古 とろあざえびやしき 渡路字海老屋敷 337-2 ほか	15212	613	38° 14′ 28″	139° 30′ 41″	20080402 ～ 20081216 20090401 ～ 20091013	延べ 33,554㎡ （中世 26,770㎡） （縄文 6,784㎡）	日本海沿岸東北自動車道建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古渡路遺跡	集落	中世	掘立柱建物（92 棟） 杭列（8 基） 井戸（83 基） 土坑（246 基） 溝（136 条） 道路、水田、ピット	珠洲焼、青磁、白磁、瀬戸・美濃焼、信楽焼、越前焼、土師質土器、木製品（人形・箸状木製品・漆器椀･曲物等）、石器（砥石・硯等、墨で人物像等が描かれた円礫）、金属製品（銭貨・鉄滓 等）	13 世紀後半～ 15 世紀中葉の、一定の区割りに基づいて計画的に造営された集落 掘立柱建物の構造復元
	集落	縄文時代前～後期	陥穴（22 基） 土坑（2 基） 集石遺構（1 基） 埋設土器（3 基） 溝（1 条） ピット 124 基 性格不明遺構（8 基）	縄文土器（大木 6 式、三十稲場式ほか）、石器（石鏃・磨製石斧・磨石類 等）	低湿地で検出した中期以降の陥穴列

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 221 集

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ＸＸＸⅥ

古渡路遺跡　本文編

平成 23 年　3 月 30 日印刷　編集・発行　新潟県教育委員会

平成 23 年　3 月 31 日発行

〒 950-8570　新潟市中央区新光町 4 番地 1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒 956-0845　新潟市秋葉区金津 93 番地 1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社第一印刷所

〒 950-8724　新潟市中央区和合町2丁目4番18号
第一和合ビル内
電話　025（285）7161